千原台ニュータウン II

草刈遺跡A区(第1次調査)
鶴牧古墳群・人形塚

1983

住宅・都市整備公団
財団法人 千葉県文化財センター

千原台ニュータウン II

草刈遺跡A区(第1次調査)
鶴牧古墳群・人形塚

1983

住宅・都市整備公団
財団法人 千葉県文化財センター

序　文

近年、首都圏域の人口増加に伴い、居住適地を供給するため、千葉県下においても大規模な宅地造成事業が各地で実施されております。

千原台土地区画整理事業は、住宅・都市整備公団により計画された事業で、当該計画地は東京湾に流出する村田川の北岸に位置し、古くから多くの遺跡が所在することで知られています。このため、千葉県教育委員会では、遺跡の分布調査を実施し、その取扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、古墳群や瓦窯跡等については、現状保存して活用を図るとともに、現状保存の困難な遺跡については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整いました。

その後、千葉県教育委員会の指導により、昭和53年度に住宅・都市整備公団（当時は日本住宅公団）の委託を受け、今日まで当文化財センターが発掘調査を実施してきている次第であります。

昭和54・55年度に発掘調査を実施した草刈遺跡は、全域が約260,000㎡もある広大な遺跡で、調査はその一部分でありますが、先土器、縄文、弥生、古墳の各時代にわたる遺構、遺物が多数検出され、特に方形周溝（墓）群は、当地域においては重要な遺構であります。

また、昭和56・57年度に実施した鶴牧古墳群・人形塚の発掘調査も多大な成果をあげて、当地の原始、古代文化を明らかにすることができました。

このたび、これらの成果を『千原台ニュータウンII』として刊行する運びとなりましたが、この報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護、普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

最後に、住宅・都市整備公団の御協力と千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会の御指導助言に対しお礼を申しあげるとともに、極寒酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和58年３月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　　今　井　正

例　言

1．本書は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部による千原台地区におけるニュータウン建設計画（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書に所収される内容は、昭和54・55年度に調査の対象となった市原市草刈遺跡Ａ区（第１次調査）、昭和54年度の鶴牧古墳群、および昭和56年度の人形塚の発掘調査報告である。

3．発掘調査は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部の依頼と千葉県教育庁文化課の要請と指導を得て、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4．発掘調査は、調査部長白石竹雄、部長補佐山田友治（54年度）、班長・部長補佐栗本佳弘、（54・55年度）、部長補佐中山吉秀（56年度）、班長山田常雄（55年度）、同三森俊彦（56年度～）の指導の下に下記の調査研究員が担当した。

草刈遺跡（昭和54年８月８日～同年12月31日、昭和55年３月１日～同年６月30日）小宮　孟（～昭和55年３月31日）、小久貫隆史、梶　淳（～昭和55年３月31日）、山口典子（旧姓菅沢）（昭和55年４月１日～同年６月30日）

鶴牧古墳群（昭和54年５月７日～同年７月30日）小宮　孟、梶　淳

人形塚（昭和56年４月７日～同年４月22日）田村　隆

5．整理作業は、調査部長白石竹雄、部長補佐栗本佳弘、同中山吉秀、同天野　努（57年度）班長山田常雄、同三森俊彦の指導の下に下記の調査研究員が担当した。

草刈遺跡（昭和55年８月１日～昭和57年３月31日）小久貫隆史

鶴牧古墳群（昭和55年４月１日～同年７月31日）梶　淳

人形塚（昭和57年４月１日～同年７月31日）田村　隆

6．本書の執筆は、別記（目次）のとおりであるが、一部を白石竹雄、天野　努の助言のもとに三森俊彦が加筆・補正した。

7．本書の編集は、白石竹雄、天野　努の助言のもとに三森俊彦を中心に執筆者および文化財センター千原台事務所の調査研究員が助力し、これにあたった。

8. 発掘調査に際しては、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部千葉・市原開発事務所、および多くの調査補助員、地元の方々の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

目　次

序文
例言
目次（本文・挿図・図版・表）

第Ⅰ章　序　　説 …… 1
第１節　発掘調査に至る経緯……（三森俊彦）…… 1
第２節　遺跡の位置と環境……（高田　博）…… 3
第Ⅱ章　草刈遺跡Ａ区（第１次）の調査 …… 10
第１節　調査の方法と経過……（小久貫隆史）…… 10
第２節　検出された遺構と遺物……（小久貫隆史）…… 14
1．住居跡と出土土器…… 14
2．方形周溝（墓）と出土土器……192
3．円形周溝（墓）と出土土器……238
4．古　　墳……256
5．その他の遺構と出土土器……260
6．その他の遺物……274
7．遺構外出土土器……289
8．先土器時代の遺物……300
第３節　ま と め……（小久貫隆史）……301
1．確認調査の成果について……301
2．先土器時代……302
3．縄文時代……302
4．弥生時代……302
5．古墳時代……304
6．そ の 他……309
第Ⅲ章　鶴牧古墳群の調査……312
第１節　調査の方法と経過……（梶　淳）……312
第２節　鶴牧１号墳……（梶　淳）……312
1．位置と外形……312
2．墳丘と周溝……312
3．主 体 部……318

4．出土遺物……321
5．小　結……325
第3節　鶴牧2号墳……（梶　淳）……327
1．位置と外形……327
2．墳丘と周溝……327
3．主体部……329
4．出土遺物……330
5．小　結……337
第4節　鶴牧3号墳……（梶　淳）……339
1．位置と外形……339
2．墳丘と周溝……339
3．主体部……339
4．出土遺物……341
5．小　結……341
第5節　先土器・縄文・弥生時代の遺物……342
1．先土器時代の遺物……（田村　隆）……342
2．縄文時代の遺物……（上守秀明・田村　隆）……344
3．弥生時代の遺物……（三森俊彦）……359
第6節　ま と め……（梶　淳）……363
第Ⅳ章　人形塚の調査……366
第1節　調査の方法と経過……（田村　隆）……366
第2節　遺構と遺物……（田村　隆）……366
1．位置と外形……366
2．盛土の状況……368
3．出土遺物……368
第3節　ま と め……（田村　隆）……370
英文解説……(高田　博)……371

挿　図　目　次

－草刈遺跡Ａ区（第１次）－

第 1 図　草刈遺跡調査区全体図（1/10,000）…… 2
第 2′図　周辺の遺跡（1/37,500）…… 4
第 3 図　草刈遺跡の地形及びＡ区（1/5,000）……12
第 4 図　1（001）号跡実測図（1/60）……14
第 5 図　1（001）号跡遺物出土状態実測図（1/20）……16
第 6 図　1（001）号跡出土土器（1）(1/4)……17
第 7 図　1（001）号跡出土土器（2）(1/4)……18
第 8 図　2（002）号跡実測図（1/60）……19
第 9 図　2（002）号跡出土土器（1/4)……20
第 10 図　3（003）号跡実測図（1/60）……21
第 11 図　3（003）号跡出土土器（1/4)……22
第 12 図　4（004）号跡実測図（1/60）……23
第 13 図　4（004）号跡出土土器（1/4)……24
第 14 図　5（005）号跡実測図（1/60）……25
第 15 図　5（005）号跡出土土器（1/4)……26
第 16 図　6（006）号跡実測図（1/60）……26
第 17 図　6（006）号跡出土土器（1/4)……27
第 18 図　7（007）号跡実測図（1/60）……28
第 19 図　7（007）号跡出土土器（1/4)……29
第 20 図　8（008）号跡実測図（1/60）……30
第 21 図　9（009）号跡実測図（1/60）……31
第 22 図　9（009）号跡出土土器（1）(1/4)……32
第 23 図　9（009）号跡出土土器（2）(1/3)……33
第 24 図　10（010）号跡実測図（1/80）……35
第 25 図　10（010）号跡出土土器（1/3・1/4）……36
第 26 図　11（012）号跡実測図（1/60）……36
第 27 図　11（012）号跡出土土器（1/4)……39
第 28 図　12（013）号跡実測図（1/60）……41
第 29 図　12（013）号跡出土土器（1/4)……41
第 30 図　13（014）号跡実測図（1/60）……42

第 31 図　13（014）号跡出土土器（1/4）……43
第 32 図　14（016）号跡実測図（1/60）……44
第 33 図　14（016）号跡出土土器（1/4）……45
第 34 図　15（017）号跡実測図（1/60）……46
第 35 図　15（017）号跡出土土器（1/40）……47
第 36 図　16（021）号跡実測図（1/60）……49
第 37 図　16（021）号跡出土土器（1/4）……49
第 38 図　17（025）号跡実測図（1/60）……50
第 39 図　17（025）号跡出土土器（1/4）……51
第 40 図　18（026）号跡実測図（1/60）……51
第 41 図　18（026）号跡出土土器（1/4）……52
第 42 図　19（028）号跡実測図（1/60）……53
第 43 図　19（028）号跡出土土器（1/4）……54
第 44 図　20（029 A）号跡実測図（1/60）……55
第 45 図　20（029 A）号跡出土土器（1/4）……56
第 46 図　21（029 B）号跡実測図（1/80）……56
第 47 図　21（029 B）号跡出土土器（1/4）……57
第 48 図　22（029 C）号跡実測図（1/80）……58
第 49 図　22（029 C）号跡出土土器（1/4）……59
第 50 図　23（030）号跡実測図（1/60）……60
第 51 図　23（030）号跡出土土器（1/4）……60
第 52 図　24（031）号跡実測図（1/80）……62
第 53 図　24（031）号跡出土土器（1/4）……63
第 54 図　25（032 A）号跡実測図（1/60）……64
第 55 図　25（032 A）号跡出土土器（1/4）……65
第 56 図　26（032 B）号跡実測図（1/80）……66
第 57 図　26（032 B）号跡出土土器（1/4）……66
第 58 図　27（034）号跡実測図（1/60）……67
第 59 図　27（034）号跡出土土器（1/4）……68
第 60 図　28（036）号跡実測図（1/60）……69
第 61 図　28（036）号跡出土土器（1/4）……70
第 62 図　29（037 A）号跡実測図（1/60）……72
第 63 図　29（037 A）号跡出土土器（1/4）……72

第 64 図　30（037 B）号跡実測図（1/80）…… 73
第 65 図　30（037 B）号跡出土土器（1/4）…… 74
第 66 図　31（037 C）号跡実測図（1/60）…… 75
第 67 図　32（038）号跡実測図（1/60）…… 76
第 68 図　32（038）号跡出土土器（1/4）…… 77
第 69 図　33（040）号跡実測図（1/80）…… 78
第 70 図　33（040）号跡出土土器（1/4）…… 79
第 71 図　34（041）号跡実測図（1/60）…… 80
第 72 図　34（041）号跡出土土器（1/4）…… 81
第 73 図　35（042 A）号跡実測図（1/60）…… 81
第 74 図　35（042 A）号跡出土土器（1/4）…… 82
第 75 図　36（042 B）号跡実測図（1/60）…… 82
第 76 図　36（042 B）号跡出土土器（1/4）…… 83
第 77 図　37（042 C）号跡実測図（1/60）…… 84
第 78 図　37（042 C）号跡出土土器（1/3）…… 84
第 79 図　38（043 A）号跡実測図（1/60）…… 85
第 80 図　38（043 A）号跡出土土器（1/3）…… 86
第 81 図　39（043 B）号跡実測図（1/60）…… 87
第 82 図　39（043 B）号跡出土土器（1/4）…… 88
第 83 図　40（044）号跡実測図（1/60）…… 89
第 84 図　40（044）号跡出土土器（1/4）…… 90
第 85 図　41（045）号跡実測図（1/60・1/30）…… 91
第 86 図　41（045）号跡出土土器（1/4）…… 92
第 87 図　42（046 A）号跡実測図（1/60）…… 93
第 88 図　42（046 A）号跡出土土器（1/4）…… 93
第 89 図　43（046 B）号跡実測図（1/80）…… 95
第 90 図　43（046 B）号跡出土土器（1/4・1/3）…… 96
第 91 図　44（048 A）号跡実測図（1/60）…… 98
第 92 図　44（048 A）号跡出土土器（1/4）…… 99
第 93 図　45・46（048 B・E）号跡実測図（1/60）……100
第 94 図　45（048 B）号跡出土土器（1/4）……101
第 95 図　47（048 C）号跡実測図（1/80）……102
第 96 図　47（048 C）号跡出土土器（1/4）……103

第 97 図　48・49（048 D・F）号跡実測図（1/60）……104
第 98 図　50（049）号跡実測図（1/60）……105
第 99 図　50（049）号跡出土土器（1）（1/3）……106
第 100 図　50（049）号跡出土土器（2）（1/4）……107
第 101 図　50（049）号跡出土土器（3）（1/3・1/4）……108
第 102 図　50（049）号跡出土土器（4）（1/3）……109
第 103 図　51（050）号跡実測図（1/60）……111
第 104 図　52（051）号跡実測図（1/80）……112
第 105 図　52（051）号跡出土土器（1/4）……114
第 106 図　53（052）号跡実測図（1/60）……115
第 107 図　53（052）号跡出土土器（1/4）……116
第 108 図　54（053）号跡実測図（1/60）……117
第 109 図　54（053）号跡出土土器（1/3）……117
第 110 図　55（054）号跡実測図（1/60）……118
第 111 図　55（054）号跡出土土器（1/4）……119
第 112 図　56（055）号跡実測図（1/60）……121
第 113 図　57（057 A）号跡実測図（1/60）……122
第 114 図　58（057 B）号跡実測図（1/60）……123
第 115 図　58（057 B）号跡出土土器（1/4・1/3）……124
第 116 図　59（057 C）号跡実測図（1/80）……126
第 117 図　59（057 C）号跡出土土器（1/4）……127
第 118 図　60（057 D）号跡実測図（1/60）……128
第 119 図　60（057 D）号跡出土土器（1/4）……128
第 120 図　61（058）号跡実測図（1/60）……129
第 121 図　61（058）号跡出土土器（1/4）……130
第 122 図　62（059）号跡実測図（1/60）……131
第 123 図　62（059）号跡出土土器（1/3）……132
第 124 図　63（063）号跡実測図（1/60・1/30）……133
第 125 図　63（063）号跡出土土器（1/4）……134
第 126 図　64（064）号跡実測図（1/60）……135
第 127 図　65（066）号跡実測図（1/60）……136
第 128 図　65（066）号跡出土土器（1/4）……136
第 129 図　66（067 A）号跡実測図（1/80）……138

第 130 図　66（067 A）号跡出土土器（1）（1/4）……140
第 131 図　66（067 A）号跡出土土器（2）（1/4）……142
第 132 図　66（067 A）号跡出土土器（3）（1/3）……143
第 133 図　67（067 B）号跡実測図（1/80）……144
第 134 図　67（067 B）号跡出土土器（1/4）……145
第 135 図　68（068）号跡実測図（1/80）……146
第 136 図　68（068）号跡出土土器（1/4・1/3）……148
第 137 図　69（070）号跡実測図（1/80）……149
第 138 図　69（070）号跡出土土器（1/4）……149
第 139 図　70（073）号跡実測図（1/60）……150
第 140 図　70（073）号跡出土土器（1/4）……152
第 141 図　71（080）号跡実測図（1/60）……153
第 142 図　71（080）号跡出土土器（1）（1/4）……154
第 143 図　71（080）号跡出土土器（2）（1/4）……155
第 144 図　71（080）号跡出土土器（3）（1/3）……156
第 145 図　72（081）号跡実測図（1/60）……157
第 146 図　72（081）号跡出土土器（1/4）……158
第 147 図　73（082）号跡実測図（1/60）……159
第 148 図　73（082）号跡出土土器（1/4）……160
第 149 図　74（085）号跡実測図（1/60）……162
第 150 図　75（086）号跡実測図（1/60）……163
第 151 図　75（086）号跡出土土器（1/4）……164
第 152 図　76（087）号跡実測図（1/80）……165
第 153 図　76（087）号跡出土土器（1/4・1/3）……166
第 154 図　77（090）号跡実測図（1/60）……167
第 155 図　77（090）号跡出土土器（1/4）……168
第 156 図　78（092）号跡実測図（1/60）……169
第 157 図　78（092）号跡出土土器（1/4）……170
第 158 図　79（093）号跡実測図（1/60）……171
第 159 図　79（093）号跡出土土器（1）（1/4）……172
第 160 図　79（093）号跡出土土器（2）（1/4）……173
第 161 図　80（095）号跡実測図（1/60）……175
第 162 図　80（095）号跡出土土器（1/4）……176

第163図　81（096）号跡実測図（1/60）……176
第164図　81（096）号跡出土土器（1/4・1/3）……177
第165図　82（097）号跡実測図（1/80）……178
第166図　83（098）号跡実測図（1/80）……179
第167図　83（098）号跡出土土器（1/4）……180
第168図　84（099 A）号跡実測図（1/60）……181
第169図　84（099 A）号跡出土土器（1/4）……182
第170図　85（101）号跡実測図（1/60）……183
第171図　85（101）号跡出土土器（1/4）……183
第172図　86（106）号跡実測図（1/60）……184
第173図　86（106）号跡出土土器（1/4）……184
第174図　87（107）号跡実測図（1/60）……185
第175図　88（108）号跡実測図（1/80）……186
第176図　88（108）号跡出土土器（1/4・1/3）……187
第177図　89（109）号跡実測図（1/60）……188
第178図　90（111 A）号跡実測図（1/60）……189
第179図　91・92（111 B・C）号跡実測図（1/60）……190
第180図　91（111 B）号跡出土土器（1/4）……190
第181図　93（011）号跡実測図（1/120・1/60）……193
第182図　93（011）号跡出土土器（1/4）……194
第183図　94（060）号跡実測図（1/160・1/80）……196
第184図　94（060）号跡出土土器（1）（1/4）……199
第185図　94（060　　出土土器（2）（1/4）……200
第186図　94（060）号跡出土土器（3）（1/4）……202
第187図　94（060）号跡出土土器（4）（1/4・1/3）……203
第188図　95（061）号跡実測図（1/160・1/80）……205
第189図　95（061）号跡出土土器（1/4）……206
第190図　96（062）号跡実測図（1/80・1/40）……208
第191図　96（062）号跡出土土器（1/4）……209
第192図　97（072）号跡実測図（1/80）……210
第193図　98（088）号跡実測図（1/120・1/60）……212
第194図　98（088）号跡出土土器（1）（1/4）……213
第195図　98（088）号跡出土土器（2）（1/4）……214

第196図　99（089）号跡実測図（1）（1/200・1/80）……216
第197図　99（089）号跡実測図（2）（1/120）……218
第198図　99（089）号跡周溝内土壙実測図(1/40)……220
第199図　99（089）号跡出土土器（1）（1/4）……221
第200図　99（089）号跡出土土器（2）（1/4）……223
第201図　100（094）号跡実測図（1/160・1/80）……225
第202図　100（094）号跡出土土器（1/4）……226
第203図　101（100）号跡実測図（1/160・1/80）……227
第204図　101（100）号跡出土土器（1/4）……228
第205図　102（102）号跡実測図（1/200・1/80）……230
第206図　102（102）号跡出土土器（1/4）……231
第207図　103（110）号跡実測図（1/200・1/80）……233
第208図　103（110）号跡出土土器（1）（1/4）……234
第209図　103（110）号跡出土土器（2）（1/4）……235
第210図　103（110）号跡出土土器（3）（1/3）……236
第211図　104（020）号跡実測図（1/160・1/40）……238
第212図　104（020）号跡出土土器（1/4）……239
第213図　105（023）号跡実測図（1/160・1/80）……241
第214図　105（023）号跡出土土器（1/4）……242
第215図　106（024）号跡実測図（1/120・1/60）……243
第216図　106（024）号跡出土土器（1/4）……244
第217図　107（035）号跡実測図（1/120・1/60）……245
第218図　107（035）号跡出土土器（1/4）……246
第219図　108（039）号跡実測図（1/160・1/60）……247
第220図　108（039）号跡出土土器（1/4）……248
第221図　109（047）号跡実測図（1/200・1/80）……249
第222図　109（047）号跡出土土器（1/4）……250
第223図　110（071）号跡実測図（1/200・1/80）……252
第224図　110（071）号跡出土土器（1/4）……253
第225図　111（084）号跡実測図（1/80・1/40）……254
第226図　112（083）号跡実測図（1/120・1/40）……257
第227図　112（083）号跡主体部実測図（1/40）……258
第228図　113・114（015・018）号跡実測図（1/60）……261

第229図　115・116（019・022）号跡実測図（1/60・1/40）……262
第230図　117・118・119（027・033・056）号跡実測図（1/40・1/30・1/40）……263
第231図　120・121（065・074）号跡実測図（1/40）……265
第232図　122・123（075・076）号跡実測図（1/40）……266
第233図　124・125（077・078）号跡実測図（1/40）……267
第234図　126・127（079・091）号跡実測図（1/40）……269
第235図　128・129（099B・104）号跡実測図（1/40）……270
第236図　130（105）号跡実測図（1/60）……271
第237図　131（069）号跡実測図（1/200・1/80）……272
第238図　131（069）号跡出土土器（1/4）……273
第239図　鉄製品（1/2）……274
第240図　土製品（1）（1/2）……276
第241図　土製品（2）（1/2）……277
第242図　土製品（3）（1/3）……278
第243図　土製品（4）（1/3）……279
第244図　土製品（5）（1/3）……280
第245図　土製品（6）（1/3）……281
第246図　土製品（7）（1/2）……282
第247図　石　器（1）（2/3）……284
第248図　石　器（2）（2/3）……285
第249図　石　器（3）（1/3）……286
第250図　石　器（4）（1/3）……287
第251図　石　器（5）（1/3）……288
第252図　石製品（1/2）……288
第253図　遺構外出土土器（1）（1/4）……289
第254図　遺構外出土土器（2）（1/4）……294
第255図　遺構外出土土器（3）（1/4）……295
第256図　遺構外出土土器（4）（1/4）……296
第257図　遺構外出土土器（5）（1/4）……297
第258図　遺構外出土土器（6）（1/4）……298
第259図　先土器時代の調査区（1/1,000）……299
第260図　先土器時代の石器（2/3）……300

－鶴牧古墳群－

第261図　鶴牧1・2・3号墳周辺地形図（1/1,000）……313
第262図　1・2・3号墳墳丘・周溝断面図（1/120）……314
第263図　1号墳全体図（1/200）……317
第264図　1号墳北主体部実測図（1/30）……319
第265図　1号墳南主体部実測図（1/30）……320
第266図　周溝内土壙実測図（1/30）……320
第267図　1号墳出土鉄器実測図（1）（1/4）……322
第268図　1号墳出土鉄器実測図（2）（1/2）……323
第269図　1号墳出土玉類実測図（1/1）……324
第270図　1号墳周溝外出土遺物実測図（1/4）……325
第271図　2号墳全体図（1/200）……328
第272図　2号墳北主体部（左）・南主体部（右）実測図（1/30）……330
第273図　2号墳出土鉄器実測図（1/4・1/2）……331
第274図　2号墳出土玉類実測図（1/1）……333
第275図　2号墳出土土器（1/4）……336
第276図　3号墳全体図（1/200）……340
第277図　3号墳周溝内出土土器実測図（1/4）……341
第278図　先土器時代の石器（2/3）……343
第279図　縄文式土器実測図（1）（1/2）……346
第280図　縄文式土器実測図（2）（1/2）……347
第281図　縄文式土器実測図（3）（1/2）……348
第282図　縄文式土器実測図（4）（1/2）……349
第283図　縄文時代の石器（1）（2/3）……354
第284図　縄文時代の石器（2）（1/2）……355
第285図　弥生式土器実測図（1）（1/3）……360
第286図　弥生式土器実測図（2）（1/3）……361

－人形塚－

第287図　人形塚周辺地形図（1/1,000）……367
第288図　人形塚平面図及び土層断面図（1/40）……369

付図　草刈遺跡A区（第1次調査）遺構配置図（1/500）

図　版　目　次

－草刈遺跡Ａ区（第１次）－

図版　1　遺跡周辺の地形（1/13,000）
－千葉日報社提供－
図版　2　遺跡全景（1/1,200）
図版　3　遺跡全景（調査前）
図版　4　第１次調査区近景
図版　5　1．１号跡全景
2．１号跡遺物出土状況
図版　6　1．２号跡全景
2．３・４号跡全景
図版　7　1．３号跡遺物出土状況
2．５号跡全景
3．５号跡遺物出土状況
図版　8　1．６号跡全景
2．７・８号跡全景
図版　9　1．７号跡遺物出土状況
2．９号跡全景
3．９号跡遺物出土状況
図版　10　1．10号跡全景
2．11号跡全景
図版　11　1．11号跡遺物出土状況
2．12号跡全景
図版　12　1．13号跡全景
2．14号跡全景
図版　13　1．14号跡遺物出土状況
2．15号跡全景
3．15号跡遺物出土状況
図版　14　1．16号跡全景
2．17号跡全景
図版　15　1．18号跡全景
2．18号跡遺物出土状況
図版　16　1．19号跡全景
2．20・21・22号跡全景
図版　17　1．21号跡遺物出土状況
2．22号跡遺物出土状況
3．23・24号跡全景
4．24号跡遺物出土状況
図版　18　1．25・26号跡全景
2．27号跡全景
図版　19　1．28号跡全景
2．28号跡遺物出土状況
図版　20　1．29・30・31号跡全景
2．32号跡全景
図版　21　1．33号跡全景
2．34号跡全景
図版　22　1．35・36・37号跡全景
2．38・39号跡全景
図版　23　1．40号跡全景
2．41号跡全景
図版　24　1．41号跡遺物出土状況
2．41号跡炉跡
3．42・43号跡全景
図版　25　1．44～49号跡全景
2．50号跡全景
図版　26　1．50号跡遺物出土状況
2．50号跡遺物出土状況
図版　27　1．51号跡全景
2．52号跡全景
図版　28　1．53号跡全景
2．54号跡全景

図版 29 1. 55号跡全景
2. 55号跡遺物出土状況
図版 30 1. 56号跡全景
2. 57～60号跡全景
図版 31 1. 58号跡遺物出土状況
2. 60号跡遺物出土状況
3. 61号跡全景
4. 61号跡遺物出土状況
図版 32 1. 62号跡全景
2. 63号跡全景
図版 33 1. 64号跡全景
2. 65号跡全景
図版 34 1. 66号跡全景
2. 66号跡遺物出土状況
図版 35 1. 66号跡遺物出土状況
2. 66号跡壁柱穴
3. 67号跡全景
図版 36 1. 68号跡全景
2. 68号跡壁柱穴
図版 37 1. 69号跡全景
2. 70号跡全景
図版 38 1. 70号跡遺物出土状況
2. 71号跡全景
図版 39 1 71号跡遺物出土状況
2. 71号跡遺物出土状況
図版 40 1. 72号跡全景
2. 72号跡遺物出土状況
図版 41 1. 73号跡全景
2. 73号跡遺物出土状況
図版 42 1. 75号跡全景
2. 75号跡遺物出土状況
図版 43 1. 76号跡全景
2. 78号跡全景
図版 44 1. 79号跡全景
2. 79号跡遺物出土状況
図版 45 1. 80号跡全景
2. 81号跡全景
図版 46 1. 82号跡全景
2. 83号跡全景
図版 47 1. 84号跡全景
2. 84号跡遺物出土状況
図版 48 1. 85号跡全景
2. 86号跡全景
図版 49 1. 87号跡全景
2. 88号跡全景
図版 50 1. 89号跡全景
2. 90・91・92号跡全景
図版 51 1. 93号跡全景
2. 94号跡全景
図版 52 1. 94号跡遺物出土状況
2. 95号跡全景
図版 53 1. 95号跡遺物出土状況
2. 96号跡全景
3. 96号跡遺物出土状況
図版 54 1. 97号跡全景
2. 98・77号跡全景
図版 55 1. 98号跡遺物出土状況
2. 99号跡全景
図版 56 1. 99号跡周溝土層断面
2. 99号跡周溝内土壙
3. 99号跡遺物出土状況
図版 57 1. 100号跡全景
2. 100号跡遺物出土状況
図版 58 1. 101号跡全景
2. 101号跡遺物出土状況
図版 59 1. 102号跡全景

2. 102号跡遺物出土状況
図版 60 1. 103号跡全景
2. 103号跡遺物出土状況
図版 61 1. 104号跡全景
2. 104号跡遺物出土状況
図版 62 1. 105号跡全景
2. 105号跡遺物出土状況
図版 63 1. 106号跡全景
2. 106号跡遺物出土状況
図版 64 1. 107号跡全景
2. 107号跡遺物出土状況
図版 65 1. 108号跡全景
2. 108号跡遺物出土状況
図版 66 1. 109号跡全景
2. 110号跡全景
図版 67 1. 110号跡遺物出土状況
2. 112号跡全景
図版 68 1. 112号跡主体部検出状況
2. 112号跡主体部全景
図版 69 1. 112号跡主体部裏込め
2. 112号跡主体部掘り方
図版 70 1. 112号跡主体部石組
2. 112号跡主体部東側小口石
3. 112号跡主体部遺物出土状況
4. 111・74号跡全景
図版 71 1. 131号跡全景
2. 113号跡全景
3. 114号跡全景
4. 115号跡全景
5. 116号跡全景
図版 72 1. 117号跡全景
2. 118号跡全景
3. 119号跡全景
4. 120号跡全景
5. 121号跡全景
6. 122号跡全景
7. 123号跡全景
8. 124号跡全景
図版 73 1. 125号跡全景
2. 126号跡全景
3. 127号跡全景
4. 128号跡全景
5. 129号跡全景
6. 130号跡全景
図版 74 1号跡出土の土器
図版 75 1・2・3号跡出土の土器
図版 76 3・4・5・6・7号跡出土の土器
図版 77 7・9号跡出土の土器
図版 78 9・10号跡出土の土器
図版 79 10・11号跡出土の土器
図版 80 11・13・14・15号跡出土の土器
図版 81 15・17・18号跡出土の土器
図版 82 19・21・22・24号跡出土の土器
図版 83 28号跡出土の土器
図版 84 28・29・30・32・33号跡出土の土器
図版 85 33・34・35・36・39号跡出土の土器
図版 86 39・40・41号跡出土の土器
図版 87 42・43・44・45号跡出土の土器
図版 88 47・50・52号跡出土の土器
図版 89 52・53・55号跡出土の土器
図版 90 55・58号跡出土の土器
図版 91 58・59・60・61・63号跡出土の土器

図版　92　66号跡出土の土器
図版　93　66号跡出土の土器
図版　94　66・69・70号跡出土の土器
図版　95　70・71号跡出土の土器
図版　96　71・72号跡出土の土器
図版　97　73・75号跡出土の土器
図版　98　75・76・78・79号跡出土の土器
図版　99　79号跡出土の土器
図版 100　79・80・81・83号跡出土の土器
図版 101　83・84・85・88・91号跡出土の土器
図版 102　50号跡出土の土器
図版 103　50号跡出土の土器
図版 104　93・94号跡出土の土器
図版 105　94号跡出土の土器
図版 106　94号跡出土の土器
図版 107　94号跡出土の土器
図版 108　94号跡出土の土器
図版 109　94・95・96号跡出土の土器
図版 110　98号跡出土の土器
図版 111　99号跡出土の土器
図版 112　99・100・101号跡出土の土器
図版 113　101・102号跡出土の土器
図版 114　102・103号跡出土の土器
図版 115　103号跡出土の土器
図版 116　103・104号跡出土の土器
図版 117　104・105・106号跡出土の土器
図版 118　107号跡出土の土器
図版 119　107・108号跡出土の土器
図版 120　109・110号跡出土の土器
図版 121　110号跡・遺構外出土の土器
図版 122　遺構外出土の土器
図版 123　遺構外出土の土器
図版 124　遺構外出土の土器
図版 125　石器
図版 126　石器
図版 127　石器
図版 128　1．先土器時代の遺物
　　2．石製品
図版 129　鉄器
図版 130　土製品
図版 131　土製品
図版 132　土製品
図版 133　土製品

－鶴牧古墳群－

図版 134　1．周辺の地形（南西を望む）
　　2．周辺の地形（南東を望む）
図版 135　1．古墳群全景（北より）
　　2．２号墳より１号墳を望む
図版 136　1．１号墳全景（北東より）
　　2．発掘状況（南西より）
図版 137　1．１号墳北主体部全景（南西より）
　　2．北主体部鉄器出土状況
図版 138　1．１号墳南主体部検出状況
　　2．南主体部全景
図版 139　１号墳出土遺物（１）
図版 140　１号墳出土遺物（２）
図版 141　1．２号墳全景（南東より）
　　2．発掘状況（南より）
図版 142　1．２号墳北主体部全景
　　2．２号墳周溝内遺物出土状況
図版 143　２号墳出土遺物（１）
図版 144　1．２号墳出土遺物（２）（南主体部出土玉類）

2．　2号墳出土遺物（3）
（南主体部付近出土玉類）
図版 145　2号墳出土遺物（4）
図版 146　1．　3号墳全景（西より）
2．　発掘状況（西より）
3．　3号墳出土遺物
図版 147　1．　先土器時代の遺物
2．　縄文時代の遺物（1）
図版 148　縄文時代の遺物（2）
図版 149　縄文時代の遺物（3）
図版 150　縄文時代の遺物（4）
図版 151　縄文時代の遺物（5）
図版 152　弥生時代の遺物（1）
図版 153　弥生時代の遺物（2）
－人形塚－
図版 154　1．　調査前全景（北より）
2．　土層断面（北西より）

表　目　次

第 1 表　周辺の遺跡…… 5
第 2 表　1号墳北主体部内出土鉄鏃計測表……324
第 3 表　1号墳南主体部内出土ガラス玉計測表……325
第 4 表　2号墳南主体部内出土ガラス玉計測表……334
第 5 表　2号墳南主体部付近墳丘内出土ガラス玉計測表……335
第 6 表　第2群2類土器片集計表……350
第 7 表　縄文時代石器集計表……352
第 8 表　剥片計測表……357

第Ⅰ章　序　　説

第１節　発掘調査に至る経緯

千原台土地区画整理事業は、住宅・都市整備公団（旧日本住宅公団）が、東京都心部より東南約40km、千葉市中心部より東南約10kmと比較的首都圏に近い地理的条件および我が国の住宅事情の改善を目的とし新市街地建設を計画したものである。

しかし、建設が予定された当地は、東京湾に流出する村田川の北岸に位置し、自然・地理的条件に恵まれ古くから埋蔵文化財が豊富に所在する地域でもあった。

このため、住宅・都市整備公団では、建設に先立って「新住宅市街地開発法」および「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育委員会と慎重な協議を重ねた。そして、昭和46年度に県教育委員会および市原市教育委員会で現地踏査が実施された。また昭和52年３月には当千葉県文化財センターが、千原台地区埋蔵文化財分布調査を実施し、包蔵地８遺跡、古墳44基が所在することを確認した。この結果を踏まえて、県教育委員会では公団と再度協議を重ね、古墳群の一部や瓦窯跡については現状保存とし、計画変更の困難な遺跡については、記録保存の措置をとることとなり、記録保存のための発掘調査機関として、財団法人千葉県文化財センターが指定された。これに基づき、昭和53年４月千葉県文化財センターと住宅・都市整備公団で調査の委託契約が締結され、発掘調査が実施されることとなった。

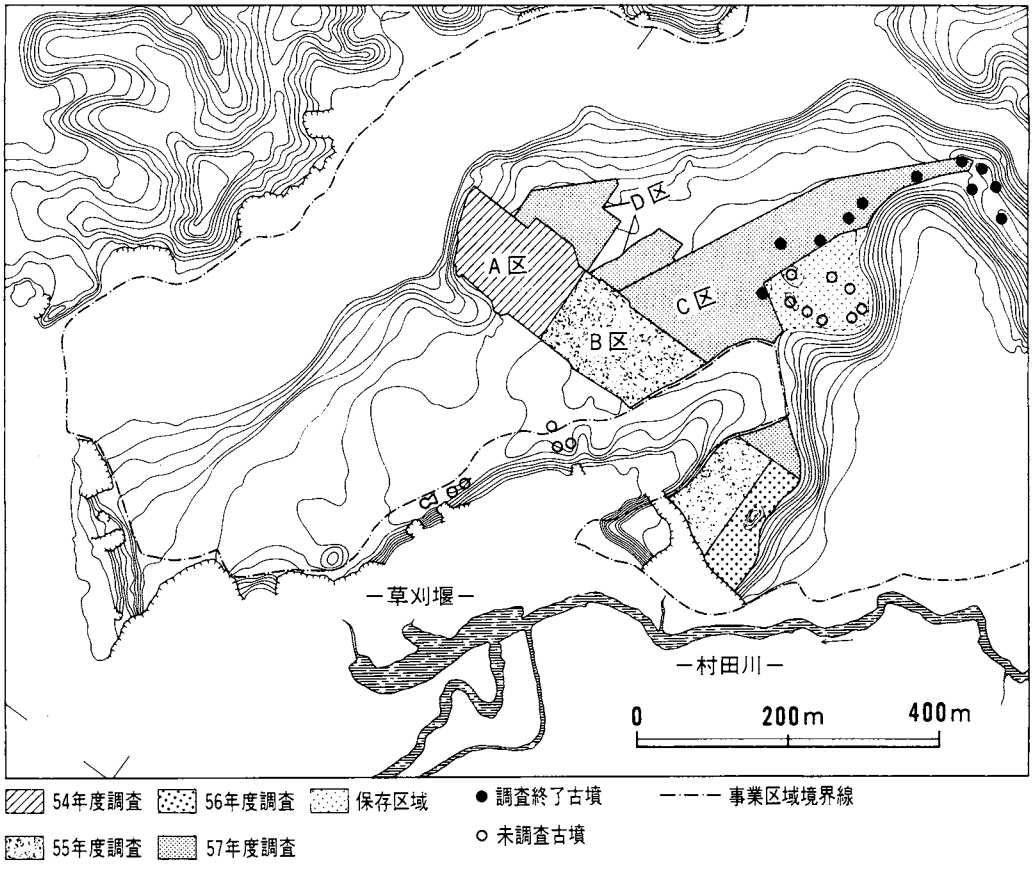
草刈遺跡は昭和51年度の分布調査で約260,000㎡の包蔵地と報告された広大な遺跡である。県教育委員会は、この報告に基づいて住宅・都市整備公団とその取扱いについて協議を重ねた結果、まず、遺跡の性格把握を目的として全域にわたる確認調査を実施することとなり、住宅・都市整備公団では千葉県文化財センターに調査を依頼した。調査は昭和53年・54年度に実施され、その結果、縄文時代中期の環状貝塚、弥生時代後期、古墳時代前期～後期、奈良・平安時代の集落跡および古墳が台地平坦部に所在することが判明した。（調査結果については『千原台ニュータウン１』に詳しい）

そこで、発掘調査にあたっては、遺跡の範囲が広大なため、事前に公団側と協議を進め、工事の進捗状況を考慮し、公団の要望個所より順次発掘調査を進めることとした。

今回報告するＡ区（第１次調査）は、事業地内を通過する千葉急行線予定地の約19,000㎡で、昭和54年８月８日より昭和55年６月30日まで発掘調査を実施したものである。

なお、引き続き昭和55年度より今日まで草刈遺跡は発掘調査が継続され、その発掘区域は第

1図が示す通りである。調査の成果においても膨大な遺構、遺物が発見され、多大な成果をあげており、年次を追って報告する予定である。



第1図　草刈遺跡調査区全体図(1/10,000)

鶴牧古墳群は、昭和51年度の分布調査で発見された古墳群で昭和54年5月7日より同年7月30日まで発掘調査を実施した。

当初は、2基の古墳で草刈41・42号墳と仮称されていたが、伐採の結果、新たに1基が追加され3基の古墳群となった。なお、古墳群の各称については、当古墳群が事業地内の他古墳と比較的隔離した位置に所在する点を考慮し、新たに小字名をとり、鶴牧古墳群とした。また、個々の古墳についても、草刈41号を鶴牧1号墳、42号墳を2号墳、新発見古墳を3号墳とした。

人形塚は、昭和51年度の分布調査で確認されたもので、昭和56年4月7日より同月22日まで調査を実施した。発見当時より、その外形は塚形態を呈しており、俗称人形塚と呼ばれていたが、円墳の可能性も有り、一応、草刈43号墳と仮称されていた。調査の結果、古墳の可能性は少なく、改めて人形塚と命名した。

第２節　遺跡の位置と環境

千原台ニュータウンは、東西に 3.5 km、南北に 1.4 km、総面積 369 haと極めて広大な地域を占めて、北に外房線の鎌取駅、誉田駅、西に内房線の浜野駅がありその中間に位置している。行政区割はそのほとんどが市原市に含まれる。

この地域は大きくみると、下総台地の西南部に位置しており、下総台地特有の樹枝状に開析された大小さまざまな支谷が数多く存在し複雑に劃された台地を形成している。

千原台地区の南側は房総半島より東京湾東岸に流入する河川のひとつである村田川が流れる。その源は、長生郡長柄町山之郷に発し延長20.8km、流域面積 111.9 ㎢を測り、浜野駅の南西1.5 kmの旧海岸線より流出する。中流域は支流と合流する潤井戸付近より沖積地が開らけ、北岸は河岸段丘を形成し急崖をもって当千原台地区と接している。

一方、北側は東京湾に対し開口する数条の支谷が存在し、台地を樹枝状に開析しそれぞれを独立状の舌状台地と劃しながら村田川が形成した沖積地とつながり北西に延びる広域な沖積平野を形成している。これら支谷の中の最南に位置する通称「茂呂沢」は千原台地区西端の草刈台より３km程入り込み千原台地区自体を独立状丘陵のひとつとして形成している。

この千原台地区の台地は地理学的にみると、丘陵の先端部の草刈台は下総下位面として把えられ、比較的小支谷が少ない標高24～35ｍのなだらかな平坦面を形成し、その先端は縄文海進以降に形成された海食崖が存在する。草刈台以東は標高40～55ｍの下総上位面となり、小支谷によって複雑に開析された台地となる。

このように千原台地区の自然環境はその南側を流れる村田川及び下総台地特有の小支谷によって開析された複雑な台地面によって構成されている。

縄文時代の環境は、村田川及び東京湾東岸最奥部に流入する都川、それらと合流する各支流により開析された支谷頭等が主な生産基盤であり、貝塚群の調査研究等により窺い知ることができる。それらの成果をふまえ、沖積層の形成過程を明らかにした研究（松島1980）によると縄文海進最頂期の当地域の海岸線は草刈台の中央両側まで達していたという。

広域な面的調査が実施されつつある千原台地区内の縄文時代の遺構、遺物は以下のとおりである。まず、村田川本流域の小支谷に面する唯一の環状貝塚である草刈貝塚が所在する。この貝塚は昭和55年より調査を実施しており、貝塚部分の約⅔の調査により阿玉台期～加曽利Ｅ期の住居跡 171 軒、土壙 600 基程が検出され、人骨30数体や獣骨、魚骨が多量に出土している。また、環状に廻る住居跡群とやや離れて、中期の住居跡が点在し、しかも今回報告の阿玉台古期の住居跡のように環状部住居跡に先行するものがあり、貝塚のひろがりを考える上で重要な遺構が存在する。その他に昭和56年度調査の草刈六之台遺跡より早期茅山期の住居跡２軒が、押沼遺跡より前期諸磯期の住居跡が検出されている。また、草創期撚糸文系、早期条痕文系の

第2図　周辺の遺跡(1/37,500)

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	遺跡の内容	備考
1	草刈	住居跡（縄文中期～鬼高期主体約600軒）、縄文中期環状貝塚。	昭和57年度に89,000㎡の調査終了予定、継続中。
2	鶴牧古墳群	円墳3基。	本報告書
3	人形塚	塚1基。	本報告書
4	野馬堀	住居跡(国分期1軒)。	昭和53年度調査 小久貫他（1980）
5	ばあ山	住居跡(鬼高期4軒)、円墳1基。	昭和53年度調査 小久貫他（1980）
6	草刈六之台	住居跡（五領期～鬼高期主体約350軒)、円墳3基。1基は大型円墳。	昭和55～57年度調査未発掘部残す。
7	中永谷	住居跡(鬼高期約130軒)、円墳2基、粘土採掘坑1,300㎡。	昭和56年度調査
8	押沼	住居跡（諸磯期、鬼高期)、方形周溝状遺構他。遺構密度薄い。	昭和56年度確認調査
9	ナキノ台	住居跡（鬼高期、国分期)、方墳1基、塚1基、方形周溝状遺構他。北側台地は遺構密度薄い。	昭和57年度確認調査、本調査継続中。
10	川焼台	寺院跡他（土師器、須恵器、瓦出土)。	
11	川焼台窯跡	布目瓦、瓦当出土。川焼台遺跡との関係が指摘される。	
12	鶴牧	山林のため不明。	
13	親皇塚古墳	全長60m、高さ7.1mの前方後方墳。	昭和49年度調査 斎木他（1974）
14	東関山古墳	未調査	
15	姫塚(宮)古墳	未調査	
16	菊間	住居跡（弥生中期～後期49軒、国分期6軒）他。	昭和49年度調査 斎木他（1974）
17	大厩古墳群	調査古墳は前方後円墳2基、円墳1基、方墳6基。	昭和47～48年度調査 三森他（1974）
18	大厩	住居跡（弥生中期～後期56軒、五領期1軒和泉期1軒、鬼高期11軒)、V字溝2条他。	昭和47～48年度調査 三森他（1974）
19	手長貝塚	縄文後期、堀之内期貝塚及び住居跡。人骨出土。	平野元三郎調査
20	山王後1号墳	全長33mの前方後円墳。	田中清美調査 宍倉他（1980）
21	七廻塚古墳	径54mの円墳。滑石製釧他出土。	昭和33年調査 武田他（1974）
22	大覚寺山古墳	全長62mの前方後円墳。	昭和45年測量調査 大塚他（1971）
23	上赤塚1号墳	径31mの円墳。長大な土壙墓より石枕他出土。	昭和55年度調査 栗田（1982）
24	有吉	住居跡（弥生後期3軒、和泉期1軒、鬼高期62軒、真間期39軒、国分期90軒、不明25軒)、円墳址5基他。	昭和49・50年度調査、56年度第3次調査 種田他（1975、1978）

番号	遺跡名	遺跡の内容	備考
25	生浜古墳群	調査古墳は円墳6基。	昭和50年度調査、57年度2次調査　種田他（1977）
26	高沢	住居跡（鬼高期～国分期330軒）他、国分期主体。掘立柱建物跡11棟。	昭和56、57年度調査継続中
27	南二重堀	住居跡（縄文前期2軒、中期6軒、弥生後期6軒、五領期～和泉期46軒）、円墳址8基、方形周溝状遺構11基他。	昭和55年度調査 報告書近刊
28	有吉南	住居跡（鬼高期26軒、国分期3軒）他。	昭和56年度調査
29	馬ノ口	住居跡（五領期19軒）、古墳6基、方形周溝状遺構3基他。	昭和55～56年度調査
30	木戸作	住居跡（縄文後期10軒、鬼高期27軒）、斜面貝塚。	昭和49・50年度調査 郷田他（1975・1979）
31	椎名崎古墳群	調査古墳は全長54mの前方後円墳、円墳7基。	昭和49年度調査 沼沢他（1975）
32	椎名崎	住居跡（鬼高期46軒、真間期18軒、国分期32軒）、古墳4基。	昭和50年度調査 上村他（1979）
33	人形塚古墳	墳丘長45mの前方後円墳、人物埴輪出土。	昭和51年度千葉県文化財センター測量調査
34	小金沢貝塚	住居跡（縄文中期1期、後期18軒）他。 点列環状貝塚。	昭和52年度調査 郷田他（1982）
35	小金沢古墳群	調査古墳は前方後円墳4基、円墳11基、不整形墳1基。	昭和51・52年度調査 白井他（1979・1982）
36	六通	住居跡（縄文後期2軒、国分期3軒）他、六通貝塚の北西部分。	昭和52・53年度調査 郷田他（1980）
37	御塚台	住居跡（鬼高期5軒、真間期3軒、国分期2軒）、方形周溝状遺構4基。	昭和53年度調査 郷田他（1980）
38	ムコアラク	住居跡（縄文中期末3軒、鬼高期8軒、真間期19軒、国分期16軒）、方形周溝状遺構6基他。	昭和51・52年度調査 田坂他（1979）
39	六通金山	住居跡（縄文中期末5軒、鬼高期2軒、国分期2軒）、方墳3基、円墳2基。	昭和51・53・54年度調査 関口他（1981）
40	大膳野北貝塚	住居跡（縄文中期5軒、国分期12軒）、方墳2基他。大膳野北貝塚の北西部分。	昭和55年度調査
41	大膳野北	方墳1基、方形周溝状遺構1基他。	昭和56年度調査 白石他（1982）
42	清水作古墳	径28mの円墳。	昭和52年度調査 瀬戸他（1979）
43	コロニー内	方墳1基、方形周溝状遺構11基。	昭和50年度調査 菊池他（1976）
44	大森第2	住居跡（弥生中期11軒、和泉期33軒、鬼高期4軒、真間期11軒、国分期21軒、不明10軒）他。	昭和46・47年度調査 古内他（1974）

土器群が今回報告の鶴牧遺跡以外に草刈西端部、ナキノ台遺跡、押沼遺跡等に僅少ながら広く散布している。これらの検出例は今後増加すると考えられる。

なお、村田川南岸では、旧海岸線に面した台地上に位置する縄文後期堀之内期の手長貝塚の調査がなされている。

弥生時代に入ると、縄文時代前期以後の海退が、各支谷に泥炭を一層堆積させ、村田川は砂洲を発達させながら変化しはじめ沖積層を形成していった。このような地理的要因を背景として農耕を生産基盤とする活動が開始されるに至った。弥生時代の開始は中期後半で、集落立地が容易な小支谷より進んだと考えられる。しかしこの時期の遺跡は比較的少なく、村田川南岸西端の菊間、大厩遺跡があげられる程度である。なお、宮之台式土器片は草刈六之台遺跡より出土しているが、遺構は伴なわない。いまのところ村田川流域の弥生時代中期の遺跡は台地端の沖積地を見下す地点に限り集落が占地していたといえよう。

つぎの弥生時代後期になると集落数は、限定されつつも村田川北岸地域にも出現する。草刈遺跡では今回報告の住居跡22軒以外にも100軒以上の当時期の住居跡が現在まで（昭和57年9月）検出されている。また、後につづく古墳時代五領期の集落、墳墓と地域を同じにしていることも興味深いことである。

なお、地区外の弥生時代後期の集落は、菊間、大厩遺跡のほか南二重堀遺跡で住居跡6軒、有吉遺跡3軒の検出があるのみで当地域での分布は後につづく時代よりも少ない。

古墳時代になるとさらに農耕基盤が確立され大規模な集落を形成すると同時に高塚古墳の出現をみるに至った。村田川流域に於ける前期古墳として、その立地が沖積平野に面する台地先端部、しかも交通の要衝地に占地されるという様相をみたす古墳は、南岸では台地最北端に占地する親皇塚古墳がある。この丘陵上はいわゆる菊間国造の古地と目される菊間古墳群で姫塚（宮）古墳、東関山古墳、円墳状の大型墳の権現山古墳等有数の古墳が存在する。また、村田川流域の北端には、七廻塚古墳、その東北に近接する大覚寺山古墳、さらに東0.8㎞に位置する上赤塚1号墳が存在する。地区内の前・中期古墳は、まだ調査を実施したものが少なく確言はできないがその様相より仮称草刈1号墳、2号墳、3号墳、33号墳、1号墳と2号墳の中間の地区外に存在する前方後円墳1基をあげることができる。これらは村田川を眼下に見下す丘陵縁部に立地しており大型円墳か前方後円墳の墳形を呈し、他の後期古墳と内容を異にしている。その中で昭和56年調査の草刈3号墳（通称六之台の塚）は、外径50m、高さ4m、周溝の幅5mの円墳で、周溝より多量の五領期の土器、及び周溝底より施設を伴わない伸展葬の人骨等が検出されている。また、主体部は直刀1口を伴う小規模な土壙が盛土中に検出されたのみだが、中・近世の見張台あるいは塚等で改築されており、別の主体部が存在した可能性もある。

古墳時代前期の墳墓は、以上のような高塚古墳とは別に方形周溝（墓）等の低墳丘の墓制も存在する。当地域の前期古墳と同時期か、あるいは先行し、草刈遺跡では今回報告の方形周溝

（墓）10基、及び前方後方型周溝（墓）１基のほか現在までそれらに重複することなく近接しながら24基の方形周溝（墓）が検出されている。これらは台地の中央部に環状形に位置する群とその南に並列する二群とがある。

古墳時代前期の集落は、方形周溝（墓）等に近接して営まれ、さらに草刈遺跡内に広く分布するようである。現在までに 200 軒以上が検出されており、数群に分けられそうである。地区外では南二重堀遺跡、馬ノ口遺跡等支谷頭に近い舌状台地や台地の奥まった地点に数十軒が検出されている。

古墳時代後期になると、古墳、集落ともに分布地域が拡大する。当地区の草刈遺跡はもちろんのこと、北東部の押沼遺跡にも住居跡が確認されており、占有地域が広範囲に及んだことが窺われる。

地区内の古墳の分布は、主に草刈遺跡の東側、細尾根状台地上および舌状台地上で、分布調査で確認された古墳は、40基近くあり、さらに、新発見の古墳や削平され周溝のみの古墳等現在まで30基以上が加えられ、総数は70基程を数える。調査によりさらに増加すると考えられる。墳形はほとんどが円墳で、規模は周溝外径で10ｍに満たないものから、30ｍ程の範囲である。時期的には、鶴牧古墳群、草刈遺跡Ａ区の６世紀代の古墳から、７世紀末までの時間幅がある*。

一方、集落は草刈六之台遺跡で住居跡が110数軒、中永谷（なかながさく）遺跡で130数軒検出されており、草刈遺跡Ｂ区では７軒と少なく、地域を限定して占地していたようである。当地区の北方に位置する東南部ニュータウン造成地区内では、有吉遺跡、椎名崎遺跡等舌状台地上に40～60軒の住居跡で構成される集落があり、奈良・平安時代と集落が変遷する様子が窺われる。また、生浜古墳群、椎名崎古墳群、小金沢古墳群、六通古墳群と大規模な古墳群が存在し、集落と古墳群の関係を考える上でも重要な遺跡が所在する。

その他、地区内には、奈良・平安時代の集落跡、瓦窯跡等も所在するが、未だ調査は進んでおらず、その実態は明らかでない。

以上のように村田川流域における遺跡は多岐にわたり所在する。特に、当千原台地区及び北側に位置する千葉市東南部地区では、開発の進行と共に、面的な発掘調査が年次実施され、貴重な資料が増加しつつある。その中で、村田川北岸の中流域を占める千原台地区の今後の調査成果が重要な位置をしめることは言うまでもない。

---

* 近年、盛土を築かない小規模な（方形）周溝跡の存在が明らかになりつつあり、当地区では、押沼、ナキノ台遺跡等、やや丘陵が奥まった地区に所在する。伴出遺物、層序等により奈良・平安時代の所産と考えられるものもあり、墳丘を削平された古墳との差違を明確にする必要がある。

引用文献

ア　小久貫隆史他　「野馬堀・ばあ山遺跡他」『千原台ニュータウン』1　千葉県文化財センター　1980.3

カ　菊池真太郎他　『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』　千葉県文化財センター　1976.3

栗田　則久他　「上赤塚1号墳・狐塚古墳群」『東南部ニュータウン』13　千葉県文化財センター　1982.12

郷田　良一他　「木戸作遺跡（第2次）」『千葉東南部ニュータウン』7　千葉県文化財センター　1979.3

「六通遺跡・御塚台遺跡」『千葉東南部ニュータウン』9　千葉県文化財センター　1980.3

「小金沢貝塚」『千葉東南部ニュータウン』10　千葉県文化財センター　1982.3

サ　斎木　勝他　『市原市菊間遺跡』　千葉県都市公社　1975.8

阪田　正一他　「有吉遺跡（第1次）」『千葉東南部ニュータウン』3　千葉県都市公社1975.8

三森　俊彦他　『市原市大厩遺跡』　千葉県都市公社　1974.3

「木戸作遺跡（第1次）」『千葉東南部ニュータウン』2　千葉県都市公社　1975.8

宍倉昭一郎　「遺跡と環境」『上総山王山古墳』　上総山王山古墳発掘調査団　1980.3

白井久美子他　「小金沢古墳群」『千葉東南部ニュータウン』8　千葉県文化財センター1979.3

白石　浩他　『千葉市大膳野北遺跡』　千葉県文化財センター　1982.1

関口　達彦他　「六通金山遺跡」『千葉東南部ニュータウン』11　千葉県文化財センター1981.9

瀬戸　文夫他　「清水作遺跡」　千葉県文化財センター　1979.3

タ　武田　宗久他　「古墳時代」『千葉市史』第1巻　千葉市史編纂委員会　1974.3

田坂　浩他　「ムコアラク遺跡」『千葉東南部ニュータウン』8　千葉県文化財センター　1979.3

谷　旬他　「生浜古墳群」『千葉東南部ニュータウン』4　千葉県文化財センター　1977.3

種田　斉吾他　「有吉遺跡（第2次）」『千葉東南部ニュータウン』5　千葉県文化財センター　1978.3

「椎名崎遺跡」『千葉東南部ニュータウン』6　千葉県文化財センター　1979.3

ナ　沼沢　豊他　「椎名崎古墳群（第1次）」『千葉東南部ニュータウン』1　千葉県都市公社　1975.8

ハ　古内　茂他　「大森第2遺跡」『京葉』　千葉県都市公社　1973.3

マ　松島　義章　「千原台地区の沖積低地」『千原台ニュータウン』1　1980.3

第II章　草刈遺跡A区（第1次）の調査

第1節　調査の方法と経過

今回、草刈遺跡のA区として対象となったのは、村田川によって開析された谷に臨む半ば独立した様相を呈する台地上に立地する草刈遺跡のほぼ中央北側の斜面を中心とする地区である（第3図）。

この台地は標高約24～35mで、東から西に向かって傾斜する。こうした地形に立地するため地点により層序、層厚には多少差があるが、今回の調査区内での層序はほぼ一致しており、次のとおりである。

第Ⅰ層　褐色土層　第II層　暗褐色土層　第III層　明褐色軟質ローム（ソフトローム）層、第Ⅳ～Ⅵ層　明褐色硬質ローム（ハードローム）層　第Ⅶ層　褐色ローム層（第II黒色帯）第Ⅷ層　黄褐色ローム層　第Ⅸ層　暗褐色ローム層（武蔵野ローム最上層）

なお、第Ⅰ層から第Ⅸ層上面までは、地点により異なるが約2mの深さを測り、このうち第III層と第Ⅳ層から後述する先土器時代の遺物が検出された。

発掘調査は、昭和54年8月8日に開始した。昭和53年度に行なった確認調査では、縄文・弥生・古墳時代の住居跡、方形周溝（墓）、円形周溝（墓）、古墳等がかなりの密度で分布することが明らかになっていた。この成果に基づき調査の計画を立て、まず北側斜面部から表土の除去を開始した。表土除去の大半は重機を用いて行ったが、一部手掘りで行った部分もある。表土の除去作業がある程度進んだ段階で遺構の調査を開始した。遺構は検出した順に001号跡から番号を付した*。なお、遺構の調査は主に四分法を用いて行ない実測は平板測量を基本とした。

昭和55年1月に入り、調査は緊急に他遺跡の調査を行なうこととなり一時中断したが、3月に再開し、昭和54年度の調査を終了した。

昭和55年度は、まず空中写真の撮影より開始した。草刈遺跡は、前章でも記した通り広大な面積を有する遺跡で多年度に亘る調査が必要である。そこで、空中写真も全域調査が終了した時点で一枚の写真として合成可能な集成（モザイク）写真を作成することとした。

撮影は地上に対空標識板を設定、縮尺1/3,000で統一した測量用空中写真として4月18日に撮影した。なお、調査は現在も実施中で、草刈遺跡ではこの方法を継続している。

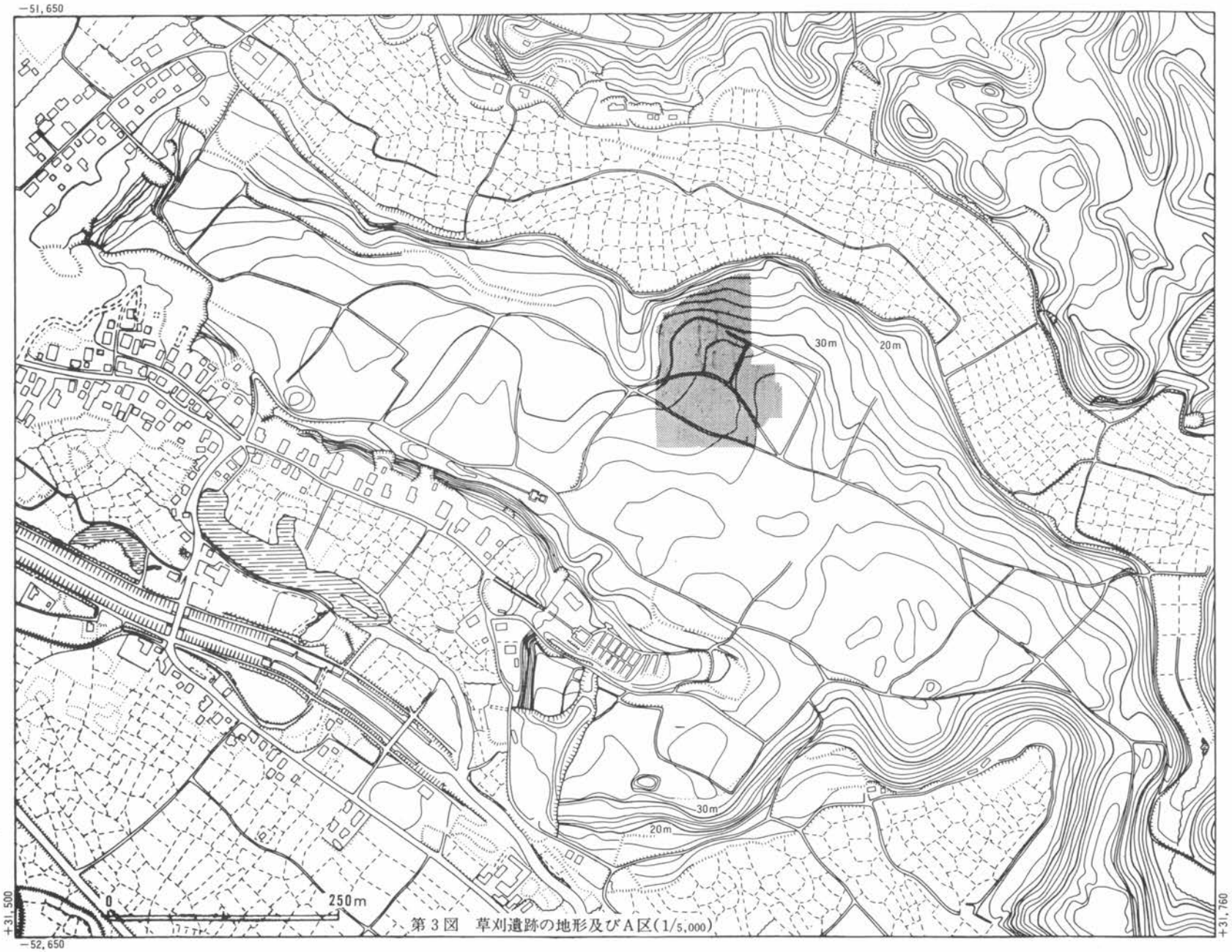
---

* 本書内の（001）～（111C）はこの番号に該当する。本書内では、これを整理、改訂した新番号と併用している。また、挿図（遺物）内の(　　)も発掘時点の番号である。

調査はその後先土器時代の調査に移行した。方法は2×4mのグリッドを133ケ所設定し第Ⅸ層の武蔵野ローム上面まで掘り下げ確認調査を実施した。その結果、4ケ所のグリッドから遺物が出土したため、周辺の拡張を行なったが遺物の広がりは認められなかった。

このようにして後述する成果を得て、昭和55年6月30日をもって第1次調査を終了した。

なお、当初の調査面積は14,000㎡であったが、調査区の東西にわたって遺構が広がっていたため、一部を拡張し、最終的には約19,000㎡の面積を調査した。



第３図　草刈遺跡の地形及びＡ区(1/5,000)

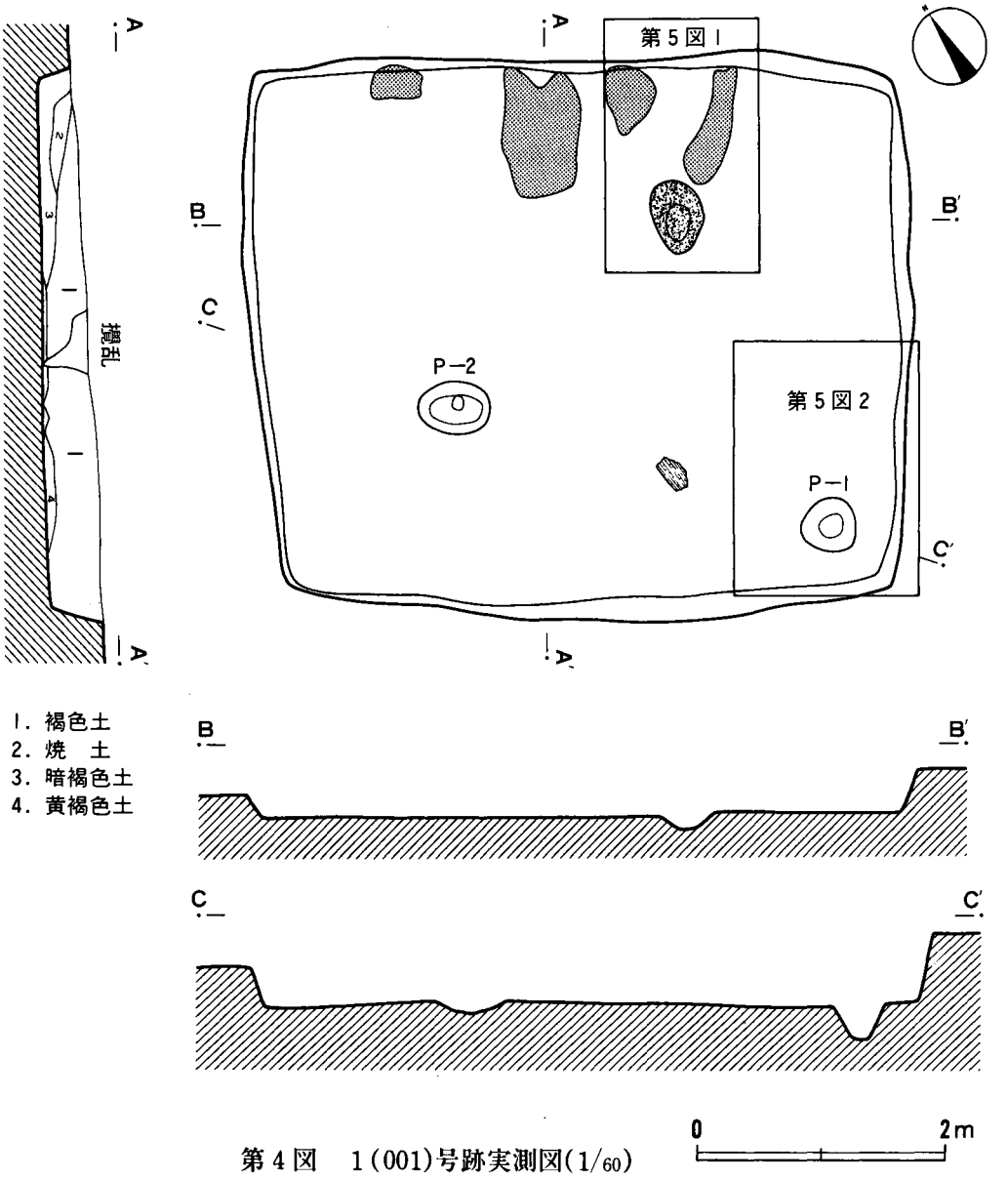
第２節　検出された遺構と遺物

1．住居跡と出土土器

（１）　１（001）号跡（第４～７図）

遺構（第４図）

今回の調査区の最北端、斜面の一番下のやや平坦な面に位置する住居跡である。確認調査のトレンチにかかっており、その段階から存在、性格が判明していた遺構である。



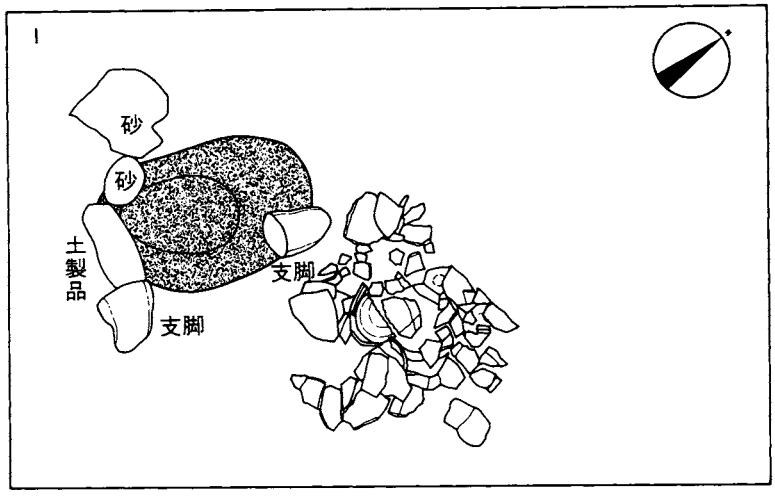
第４図　１(001)号跡実測図(1/60)

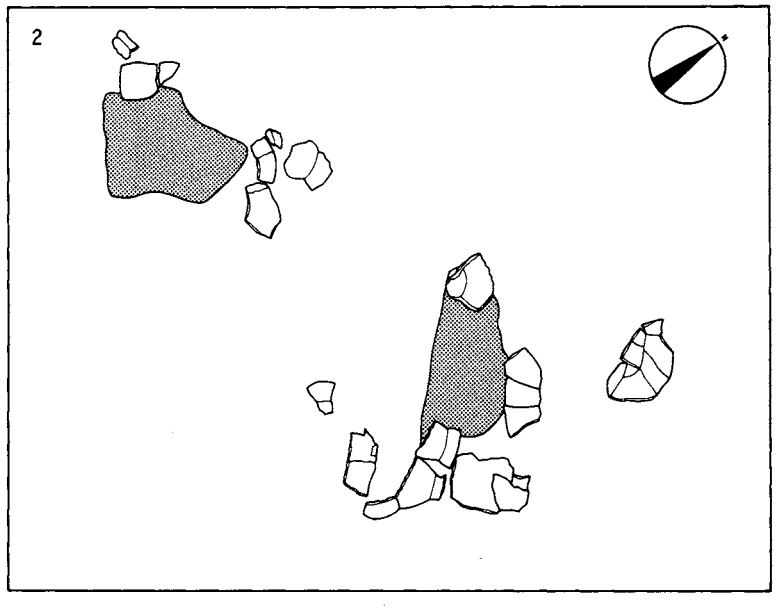
プランは長辺5.4ｍ、短辺4.4ｍの長方形を呈する。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり壁高は斜面に構築されているため差があるが、約0.2ｍ～0.55ｍである。床面はほぼ平坦であるが、やや軟弱である。ピットは２本検出した。Ｐ－１は深さ0.3ｍでしっかりとした掘込みを呈する。Ｐ－２は床面の再精査によって検出したもので、約0.1ｍの深さで、さらに中央部に浅い皿状の掘込みを呈する。炉跡は、住居跡の中央よりやや東寄りに位置し、長軸0.6ｍ、短軸0.4ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.1ｍほどで硬質の焼土がやや東寄りに堆積していた。底面はほとんど焼けていなかった。覆土は４層に分けられた。なお、本住居跡の覆土中からは多量の焼土が検出された。

遺物（第５～７図）

出土遺物はかなり多く、炉跡とＰ－１の周辺から集中して出土した。その一部を第５図に示した。図示した14点の土器の大半は細片となってこの２ケ所から出土したものである。これらの土器片は焼土と共に本住居跡内に流れ込んだと思われる出土状態を示し、床面からやや浮いていた。５は覆土中より出土したものである。なお、本住居跡出土の３点の土製品も炉跡の周辺からこれらの土器片と共に出土したものである。

１は$\frac{5}{6}$遺存する甕である。内外面共にハケ目調整が施されるが、口縁部はヨコナデ、胴部下半はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、密で、焼成も良く、黒褐色を呈する。口径18.5cm底径5.8ｃｍ、器高23.9cmを測る。２も$\frac{5}{6}$遺存する甕である。外面と口縁部内面はハケ目調整が施されるが、口縁部はさらにヨコナデされる。胴部内面はヘラナデされる。胴部上半は部分的に二次的な火を受けている。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径18.4cm、底径5.2ｃｍ器高23.7cmを測る。３は底部を欠く甕で、$\frac{2}{3}$遺存する。外面はハケ目調整が施されるが、胴部下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面は、口縁部～頸部にかけてはハケ目調整が施され、胴部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径17.2cmを測る。４は口縁部を欠く甕で$\frac{3}{5}$遺存する。外面はハケ目調整が施されるが、大半はヘラナデによって消されている。内面はヘラナデされる。器面の遺存状態は悪い。胎土には細砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪く、黒褐色を呈する。底径6.8ｃｍを測る。５は甕の口縁部で$\frac{1}{3}$破片である。内外面共にハケ目調整が施されるが、部分的にナデによって消される。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径16cmを測る。６はほぼ完形の小形の壺である。口縁部は内外面共にヨコナデされる。胴部外面は、ヘラケズリの後ナデが加えられるがわずかにハケ目調整も施される。内面はナデが加えられる。胎土には中砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。口径9.8ｃｍ、底径3.0cm、器高10.4cmを測る。７はほぼ完形の坏である。内外面共にハケ目調整が施されるが体部下半はヘラナデによって消される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径17cm、底径3.0cm、器高5.5ｃｍを測る。８もほぼ完形の坏である。外面はハケ目調整を施した後ヘラナデされる。内面は、口縁部にはハケ目調整が施され、体部はヘラナデされる。胎土、焼成共に

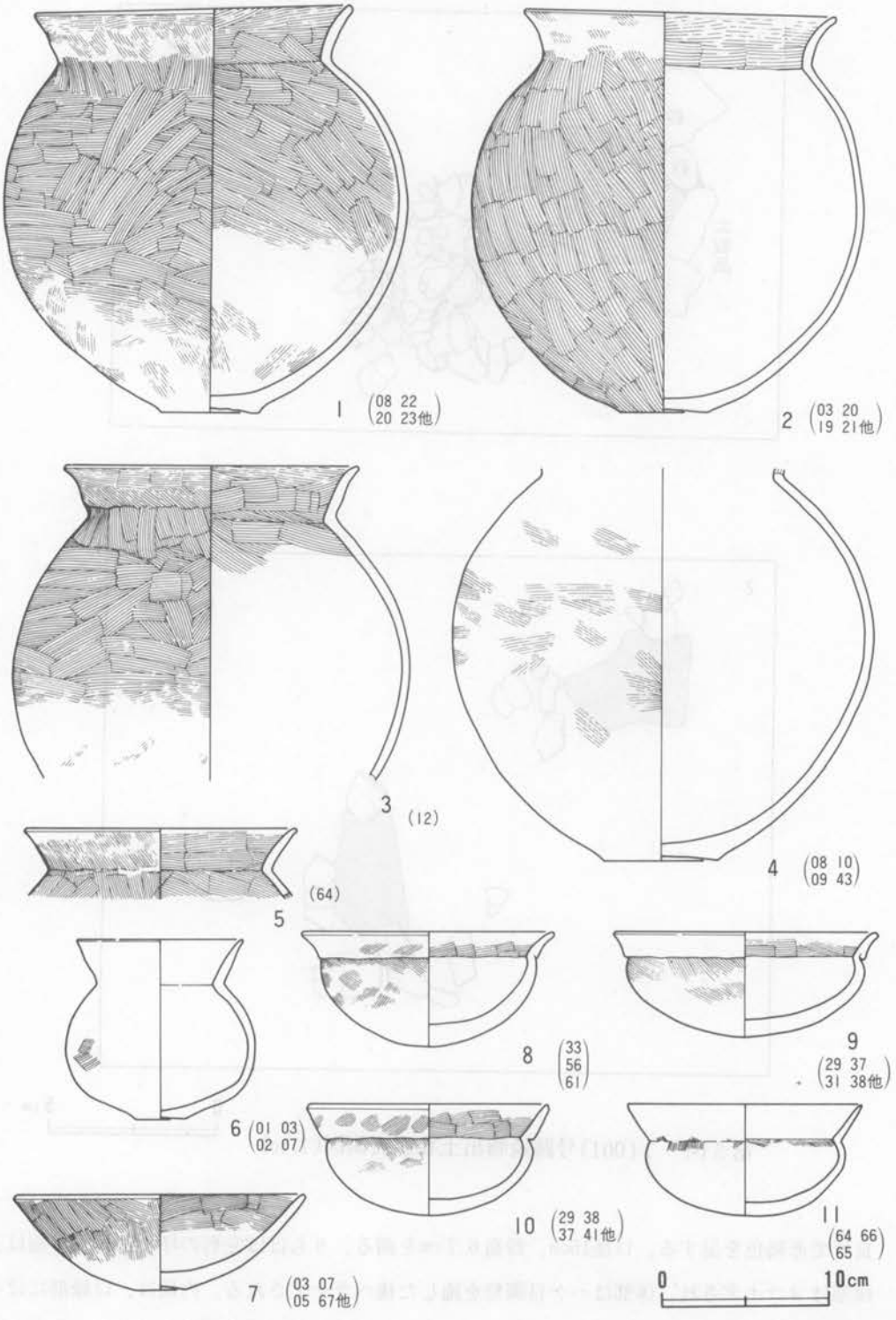




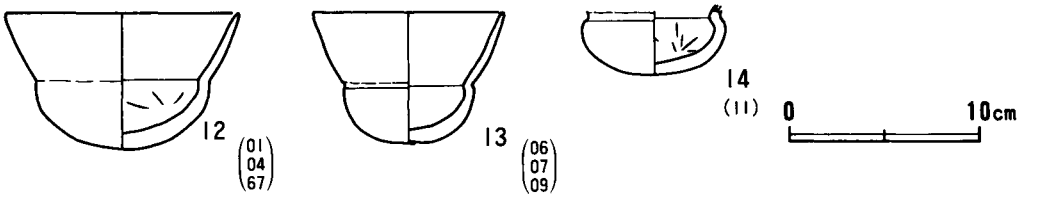
0 5cm

第5図　1(001)号跡遺物出土状態実測図(1/20)

良好で赤褐色を呈する。口径15cm、器高6.7cmを測る。9もほぼ完形の坏である。外面は、口縁部はヨコナデされ、体部はハケ目調整を施した後ヘラナデされる。内面は、口縁部にはハケ目調整が施され、体部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.6cm器高6.1cmを測る。10もほぼ完形の坏である。口縁部はハケ目調整を施した後ヨコナデされる。体部外面はハケ目調整を施した後ヘラナデされる。体部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径14.2cm、器高6.5cmを測る。11も坏で½遺存する。外面はヘラ



第6図　1(001)号跡出土土器(1)(1/4)



第７図　1(001)号跡出土土器(２)(1/4)

ケズリの後ヘラナデされるが、部分的にハケ目が残る。内面はヘラナデされるが、部分的にハケ目調整が残る。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径14cm、器高6.6cmを測る。12は¾遺存する小型丸底土器である。口縁部は内外面共にヘラミガキされ、体部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径12.2cm、器高7.2cmを測る。13はほぼ完形の小型丸底土器である。内外面共にヘラケズリの後ヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径10cm、底径1.8cm、器高6.9cmを測る。14は小型丸底土器の体部である。外面はヘラケズリの後ヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。

（２）　２（002）号跡（第８・９図）

遺構（第８図）

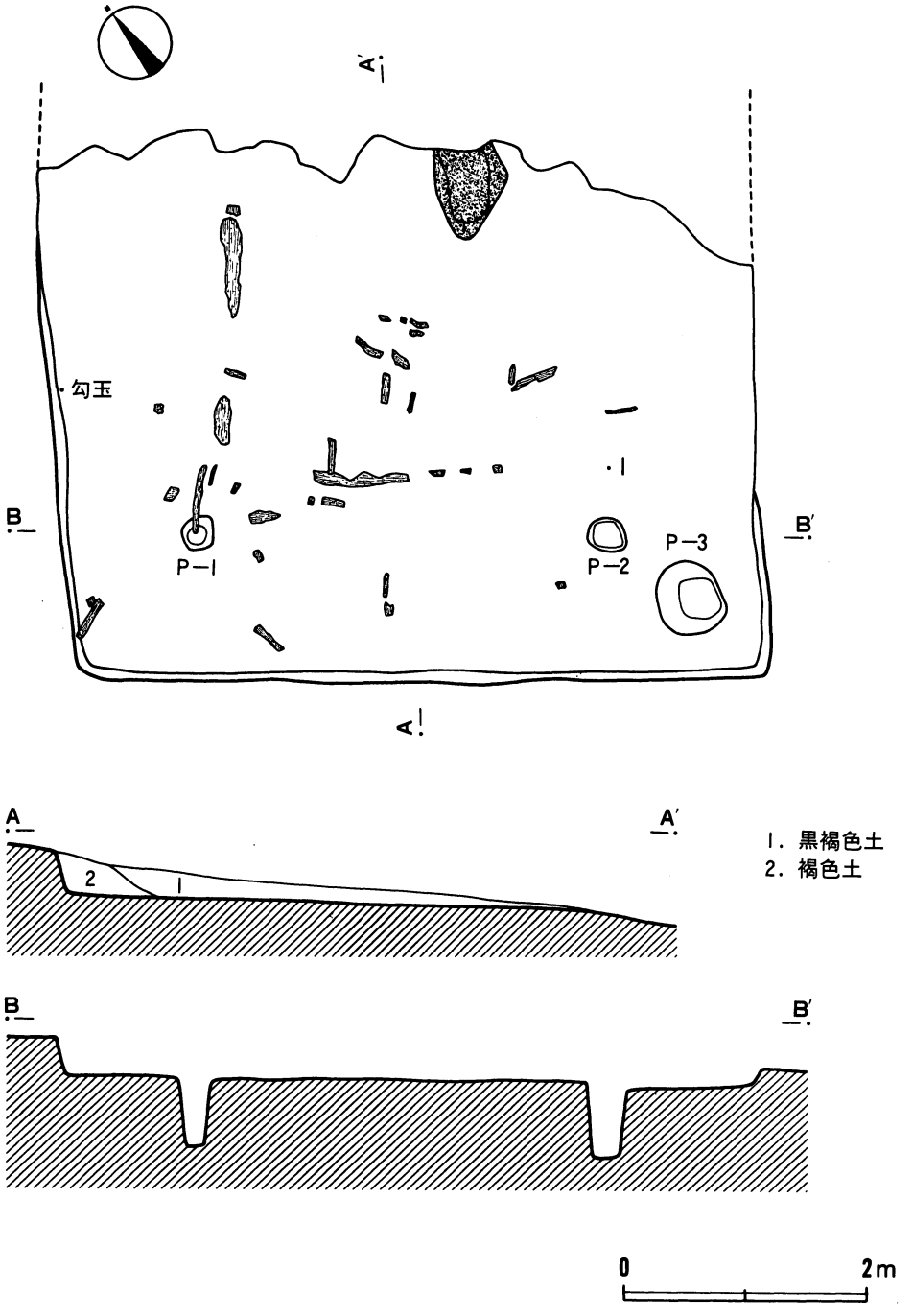
１号跡の約20m南の斜面の中位に位置する住居跡である。確認調査のトレンチの一部がかかっているが、面積が少なく、加えて斜面ということで、その所在が確認できなかった遺構である。

プランは、北側が斜面のため不明であるが、長辺5.8m、短辺5.5mほどの長方形を呈するものと思われる。壁は約½ほど残存し、やや傾斜をもちながら立ち上がり、壁高は検出した部分で、約0.15～0.3mである。床面は平坦で、よく踏み固められている。ピットは３本検出した。Ｐ－１は0.55m、Ｐ－２は0.6mでしっかりとした掘込みで柱穴と考えられる。Ｐ－３は0.6mの深さでしっかりした掘込みを持ち、貯蔵穴と考えられる。炉跡は、住居跡の中央やや東側に位置し、斜面によって一部失われているが、長軸0.9m、短軸0.6mほどの不整楕円形を呈するものと思われる。掘込みは0.2mで、ほぼ全面にわたって焼土が堆積していた。底面はほとんど焼けていない。覆土は２層に分けられた。なお、本住居跡の床面上には多量の焼土と炭化材が遺存していた。

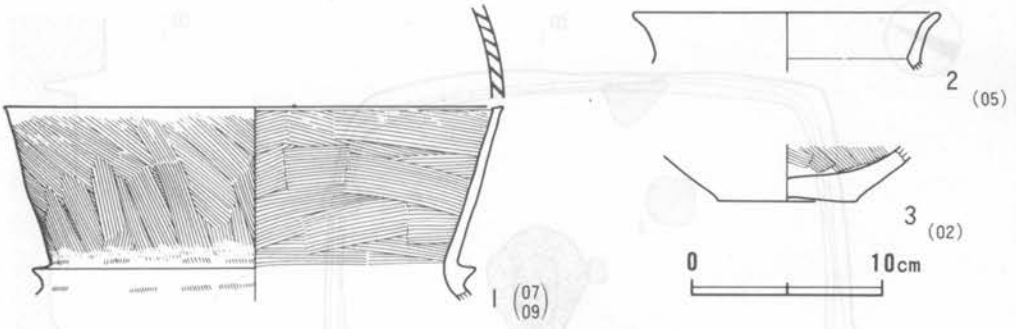
遺物（第９図）

出土遺物は少なく、３点の土器が図示できたにすぎない。１はＰ－２の北側から床面より７cmほど浮いて出土したもので、確認調査時のトレンチ内出土の破片と接合した。２・３は覆土中から出土したものである。なお、住居跡の西壁際の床面直上から勾玉が出土している。

１は大形の壺の口縁部で½破片である。頸部には段を有し、内外面共にハケ目調整が施される



第8図　2(002)号跡実測図(1/60)



第９図　2(002)号跡出土土器(1/4)

が、部分的にヨコナデされる。口唇部には、ハケ目状工具先端部の押圧が加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径26cmを測る。２は甕の口縁部で⅕破片である。内外面共にヨコナデされる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く、黒褐色を呈する。口径16cmを測る。３は底部で⅔遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ内面はハケ目調整が施される。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く、赤褐色を呈する。底径7.2cmを測る。

（３）　３（003）号跡（第10・11図）

遺構（第10図）

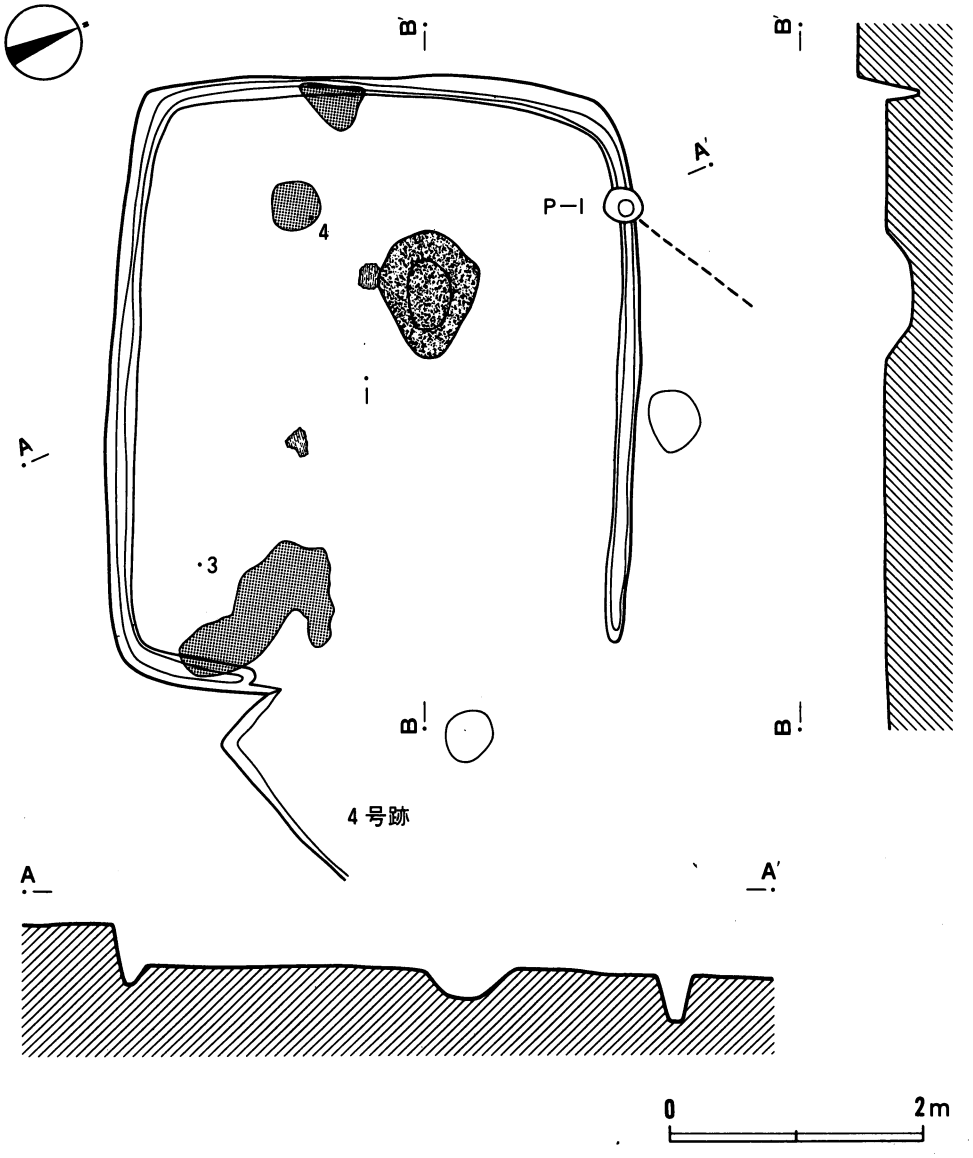
２号跡の南約25ｍの台地の平坦部から斜面にかかる部分に位置する住居跡である。確認調査のトレンチに西側のコーナー部分がかかっており、存在が予想されていたものである。

プランは東側で４号跡と重複しさらに緩斜面にかかっているため、壁はすべて遺存しているわけではないが、壁溝の存在によって長辺4.8ｍ、短辺4.2ｍの隅丸の長方形を呈するものと思われる。壁は遺存している部分ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約0.35ｍを測る。壁溝が東側の一部を除いてほぼ全周する。床面はほぼ平坦でよく踏み固められている。ピットは壁溝中に検出した１本のみで、約0.45ｍの深さで掘込みもしっかりしているが、本住居跡に伴うものかははっきりしない。炉跡は住居跡の中央やや西よりに位置し、長軸約1.0ｍ、短軸0.8ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは0.25ｍほどで、焼土の堆積はうすく、東側によっていたが底面はよく焼けていた。覆土は黒褐色土の単一層であった。なお、本住居跡からは床面よりやや浮いて焼土と炭化材が検出された。４号跡との新旧関係は、３号跡の周溝が４号跡の床面を切っていることから、３号跡の方が新しい。

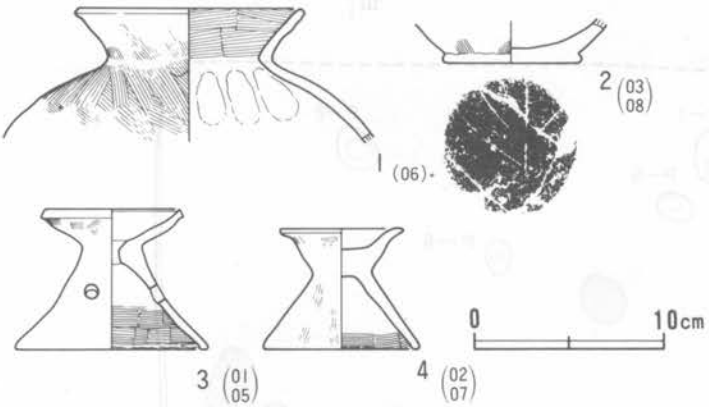
遺物（第11図）

出土遺物は少なく、４点の土器が図示できたにすぎない。１・３・４は床面より10cmほど浮いて出土したもので、いずれも覆土中の破片と接合関係を持つ。２は覆土中より出土したものである。

１は甕の口縁部から胴部上半の⅗破片である。外面はハケ目調整を施した後ナデが加えられ



第10図　3(003)号跡実測図(1/60)



第11図　3(003)号跡出土土器(1/4)

る。内面は、口縁部にハケ目調整が施され、胴部は指頭によるオサエが加えられる。

胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良い。褐色を呈する。口径11.6cmを測る。2は木葉痕を有する底部である。外面はナデが加えられるが、部分的にハケ目調整が残る。内面はナデが加えられる。

胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径7.0cmを測る。3は⅔遺存する器台である。外面はナデが加えられるが、器受部にはわずかにハケ目調整が残る。内面もナデが加えられるが、脚裾部にはハケ目調整が施される。脚孔は3孔を有し、胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。器受部径7.0cm、脚径10cm、器高7.3cmを測る。4も器台で¾遺存する。外面はナデが加えられるが、わずかにハケ目調整痕が残る。内面もナデが加えられるが、脚裾部にはハケ目調整が施される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。器受部径6.4cm、脚径8.2cm、器高6.2cmを測る。

（4）　4（004）号跡（第12・13図）

遺構（第12図）

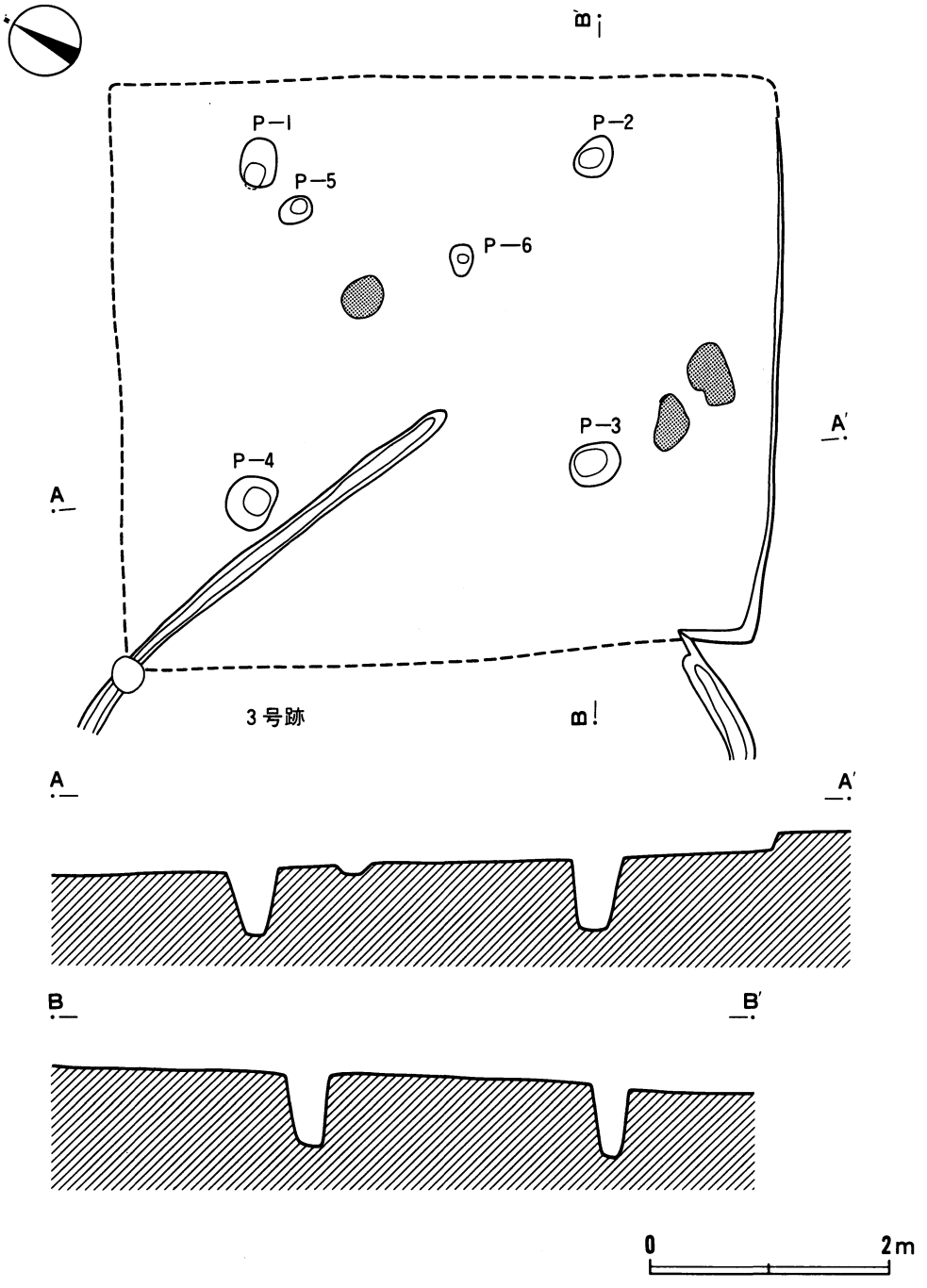
3号跡と北東部分で重複する住居跡で、確認調査のトレンチにコーナーの一部がかかっていたと思われるが、その部分が少なく、確認調査の段階では所在が推定できなかったものである。

プランは、本住居跡が緩斜面に位置し、さらに3号跡と重複するため、南側の壁しか遺存せず、全形を窺うことはできないが、5.5m×4.7mほどの長方形を呈するものと思われる。壁は南側の部分しか遺存しておらず約0.2mを測る。床面はやや凹凸に富み、軟弱である。ピットは6本検出した。P－1～P－4は0.5～0.6mの深さで掘込みもしっかりしており柱穴と考えられる。P－5は0.22m、P－6は0.41mを測るが、本住居跡に伴うかどうか不明である。炉跡は、確認できなかった。覆土は黒褐色土の単一層であった。なお、住居跡内には若干の焼土が遺存していた。

遺物（第13図）

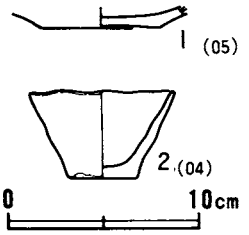
出土遺物は極めて少なく、わずかに2点の土器が図示できたにすぎない。1は覆土中から、2はP－3近くの焼土中で、いずれも床面から4cmほど浮いて出土したものである。

1は底部破片である。外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径6.2cmを測る。2は小形の鉢で⅕遺存する。口縁部は波状を呈する。



第12図　4(004)号跡実測図(1/60)

外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で黄褐色を呈する。口径 7.5 cm、底径3.5 cm、器高4.7 cmを測る。



第13図　4(004)号跡出土土器(1/4)

（５）　５（００５）号跡（第14・15図）

遺構（第14図）

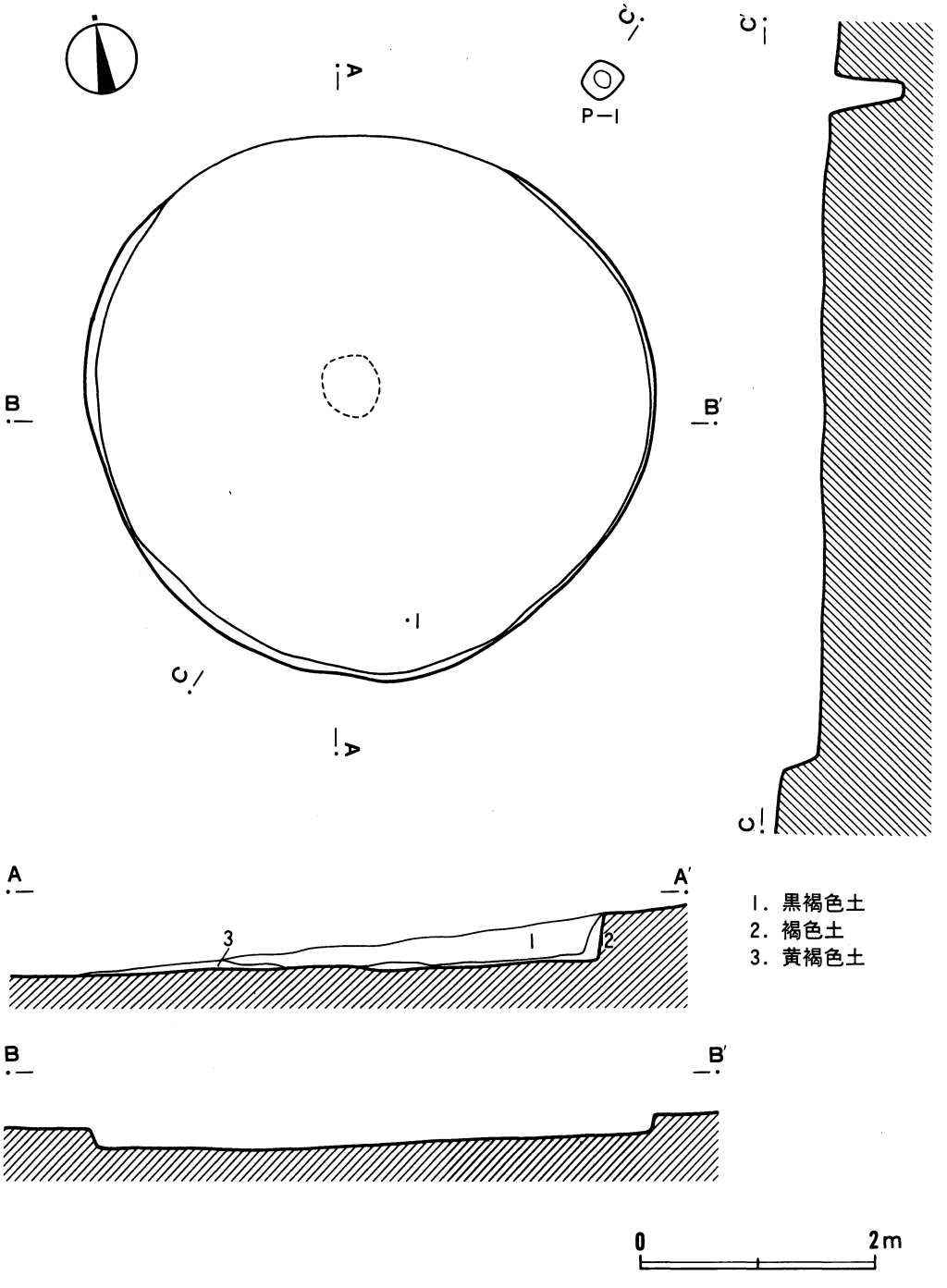
４号跡の東３ｍの緩斜面に存在する住居跡で、確認調査の段階ではトレンチ間に存在するため確認できなかった遺構である。

プランは、径約５ｍのやや不整な円形を呈する。壁は北側の一部が斜面によって失われている。壁高は遺存している部分で0.1～0.4ｍを測り、やや傾斜を持ちながら立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、軟弱である。ピットは住居跡内には検出されず、住居跡外約0.9ｍ離れたところで１本検出した。約0.6ｍの深さで、掘込みもしっかりしているが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。炉跡は精査にもかかわらず検出されなかったが、住居跡の中央に炭化材がややまとまって遺存しており（破線の部分）、わずかに焼土粒も認められた。しかし掘込みを持たず、炉跡とするにはやや疑問が残る。覆土は３層に分けられた。

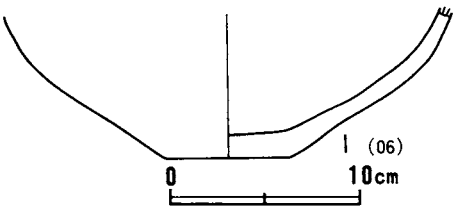
遺物（第15図）

出土遺物は極めて少なく、床面より約18cm浮いて出土した甕が図示できたのみである。

１は甕の胴部下半～底部である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径6.5 cmを測る。



第14図　5(005)号跡実測図(1/60)



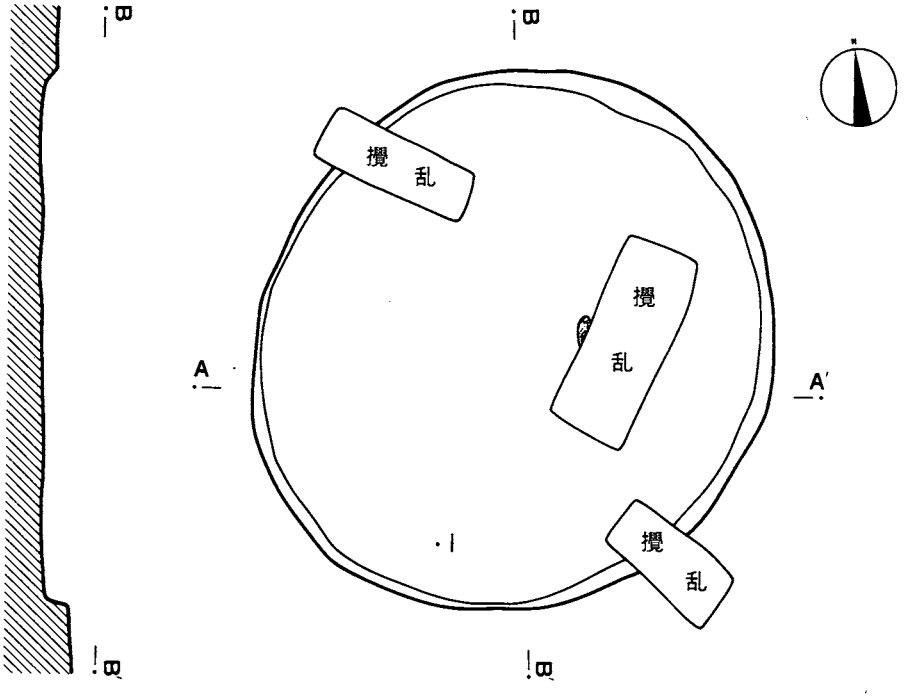
第15図　5(005)号跡出土土器(1/4)

（6）　6（006）号跡（第16・17図）

遺構（第16図）

5号跡の南側10mに位置する住居跡で、確認調査の段階では5号跡と同じようにトレンチ間に存在していた遺構である。

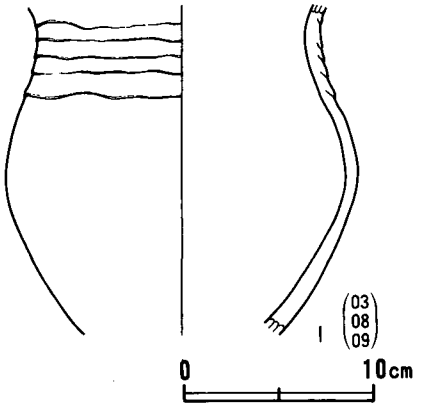
プランは径約4.3mのやや長円形を呈する住居跡である。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上



1．黒褐色土
2．褐色土

第16図　6(006)号跡実測図(1/60)

がり、壁高は約0.2ｍを測る。なお、壁には攪乱が２ヶ所入っている。床面はほぼ平坦で壁際を除いてはよく踏み固められている。ピットは検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや東よりに位置するが、その大半を攪乱によって失っており、全形を窺うことはできない。わずかに遺存していた部分の深さは約0.14ｍで、若干の焼土が堆積し、底面は焼けていた。覆土は２層に分けられた。



第17図　6(006)号跡出土土器(1/4)

遺物（第17図）

出土遺物は極めて少なく、床面直上から出土した甕が図示できたのみである。

１は口縁部と底部を欠く甕の½破片である。外面は頸部に輪積み痕を残すが、部分的にナデによって消される。胴部はヘラナデされる。内面はヘラミガキされる。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成は良い。赤褐色を呈する。最大径は18.2cmを測る。

（７）　７（007）号跡（第18・19図）

遺構（第18図）

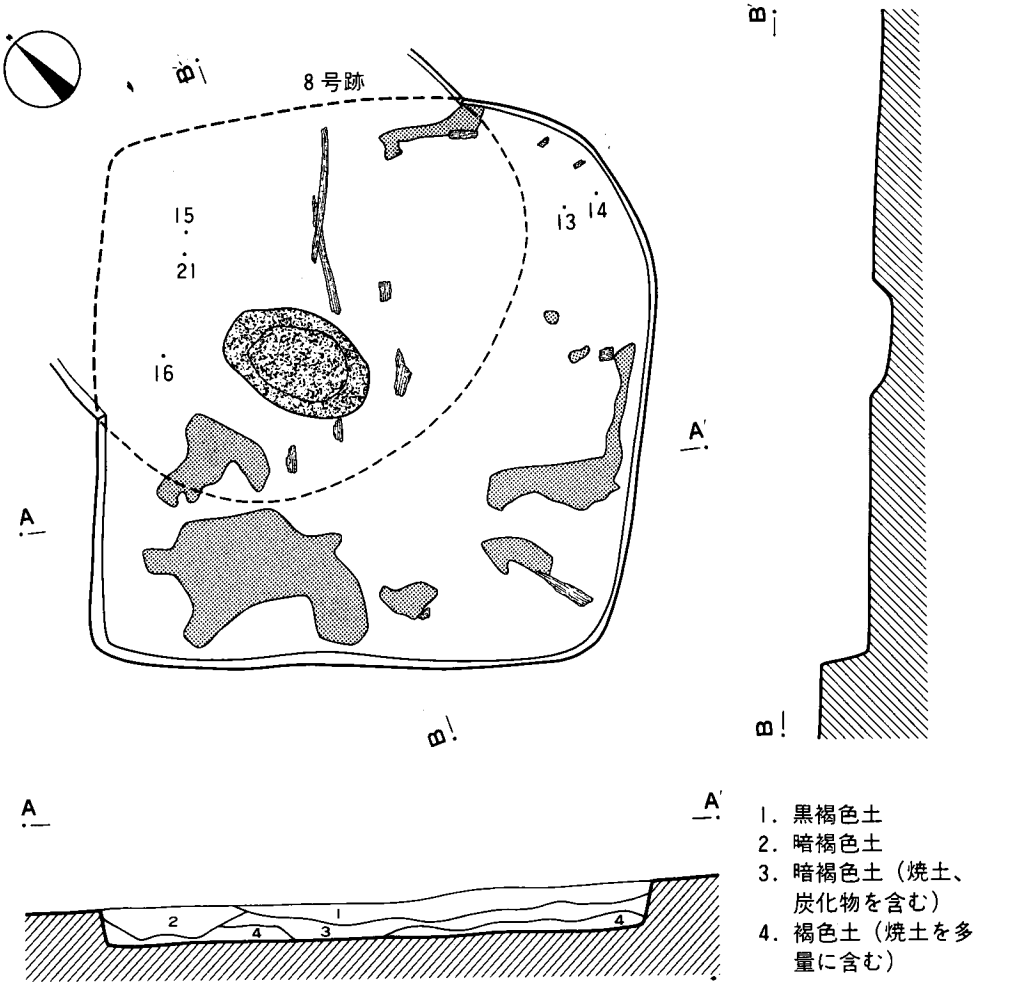
６号跡の北西約６ｍのところに位置する住居跡で、確認調査の段階から北側で重複する８号跡と共にその存在が確認されていた遺構である。

プランは、本住居跡が北側で８号跡と重複するもののほぼ長辺4.5ｍ、短辺4.3ｍの不整な隅丸の長方形を呈するものと思われる。壁は重複によって⅗しか遺存していないが、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.4ｍを測る。床面は８号跡の上に貼床されており、やや凹凸に富むがよく踏み固められている。ピットは全く検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに位置する。長軸1.2ｍ、短軸0.75ｍの楕円形を呈する。掘込みは、0.15ｍほどで硬質の焼土が堆積し、底面は焼けていた。覆土は４層に分けられた。なお、住居跡内にはほぼ全面にわたって焼土、炭化材が遺存していた。

遺物（第19図）

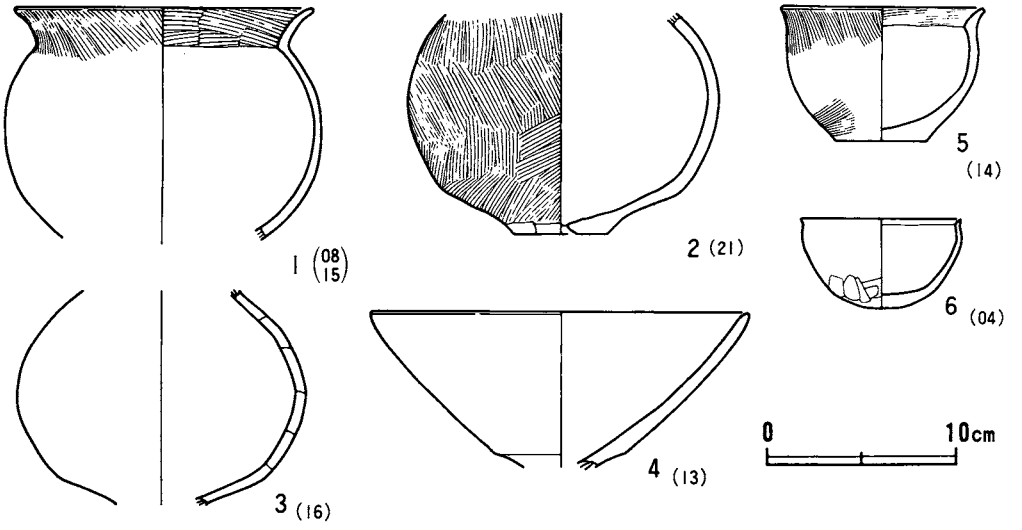
出土遺物はやや多く、６点の土器が図示できた。１～４は床面直上から出土したもので、５は床面よりやや浮いて出土した。６は覆土上層出土のものである。

１は底部を欠く甕で⅗遺存する。口縁部にはハケ目調整が施され、さらに、ヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面は粗くヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。口径15.6cmを測る。２は胴部以下が⅗遺存する甕である。外面は粗くハケ目



第18図　7(007)号跡実測図(1/60)

調整が施され、部分的にナデが加えられる。底部近くはヘラケズリされる。内面はヘラナデされる。底部中央には径約1.5cmの焼成後の穿孔が認められる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径5.0cmを測る。3は胴部のみ⅕遺存する壺である。輪積み成形で外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。最大径15cmを測る。4は高坏の坏部で、図示の範囲ではほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。胎土には砂粒を含み、密だが焼成はやや悪い。口径19.8cmを測る。5はほぼ完形の鉢である。外面ヘラケズリの後ヘラナデされるが、部分的にハケ目調整が施される。口縁部内面はハケ目調整の上をヨコナデされ、体部内面はヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径10.5cm、底径5.0cm、器高7.0cmを測る。6は¾遺存する埦である。外面上半はナデ、下半はヘラケズリされる。内面もナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。口径8.4cm、底径1.8cm、器高4.7cmを測る。



第19図　7(007)号跡出土土器(1/4)

（８）　８（００８）号跡（第20図）

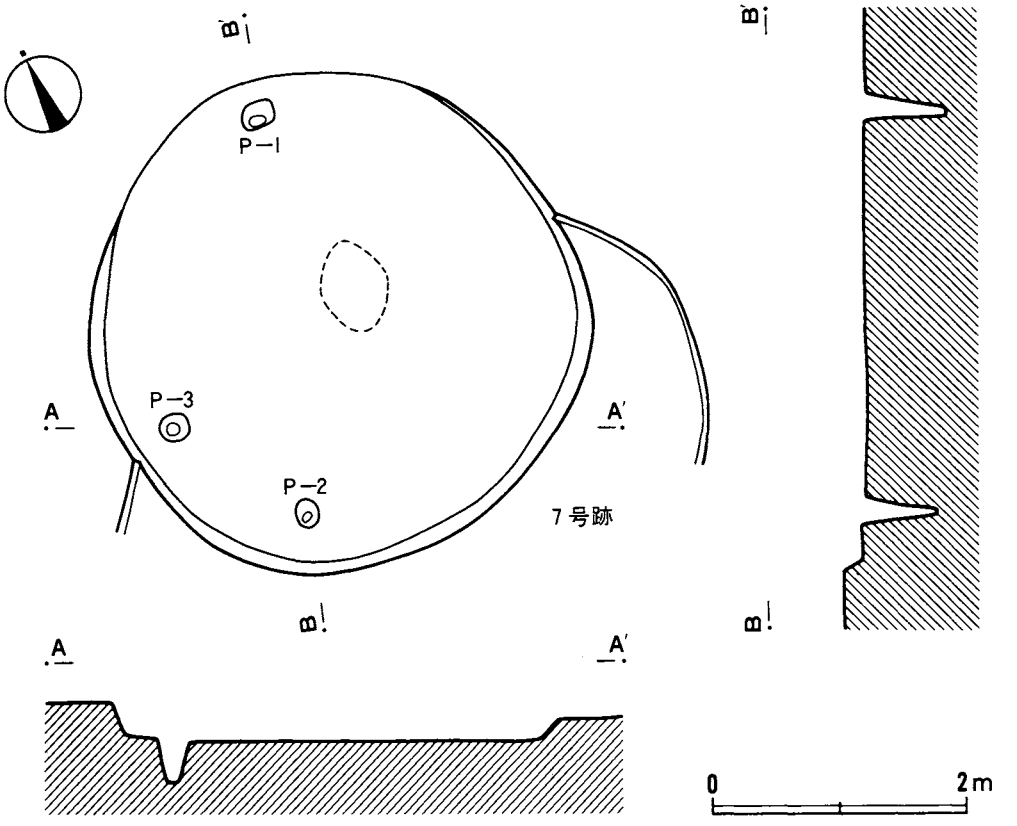
遺構（第20図）

７号跡の北側で重複する住居跡で、確認調査の段階から７号跡とともにその所在が明らかになっていた遺構である。

プランは径約4.0mのやや不整な円形を呈する。壁は７号跡の床面をはがして南側は検出できたが、北側の一部は斜面によって失われている。壁高は約0.15～0.25mでやや傾斜をもって立ち上がる。床面は７号跡の貼床をはがして検出したもので、ほぼ平坦でよく踏み固められていた。ピットは３本検出した。深さはＰ－１が0.69m、Ｐ－２が0.6ｍ、Ｐ－３が0.35mで、３本ともしっかりとした掘込みを持つ。これらはいずれも柱穴と考えられる。炉跡は精査にもかかわらず検出されなかったが、住居跡の中央やや東寄りの部分（破線の部分）に炭化材と焼土が遺存していた。５号跡と同様のものであるが、炭化材と焼土の量は少ない。掘込みも持たず、炉跡とするにはやや疑問が残る。覆土は黒褐色土の単一層であった。なお、７号跡との新旧関係は、７号跡が本跡の上に貼床をしていることにより、７号跡の方が新しい。

遺物

出土遺物は極めて少なく、覆土中から土器片がわずかに出土したのみで、図示できる遺物はない。



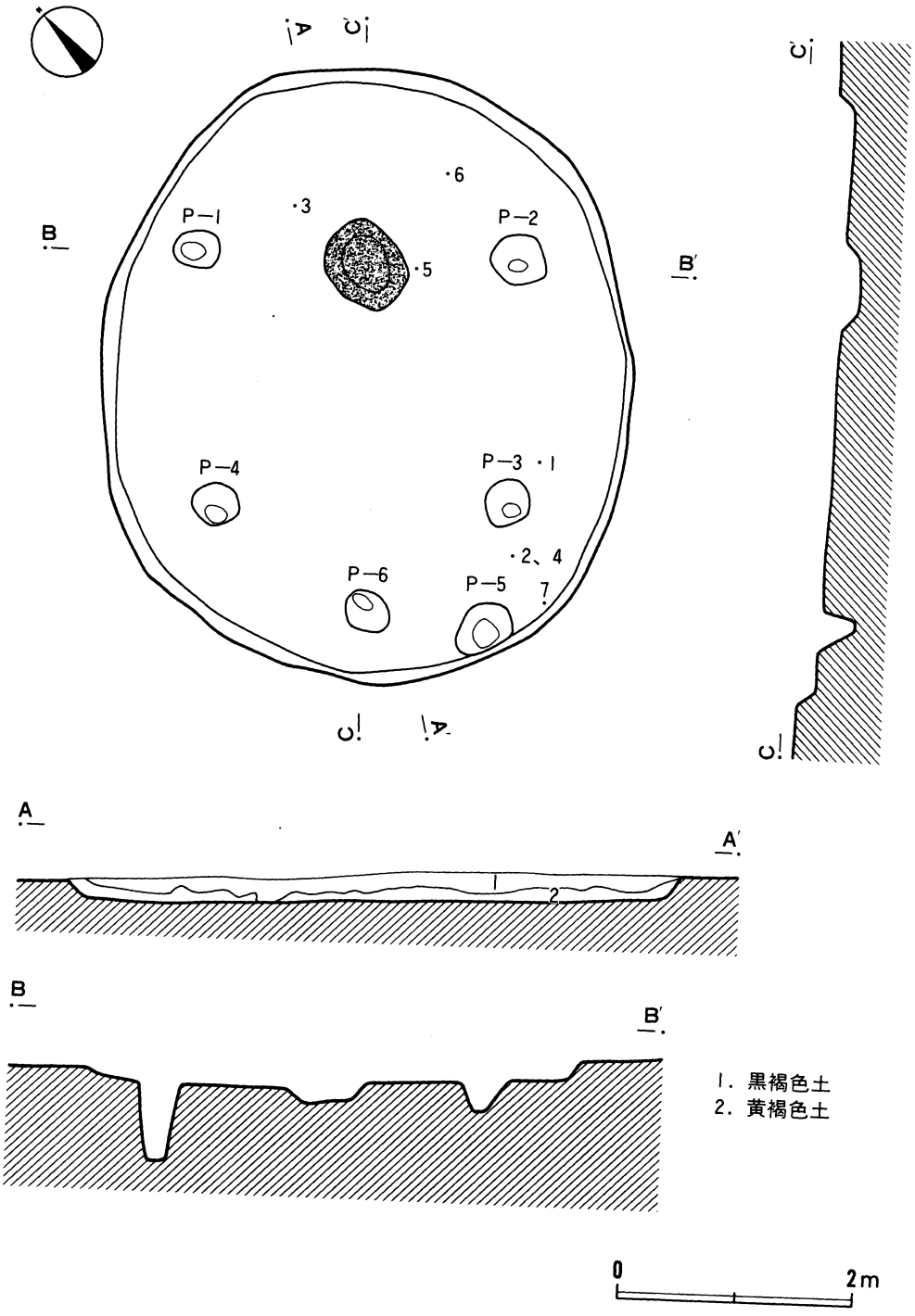
第20図　8(008)号跡実測図(1/60)

（９）　９（009）号跡（第21図～23図）

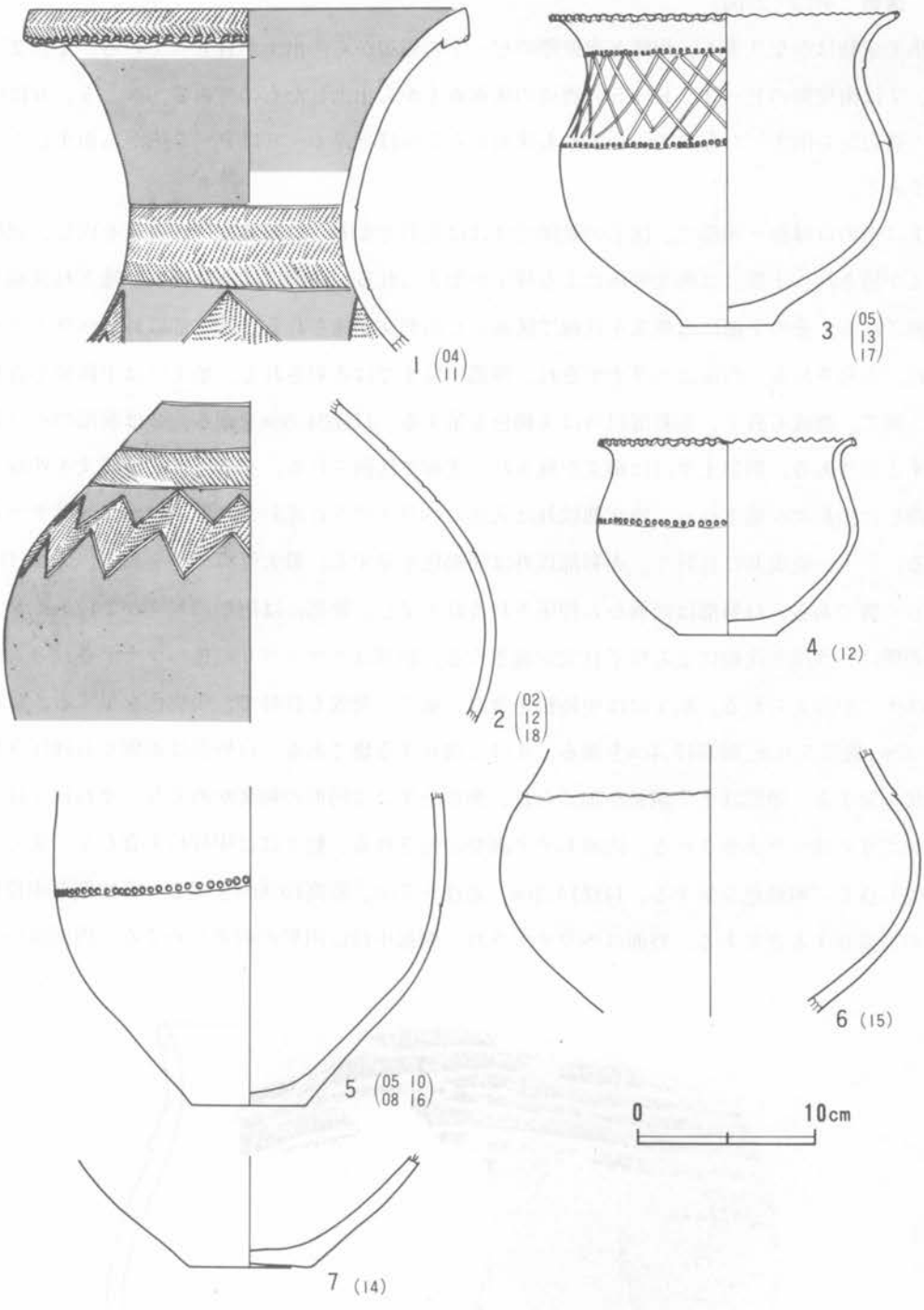
遺構（第21図）

７号跡の南側約１ｍのところに位置する住居跡である。確認調査時のトレンチにかかっていたと思われるが、その部分が少なく所在が推定できなかった遺構である。

プランは長辺5.2ｍ、短辺4.6ｍの隅丸の長方形を呈する。壁は全体にわたってよく遺存しており、やや傾斜をもって立ち上がる。壁高は約0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが、やや軟質である。ピットは６本検出した。Ｐ－１、Ｐ－３、Ｐ－４は0.6ｍ、Ｐ－２、Ｐ－５は0.3ｍでいずれも柱穴と考えられる。Ｐ－５は0.25ｍの深さで位置からして貯蔵穴と思われる。炉跡は住居跡の中央北よりに位置し、長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍの隅丸の楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は２層に分けられ単純な堆積を示す。



第21図　9(009)号跡実測図(1/60)

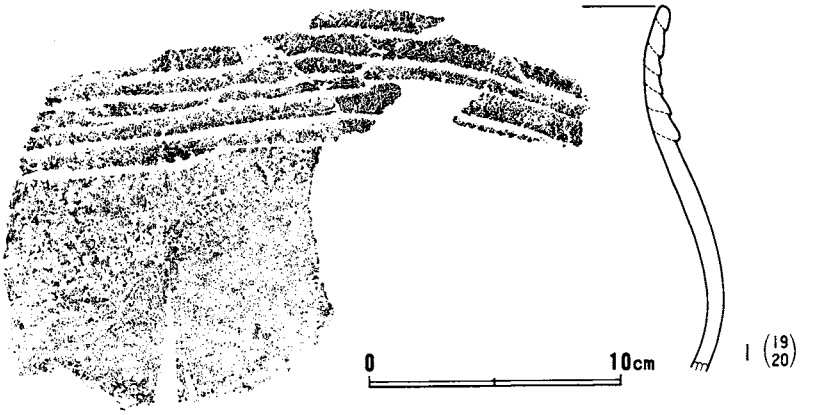


第22図　9(009)号跡出土土器(1)(1/4)

遺物（第22・23図）

出土遺物はかなり多く、炉跡と南壁際のピットの周辺からの出土が目立っている。1、2、4、7は南壁側のP－3、P－5の周辺の床面直上から出土したものである。3、5、6は炉跡の周辺から出土したもので、いずれも床面から7cmほど浮く。8はP－5内から出土したものである。

1は壺の口縁部～頸部で、図示の範囲ではほぼ完形となる。口縁部は複合口縁を成し、羽状縄文が施され、下端には縄文原体による押圧が加えられる。頸部には羽状縄文が施され沈線で区画される。その下部には縄文を沈線で区画した山形文が施される。施文部以外はヘラミガキされ、赤彩される。内面はヘラナデされ、頸部中位までは赤彩される。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良く、赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径24.5cmを測る。2は胴部のみ⅕遺存する壺である。胴部上半には縄文が施され、沈線で区画される。その下部には縄文を沈線で区画した山形文が施される。施文部以外は入念にヘラナデされ赤彩される。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。最大径27.6cmを測る。3はほぼ完形の甕である。口唇部は両側から押圧され波状を呈し、頸部には円形の刺突が2段めぐり、その間にヘラ描き沈線による格子目文が施される。胴部はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はナデが加えられる。胎土には中砂粒を含み、密で、焼成も良好で、明褐色を呈する。口径19.8cm、底径5.0cm、器高17.4cmを測る。4は¾遺存する甕である。口唇部は両側から押圧され波状を呈する。頸部はナデ調整が加えられ、胴部上半には円形の刺突がめぐり、それ以下はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面もナデ調整が施される。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良く、明褐色を呈する。口径14.2cm、底径5.5cm、器高10.8cmを測る。5は胴部中位以下が¾遺存する甕である。外面はヘラナデされ、胴部中位に円形の刺突がめぐる。内面はヘラ



第23図　9(009)号跡出土土器(2)(1/3)

ミガキされる。胎土、焼成共に良好で暗褐色を呈する。底径6.4㎝を測る。6は口縁部と底部を欠く甕の⅓破片である。胴部上半には輪積み痕を一段、段状に残している。内外面共にナデが加えられる。胎土には中砂粒を含むが密で、焼成も良く、明褐色を呈する。最大径23.6㎝を測る。7は甕の胴部下半で½遺存する。外面はヘラミガキされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈する。底径7㎝を測る。8は甕の口縁部から胴部の破片で、頸部に輪積痕を6段残す。外面は、胴部下半に二次的な火を受け、胴部中位から頸部にかけては煤が付着する。内面はヘラミガキされるが、下半は器面の荒れが著しい。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。内面は茶褐色を呈する。

（10）　10（010）号跡（第24・25図）

遺構（第24図）

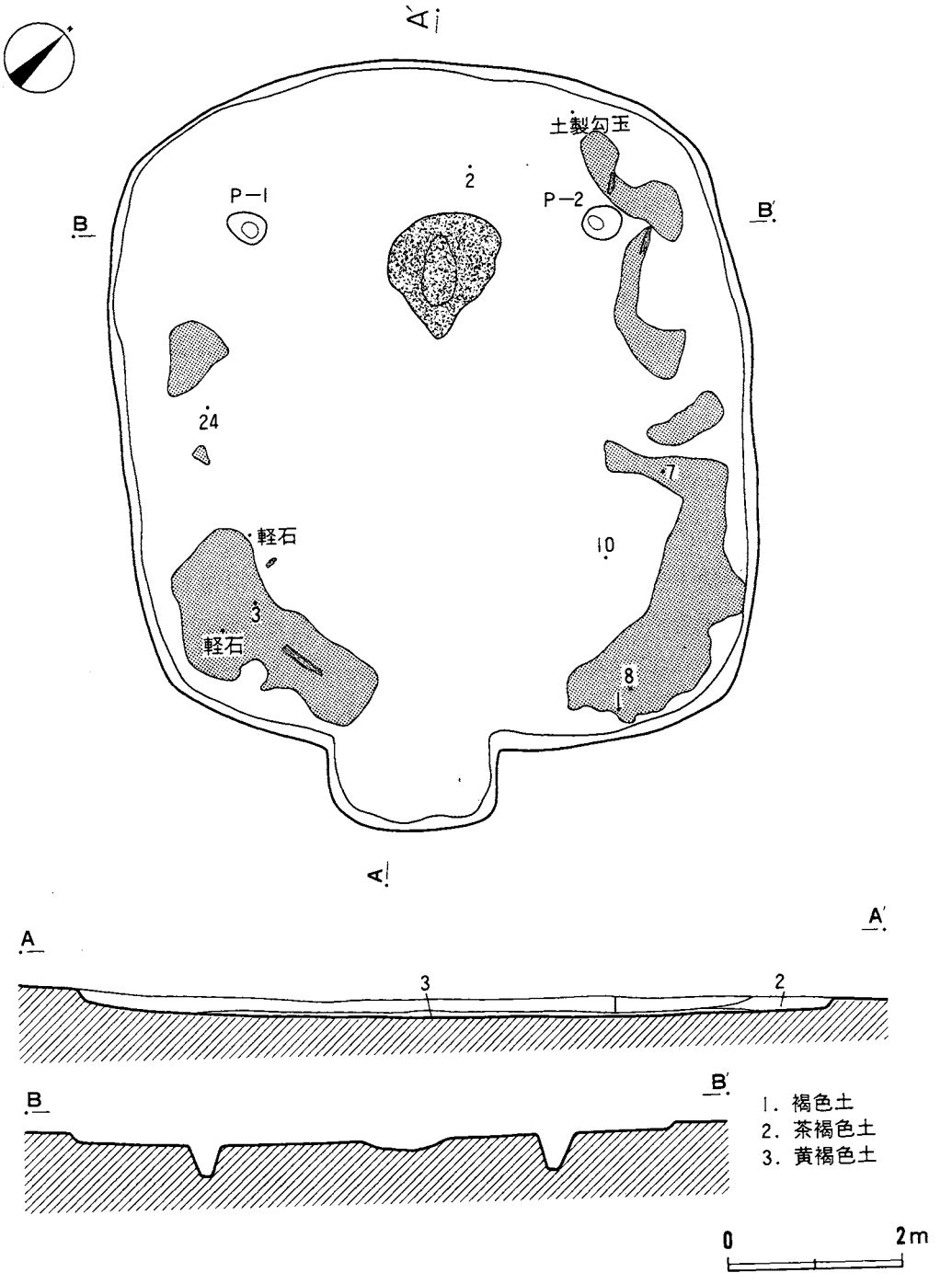
6号跡の南東約2ｍのところに位置する住居跡で、確認調査の段階からその所在・性格が判明していた遺構である。

プランは長辺8.0ｍ、短辺7.2ｍの隅丸長方形で、南側に2.0×1.2ｍの方形の張り出しを有する。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は約0.2ｍを測る。床面は、ほぼ平坦で、よく踏み固められているが、張り出し部は凹凸に富む。ピットは二本検出した。Ｐ－1、Ｐ－2とも0.4ｍの深さを持ち、柱穴と考えられる。それ以外のピットは精査にもかかわらず検出できなかった。炉跡は住居跡の中央北寄りに位置し、長軸約1.4ｍ、短軸約1.2ｍの不整形を呈する。掘込みは0.2ｍほどで、硬質の焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられ、単純な堆積を示す。なお、本住居跡の床面上からは多量の焼土が検出された。

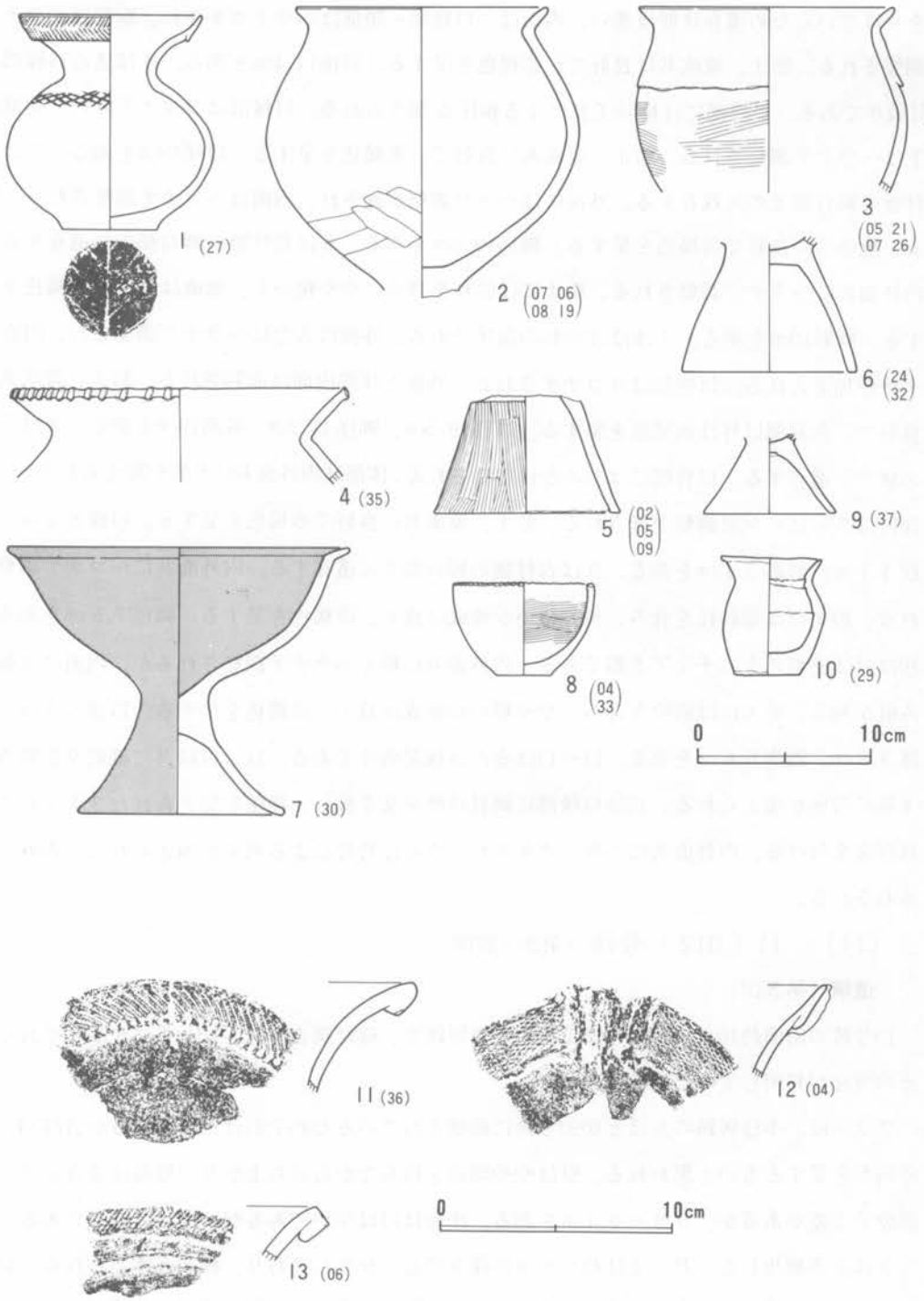
遺物（第25図）

出土遺物は、4と9が炉跡内出土、8が床面より5㎝ほど浮いて出土したほかは、いずれも床面直上より出土し、覆土内出土の破片と接合関係を持つ。11～13は覆土中より出土した。この他に西壁際の床面から土製勾玉が出土し、南側コーナー部の焼土中から軽石が2点出土している。

1はほぼ完形の壺である。底部には木葉痕を有する。口縁部には縄文を羽状に施す。頸部以下はヘラナデ調整され、胴部上半にはさらに網目状撚糸文が施される。口縁部から頸部にかけての内面はヘラミガキされ、胴部内面はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径10.4㎝、底径5.4㎝、器高12.3㎝を測る。2は脚台部を欠く台付甕で、⅕遺存する。外面はヘラナデされるが、胴部下半にはヘラケズリ痕が残る。内面はヘラナデ調整される。また、口縁部はヨコナデされる。胴部下半は二次的な火を受けている。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、黒褐色を呈する。口径14.4㎝を測る。3は底部を欠く甕で⅔遺存する。胴部上半に輪積みの接合部を段状に残す。胴部下半には粗いハケ目が残るが、二次的な火



第24図　10(010)号跡実測図(1/80)



第25図　10(010)号跡出土土器(1/3・1/4)

を受けているため遺存状態は悪い。内面は、口縁部～頸部はヘラミガキされ、胴部はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。口径14.4cmを測る。4は甕の口縁部の¼破片である。口唇部には棒状工具による押圧が加えられる。口縁部はヨコナデされ、頸部以下はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径19cmを測る。5は台付甕の脚台部での⅖残存する。外面にはハケ目調整が施され、内面はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。脚径10.6cmを測る。6は台付甕の脚台部で⅔遺存する。内外面共にヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。脚形10cmを測る。7はほぼ完形の高坏である。外面は入念にヘラナデ調整され、内面はナデが加えられる。口唇部はヨコナデされる。外面と坏部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径19.5cm、脚径11.2cm、器高15cmを測る。8は小形の鉢で⅔遺存する。口唇部には刻みがほどこされる。体部は内外面共にナデが加えられるが、内面にはさらにハケ目調整が施される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径8.2cm、底径3.1m、器高5.1cmを測る。9は台付甕の脚台部で¾遺存する。内外面共にヘラナデ調整される。胎土には細砂粒を含み、やや粗いが焼成は良く、淡褐色を呈する。脚径7.5cmを測る。10はほぼ完形のミニチュア土器である。内外面共に粗くヘラナデ調整されるが、内面には輪積み痕が残る。胎土には破粒を含み、やや粗いが焼成は良く、淡褐色を呈する。口径5.5cm、底径3.8cm、器高6.6cmを測る。11～13は壺の口縁部破片である。11は口縁部に細縄文が施され、下端に押圧が加えられる。12は口縁部に網目状撚糸文を施し、押圧が加えられた3本1組の棒状浮文を付ける。内外面共にヘラミガキされ、さらに竹管による刺突が加えられる。内外共に赤彩される。

(11)　11（012）号跡（第26・27図）

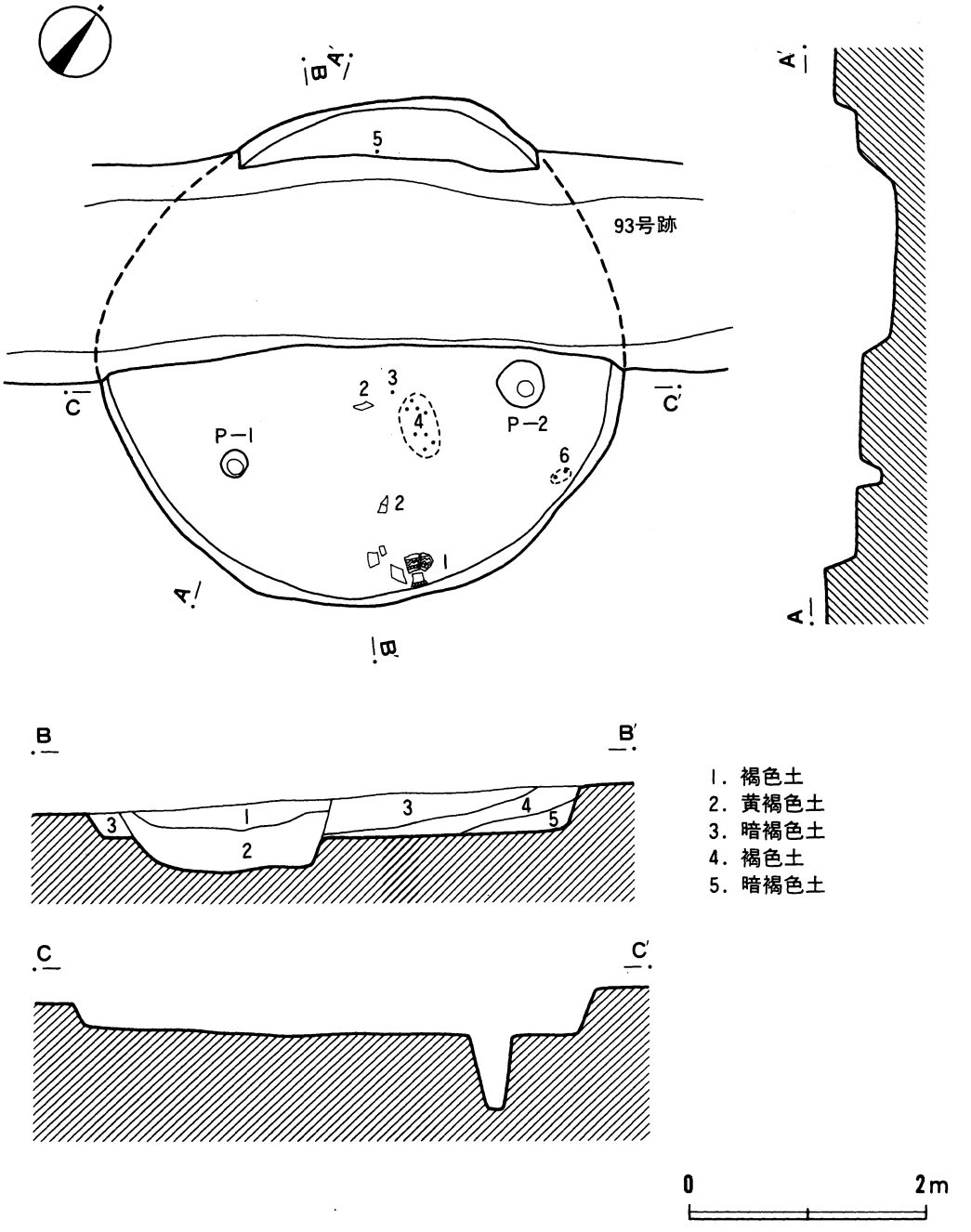
遺構（第26図）

10号跡の南面約10mのところに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっており、その所在が判明していた遺構である。

プランは、本住居跡の⅖ほどが93号跡に破壊されているため全形は不明であるが、径約4.0mの円形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は遺存している部分でも差があるが、0.2～0.4mを測る。床面はほぼ平坦であるが、極めて軟弱である。ピットは2本検出した。P－2は約0.6mの深さでしっかりしており、柱穴と考えられる。P－1は0.18mの深さしかなく、柱穴とするにはやや疑問が残る。炉跡は確認されず、93号跡との重複部分に存在したものと思われる。覆土は3層に分けられ、単純な堆積を示す。

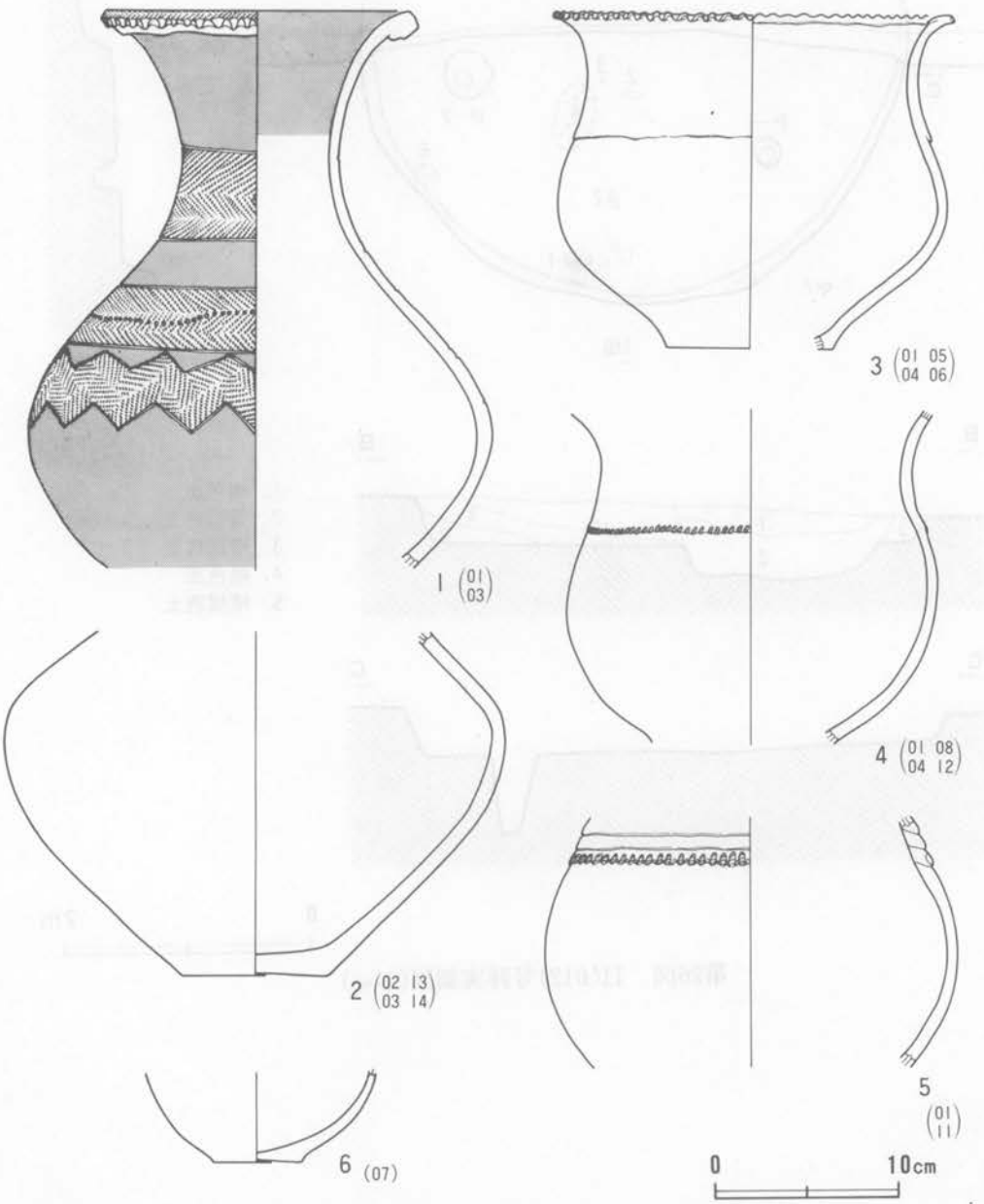
遺物（第27図）

出土遺物は、東側の床面上でまとまって出土した。1、2、3、4、6の5点である。5は1点だけ住居跡の西側の¼部分で出土し、93号跡出土の破片と接合した。



第26図　11(012)号跡実測図(1/60)

1は底部を欠く壺で、図示の範囲はほぼ完存する。口縁は複合口縁で外反し、羽状縄文を施文し、下端には指頭による押圧が加えられる。頸部には沈線で区画された羽状縄文帯がめぐる。胴部にも沈線で区画した羽状縄文帯がめぐり、その中に円形の刺突がめぐる。その下部には羽状縄文を沈線で区画した山形文が施される。施文部以外はナデ調整が加えられ、赤彩される。内面は、口縁部はナデ調整が加えられ、赤彩される。それ以下はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は赤褐色を呈する。口径26.4cmを測る。2は壺の胴部以下で⅔遺



第27図　11(012)号跡出土土器(1/4)

存する。内外面共にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。底径8.0cmを測る。3は⅔遺存する甕である。口縁は折り返し口縁となり、内面に折り返しの段が残る。口唇部には両側からの押圧が加えられる。頸部外面には輪積み痕が一段残り、ヘラナデ調整される。内面は入念にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径21.6cm、底径9.0cm、器高17.7cmを測る。4は口縁部と底部を欠く甕で¾遺存する。胴部上半には段を一段有し、その下端に棒状工具調整による押圧が加えられる。内外面共にヘラナデ調整される。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良く、褐色を呈する。最大径20cmを測る。5も口縁部と底部を欠く甕で⅓遺存する。頸部に3段の輪積み痕を残し、その下端に棒状工具による押圧が加えられる。内外面共にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、淡赤褐色を呈する。最大径22.4cmを測る。6は胴部中位以下遺存する甕である。内外面共にヘラナデされる。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良く、淡褐色を呈する。底径は4.8cmを測る。

(12)　12（013）号跡（第28・29図）

遺構（第28図）

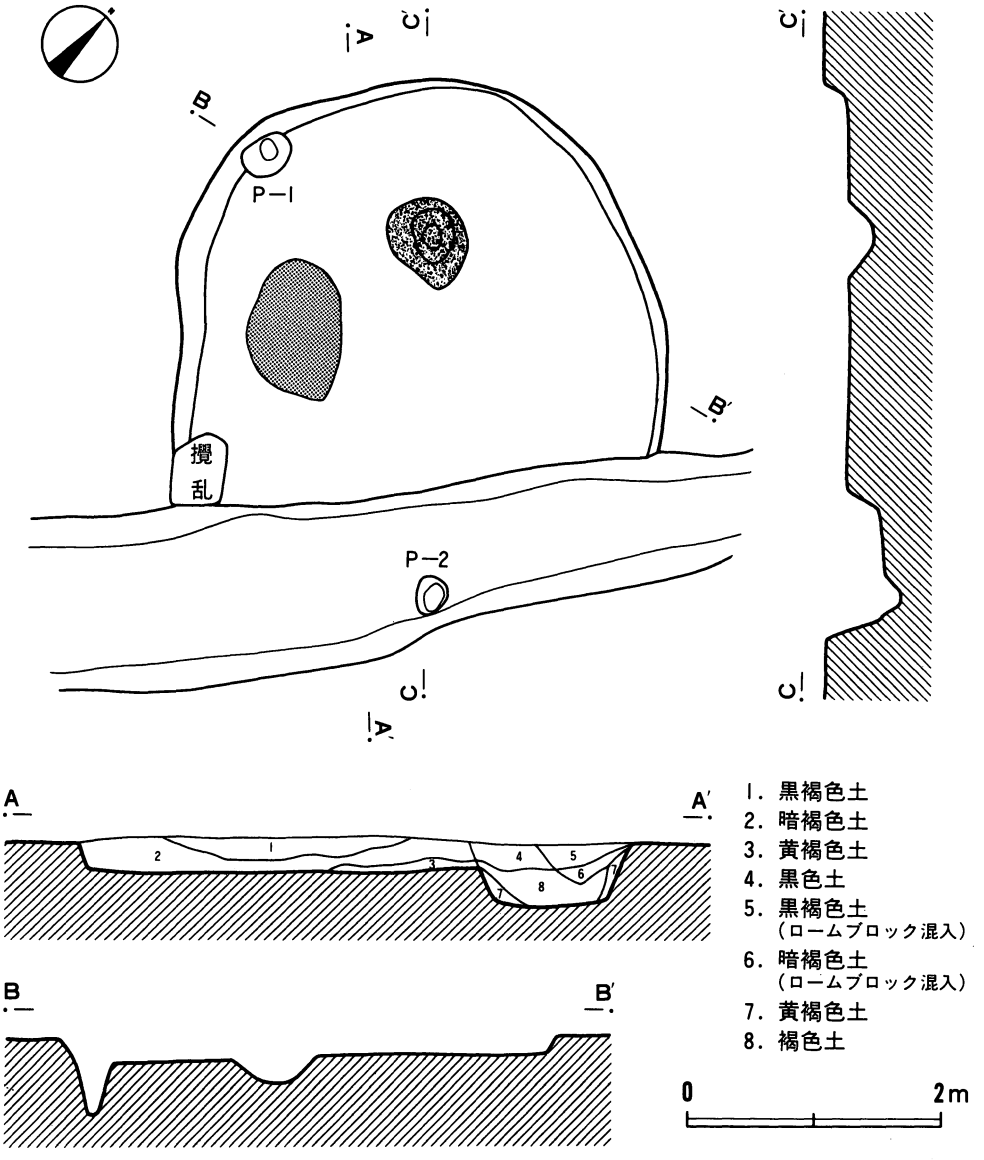
11号跡の南東約5mのところに存在する住居跡で、11号跡と同様に93号跡と重複する遺構である。本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは東側を93号跡に破壊されているため、全形は不明であるが、径約4.0m程の楕円形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は約0.2mを測る。床面はほぼ平坦で、炉跡の周囲を除いては軟弱である。ピットは住居跡に1本と、93号跡の周溝中に1本検出した。P－1は約0.4mの深さを測る。P－2は溝底からは0.15mであるが、床面からは0.45mを測る。いずれも柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸約1.7m、短軸約1.0mの不整形を呈する。掘込みは、約0.2mほどで硬質の焼土が全面にわたって堆積していた。底面はあまり焼けていなかった。覆土は3層に分けられた。なお、床面よりやや浮いた状態で焼土が検出された。

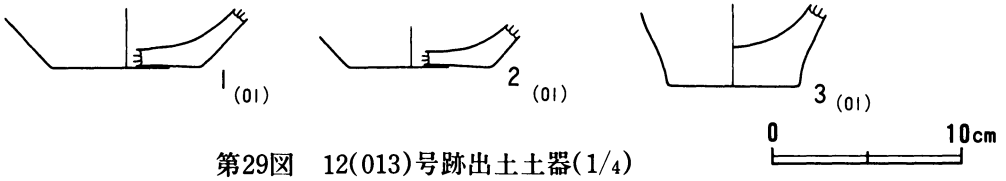
遺物（第29図）

出土遺物は極めて少なく、図示した3点の底部破片は、いずれも覆土中から出土したものである。この他に炉跡の東側の壁近くから10cmほど浮いて支脚形の土製品が出土している。

1は壺の底部で½破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪く、淡赤褐色を呈する。底径7.8cmを測る。2も壺の底部で⅔遺存する。内外面共にヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪く、淡赤褐色を呈する。底径6.8cmを測る。3は甕の底部で⅔が遺存する。内外面共にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径7.0cmを測る。



第28図　12(013)号跡実測図(1/60)



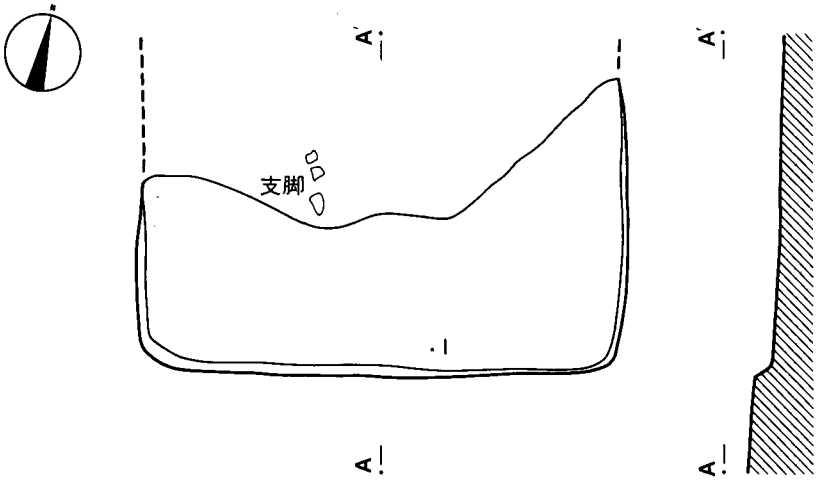
第29図　12(013)号跡出土土器(1/4)

(13)　13（014）号跡（第30・31図）

遺構（第30図）

1号跡の西約20mに位置する住居跡で、確認調査のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは北半分が斜面に堆積した黒色土中にあり、また、攪乱等が著しいため全形を窺うことはできないが、一辺が約4.0mほどの方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上り、壁高は約0.15mを測る。床面は平坦であるが、極めて軟弱である。柱穴、炉跡共に精査にもかかわらず、検出できなかった。覆土は黒褐色土の単一層である。

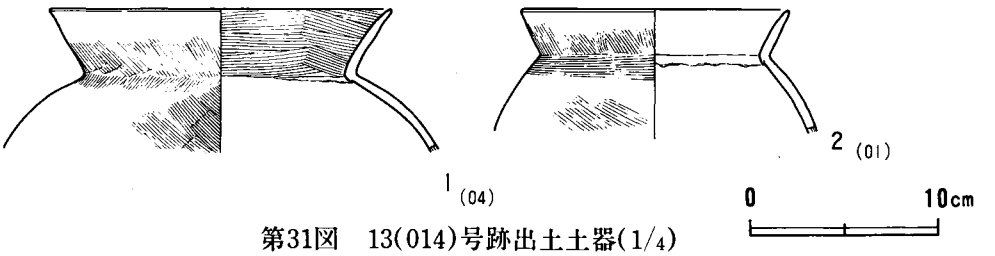


第30図　13(014)号跡実測図(1/60)

遺物（第31図）

出土遺物は極めて少ない。1は床面から10cmほど浮いて出土したもので、2は覆土内出土のものである。この他に土製支脚が3点出土している。住居跡外出土のものであるが、本住居跡に伴う可能性もあるので図示しておく。

1は甕の口縁部～胴部上半で、¾が遺存する。外面には細かいハケ目調整が残るが、部分的にナデによって消される。内面は、口縁部にハケ目調整が施され、胴部はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。口径17.8cmを測る。2も甕の口縁部から胴部上半の⅕破片である。外面にはハケ目調整が施されるが、部分的にナデによって消される。内面はヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。口径は14cmを測る。



第31図　13(014)号跡出土土器(1/4)

(14)　14（016）号跡（第32・33図）

遺構（第32図）

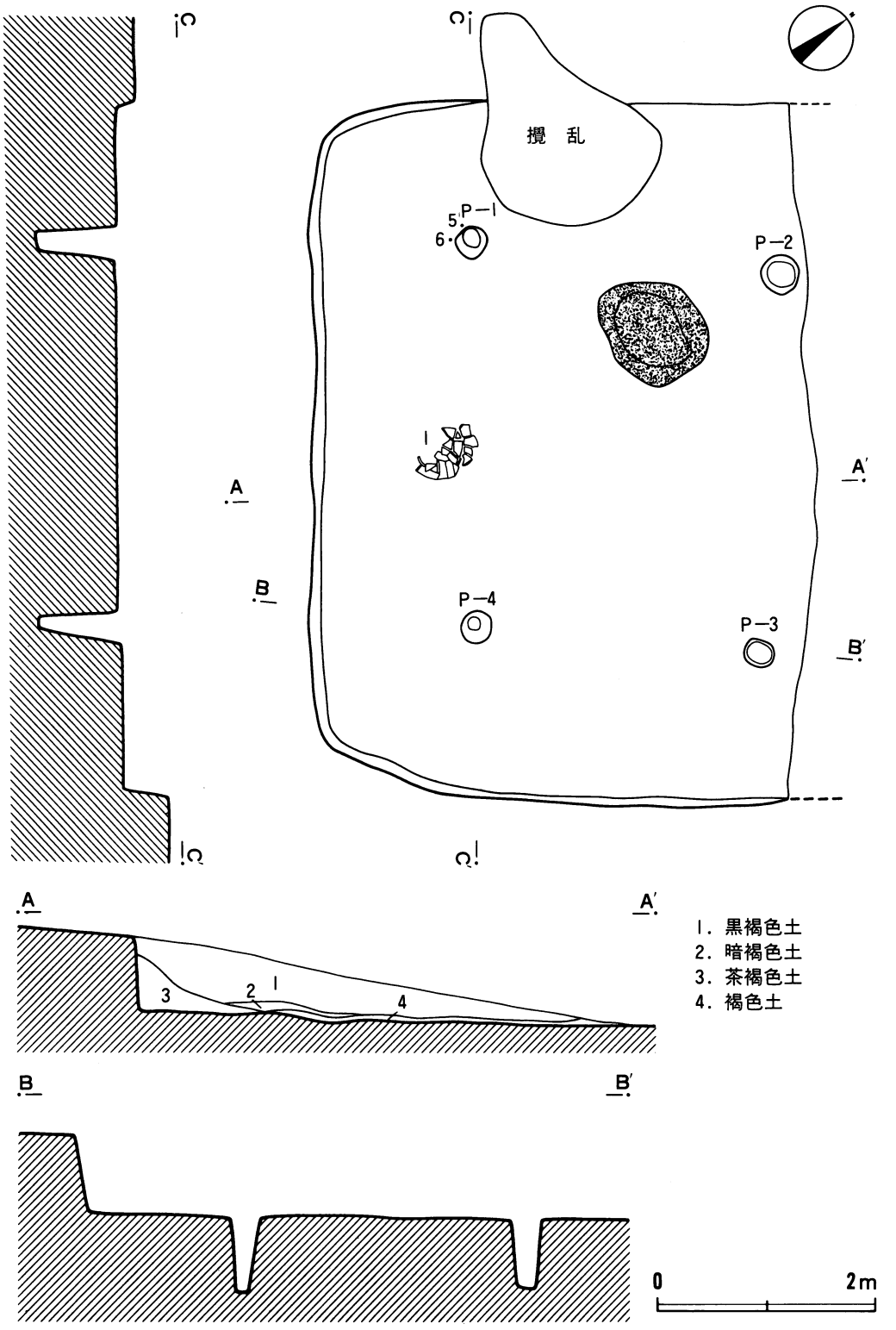
2号跡の西約8mに位置し、その大部分が確認調査のトレンチ間に存在するため、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは、北側が斜面にかかっているため全形を窺うことはできないが、およそ一辺が約6.0mの方形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.15～0.7mを測る。床面はやや凹凸に富むが、極めて堅緻である。ピットは4本検出した。いずれも0.7m前後の深さを持ち、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸約1.1m、短軸約0.8mの不整形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土が北側に寄って堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は4層に分けられた。

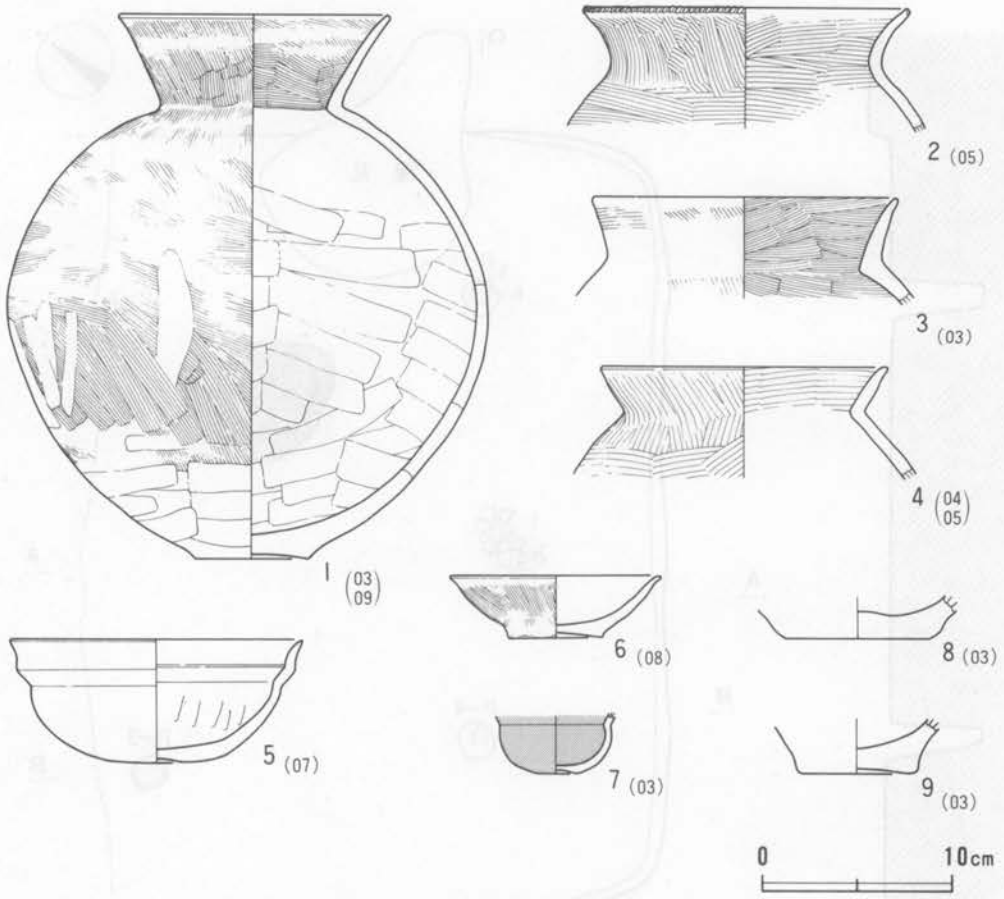
遺物（第33図）

出土遺物は、1の壺がまとまって出土した他は、P－1の周辺から5、6が出土した。いずれも床面より5.0mほど浮いている　2～4、7～9は覆土中から出土したものである。

1はほぼ完形の壺である。外面は、口縁部から胴部中位にかけてハケ目調整が施されるが、部分的にヘラナデによって消される。胴部中位はハケ目調整が施されるが、部分的にヘラケズリされる。胴部下半はヘラケズリされる。内面は、口縁部にはハケ目調整が施され、胴部はヘラケズリされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径14cm、底径5.8cm、器高28.2cmを測る。2は甕の口縁部で1/3破片である。内外面共にハケ目調整が施されるが、口唇部には刻みが認められる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径15cmを測る。3も甕の口縁部で1/4破片である。内外面共にハケ目調整が施されるが、外面はナデによって大半は消される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径14cmを測る。4も甕の口縁部で1/5破片である。外面と口縁部内面は粗いハケ目調整が施され、胴部内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径15cmを測る。5は1/6遺存する坏である。内外面共に口縁部はヨコナデされ体部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.2cm、底径2.4cm、器高6.3cmを測る。6は5/6遺存する坏である。外面には細かいハケ目調整が残り、内面は、入念にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径11.1cm、底径5.0cm、器高3.2



第32図　14(016)号跡実測図(1/60)



第33図　14(016)号跡出土土器(1/4)

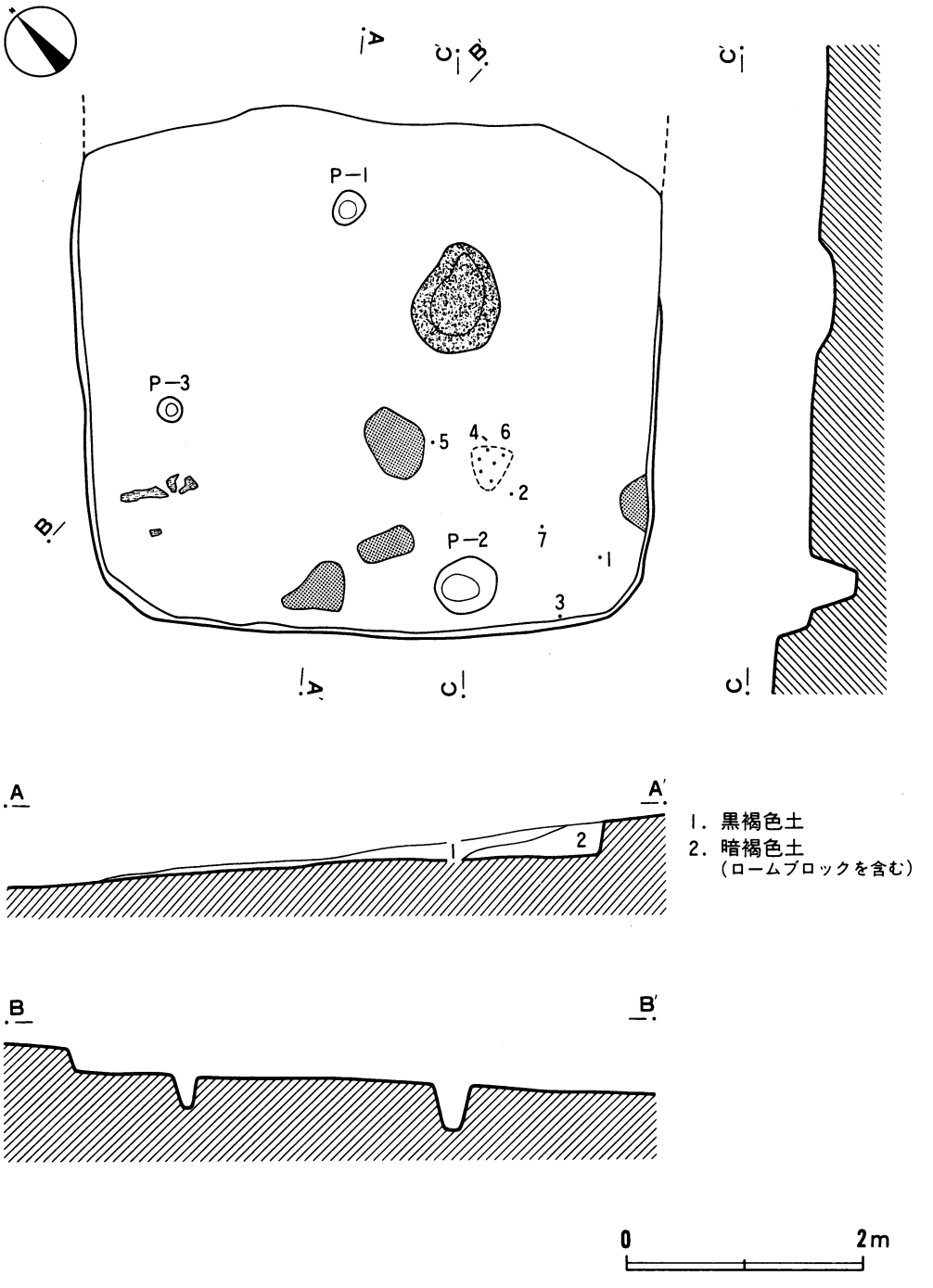
cmを測る。7は小型丸底土器の体部で、⅔が遺存する。外面と口縁部内面はヘラミガキされ、体部内面はナデが加えられる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。底径2.1cmを測る。8は底部で、外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径7.5cmを測る。9も底部で、内外面共にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径6.0cmを測る。

(15)　15（017）号跡（第34・35図）

遺構（第34図）

14号跡の南約7mの斜面に位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ内にあるが、斜面にあるためか、所在が確認されていなかった遺構である。

プランは、北側を斜面により失っているため、全形を窺うことはできないが、およそ一辺が4.8mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、約0.25mを測る。床面はほぼ平坦であるが、炉跡の周囲を除いては軟質である。ピットは3本検出した。P－2は0.38mの深さを持ち、位置、規模などからして貯蔵穴と思われる。P－1は0.36m、P－3



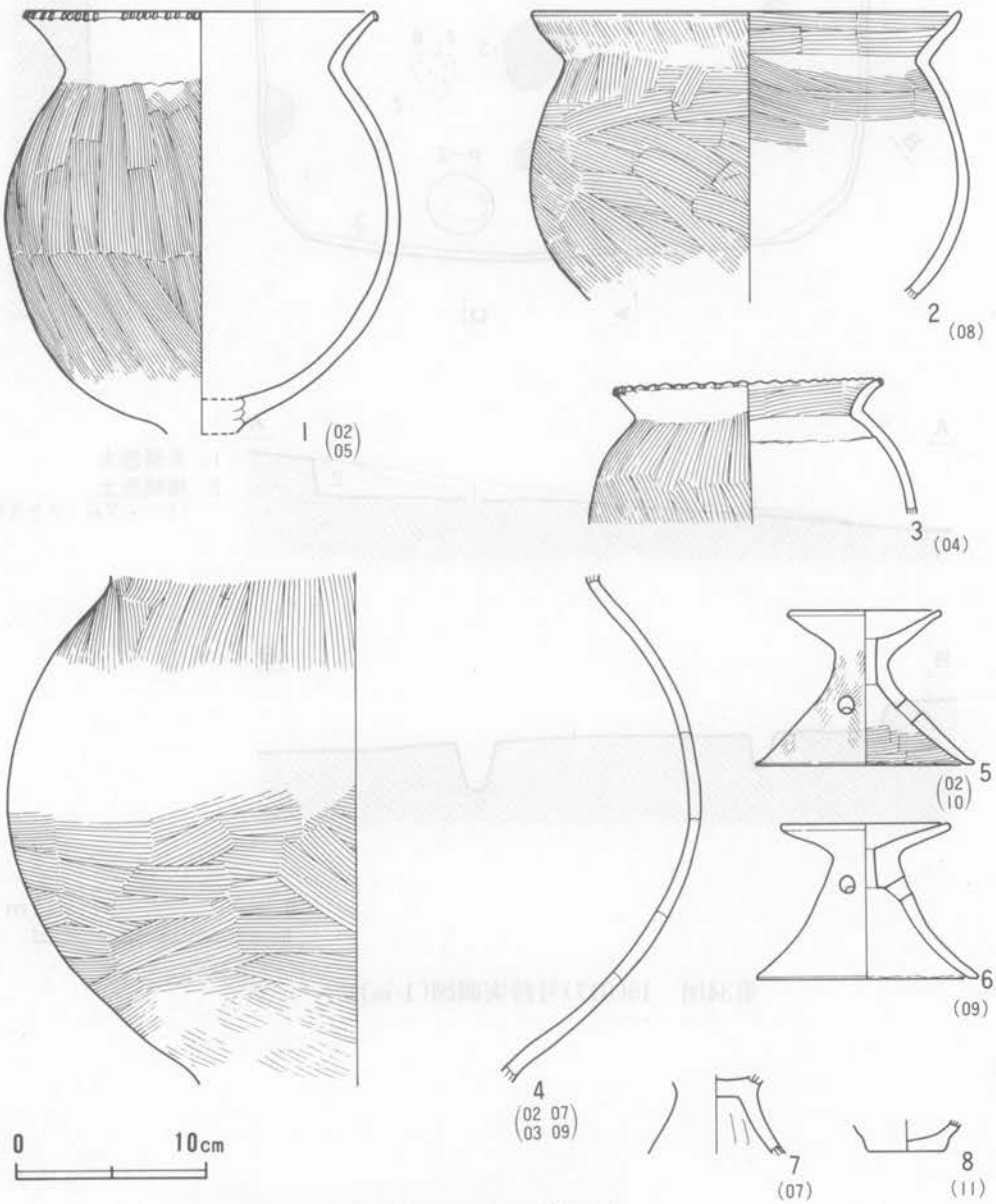
第34図　15(017)号跡実測図(1/60)

は0.28mの深さで、位置、規模に疑問があるが、一応柱穴としておく。炉跡は住居跡の中央やや東寄りに検出した。長軸0.9m、短軸0.7mの不整形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土がほぼ全体に堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は2層に分けられた。なお、本住居跡からは、床面よりやや浮いて、焼土と炭化材が検出された。

遺物（第35図）

出土遺物は1、2、5が床面直上から出土したもので、3、4、6は床面より3～10cmほど浮いて出土したものである。8は覆土内出土である。

1は底部を欠く甕である。口唇部にはヘラによる押圧が加えられる。頸部は内外面共にヨコ



第35図　15(017)号跡出土土器(1/4)

ナデされる。胴部外面にはハケ目調整が施されるが、下半はナデによって消される。胴部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径18cm、器高21.6cmを測る。2は胴部下半以下を欠く甕で½遺存する。外面と内面上半はハケ目調整が施される。また、下半はヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み密だが、焼成はやや悪く、赤褐色を呈する。口径23cmを測る。3は甕の口縁部～胴部上半の⅕破片である。口唇部には両側からの押圧が加えられる。胴部外面と口縁部内面にはハケ目調整が施される。胴部内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。口径14cmを測る。4は胴部のみ¾遺存する大形の甕である。外面はハケ目調整が施されるが、部分的にヘラナデされ、消される。内面はヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、黒褐色を呈する。最大径36.4cmを測る。5は⅔遺存する器台である。外面は入念なナデが施されるが、わずかにハケ目調整が残る。内面は脚裾部にハケ目調整が施されるが、その他はナデが加えられる。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。器受部径7.8cm、脚径11.4cm、器高7.9cmを測る。6は⅖遺存する器台である。器受部と脚部内面にはナデが施され、脚部外面はヘラミガキされる。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。器受部径8.8cm、脚径11.6cm、器高8.0cmを測る。7は台付甕の脚台部である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。最大径7.2cmを測る。8は底部で、外面はヘラナデ、内面はヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径は4.0cmを測る。

(16)　16（021）号跡（第36・37図）

遺構（第36図）

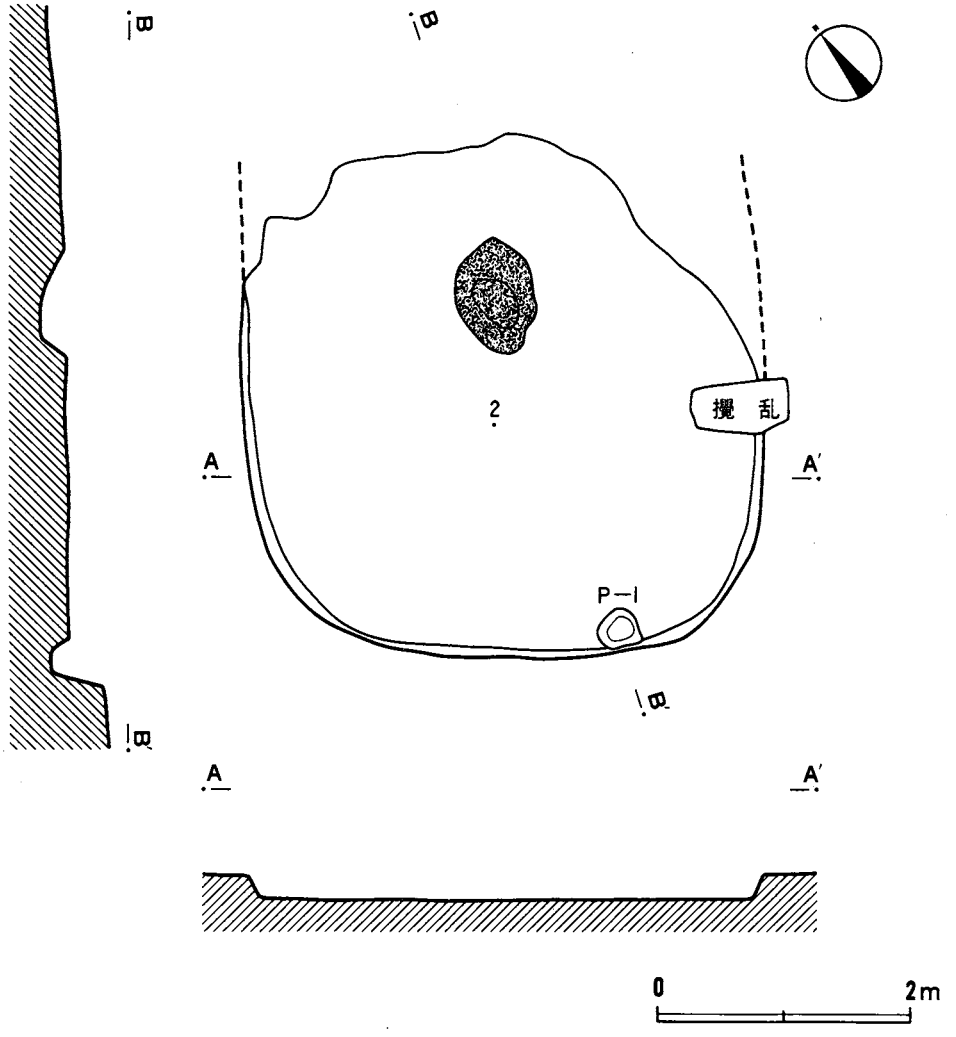
15号跡の南約6mの斜面に位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかる部分がわずかで、確認できなかった遺構である。

プランは、北側を斜面により失っているため、全形を窺うことはできないが、ほぼ一辺が4.0mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は約0.25mを測る。床面はほぼ平坦で、堅緻である。ピットは1本検出した。位置からすれば貯蔵穴とも考えられるが、規模がやや小さい。深さは0.15mを測る。炉跡は住居跡の中央やや東寄りに検出した。長軸0.9m、短軸0.6mの不整な楕円形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土が南側に寄って薄く堆積しており、底面はあまり焼けていなかった。覆土は黒褐色土の単一層である。

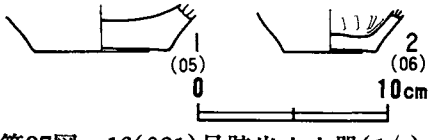
遺物（37図）

出土遺物は極めて少なく、2点の底部破片が図示できたにすぎない。1は覆土中より出土したもので、2は床面直上から出土したものである。

1は½遺存する底部破片で外面はヘラケズリの後ヘラナデ調整され、内面もヘラナデ調整される。胎土には砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪く赤褐色を呈する。底径7.0cmを測る。2は



第36図　16(021)号跡実測図(1/60)



第37図　16(021)号跡出土土器(1/4)

⅔遺存する底部破片で外面はヘラケズリの後ヘラナデ調整され、内面もヘラナデ調整される。

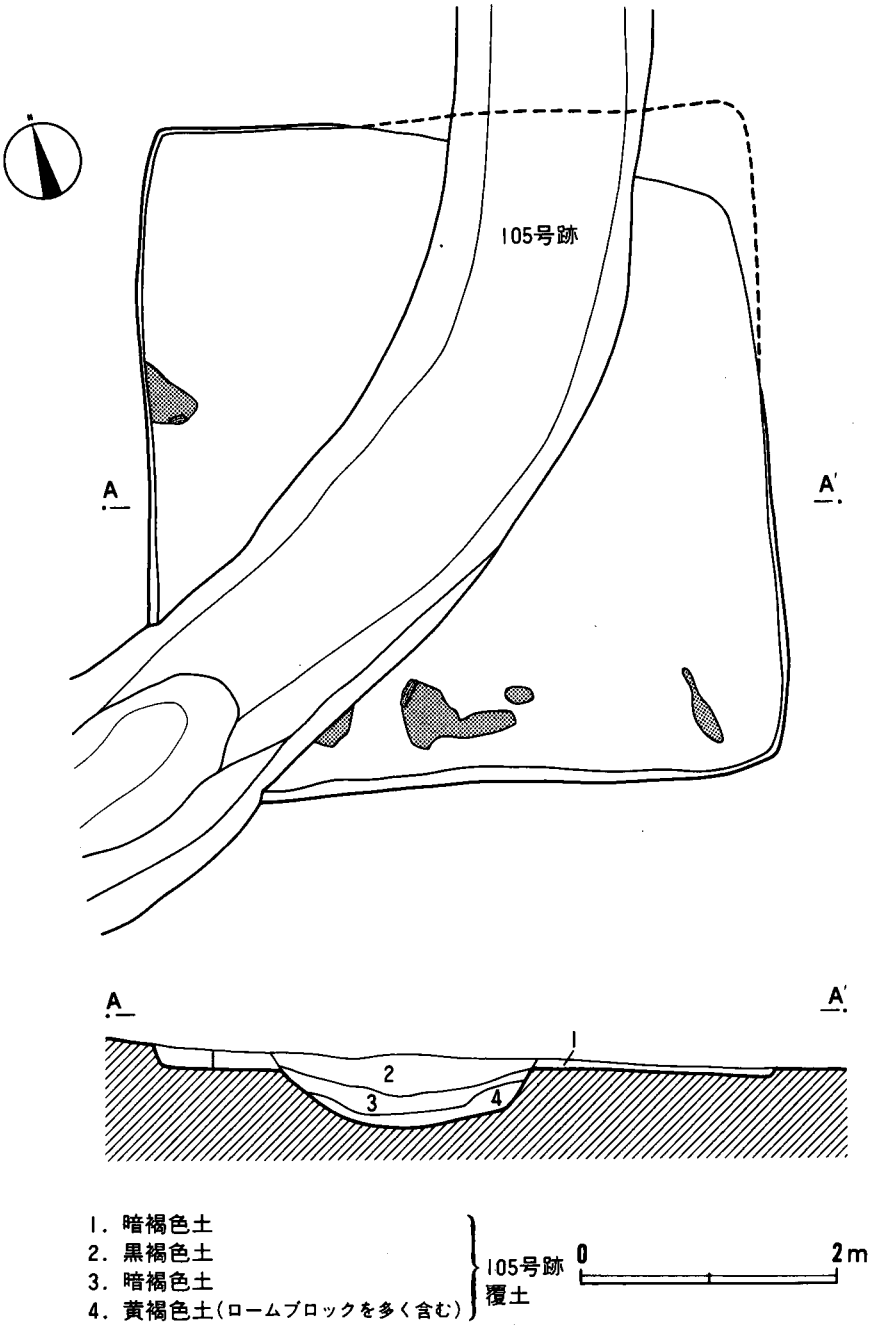
胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径4.8cmを測る。

(17)　17（025）号跡（第38・39図）

遺構（第38図）

16号跡の南西約6mに105号跡と重複して存在する住居跡である。確認調査時のトレンチ内に存在するが、105号跡と重複するため、確認ができなかった遺構である。

プランは北側が緩斜面にかかるため、壁と床面の一部が削平されており、全形を窺うことはできないが、一辺が約5.0mの方形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高

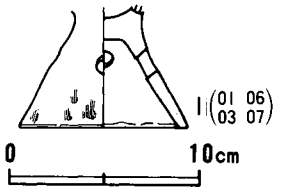


第38図　17(025)号跡実測図(1/60)

は、0.05～0.15mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡も検出されなかったが、105号跡との重複部分に存在したものと思われる。覆土は暗褐色土の単一層である。なお、床面からやや浮いて、焼土と若干の炭化材が検出された。

遺物（第39図）

出土遺物は極めて少ない。1は覆土中から出土した破片が接合して、脚部が復元できたものである。



第39図　17(025)号跡出土土器(1/4)

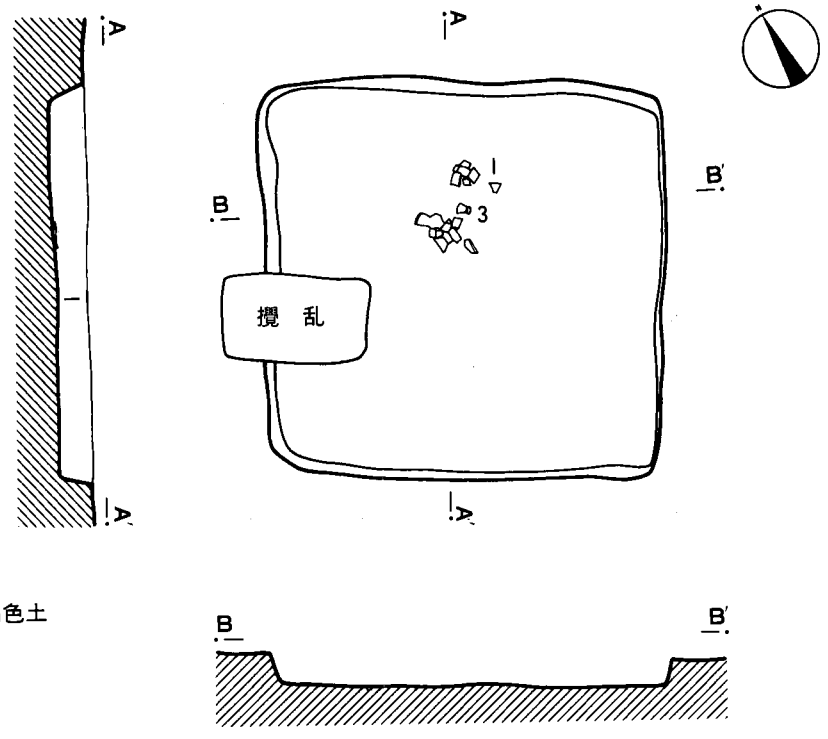
1は高坏の脚部で⅘遺存する。外面はヘラナデ調整されるがハケ目痕がわずかに残る。内面はナデが加えられる。脚孔は4孔所在する。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。脚径8.8cmを測る。

(18)　18（026）号跡（第40・41図）

遺構（第40図）

17号跡の北西約5mに位置する住居跡で確認調査のトレンチ間に存在し、本調査時になって検出した遺構である。

プランは一辺約3.0mの方形を呈する。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がる。壁高は0.2～0.25mを測る。床面はほぼ平坦であるが、極めて軟弱で、特に壁際が軟弱である。ピットおよび炉跡は検出されなかった。覆土は暗褐色土の単一層である。

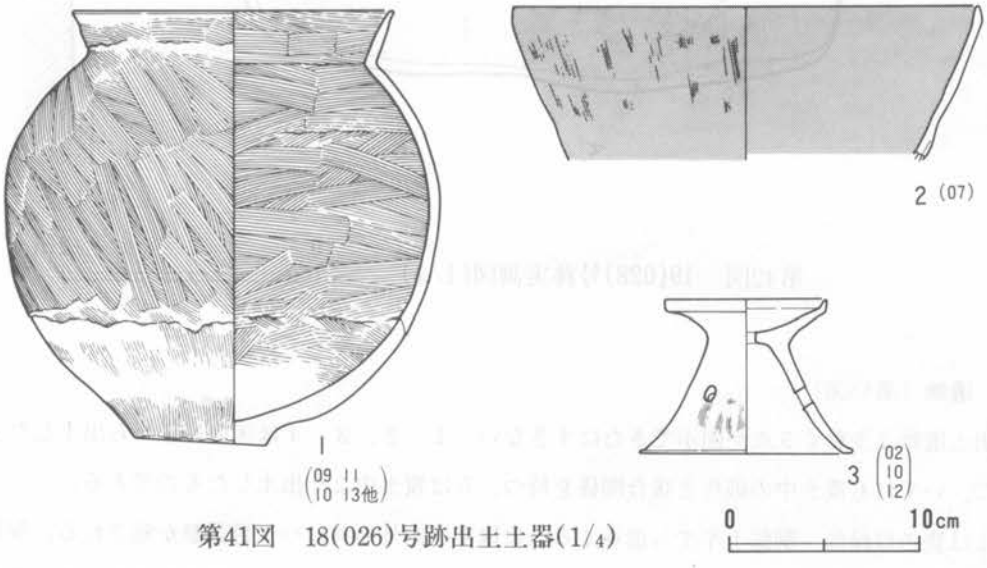


第40図　18(026)号跡実測図(1/60)

遺物（第41図）

出土遺物は少ないが、住居跡の中央やや北寄りでまとまって出土した。1と3は床面直上から出土したもので、いずれも覆土中の破片と接合した。2は覆土中から出土したものである。

1はほぼ完形の甕である。胴部下半に接合痕を明瞭に残し、それ以下は成形時に生じたと思われる歪みが認められる。内外面共にハケ目調整が施されるが、部分的にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径16.6cm、底径6.8cm、器高22.2cmを測る。2は壺の口縁部破片で、内外面共にナデが加えられ、赤彩されるが、外面はわずかにハケ目調整が残る。胎土、焼成共に良好で口径24.4cmを測る。3は⅔遺存する器台である。外面はヘラミガキされるが、わずかにハケ目調整痕が残る。内面はナデが加えられる。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。器受部径8.4cm、脚径11cm、器高7.9cmを測る。



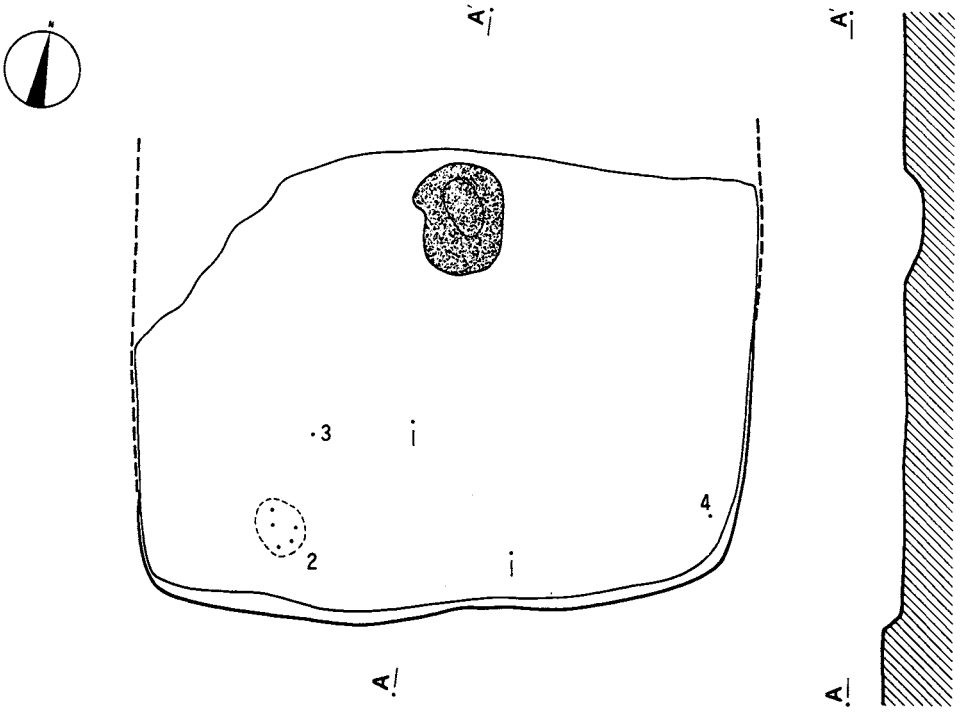
第41図　18(026)号跡出土土器(1/4)

(19)　19（028）号跡（第42・43図）

遺構（第42図）

18号跡の西約24mの斜面に位置する住居跡で、確認調査のトレンチ間に存在し、本調査時に確認された遺構である。

プランは北側が斜面によって削平されているため、全形を窺うことはできないが、ほぼ一辺が約4.8mのやや隅丸の方形を呈するものと思われる。壁は傾斜をもちながら立ち上がり、壁高は、0.2mを測る。床面はやや凹凸に富み、やや軟弱である。ピットは検出されなかった。炉跡は住居跡の北側に位置し、長軸0.9m、短軸0.7mの不整形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土がわずかに堆積しているだけで、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層である。

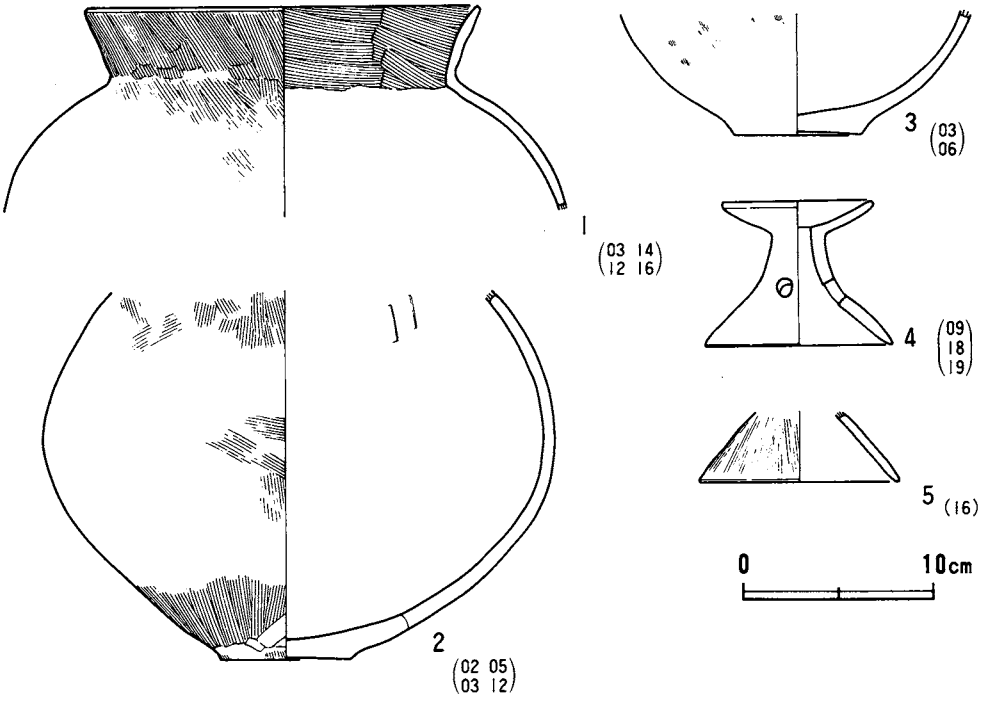


第42図　19(028)号跡実測図(1/60)　0　2m

遺物（第43図）

出土遺物は少なく５点が図示できたにすぎない。１、２、３、４は床面直上から出土したもので、いずれも覆土中の破片と接合関係を持つ。５は覆土中より出土したものである。

１は甕の口縁部～胴部上半で⅗遺存する。口縁部は内外面共にハケ目調整が施される。胴部外面にもハケ目調整が施されるが、ヘラナデによって大半は消される。胴部内面もヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径20.4cmを測る。２は甕の胴部以下で⅗遺存する。外面はハケ目調整が施されるが、大半はヘラナデによって消される。また、部分的にヘラケズリされる。内面はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径6.8cmを測る。３は壺の胴部中位以下で⅖遺存する。外面中位はハケ目調整を施した後ヘラナデされ、下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径6.6cmを測る。４は⅕遺存する器台である。内外面共にナデが加えられる。脚孔は３孔所在する。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。器受部径7.8cm、脚径9.8cm、器高7.5cmを測る。５は台付甕の脚台部の⅓破片である。外面はハケ目調整を施した後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。脚径は10.4cmを測る。



第43図　19(028)号跡出土土器(1/4)

(20)　20（029A）号跡（第44・45図）

遺構（第44図）

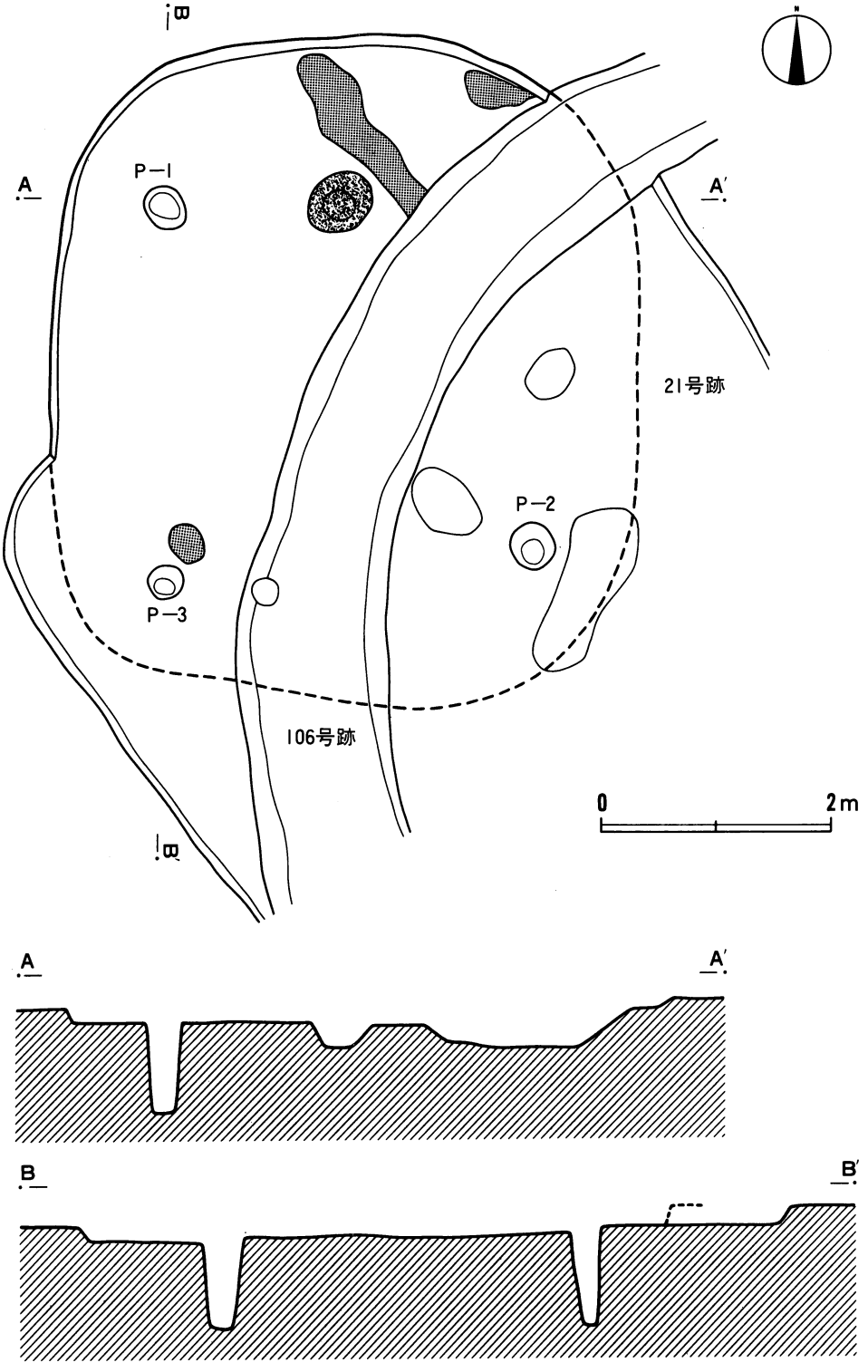
18号跡や19号跡と同様に、斜面に位置し、106号跡と重複する住居跡である。確認調査の段階では所在が推定できなかった遺構である。

南側が21号跡に重複し、さらに106号跡とも重複するため、全形を窺うことはできないが、ほぼ5.5×5.0mの隅丸のやや長方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、壁高は0.15mを測る。床面はほぼ平坦で、極めて堅緻である。ピットは3本検出した。0.2～0.3mの直径で、0.8mの深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.6m、短軸0.5mの楕円形を呈し、掘込みは0.25mほどで、焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。なお、床面からやや浮いて焼土が検出された。

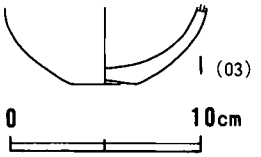
遺物（第45図）

出土遺物は極めて少なく、覆土中から出土した甕が図示できたにすぎない。

1は甕で⅔遺存する。内外面共にやや粗くヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径3.5cmを測る。



第44図　20(029A)号跡実測図(1/60)

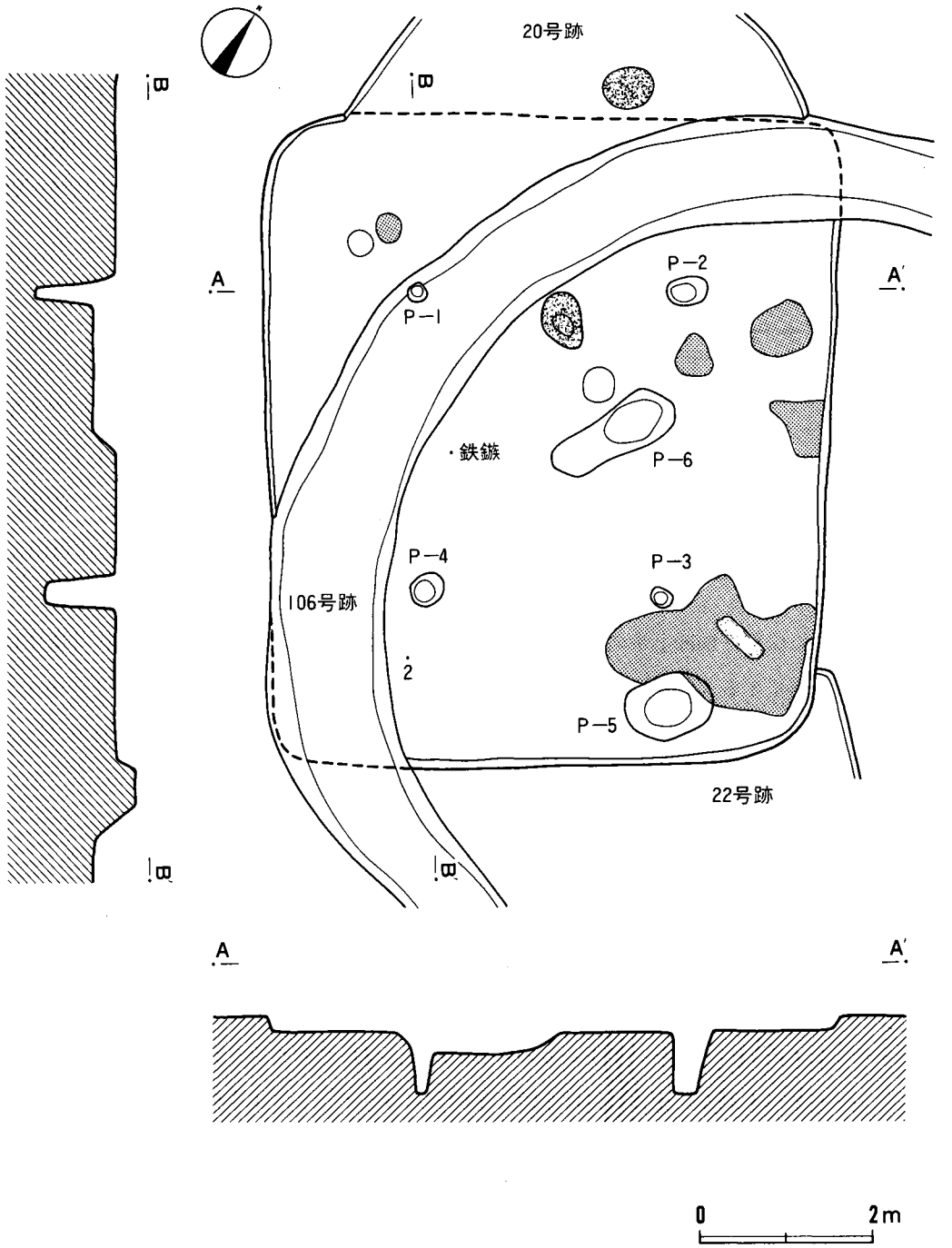


第45図　20(029A)号跡出土土器(1/4)

(21)　21（029B）号跡（第46・47図）

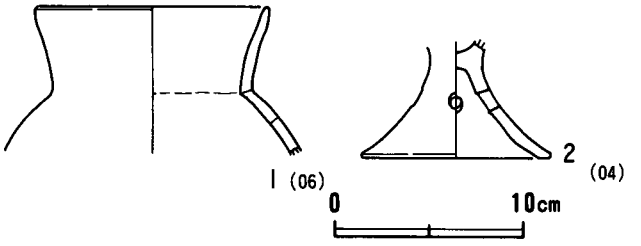
遺構（第46図）

確認調査の段階から所在が明らかになっていた住居跡である。



第46図　21(029B)号跡実測図(1/80)

北側壁が20・106号跡と重複し、南壁コーナー部が106号跡と重複しているため、全形を窺うことはできないが、約7.0×6.0mのやや隅丸の長方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、壁高は0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で、堅緻である。ピットは6本検出した。Ｐ－1～Ｐ－4は0.2～0.5ｍと直径は異なるが、深さは0.8ｍ前後で、位置からして柱穴と考えられる。Ｐ－5は貯蔵穴と考えられる。深さは0.45mを測る。Ｐ－6は不整形な掘込みで焼土が薄く堆積していた。炉跡とも考えられるが深さは0.1ｍほどでやや疑問が残る。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは、0.15mほどで、焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。なお、本住居跡の床面上からは多量の焼土と若干の炭化材が検出された。



第47図　21(029Ｂ)号跡出土土器(1/4)

遺物（第47図）

出土遺物は極めて少なく、2点の土器が図示できたにすぎない。1は覆土中、2は床面より8cm浮いて出土したものである。この他床面よりわずかに浮いて鉄鏃が出土している。

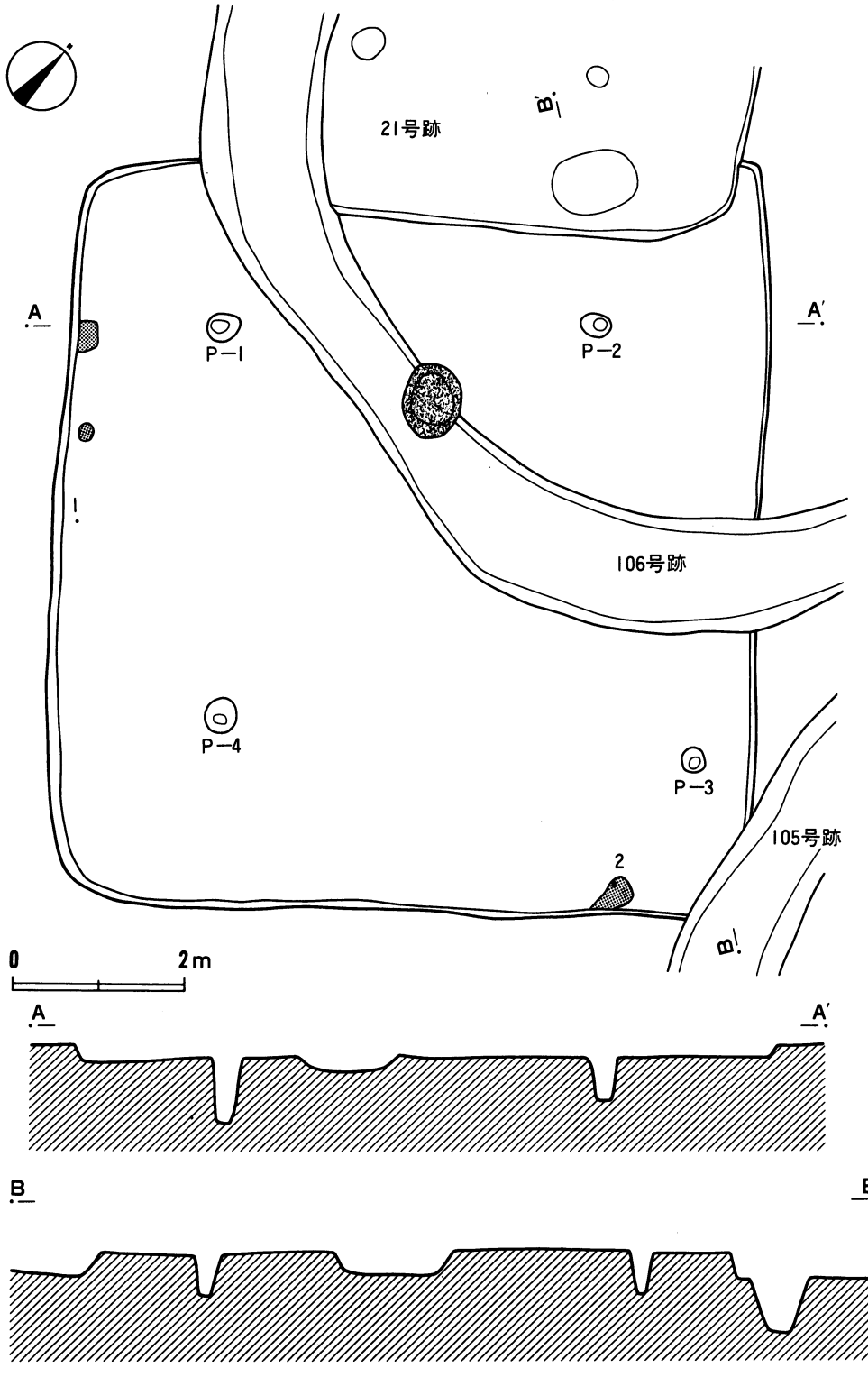
1は甕の口縁部～胴部上半の⅓破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径12cmを測る。2は高坏の脚部である。外面はヘラケズリの後ヘラミガキされ、内面は粗くナデが加えられる。脚孔は4孔所在する。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。脚径10cmを測る。

(22)　22（029Ｃ）号跡（第48・49図）

遺構（第48図）

確認調査の段階では、106号跡と重複していたためか、その所在が推定できなかった遺構である。

プランは、106・21・105号跡の3つの遺構と重複するため、全形を窺うことはできないが、約8.6×8.2ｍの隅丸の方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、壁高は0.1～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは4本検出した。いずれも0.4ｍ前後の直径で、0.5～0.8ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸0.8ｍ、短軸0.65mの長円形を呈する。掘込みは、0.1ｍほどで、焼土が中央部に薄く堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は、褐色土の単一層である。なお、床面上から若干の焼土が検出された。

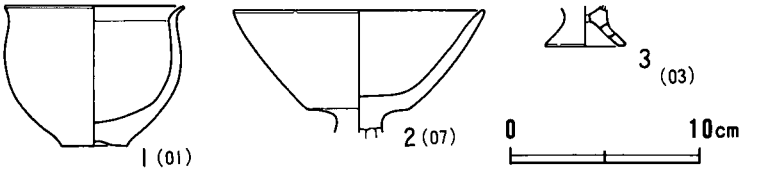


第48図　22(029C)号跡実測図(1/80)

遺物（第49図）

出土遺物は極めて少なく、３点の土器が図示できたにすぎない。１は床面直上から、２は床面から８cmほど浮いて出土したものである。３は覆土中からの出土である。

１はほぼ完形の甕である。内外面共にヘラナデされ、口唇部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径9.3cm、底径3.4cm、器高7.1cmを測る。２は高坏の坏部で⅔遺存する。内外面共にヘラミガキされる。胎土には砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪く褐色を呈する。口径13.2cmを測る。３はミニチュア土器で、器台形を呈する。脚部で⅘が遺存する。外面はヘラミガキされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径4.2cmを測る。



第49図　22(029C)号跡出土土器(1/4)

(23)　23（030）号跡（第50・51図）

遺構（第50図）

20・21号跡の北東約15mの緩斜面に位置する住居跡で、24号跡と重複する。確認調査時のトレンチにかかっていたが、斜面に位置するためか確認できなかった遺構である。

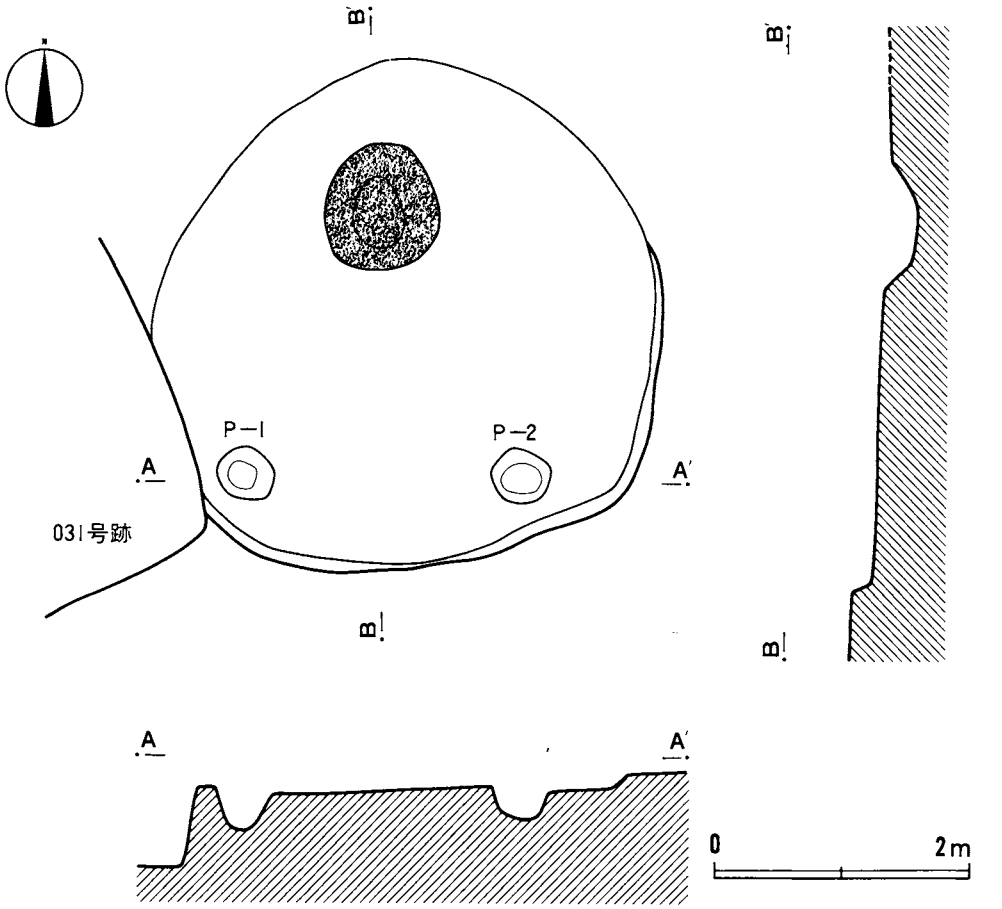
プランは、北側を斜面により失い、西側で24号跡と重複するため、全形を窺うことはできないが、遺存している壁からして一辺が4.0mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、壁高は0.15mを測る。床面はほぼ平坦であるが、軟弱である。ピットは２本検出した。Ｐ－１、Ｐ－２共直径0.5mで、深さは0.3mを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北寄りに検出した。長軸1.0m、短軸0.9mの不整楕円形を呈する。掘込みは、0.2mほどで、焼土が全面にわたって堆積していたが、底面はほとんど焼けていなかった。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物（第51図）

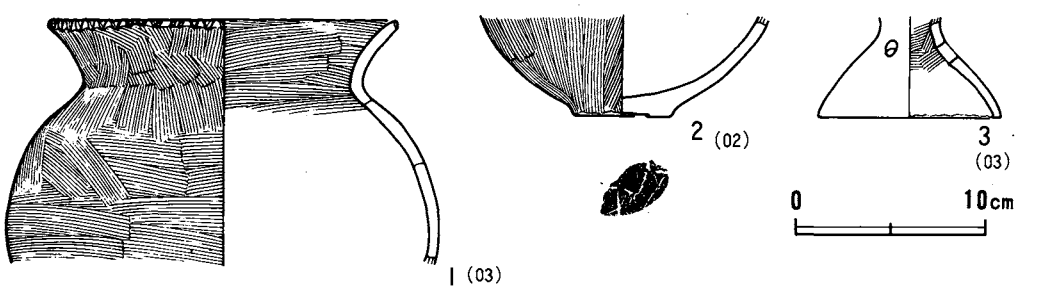
出土遺物は極めて少なく、３点の土器が図示できたにすぎない。３点共覆土中より出土したものであるが３は確認調査時のトレンチ内出土の破片と接合した。

１は口縁部から胴部中位が⅓遺存する甕である。口唇部は両側から押圧されるが、部分的に刻みとなる。外面と口縁部内面にはハケ目調整が施され、胴部内面にはナデが加えられるが、器面の遺存状態は悪い。胎土には砂粒を多く含み、粗く、焼成も悪い。淡褐色を呈し、口径18cmを測る。２は胴部下半～底部が⅓遺存する甕で、底部はやや上げ底気味になり、木葉痕を有

する。外面はハケ目調整が施され、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。黒褐色を呈し、底径5.0cmを測る。3は器台の脚部で⅓の破片である。外面はナデが加えられる。内面はヘラナデされるが、部分的にハケ目調整が施される。脚孔は3孔を有すると推測される。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。脚径は9.6cmを測る。



第50図　23(030)号跡実測図(1/60)



第51図　23(030)号跡出土土器(1/4)

（24）　24（031）号跡（第52・53図）

遺構（第52図）

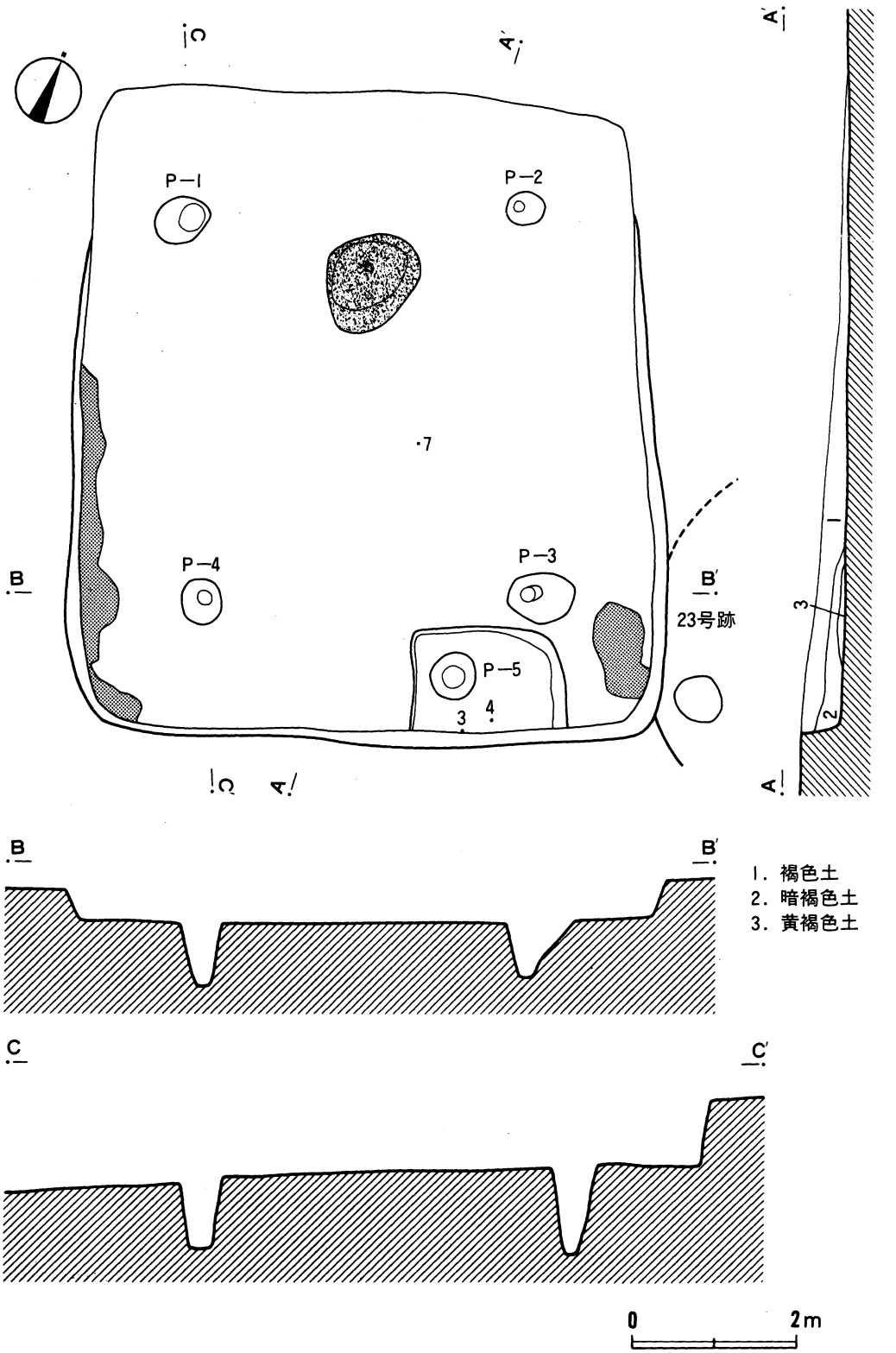
23号跡と重複する住居跡で、やはり確認調査時のトレンチ内に存在するが、斜面に位置するためかその所在が確認できなかった遺構である。23号跡との新旧関係は本跡が23号跡の床面を切っているため本跡の方が新しい。

プランは、北側の壁が斜面に位置するため失われているが、床面の遺存は良好なため、全形をとらえることができた。3.9×3.6ｍのやや隅丸の長方形を呈する。壁は前述のように北側部分が失われているが、遺存している部分ではやや傾斜を持って立ち上がる。壁高はやや差があり、0.4～0.8ｍを測る。床面は凹凸に富むが、極めて堅緻・良好である。ピットは5本検出した。P－1～P－4は、形態・直径に差があるが、いずれも0.7～0.8ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。南側の壁に接して1.8×1.2ｍの隅丸方形のプランで深さ0.1ｍほどのり、その中にP－5が検出された。深さは他のピットとほぼ同じである。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの不整円形を呈する。掘込みは、0.2ｍほどで、硬質の焼土がほぼ全面にわたって厚く堆積していた。底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。なお、壁際の床面上から焼土が検出された。

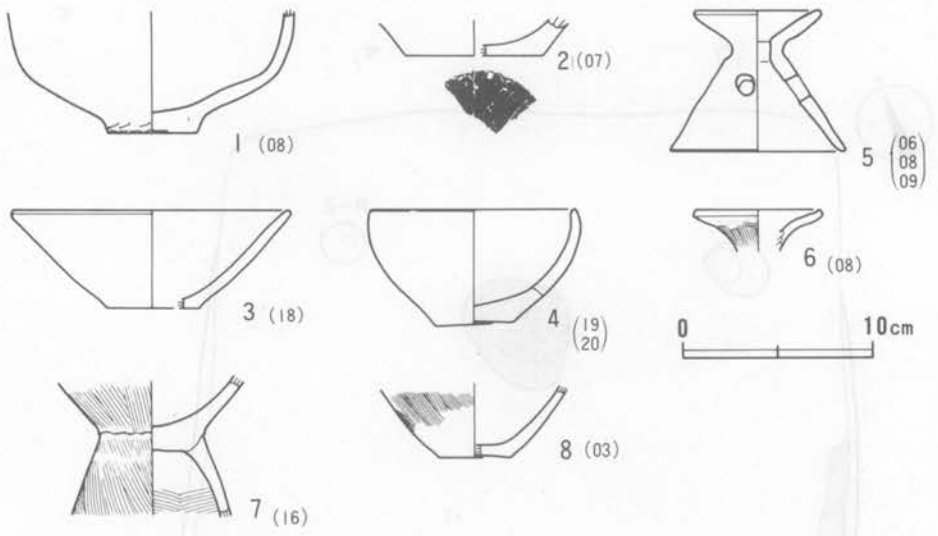
遺物（第53図）

出土遺物は少なく、住居跡中央から7が、住居跡南壁に接した掘込み内から3、4が出土した。図示したものは5.0～10cm床面より浮いて出土し、その他の破片は覆土中より出土した。

1はやや上げ底の底部を有する壺の½の破片である。器面は内外面共にヘラナデ調整される。底径4.6cmを測る。2は木葉痕を有する底部の¼破片である。底径7.2cmを測る。3は鉢で⅓ほど遺存する。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈し、内面はヘラミガキが施される。口径14.4cm、底径4.8cm、器高5.2cmを測る。4は輪積み成形された埦で、¾ほど遺存する。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈し、底部と体部下半はヘラケズリ痕を残しその他はヘラナデ調整される。口径10.8cm、底径4.2cm、器高6.1cmを測る。5は器台で⅔ほど遺存する。脚部には3孔を有する。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈し、内外面共にヘラミガキされる。脚部径9.1cm、器受部径6.6cm、器高7.4cmを測る。6はハケ目を有する薄手の器台で⅓ほど遺存する。口径6.4cmを測る。7は台付甕の接合部破片である。内外面共に粗いハケ目を施すが、器面は荒れている。焼成は悪く赤褐色を呈する。接合痕が明瞭に残る。8は甕の½の破片で器面に細かいハケ目を有する。底径3.8cmを測る。



第52図　24(031)号跡実測図(1/80)



第53図　24(031)号跡出土土器(1/4)

(25)　25（032A）号跡（第54・55図）

遺構（第54図）

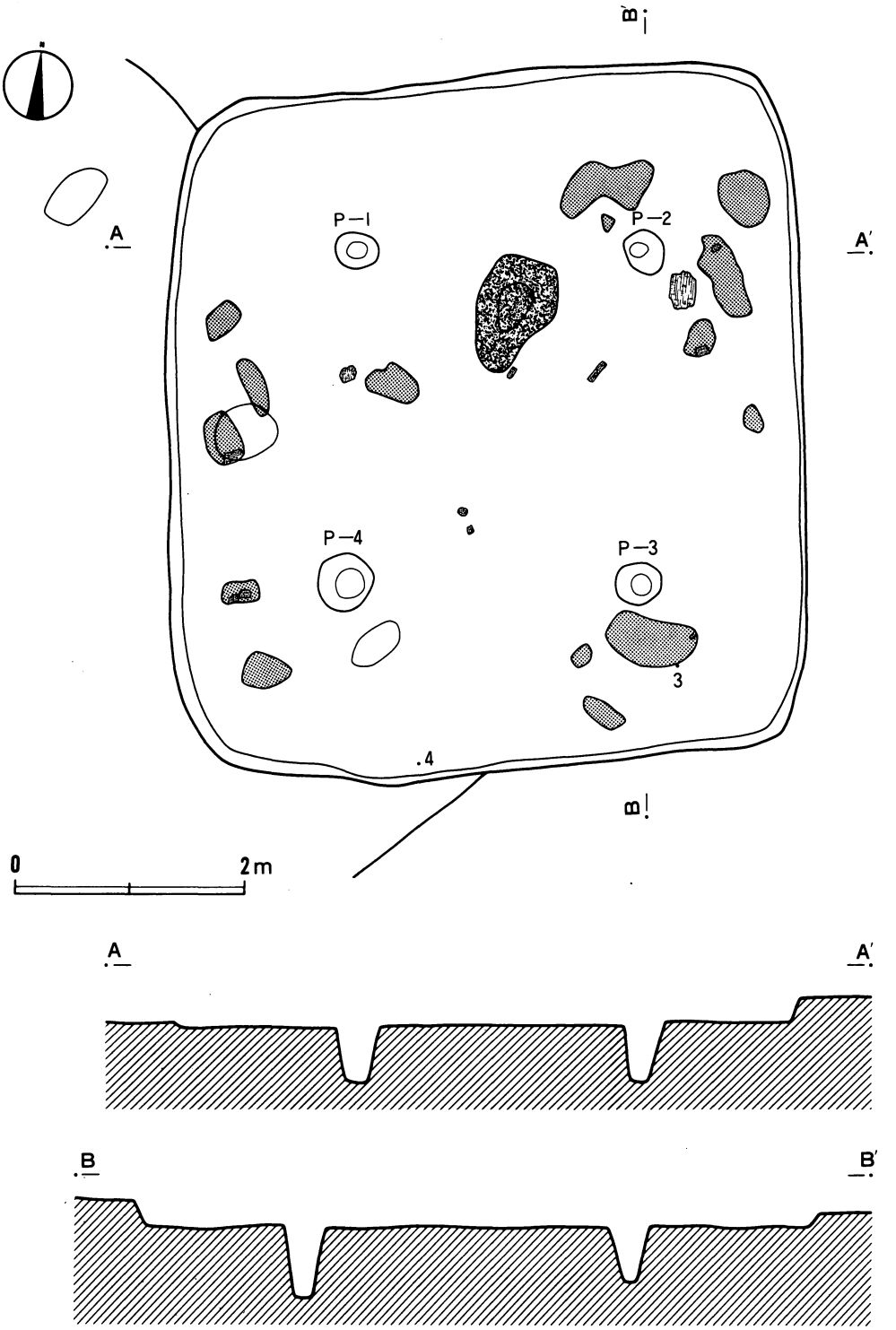
19号跡の南東約３ｍに位置し、確認調査のトレンチ内に存在し、その段階から所在、性格の判明していた遺構である。

プランは6.0×5.6ｍの隅丸のやや長方形を呈する。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は0.05～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻、良好である。ピットは４本検出した。いずれも0.4ｍ前後の深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍほどの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、硬質の焼土が、全面にわたって堆積していたが、底面はほとんど焼けていなかった。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の単一層であった。なお、床面上からは多量の焼土と若干の炭化材が検出された。

遺物（第55図）

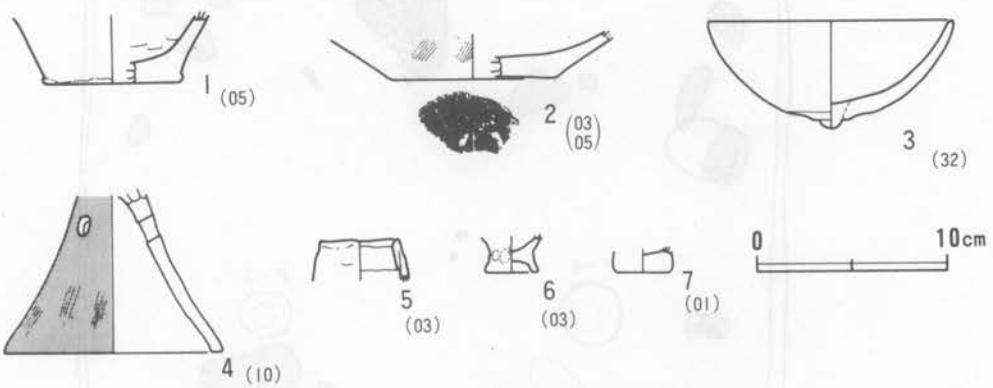
出土遺物は少なく、完形品もない。３はＰ－３の近くの焼土内の床面直上から、４が南壁際からやや浮いて出土した他は、いずれも覆土中より出土したものである。

１は½遺存する底部である。胎土が他の土器と著しく異なり、砂粒を多く含み、黒褐色を呈する。内外面共にヘラナデ調整される。底径7.0cmを測る。２は木葉痕を有する底部で⅓遺存する。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。外面はハケ目を施すが、部分的にヘラナデ調整される。底径8.6cmを測る。３は高坏の坏部である。脚部の接合部から分離したもので、坏部の製作状態もよく観察できる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。外面はヘラナデ、内面はタテ方向にヘラミガキされる。口唇部はヨコナデされる。口径12.8cmを測る。４は高坏の脚部で½遺存し、胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。外面はハケ目を施した後ヘラナデされ、さら



第54図　25(032A)号跡実測図(1/60)

に赤彩される。内面はヘラナデされ、脚裾部はヨコナデされる。脚部径11.4cmを測る。5は⅓遺存する手づくね土器で、折り返しによって口縁をつくる。黒褐色を呈し、胎土、焼成共に余りよくない。口径 4.0cmを測る。6も手づくね土器で½遺存する。高坏形を呈し、外面は指頭によって整形される。淡褐色を呈し、胎土、焼成共に良好である。脚径2.6 cmを測る。7はミニチュア土器で器形は不明である。内外面共にナデが加えられる。淡褐色を呈し、胎土、焼成共に良好である。底径2.8 cmを測る。



第55図　25(032A)号跡出土土器(1/4)

（26）　26（032B）　　（第56・57図）

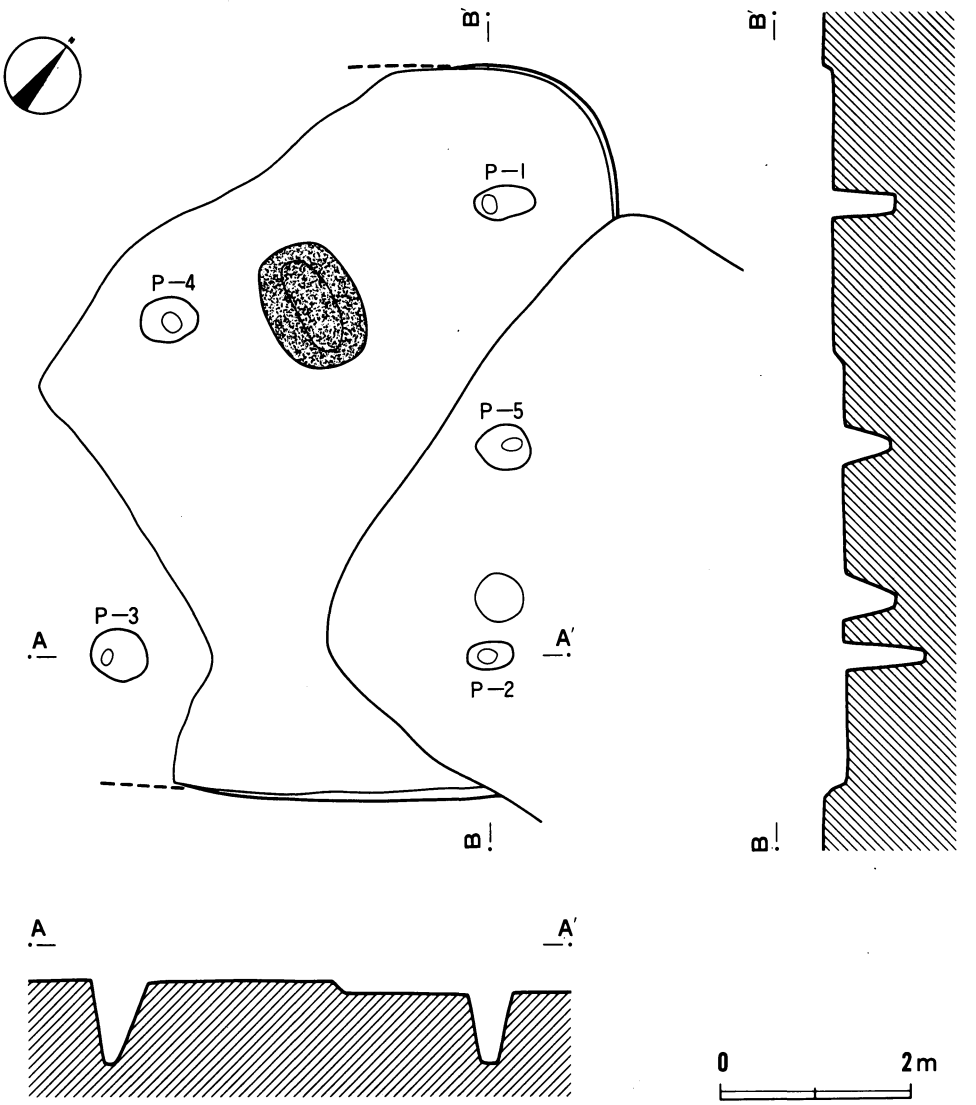
遺構（第56図）

25号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。25号跡との新旧関係は本跡の床面を25号跡が切っているため、25号跡の方が新しい。

プランは、東側で25号跡と重複し、西側が斜面に位置するため、全形をつかむことはできないが、遺存している部分から推定して、一辺が7.6 mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1～0.2 mを測る。床面は⅗ほどしか遺存していないが、検出できた面はほぼ平坦で堅緻で良好であった。ピットは5本検出した。いずれも0.7～0.8 mの深さを測る。本住居跡に確実に伴うと思われるのはP－1、P－2、P－3の3本である。炉跡は住居跡の中央やや西寄りに検出した。長軸1.4 m、短軸1.0mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.3 mほどで、硬質の焼土が中央部に厚く堆積していたが、底面はほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。

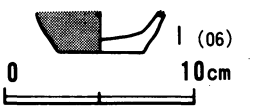
遺物（第57図）

出土遺物は極めて少なく、覆土中より出土した底部破片が図示できたのみである。この他にやはり覆土中から土製品が出土している。

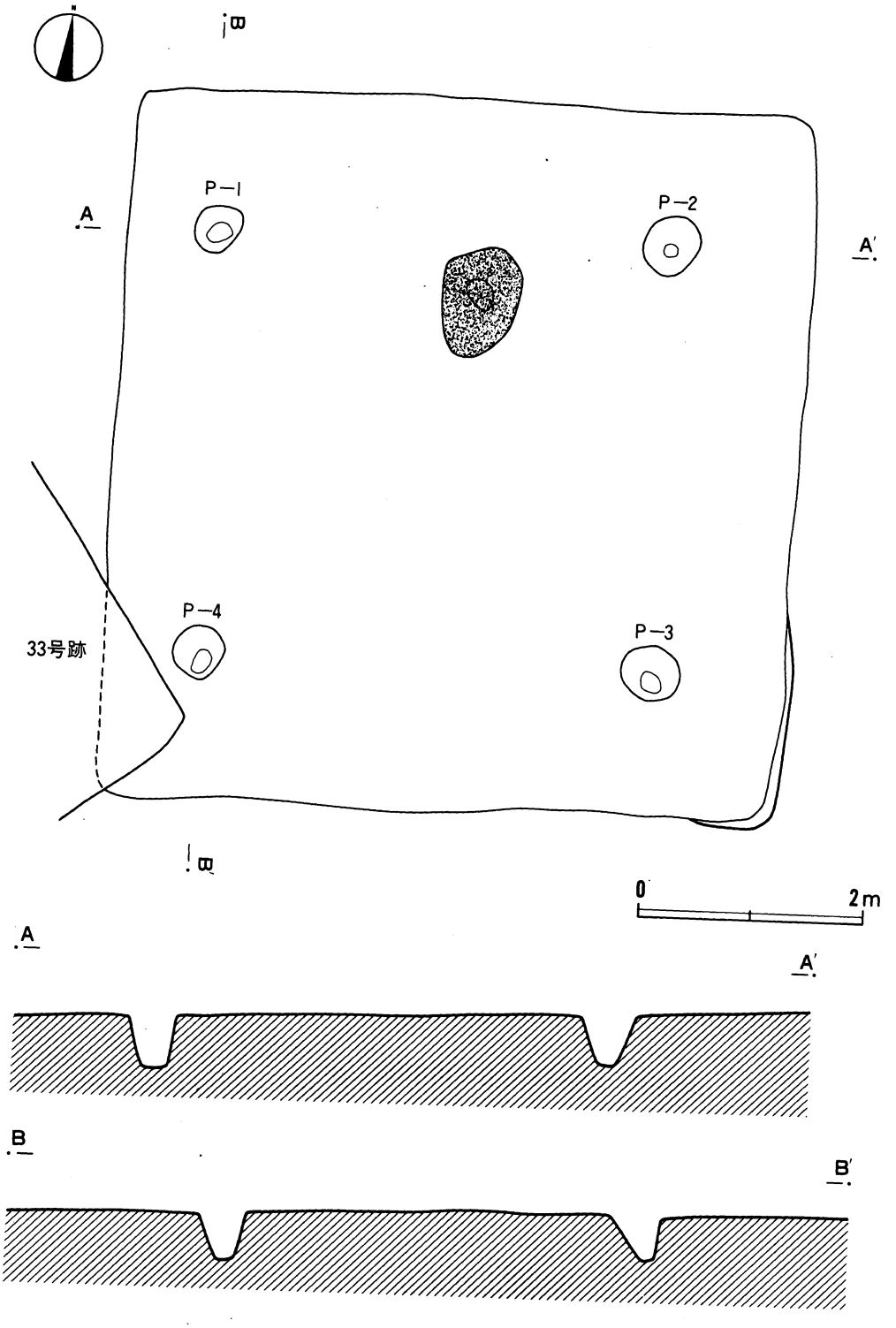


第56図　26(032B)号跡実測図(1/80)

1は⅔遺存する底部で、内外面共にヘラナデ調整され、外面はさらに赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径4.5cmを測る。



第57図　26(032B)号跡出土土器(1/4)



第58図　27(034)号跡実測図(1/60)

（27）　27（034）号跡（第58・59図）

遺構（第58図）

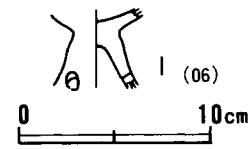
24号跡の南約６ｍに位置し、東側で33号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっているが、斜面に位置しており、覆土がほとんど遺存していなかったためか、その所在が確認できなかった遺構である。

プランは一辺が6.0mの方形を呈するものと思われる。壁はほとんど遺存していないが、わずかに遺存する南側コーナー部では、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1ｍを測る。床面は壁に比べて、良好なためほぼ完存している。北側へやや傾斜し、南側はやや軟弱である。ピットは４本検出した。いずれも0.4ｍ前後の深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.0m、短軸0.7ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは、0.15mほどで、中央部に堆積する焼土は薄いが、底面はよく焼けていた。

遺物（第59図）

出土遺物は極めて少なく、Ｐ－１内から出土した器台の破片が図示できたのみである。

１は器台の破片で脚部外面はヘラミガキ調整されその他はヘラナデ調整される。脚孔は３孔所在する。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。現高3.6cmを測る。



第59図　27(034)号跡出土土器(1/4)

（28）　28（036）号跡（第60図・61図）

遺構（第60図）

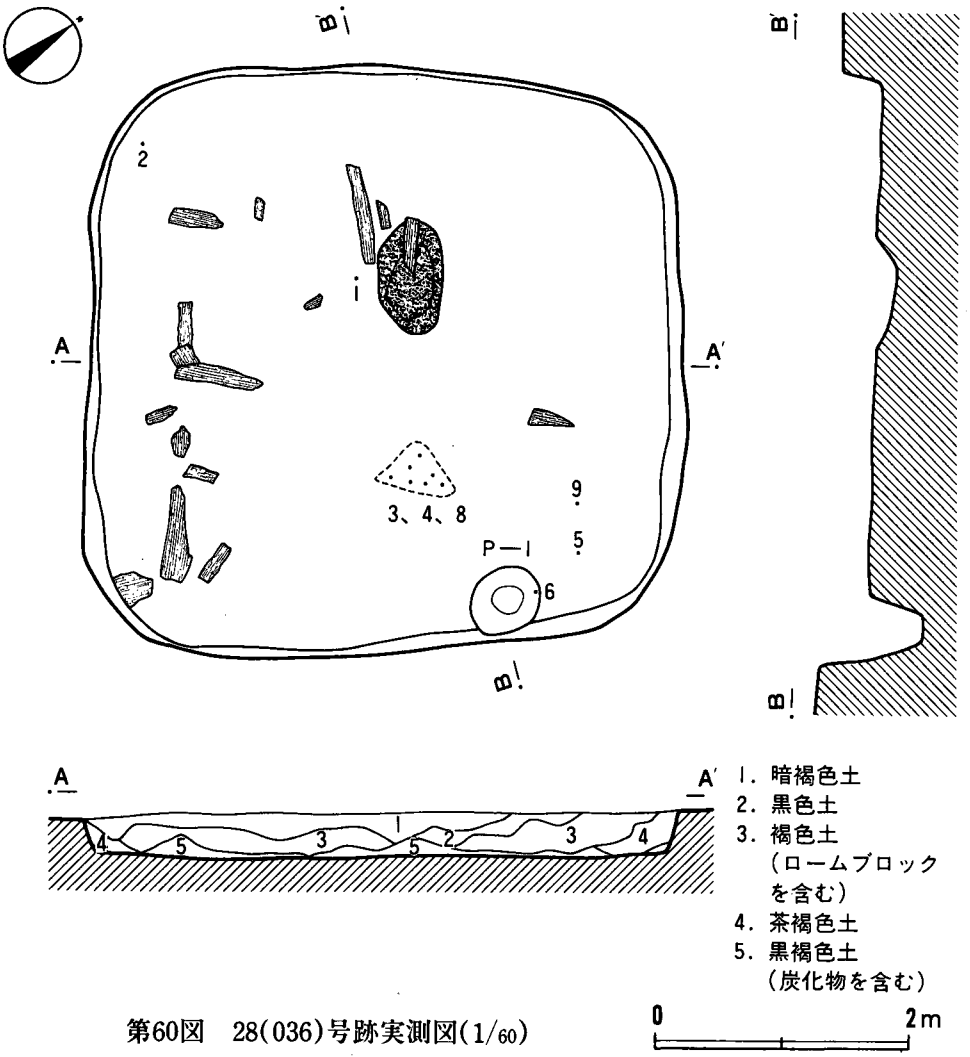
27号跡の南約４ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっており、その所在が明らかにされていた遺構である。

プランは一辺が約4.7ｍの隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.3ｍを測る。床面はほぼ平坦で、極めて堅緻である。ピットは東コーナー近くの壁に接して１本検出した。深さは0.4ｍで、位置からすれば貯蔵穴とも考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.9ｍ、短軸0.5ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは0.2ｍ程で、焼土が北側に寄って堆積しており、底面もよく焼けていた。覆土は５層に分けることができた。なお床面よりやや浮いて多量の炭化材が検出された。

遺物（第61図）

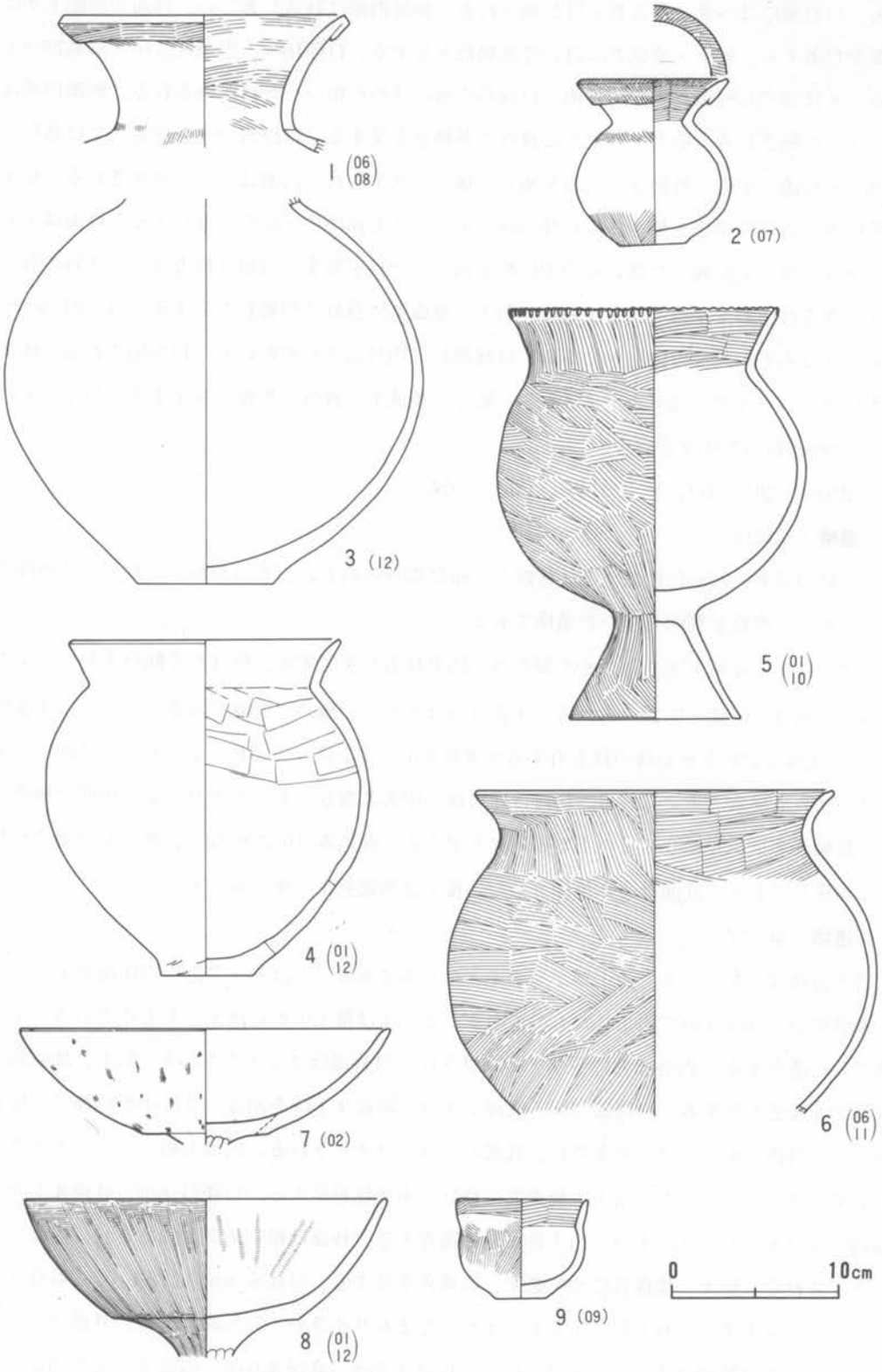
出土遺物は比較的多く、床面直上出土の土器も多い。１～５、８、９の７点は床面直上から出土したものである。６はＰ－１の上面から出土したものである。７は覆土中からの出土である。

１は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。輪積み成形され、折り返し口縁を有する。



第60図　28(036)号跡実測図(1/60)

内外面共に粗いハケ目を施す。胎土、焼成共にやや悪く、灰褐色を呈する。胎土、焼成、色調共に他の土器と著しく異なり、極めて異質な感じを受ける。口径16.7cmを測る。2は完形の壺である。口縁部と頸部外面に細縄文を施す。さらに胴部下半と口縁部内面はハケ目が施され、その他の部分はナデが加えられる。胎土・焼成共にやや悪く、灰褐色を呈する。他の土器とは全く異質であるが1とは類似している。口径8.6cm、底径4.0cm、器高9.9cmを測る。3は頸部より上位を欠く壺で¾遺存する。外面は入念なヘラナデ、内面はナデが施されているが、内面は器面の荒れが著しい。胎土・焼成共に良好で褐色を呈する。底径8.0cmを測る。4は輪積み成形された甕で¾遺存する。胴部上半内面はヘラナデされ、その他はナデが施される。胴部上半外面には煤が多量に付着する。また胴部下半内面は剥落が著しく遺存状態が極めて悪い。胎土・焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径15.8cm、底径5.5cm、器高19.7cmを測る。5は台付甕で¾程遺存する。外面と口縁部内面はやや粗いハケ目が施され、その他の部分はナデが加えら



第61図　28(036)号跡出土土器(1/4)

れる。口唇部にはヘラによる刻み目が施される。胴部内面は剝落が著しい。外面の胴部上半には煤が付着する。胎土・焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径16cm、脚径8.2cm、器高24cmを測る。6は甕で⅗程遺存する。外面と口縁部内面にはやや粗いハケ目が施される。胴部内面はヘラナデが施される。胎土・焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径21.2cmを測る。7は高坏の坏部で⅓程遺存する。外面はハケ目を施した後ヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。胎土・焼成共に良好で褐色を呈する。口径22cmを測る。8も高坏の坏部で½遺存する。外面は細かいハケ目を横方向に施した後、その上に縦方向にハケ目を施す。内面は横方向のハケ目の後ヘラミガキされ、わずかにハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径21.5cmを測る。9は小形の埦でほぼ完形である。口縁部には内外面共やや粗いハケ目が施される。体部外面は細かいハケ目の後ヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径7.8cm、底径3.0cm、器高5.9cmを測る。

(29)　29（037A）号跡（第62・63図）

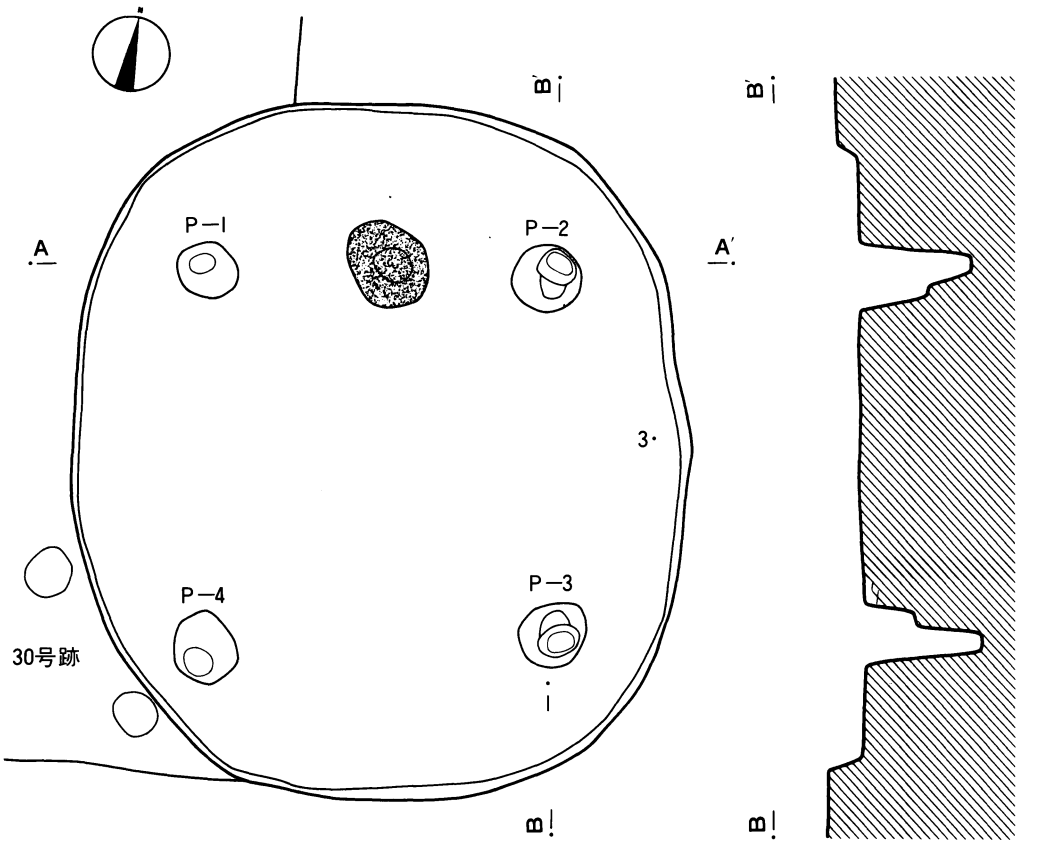
遺構（第62図）

22号跡の南東約10mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっており、その段階から、所在、性格が判明していた遺構である。

プランは、5.4m×4.9mのやや胴張りの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上り、壁高は、0.05～0.25mを測る。床面はほぼ平坦で、極めて堅緻である。ピットは4本検出した。4本共に0.5m前後の径を有するが東側のP－2、P－3はP－1、P－4に比べて深い。いずれも柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北寄りのP－1とP－2の中間に検出した。長軸0.7m、短軸0.6mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.25m程で、焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は黒褐色土の単一層であった。

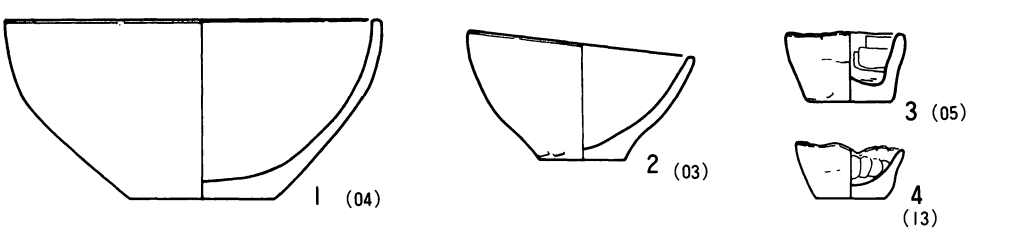
遺物（第63図）

出土遺物は少なく、4点の土器が図示できたのみである。1はP－3近くの床面直上から3は東壁側から3cm浮いて出土したものである。2と4は覆土中から出土したものである。1は鉢で⅔程遺存する。内外面共にヘラナデ調整され、口唇部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径20.4cm、底径7.4cm、器高9.1cmを測る。2は小形の鉢で¾程遺存する。外面は粗くヘラミガキされ、底部近くはヘラナデされる。内面も粗くヘラミガキされ、口唇部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径11.8cm、底径4.5cm、器高5.9cmを測る。3は手づくね土器で⅚程遺存する。外面は粗くナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共にやや悪く、淡褐色を呈する。口径6.0cm、底径4.4cm、器高3.5cmを測る。4も手づくね土器であるが3よりひとまわり小さい。完形品である。外面はナデによって、内面は指頭によって仕上げられる。口径5.6cm、底径3.6cm、器高2.5cmを測る。



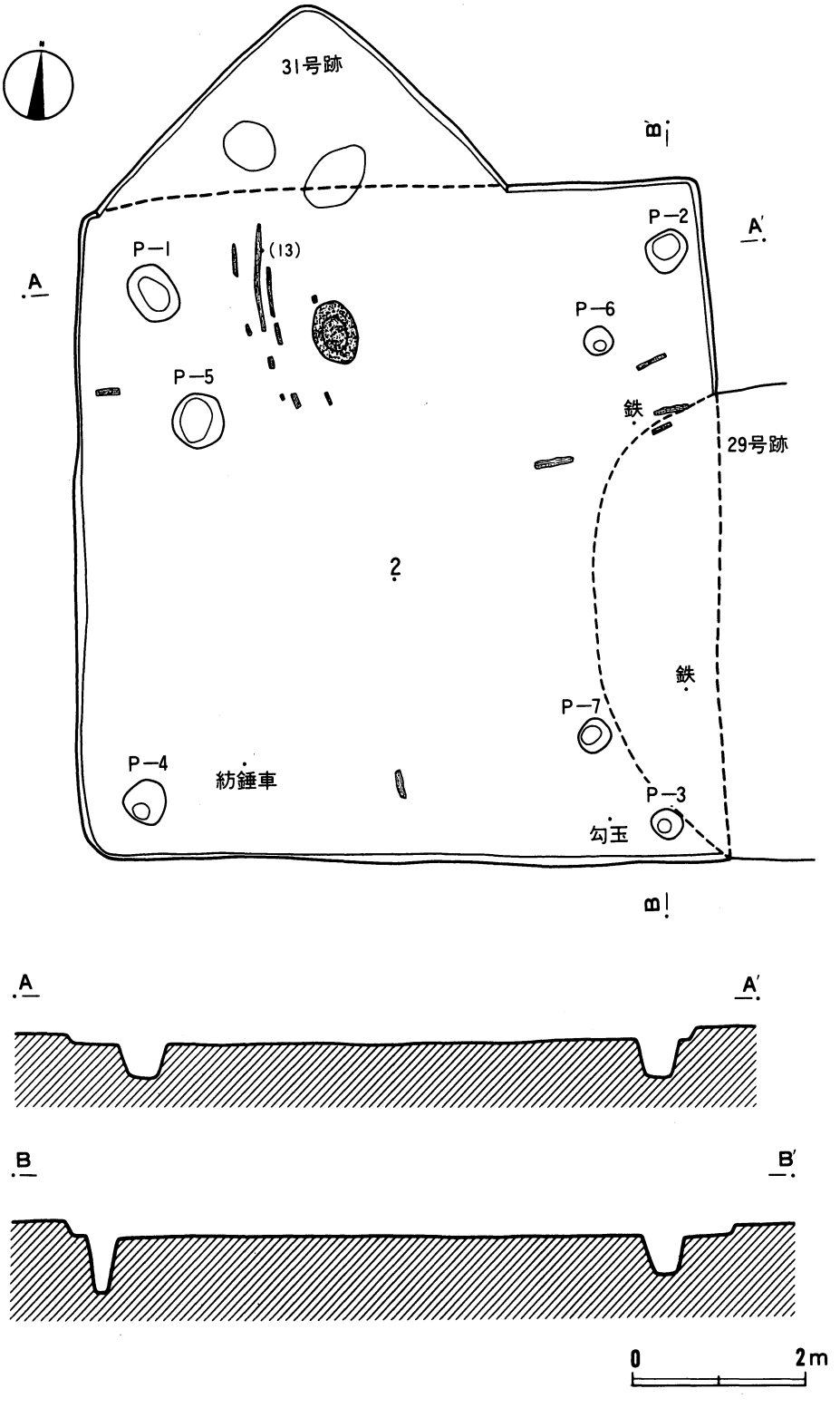
第62図　29(037A)号跡実測図(1/60)

0　2m



第63図　29(037A)号跡出土土器(1/4)

0　10cm



第64図　30(037Ｂ)号跡実測図(1/80)

（30）　30（037B）号跡（第64・65図）

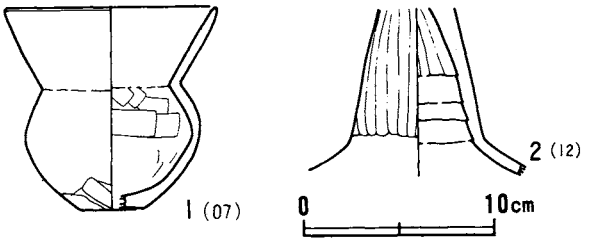
遺構（第64図）

29、31号跡と重複する住居跡で、北側コーナー部が、確認調査時のトレンチにかかっていたため、その所在が推定されていた遺構である。29号跡との新旧関係は29号跡上に貼床しているため本住居跡の方が新しい。

プランは一辺が7.6ｍの方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、29号跡の覆土に貼床した部分は軟弱である。ピットは7本検出した。規模・形態等に差があるが、Ｐ－１～Ｐ－４が主柱穴になるものと思われる。炉跡は住居跡の中央北寄りに検出した。長軸0.8ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.1ｍ程で、焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は褐色土の単一層であった。なお覆土中からは多量の炭化材と焼土が検出された。

遺物（第65図）

出土遺物は極めて少ないが、石製品及び鉄器の出土が目立つ。１は覆土中出土のもので２は住居跡のほぼ中央の床面直上から出土したものである。この他Ｐ－３近くの床面直上から勾玉が、Ｐ－４近くの床面直上から紡錘車が出土し、覆土中からも石製品が１点出土している。また鉄製品は29号跡との重複部に近いところの床面直上から１点、29号跡に貼床した部分から、床面からやや浮いて１点出土している。



第65図　30(037B)号跡出土土器(1/4)

１は坩で⅘程遺存する。口縁部外面はヘラナデされ、胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされており、わずかにヘラケズリ痕が認められる。内面は口縁部はナデ、胴部はヘラナデが認められる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径11cm、底径3.2cm、器高10.4cmを測る。２は高坏の脚部の破片である。外面はヘラケズリの後ナデられている。内面には輪積み痕を残す。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。

（31）　31（037C）号跡（第66図）

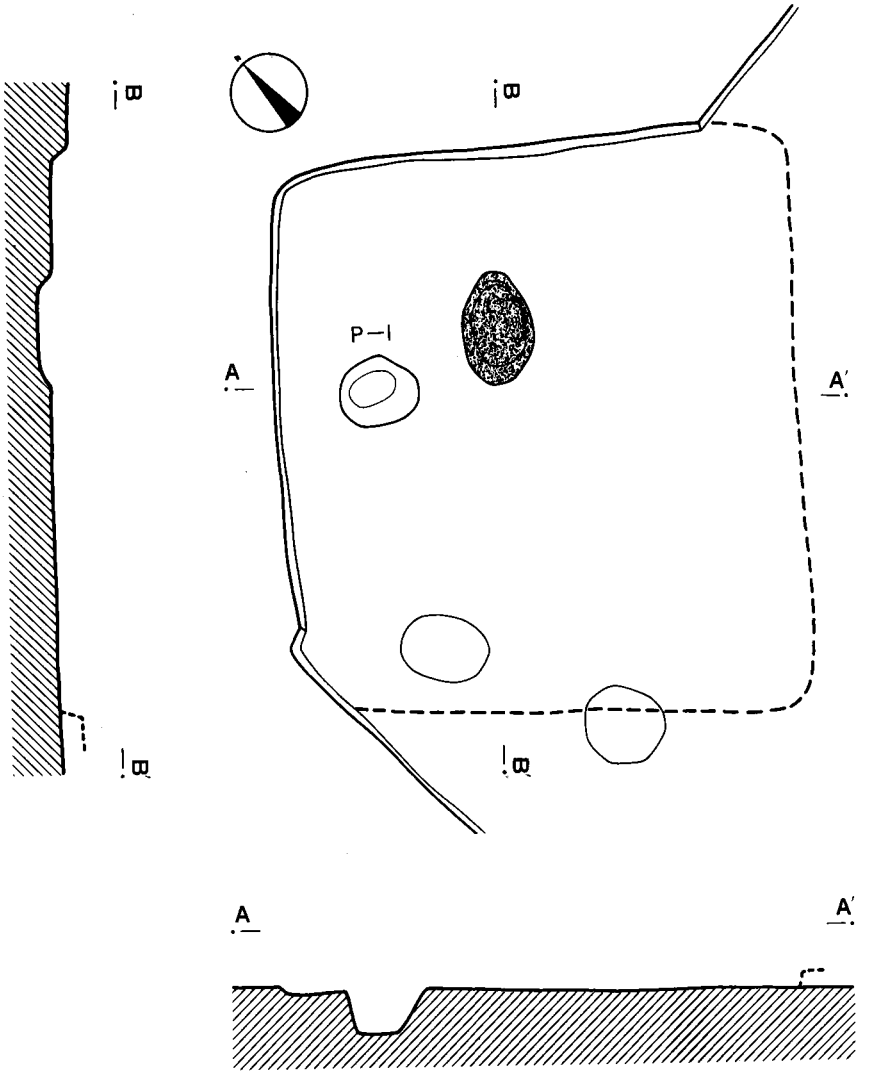
遺構（第66図）

30号跡と重複する住居跡で、確認調査の段階から、30号跡と共にその所在が推定されていた遺構である。30号跡との新旧関係は、覆土の堆積が薄く、さらに床面のレベルもほぼ同じであるため、とらえることができなかった。

プランは、30号跡との重複によって、北側のコーナー部分を中心として、壁が½ほどしか遺存していないので、全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が4.2ｍ前後の方形を呈する

ものと思われる。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は0.05～0.15mを測る。床面はやや凹凸に富み、炉跡の周辺を除いては軟弱である。ピットは1本検出した。P－1は0.33mの深さを測る。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.9m、短軸0.55mの楕円形を呈する。掘込みは0.15m程で、硬質の焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。30号跡との新旧関係は不明であるが、炭化材の遺存状況からすると、30号跡の方が新しい可能性がある。

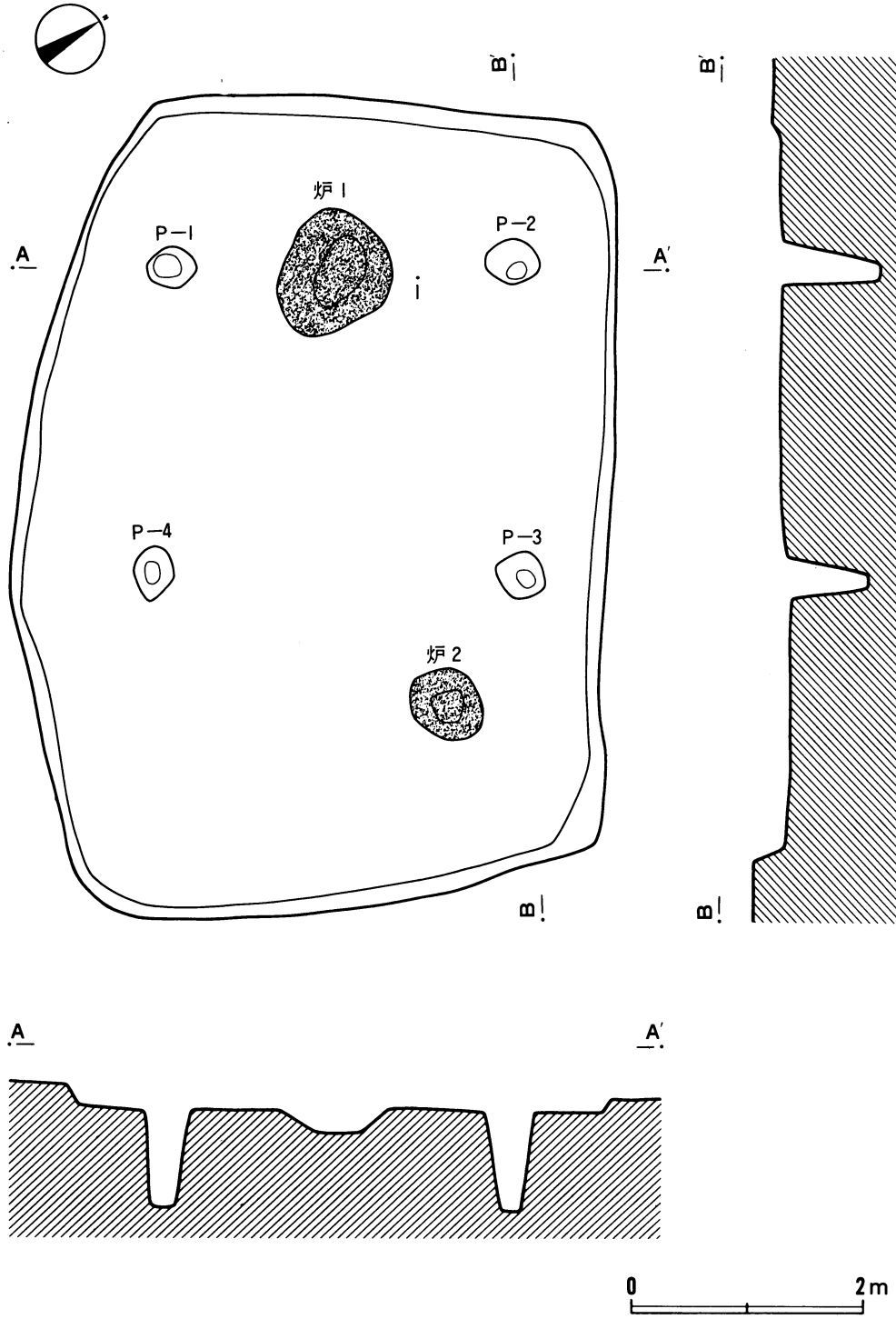
遺物は全く出土していない。



第66図　31(037C)号跡実測図(1/60)

（32）　32（038）号跡（第67・68図）

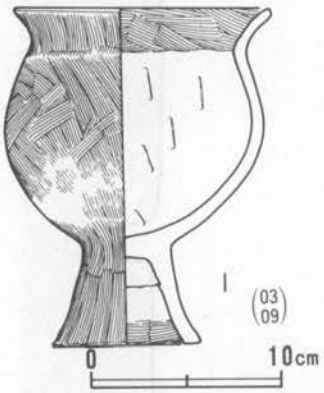
遺構（第67図）



第67図　32(038)号跡実測図(1/60)

27号跡の東１ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっており、その段階から所在の判明していた遺構である。

プランは約7.0×5.2ｍの不整な長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には差があるが、0.1～0.3ｍを測る。床面は堅緻であるが、炉跡２の北側部分は、南側部分よりやや高い。ピットは４本検出した。いずれも0.7～0.8ｍ前後の深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡はＰ－１とＰ－２の中間に１ケ所、Ｐ－３の南に１ケ所検出した。炉跡１は、長軸1.1ｍ、短軸1.0ｍの不整円形を呈する。掘込みは0.2ｍ程で、硬質の焼土が中央部に堆積しており、底部はよく焼けていた。炉跡２は長軸0.7ｍ、短軸0.55ｍのやや不整な楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍ程で、焼土が中央部に薄く堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。



第68図　32(038)号跡出土土器(1/4)

遺物（第68図）

出土遺物は極めて少なく、炉跡１の東側の床面直上から出土した台付甕が図示できたのみであった。

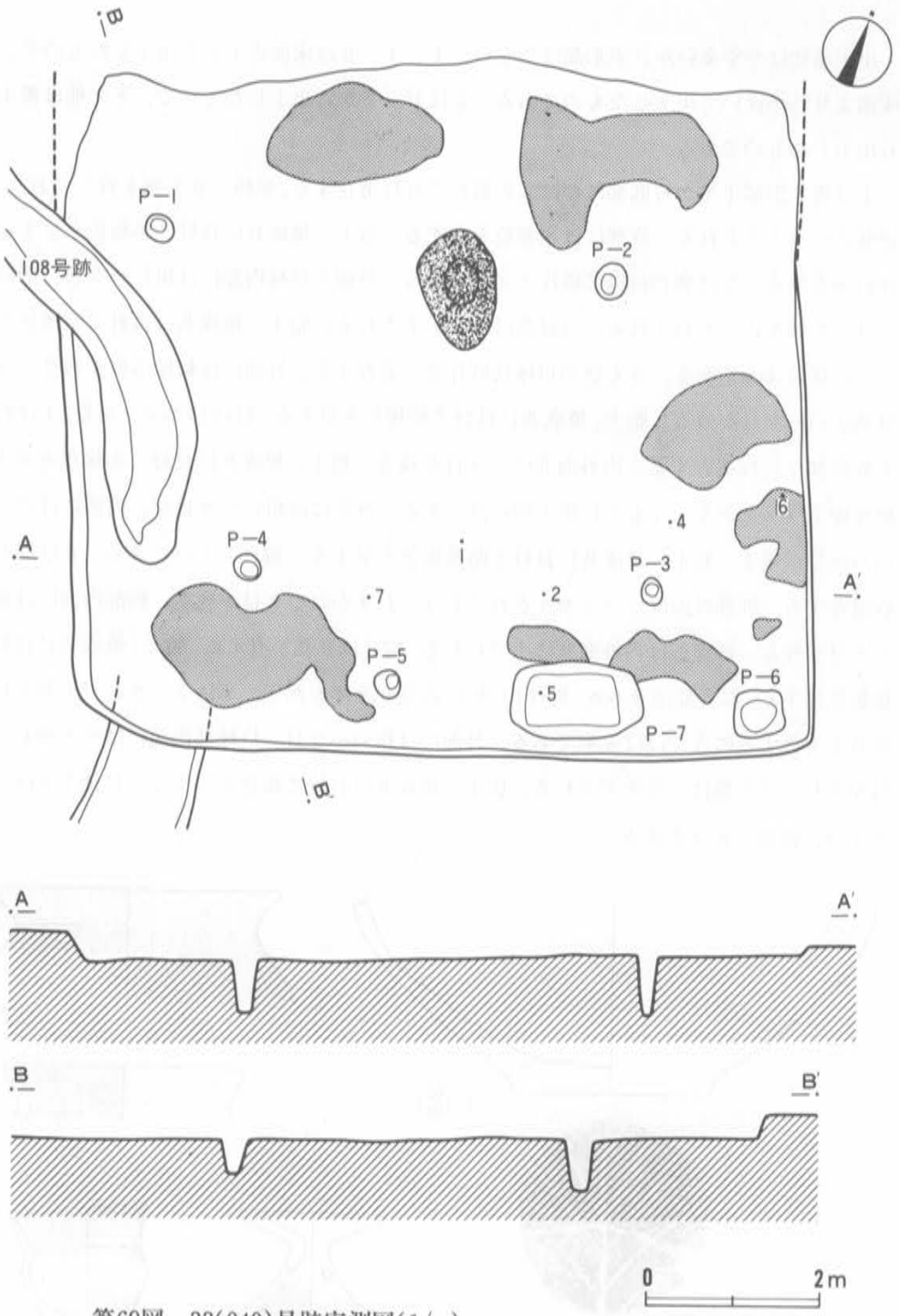
１は小形の台付甕で⅔程遺存する。外面はハケ目を施した後、粗いナデが加えられている。内面は口縁部と脚台部の一部にハケ目を残し、その他はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径13.2cm、脚径7.7㎝、器高17.2cmを測る。

（33）　33（040）号跡（第69・70図）

遺構（第69図）

32号跡の西７ｍの斜面に位置し、27号跡、108号跡と重複する住居跡である。確認調査時のトレンチに住居跡の一部がかかっており、その所在が推定されていたものである。108号跡には切られて、27号跡を本跡が切っていることは明らかである。

プランは、北側を斜面によって失っているため、全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が8.4ｍの方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には差があるが、0.1～0.4ｍを測る。床面は炉跡周辺を除いてはやや軟弱で、北側はやや低くなる。ピットは７本検出した。深さにはかなり差があり、Ｐ－１、Ｐ－３、Ｐ－４は0.4～0.6ｍだが、Ｐ－２、Ｐ－５は浅く0.2ｍ前後を測る。いずれも柱穴と考えられる。Ｐ－６はやや大きいピットであるが浅く、0.15ｍを測る。Ｐ－７は1.4×0.8ｍの方形のピットで、深さは0.3ｍで、貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.7ｍ、短軸0.8ｍのやや不整な楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍ程で焼土が全面にわたって堆積しており、



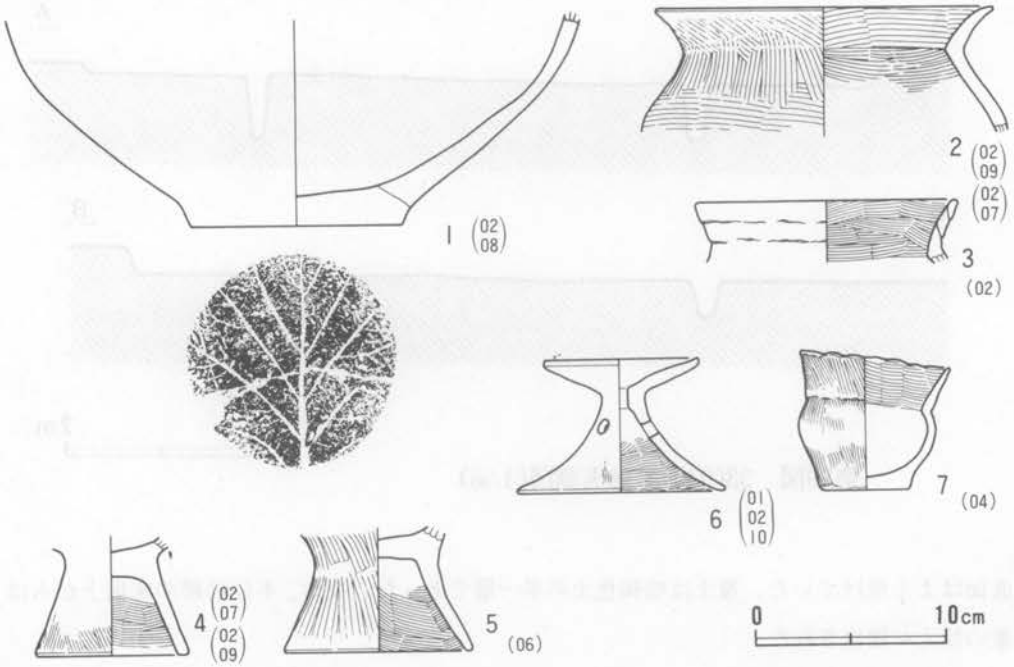
第69図　33(040)号跡実測図(1/80)

底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、本住居跡の床面上からは多量の焼土が検出された。

遺物（第70図）

出土遺物はやや多いが、完形品は少ない。1、4、6は床面直上から出土したもので、7は床面より25cm浮いて出土したものである。5はP－7から出土したもので、その他は覆土中から出土したものである。

1は壺の胴部下半から底部にかけての破片で⅜程遺存する。輪積み成形痕を残しており、内外面共にヘラナデされる。底部には木葉痕を有する。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。底径11cmを測る。2は甕の口縁部破片で⅓遺存する。外面と口縁内部には粗いハケ目、胴部内面にはやや細かいハケ目が残る。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で暗褐色を呈する。口径17.6cmを測る。3も甕の口縁部破片で½遺存する。外面には輪積み痕が残り、内面には細かいハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で暗褐色を呈する。口径13.6cmを測る。4は台付甕の脚台部で½程遺存する。内外面共にハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚部径7.9cmを測る。5も台付甕の脚台部である。外面には粗いハケ目が、内面にはやや細かいハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で暗茶褐色を呈する。脚径7.9cmを測る。6は器台で¾程遺存する。脚部外面はヘラミガキされており、わずかにハケ目が残る。脚部内面には細かいハケ目が残る。器受部は内外面共にナデられる。脚孔は3孔を有する。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。器受部径8.0cm、脚径10.9cm、器高6.8cmを測る。7はミニチュア土器で口縁部を若干欠失するのみでほぼ完形である。外面には粗いハケ目、口縁部内面にはやや細かいハケ目が残り、その他はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径7.8cm、底径4.4cm、器高6.8cmを測る。



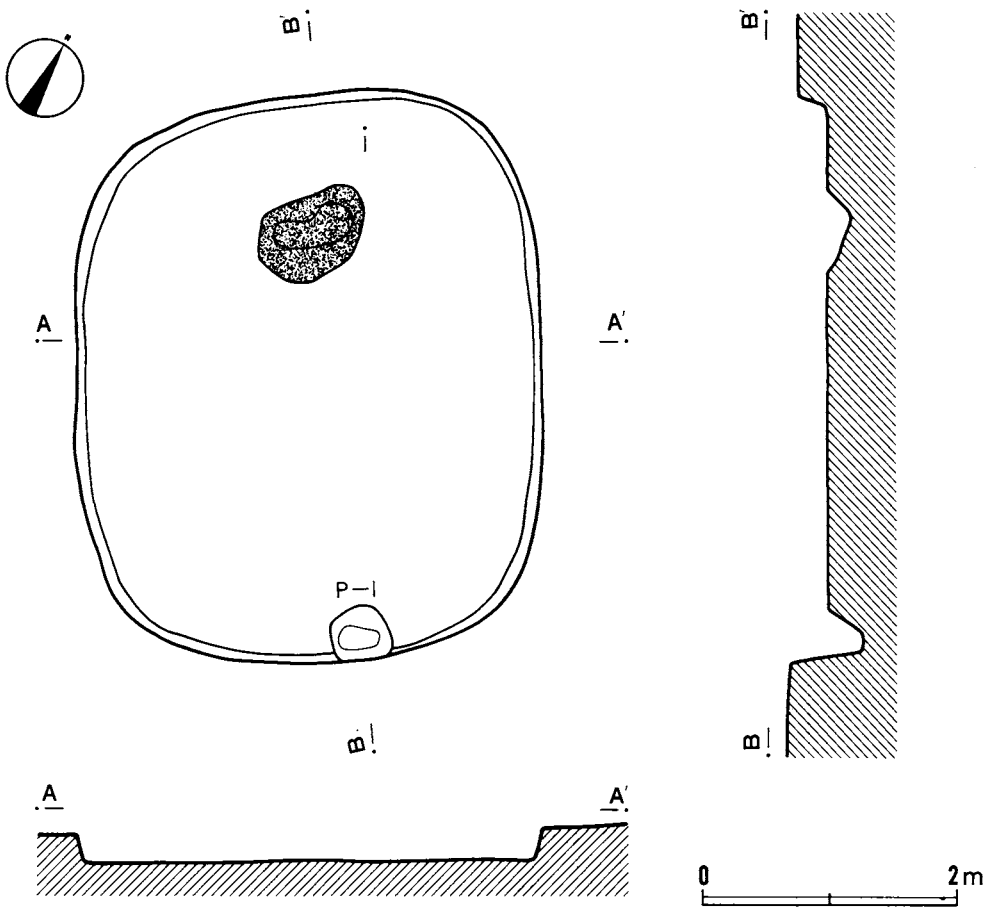
第70図　33(040)号跡出土土器(1/4)

（34）　34（041）号跡（第71・72図）

遺構（第71図）

25号跡の南4mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっており、その段階から所在の判明していた遺構である。

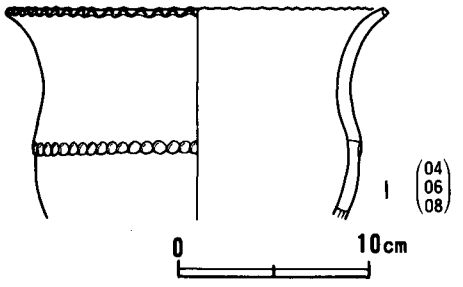
プランは、4.4×3.7mの隅丸長方形を呈する。壁は全体にわたってよく遺存し、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は0.2mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは南壁に接して1本検出したのみである。深さは0.25mで、位置からすると貯蔵穴の可能性がある。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.0m、短軸0.6mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土の堆積は薄いが底面はよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。



第71図　34(041)号跡実測図(1/60)

遺物（第72図）

出土遺物は極めて少なく、炉跡の北側の床面直上から出土した甕が図示できたのみである。



1は襞で⅘程遺存する。胴部上半に輪積みの接合部を段状に残す。口縁部には側面から押圧が加えられ、波状を成す。接合部にも押圧が加えられる。外面はナデ調整され、内面は粗くヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径19.6cmを測る。

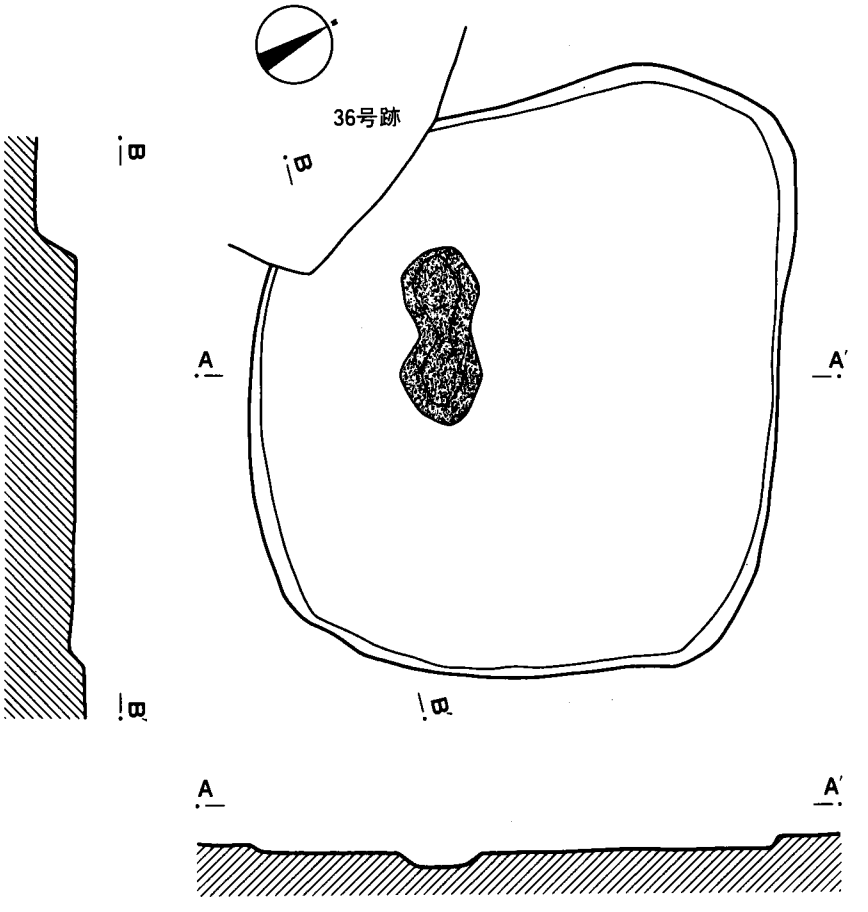
第72図　34(041)号跡出土土器(1/4)

(35)　35（042A）号跡（第73・74図）

遺構（第73図）

32号跡の南6m位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっていたが、明確に所在が確認できなかった遺構である。

プランは一辺が約4.0mの不整な隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1mを測る。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。ピットは検出されなかった。炉跡は

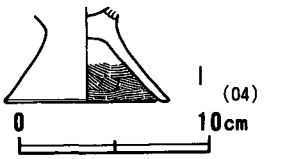


第73図　35(042A)号跡実測図(1/60)

住居跡の中央やや西寄りに検出した。長軸1.4ｍ、短軸0.4～0.6ｍの瓢箪形を呈する。掘込みは、0.15ｍ程で、焼土が薄く堆積しており、底面はほとんど焼けていなかった。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物（第74図）

出土遺物は極めて少なく、炉跡内から出土した台付甕の脚部が図示できたのみである。



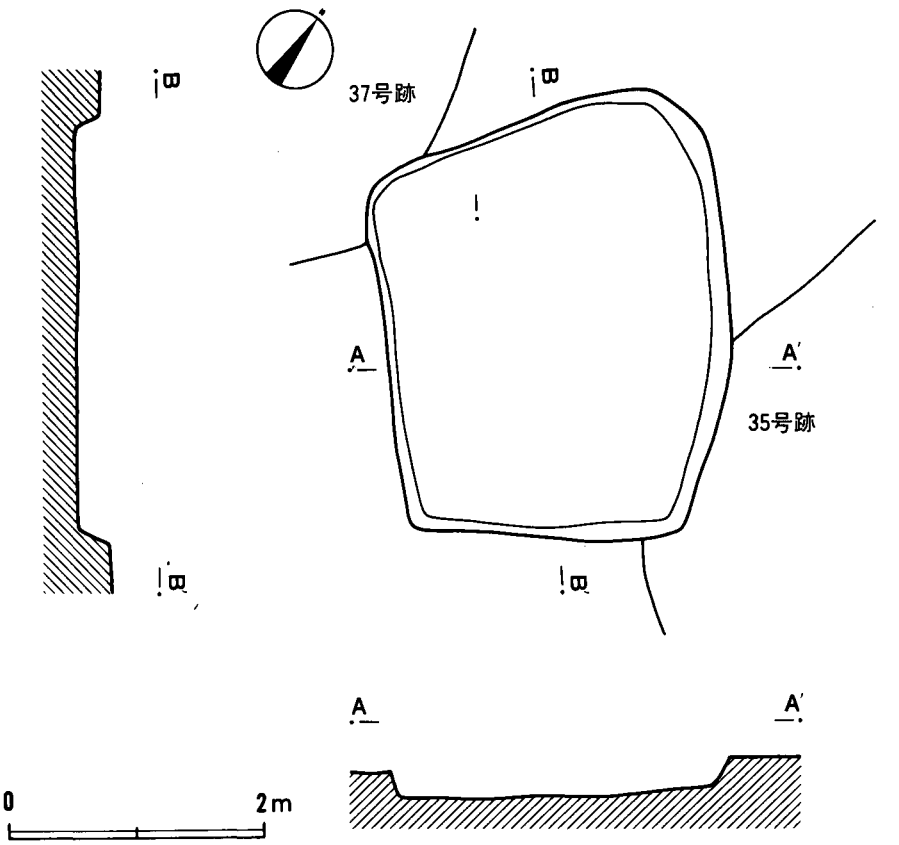
第74図　35(042A)号跡出土土器(1/4)

1は台付甕の脚台部で3/5程遺存する。外面はヘラナデ調整され、内面には細かいハケ目が残る。器面は、内、外面共に火を受けており、遺存状態は悪い。胎土、焼成共にやや悪く、淡褐色を呈する。脚径8.4㎝を測る。

(36)　36（042B）号跡（第75・76図）

遺構（第75図）

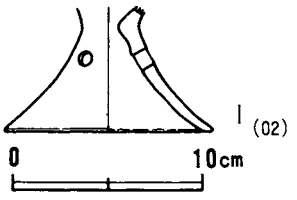
35、37号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。



第75図　36(042B)号跡実測図(1/60)

プランは3.4×2.7ｍの不整な隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが、やや軟弱である。ピット及び炉跡は精査にもかかわらず検出できなかった。覆土は褐色土の単一層であった。35、37号跡との新旧関係は、本跡が35、37号跡の床面を切っていることにより、本跡が最も新しい。

遺物（第76図）



第76図　36(042B)号跡出土土器(1/4)

出土遺物は極めて少なく、床面より10cmほど浮いて出土した器台が図示できたのみである。

1は器台の脚部破片で⅔程遺存する。内外面共にヘラナデ調整される。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径10.8cmを測る。

(37)　37（042C）号跡（第77・78図）

遺構（第77図）

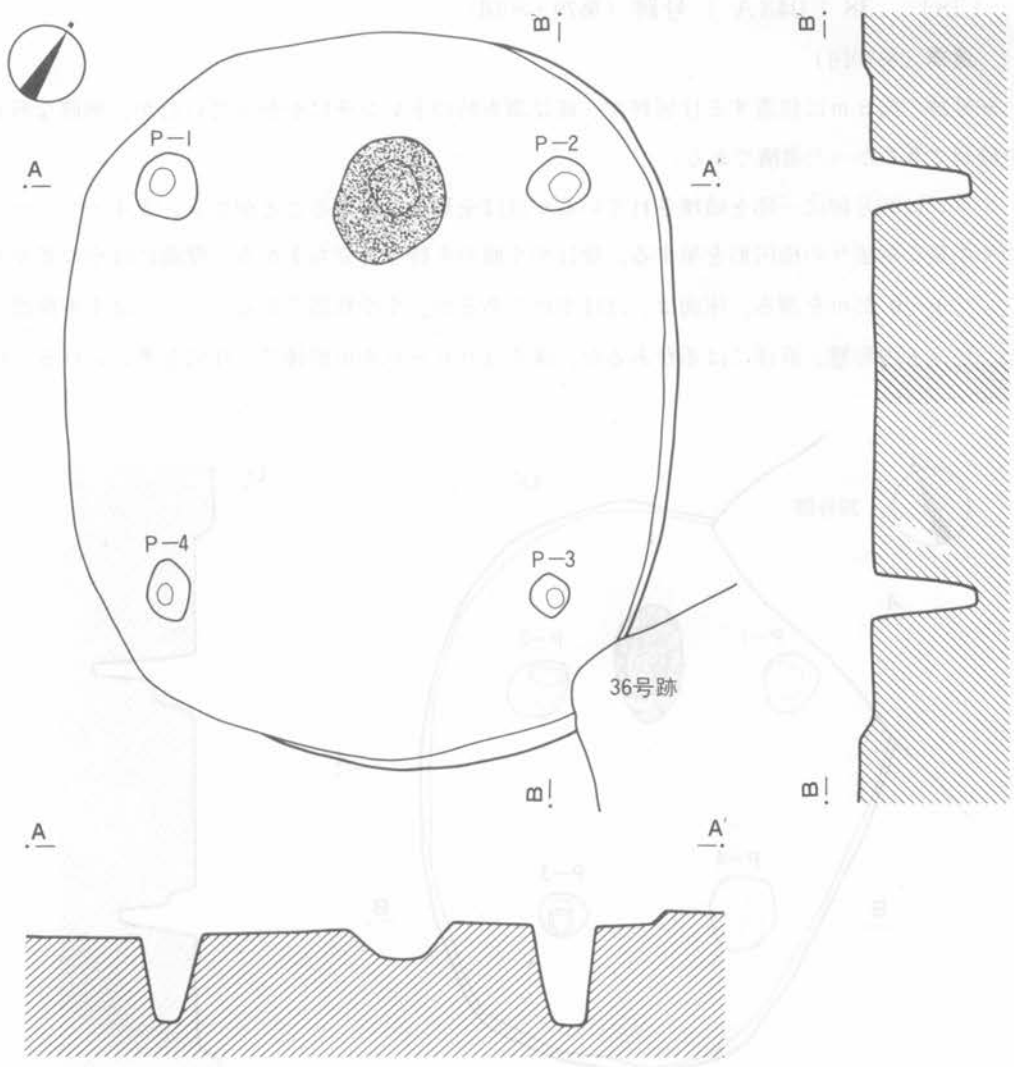
36号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチに西側部分が⅓ほどかかっていたが、その所在を確認することができなかった遺構である。

プランは、5.6×4.8ｍのやや胴張りの隅丸長方形を呈する。壁は½ほどしか遺存していないが、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.15ｍを測る。床面は東側がやや低くなるが、極めて堅緻である。ピットは4本検出した。いずれも0.7ｍ前後の深さを有し、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄り、P－1とP－2の中間に検出した。長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍの不整長円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。

遺物（第78図）

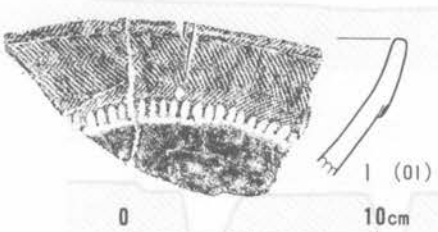
出土遺物は極めて少なく、覆土中より出土した鉢の破片が図示できたのみである。

1は鉢の破片である。口縁部には縄文を羽状に施し、その下端部に押圧を加える。口唇部にも縄文が施される。内外面共にヘラナデ調整され、赤彩される。



第77図　37(042C)号跡実測図(1/60)

0　2m



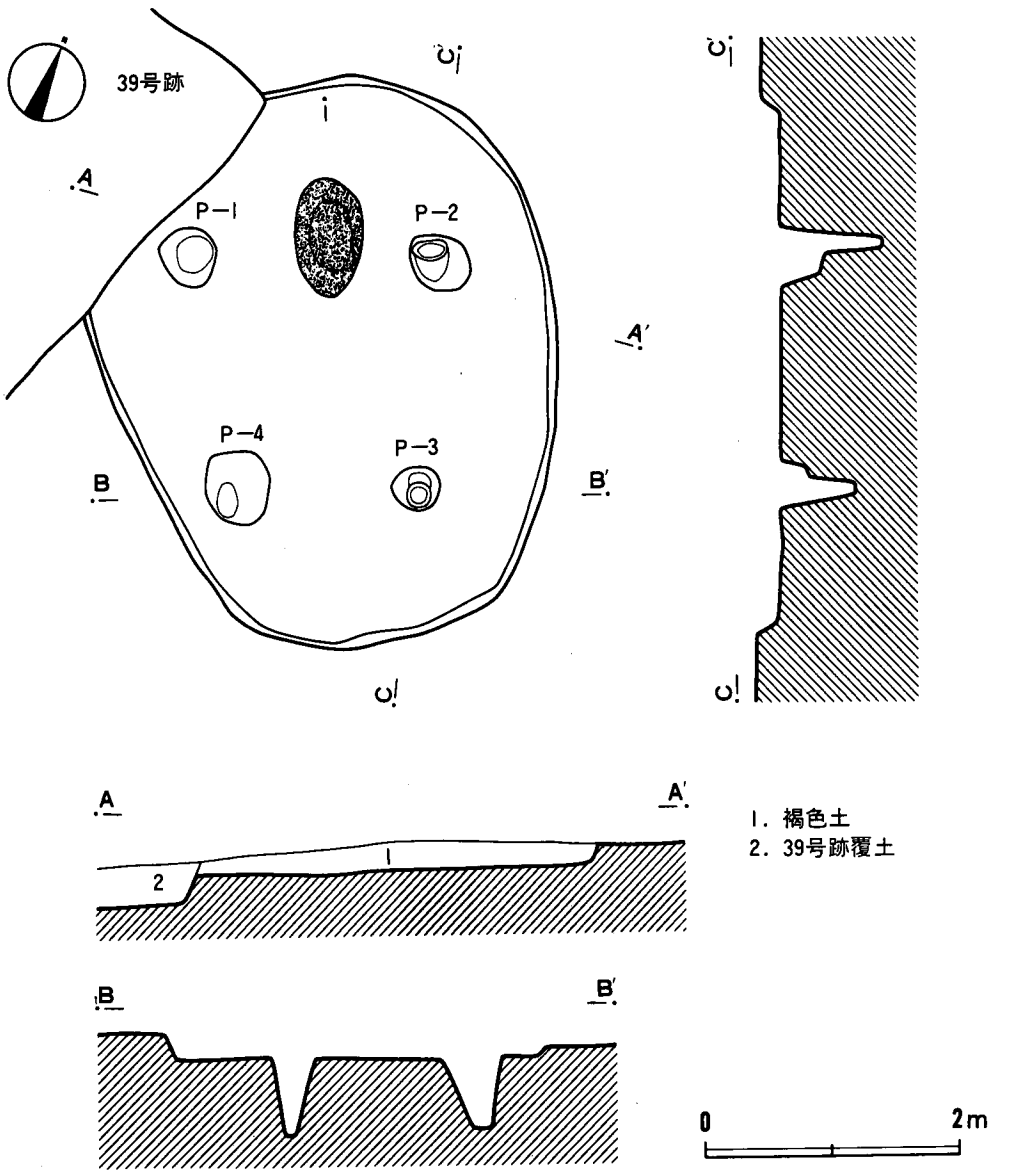
第78図　37(042C)号跡出土土器(1/3)

(38)　38（043A）号跡（第79・80図）

遺構（第79図）

36号跡の南3mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっていたが、明確な所在を確認できなかった遺構である。

プランは39号跡に一部を破壊されているがほぼ全形をとらえることができ、4.4×3.6mのやや不整な胴張りの楕円形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高にはやや差があり、0.1～0.25mを測る。床面は、ほぼ平坦であるが、やや軟弱である。ピットは4本検出した。ピットの形態、直径には差があるが、深さは0.6～0.8m前後で、柱穴と考えられる。炉



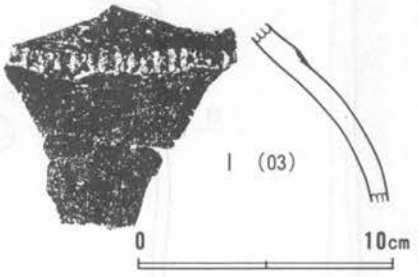
第79図　38(043A)号跡実測図(1/60)

跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.9ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.2ｍほどで、全面にわたって焼土が堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は淡褐色土の単一層であった。

遺物（第80図）

出土遺物は極めて少なく、1は北壁際で床面から5㎝浮いて出土したものである。

1は甕の胴部破片である。胴部上半に輪積みの接合部を段状に残し、その下端に押圧が加えられる。外面はヘラナデ調整され、内面もナデが加えられる。



第80図　38(043Ａ)号跡出土土器(1/3)

(39)　39（043Ｂ）号跡（第81・82図）

遺構（第81図）

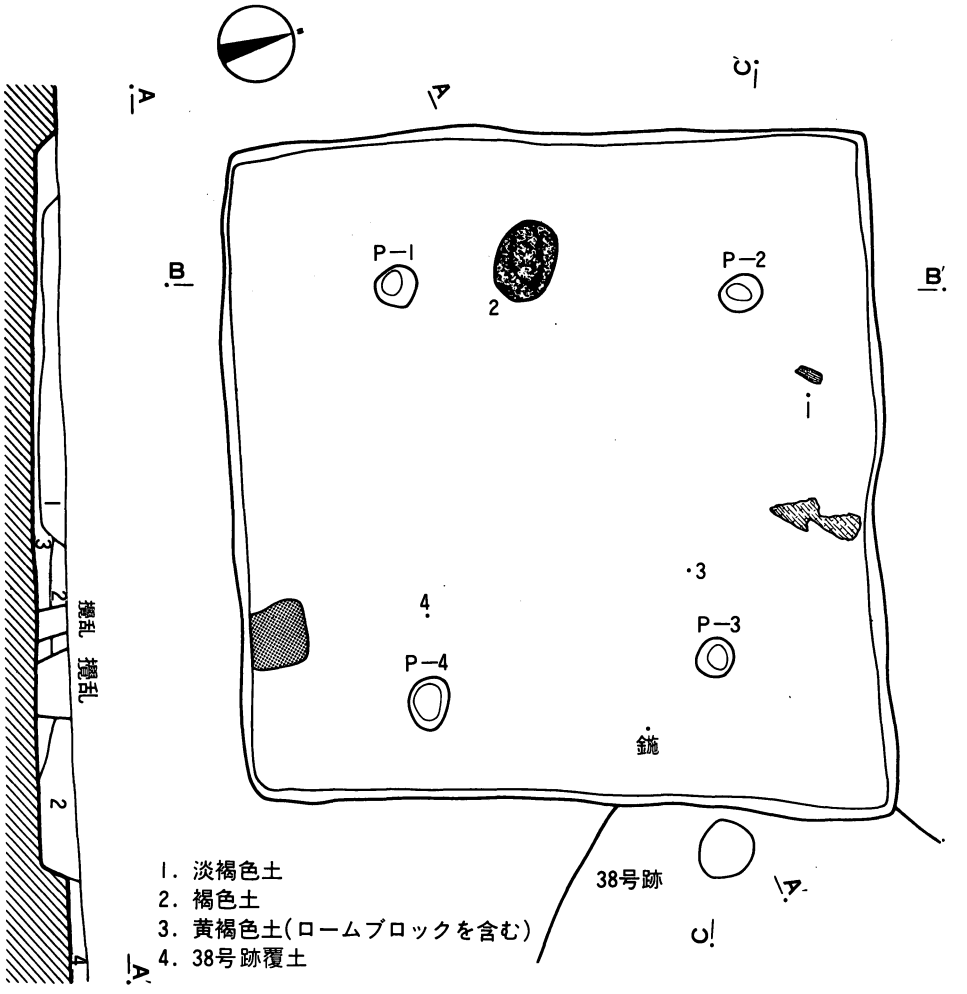
38号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチが西側コーナー部分にかかっていたが、その面積が少ないため、存在が推定できなかった遺構である。

プランは、一辺が約5.2ｍの方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高にはやや差があるが、0.15～0.25ｍを測る。床面は堅緻で、ほぼ平坦であるが、Ｐ－４周辺はやや高い。ピットは４本検出した。形態、規模には差があり、深さも、Ｐ－１は0.7ｍ、Ｐ－２は、0.63ｍ、Ｐ－３は0.52ｍ、Ｐ－４は0.47ｍと異なるが、位置関係から柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央西寄りの、Ｐ－１とＰ－２の中間に検出した。長軸0.6ｍ、短軸0.45ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.1ｍと浅く、焼土の堆積も薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。なお床面上から若干の焼土と炭化材が検出された。38号跡との新旧関係は、本跡が38号跡の床面を切って構築されていることにより、本跡の方が新しい。

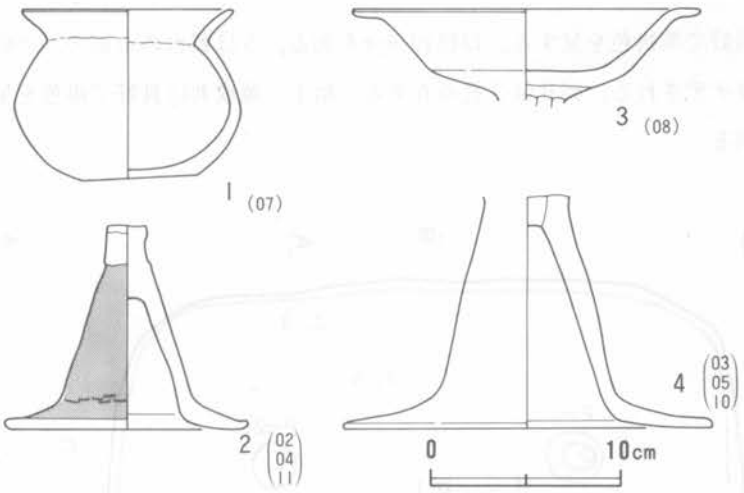
遺物（第82図）

出土遺物は少なく、Ｐ－２の東側で床面から5㎝浮いて1が、Ｐ－３の西側の床面直上で3が、Ｐ－４の西側の床面直上で4が出土し、炉跡の上面から2が出土した。また、Ｐ－３の南側で0.2ｍほど浮いて埦が出土している。

1は小形の甕で⅔ほど遺存する。内外面共にヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径10.8㎝、底径5.9㎝、器高8.9㎝を測る。2は高坏の脚部⅔の破片である。外面もヘラケズリの後ヘラナデ調整され、内面もヘラナデが施される。外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径12.6㎝を測る。3は高坏の坏部の½破片である。外面はヘラナデが、内面はナデが認められる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径16㎝を測る。 4は高坏の脚部⅔破片である。内外面共にヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径19.2㎝を測る。



第81図　39(043B)号跡実測図(1/60)



第82図　39(043B)号跡出土土器(1/4)

(40)　40（044）号跡（第83・84図）

遺構（第83図）

34号跡の南約17mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっていたが、存在を推定することができなかった遺構である。

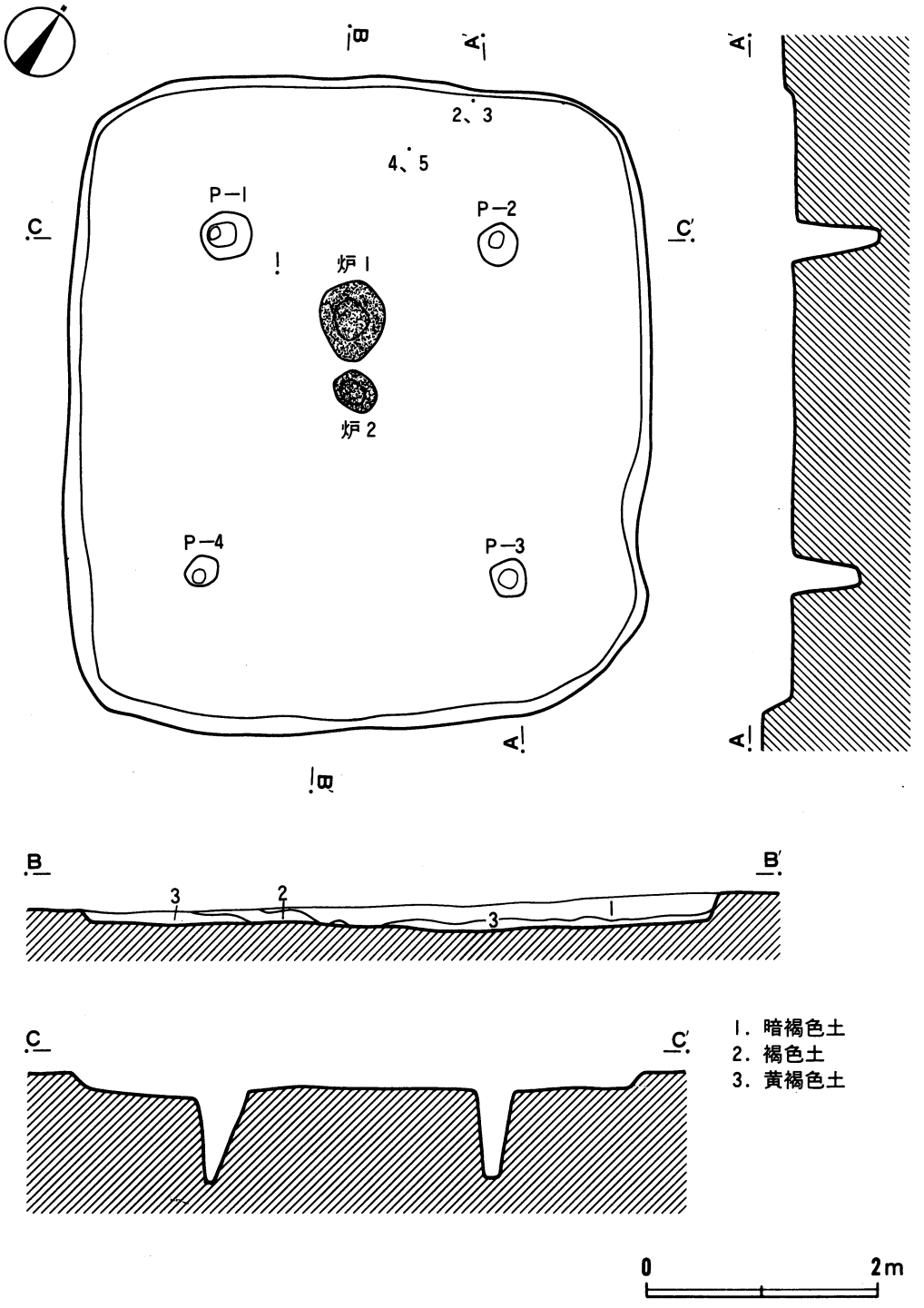
プランは5.5×5.0mの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高にはやや差があるが、0.1～0.2mを測る。床面は堅緻であるが、やや凹凸に富み、北側コーナー部分を中心として床面の⅓はやや高い。ピットは4本検出した。形態、規模にはやや差があるが、深さは0.6～0.8m前後を測り、位置からして柱穴と考えられる。炉跡は2ケ所検出した。炉跡1は住居跡の中央やや北西寄りに位置し、長軸0.7m、短軸0.55mのやや不整な楕円形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。炉跡2は住居跡の中央に位置し、長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈する。掘込みは0.1mほどで、やはり焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。

遺物（第84図）

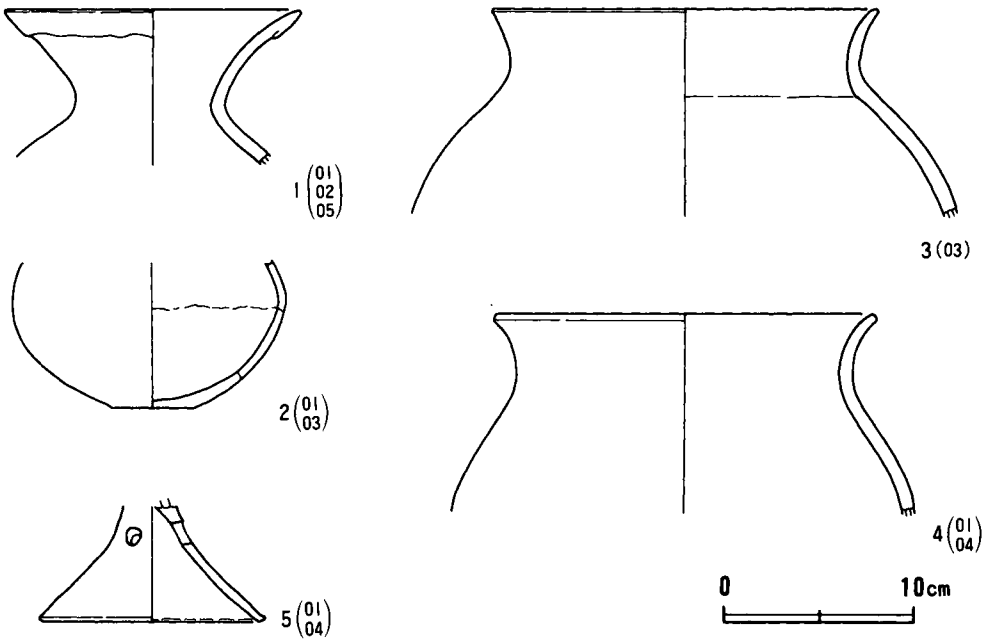
出土遺物は少ないが、図示した5点の土器はいずれも床面直上から出土したものである。

1は壺の口縁部から頸部にかけての⅕破片である。折り返し口縁の形状を呈する。内外面共にナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.2cmを測る。2は壺の胴部以下の⅕の破片である。輪積み痕を残す。外面は上半はヘラナデを施した後にヘラミガキされ、下半はヘラナデのみが施される。内面はヘラナデ調整される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径4.2cmを測る。3は甕の⅓の破片である。外面は胴部はヘラケズリの後ヘラナデされ、口縁部はヘラナデされる。内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径20cmを測る。4は甕の⅓の破片である。外面は胴部はヘラケズリの後ヘラナデされ、口縁部はヘラナデされる。内面はナデが加えられる。胎土、

焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径19.6cmを測る。5は器台の台部の¾の破片である。内外面共にヘラナデされる。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。台径は、11.2cmを測る。



第83図　40(044)号跡実測図(1/60)



第84図　40(044)号跡出土土器(1/4)

(41)　41（045）号跡（第85・86図）

遺構（第85図）

40号跡の北東4mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかっていたが、存在が推定できなかった遺構である。

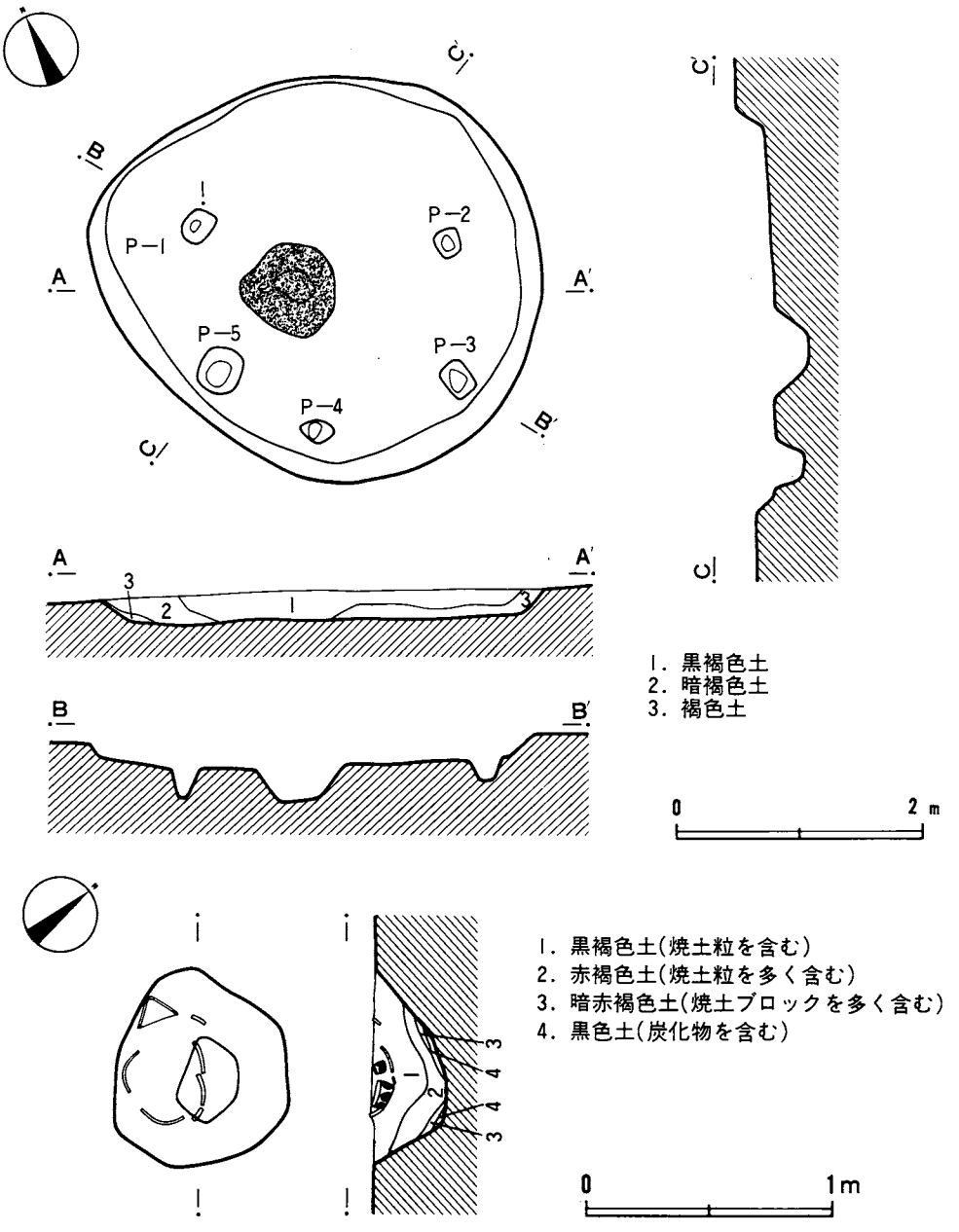
プランは、3.7×3.3mのやや不整な楕円形を呈する。壁は傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1～0.25mを測る。床面は堅緻で、全面にわたってよく踏み固められているが、中央部は低くなる。ピットは5本検出した。形態、直径には差があるが、いずれも0.2～0.3mの深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや西寄りに検出した。長軸0.8m、短軸0.7mの不整円形を呈する。掘込みは0.3mほどで、土器が南西壁に寄って埋置されており、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。

遺物（第86図）

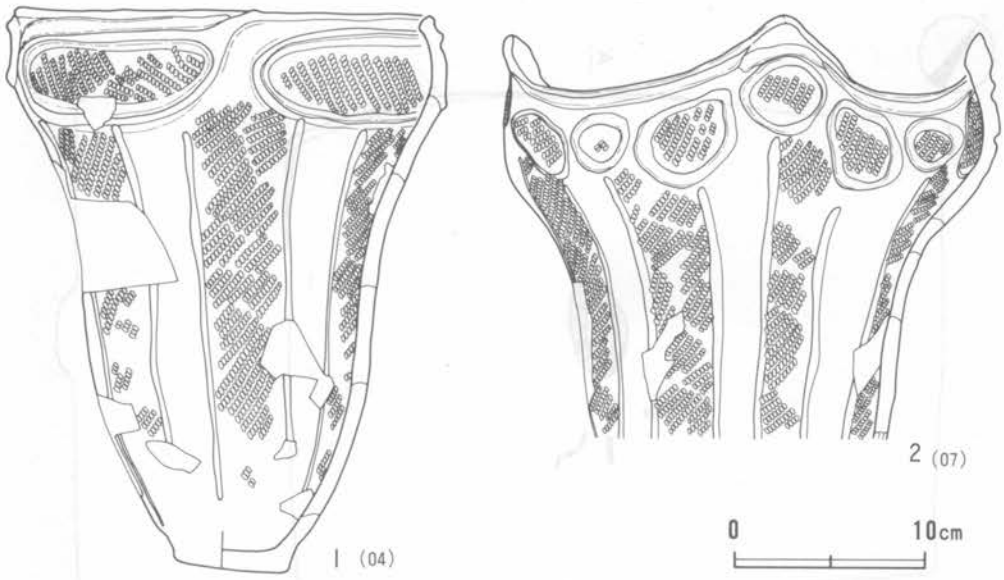
出土遺物は少なく2点の土器が図示できただけである。1は床面直上から出土したもので、2は炉跡内から出土したものである。

1は部分的な欠失はあるがほぼ完形に復原できた深鉢である。口縁部文様帯には隆帯による4単位の楕円状の区画がみられる。胴部には磨消懸垂文が施される。縄文は原体RLを口縁部では横方向、胴部では縦方向に充填施文したものである。胴部下半は二次的な火を受け、裏面には煤が付着する。口径20.6cm、底径5.6cm。器高29cmを測る。2は胴部下半～底部を欠く深鉢である。口縁部文様帯には沈線による円形の区画がみられる。胴部には磨消懸垂文が施される。縄文

は原体ＲＬを充填施文したものである。炉体土器として使用されたため、外面は二次的な火を受け赤変している。また、風化、磨滅が著しい。口径24.6cmを測る。



第85図　41(045)号跡実測図(1/60・1/30)



第86図　41(045)号跡出土土器(1/4)

（42）　42（046A）号跡（第87・88図）

遺構（第87図）

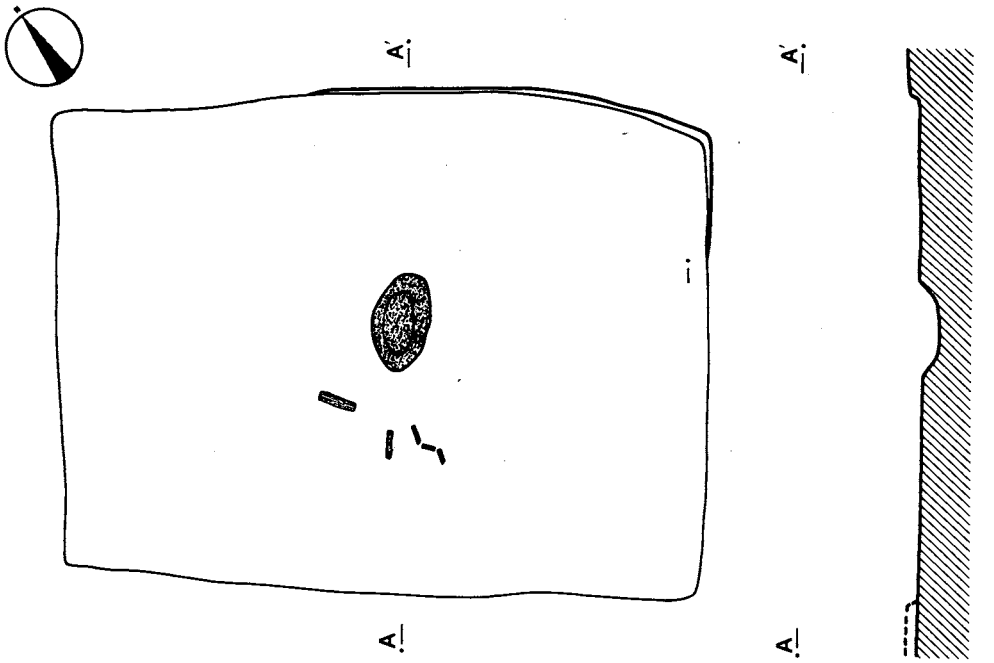
34号跡の南東に位置する住居跡で、南側で43号跡と重複する。確認調査時のトレンチ間に存在するため、本調査時に確認された遺構である。43号跡との新旧関係は43号跡上に貼床しているため本跡の方が新しい。

プランは、壁の遺存が少ないが、良好な床面の遺存によって全形をとらえることができた。5.0×4.0の長方形を呈する。壁は前述のように¼ほどしか遺存していないが、遺存している部分ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.1ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、炉跡の周辺が特に良好である。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央に検出した。長軸0.8ｍ、短軸0.45ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、床面上からは若干の炭化材が検出された。

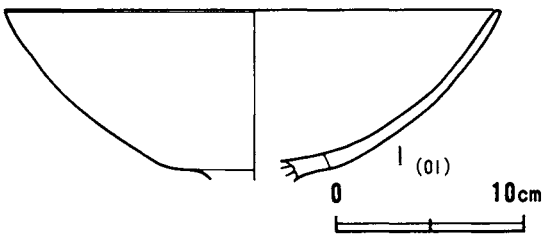
遺物（第88図）

出土遺物は極めて少なく、東壁際で床面から2㎝浮いて出土した高坏の坏部が図示できたのみである。

1は高坏の坏部の⅓破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共にやや悪く淡褐色を呈する。口径26㎝を測る。



第87図　42(046A)号跡実測図(1/60)



第88図　42(046A)号跡出土土器(1/4)

（43）　43（046B）号跡（第89・90図）

遺構（第89図）

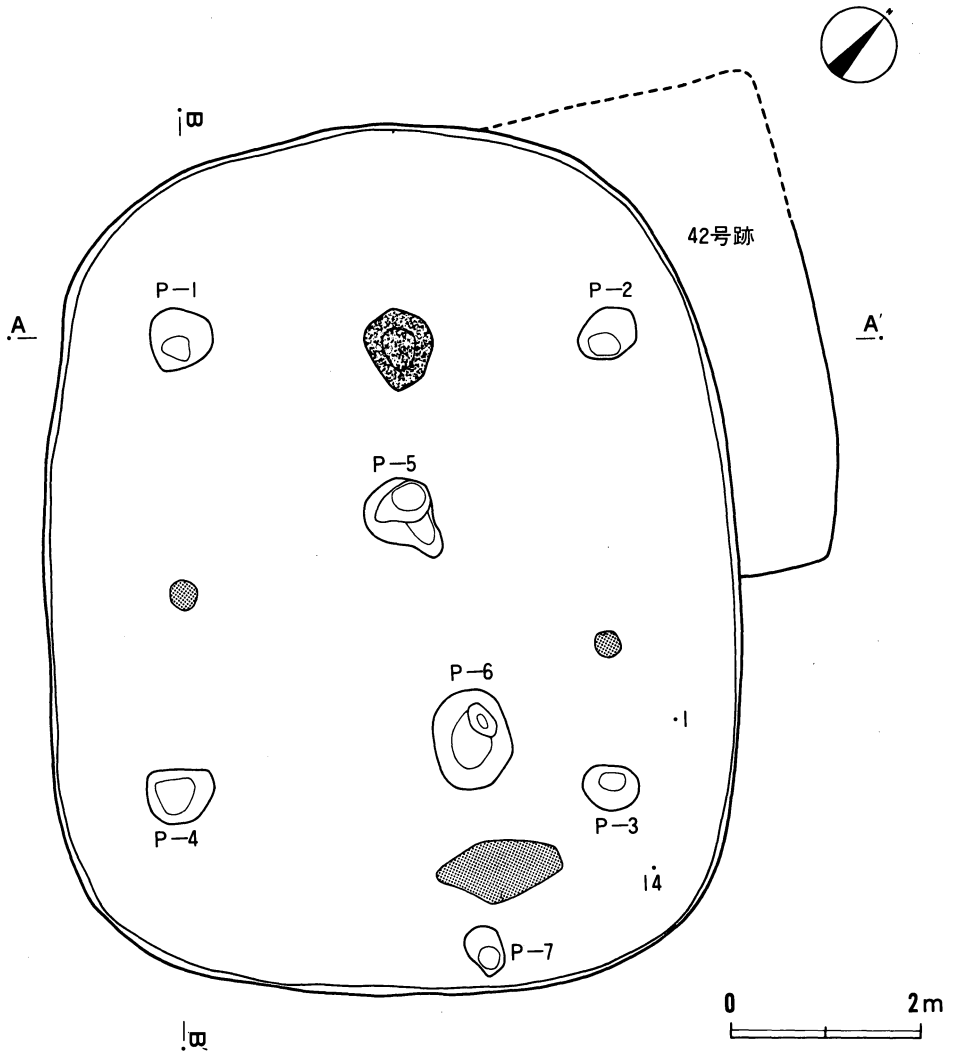
42号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチが、東と西のコーナー部分にかかっていたが、存在を推定することができなかった遺構である。

プランは、9.0×7.2ｍのやや胴張りの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高にはやや差があり、0.2～0.3ｍを測る。床面はほぼ平坦で極めて堅緻、良好である。ピットは7本検出した。P－1～P－4は、形態、直径には差があるが、いずれも0.7～0.8ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。P－5は、0.35ｍの不整形なピットである。P－6は、0.25ｍの長円形のピットの中に0.7ｍの小さなピットが穿たれる。P－7は0.1ｍの浅いピットである。炉跡は住居跡の中央北西寄りの、P－1とP－2の中間に検出した。長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍの不整な楕円形を呈する。掘込みは0.2ｍほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の単一層であった。なお床面直上からは焼土が検出された。

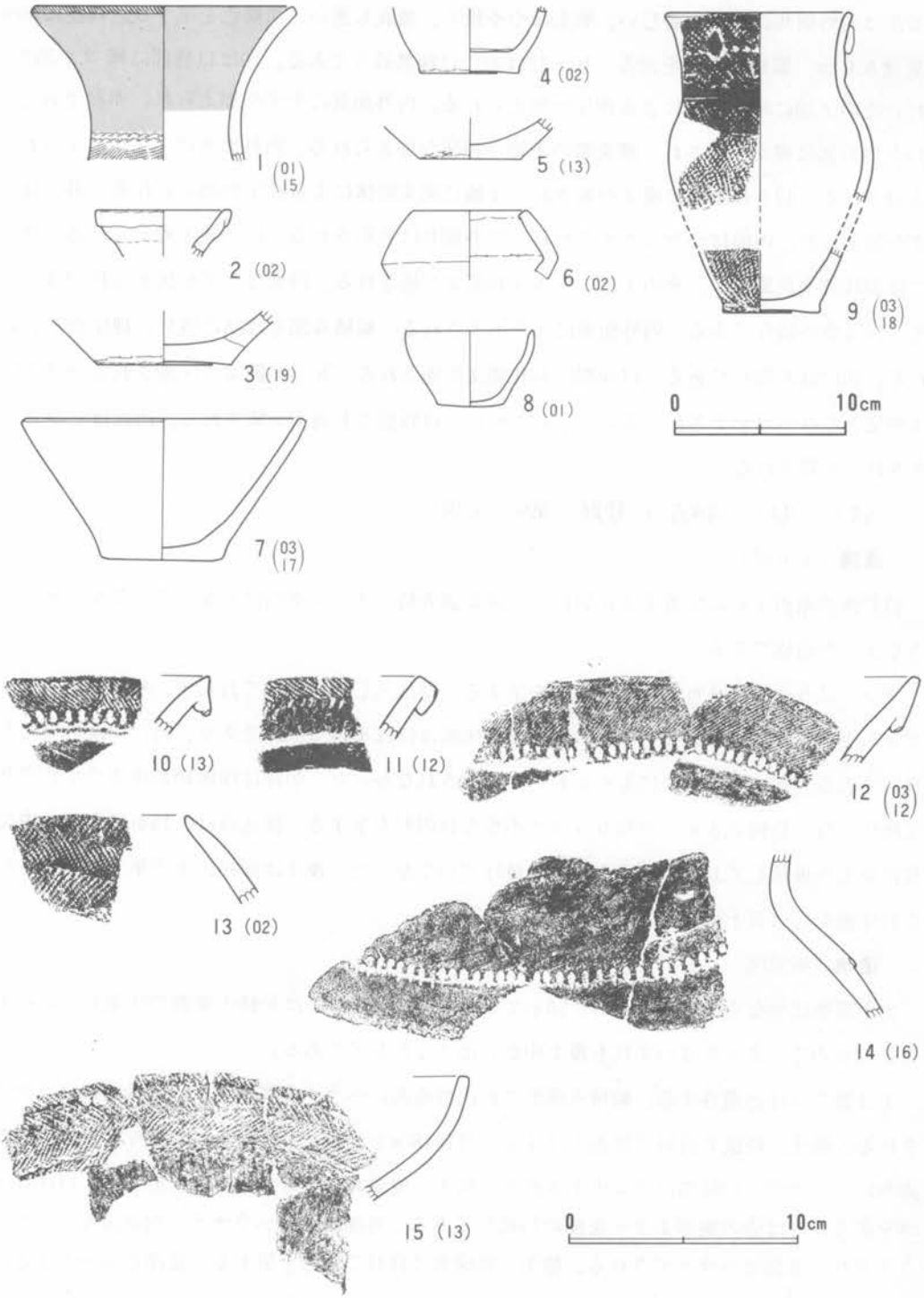
遺物（第90図）

出土遺物は比較的多いが、完形品はない。1はP－3の北側で床面直上から出土したもので7と9はP－1の南側で8㎝浮いて出土したものである。14はP－3の東側の床面直上から出土したものである。その他はいずれも覆土中から出土したものである。

1は壺の口縁部から頸部にかけての⅔破片である。外面口唇部と頸部には細縄文、さらに、細縄文の上にはS字結節文を施す。無文部は赤彩され、ヘラミガキされる。内面は上位は赤彩され、ヘラミガキされる。その他は、ヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15cmを測る。2は壺の口縁部½の破片である。折り返し口縁の形状を呈する。外面は粗いナデ、内面は粗いヘラミガキが施される。胎土はやや粗いが、焼成は良く明褐色を呈する。口径7.8㎝を測る。3は壺の底部である。内外面共にヘラナデ調整される。胎土中に砂粒を含み、焼成は良好であり、赤褐色を呈する。底径7.7㎝を測る。4は甕の胴部下半から底部の⅔破片である。内外面共にヘラナデされる。砂粒を含み、焼成は良好である。明褐色を呈する。底径7.8㎝を測る。5は壺の底部である。内外面共にヘラナデされる。砂粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。底径6.0㎝を測る　6は器台と思われる⅕の破片である。外面はナデ、内面には粗いナデが施される。砂粒を含み、焼成は良好で、明褐色を呈する。器受部径6.7㎝を測る。7は鉢で½遺存する。外面は人念にヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、明褐色を呈する。口径15.9㎝、底径7.0㎝、器高8.2㎝を測る。8は小形の鉢の⅓破片である。内外面共にナデが施される。砂粒を含み、焼成は良好で、黒褐色を呈する。口径7.5㎝、底径3.8㎝、器高4.4㎝を測る。9は広口壺で⅔ほど遺存する。器形は歪みが著しい。突起を4ヶ所有する。外面は頸部を除いて縄文が施される。内面はヘラナデされる。



第89図　43(046B)号跡実測図(1/80)



第90図　43(046B)号跡出土土器(1/4・1/3)

器面は内外面共に磨滅が著しい。胎土はやや粗く、焼成も悪い。淡褐色を呈する。口径10.8cm、底径5.6cm、器高17.5cmを測る。10～12は壺の口縁部破片である。10は口唇部に縄文が施され、その下端に縄文原体による押圧が加えられる。内外面共にナデが加えられ、赤彩される。11も口唇部に縄文が施され、縄文帯の下端に押圧が加えられる。内外面共にナデが加えられ、赤彩される。12も口唇部に縄文が施され、下端に縄文原体による押圧が加えられる。外面はナデが加えられ、内面はヘラミガキされる。内外面共に赤彩される。13は鉢と考えられる。外面には羽状縄文が施され、その下部に、S字結節文が施される。内面はナデが加えられ、赤彩される。14は甕の破片である。内外面共にヘラナデされる。輪積み部を段状に残し、押圧が加えられる。15は鉢の破片である。口縁部に羽状縄文が施される。S字結節文で区画される。それ以下は無文となりヘラナデされ、さらに赤彩される。口唇部にも縄文が施される。内面はヘラミガキされ、赤彩される。

(44)　44（048A）号跡（第91・92図）

遺構（第91図）

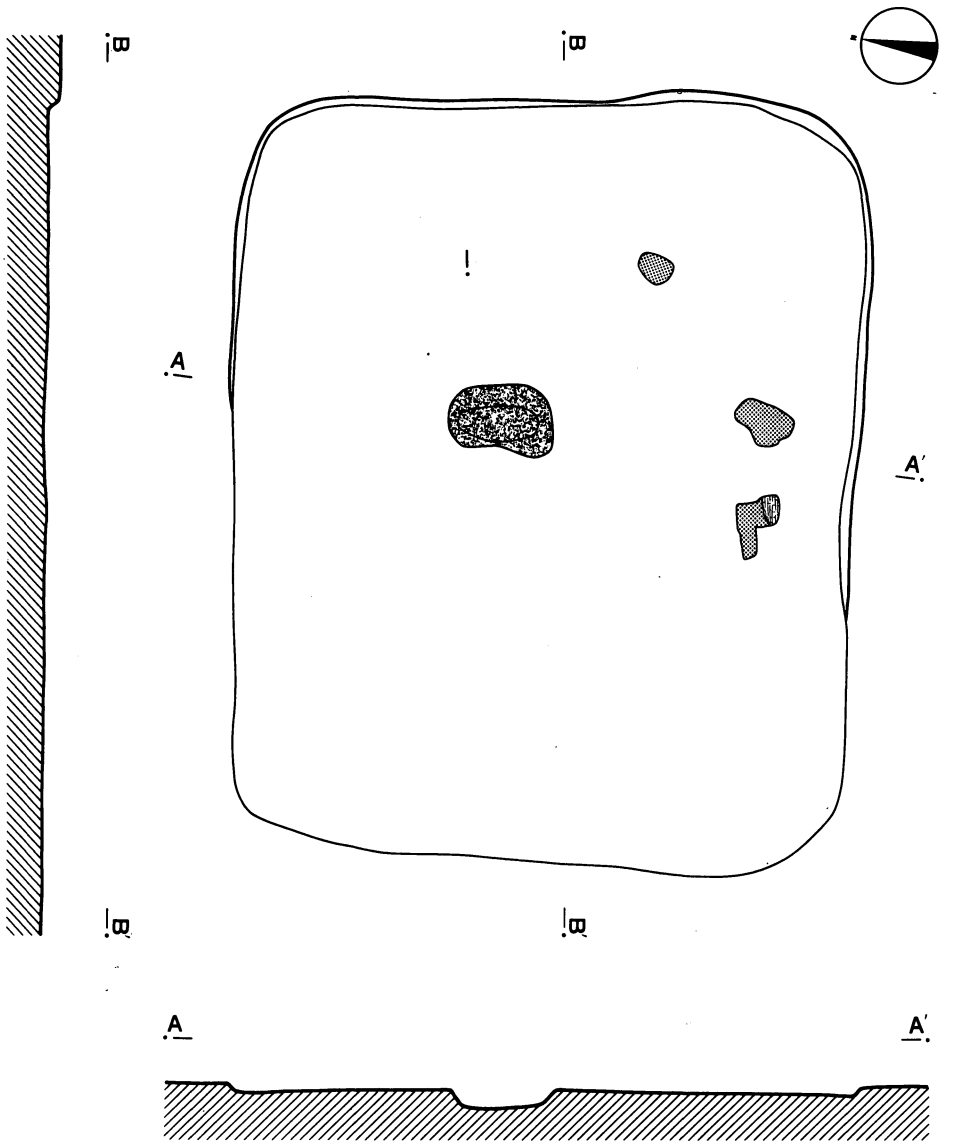
43号跡の南西1mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ内に存在していたが、確認できなかった遺構である。

プランは5.9×4.9mの隅丸長方形を呈する。壁は½しか遺存しておらず、やや傾斜を持って立ち上がる。壁高は0.05～0.1mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻であり、特に炉跡の周辺が良好である。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.8m、短軸0.5mの不整な長円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、中央部に焼土が堆積しており、底面もあまり焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお床面からは若干の焼土と炭化材が検出された。

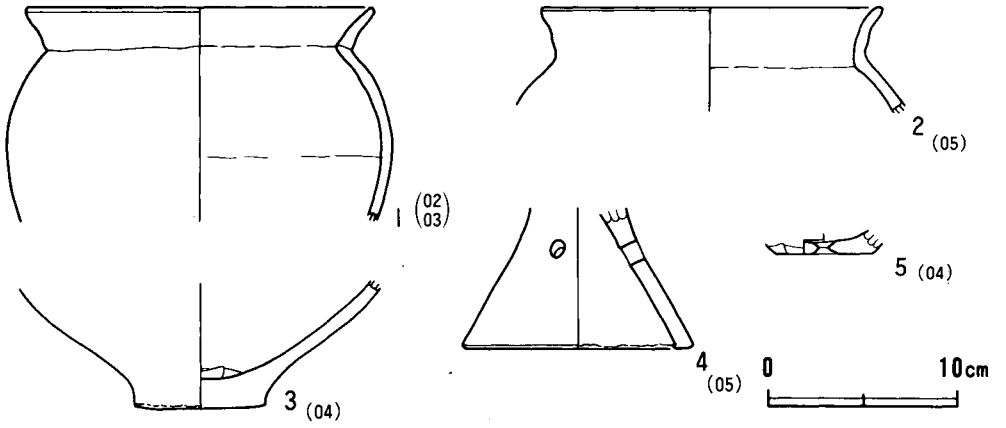
遺物（第92図）

出土遺物は少なく、5点の土器が図示できたのみである。1は炉跡の東側で床面直上から出土したもので、2～5はいずれも覆土中から出土したものである。

1は甕で⅔ほど遺存する。輪積み成形され内外面共にヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共良好で褐色を呈する。口径18cmを測る。2は甕の⅓の破片である。内外面共にヘラナデ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径17.8cmを測る。3は壺の胴部下半～底部の½破片である。外面は粗いヘラナデ、内面は粗くヘラミガキされ、底部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径6.8cmを測る。4は器台の⅔破片である。内外面共に粗くヘラナデされる。脚孔は3孔所在する。胎土は砂粒を多く含み、粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。脚径12cmを測る。5は壺の底部の⅓破片である。焼成後の穿孔を有する。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径5.1cmを測る。



第91図　44(048A)号跡実測図(1/60)　0　2m



第92図　44(048A)号跡出土土器(1/4)

(45)　45（048B）号跡（第93・94図）

遺構（第93図）

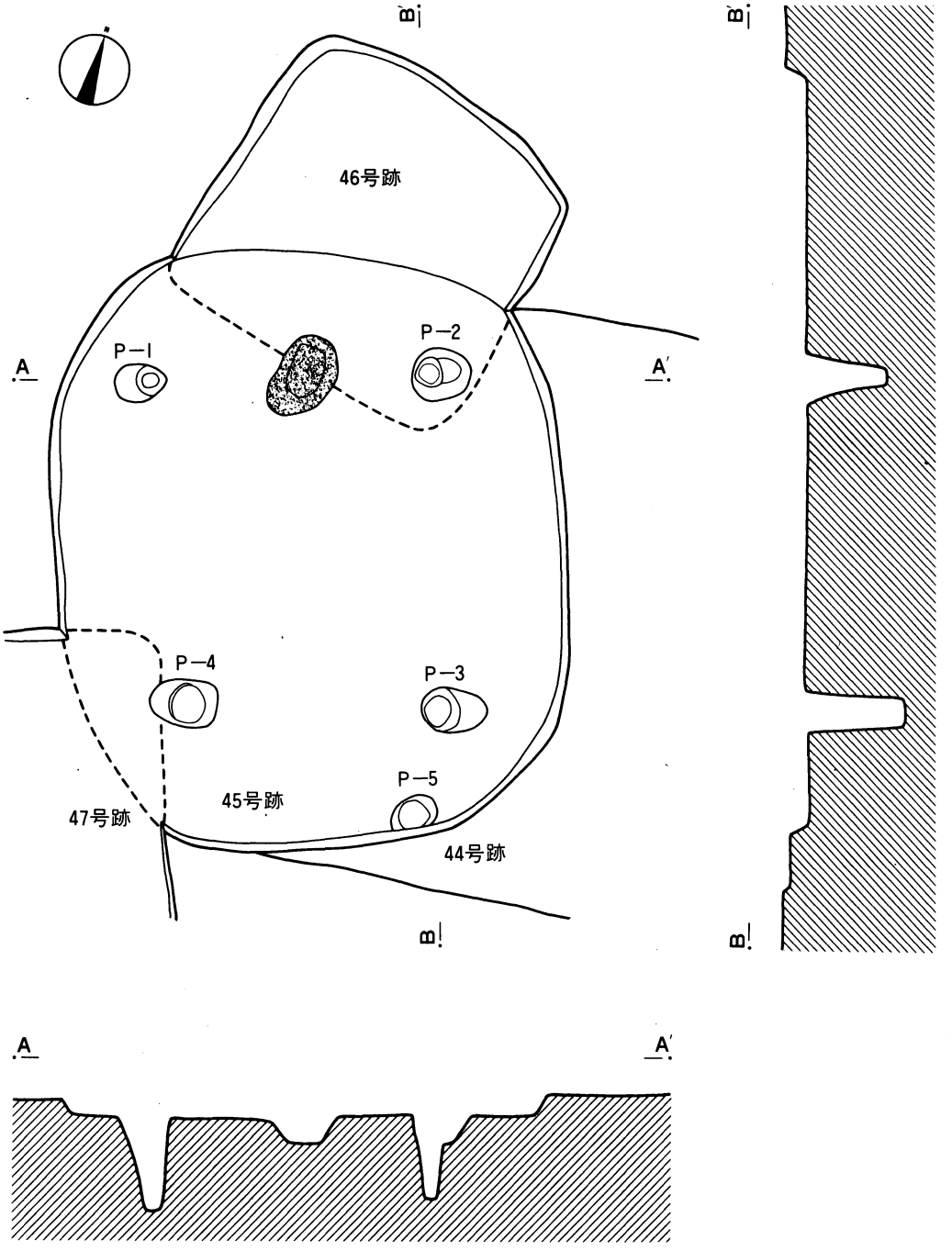
44、47、46号跡と重複する住居跡で、44号跡の床面をはがして検出したものである。したがって本跡より44号跡の方が新しいことは確実であるが、47、46号跡との新旧関係は不明である。

プランは5.0×4.4ｍのやや胴張りの隅丸長方形を呈する。壁は重複によって⅗ほどしか遺存していないが、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2ｍ前後を測る。床面はほぼ平坦で極めて堅緻であり、ほぼ同じレベルだが軟弱であった46号跡の床面と区別することができた。ピットは5本検出した。P－1～P－4は形態、直径にやや差があるが、深さは0.7～0.8ｍと共通しており、柱穴と考えられる。P－5は約0.2ｍの深さを持つピットで、位置からすれば貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北寄りのP－1とP－2の中間に検出した。長軸0.7ｍ、短軸0.5ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは0.2ｍほどで、中央部に焼土が堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

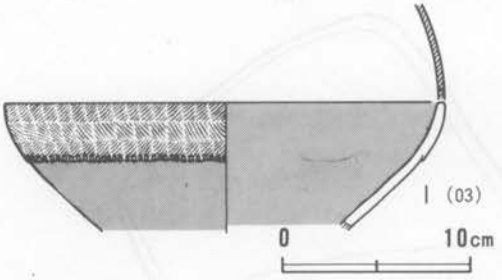
遺物（第94図）

出土遺物は極めて少なく、炉跡中から出土した鉢が図示できたのみである。

1は折り返し口縁を有する鉢の⅖の破片である。口縁部には細縄文を3段に施文し、その下端部には縄文原体による押圧が加えられている。口唇部にも細縄文が施文される。内外面共にミガキに近いナデが施され、赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径23.2cmを測る。



第93図　45・46(048B・E)号跡実測図(1/60)



第94図　45(048Ｂ)号跡出土土器(1/4)

（46）　46（048Ｅ）号跡（第93図）

遺構（第93図）

45号跡と重複する遺構で、住居跡としては疑問の残る遺構である。前述のように45号跡との新旧関係は不明である。

プランは45号跡と重複しているため全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が2.8ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は、0.2ｍ前後を測る。床面はほぼ平坦で、45号跡の床面と同レベルであり、極めて軟弱である。ピット、炉跡等は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物は全く出土していない。

（47）　47（048Ｃ）号跡（第95・96図）

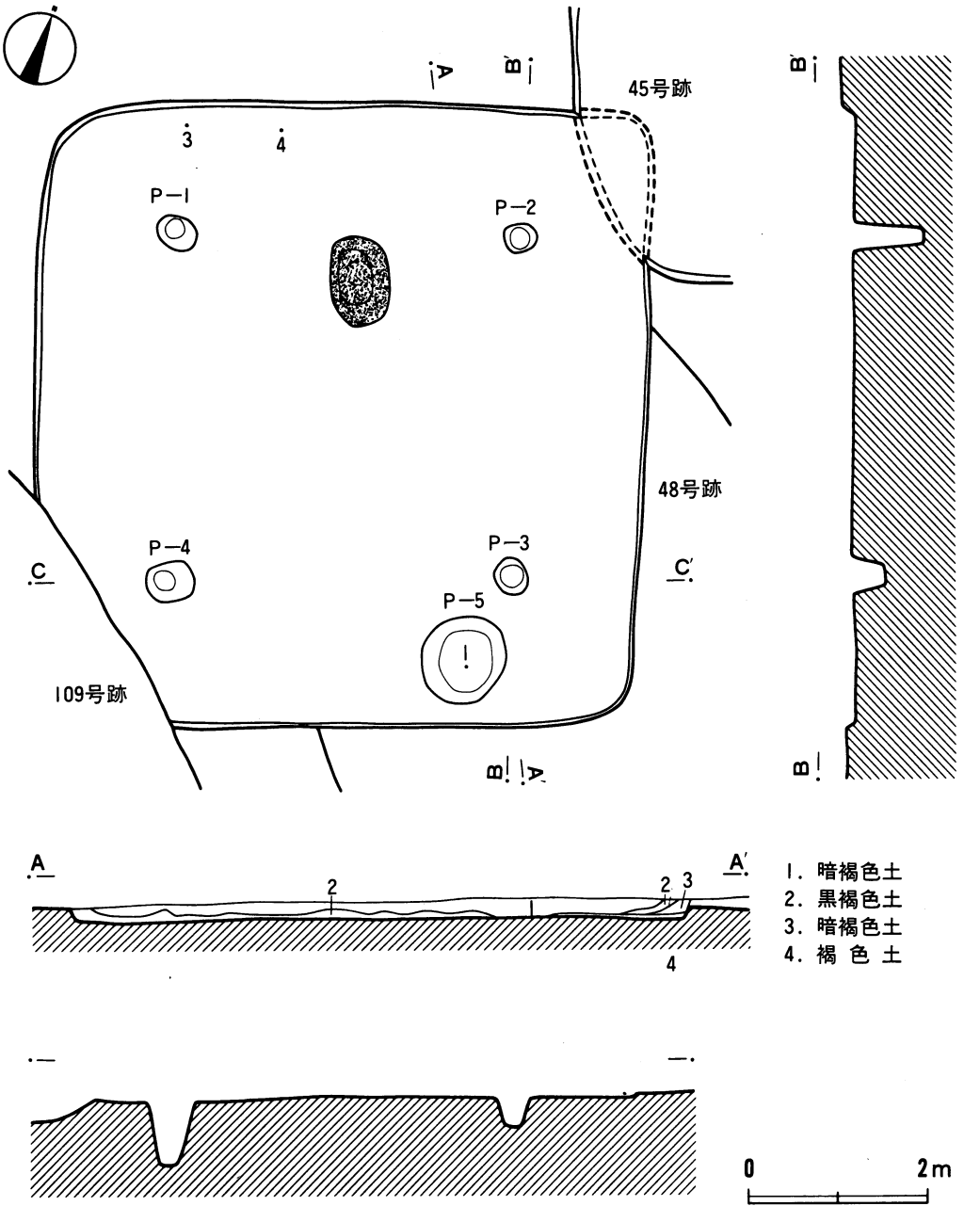
遺構（第95図）

45、48、109号跡と重複する住居跡で、109号跡によって本跡の床面が切られているため、109号跡の方が本跡より新しいことは確実である。また、48号跡の覆土を本跡が切っていることにより、本跡の方が新しい。45号跡との新旧関係は不明であるが、プランからすれば、本跡の方が新しい。

プランは、一辺が6.8ｍの隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で極めて堅緻である。ピットは5本検出した。Ｐ－1、Ｐ－2、Ｐ－4は0.6～0.8ｍの深さを測り、Ｐ－3は浅く0.36ｍを測る。いずれも柱穴と考えられる。Ｐ－5は0.25ｍの深さを測るピットで、貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北寄り、Ｐ－1とＰ－2の中間に検出した。長軸1.0ｍ、短軸0.6ｍの長楕円形を呈する。掘込みは0.2ｍほどで、焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は4層に分けられた。なお、覆土中からは炭化材と焼土が検出された。

遺物（第96図）

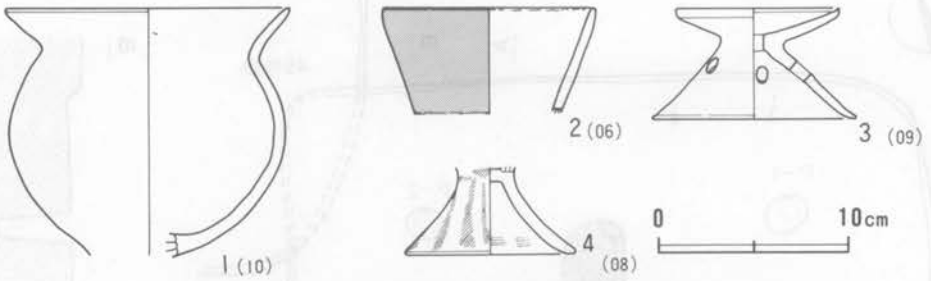
出土遺物は少なく、4点の土器が図示できたのみである。1はＰ－5の中から倒立した状態



第95図　47(048C)号跡実測図(1/80)

で出土したものである。3と4は北側の壁近くの床面直上から出土したもので、2は覆土中から出土したものである。なお、炉跡内から性格不明の土製品が出土している。

1は底部を欠く甕で⅔ほど遺存する。内外面共に粗いヘラナデが施され、口縁部はヨコナデされる。胎土は砂粒を多く含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径14.8cmを測る。2は壺の口縁部の⅓破片である。内外面共にナデが施される。胎土、焼成共に良好で赤



第96図　47(048C)号跡出土土器(1/4)

褐色を呈する。口径11.2cmを測る。3は器受部をわずかに欠失する器台である。器受部外面はナデ、脚部外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はナデられる。脚孔は3孔所在する。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。器受部径8.5cm、脚径10.6cm、器高5.8cmを測る。4は器台の脚部であろうか。外面はハケ目の上を粗くヘラミガキされ、内面はハケ目の上にナデが施されている。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。

(48)　48(048D)号跡(第97図)

遺構(第97図)

47、49号跡と重複する住居跡で、前述のように47号跡に切られるが、49号跡との新旧関係は不明である。

プランは、重複によって全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が6.0m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.15mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは2本検出した。P－1、P－2共に0.7m前後を測り、柱穴と考えられる。炉跡は検出されなかった。048C号跡によって破壊されたものと思われる。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物は覆土中から土器片がわずかに出土したのみで、図示できるものはない。

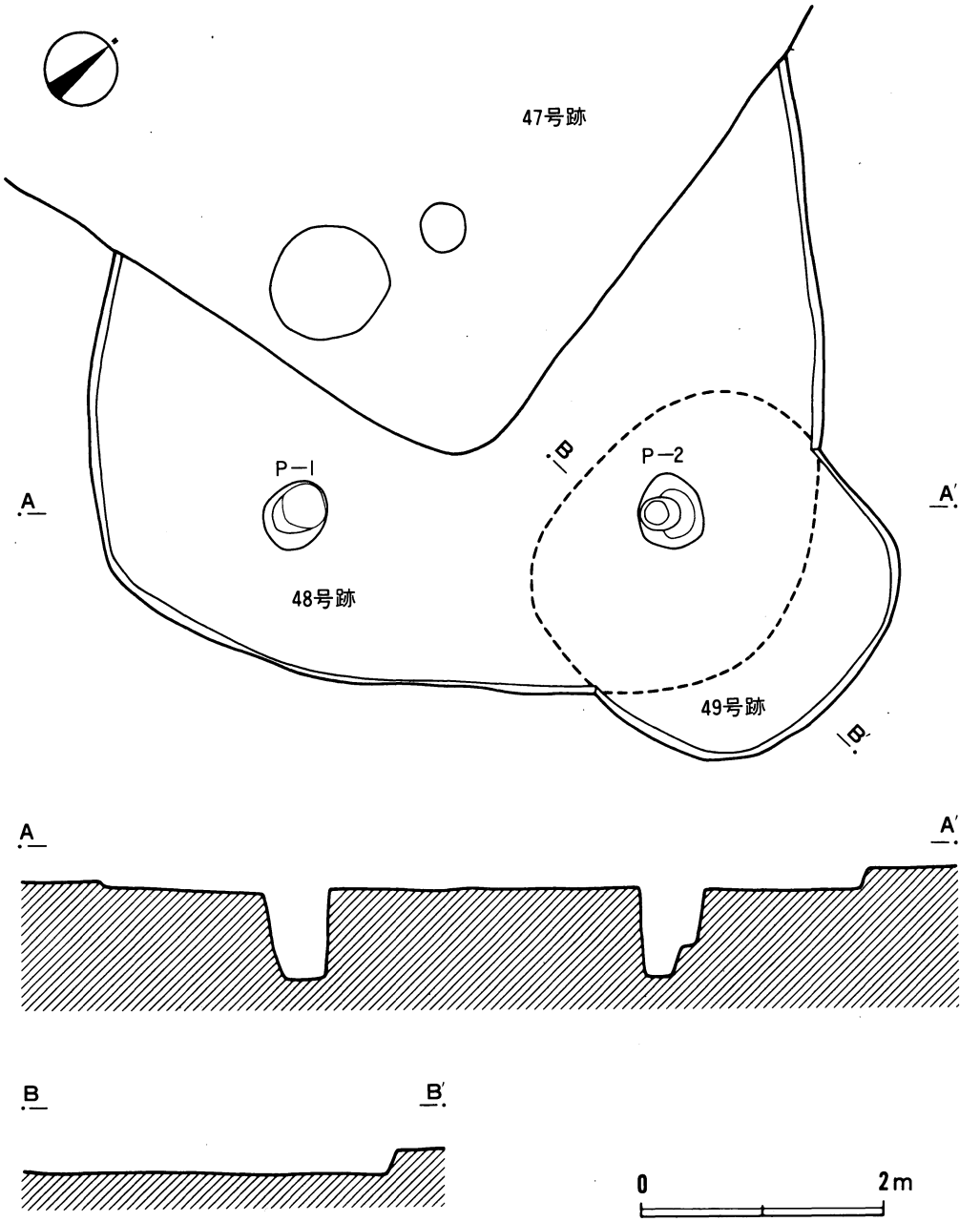
(49)　49(048F)号跡(第97図)

遺構(第97図)

48号跡と重複する遺構で、住居跡としては疑問が残る遺構である。前述のように48号跡と新旧関係は不明である。

プランは、48号跡と重複しているため全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が2.6mの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2mを測る。床面は極めて軟弱で、48号跡と重複する部分ではほぼ同レベルであるが、東側でやや低くなる。ピット、炉跡等は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土はロームブロックを含む茶褐色土の単一層であった。

遺物は覆土中から土器片がわずかに出土したのみで図示できるものはない。



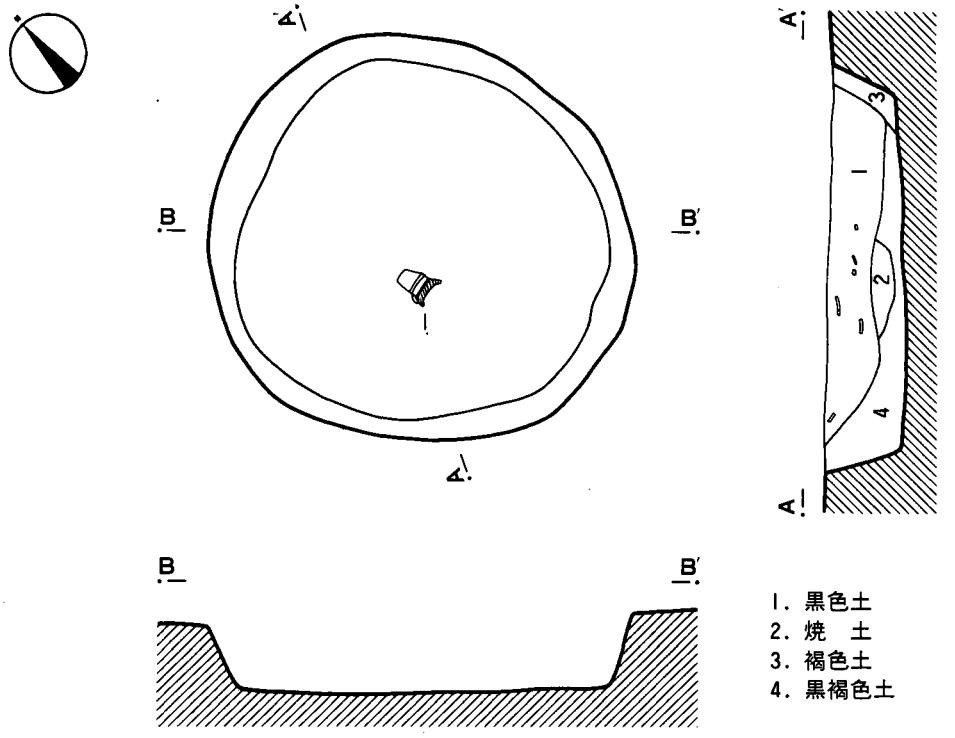
第97図　48・49(048D・F)号跡実測図(1/60)

(50)　50（049）号跡（第98～102図）

遺構（第98図）

40号跡の南6mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ内にその一部が存在していたが、確認できなかった遺構である。

プランは径3.3mの円形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.6m前後としっかりした掘込みを有する。床面はほぼ平坦で極めて堅緻である。ピット、炉跡等は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は4層に分けられ、焼土の堆積が注目される。

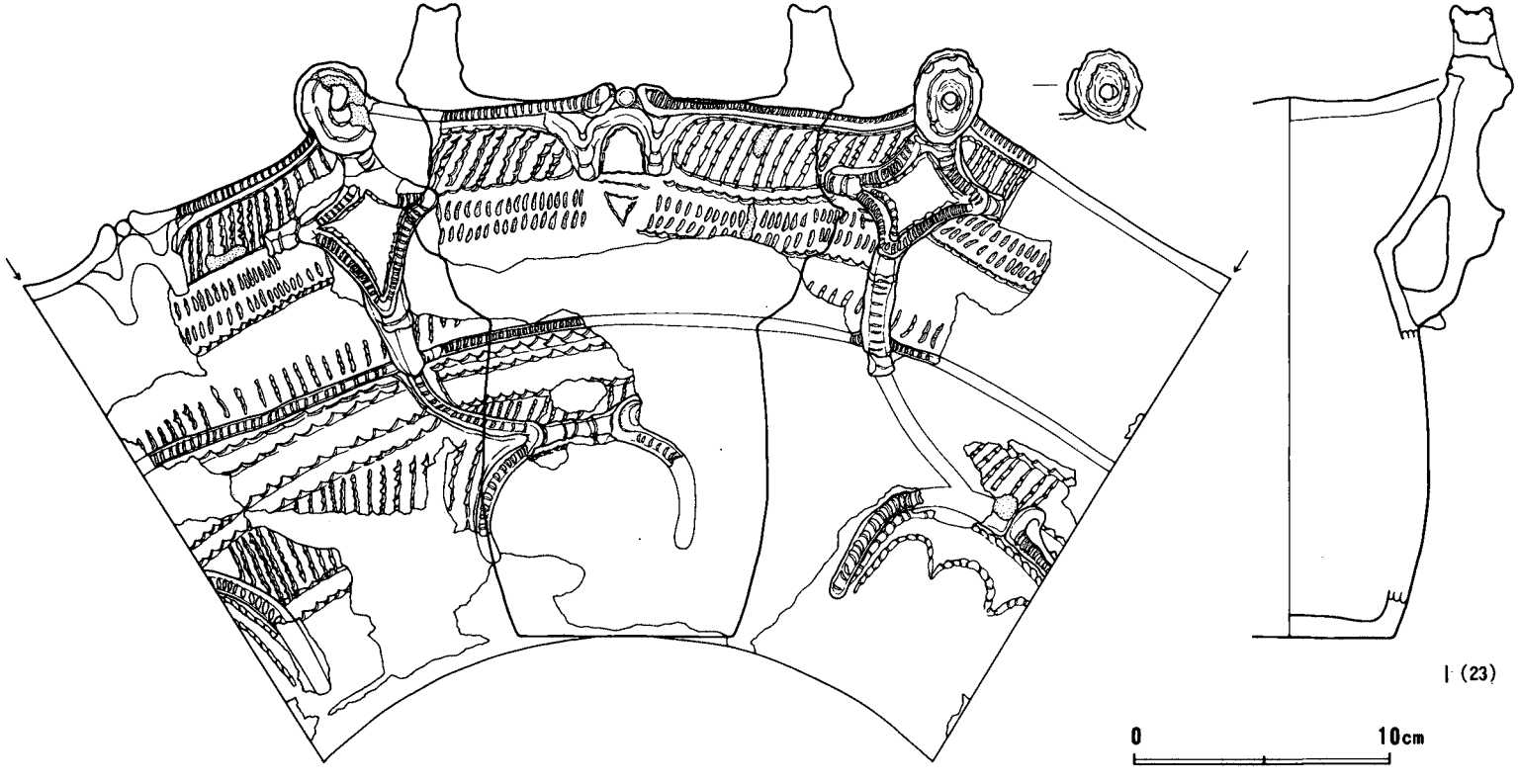


第98図　50(049)号跡実測図(1/60)

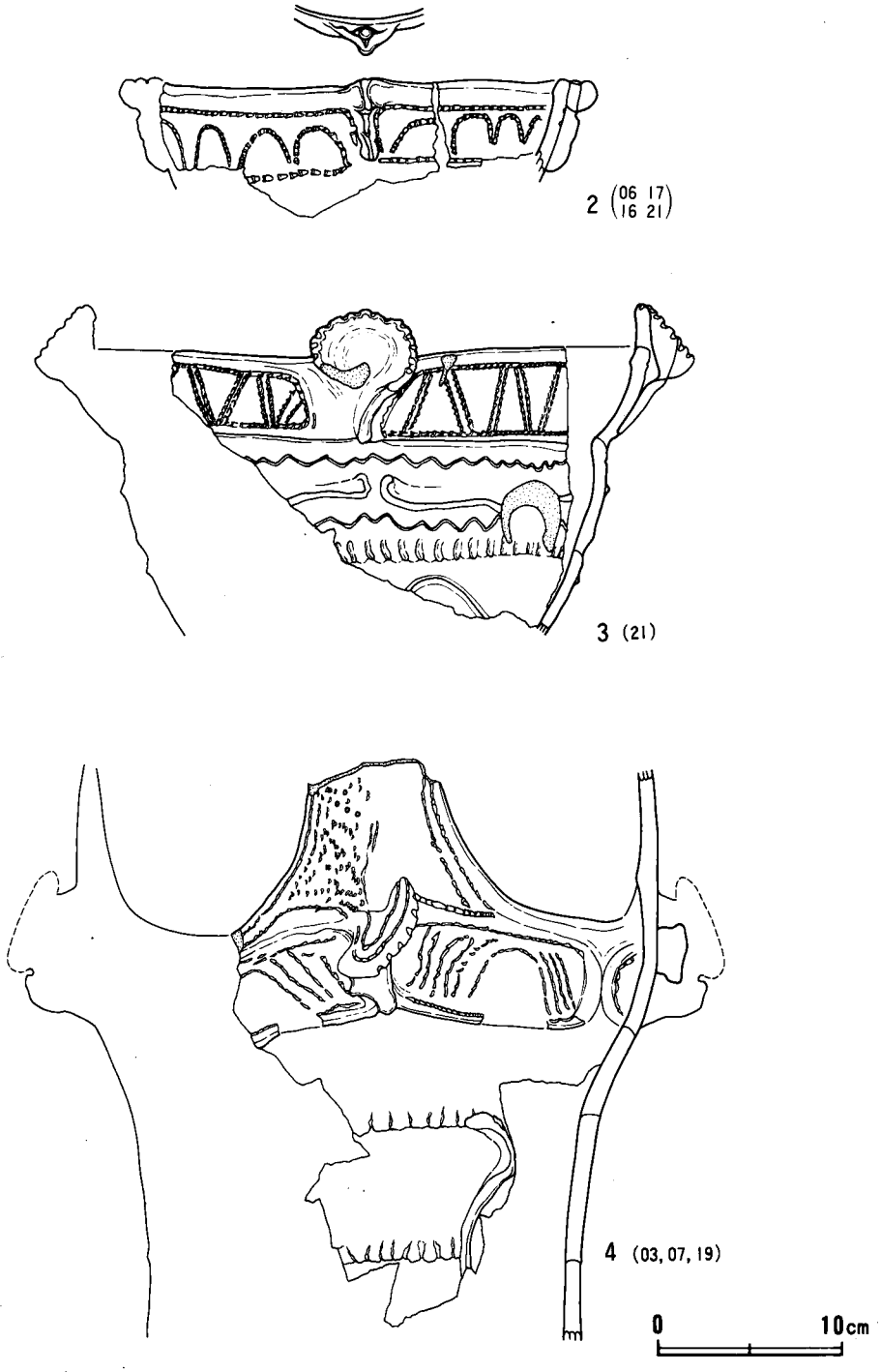
遺物（第99～102図）

出土遺物は極めて多く、覆土中から多量の土器片が出土しているが、大半は第1層から出土したものである。1は住居跡の中央やや西寄りで床面からやや浮いて出土したものである。2～14は覆土中から出土したものである。この他石器が3点と、土製円板が11点出土している。

1は深鉢で、口縁部は¾、胴部では½遺存する。口縁部には環状部を有する把手と粘土紐を中心に貼付した小波状部とが交互に配される。これらによって口縁部文様帯は分帯される。胴部上半には隆帯が一条めぐり、胴部中位にはX字状の隆線が配される。器面には角押文、有節



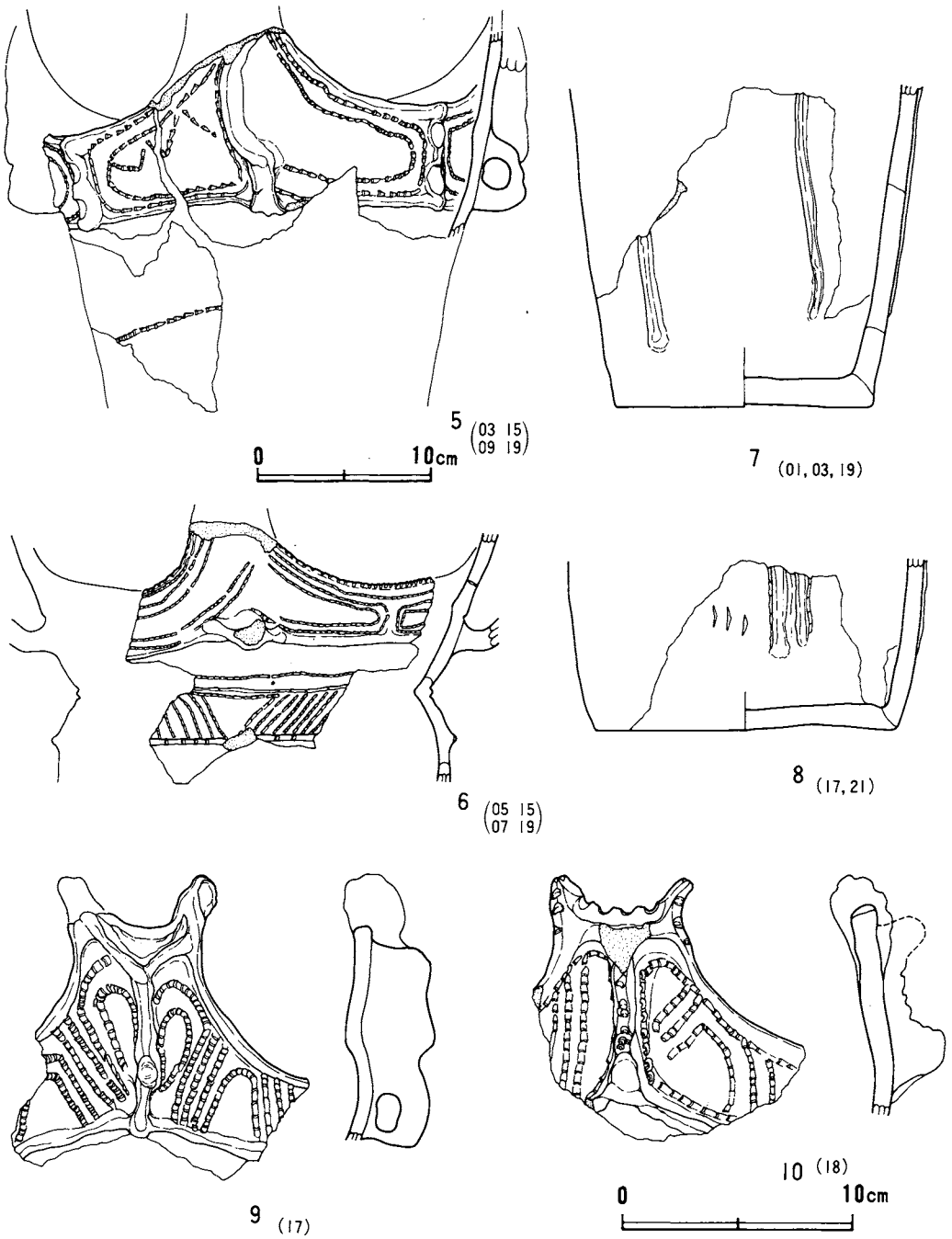
第99図　50(049)号跡出土土器(１)(1/3)



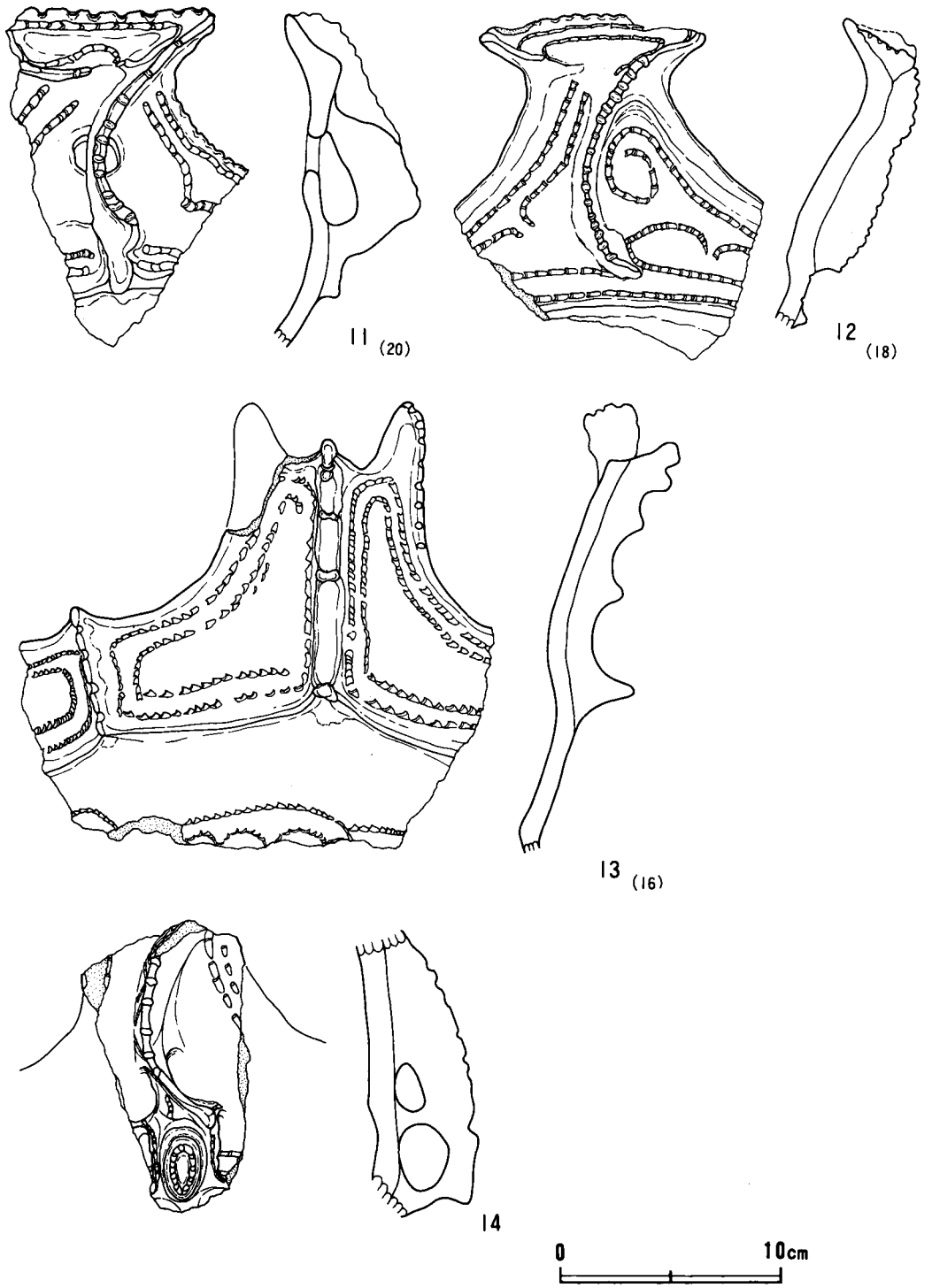
第100図　50(049)号跡出土土器(２)(1/4)

線文、爪形文等が施される。口径12.6cm、底径8.4cm、器高25.2cmを測る。２は深鉢の口縁部で⅔遺存する。口縁部には粘土棒を芯にした小突起を４単位有するものと思われる。口縁部文様帯には角押文による窓枠状の区画がなされ、その内側には角押文が波状に施文される。口径

22cmを測る。3は深鉢の破片で口縁部～胴部にかけて⅓遺存する。口縁部には4単位の把手を有する。口縁部文様帯は微隆起線によって区画された後、角押文によって窓枠状の区画がなされ、区画内にも角押文が施文される。胴部には微隆起線、波状沈線文、ひだ状文などが施される。また、把手がつけられていた痕跡も残る。口径29.6cmを測る。4は深鉢で、口縁部は½、胴部は⅕遺存する。4単位の板状把手に外耳状把手、環状把手が連結するものである。口縁部



第101図　50(049)号跡出土土器(3)(1/3・1/4)



第102図　50(049)号跡出土土器(４)(1/3)

には角押文、列点文が施文される。胴部にはひだ状文、隆起線文が施される。5は深鉢の口縁部～胴部にかけての破片で、口縁部は⅓遺存する。3単位の波（板）状把手を有する。口縁部および胴部には角押文が施文される。6は深鉢の口縁部～胴部にかけての¼破片である。4単位の板状把手を有するが、本来はさらに環状把手が連結していたと思われる。口唇部には半截竹管による刻みが施される。器面には角押文が施される。7、8は深鉢の胴部～底部の破片である。いずれも微隆起が貼られるが、8には爪形文も施される。底径はそれぞれ10.8cm、12.6cmを測る。9～14は把手で角押文が施されるものである。

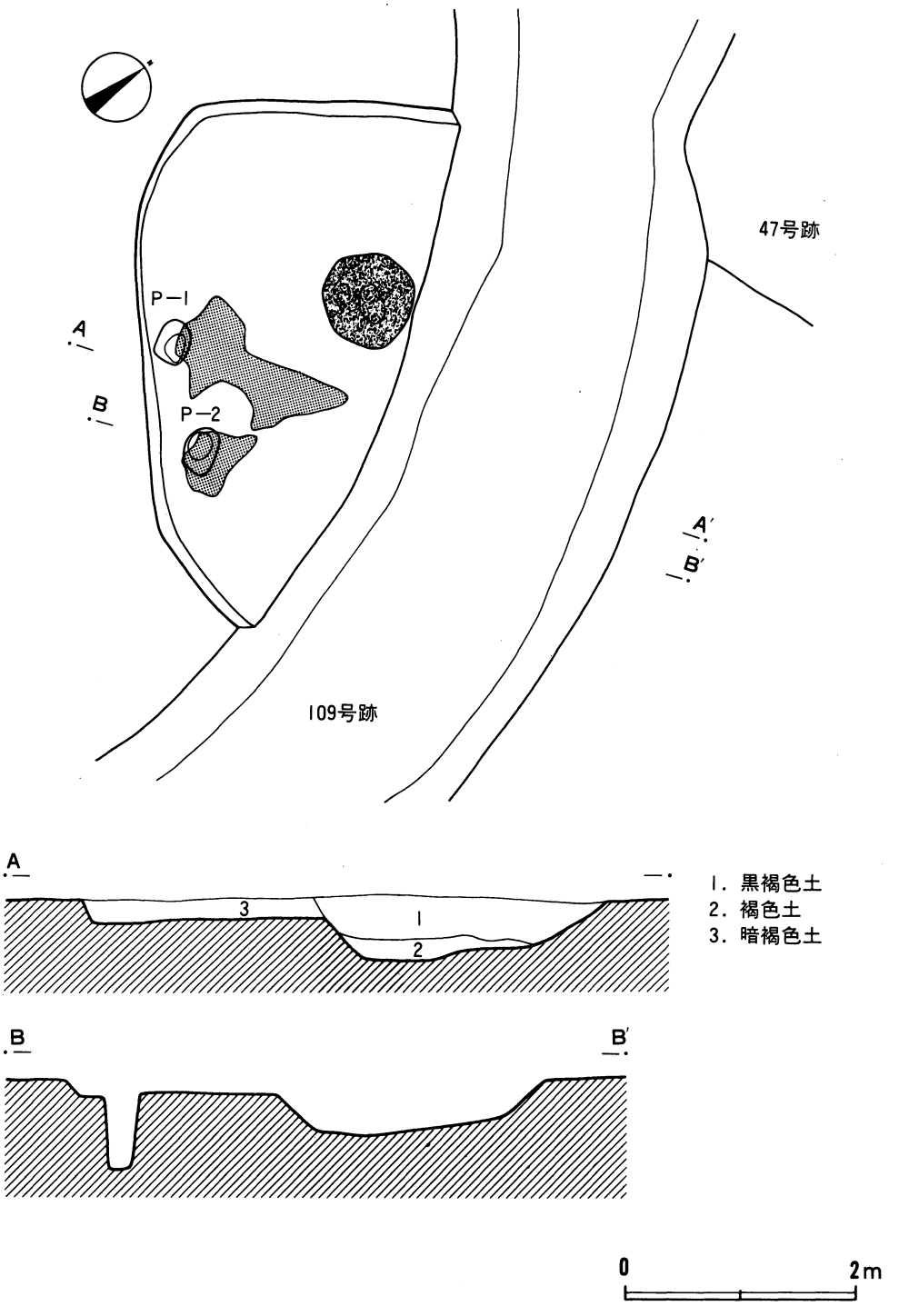
（51）　51（050）号跡（第103図）

遺構（第103図）

47号跡の南2mに位置する住居跡で、109号跡と重複する。確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の段階で確認された遺構である。109号跡との新旧関係は、109号跡によって本跡の覆土が切られているため109号跡の方が新しい。

プランは、109号跡と重複するため全形をとらえることはできないが、遺存している部分からして、ほぼ一辺が4.0m前後のやや不整な隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2mを測る。床面はやや凹凸に富み、軟弱である。ピットは2本検出した。P－1は0.38m、P－2は0.63mを測り、柱穴と考えられる。その他ピットは109号跡の周溝内においても検出されなかった。炉跡は住居跡のほぼ中央に検出した。0.8mほどの不整円形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土が南側に寄って堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、P－1、P－2の周辺の床面からは焼土が検出された。

遺物は覆土中からわずかに土器片が出土したのみで図示できるものはない。

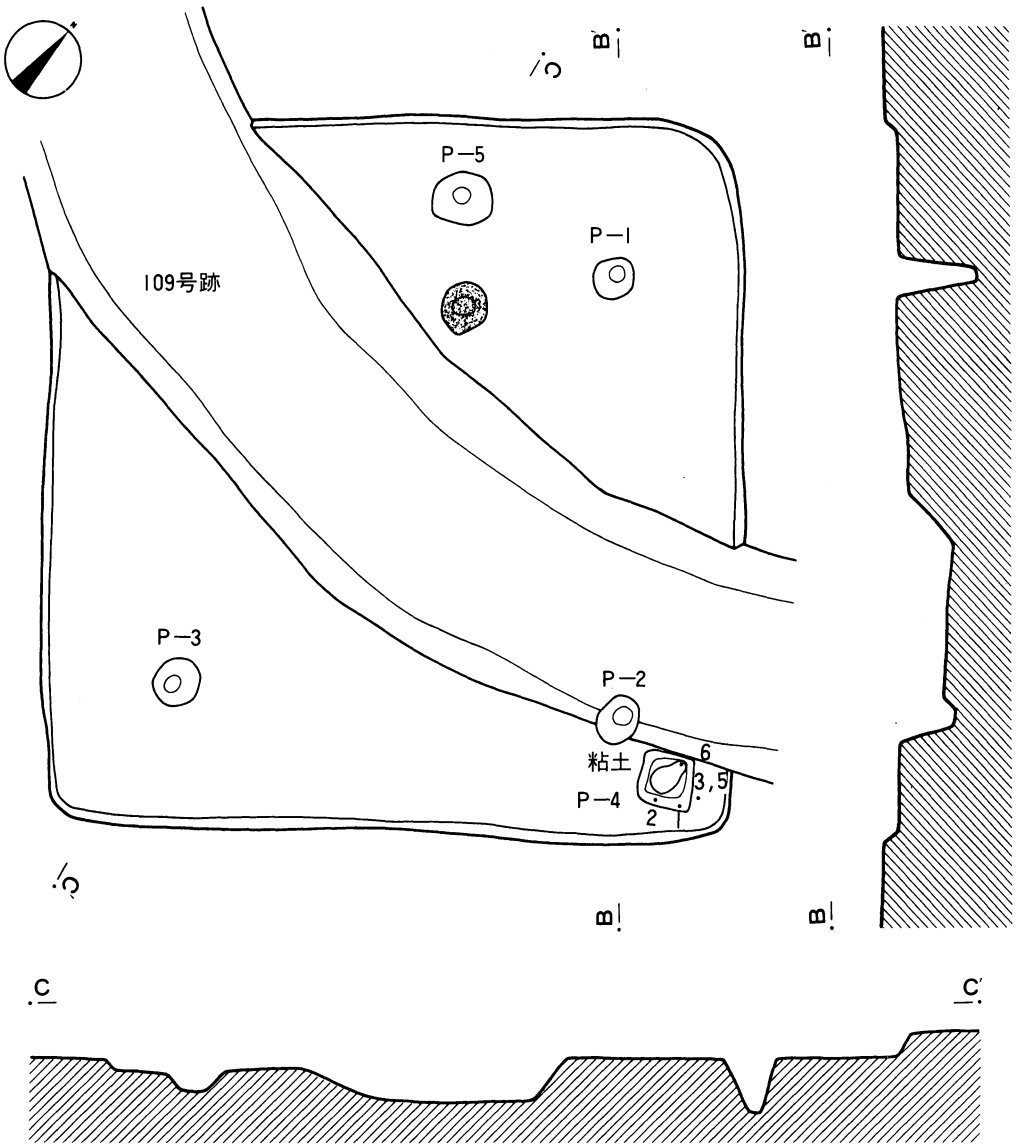


第103図　51(050)号跡実測図(1/60)

(52)　52（051）号跡（第104・105図）

遺構（第104図）

51号跡の南8mに位置する住居跡で、51号跡と同様に109号跡と重複する。確認調査の段階から109号跡と共にその存在が明らかになっていた遺構である。109号跡との新旧関係は、51号跡と同様、109号跡の方が新しい。



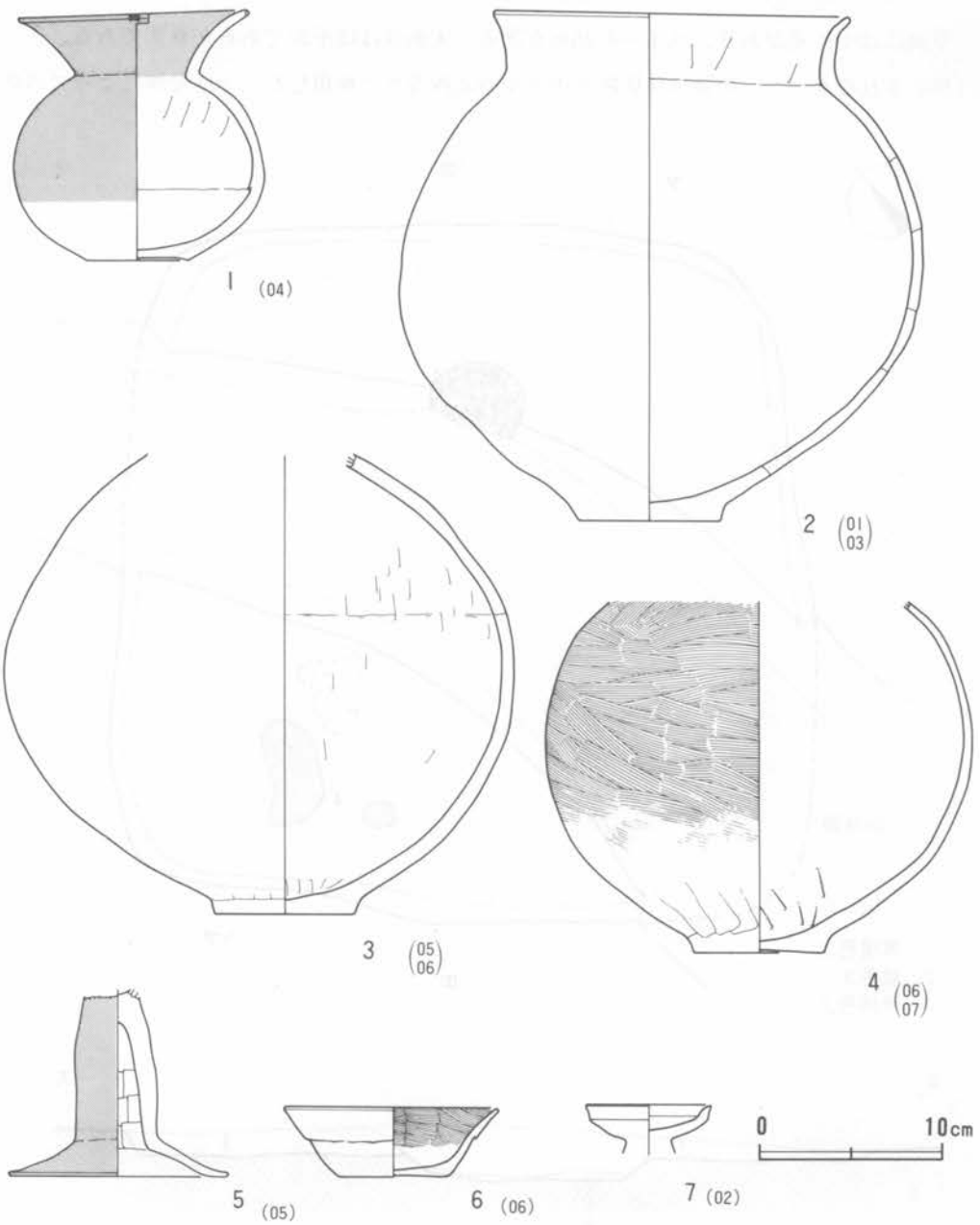
第104図　52(051)号跡実測図(1/80)　0　2m

プランは一辺が7.4ｍのやや隅丸の方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2ｍを測る。床面は軟弱で、北側でやや低くなる。ピットは５本検出した。Ｐ－１～Ｐ－３は、0.6～0.8ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。Ｐ－４は方形のピットで、ピット内から粘土のブロックが検出された。深さ0.15ｍで貯蔵穴と思われる。Ｐ－５は深さ0.2ｍのピットである。炉跡は住居跡の中央北寄りに検出した。径0.5ｍの不整な円形を呈する。掘込みは0.1ｍほどで、焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物（第105図）

出土遺物は比較的多く、７点の土器が図示できた。１～４、６の５点はＰ－４内から出土したものである。５はＰ－４脇の床面直上から出土したもので、７は覆土中出土のものである。

１は口唇部をわずかに欠失するがほぼ完形の壺である。口縁部外面はヘラナデ、胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。口縁部内面はヘラミガキ、胴部内面はヘラナデされる。胴部内面には輪積み痕が残る。口唇部には３本１組の刻みが施される。底部を除く外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は褐色を呈する。口径12.3cm、底径5.5㎝、器高13.5cmを測る。２は輪積み成形の甕で口縁部のみ½欠失する。外面上半はヘラナデ、下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を多く含み、やや粗く、焼成もやや悪い。茶褐色を呈する。口径19cm、底径7.6㎝、器高27.4cmを測る。３は口縁部を欠失する壺で、胴部は⅔遺存する。内、外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径7.5㎝を測る。４は口縁部を欠失する甕で胴部は½遺存する。外面はハケ目が施され、胴下半部から底部にかけてはヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径7.0cmを測る。５は高坏の脚部で⅔ほど遺存する。外面はヘラミガキされ、内面はヘラケズリされ、脚裾部はヨコナデされる。外面のみ赤彩される。胎土、焼成共に良好で、内面は淡褐色を呈する。脚径11.7cmを測る。６は完形の坏である。外面はヘラナデされ、口縁部内面は細かいハケ目が残り、体部内面は粗くヘラナデされる。胎土には砂粒を多く含みやや粗いが焼成は良く、淡褐色を呈する。口径11.6cm、底径6.0㎝、器高3.6㎝を測る。７は器台の器受部の⅔破片である。内外面共にナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を多く含みやや粗く、焼成もやや悪い。器受部径6.8㎝を測る。



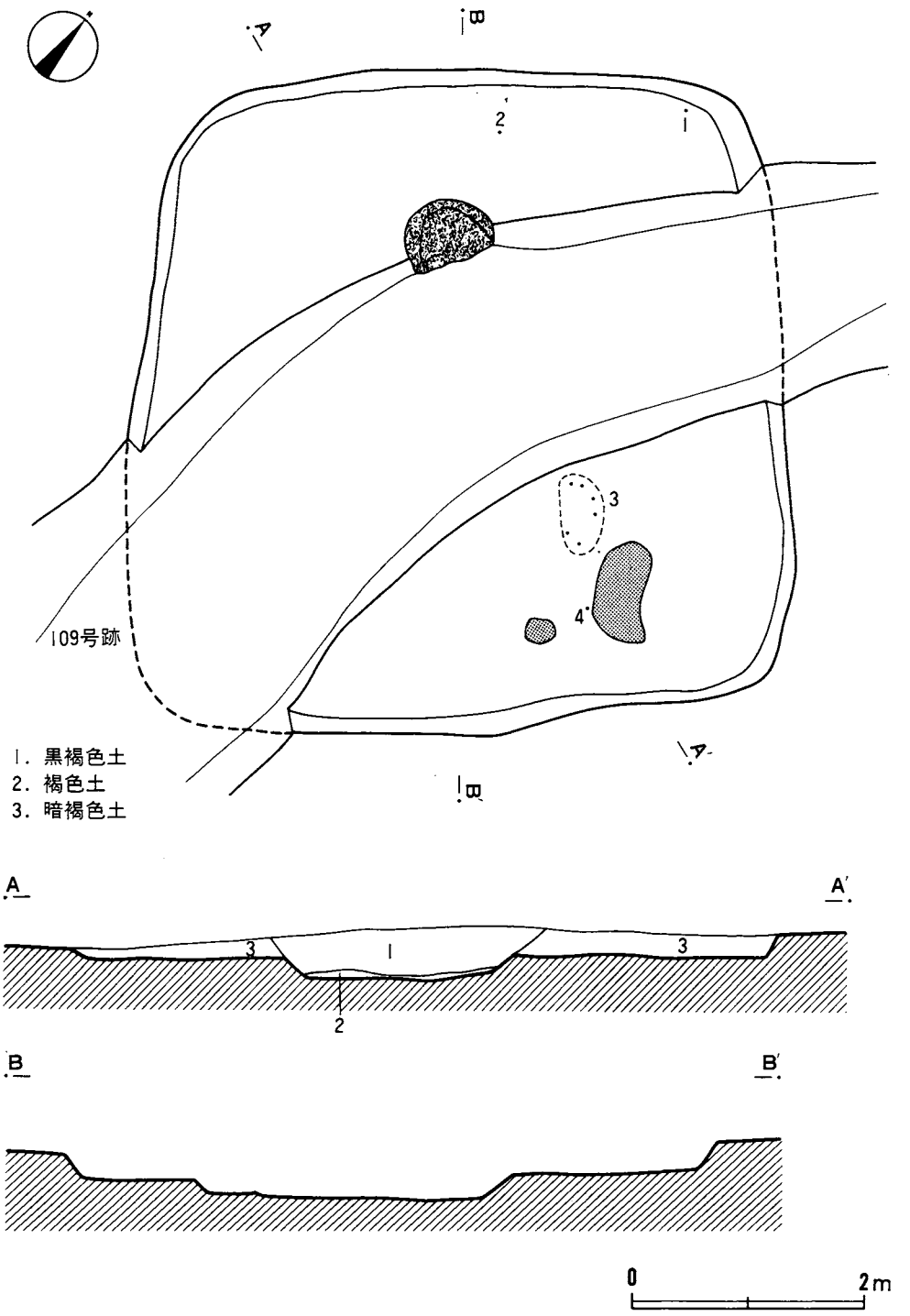
第105図　52(051)号跡出土土器(1/4)

(53)　53（052）号跡（第106・107図）

遺構（第106図）

51号跡の西10mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが東側コーナーにかかっており、その段階から存在が明らかになっていた遺構である。109号跡との新旧関係は51、52号跡と同様に109号跡の方が新しい。

プランは、一辺が約5.6ｍのやや不整な隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高にはやや差があり、0.1～0.25ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが軟弱である。ピットは検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。109号跡によって破壊

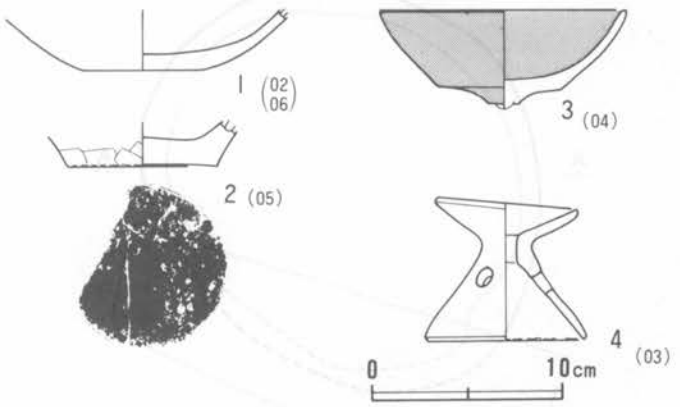


第106図　53(052)号跡実測図(1/60)

されており、半分ほどしか遺存していないが、本来は長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍの長円形を呈していたものと思われる。掘込みは0.1ｍほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、床面からは焼土が検出された。

遺物（第107図）

出土遺物は少なく4点の土器が図示できただけである。1と2は住居跡の北側床面からかなり浮いて出土したものである。3は住居跡の南側床面から3cm浮いて出土したもので、4は焼土のわきの床面直上から出土したものである。



第107図　53(052)号跡出土土器(1/4)

1は甕の底部破片である。内外面共にヘラナデが施される。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径6.2cmを測る。2は木葉痕を有する壺の底部の3/4破片である。外面はヘラケズリされ、内面はナデが加えられている。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径7.8cmを測る。3は高坏の坏部で口唇部をわずかに欠失するのみでほぼ完形である。脚部との接合痕を明瞭に残す。外面はナデ、内面はヘラミガキが施される。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径12.8cm。4はほぼ完形の器台である。外面と器受部内面はナデ、脚部内はヘラナデされる。脚孔は3孔所在する。胎土には中砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。器受部径7.3cm、径8.2cm、器高7.0cmを測る。

(54)　54（053）号跡（第108・109図）

遺構（第108図）

52号跡の南西5ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが、住居跡の3/5ほどにかかっていたため存在の確認されていた遺構である。

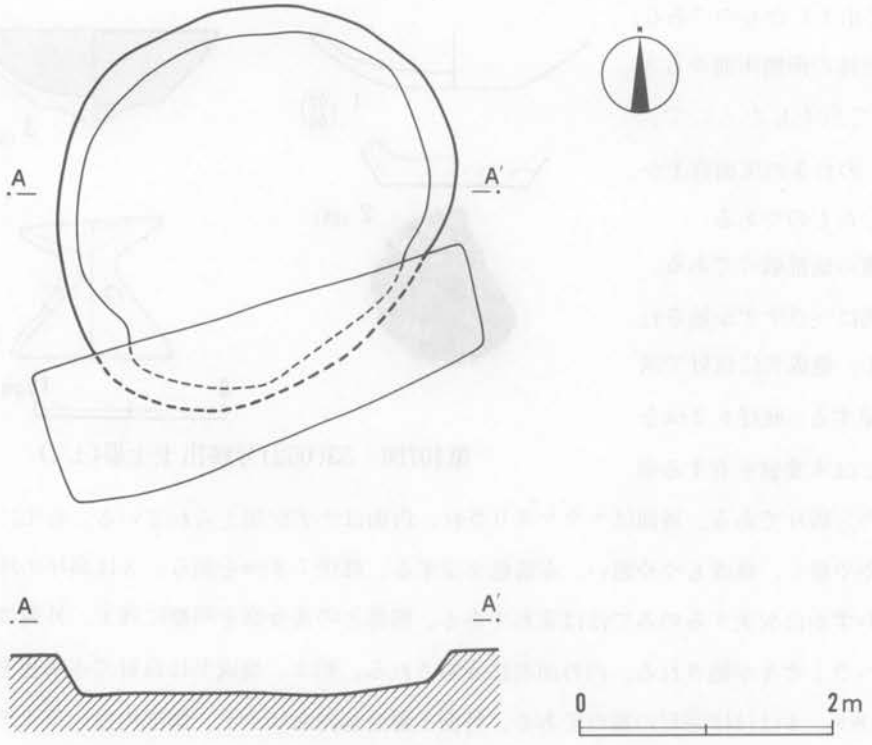
プランは、南側に大きな攪乱が入っているため全形をとらえることはできないが、遺存している部分からして、ほぼ径が3.5ｍほどの不整な円形を呈するものと思われる。壁は傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2～0.35mを測る。床面はほぼ平坦であるがやや軟弱である。ピット、炉跡は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は黒褐色土の単一層であった。

遺物（第109図）

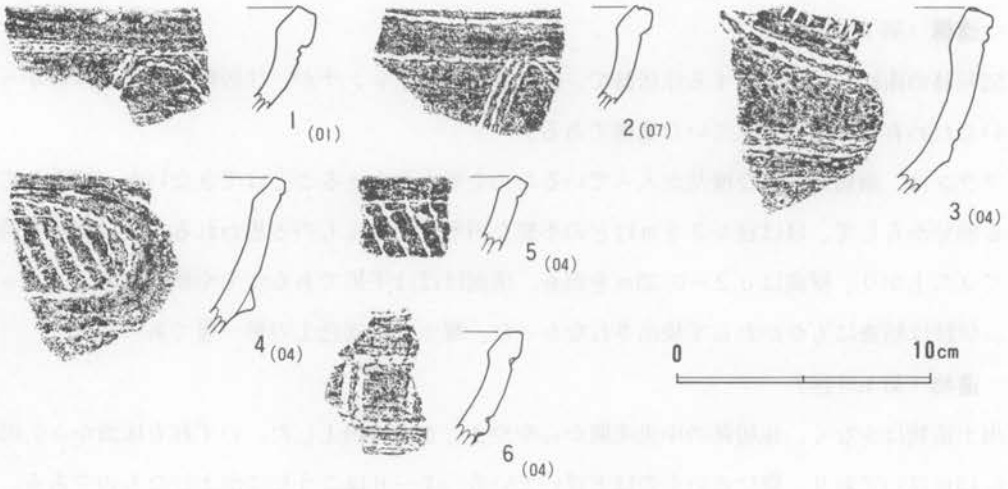
出土遺物は少なく、住居跡の中央北側からややまとまって出土した。いずれも床面から0.05～0.15m浮いており、壁に近いものほど浮いている。1～6はこうして出土したものである。

この他石器が2点と、土製円板が1点出土している。

1～6はいずれも深鉢の口縁部破片である。1～3、6は角押文が施文されるが、2は口唇部にも角押文が施文される。また、3は口唇部に刻みが施される。4、5は瓜形文が施されるが、4は隆帯による楕円形の区画がなされる。



第108図 54(053)号跡実測図(1/60)



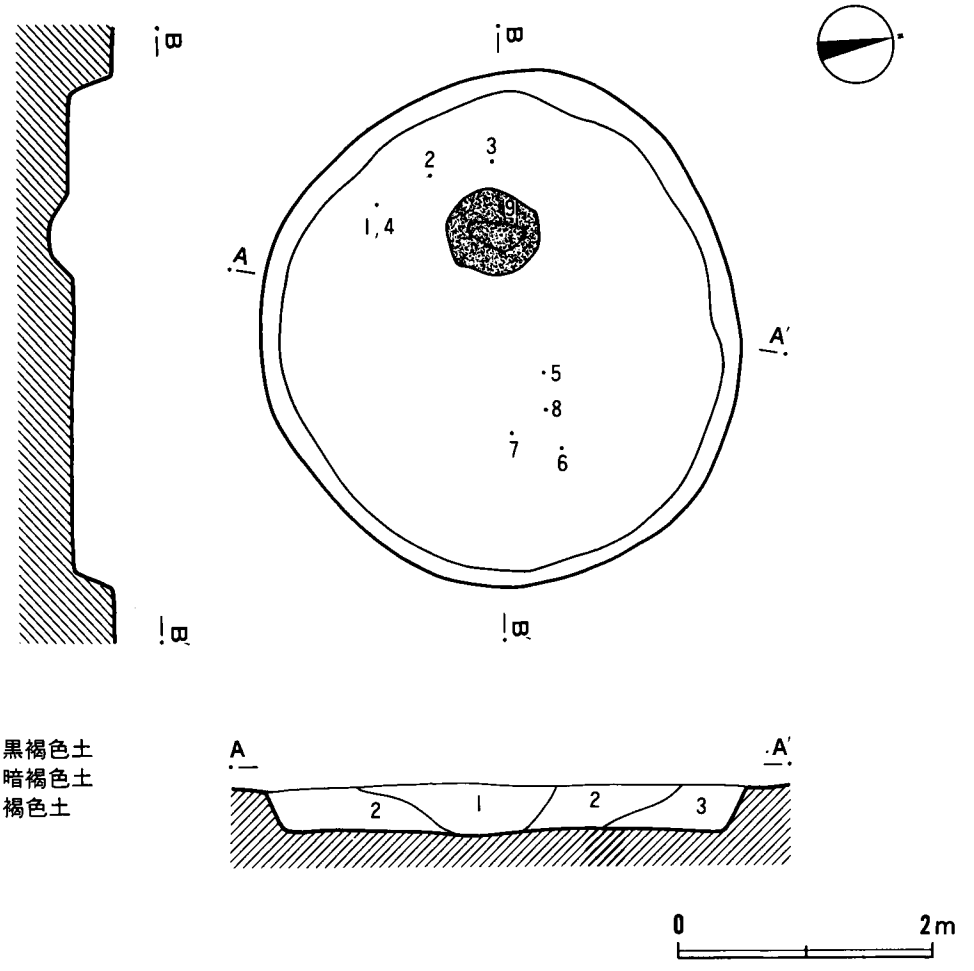
第109図 54(053)号跡出土土器(1/3)

(55)　55（054）号跡（第110・111図）

遺構（第110図）

52号跡の東15mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチにかかる部分がわずかで、その存在を確認できなかった遺構である。

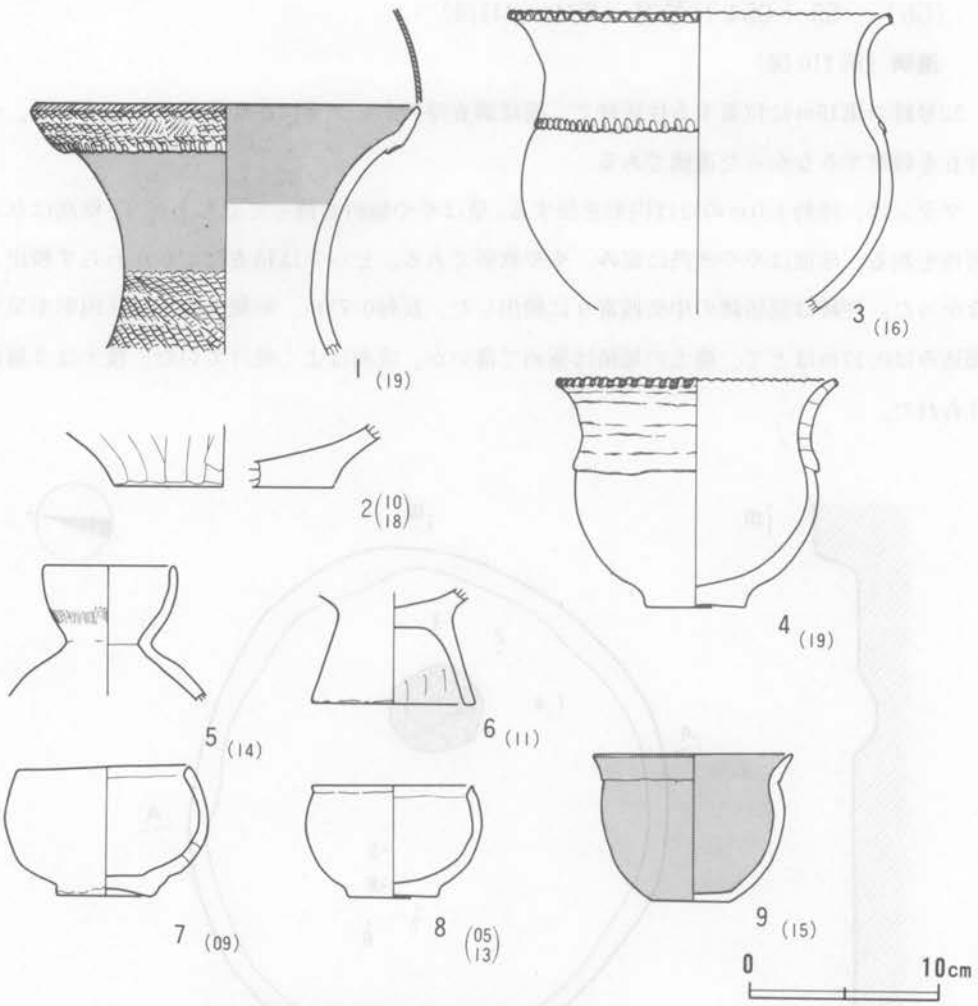
プランは、径約4.0mのほぼ円形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.3m前後を測る。床面はやや凹凸に富み、やや軟弱である。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央西寄りに検出した。長軸0.75m、短軸0.65mの長円形を呈する。掘込みは0.17mほどで、焼土の堆積は極めて薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。



第110図　55(054)号跡実測図(1/60)

遺物（第111図）

出土遺物は比較的多く、9点の土器が図示できた。1～4は炉跡の西側で1、3、4は床面直上、2は3cmほど浮いて出土したものである。5～9は床面から10cm前後浮いて出土したも



第111図　55(054)号跡出土土器(1/4)

のである。

1は壺で口縁部から頸部がほぼ完存する。口縁部には細縄文と網目状撚糸文を施し、下端部には刻み目を施す。部分的に網目状撚糸文の中に細縄文がみられる。頸部下半にはS字結節文と網目状撚糸文が施される。無文帯はヘラミガキされ、赤彩される。内面は上半部はヘラミガキされ、赤彩される。下半部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で内面は褐色を呈する。口径19.8cmを測る。2は壺の底部の½破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径11.4cmを測る。3は甕で⅔程遺存する。口唇部には指頭による押圧が加えられ、頸部と胴部との段にも押圧が加えられている。外面は粗くヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈する。口径20cmを測る。4はやや小形の甕で底部以外は½の遺存である。口唇部には縄文原体による押圧が加えられている。頸部には輪積み痕が残り、部分的に指頭で消される。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径14.6cm、底径5.2cm、

器高10.2cmを測る。５は壺で口縁部から胴部上半が完存する。外面には細かいハケ目が残り、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径6.7cmを測る。６は台付甕の脚台部である。外面はナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。器面の遺存状態は悪い。脚台部径8.4cmを測る。７は完形の埦である。輪積み成形痕を残す。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径8.9cm、底径5.0cm、器高6.7cmを測る。８もほぼ完形の埦である。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、淡褐色を呈する。口径8.4cm、底径4.6cm、器高5.8cmを測る。９はほぼ完形の鉢である。内外面共にナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。内外面共に赤彩される。口径10.5cm、底径4.0cm、器高7.6cmを測る。

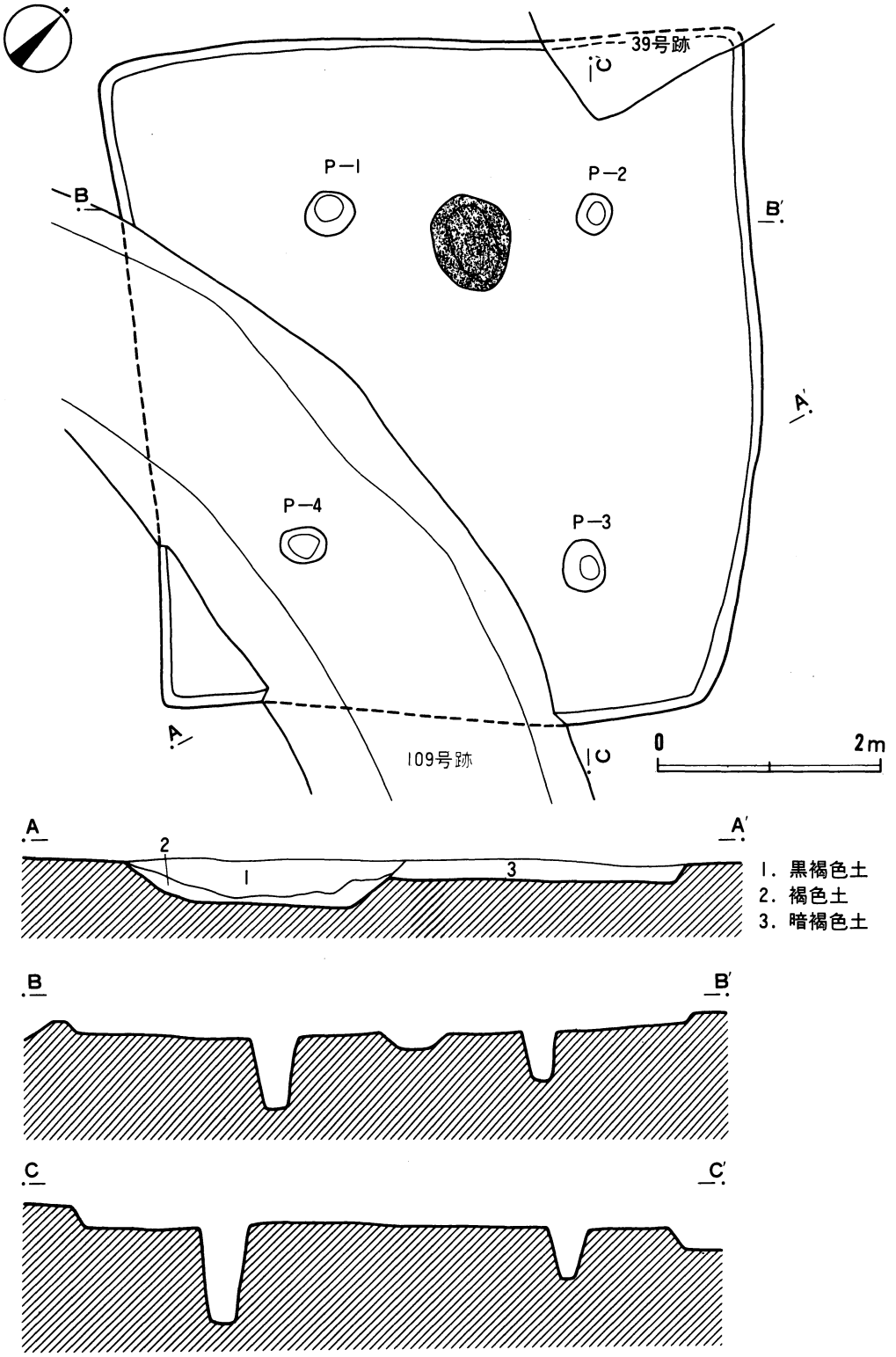
(56)　56（055）号跡（第112図）

遺構（第112図）

47号跡に近接して存在する住居跡で、確認調査時のトレンチが東側コーナーにかかっていたと思われるが、存在を確認できなかった遺構である。39、109号跡と重複し、新旧関係は本跡の方が古い。

プランは、6.0×5.5ｍほどのやや不整な長方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高にはやや差があり、0.1～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが、やや軟弱である。ピットは住居跡内に３本、109号跡の周溝中に１本の計４本を検出した。深さは、0.45～0.85ｍとかなり差があるものの、いずれも柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北西寄り、Ｐ－１とＰ－２の中間に検出した。長軸0.9ｍ、短軸0.7ｍの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土が全面にわたって堆積しており、底面もよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物は覆土中及び炉跡内から若干の土器片が出土したのみで、図示できるものはない。



第112図　56(055)号跡実測図(1/60)

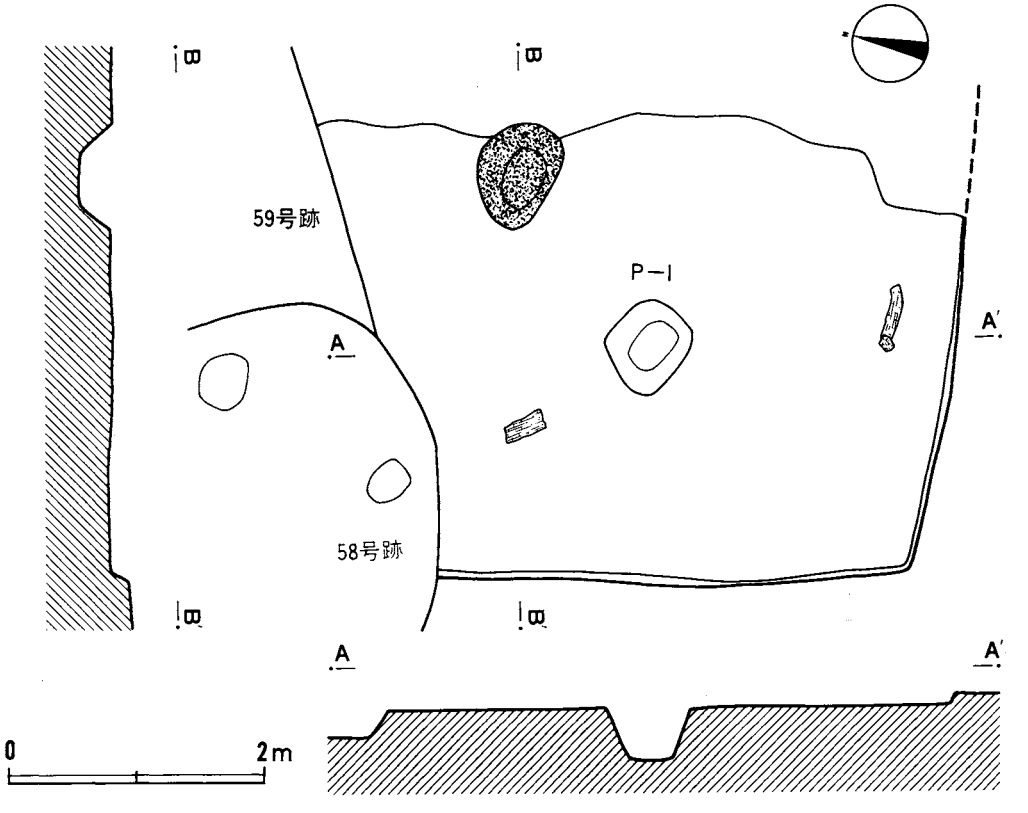
（57）　57（057A）号跡（第113図）

遺構（第113図）

39号跡の西2mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の⅓ほどにかかっていたと思われるが、確認できなかった遺構である。

プランは、東側が削平されており、さらに59号跡と重複するため、全形をつかむことはできないが、6.0×5.0m程度の長方形を呈するものと思われる。壁は⅓ほどしか遺存しておらず、やや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.06～0.15mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。重複する58号跡上に本跡の貼床が認められるはずであるが、さらに59号跡と重複するため確認できなかった。ピットは1本検出した。深さ0.4mを測る。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.8m、短軸0.6mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15mほどで焼土が中央部に堆積し、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、床面上からは若干の炭化材が検出された。

遺物は、覆土中およびP－1内から若干の土器片が出土しただけで、図示できるものはない。



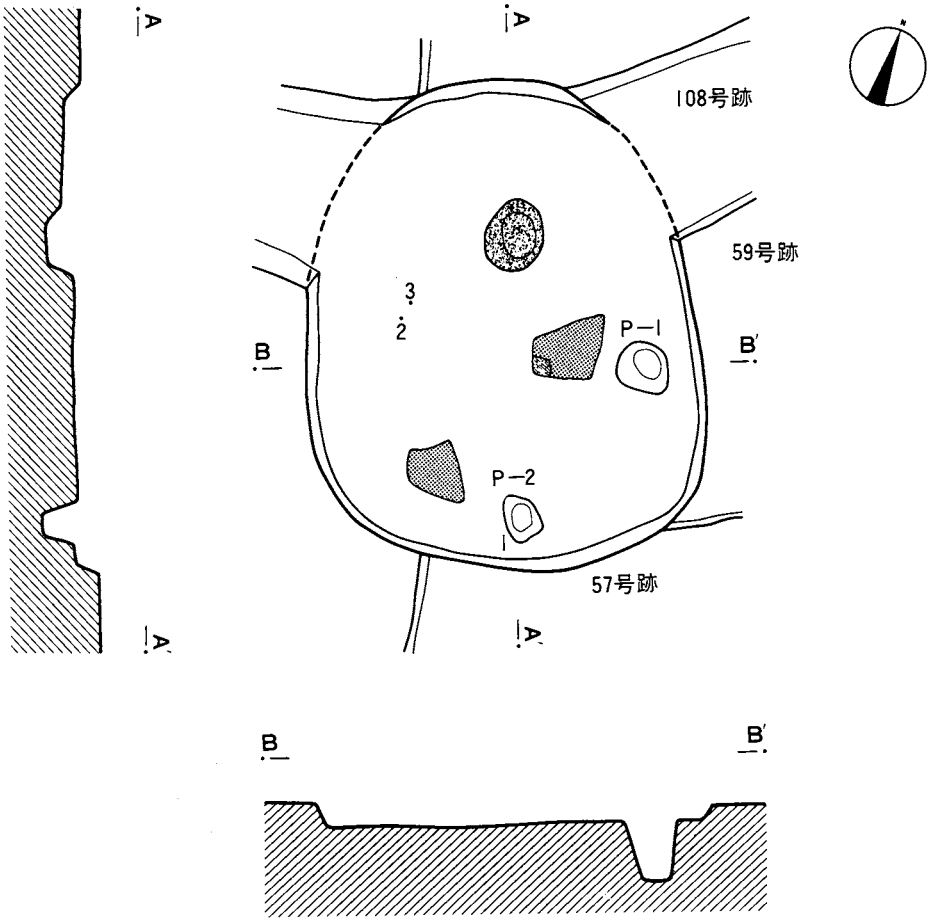
第113図　57(057A)号跡実測図(1/60)

(58)　58（057B）号跡（第114・115図）

遺構（第114図）

57、59、108号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査時に存在が明らかになった遺構である。本跡の¼は59号跡によって貼床されていることから本跡より59号跡の方が新しい。また、57号跡は59号跡によって切られているので、58→57→59という順になる。108号跡内に58・59号跡の貼床は認められないので、108号跡が最も新しい。

プランは、3.8×3.1ｍほどのやや不整な楕円形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は、0.15～0.2ｍを測る。床面はほぼ平坦で比較的堅緻である。ピットは2本検出した。P－1は0.5ｍ、P－2は0.27ｍの深さを測る。炉跡は住居跡の中央やや北寄りの108号跡と重複する部分に検出した。長軸0.55ｍ、短軸0.45ｍの長円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は褐色土の単一層であった。なお、床面上からは、焼土と若干の炭化材が検出された。

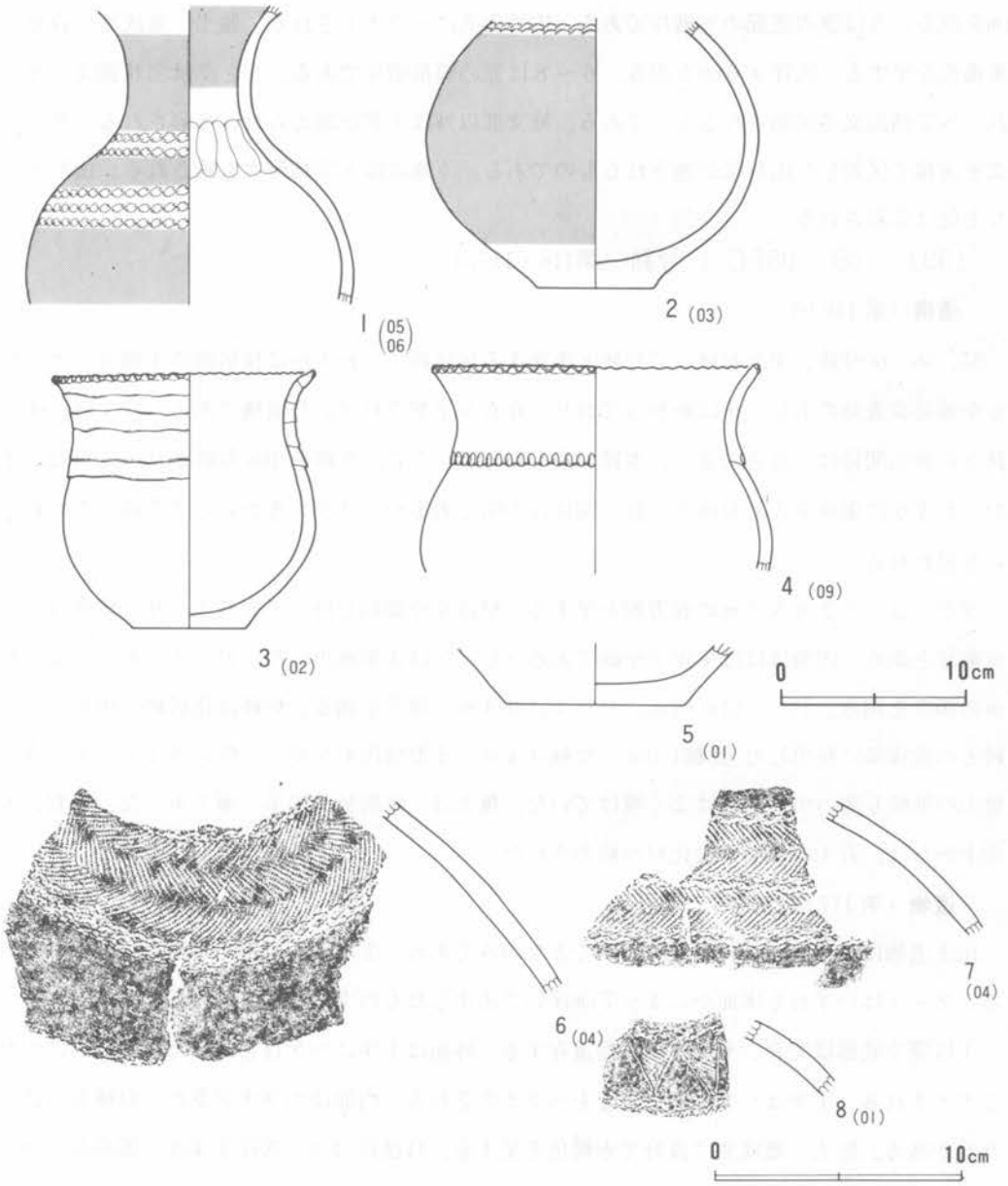


第114図　58(057B)号跡実測図(1/60)　0　2m

遺物（第115図）

出土遺物は比較的多い。1はP－2脇の床面直上出土のものとP－2内出土の破片が接合したものである。2と3は炉跡の南側から出土したもので、2は床面直上、3は2.0cm浮いていた。4～8は覆土中出土のものである。

1は壺の頸部から胴部で¾程遺存する。外面には、頸部下半に2段、胴部上半に3段の結節文を施す。頸部上位を除く、無文部はヘラミガキされ、赤彩される。内面は頸部上位のみヘラミガキされ、赤彩される。その他はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で内面は褐色を呈する。現高15.3cmを測る。2は頸部から上を欠く壺で⅕程遺存する。外面は胴部上位に2段の



第115図　58(057B)号跡出土土器(1/4・1/3)

結節文が施される。外面はすべてヘラミガキされ、底部近くを除いて赤彩される。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で内面は明褐色を呈する。底径6.2cmを測る。3はほぼ完形の甕である。輪積み成形による段が頸部に明瞭に残る。頸部にはナデが加えられ、胴部には粗いヘラミガキが施される。内面はヘラミガキされる。口唇部には指頭による押圧が加えられる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。外面の一部には煤が付着する。口径14cm、底径6.0cm、器高13.4cmを測る。4は甕の⅓の破片である。口唇部には指頭による押圧が加えられる。胴部との境にも押圧が加えられる。頸部はヘラナデされ、胴部はヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。色調は淡褐色を呈する。口径17.6cmを測る。5は甕の底部の⅖破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径9.6cmを測る。6～8は壺の肩部破片である。6と7は羽状縄文が施され、S字結節文で区画されるものである。施文部以外はナデが加えられ、赤彩される。8は縄文を沈線で区画した山形文が施されるものである。下端にはS字結節文も施される。山形文より上位は赤彩される。

(59)　59（057C）号跡（第116・117図）

遺構（第116図）

57、58、60号跡、108号跡、37号跡と重複する住居跡で、わずかに住居跡の東側コーナー部分が確認調査時のトレンチにかかっており、存在が予想されていた遺構である。57、58、60号跡との新旧関係は、前述のように本跡が最も新しく、さらに本跡を108号跡が切っている。また、わずかに重複する37号跡との新旧関係は不明であるが、プラン等からして本跡の方が新しいと思われる。

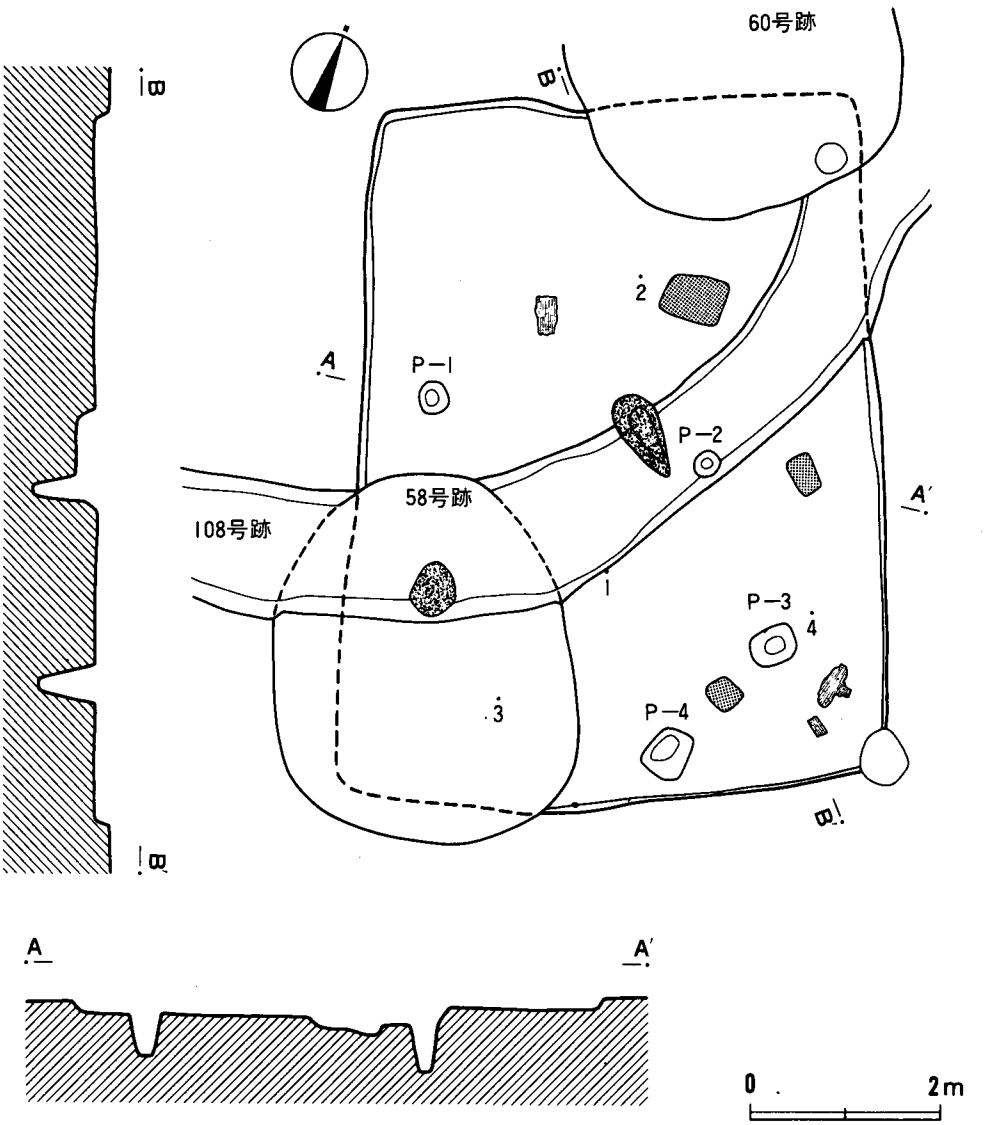
プランは、7.2×5.5mの長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.15m前後を測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは4本検出した。P－1、P－2は0.45mの深さを測る。P－3は0.61m、P－4は0.3mの深さを測る。炉跡は住居跡の中央108号跡との重複部に検出した。長軸1.0m、短軸0.4mの不整楕円形を呈し、掘込みは0.1mと浅く、焼土の堆積も薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は、黒褐色土の単一層であった。なお、床面上からは、若干の焼土と炭化材が検出された。

遺物（第117図）

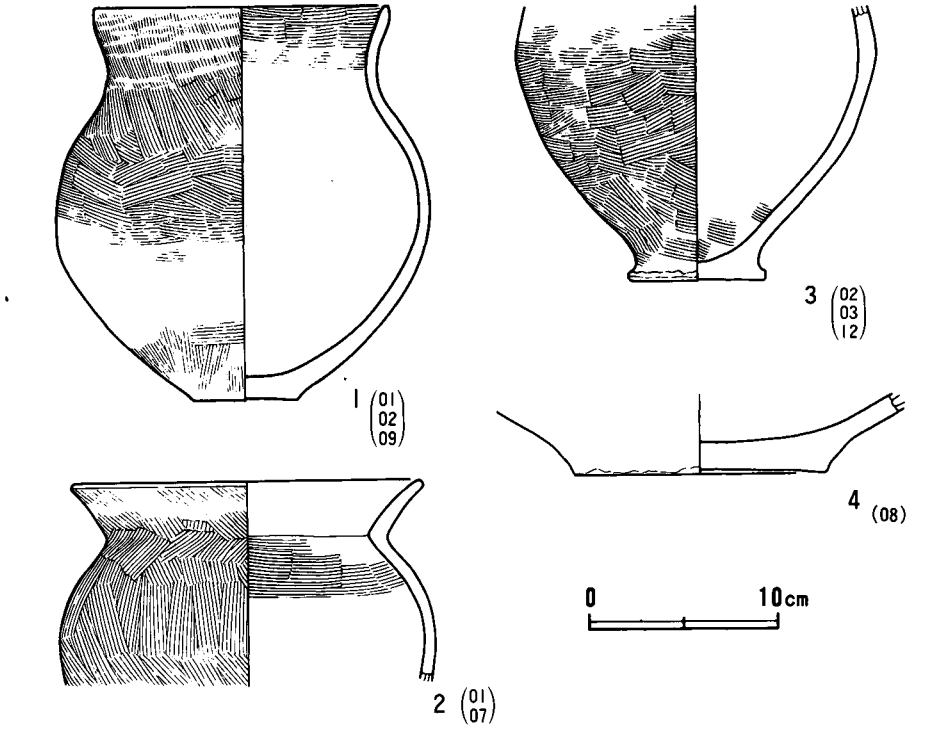
出土遺物は少なく4点の土器が図示できたのみである。1は床面直上から出土したものである。2～4はいずれも床面から4～7cm浮いて出土したものである。

1は甕で底部は完存、その他は⅓程遺存する。外面は上半にハケ目を施した後部分的にヘラミガキされる。下半はハケ目調整の上をヘラナデされる。内面はヘラナデされ、口縁部にはハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.4cm、底径5.4cm、器高20.5cmを測る。2は甕の⅓破片で外面には粗いハケ目が施される。内面胴部上半はハケ目が残り、下半

はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土には中砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、暗褐色を呈する。口径18cmを測る。3は甕の胴部以外の½破片で底部は完存する。外面には粗いハケ目が施される。内面はヘラナデされ、下半にはわずかにハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径7.0cmを測る。4は大形の壺の底部で¼の破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径は13.2cmを測る。



第116図　59(057C)号跡実測図(1/80)



第117図　59(057C)号跡出土土器(1/4)

(60)　60（057D）号跡（第118・119図）

遺構（第118図）

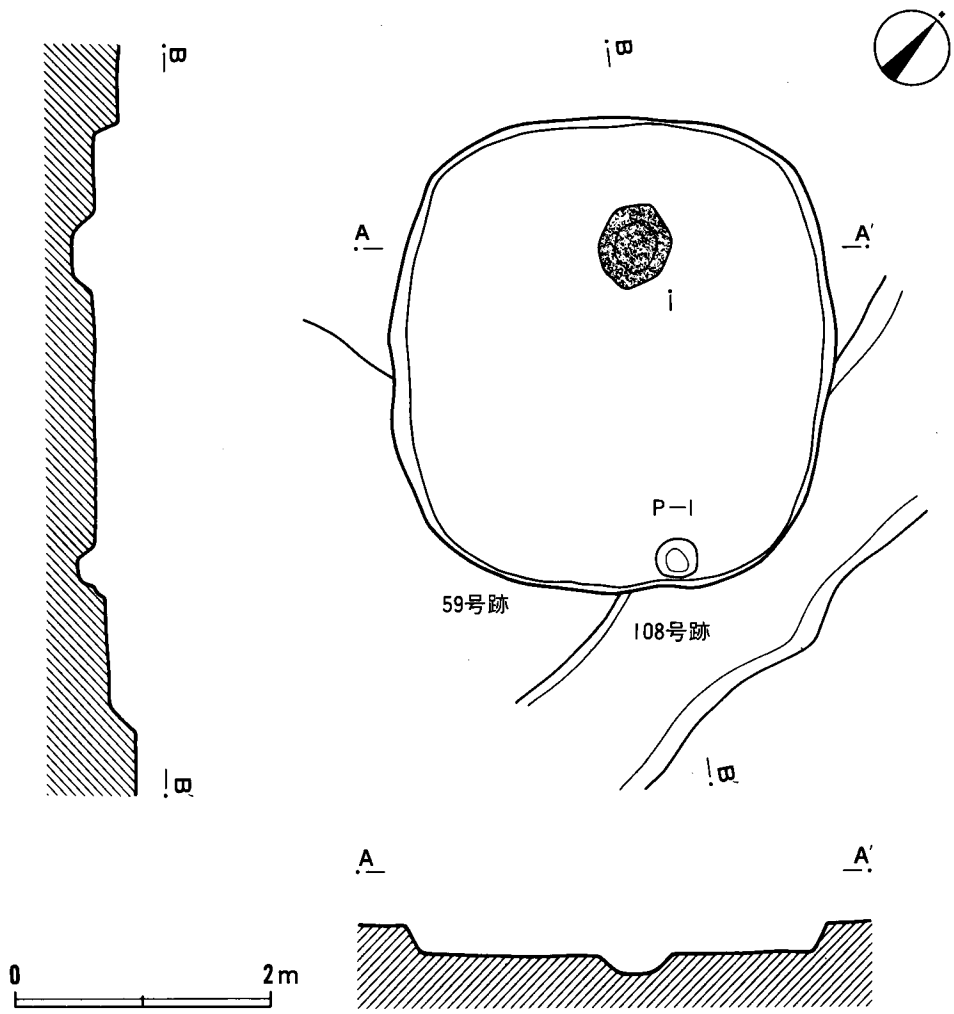
59号跡、108号跡と重複する住居跡である。住居跡の南側¼は59号跡の貼床をはがして検出したものだが、東側は108号跡より本跡の方が掘込みが深い。

プランは、一辺が約3.7ｍのやや胴張りの隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.25ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが、やや軟弱である。ピットは南壁際に1本検出したのみである。深さは0.15ｍで位置的に貯蔵穴の可能性が高い。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.7ｍ、短軸0.55ｍの不整な長円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土が全面にわたって堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。

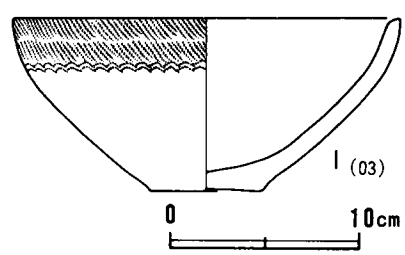
遺物（第119図）

出土遺物は極めて少なく、炉跡の東脇の床面直上から出土した鉢が図示できたのみである。

1は鉢で底部が完存し、その他は½が遺存する。口縁部には縄文と結節文を施し、その他は内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。器面は内外面共に磨滅が著しい。口径20.2cm、底径5.8cm、器高8.8cmを測る。



第118図　60(057D)号跡実測図(1/60)



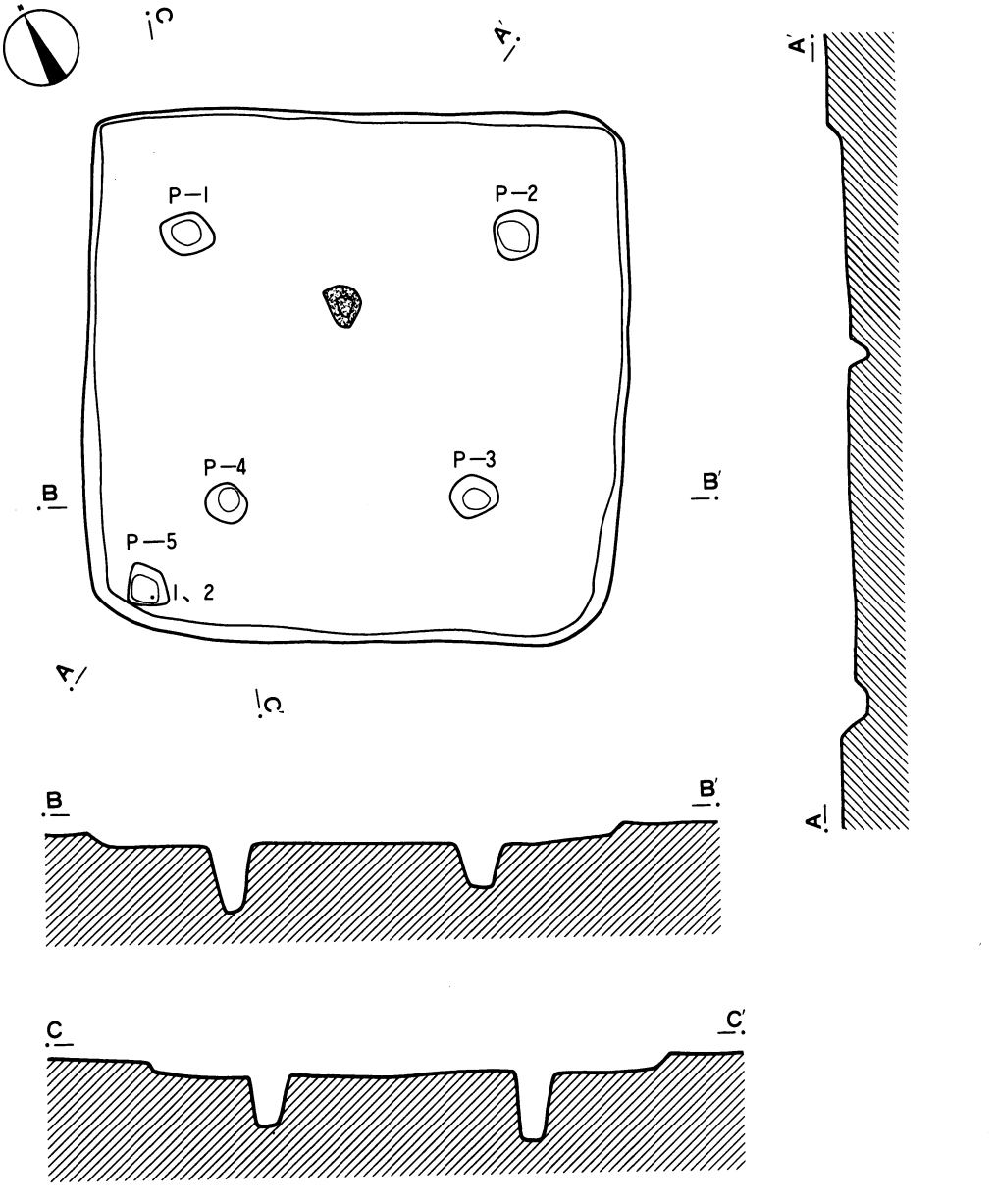
第119図　60(057D)号跡出土土器(1/4)

(61)　61（058）号跡（第120・121図）

遺構（第120図）

55号跡の東6mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチでは確認できなかった遺構である。

プランは、4.4×4.2mのやや長方形を呈する。壁は傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.15m前後を測る。床面はほぼ平坦であるが、極めて軟弱である。ピットは5本検出した。P－1～



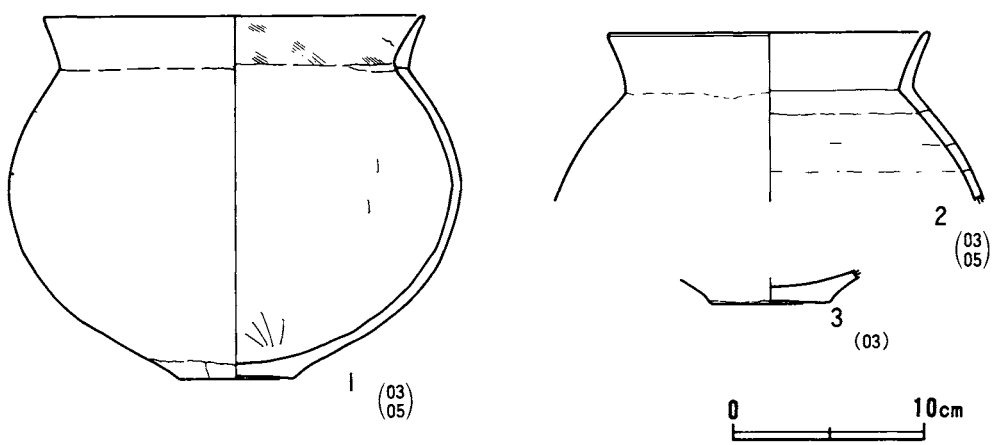
第120図　61(058)号跡実測図(1/60)

P－4は深さは異なるが、直径、形態共にほぼ共通し、柱穴と考えられる。深さはP－1が0.4m、P－2が0.24m、P－3が0.35m、P－4は0.54mである。P－5は西側コーナー部分に検出した不整形のピットで、深さは0.1mを測る。位置からして貯蔵穴の可能性が強い。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。0.3×0.2mの不整形を呈し、0.15mの掘込みを有する。焼土の堆積は薄く、底面も焼けていない。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物（第121図）

出土遺物は極めて少なく、P－5の底面から出土した1、2と覆土中から出土した3が図示できただけである。

1は甕で底部は完存する。その他は3/4が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。底部近くにはヘラケズリ痕が残る。口縁部内面にはハケ目が残り、胴部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。暗褐色を呈する。外面中位は火を受けているため、遺存状態は悪い。口径19.8cm、底径6cm、器高18.6cmを測る。2は甕で2/3程遺存する。輪積み痕を残し、胴部は内外面共にヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径18.6cmを測る。3は甕の底部である。内外面共にヘラナデされる胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、黒褐色を呈する。底径は6.0cmを測る。



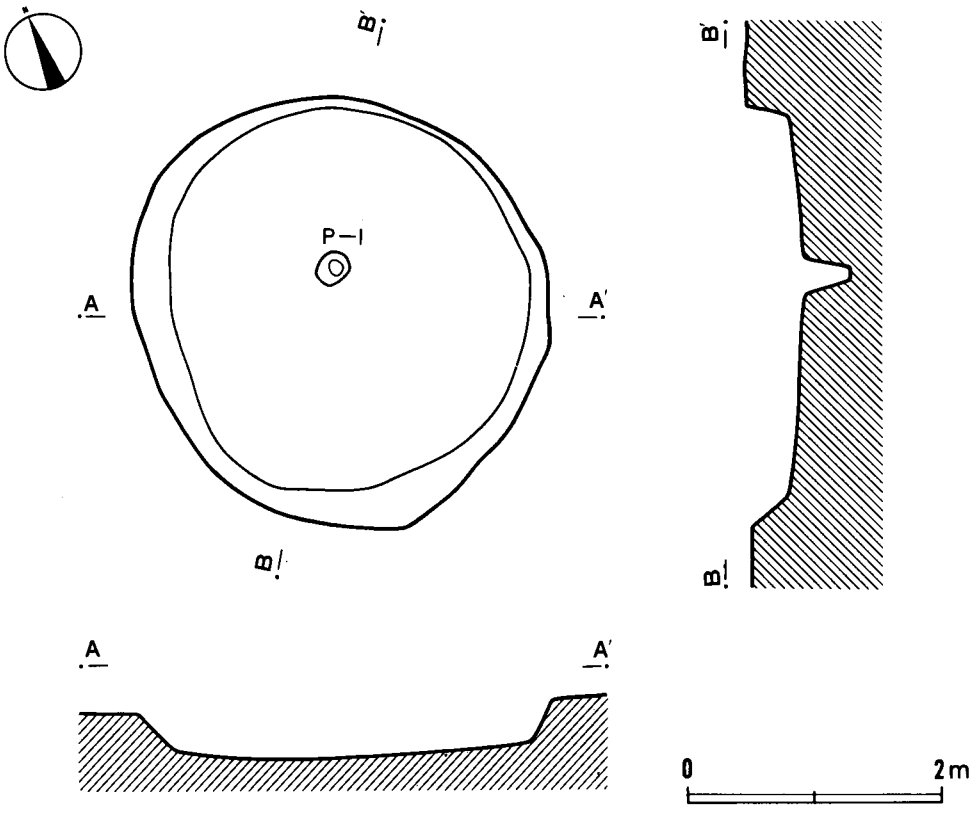
第121図　61(058)号跡出土土器(1/4)

(62)　62（059）号跡（第122・123図）

遺構（第122図）

61号跡の東側5mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになっていた遺構である。

プランは、径3.3mの円形を呈する。壁は傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.35mを測る。床面はやや凹凸に富むものの堅緻である。ピットは住居跡の中央やや北寄りに1本検出した。



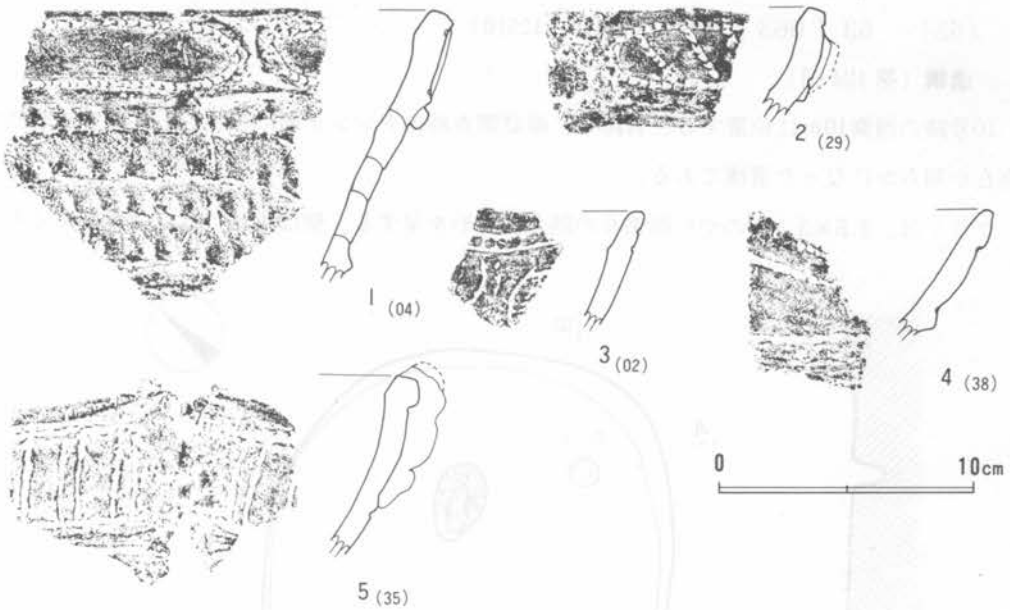
第122図　62(059)号跡実測図(1/60)

深さは0.35mほどで柱穴と考えられる。炉跡は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は黒褐色土の単一層であった。

遺物（第123図）

出土遺物は土器片だけで、住居跡の中央P－1の周辺からややまとまって出土したが、大半は床面より20cm前後浮いていた。1～5の土器片も、同様な状態で出土したものである。

1は深鉢の口縁部～胴部の破片で、口縁部は隆帯により楕円形の区画がされ、その内側に角押文が施される。2は角押文によって楕円形に区画し、その内側にも角押文が施されるもので鈕状突起を有する。3、4は角押文が施文され、4は口唇部に刻みが認められる。5は3段の鈕状突起を有するもので、両側に有節線文が施される。



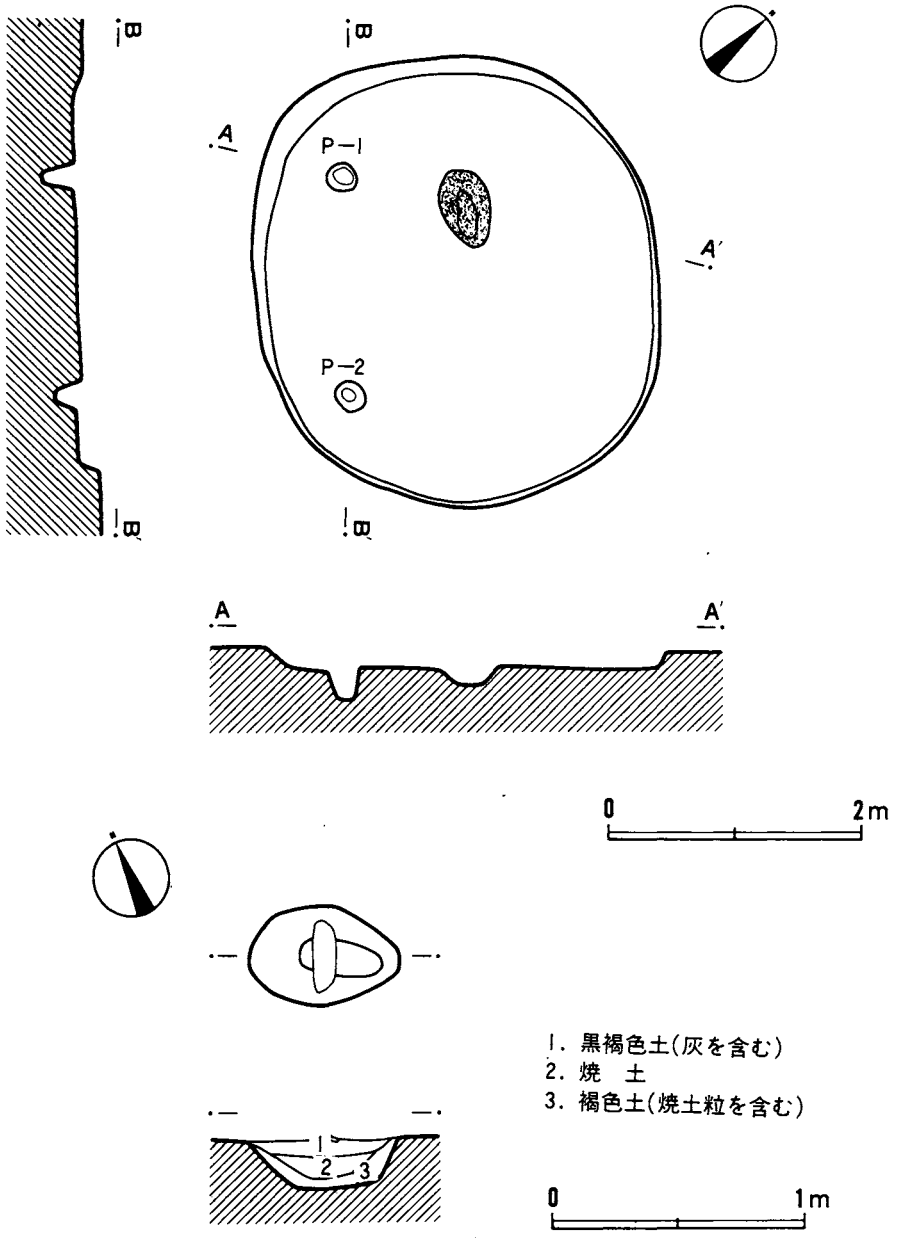
第123図　62(059)号出土土器(1/3)

(63)　63（063）号跡（第124・125図）

遺構（第124図）

10号跡の西側10mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは、3.5×3.3mのやや胴張りの隅丸長方形を呈する。壁は東側ではほぼ垂直に立ち上



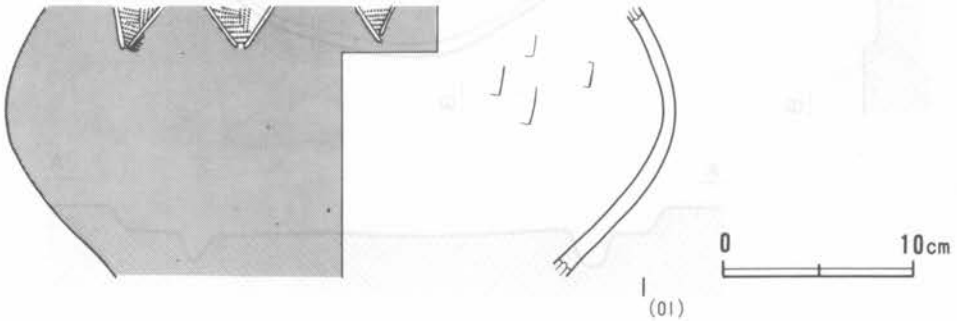
第124図　63(063)号跡実測図(1/60・1/30)

がるが、西側は傾斜する。壁高は0.1～0.2mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻であり、特に東側⅔ほどが良好である。ピットは2本検出した。P－1、P－2共に0.25m前後を測り、柱穴と考えられるが、これ以外のピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸1.1m、短軸0.4mの楕円形を呈する。掘込みは0.2mほどで覆土は3層に分けられ、底面はよく焼けていた。

遺物（第125図）

出土遺物は1点のみで、炉跡の上面から出土したものである。

1は壺の胴部片で⅓が遺存する。上位には縄文を施した後、沈線で区画し山形文をつくる。内面はヘラナデされる。また、施文部以外は赤彩される。胎土、焼成は共に良好で内面は明褐色を呈する。最大径25.1cmを測る。



第125図　63(063)号跡出土土器(1/4)

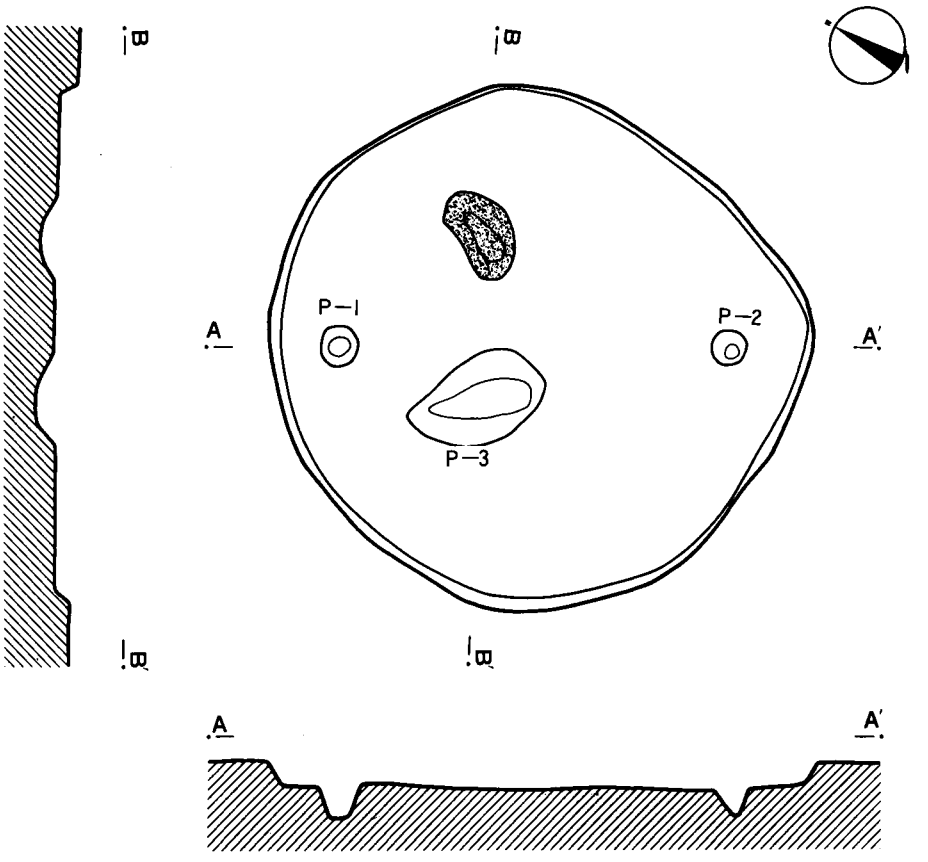
(64)　64（064）号跡（第126図）

遺構（第126図）

63号跡の南側に近接して存在する住居跡で確認調査時のトレンチが西側⅓ほどにかかっていたが、確認できなかった遺構である。

プランは、径4.3mのやや不整な円形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.15～0.2mを測る。床面はほぼ平坦であるが、極めて軟弱である。ピットは3本検出した。P－1とP－2はほぼ似た形態を有し、深さも0.25m前後と共通しており柱穴と考えられる。P－3は比較的大きな不整形のピットで、性格は不明であり、また、本跡に伴うものかどうかも判然としない。炉跡は住居跡の中央北東寄りに検出した。長軸0.75m、短軸0.4mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土の堆積もわずかで、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は茶褐色土の単一層であった。

遺物は覆土中から若干の土器片が出土したのみで図示できるものはない。



第126図　64(064)号跡実測図(1/60)　0　2m

(65)　65（066）号跡（第127・128図）

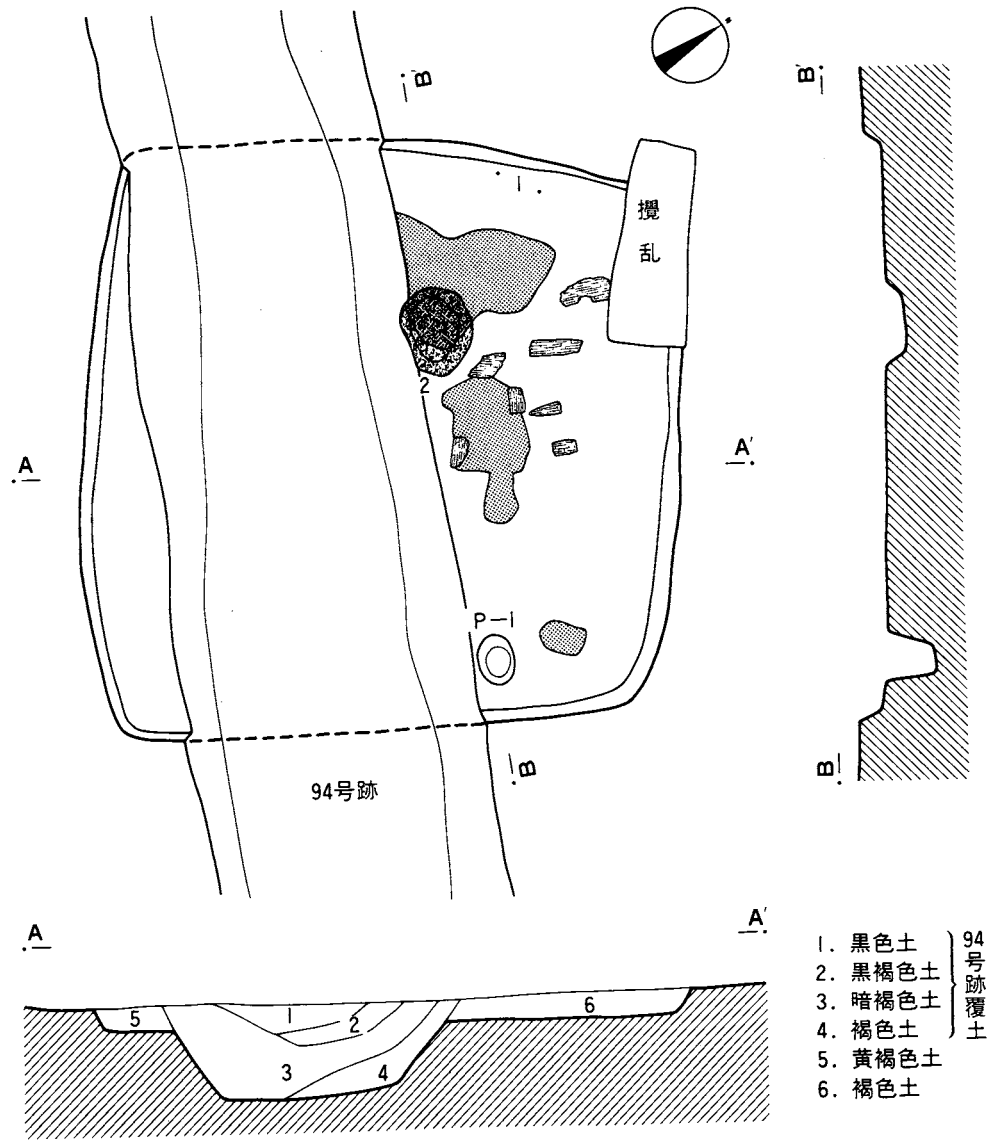
遺構（第127図）

61号跡の北東3mに位置する住居跡で、重複する94号跡と共に確認調査時のトレンチにかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。94号跡との新旧関係は、土層断面により、94号跡の方が新しいと判明した。

プランは、94号跡との重複によって全形をとらえることはできないが、ほぼ一辺が4.6m前後の方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2m前後を測る。床面はほぼ平坦であるが、軟弱である。ピットは1本検出した。深さは0.4mを測る。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.7m、短軸0.55mの不整な長円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は2層に分けられた。なお、床面上からは多量の焼土と炭化材が検出された。

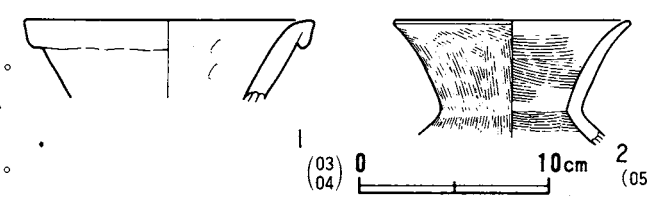
遺物（第128図）

出土遺物は少なく、床面から10cm程浮いて出土した2点の土器が図示できただけである。



第127図　65(066)号跡実測図(1/60)

1は折り返し口縁の壺で口縁部が2/3遺存する。内外面共にヘラナデされるが、口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径は15cmを測る。2も壺の口縁部の1/2破片である。内外面共に粗いハケ目調整が残る。口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、口径12.2cmを測る。



第128図　65(066)号跡出土土器(1/4)

(66)　66（067A）号跡（第129～132図）

遺構（第129図）

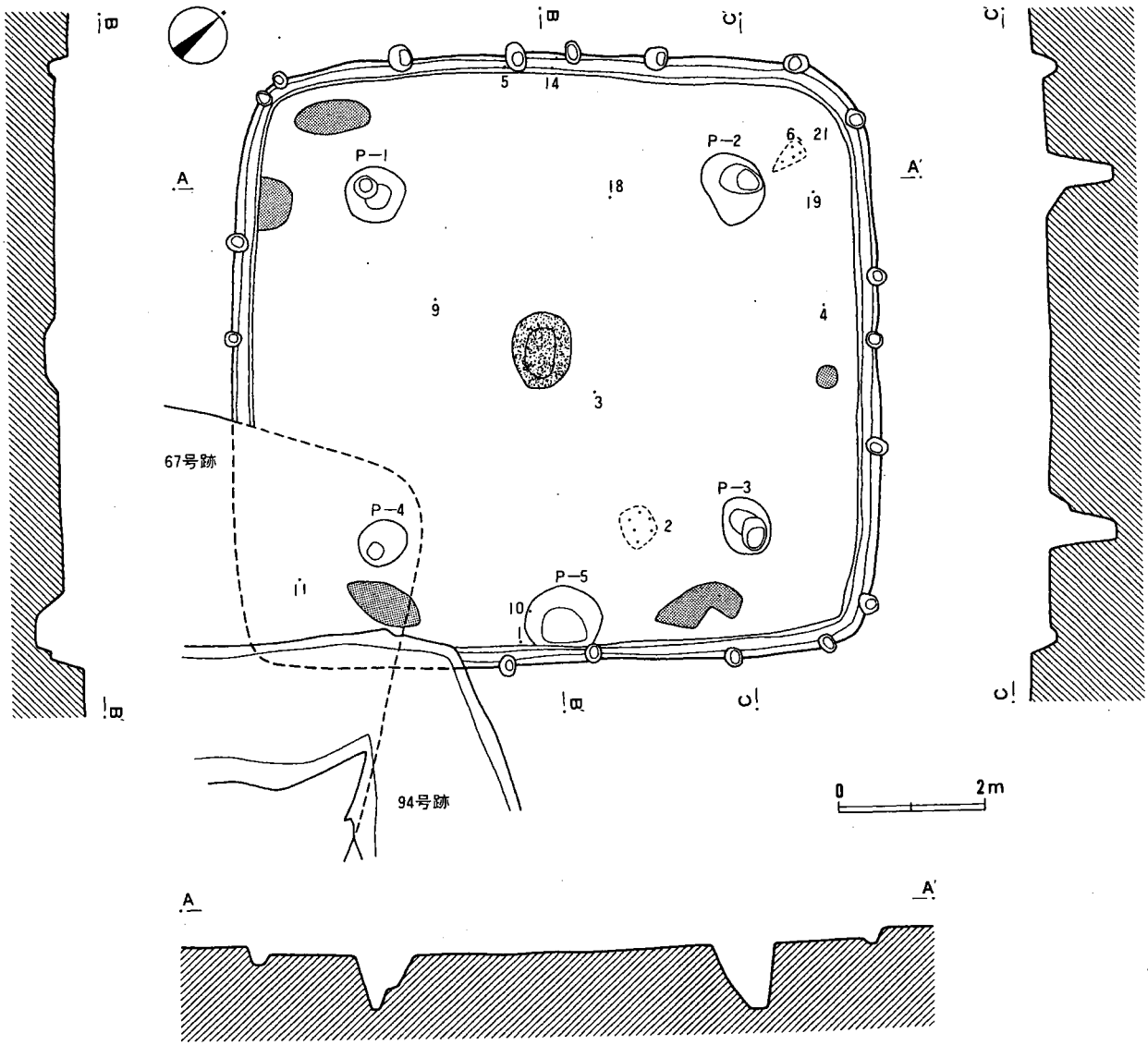
30号跡の南側に近接して位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の東側に一部かかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。重複する67号跡との新旧関係は、本跡が67号跡に貼床していることにより、本跡の方が新しい。また、わずかに重複する94号跡との新旧関係は、94号跡が本跡の床面を切っているため、94号跡の方が新しい。

プランは、一辺が8.6ｍ前後の隅丸方形で、壁はわずかに傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2ｍ前後を測る。重複する部分は不明であるが、東側がやや低くなる。ピットは５本と壁にかかって18本検出した。Ｐ－１～Ｐ－４は0.7～0.9ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。Ｐ－５は壁際に検出したピットで貯蔵穴であろうか。壁にかかって検出したピットは、壁柱穴と考えられ、本来は22本存在したものと思われる。炉跡は住居跡の中央に検出した。長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍの長円形を呈する。掘込みは0.1ｍほどで、焼土の堆積はわずかで、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、床面上からは焼土が検出された。

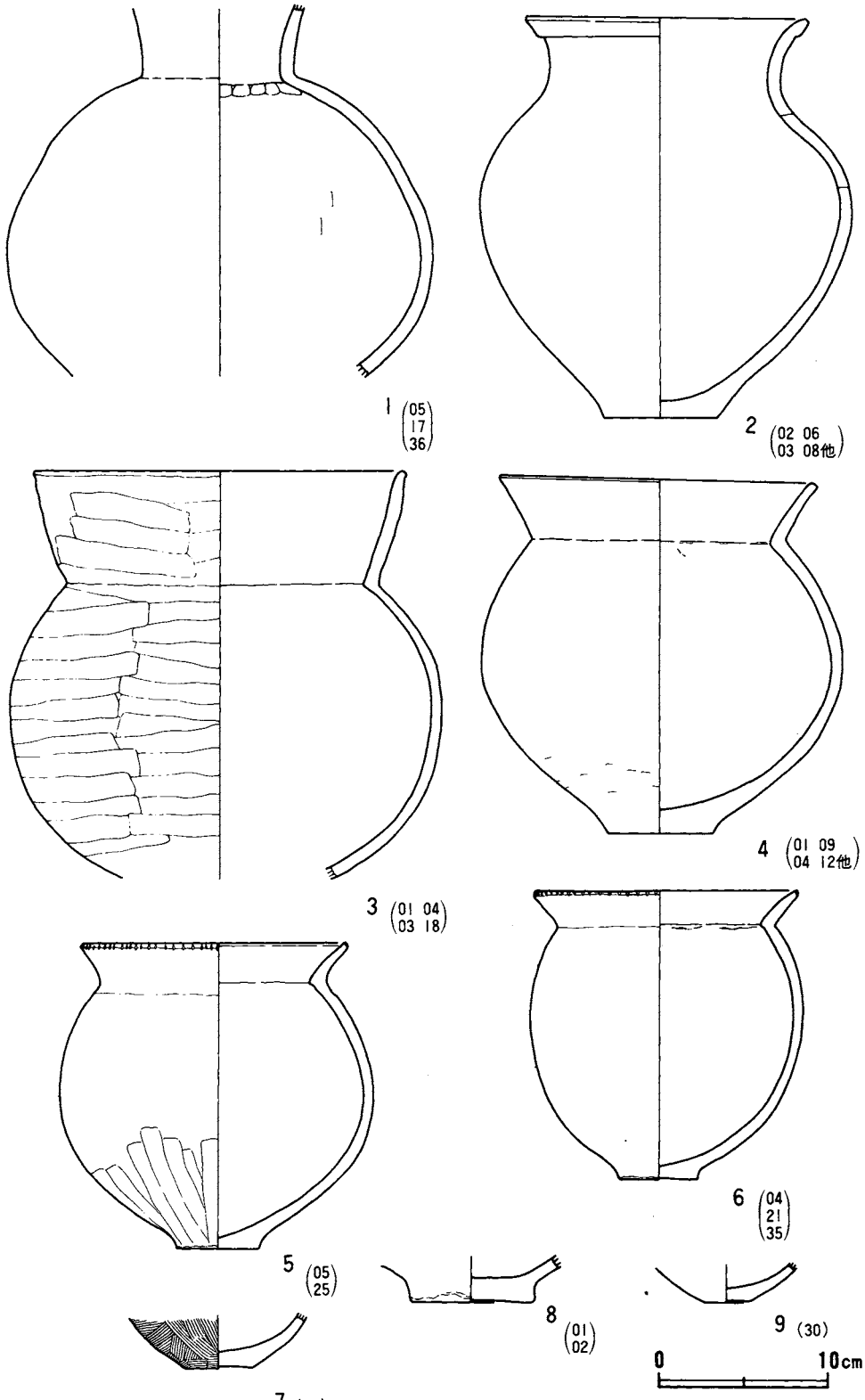
遺物（第130～132図）

出土遺物は多く、25点の土器が図示できた。１はＰ－５の脇の床面直上から出土し、Ｐ－５内出土の破片と接合した。２、３はＰ－３とＰ－５の間で床面直上から出土し、４は北壁際で床面直上から出土したものである。５は西側壁の壁溝上面から、６はＰ－２の脇で５cm程浮いて出土した。７～９は覆土中出土で、10、15はＰ－５内から出土し、13はＰ－３内から出土したものである。また、11はＰ－４の南で15cm浮いて出土した。14は５と同様に壁溝上面から出土したものであり、18、19、21は床面から２～４cm浮いて出土した。なお、その他は覆土中から出土したものである。

１は口縁部と底部を欠く壺で、$\frac{2}{3}$が遺存する。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。頸部内面には指頭による押圧痕が残る。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く明褐色を呈する。最大径は24.9cmを測る。２は$\frac{4}{5}$が遺存する甕である。外面は、頸部から胴部中位にかけてはナデが加えられ、下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。なお、外面には部分的にかなり上位の部分まで火を受けた痕跡がある。口縁部はヨコナデされる。内面はヘラナデされるが、下半は剝落が著しい。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、口径18.3cm、底径6.6cm、器高23.3cmを測る。３は甕で$\frac{2}{3}$が遺存する。外面はヘラケズリされ、部分的にナデによって消される。内面は、口縁部がヨコナデされ、胴部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径は21.4cmを測る。４も甕で$\frac{2}{3}$が遺存する。外面は上位にナデが加えられ、下半はヘラナデされる。また、内面もヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。外面には部分的であるが、かなり上位まで火を受けた痕跡が残る。胎土、焼成共に良好で、茶褐色を呈する。口径18.2cm、底径6.2cm、器高20.4cmを測る。５はほぼ完形

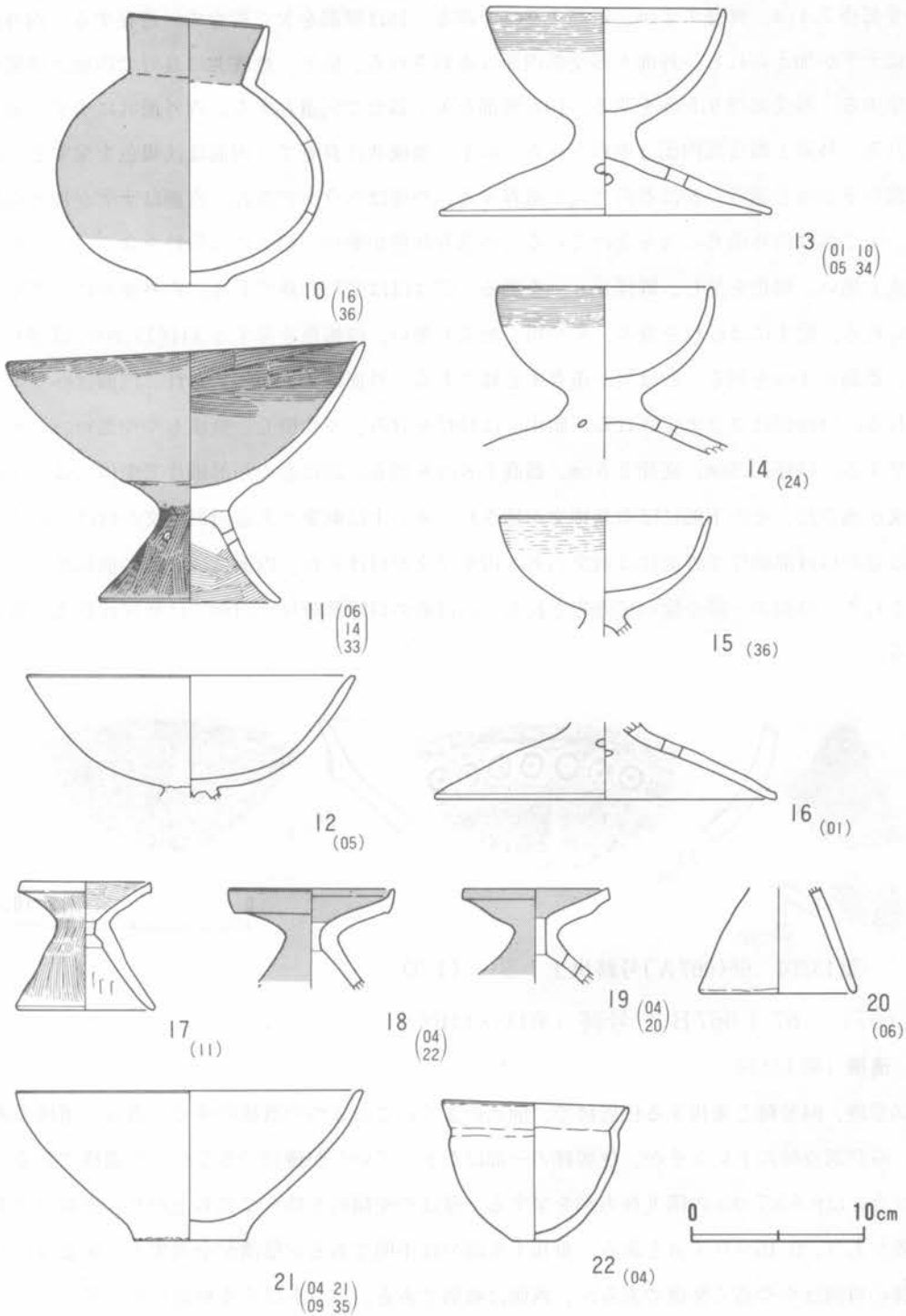


第129図　66(067A)号跡実測図(1/80)



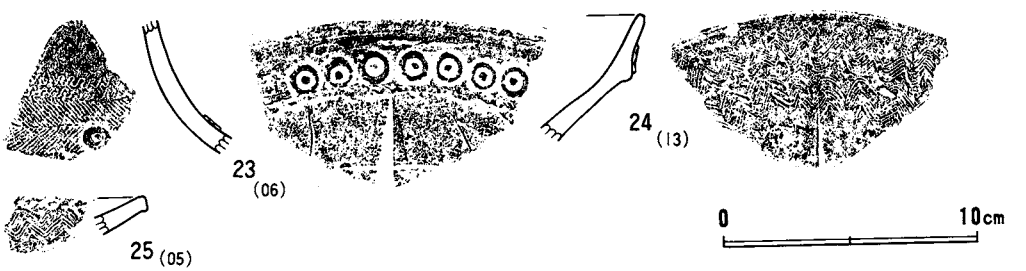
第130図　66(067A)号跡出土土器(1)(1/4)

の甕で、外面は胴部上位はヘラナデの後粗いヘラミガキ、下半はヘラケズリされる。外面中位は火を受けているため遺存状態が悪く、また、煤も付着している。内面はヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。また、口唇部には刻みが加えられる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径15.3cm、底径4.8cm、器高17.5cmを測る。6も甕で$\frac{4}{5}$が遺存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされ、口唇部には刻みが加えられる。なお、外面は火を受けているため、遺存状態が極めて悪い。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成も悪い。口径15.3cm、底径4.5cm、器高16.6cmを測る。7は壺の底部で図示の範囲では、ほぼ完存する。外面にはハケ目痕が残り、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径は4.0cmを測る。8も壺の底部で図示の範囲では、ほぼ完存する。外面にナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈し、底径7.0cmを測る。9も壺の底部で図示の範囲でほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径は2.3cmを測る。10は$\frac{4}{5}$遺存する壺である。輪積み成形で外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。底部を除く外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は淡褐色を呈する。口径8.0cm、底径4.0cm、器高15.4cmを測る。11は$\frac{3}{4}$が遺存する高坏である。坏部は内外面共にハケ目を施した後ナデが加えられている。脚部にも内外面共にハケ目が残る。外面と坏部内面は赤彩される。脚孔は3孔が穿孔される。器面は内外面共に磨滅が著しい。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。内面は淡褐色を呈する口径20.4cm、脚径10.2cm、器高19.1cmを測る。12は高坏の坏部で$\frac{4}{5}$遺存する。外面はやや粗くヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は18.6cmを測る。13は$\frac{2}{3}$が遺存する高坏である。内外面共にナデが加えられ、口唇部はヨコナデされる。坏部外面には櫛描の平行線文が施される。脚には4孔が穿孔される。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径13.4cm、脚径19cm、器高11.9cmを測る。14も高坏で脚裾部を欠く。坏部はほぼ完存し、脚部は$\frac{1}{4}$が遺存する。外面と脚部内面はナデが加えられ、坏部内面はヘラミガキされる。坏部外面には櫛描平行線文が施される。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。脚孔は3孔を有し、口径は12.3cmを測る。15は高坏の坏部で$\frac{1}{2}$破片である。内外面共にナデが加えられ、口唇部はヨコナデされる。坏部外面には櫛描平行線文が施されるが、器面の遺存状態が悪く、詳細な観察は不可能である。13や14と同様の手法と思われる。胎土には砂粒を多く含み、やや粗く、焼成も悪い。暗褐色を呈する。なお、この土器は他の土器と比べて胎土の色調が極めて異なり、異質な感じを受ける。口径12cmを測る。16は高坏の脚部で$\frac{2}{3}$遺存する。内外面共にナデが加えられる。脚孔は4孔で、胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。脚径19.6cmを測る。17は器台で器受部は$\frac{1}{4}$が遺存し、その他はほぼ完存する。外面と器受部内面はハケ目を施した後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。



第131図　66(067A)号跡出土土器(2)(1/4)

器受部径7.4cm、脚径7.7cm、器高7.2cmを測る。18は脚部を欠く器台で$\frac{2}{3}$遺存する。内外面共にナデが加えられる。外面と器受部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は淡褐色を呈する。器受部径9.5cmを測る。19も脚部を欠く器台で$\frac{2}{3}$遺存する。内外面共にナデが加えられる。外面と器受部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、内面は淡褐色を呈する。器受部径8.2cmを測る。20は器台で$\frac{3}{4}$が遺存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。下半部は内外面共に火を受けているため遺存状態が悪い。胎土には砂粒を含み、やや粗く焼成も悪い。褐色を呈し、脚径8.8cmを測る。21はほぼ完形の鉢である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く焼成も悪い。淡褐色を呈する。口径19.8cm、底径6.4.cm、器高8.4cmを測る。22は$\frac{3}{4}$が遺存する鉢である。外面はナデが加えられ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。口径10.5cm、底径2.5cm、器高7.8cmを測る。23は壺の頸部破片で中位にはS字結節文が施され、その下部には羽状縄文が施され、その上に刺突のある円形浮文が付けられる。24は壺の口縁部破片で外面には刺突のある円形浮文が付けられ、内面には2段の櫛描波状文が施される。外面の一部を除いて赤彩される。25は壺の口縁部破片で内面には櫛描波状文が施される。



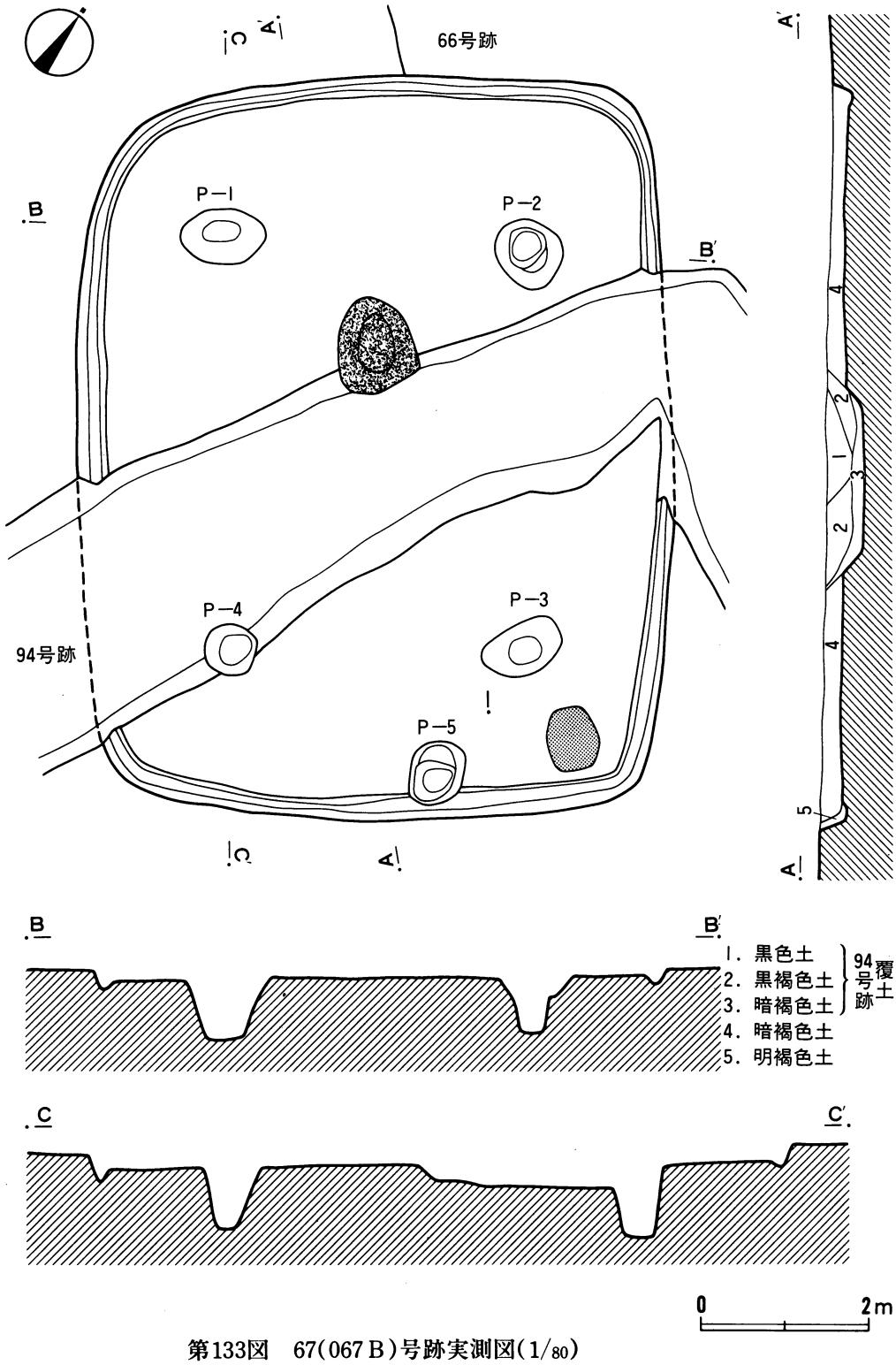
第132図　66(067A)号跡出土土器(2)(1/3)

(67)　67（067B）号跡（第133・134図）

遺構（第133図）

66号跡、94号跡と重複する住居跡で、前述のようにこの3つの遺構の中で一番古い遺構である。確認調査時のトレンチが、住居跡の一部にかかっていたが確認できなかった遺構である。

プランは8.8×7.0mの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には多少差があり、0.15～0.4mを測る。重複する部分は不明であるが壁溝が全周する。床面は、94号跡の東側はやや高く堅緻であるが、西側は軟弱である。ピットは5本検出した。P－1～P－4は形態、直径に差があるが、0.7～0.9mの深さを測り、柱穴と考えられる。P－5は東壁際に検出したもので、0.68mの深さを測り、位置からして貯蔵穴であろう。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。94号跡との重複によって東側を失っており、本来は1.0×0.9mほどの楕円形を呈していたものと思われる。掘込みは0.2mほどで、焼土の堆積は厚いが、底面

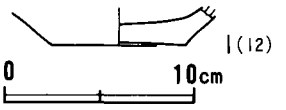


第133図　67(067Ｂ)号跡実測図(1/80)

はほとんど焼けていなかった。覆土は2層に分けられた。なお、東側コーナー部分の床面上からは山砂を含む焼土が検出された。

遺物（第134図）

覆土中からは比較的多くの土器片が出土しているが、いずれも細片で、図示できたのは1点だけである。1はP－3とP－5の中間の床面直上から出土したものである。この他覆土中から土製品が1点出土している。



第134図　67(067B)号跡出土土器(1/4)

1は壺の底部で4/5が遺存する。内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが焼成は良く、赤褐色を呈する。底径7.0cmを測る。

(68)　068（058）号跡（第135・136図）

遺構（第135図）

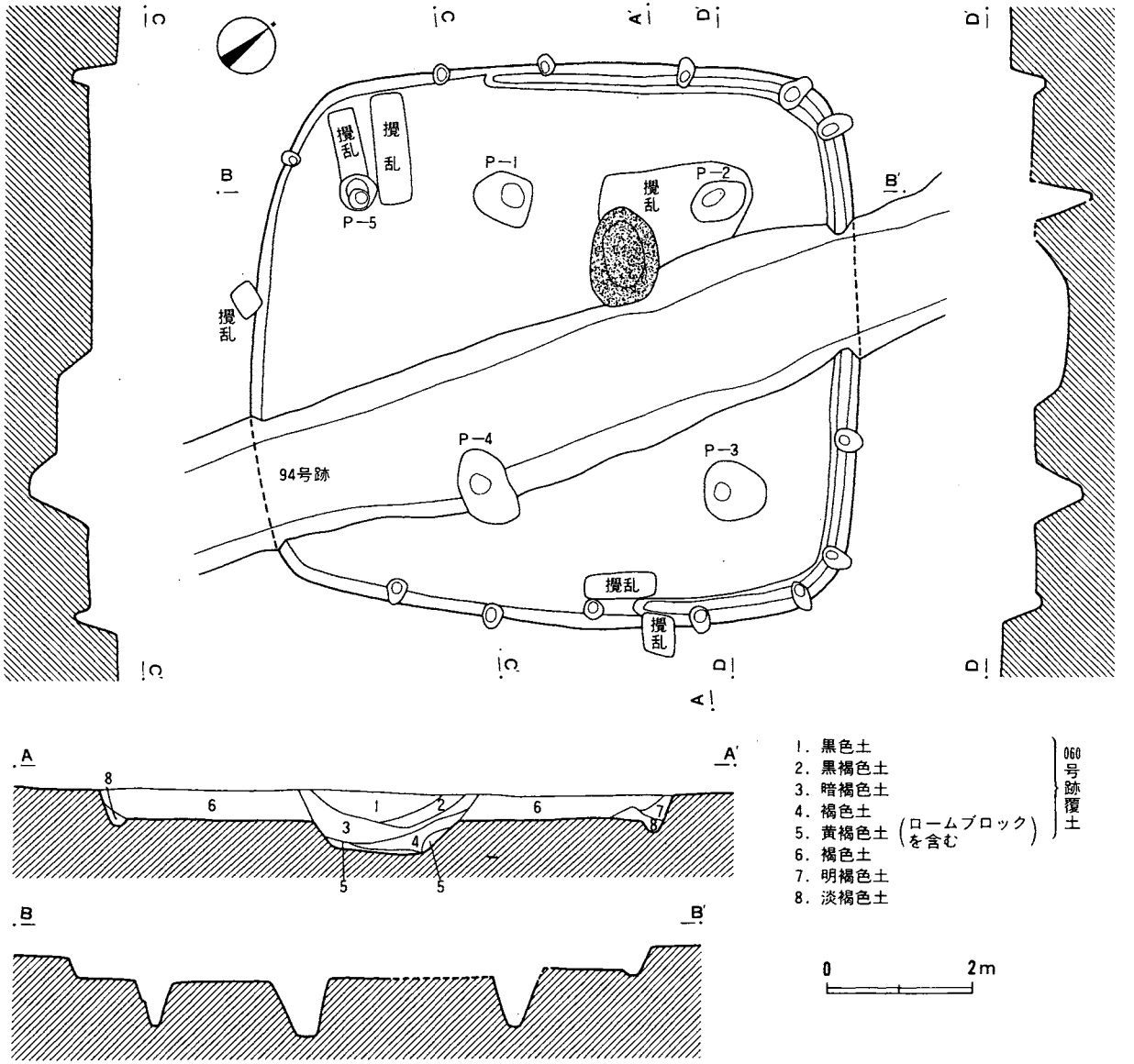
65号跡の北東3mに位置し、94号跡と重複する住居跡である。確認調査時のトレンチが住居跡の中央部にかかっていたが、確認できなかった遺構である。なお、94号跡との新旧関係は土層断面から94号跡の方が新しい。

プランは、8.4×8.0mの隅丸のやや長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には、多少差があり、0.2～0.4mを測る。壁溝は半周する。床面はかなり凹凸に富み、南側が低くなるが、堅緻である。ピットは5本と壁にかかって13本検出した。P－1～P－4は0.7～0.8mの深さを測り、柱穴と考えられる。P－5は0.6mと他のピットと比べてやや浅く、規模も小さいが、これも柱穴と考えられる。壁にかかって検出したものは、66号跡と同様のもので、壁柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。94号跡との重複によって東側を失っており、本来は1.6×1.0mほどの楕円形を呈していたものと思われる。掘込みは0.2mほどで、焼土の堆積は薄く、底面もあまり焼けていなかった。覆土は3層に分けられた。

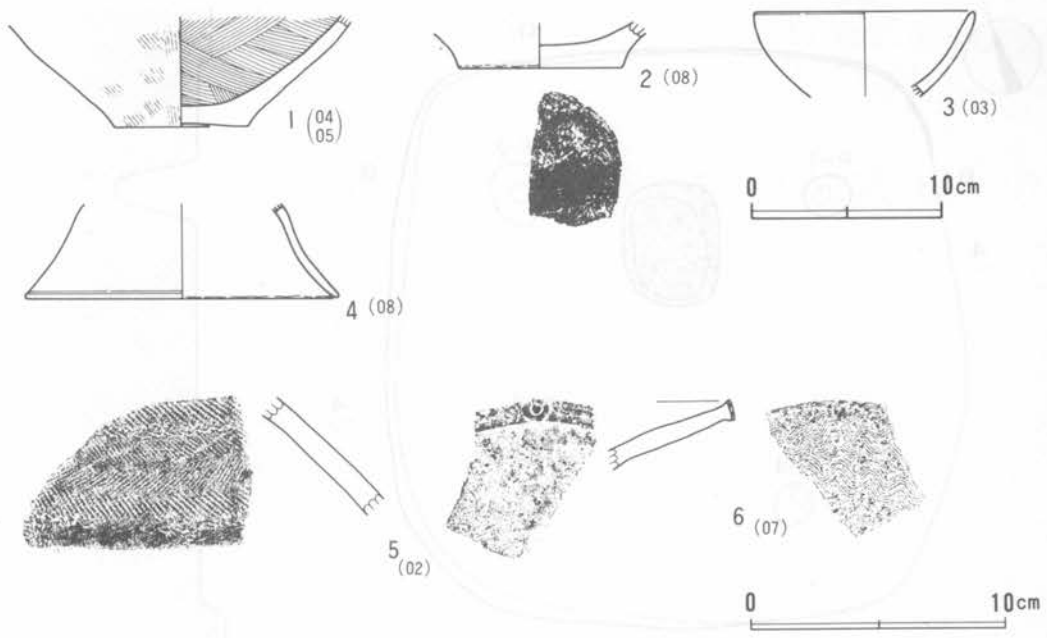
遺物（第136図）

出土遺物は少なく、6点の土器が図示できたにすぎない。3は炉跡内から出土したもので、その他は覆土中出土のものである。

1は壺の胴部下半以下で、底部は2/3、胴部は1/4遺存する。外面はヘラナデされ、わずかにハケ目が残る。内面にはハケ目が施される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径7.0cmを測る。2は木葉痕を有する壺の底部で、1/3破片である。内外面共



第135図　68(068)号跡実測図(1/80)



第136図　68(068)号跡出土土器(1/4・1/3)

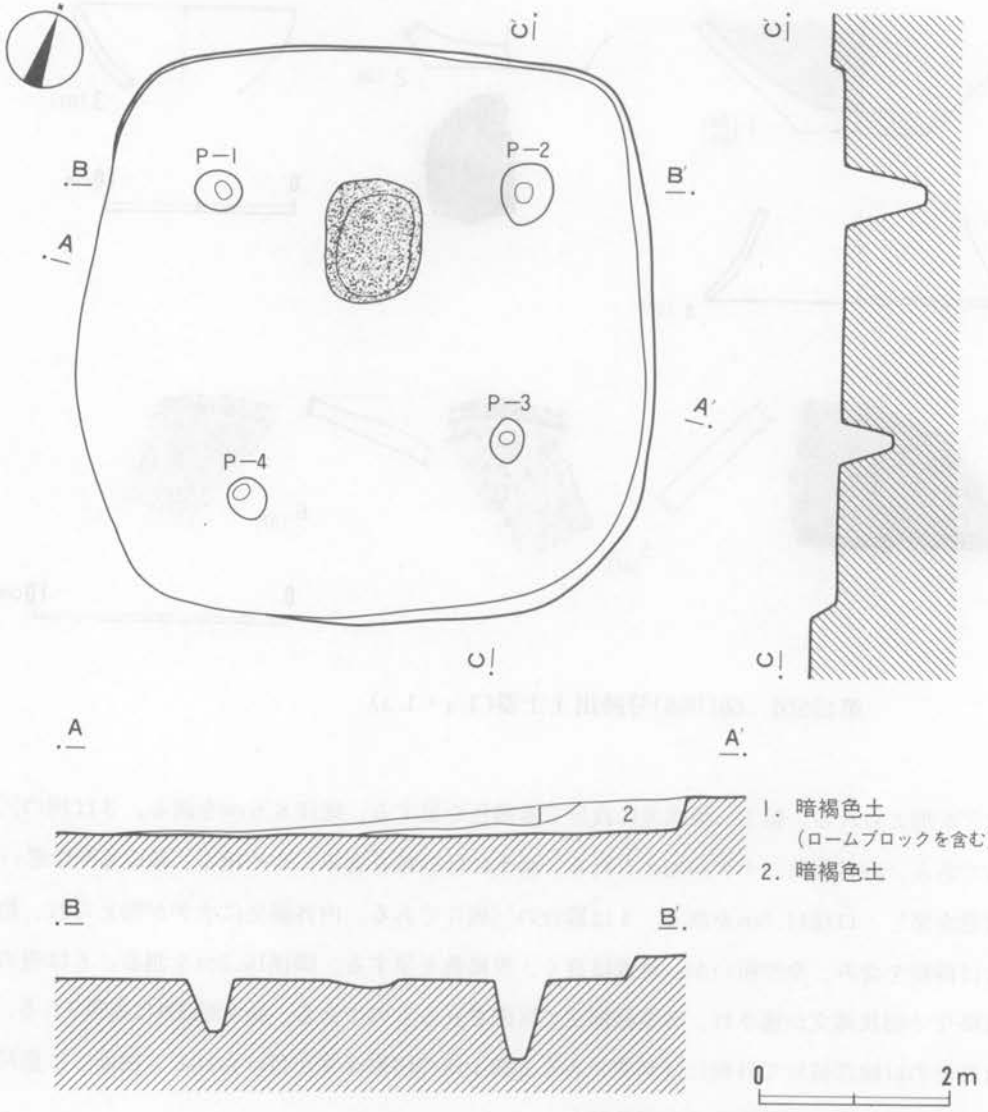
にナデが加えられる。胎土・焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径8.6cmを測る。3は埦の1/3破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈し、口径11.3cmを測る。4は器台の1/2破片である。内外面共にナデが加えられ、胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、黒褐色を呈する。脚径16.2cmを測る。5は壺の肩部破片で羽状縄文が施され、S字結節文で区画されるものである。施文部以外は赤彩される。6は高坏の口縁部破片で外面には刺突のある2個1組の円形浮文が付けられる。内面には櫛描波状文が施される。内外面共に赤彩される。

(69)　69(070)号跡(第137・138図)

遺構(第137図)

57号跡の南西2mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが西側にかかっていたが、確認できなかった遺構である。

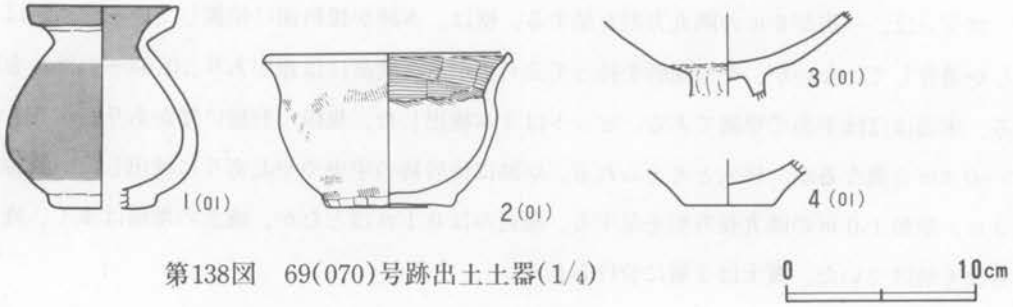
プランは、一辺が6mの隅丸方形を呈する。壁は、本跡が緩斜面に位置しているため3/5ほどしか遺存していないが、やや傾斜を持って立ち上がる。壁高には差があり、0.03～0.35mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは4本検出した。規模・形態に差があり、深さも0.5～0.8mと異なるが、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.3m、短軸1.0mの隅丸長方形を呈する。掘込みは0.1mほどだが、焼土の堆積は多く、底面もよく焼けていた。覆土は2層に分けられた。



第137図　69(070)号跡実測図(1/80)

遺物（第138図）

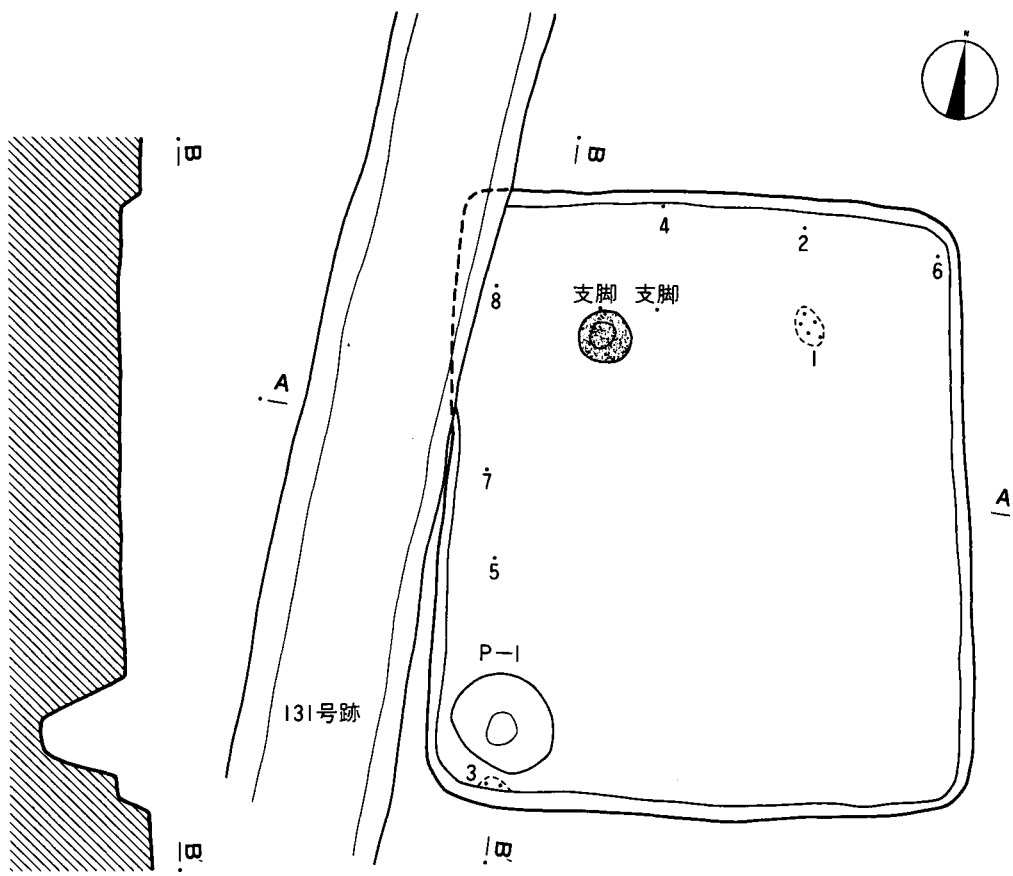
出土遺物は少なく、覆土中から出土した4点の土器が図示できただけである。

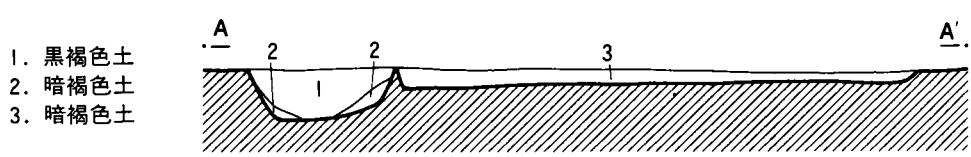


第138図　69(070)号跡出土土器(1/4)

1は小形の壺で$\frac{3}{4}$が遺存する。内外面共にナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。頸部と底部を除く外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、内面は淡褐色を呈する。口径7.8cm、底径5.2cm、器高10.3cmを測る。2は埦で$\frac{1}{2}$遺存する。外面はヘラナデされハケ目がわずかに残る。口縁部内面にもハケ目が残る。体部内面にはナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。口径12.5cm、底径6.5cm、器高8.8cmを測る。3は高坏の接合部で図示の範囲は完存する。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、淡褐色を呈する。4は壺の底部である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。底径4.6cmを測る。

(70)　70（073）号跡（第139・140図）





1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土

第139図　70(073)号跡実測図(1/60)　0　2m

遺構（第139図）

54号跡の南側50ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。重複する131号跡との新旧関係は、131号跡が本跡を切っていることから、131号跡の方が新しい。

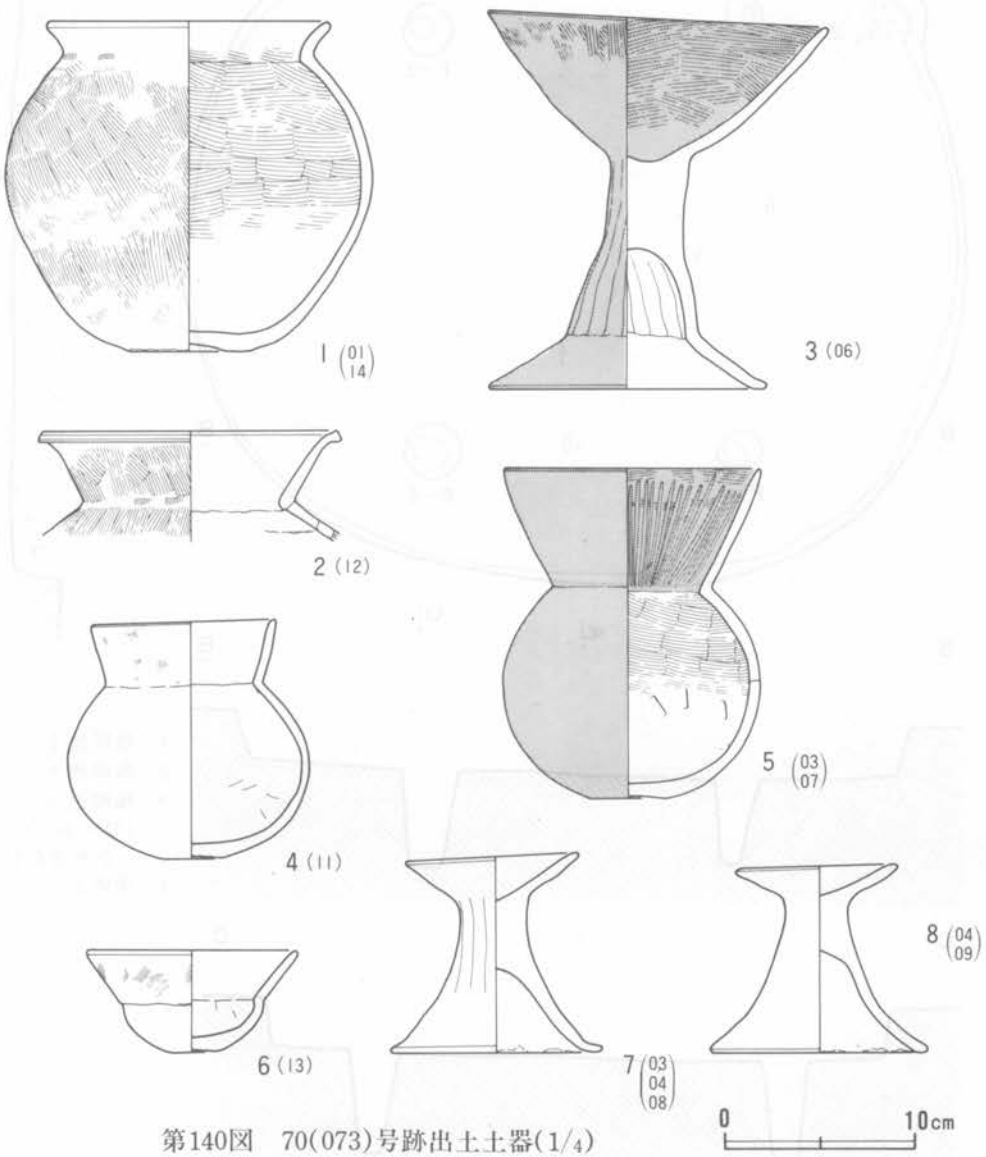
プランは、4.9×4.2ｍのやや長方形を呈する。壁は西コーナー部分を131号跡によって破壊されているが、その他は比較的しっかりとした掘込みでやや傾斜を持って立ち上がる。壁高にはやや差があり、0.1～0.25ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻であり、特に炉跡の周辺が良好である。ピットは南コーナー部分に検出した大形のもの１本のみで、位置、規模等から考えて貯蔵穴と思われる。これ以外のピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は、住居跡の中央北西のかなり偏在した位置に検出され、径0.4ｍの円形を呈する。掘込みは0.1ｍほどで焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物（第140図）

出土遺物は比較的多く８点の土器が図示できた。１・３～８の７点はいずれも床面直上から出土したものである。２は床面から２cm浮いて出土した。この他、土製支脚が３点炉跡周辺から出土し、性格不明の土製品１点が炉跡内から出土している。

１は甕で$\frac{3}{5}$が遺存する。外面はハケ目を施した後、ヘラナデされ、部分的に消される。内面は、口縁部から胴部上半にかけては、ハケ目が施された後ナデが加えられる。胴部下半はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、黒褐色を呈する。口径14.4cm底径6.2cm、器高16.9cmを測る。２は甕の口縁部の$\frac{4}{5}$破片である。外面にはハケ目が残る。口縁部は内外面共にヨコナデされ、胴部は内外面共にヘラナデされる。内面には輪積み痕が残る胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径15.4cmを測る。３は高坏で、口縁部と脚裾部を$\frac{1}{4}$欠失するが、その他は完存する。坏部外面はヘラナデされるが、部分的にハケ目が残る。脚部は、ヘラケズリの後ヘラナデされ、脚裾部はヘラケズリの後ナデが加えられる。坏部内面にもハケ目が残り、ナデが加えられる。脚部内面はヘラナデされ、脚裾部内面はヘラケズリの後ヘラナデされる。外面と坏部内面は赤彩されるが、遺存状態は悪い。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤彩部以外は明褐色を呈する。口径17.6cm、脚径14.3cm、器高19cmを測る。４は坩で、口縁部が$\frac{3}{4}$遺存し、その他は完存する。口縁部外面はハケ目を施した後ナデが加えられ、胴部外面はヘラミガキされる。口縁部内面はヘラミガキされ、胴部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径9.4cm、底径3.0cm、器高13.1cmを測る。５は大形の坩で$\frac{4}{5}$が遺存する。外面は入念にヘラナデされる。口縁部内面はハケ目を施した後ヘラミガキされ、胴部内面は、上位はハケ目が残り、下半はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径13.4cm、底径4.0cm、器高16.9cmを測る。６はほぼ完形の小型丸底土器である。口縁部外面にはハケ目が残り、ヨコナデされる。体部はヘラケズリの後ヘラナデ

される。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径10.8cm、底径2.3cm、器高5.1cmを測る。7はほぼ完形の器台である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられる。内面は、器受部にはナデが加えられ、脚部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、茶褐色を呈する。器受部径8.9cm、脚径10.8cm、器高10cmを測る。8も7と同形の器台で、脚裾部を$\frac{2}{3}$欠くが、その他は完存する。脚部外面はヘラミガキされるがその他はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。器受部径8.0cm、脚径11cm、器高9.6cmを測る。

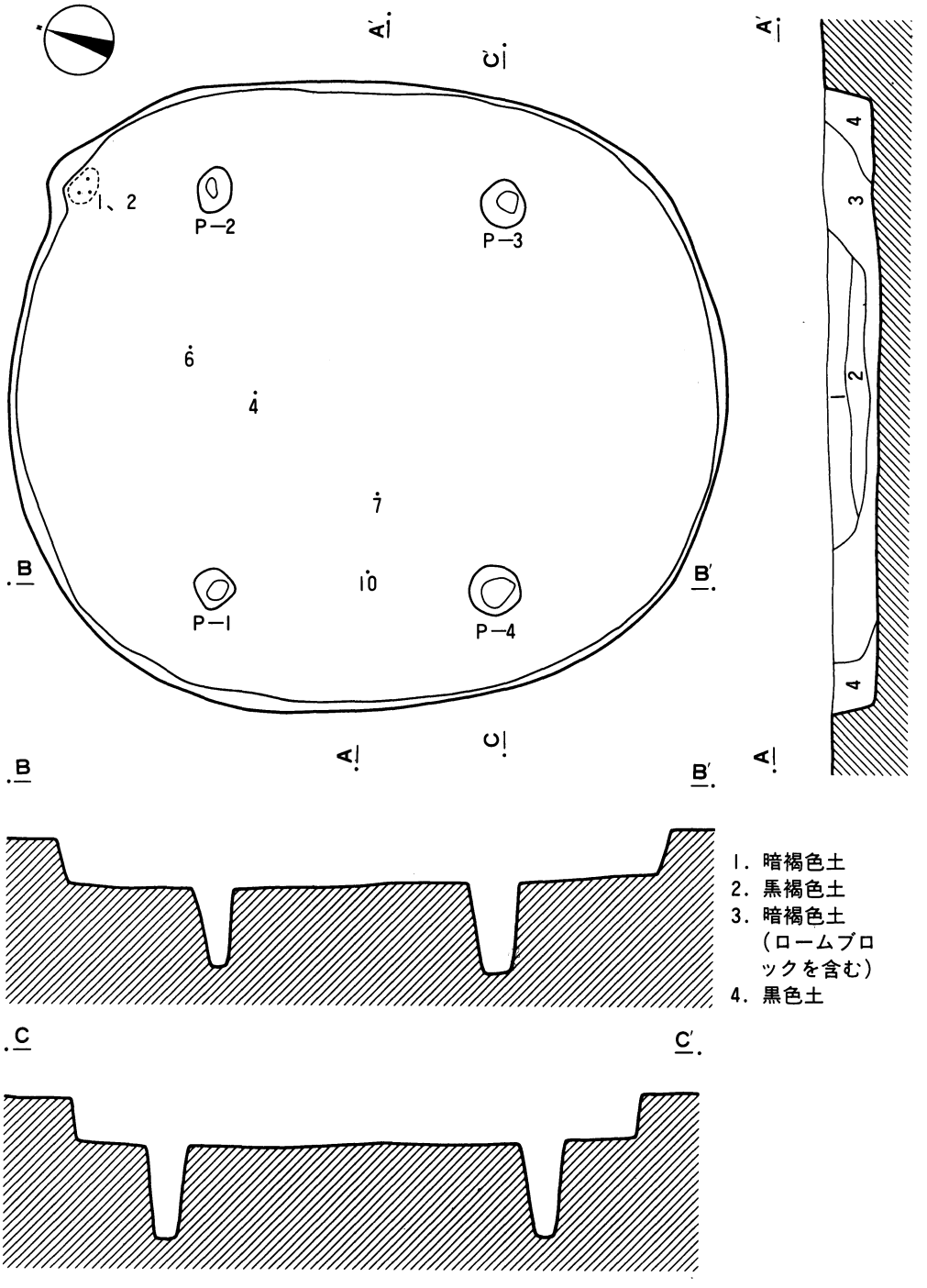


第140図　70(073)号跡出土土器(1/4)

(71)　71（080）号跡（第141～144図）

遺構（第141図）

61号跡の南西10mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の西側2/5ほどにかかっており、その段階から存在が判明していた遺構である。

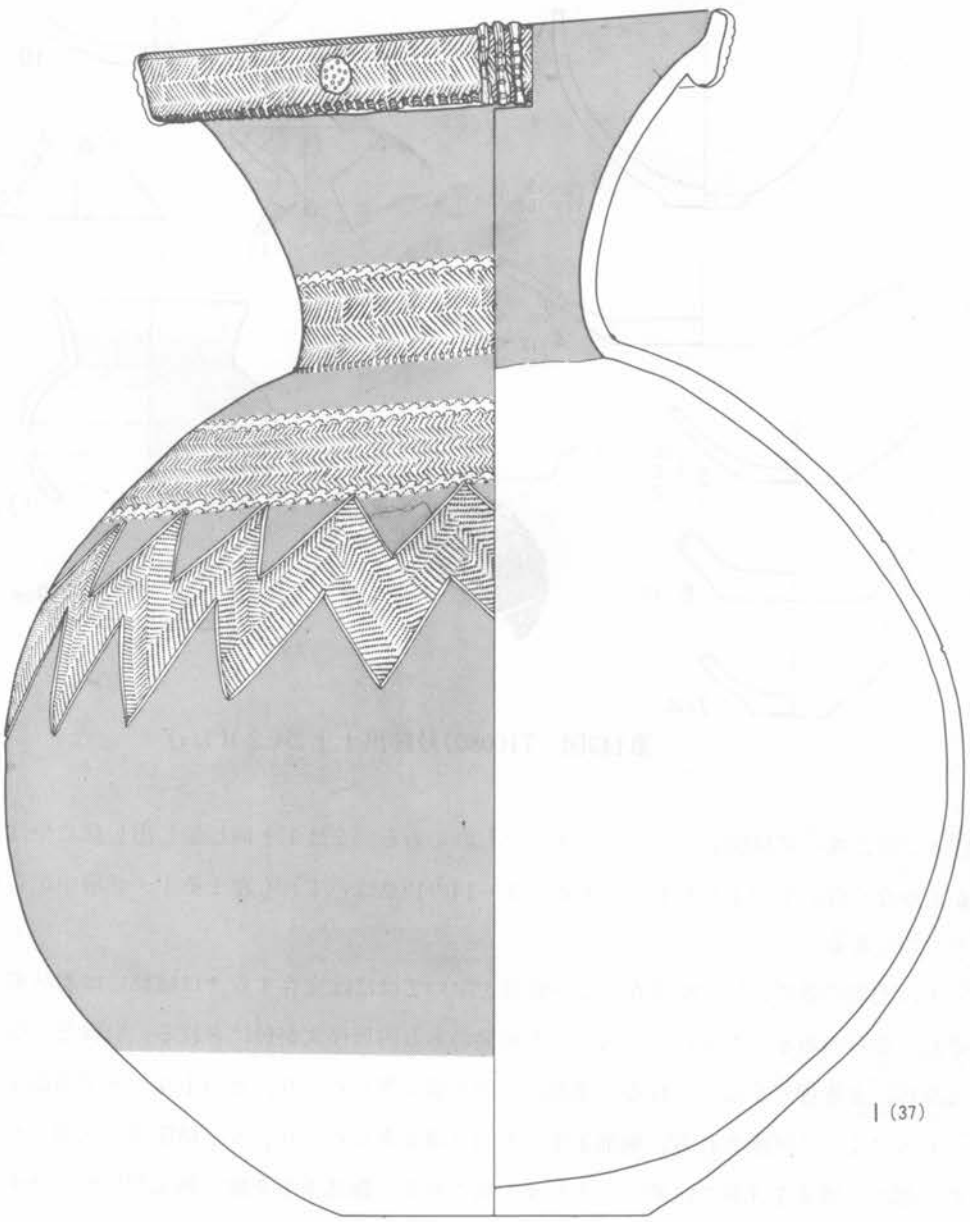


第141図　71(080)号跡実測図(1/60)

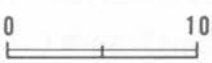
プランは、6.2×5.8mの胴張りの隅丸長方形を呈し、北コーナー部分に小さな張り出しを持つ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.4mを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは4本検出した。形態、直径にやや差があるが、いずれも0.6～0.7mの深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は4層に分けられた。

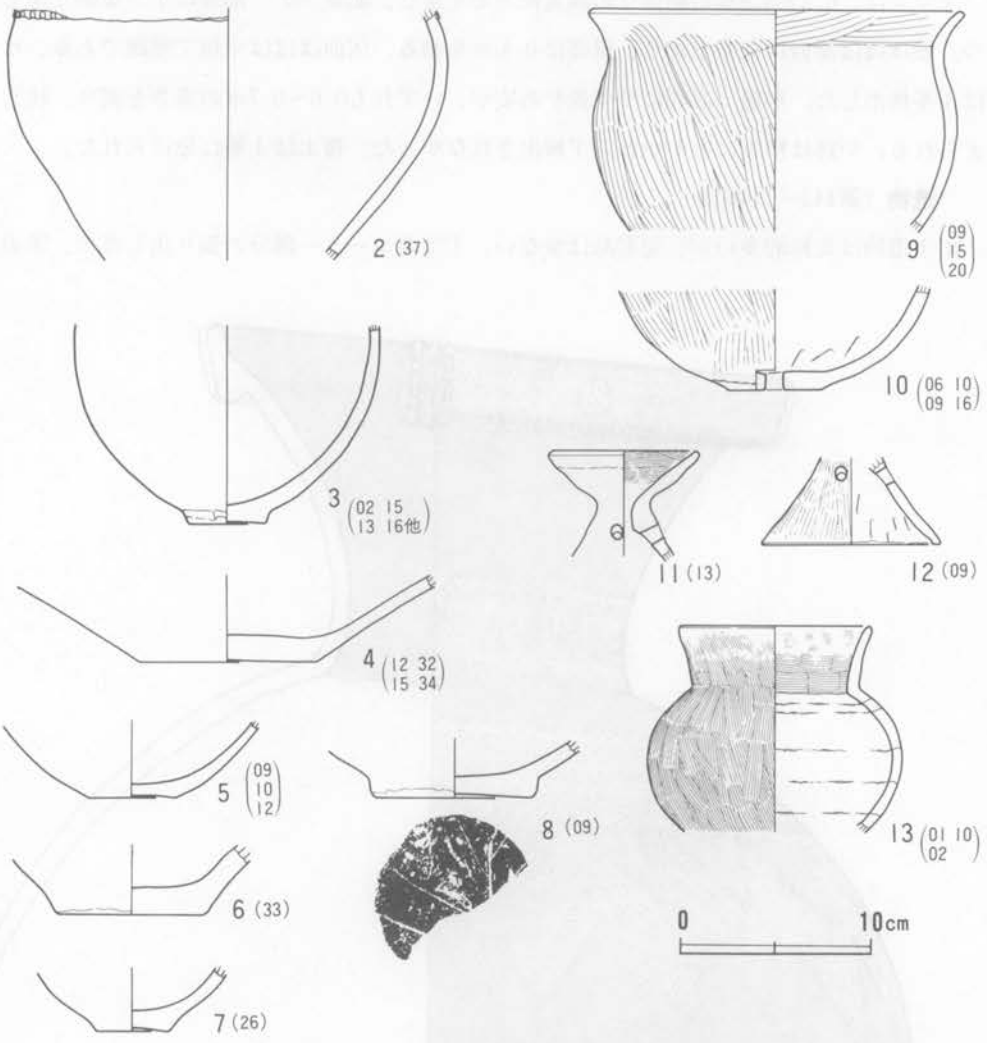
遺物（第142～144図）

出土遺物は比較的多いが、完形品は少ない。1は北コーナー部分の張り出し部で、床面から



第142図　71(080)号跡出土土器(1)(1/4)



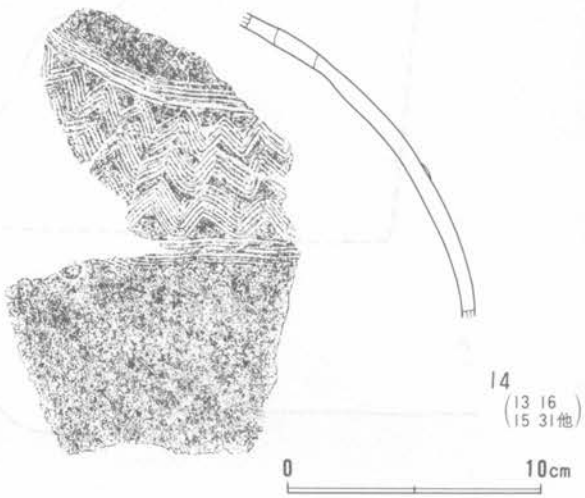


第143図　71(080)号跡出土土器(２)(1/4)

浮き、壁に接して横倒しになって出土したものである。２は１と同じ張し出し部でやはり床面からかなり浮いて出土したものである。３～14の12点はいずれも覆土第１～２層中から出土したものである。

１は大形の壺で、1/3しか遺存しない底部を除いてはほぼ完存する。口縁部には羽状縄文が施され、刻みのある３本１組の棒状浮文と刺突のある円形浮文が付けられる。口縁部下端には縄文原体による押圧が加えられる。頸部には羽状縄文帯がめぐり、その上端がＳ字結節文、下端が刻みによって区画される。胴部上半にも羽状縄文帯がめぐり、Ｓ字結節文で区画される。その下部には縄文を沈線で区画した山形文が施される。胴部下半を除く施文部以外の外面と口縁部から頸部内面は入念なナデが加えられ、赤彩される。その他の部分は粗いナデが加えられるが、内面は剝落が著しい。胎土には砂粒を含むが密で、焼成も良く、赤彩部以外は明褐色を呈する

口径31cm、底径16cm、器高61.3cmを測る。2は甕の胴部で4/5遺存する。外面には押圧を加えられた粘土帯がわずかに遺存する。内外面共にヘラミガキされるが、外面は火を受けているため遺存状態が悪く、上位には煤が付着し、中～下位は器面の剝落が著しい。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈する。最大径23cmを測る。3も甕で胴部中位以下の1/2破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径4.0cmを測る。4は大形の底部で2/3破片である。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。底径9.4cmを測る。5も底部破片で図示の範囲内で完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。底径4.4cmを測る。6も底部破片で図示の範囲内で完存する。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。底径7.4cmを測る。7も底部破片で図示の範囲内で完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面は入念なヘラナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、明褐色を呈する。底径は3.8cmを測る。8は木葉痕を有する底部の1/2破片である。外面にはナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈する。底径8.2cmを測る。9は底部を欠く甕で2/5が遺存する。外面と口縁部内面には粗いハケ目が残る。胴部内面はヘラナデされる胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径19.2cmを測る。10は胴部中位以下が2/3遺存する甕である。外面には粗いハケ目が残り、内面はヘラナデされる。底部には焼成前の穿孔が認められる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈する。底径5.0cmを測る。11は脚部を欠く器台で2/3が遺存する。内外面共にナデが加えられるが、器受部内面には細かいハケ目が残る。脚孔は3孔穿孔される。胎土、焼成共に良好で、明褐色を呈する。器受部径7.6cmを測る。12は器台の1/2破片である。外面にはやや粗いハケ目が残り、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。脚径9.4cmを測る。13は底部を欠く坩の1/4破片である。外面と口縁部内面には細かいハケ目が、胴部内面には輪積み痕が残り、ナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径は10cmを測る。14は壺の胴部破片である。上半から中位にかけて櫛描による平行線文と山形文が施され、その下部に円形浮文が付けられる。施文部以外は赤彩される。



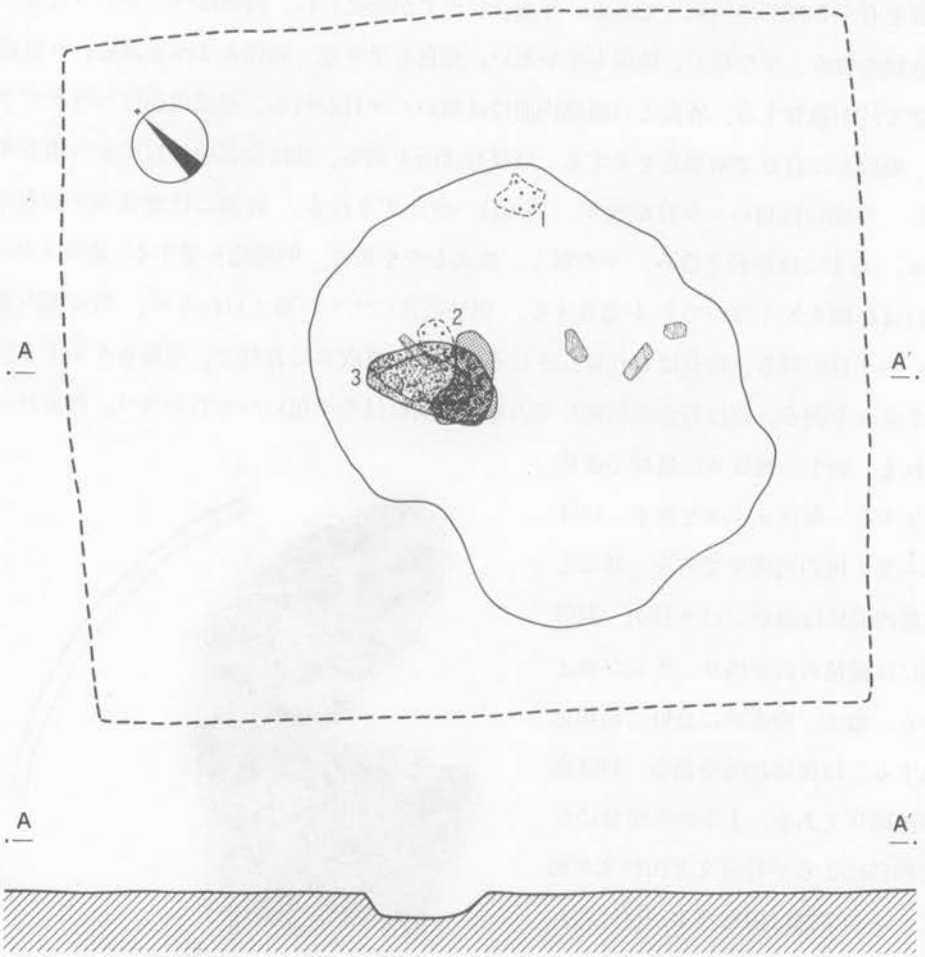
第144図　71(080)号跡出土土器(3)(1/3)

(72)　72（081）号跡（第145・146図）

遺構（第145図）

70号跡の北東15mに位置する住居跡で、確認調査時にはこの付近に農道が走っており、トレンチが設定できず、本調査の時点で存在が判明した遺構である。

プランは、壁が全く遺存していないため不明であるが、遺構の存在を確認した際に、破線で示した落込みが認められたので、疑問は残るが、ほぼ6.3×5.4mの長方形を呈するものと思われる。壁は全く遺存していない。床面は図示した範囲しか検出できなかったが、ほぼ平坦で、比較的堅緻である。ピットは全く検出されなかった。炉跡は検出された床面の中央やや北寄りに検出した。長軸1.0m、短軸0.6mのやや不整な楕円形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は全く観察できなかった。なお、床面上からは焼土と炭化材が検出された。

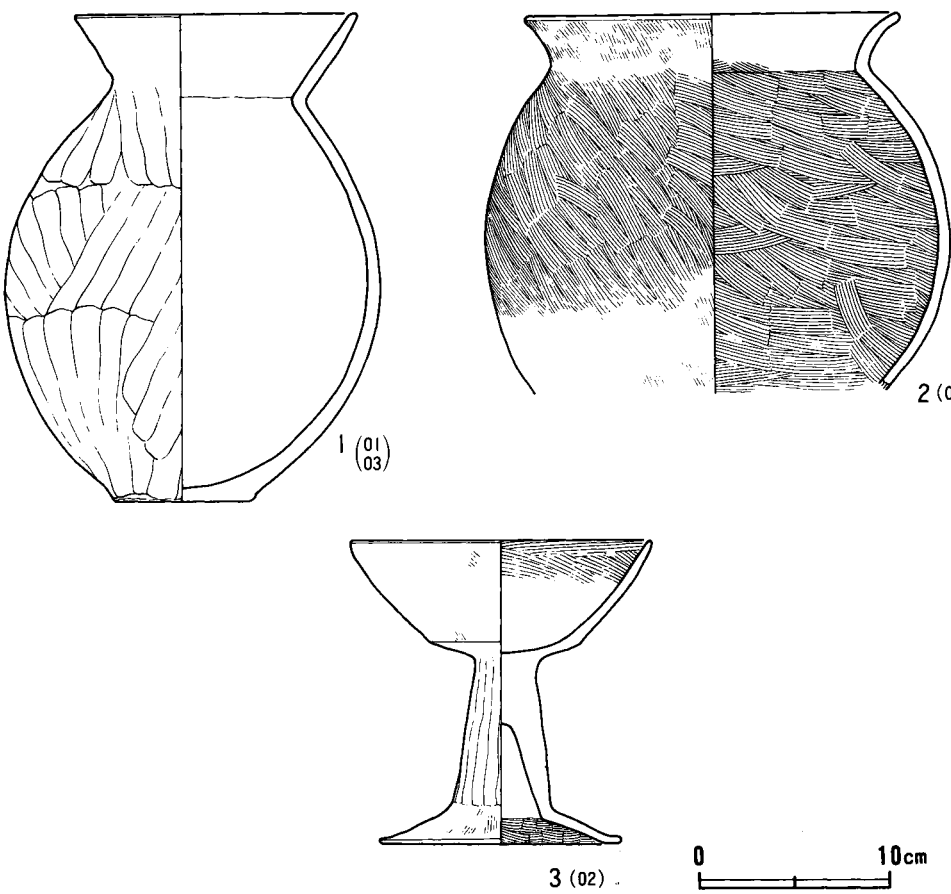


第145図　72(081)号跡実測図(1/60)

遺物（第146図）

遺構の遺存状態に比べると、出土遺物は多く、3点の土器が図示できた。1と2は炉跡の東側の床面直上から出土したもので、3は炉跡の上面から土製支脚の破片が2点出土している。

1は$\frac{2}{3}$遺存する甕である。口縁部外面はヨコナデされ、胴部外面はヘラケズリされる。内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈する。口径14.6cm、底径7.0cm、器高25cmを測る。2は底部を欠失する甕で、$\frac{2}{3}$が遺存する。外面は細かいハケ目が施されるが、口縁部はヨコナデされ、胴部下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面にも細かいハケ目が施される。内面は剥落が著しい。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈し、口径19.2cmを測る。3は$\frac{3}{4}$遺存する高坏である。外面の坏部と脚裾部はヘラナデされるが、わずかにハケ目が残る。脚部はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面は、坏部上半と脚裾部にハケ目が施される。その他はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈する。口経15.8cm、脚径12.4cm、器高15.5cmを測る。

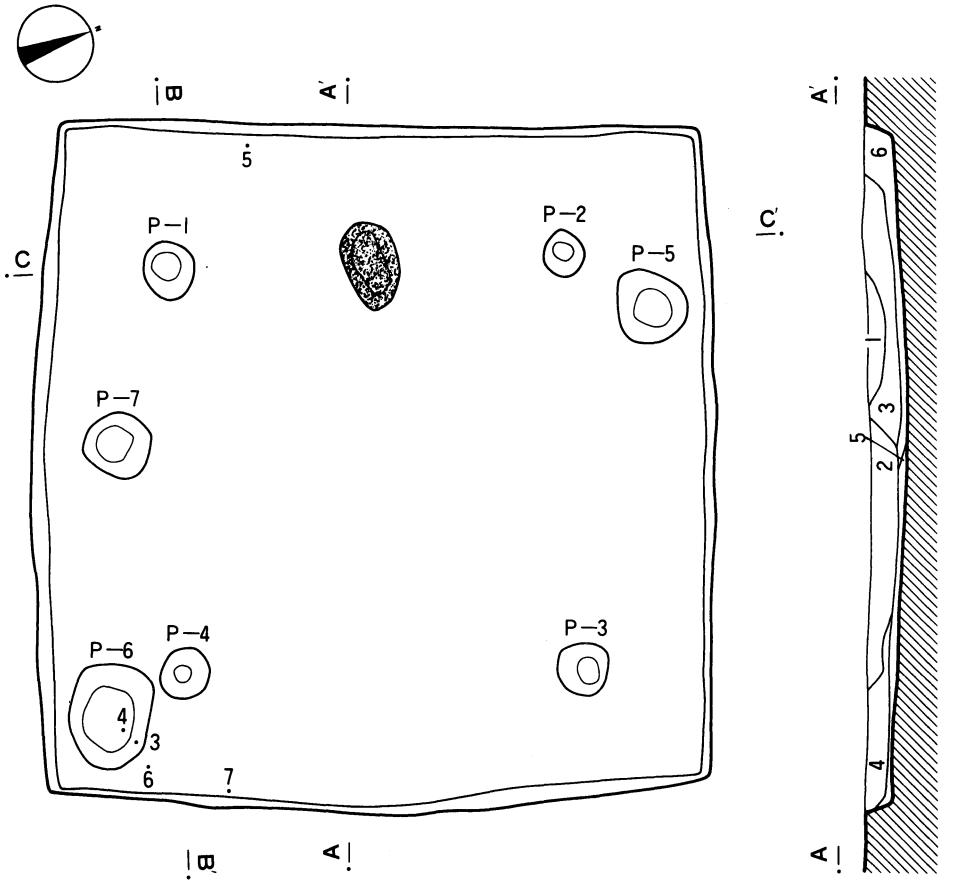


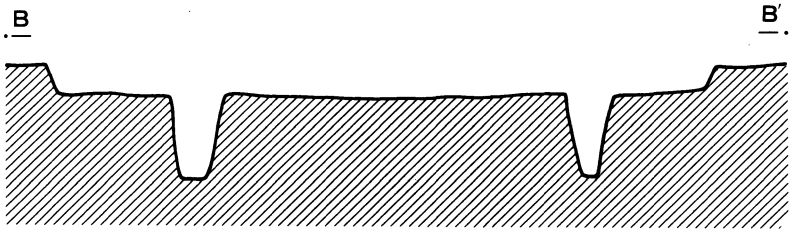
第146図　72(081)号跡出土土器(1/4)

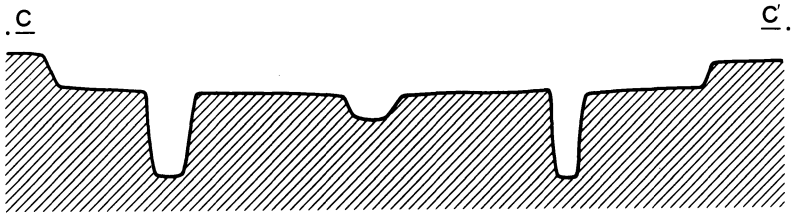
(73)　73（082）号跡（第147・148図）

遺構（第147図）

72号跡の東15mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチに、住居跡の東側1/4ほどがかか







1．茶褐色土
2．褐色土
3．黒褐色土
4．暗褐色土
5．褐色土
6．暗褐色土

第147図　73(082)号跡実測図(1/60)

0　2m

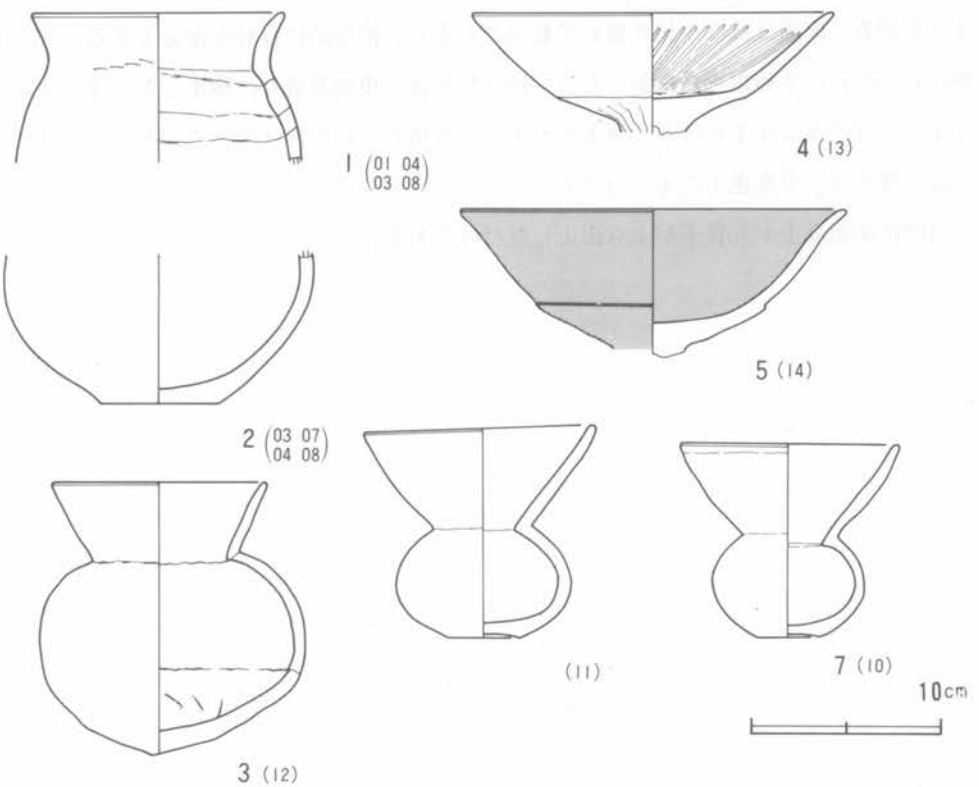
っており、その段階から存在の判明していた遺構である。

プランは、一辺が約5.3ｍの方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.2～0.3ｍを測る。床面は軟弱で、中央部でやや低くなる。ピットは7本検出した。Ｐ－1～Ｐ－4の4本はいずれも0.6ｍ前後の深さを測り、柱穴と考えられる。Ｐ－5は0.25m、Ｐ－7は0.35mの深さを測る。Ｐ－6は0.5ｍの深さを測り、位置からして貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央西寄りに検出した。長軸0.7ｍ、短軸0.4ｍの楕円形を呈する。掘込みは0.4ｍほどで焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は6層に分けられた。

遺物（第148図）

出土遺物は比較的多く、7点の土器が図示できた。1、2は覆土中から出土したものである。3と4はＰ－6内から出土したもので、3は底面から20cm、4は底面から8.0cm浮いていた。5は西壁際で5.0cm浮いて出土したものである。6と7はＰ－6近くの床面直上から出土したものである。

1は甕の口縁部から胴部上半にかけての$\frac{1}{3}$破片である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面には輪積み痕が残り、粗くヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15cmを測る。2は甕の胴部中位以下で$\frac{2}{3}$が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径



第148図　73(082)号跡出土土器(1/4)

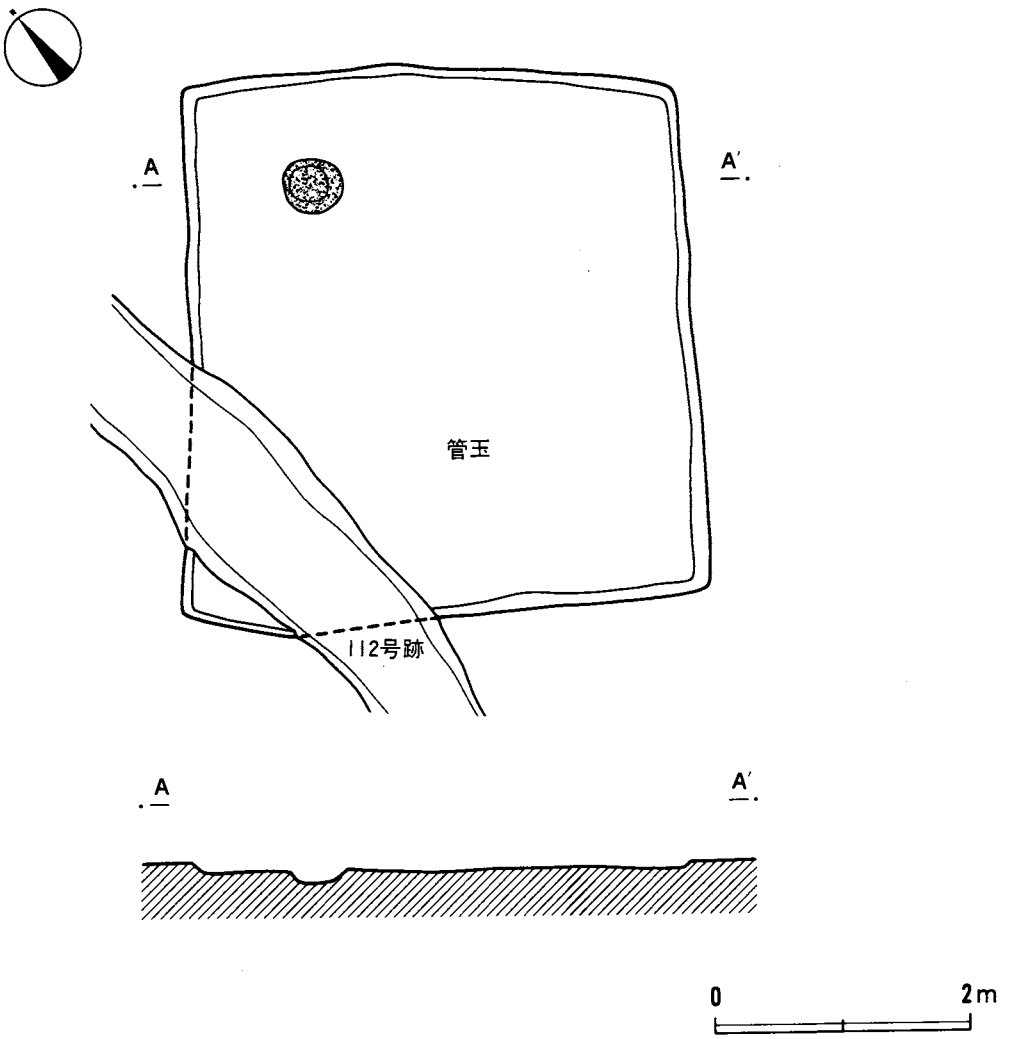
6.2cmを測る。3は口縁部をわずかに欠失するが、ほぼ完形の坩である。口縁部は内外面共にナデが加えられる。胴部は外面がヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。なお内面には輪積み痕が残るが、ここから底部にかけて、成形時の歪みが見られる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径11cm、底径3.5cm、器高14cmを測る。4は高坏の坏部で、図示の範囲はほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面にはヘラミガキが加えられる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径19.8cmを測る。5も高坏の坏部で$\frac{4}{5}$が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面にはナデが加えられる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径20cmを測る。6は口唇部をわずかに欠失するがほぼ完形の坩である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられるが、剝落が著しい。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径12cm、底径3.8cm、器高10.7cmを測る。7も6と同形の坩で、ほぼ完形である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径11.2cm、底径3.8cm、器高9.9cmを測る。

(74)　74（085）号跡（第149図）

72号跡の北15mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡中央部にかかっていたが、確認できなかった遺構である。重複する112号跡との新旧関係は、112号跡が本跡の床面を切っていることにより、112号跡の方が新しい。

プランは4.3×4.0mの長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.1mを測る。床面はほぼ平坦で極めて軟弱であるが、部分的に良好な部分もある。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央北寄りに検出した。径0.4mの円形を呈し、掘込みは0.1mほどで焼土がわずかに堆積していただけで、底面も全く焼けていなかった。覆土は、黒褐色土の単一層であった。

遺物は床面直上から管玉が1点出土しただけである。



第149図　74(085)号跡実測図(1/60)

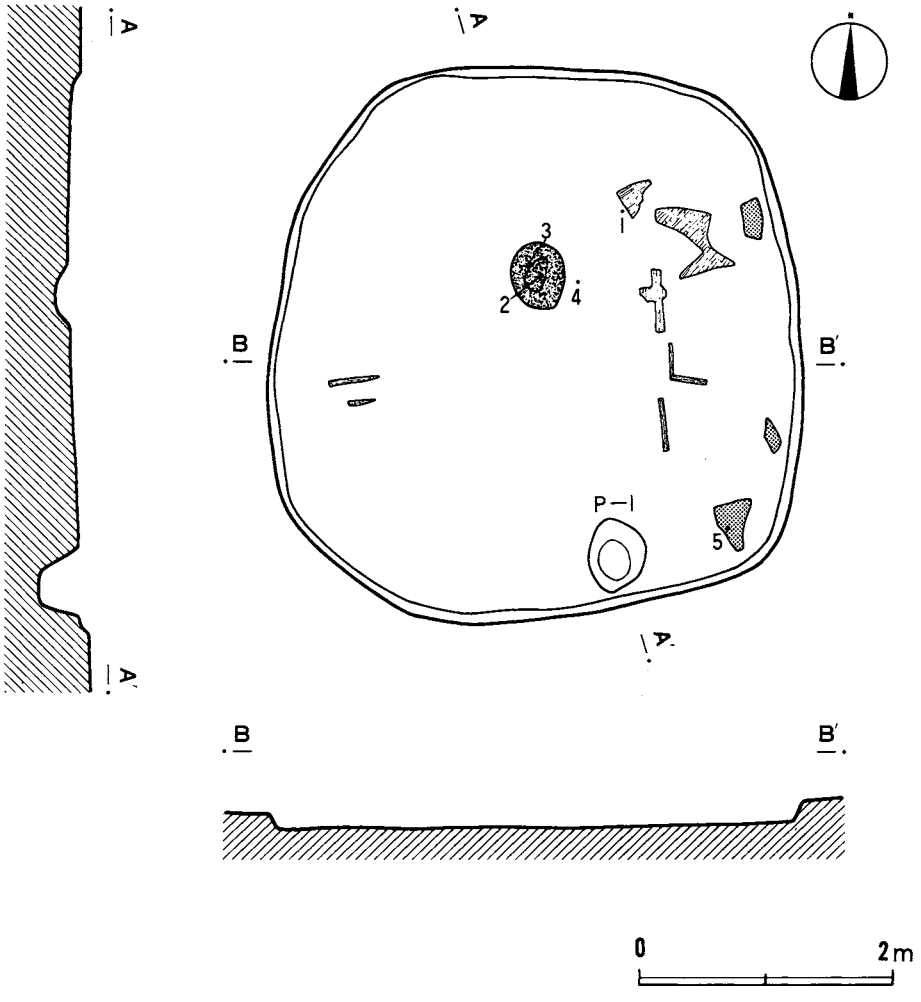
(75)　75（086）号跡（第150・151図）

遺構（第150図）

73号跡の南東20mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは、一辺が約4.2mのやや不整な隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は、0.15m前後を測る。床面はやや凹凸に富むが、比較的堅緻であり、特に炉跡からP－1にかけての部分が良好でやや高くなる。ピットは南壁際に1本検出しただけである。深さは0.3mで位置からして貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.55m、短軸0.45mの長円形を呈する。掘込みは0.1mほどで、焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、床面上からは焼土と

炭化材が検出された。



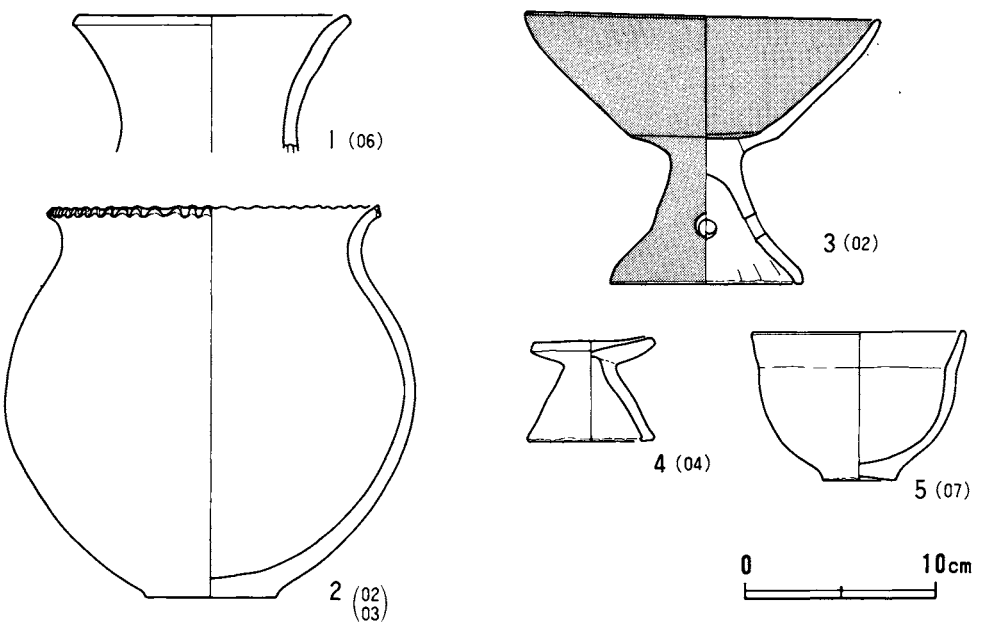
第150図　75(086)号跡実測図(1/60)

遺物（第151図）

出土遺物は少ないが、炉跡付近からの出土が目立つ。1は炉跡の北東の炭化材の脇で2cm浮いて出土したもので、5はP－1東側の焼土中で床面直上から出土したものである。2・3は炉跡の上面から出土したもので、3はやや浮いていた。4は炉跡の東脇で10cm浮いて出土したものである。

1は壺の口縁部破片で、図示の範囲で完存する。内外面共にナデが加えられるが、火を受けているため、遺存状態が極めて悪い。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、口径13.8cmを測る。2は$\frac{4}{5}$が遺存する甕である。口唇部には両側から押圧が加えられる。胴部は内外面共にヘラナデされるが、下半部はさらにヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径16.9cm、底径6.8cm、器高19.9cmを測る。3は$\frac{3}{4}$遺存する高坏

である。外面と坏部内面はナデが加えられ、赤彩される。脚部内面はヘラナデされる。脚孔は4孔が穿孔される。胎土・焼成共に良好で赤彩部以外は明褐色を呈する。口径18.4cm、底径10cm、器高13.7cmを測る。4はほぼ完形の器台である。外面はヘラナデされ内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を多く含み、粗く、焼成も悪い。なお、他の土器とは胎土が著しく異なる。器受部径6.2cm、脚径6.6cm、器高5.2cmを測る。5は鉢で口縁部を1/5欠失するが、その他は完存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径11cm、底径3.8cm、器高7.6cmを測る。



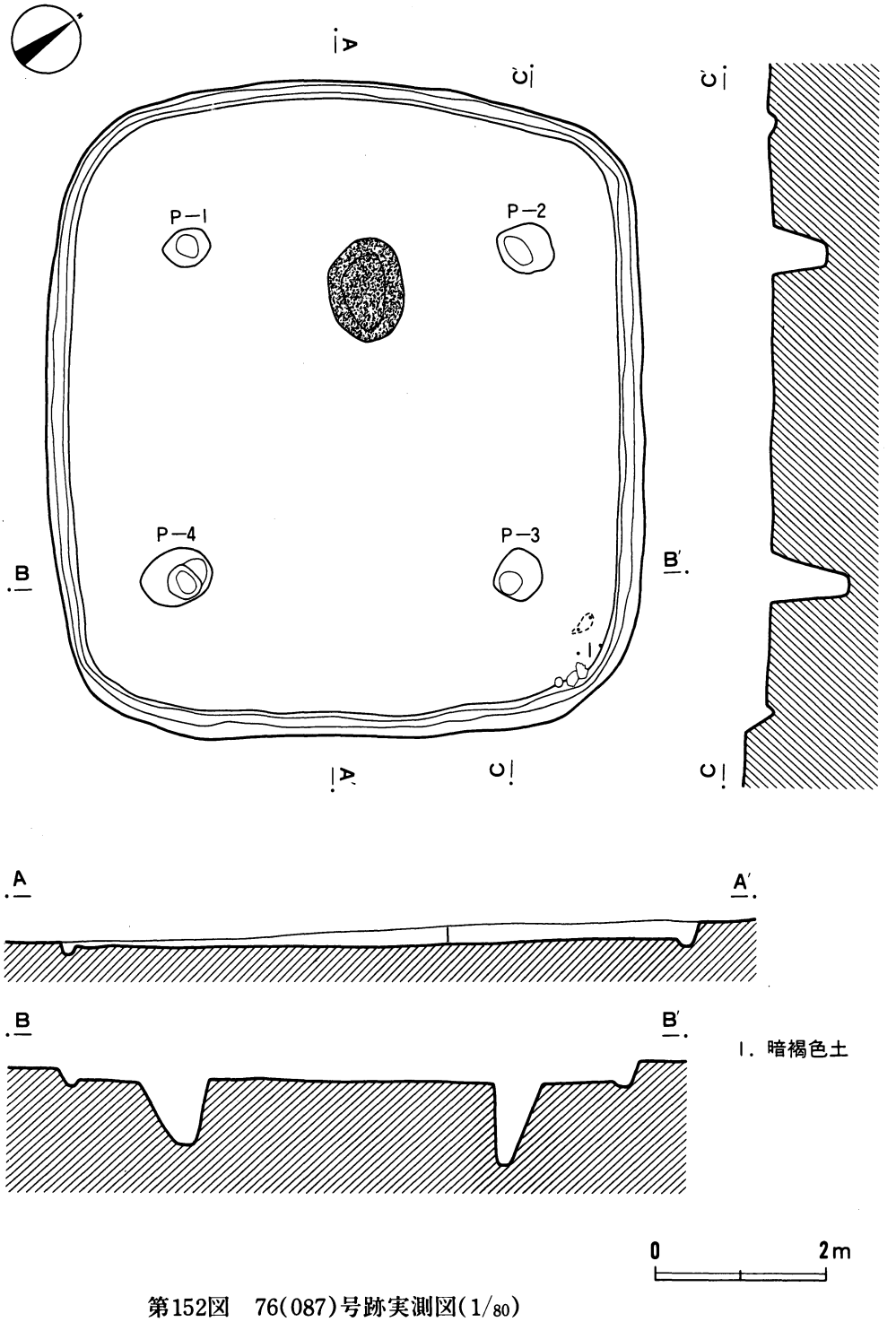
第151図　75(086)号跡出土土器(1/4)

(76)　76（087）号跡（第152・153図）

遺構（第152図）

73号跡の東20mに位置する住居跡で、住居跡の一部に確認調査時のトレンチがかかっていたが、その部分が極めてわずかなため確認できなかった遺構である。

プランは、7.6×7.0mの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には差があり、0.05～0.3mを測る。壁溝は全周する。床面はほぼ平坦であるが、軟弱である。ピットは4本検出した。いずれも0.7～0.9mの深さを測り柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸1.2m、短軸0.9mの長円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土の堆積は比較的厚く、底面もよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、東側コーナー部分から焼土がやや浮いた状態で検出された。

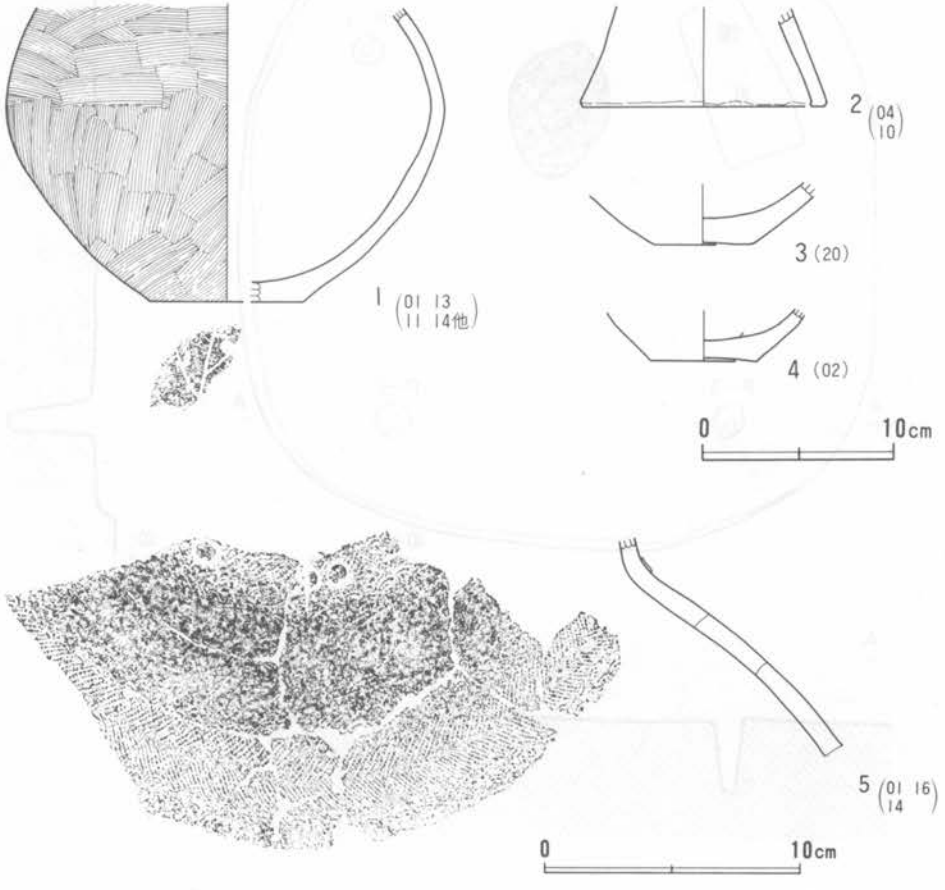


第152図　76(087)号跡実測図(1/80)

遺物（第153図）

出土遺物は少なく5点の土器が図示できたにすぎない。1は東側コーナー部分で5cm浮いて出土した破片が接合したものである。2～5は覆土中から出土したものである。

1は胴部以下が⅔遺存する甕で、底部に木葉痕を有する。外面にはハケ目が施され、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈する。底径は8.0cmを測る。2は器台で図示の範囲で完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪く、褐色を呈する。脚径12.6cmを測る。3は底部で図示の範囲で完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径は5.0cmを測る。4も底部で図示の範囲内で完存する。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、褐色を呈する。底径は5.0cmを測る。5は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部にはS字結節文で区画された縄文帯がめぐり、2個1組の円形浮文が付けられる。胴部上半にもS字結節文で区画された羽状縄文帯がめぐる。施文部以外は赤彩される。



第153図　76(087)号跡出土土器(1/4・1/3)

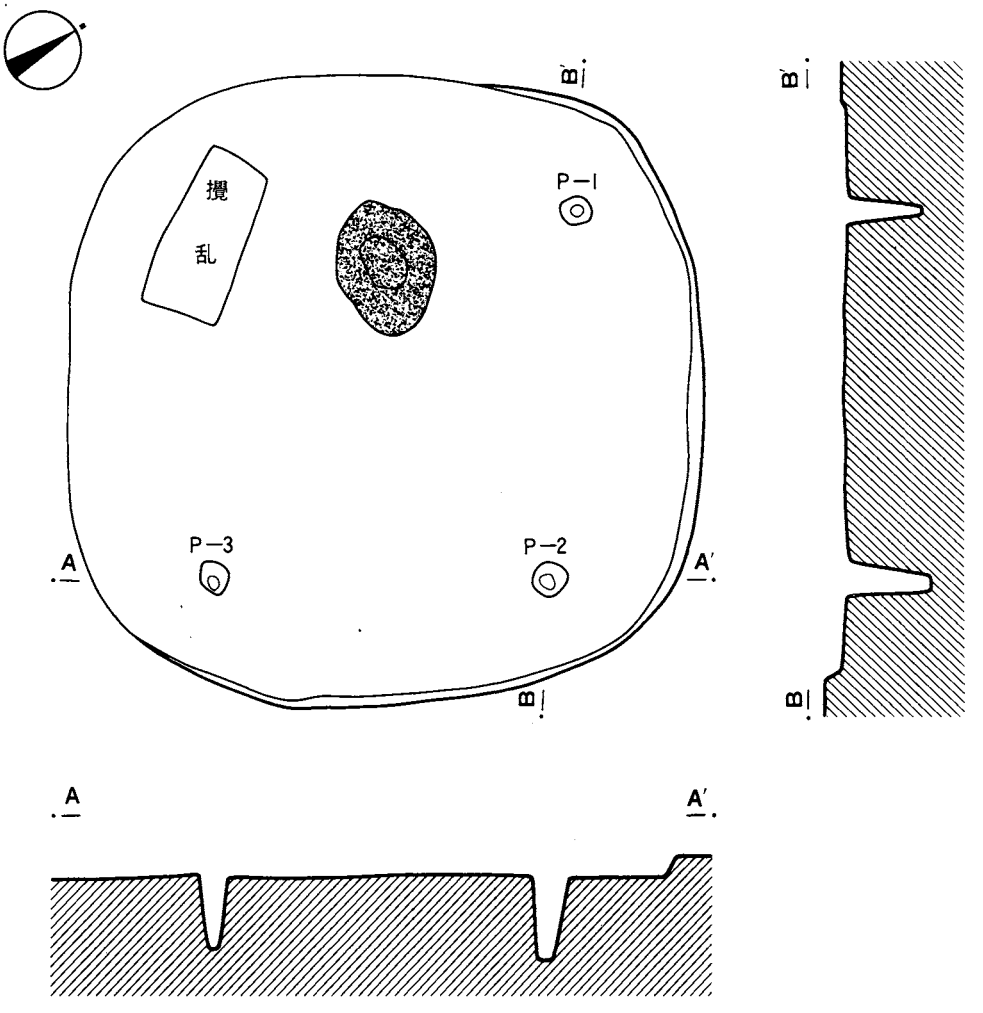
(77)　77（090）号跡（第154・155図）

遺構（第154図）

62号跡の東20mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡東側にかかっていたが、

確認できなかった遺構である。

プランは、一辺が約5.0mのやや胴張りの隅丸方形を呈する。壁は西側½を斜面によって失っている。遺存している壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.15mを測る。床面はほぼ平坦で極めて堅緻であるが、東側がやや低くなる。ピットは3本検出した。いずれも0.6m前後の深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや西寄りに検出した。長軸1.1m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈する。掘込みは0.15mほどで、焼土の堆積は比較的厚く、底面もよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。



第154図　77(090)号跡実測図(1/60)

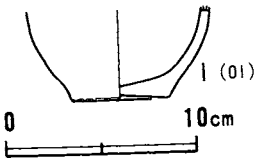
0　2m

遺物（第155図）

出土遺物は極めて少なく、覆土中より出土した埦が図示できただけである。

1は埦で⅔が遺存する。外面はナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良

好で、明褐色を呈する。底径は5.0cmを測る。



第155図　77(090)号跡出土土器(1/4)

(78)　78（092)号跡（第156・157図）

遺構（第156図）

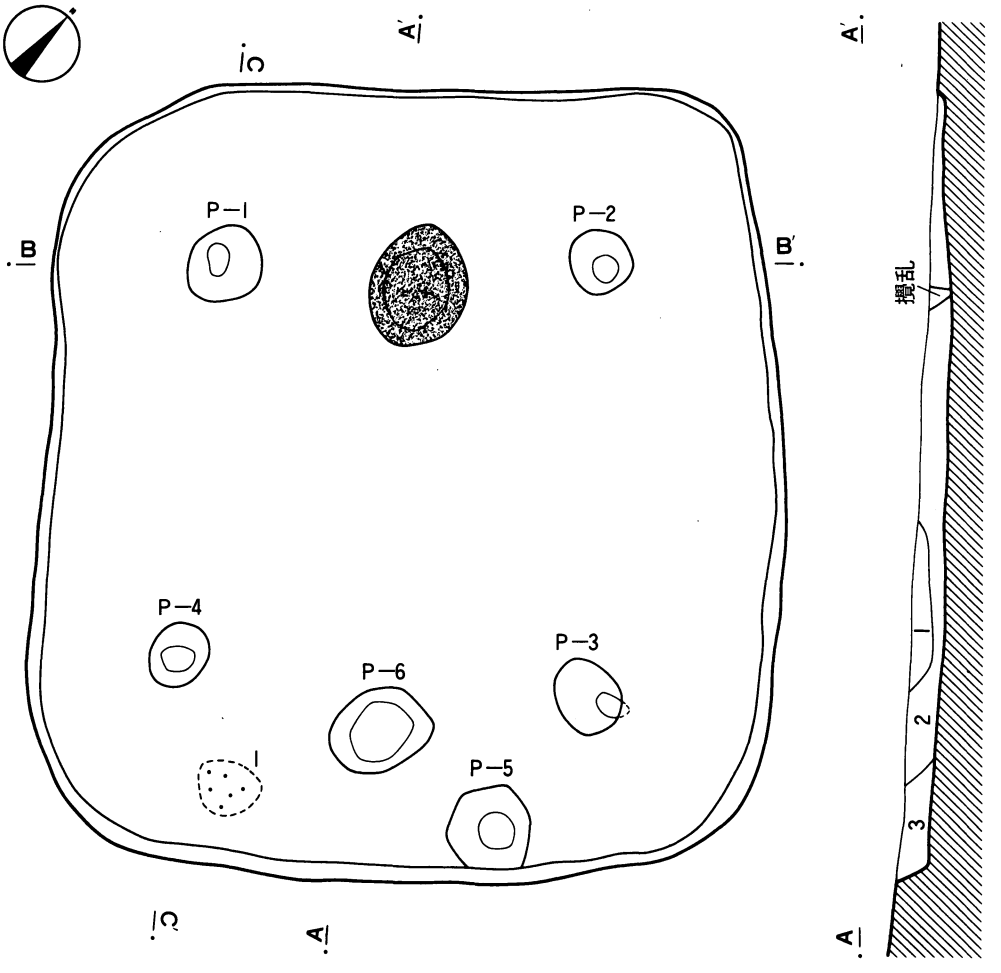
75号跡の東12mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡中央部にかかっており、その段階から存在が判明していた遺構である。

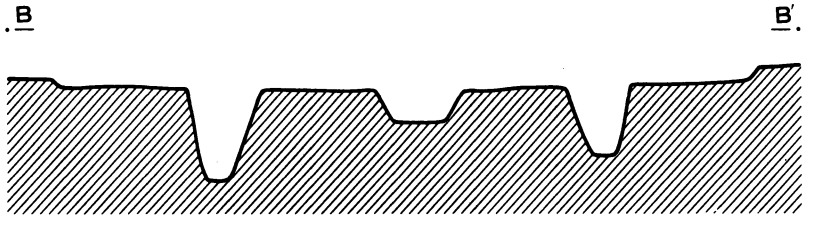
プランは、6.2×5.9mの隅丸のやや長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高には差があり、0.05～0.25mを測る。床面は堅緻であるが、やや凹凸に富み、P－3～P－4より東側はやや高くなる。ピットは6本検出した。P－1～P－4はいずれも0.5～0.7mの深さを測る。P－5、P－6は0.35m前後の深さを測る。P－1～P－4は柱穴と考えられる。P－6も柱穴か。P－5は位置からして貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北西寄り、P－1とP－2の中間に検出した。長軸1.0m、短軸0.75mの長円形を呈する。掘込みは0.25mと深く、硬質の焼土が厚く堆積しており、底面もよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。

遺物（第157図）

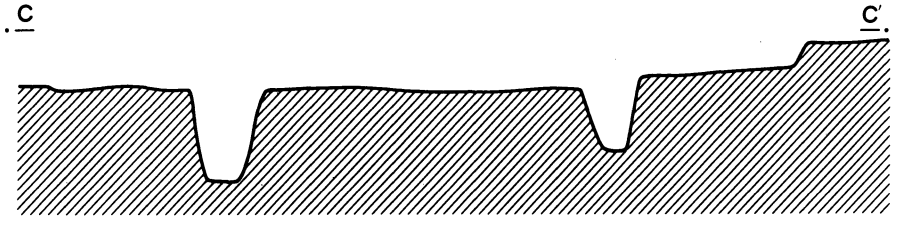
出土遺物は極めて少なく2点の土器が図示できたにすぎない。1はP－6の南側で床面直上から出土したもので、2は覆土中から出土のものである。

1は小形の壺で、⅕が遺存する。外面は口縁部から胴部中位にかけてはヘラナデされるが、部分的に粗くヘラミガキされる。下半はヘラケズリされる。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径10.4cm、底径6.0cm、器高16cmを測る。2は高坏の坏部½破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は11.4cmを測る。



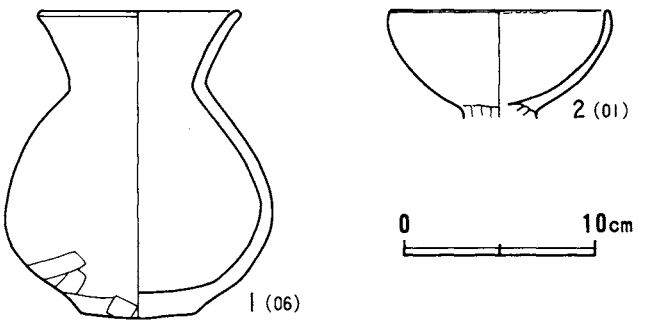


1. 暗褐色土
（ロームブロックを含む）
2. 暗褐色土
3. 茶褐色土



0 2m

第156図　78(092)号跡実測図(1/60)



第157図　78(092)号跡出土土器(1/4)

(79)　79（093）号跡（第158～160図）

遺構（第158図）

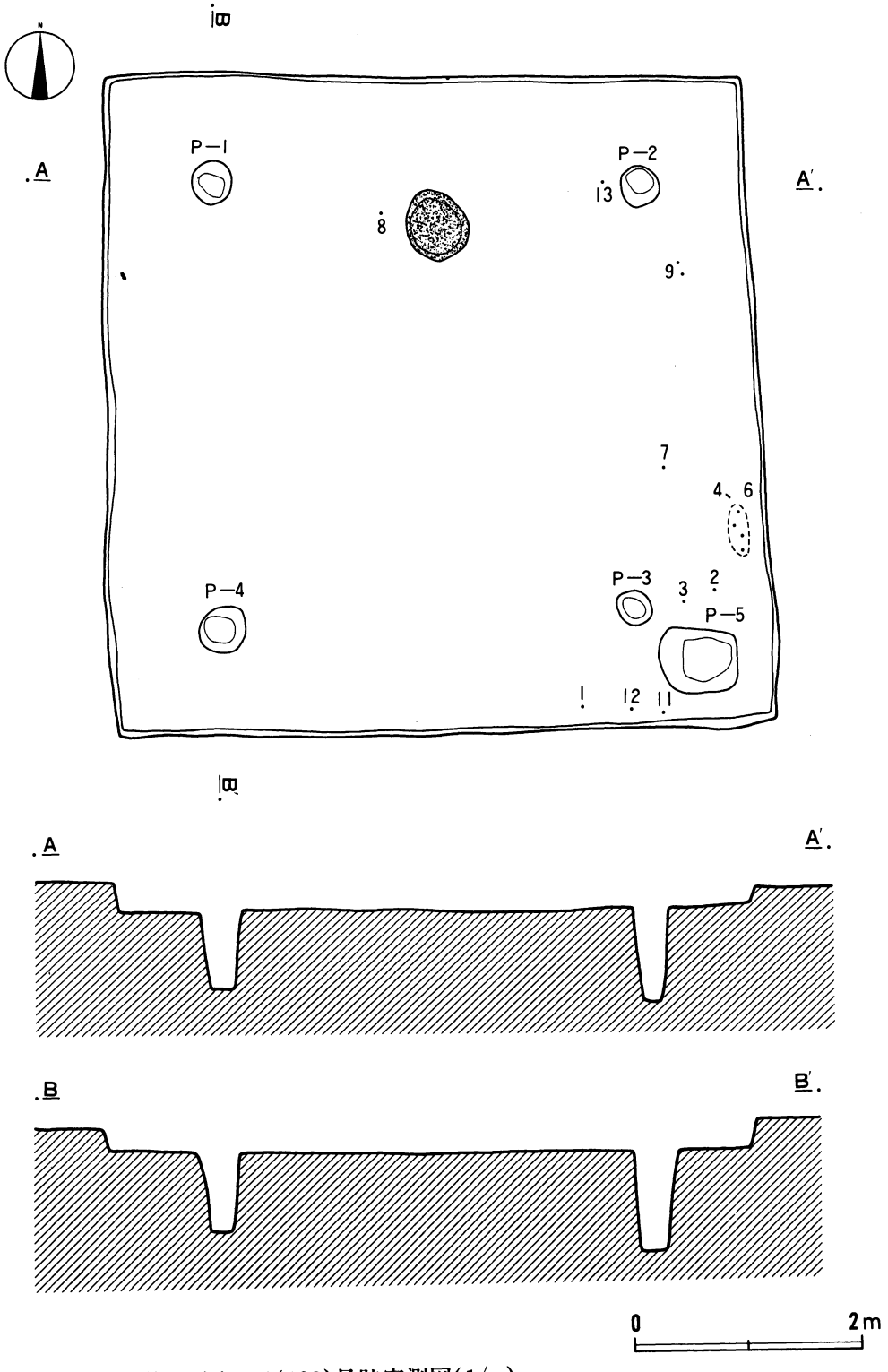
71号跡の西側２ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが、住居跡の西側⅕ほどにかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

プランは、一辺が5.8ｍの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.15～0.25ｍとやや差がある。床面はほぼ平坦であるが軟弱である。ピットは５本検出した。Ｐ－１～Ｐ－４はいずれも0.75～0.9ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。Ｐ－５は0.57ｍの深さで、炭化材と土器片が出土しており、貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央北寄りの、Ｐ－１とＰ－２のほぼ中間に検出した。長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍの長円形を呈する。掘込みは0.1ｍと浅く、焼土粒がわずかに認められただけで、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は黒褐色土の単一層であった。

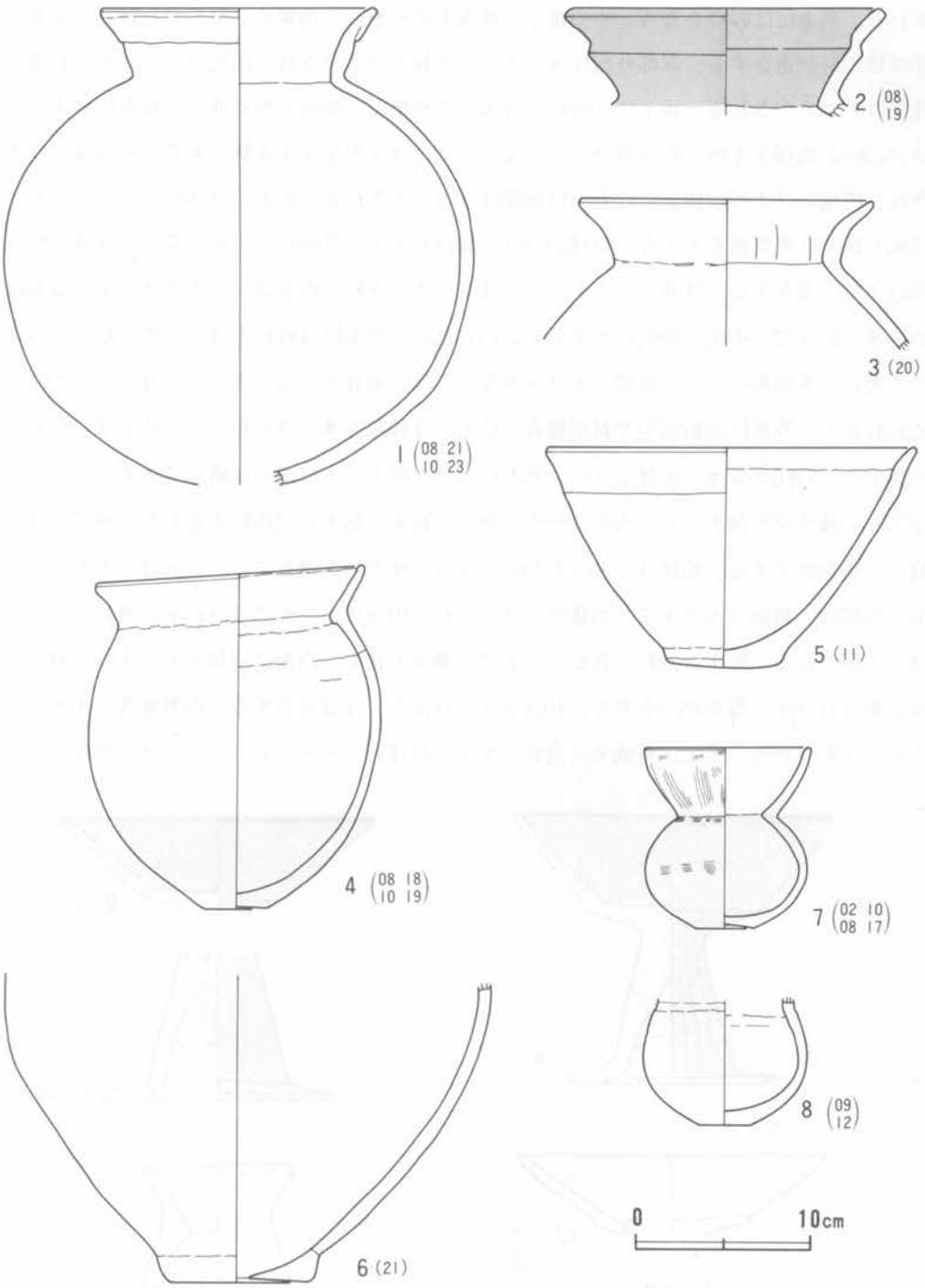
遺物（第159・160図）

出土遺物は多く14点の土器が図示できた。特にＰ－５周辺の出土が目立つ。１～４はＰ－５の北側から出土したもので、２、４は床面直上から出土し、１、３は床面から10cm前後浮いていた。５はＰ－５内から出土、６もＰ－５の北側で床面から5.0cm浮いて出土した。７と８は床面から12cm浮いて出土したものである。９、10はＰ－２の南側で5.0cm浮いて出土したもので、11、12はＰ－５の南西で10cm前後浮いて出土した。また、13はＰ－２の西側で15cm浮いて出土したもので、14は覆土中からの出土である。

１は底部を欠く折り返し口縁の壺で、⅗が遺存する。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、明褐色を呈する。口径15.5cmを測る。２は壺の口縁部である。内外面共にヨコナデで、赤彩される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。口径17.4cmを測る。３は甕の口縁部～胴部上半で⅔遺存する。胴部と内面はヘラナデされ、口縁部外面はヨコナデ

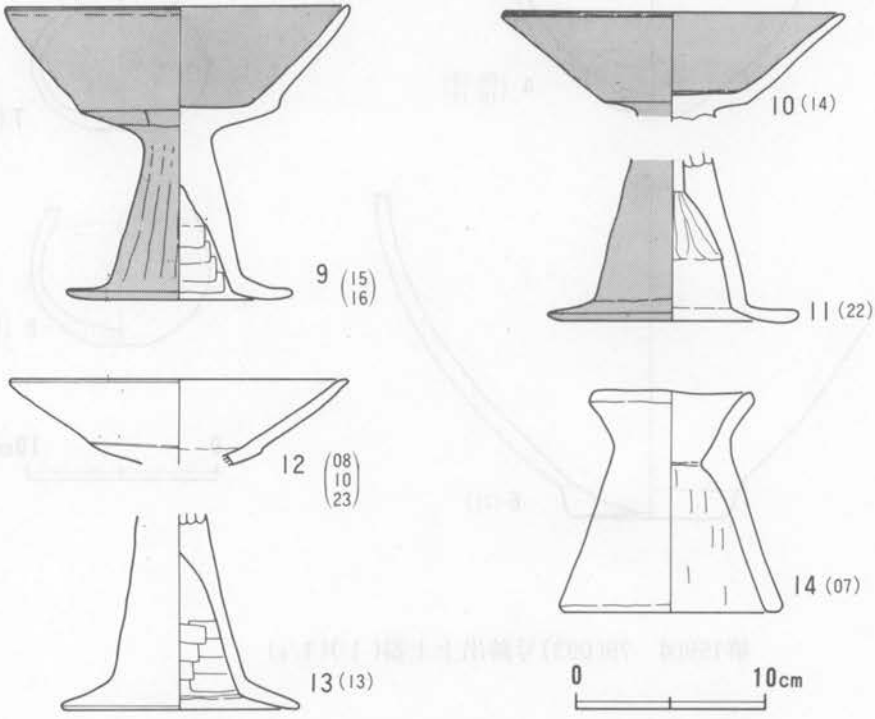


第158図　79(093)号跡実測図(1/60)



第159図　79(093)号跡出土土器(１)(1/4)

される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、口径16.5cmを測る。4は甕で⅔が遺存する。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈する。口径15.3cm、底径3.4cm、器高18.8cmを測る。5はほぼ完形を呈する鉢である。外面はヘラナデされ、内面にはナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良く、明褐色を呈する。口径20.8cm、底径6.8cm、器高12.2cmを測る。6は甕の胴部中位以下で⅔遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。底部は極めて薄い作りで、中央に焼成前の穿孔が認められる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈し、底径7.8cmを測る。7は⅔遺存する坩である。内外面共にナデが加えられるが、外面には粗いハケ目が残る。胎土には砂粒を多く含み粗く、焼成も悪い。明褐色を呈する。口径9.3cm、底径3.2cm、器高10.1cmを測る。8は埦の⅖破片である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良い。褐色を呈する。底径は2.8cmを測る。9は高坏で⅔が遺存する。坏部はナデが加えられる。脚部は、外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラケズリされる。外面と坏部内面は、赤彩される。胎土に砂粒を含むが、密で、焼成も良く、内面は淡褐色を呈する。口径17.8cm、脚径11.8cm、器高15cmを測る。10は高坏の坏部で、ほぼ完存する。内外面共にナデが加えられ、赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径17.7cmを測る。11は高坏の脚部で、ほぼ



第160図　79(093)号跡出土土器(2)(1/4)

完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、赤彩される。内面にはナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、内面は褐色を呈する。脚径12cmを測る。12は高坏の坏部で½が遺存する。内外面共にナデが加えられる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。褐色を呈する。13は高坏の脚部で⅔が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面もヘラケズリされるが、部分的にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。脚径は12.2cmを測る。14は⅔が遺存する器台である。外面はナデが加えられた後、粗く、ヘラミガキされる。内面は、器受部は粗くヘラミガキされ、脚部は粗くヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、褐色を呈する。器受部径8.2cm、脚径11.2cm、器高11.2cmを測る。

(80)　80（095）号跡（第161・162図）

遺構（第161図）

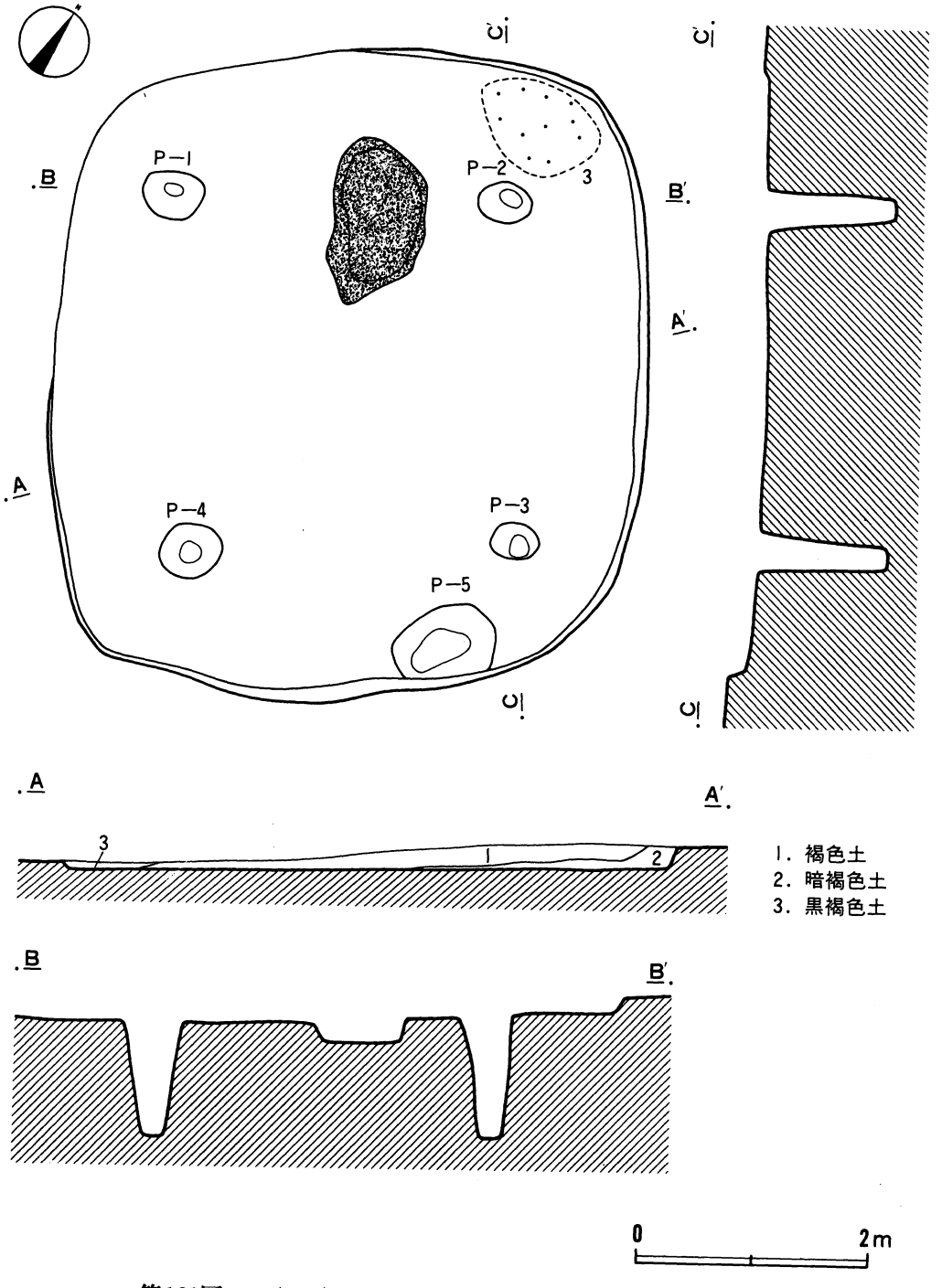
76号跡の北東20mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡東側にかかっていたが確認できなかった遺構である。

プランは5.5×5.2mのやや胴張りの隅丸方形を呈する。壁は西側¼を斜面によって失っている。遺存している壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.25mとやや差がある。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、P－3、P－5周辺がやや高くなる。ピットは5本検出した。P－1～P－4はいずれも1.0～1.2mの深さを測り、柱穴と考えられる。P－5は南壁際に検出したもので0.5mの深さを測り、位置からして貯蔵穴と考えられる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸1.4m、短軸0.8mの不整形を呈する。掘込みは0.2mほどで、焼土が厚く堆積しており、底面はよく焼けていた。覆土は3層に分けられた。

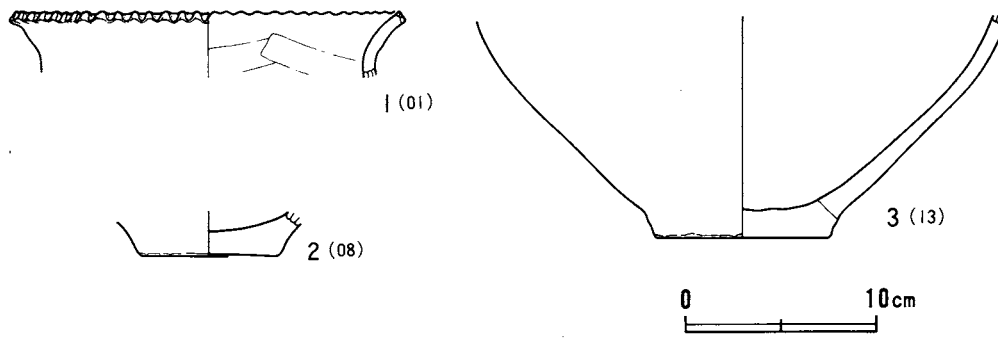
遺物（第162図）

覆土中からの土器片の出土は比較的多いが、図示できたのは3点にすぎない。1は覆土中から出土したもので、2はP－4内から出土したものである。3はP－2の北側で床面から8.0cm浮いて出土したものである。

1は甕の口縁部の¼破片である。口唇部には押圧が加えられる。外面はヨコナデされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、暗褐色を呈する。口径は20cmを測る。2は底部の⅔破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈する。底径7.0cmを測る。3は壺の胴部中位以下で⅓遺存する。外面はナデを加えた後粗くヘラミガキされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。底径は9.0cmを測る。



第161図　80(095)号跡実測図(1/60)

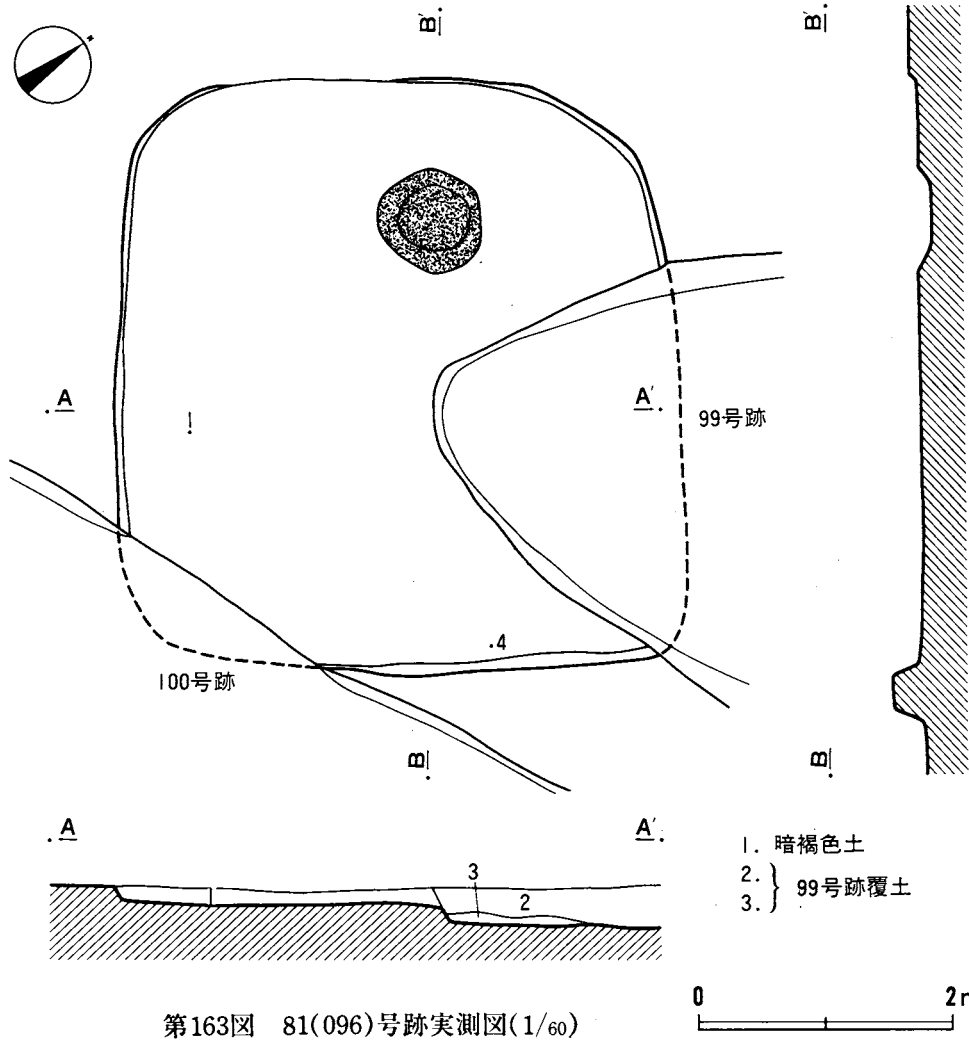


第162図　80(095)号跡出土土器(1/4)

(81)　81（096）号跡（第163・164図）

遺構（第163図）

80号跡の北西9.0mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の西側にかかって



第163図　81(096)号跡実測図(1/60)

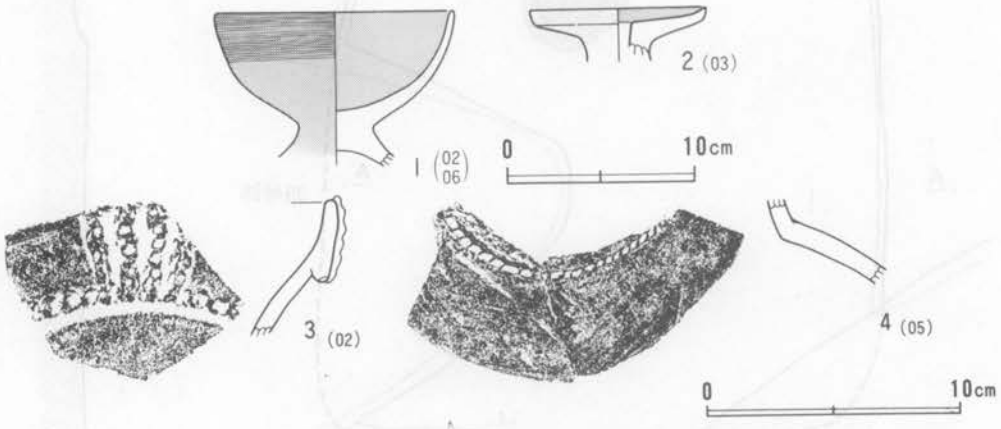
いたが確認できなかった遺構である。99・100号跡という2つの周溝（墓）に切られる。

プランは、一辺が約4.5ｍの隅丸方形を呈する。壁は½ほどしか遺存しておらず、やや傾斜を持って立ち上がる。壁高は0.05～0.2ｍと差がある。床面はほぼ平坦であるが軟弱である。なお、ピットは検出されなかった。炉跡は住居跡の中央北西寄りに検出した。径0.8ｍの不整円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで焼土の堆積は厚いが、底面はほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物（第164図）

出土遺物は少なく、4点の土器が図示できたにすぎない。1と4は床面直上から出土したもので、2と3は覆土中から出土したものである。

1は脚部を欠く高坏で⅗が遺存する。内外面共にナデが加えられ、外面と坏部内面は赤彩される。坏部外面には櫛描平行線文が施される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は明褐色を呈する。口径12.4cmを測る。2は器台で器受部の⅗破片である。内外面共にナデが加えられる。内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で外面は黒褐色を呈する。口径は9.4cmを測る。3は壺の口縁部破片で押圧が加えられた4本1組の棒状浮文が付けられる。口縁部下端にも押圧が加えられる。4は壺の頸部～肩部の破片で、頸部には刺突が加えられる。



第164図　81(096)号跡出土土器(1/4・1/3)

(82)　82（097）号跡（第165図）

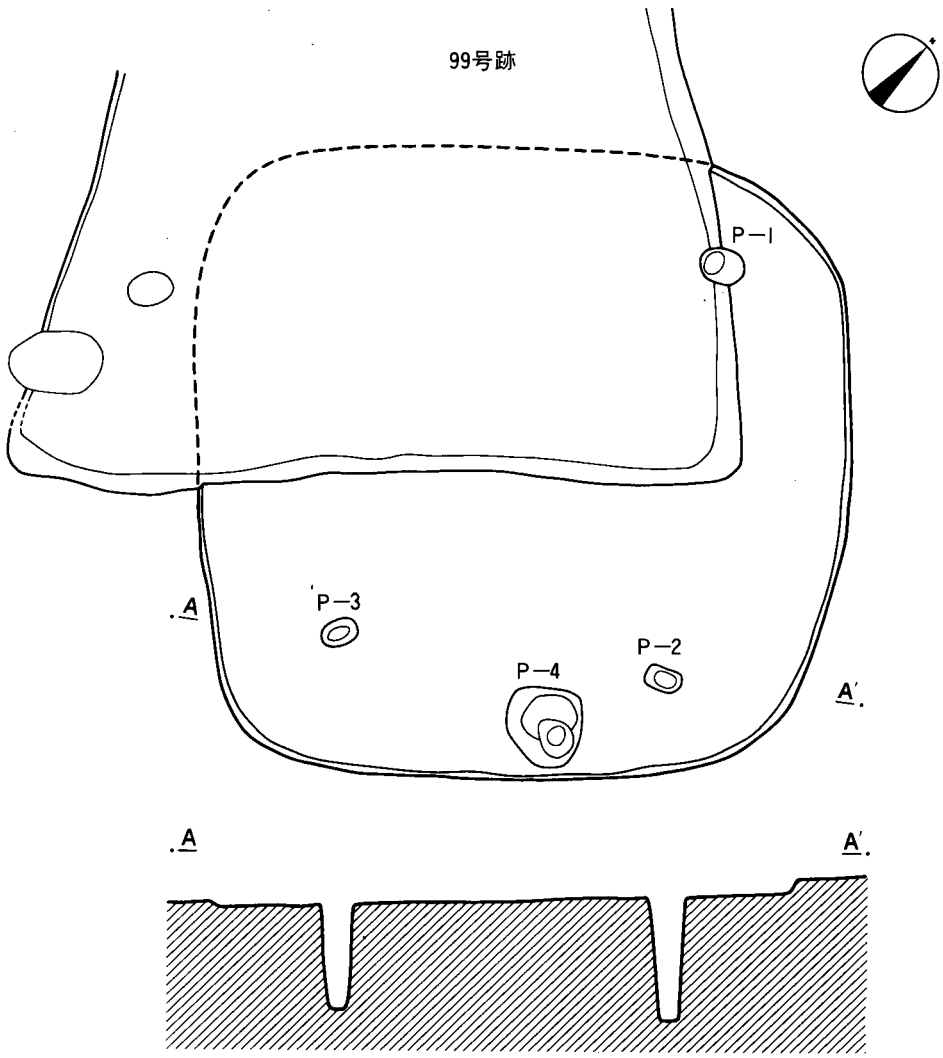
遺構（第165図）

81号跡の北5.0ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の東側にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。81号跡と同様に99号跡に切られる。

プランは、住居跡の½近くを99号跡によって破壊されているため全形をつかむことはできないが、ほぼ一辺が6.8ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上が

り、壁高は0.05～0.1ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは４本検出した。Ｐ－１～Ｐ－３はいずれも1.2ｍ前後の深さを測り柱穴と考えられる。Ｐ－４は0.22ｍの深さを測る径0.8ｍの不整円形のピットで、さらに東側に0.25ｍの深さを測るピットが穿たれている。炉跡は検出されず、99号跡によって破壊されたと思われる。覆土は暗褐色土の単一層であった。

覆土中および床面直上から土器片が出土しているが図示できるものはない。



第165図　82(097)号跡実測図(1/80)　0　2m

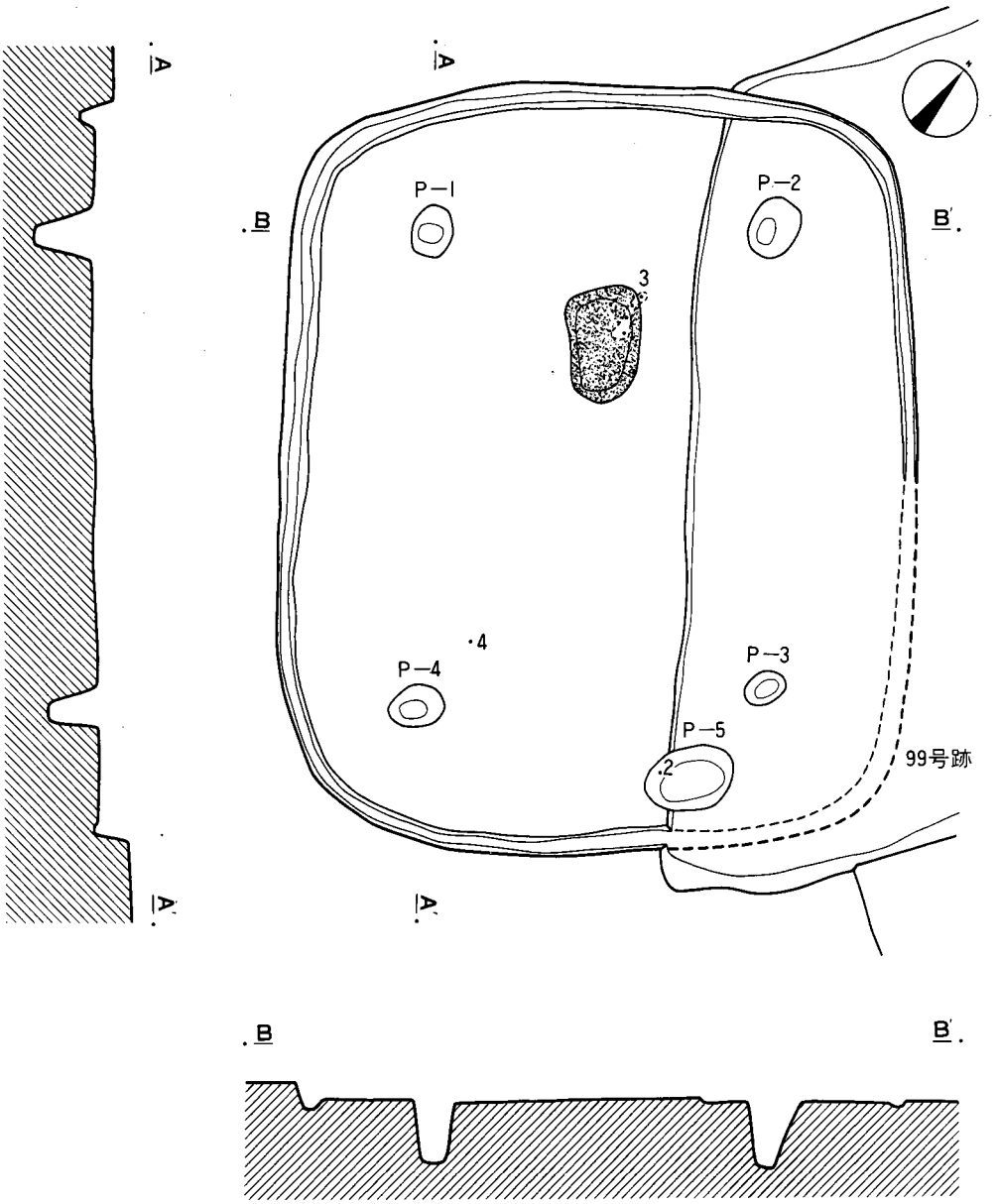
(83)　83（098）号跡（第166・167図）

遺構（第166図）

82号跡の西側2.0ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の中央部にかかっ

ており、その段階から存在の判明していた遺構である。82号跡と同様99号跡に切られる。

プランは、8.0×6.8ｍの隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.3ｍと差があり、99号跡中においてはほとんど観察できない。東側コーナー部分は99号跡との重複によって明らかではないが、壁溝が全周するものと思われる。床面はほぼ平坦であるが軟弱である。ピットは5本検出した。P－1～P－4はいずれも0.55～0.7ｍの深さを測り柱穴と考えられる。P－5は0.25mと浅いピットで、位置からして貯蔵穴と考えられる。



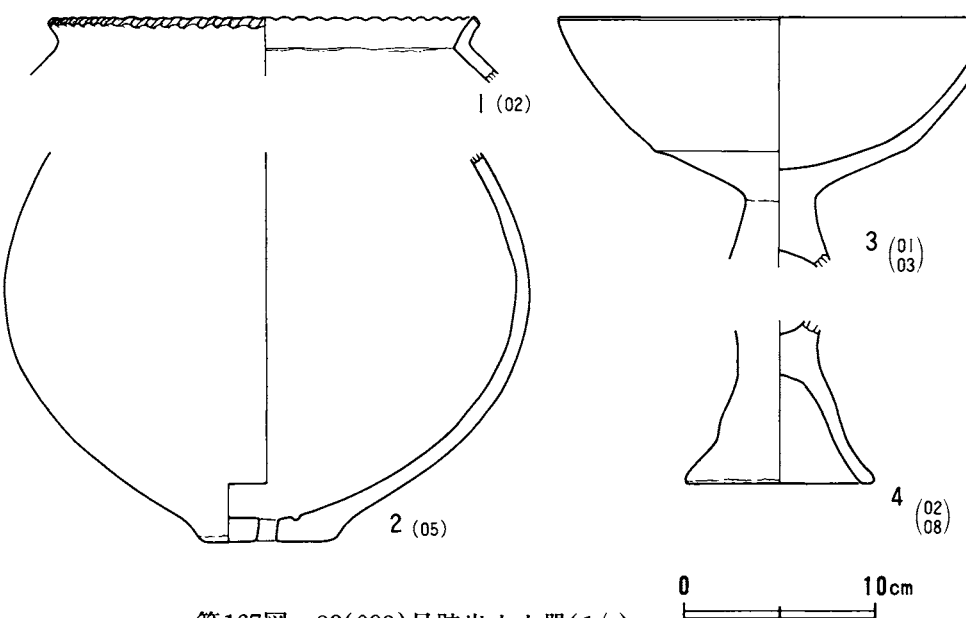
第166図　83(098)号跡実測図(1/80)

炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸1.2ｍ、短軸0.8ｍの不整な長円形を呈する。掘込みは0.15ｍほどで、焼土が中央部に堆積し、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物（第167図）

出土遺物は少なく4点の土器が図示できただけである。1は覆土中から出土したもので2はＰ－5内で底面から20cm浮いて出土したものである。3は炉跡の上面で10cm浮いて出土したもので、4はＰ－4の北側でやはり10cm浮いて出土したものである。

1は甕の口縁部の¼破片である。口唇部には刻みが施される。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径は22cmを測る。2は胴部以下が⅖遺存する甕である。内外面共にヘラナデされる。底部中央には焼成後の穿孔が認められる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径は6.2cmを測る。3は脚裾部を欠く高坏の⅓破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。明褐色を呈し、口径22.8cmを測る。4は高坏の脚部で⅔遺存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。黒褐色を呈する。脚径9.7cmを測る。



第167図　83(098)号跡出土土器(1/4)

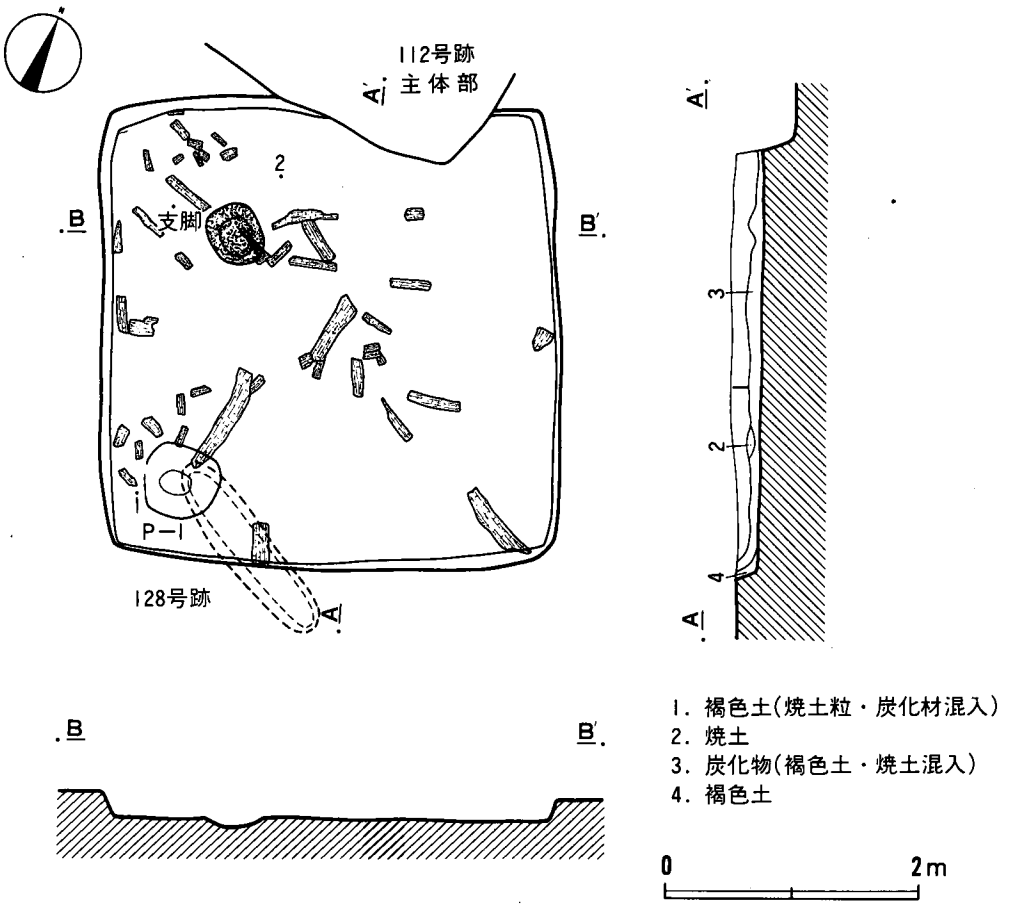
(84)　84（099A）号跡（第168・169図）

遺構（第168図）

74号跡の西4.0ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の西側にかかっていたが確認できなかった遺構である。古墳である112号跡に切られるが、南側で重複する128号

跡よりは新しい。

プランは、一辺が3.6ｍの方形を呈する。壁はやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は0.2ｍ前後を測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは南コーナー部分に１本検出した。0.34ｍの深さを測り、位置からして貯蔵穴と思われる。炉跡は住居跡の中央西寄りに検出した。長軸0.5ｍ、短軸0.4ｍの長円形を呈する。掘込みは0.1ｍほどで焼土の堆積は薄く、底面もほとんど焼けていなかった。覆土は４層に分けられた。なお、床面上からは多量の炭化材と焼土が検出された。



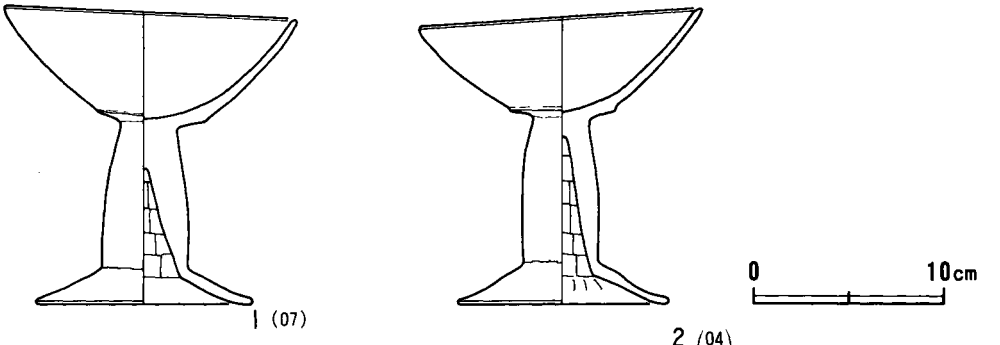
第168図　84(099Ａ)号跡実測図(1/60)

遺物（第169図）

出土遺物は少なく、２点の高坏が図示できただけである。１はＰ－１の脇から、２は炉跡の北側から出土したもので、２点共に床面から７～８cm浮いていた。この他炉跡の西側でやはり７cm浮いて土製支脚が１点出土している。

１はほぼ完形の高坏である。坏部は、外面にナデが加えられ、内面は、ナデの後粗くヘラミガキされる。脚部は、外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラケズリされる。胎土、

焼成共に良好で明褐色を呈する。口径15.2cm、脚径11cm、器高15cmを測る。２は１とほぼ同形の高坏で、⅔遺存する。坏部は、外面にナデが加えられ、内面はヘラミガキされる。脚部は外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラケズリされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径14.7cm、脚径10.8cm、器高14.7cmを測る。



第169図　84(099Ａ)号跡出土土器(1/4)

(85)　85（101）号跡（第170・171図）

遺構（第170図）

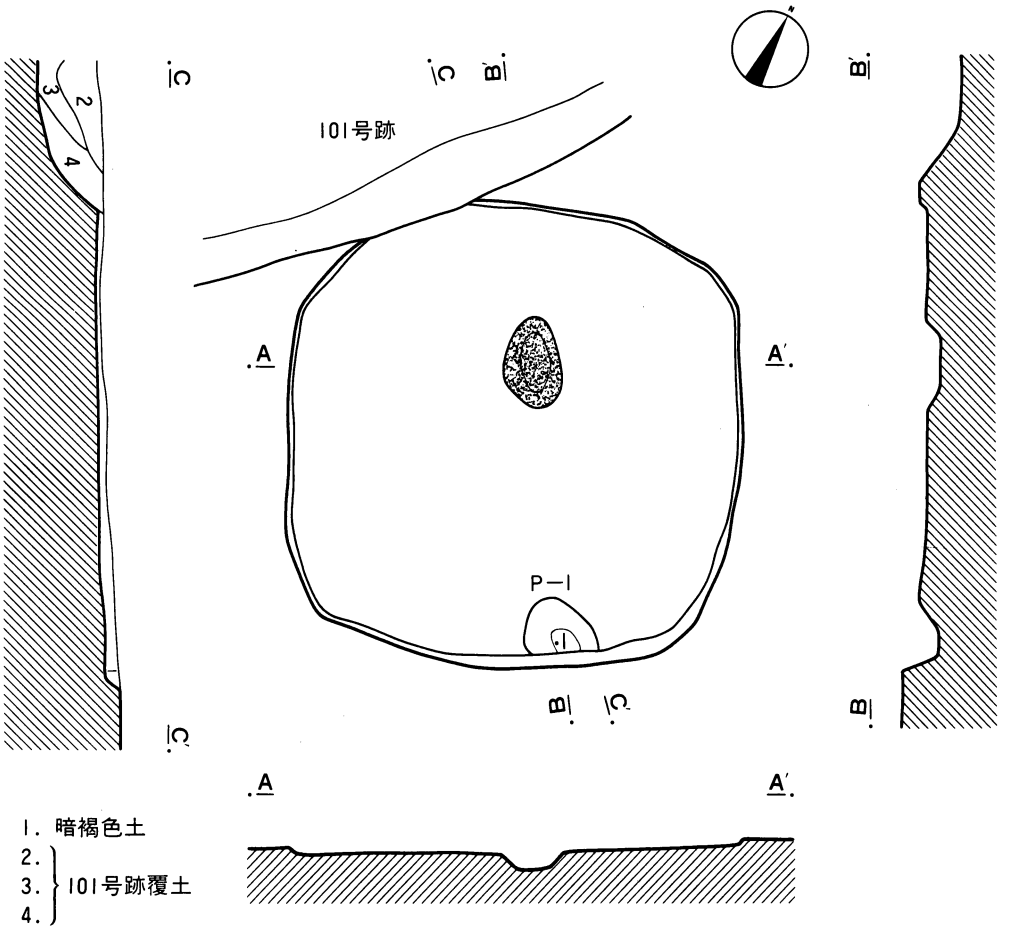
82号跡の西30mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が判明した遺構である。101号跡に切られる。

プランは、一辺が3.6ｍの隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は、0.05～0.1ｍを測る。床面はほぼ平坦で堅緻である。ピットは南壁に接して１本検出した。深さは0.15mで、位置からして貯蔵穴と思われる。炉跡は住居跡の中央やや北寄りに検出した。長軸0.7ｍ、短軸0.45mの不整楕円形を呈する。掘込みは0.15mほどで焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

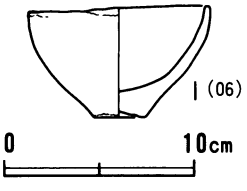
遺物（第171図）

出土遺物は極めて少なく、Ｐ－１内で底面から5.0cm浮いて出土した鉢が図示できただけである。

１は小形鉢で、⅔が遺存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径9.4cm、底径2.6cm、器高5.6cmを測る。



第170図　85(101)号跡実測図(1/60)



第171図　85(101)号跡出土土器(1/4)

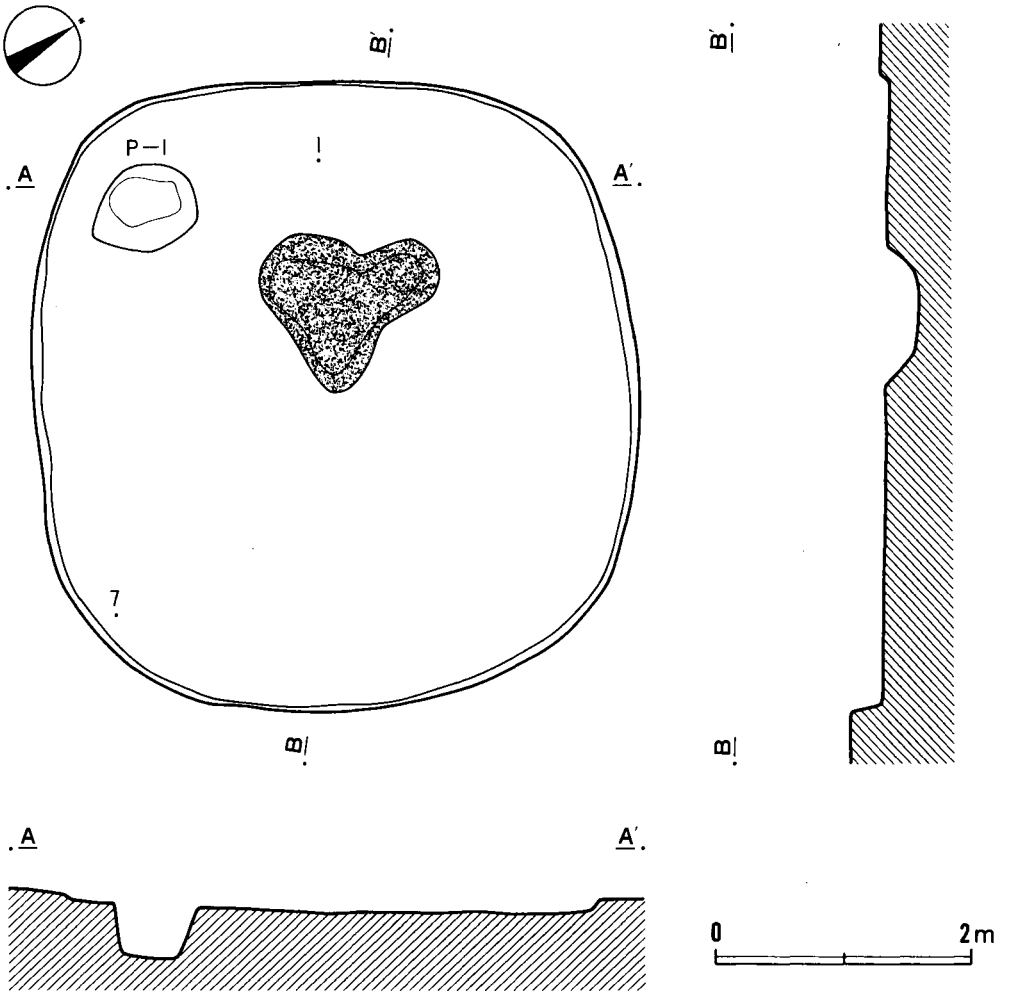
(86)　86（106）号跡（第172・173図）

遺構（第172図）

78号跡の南東10mに位置する住居跡で、確認調査時にはこの付近に農道が走っており、トレンチが設定できず、本調査の時点で存在が判明した遺構である。

プランは、一辺が4.8mのやや胴張りの隅丸方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上が

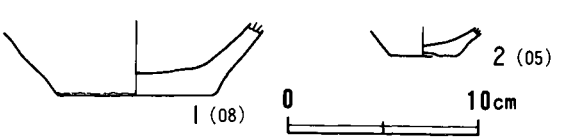
り、緩斜面に位置するため壁高は0.05～0.25mと差がある。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、北側でやや低くなる。ピットは西コーナー際に1本検出した。深さは0.4mで、位置からすると貯蔵穴の可能性が高い。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸1.2m、短軸0.8mの不整楕円形で、北側に0.55mほど突出する。掘込みは0.2mほどで焼土の堆積は厚く、底面もよく焼けていた。覆土は褐色土の単一層であった。



第172図　86(106)号跡実測図(1/60)

遺物（第173図）

出土遺物は極めて少なく、2点の底部破片が図示できただけである。1はP－1の北側で床面直上から出土したもので、2は覆土中出土のものである。



第173図　86(106)号跡出土土器(1/4)

1は甕の底部である。内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪く、明褐色を呈する。底径8.2cmを測る。2も底部破片である。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。褐色を呈し、底径3.4cmを測る。

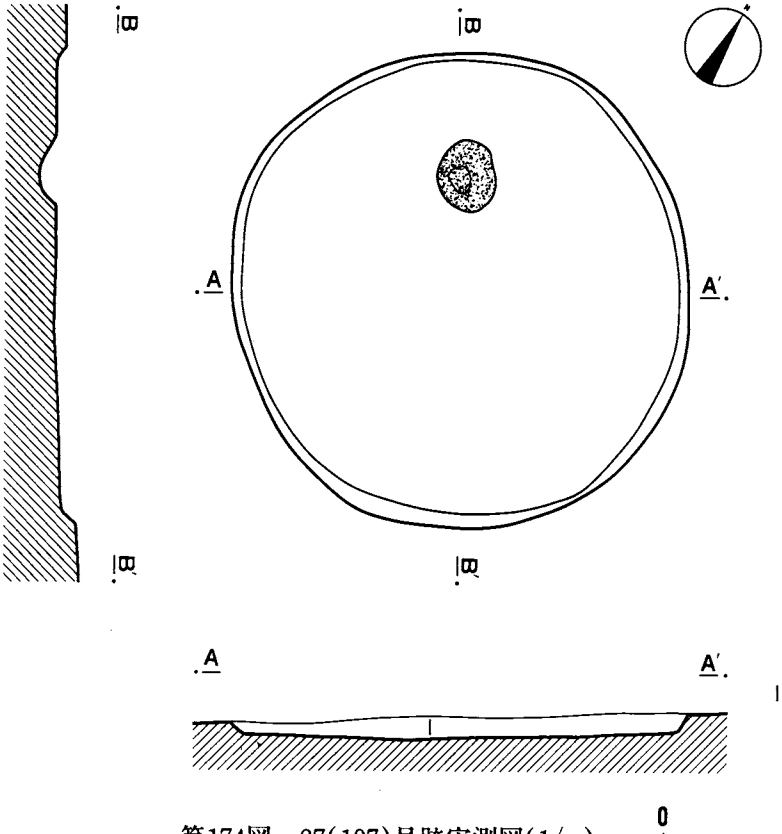
(87)　87（107）号跡（第174図）

遺構（第174図）

10号跡の南西1.0mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

プランは、径約3.7mの円形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.15mを測る。床面はほぼ平坦で、壁際を除いては堅緻である。ピットは精査にもかかわらず検出されなかった。炉跡は住居跡の中央やや北西寄りに検出した。長軸0.55m、短軸0.45mの長円形を呈する。掘込みは0.1mほどで、焼土の堆積は薄いが、底面はよく焼けていた。覆土は暗褐色土の単一層であった。

覆土中および炉跡内から土器片が少量出土したのみで、図示できるものはない。

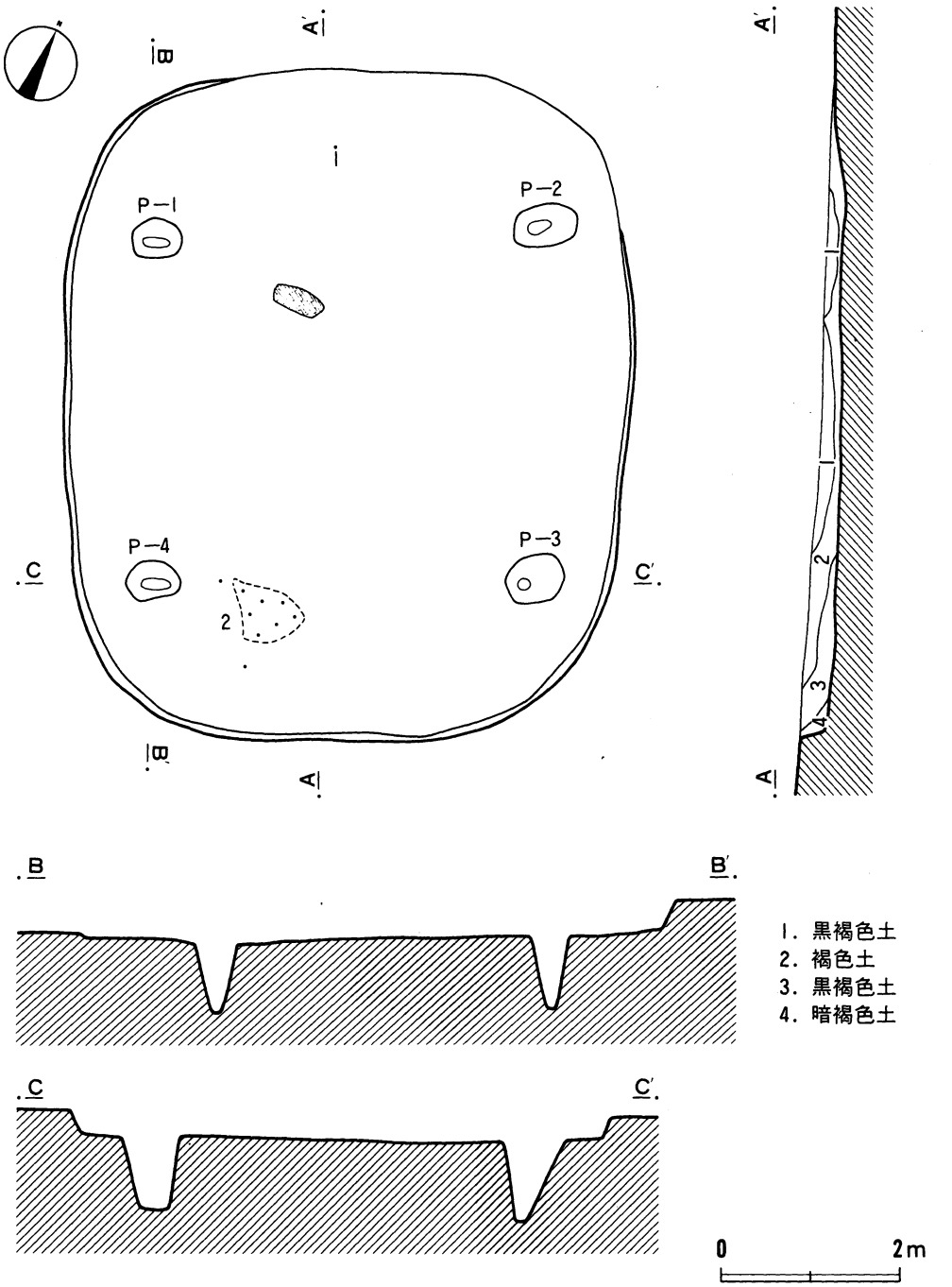


第174図　87(107)号跡実測図(1/60)

（88）　88（108）号跡（第175・176図）

遺構（第175図）

6号跡の東2.0mに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の西側⅓にかかっていたが、確認できなかった遺構である。



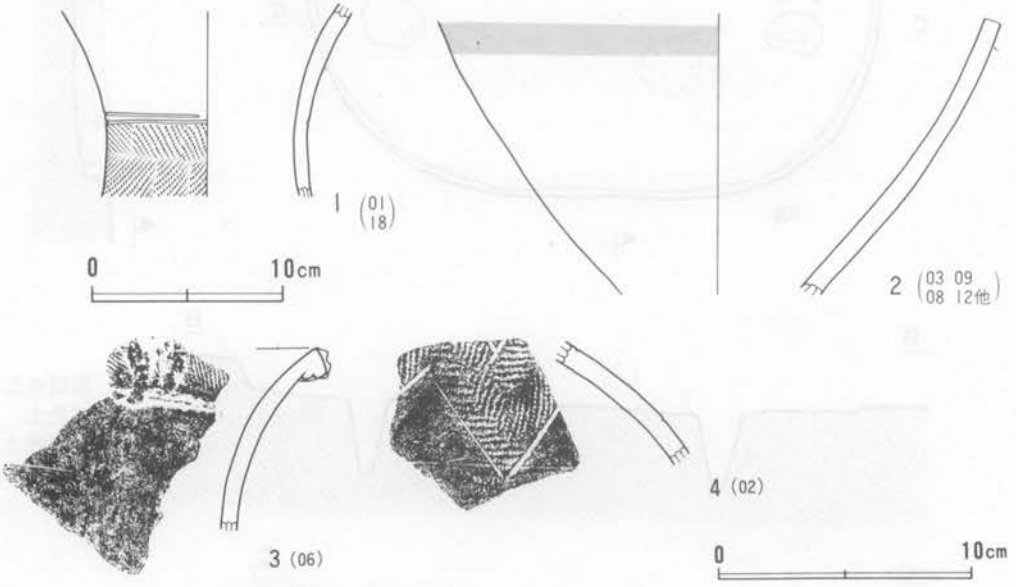
第175図　88(108)号跡実測図(1/80)

プランは、7.3×6.2ｍの隅丸長方形を呈する。壁は、緩斜面に位置するため北側⅕ほどを失うが、遺存している部分ではやや傾斜を持って立ち上がる。壁高も0.05～0.4ｍとかなり差がある。床面は全体的に軟弱でやや凹凸に富むが、Ｐ－１～Ｐ－２より北ではやや高くなり、良好になる。ピットは４本検出した。いずれも0.8～0.9ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。炉跡は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は４層に分けられた。

遺物（第176図）

出土遺物は少なく４点の土器が図示できただけである。１と２はいずれも床面から5.0㎝前後浮いて出土したものである。３はＰ－１内から出土したもので、４は覆土中出土のものである。

１は壺の頸部である。下半を２本の沈線で区画し、その下に縄文を羽状に施文する。施文部以外はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。２は壺の胴下半部の⅚破片である。内外面共にヘラナデされ、さらに外面の一部は赤彩される。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤彩部以外は明褐色を呈する。最大径29.6cmを測る。３は壺の口縁部破片で、口唇部に縄文が施され、２本１組の棒状浮文が付けられる。内外面共にヘラミガキされ、赤彩される。４は壺の肩部破片である。縄文を沈線で区画した山形文が施される。施文部以外は赤彩される。



第176図　88(108)号跡出土土器(1/4・1/3)

(89)　89（109）号跡（第177図）

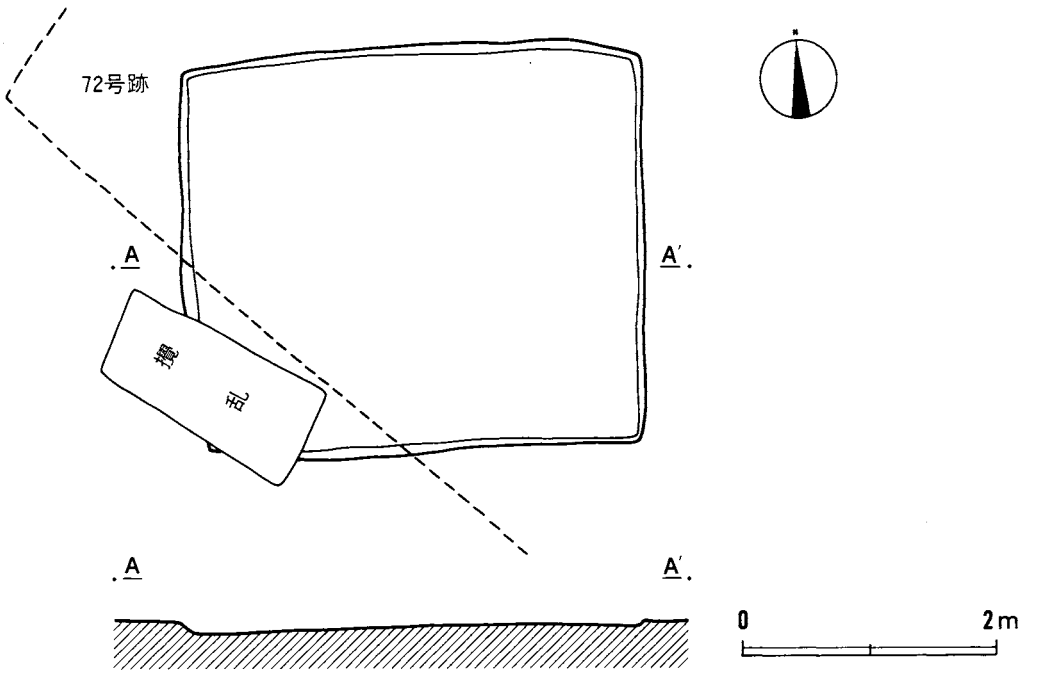
遺構（第177図）

72号跡の調査終了後さらに下に落込みが確認されたので調査を行なったものである。住居跡

とするには疑問があるが、一応ここで報告しておく。

プランは3.6×3.2ｍの長方形を呈する。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.1ｍを測る。床面はほぼ平坦であるが極めて軟弱である。ピットおよび炉跡は精査にもかかわらず検出されなかった。覆土は黒褐色土の単一層であった。

覆土中から土器片がわずかに出土しただけで図示できるものはない。



第177図　89(109)号跡実測図(1/60)

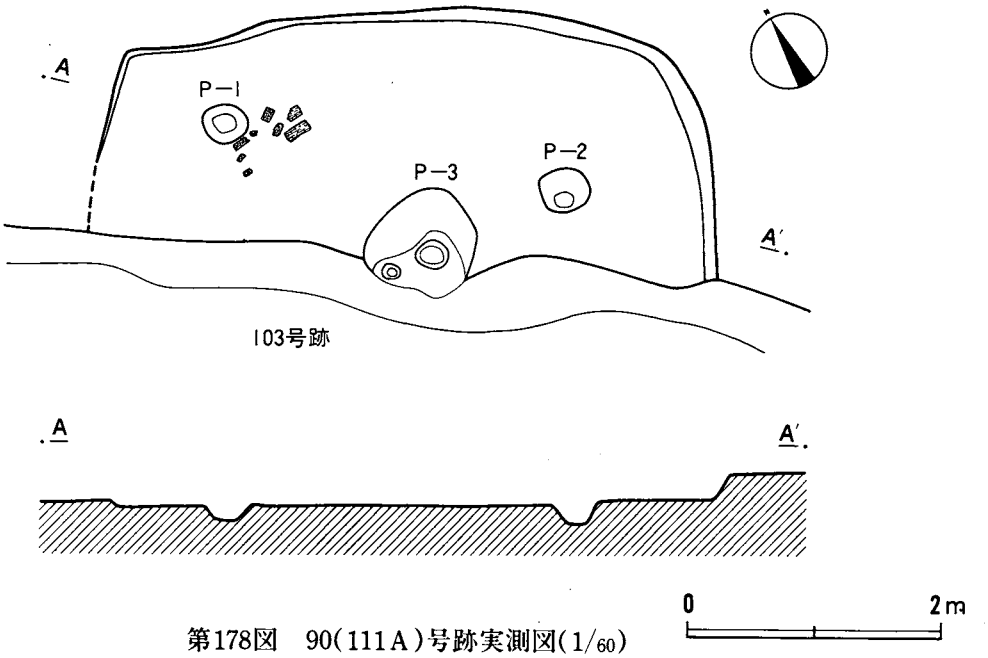
(90)　90（111A）号跡（第178図）

遺構（第178図）

87号跡の東25ｍに位置する住居跡で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が判明していた遺構である。南側で103号跡に切られる。

プランは、遺存している部分からしてほぼ一辺が4.8ｍほどのやや不整な隅丸方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.05～0.2ｍとやや差がある。床面はやや凹凸に富むが比較的堅緻である。ピットは3本検出した。P－1とP－2は0.15ｍの深さを測り、柱穴と考えられる。P－3はやや大形のもので0.75ｍの深さを測り、その中に0.05ｍの深さを測る小ピットが2本検出された。本跡に伴うものかどうか判然としない。炉跡は検出されなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、P－1の東側の床面上からは炭化材が検出された。

覆土中および床面直上から土器片が少量出土しているが図示できるものはない。



第178図　90(111A)号跡実測図(1/60)

(91)　91（111B）号跡（第179・180図）

遺構（第179図）

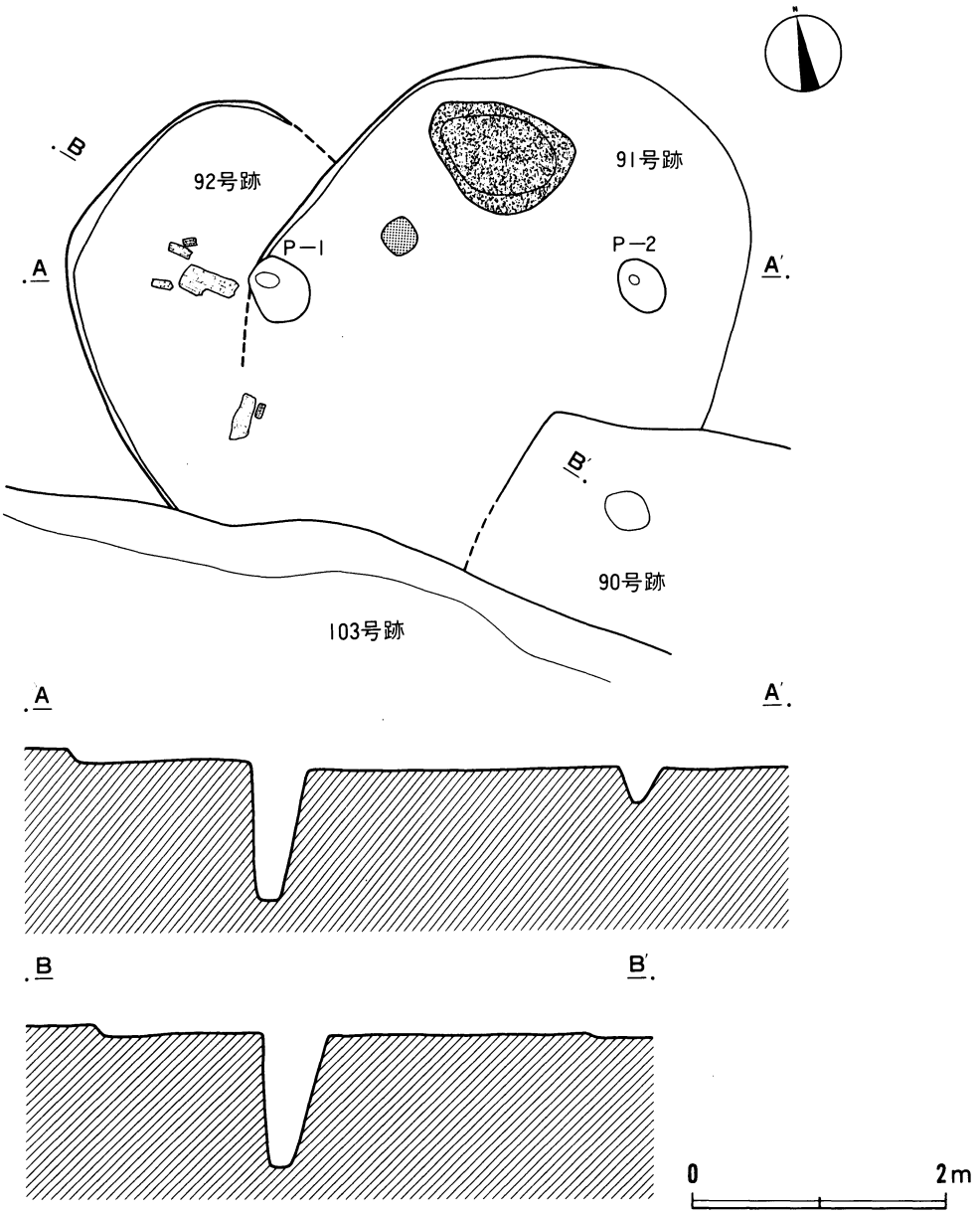
90、92号跡と重複する住居跡で、確認調査時のトレンチが住居跡の西側にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。重複する遺構との新旧関係は、遺構全体の遺存度が悪いため確定できないが、92号跡が一番古く、次に本跡、そして90号跡が最も新しくなるものと思われる。

プランは、重複および緩斜面に位置するため全形をとらえることはできないが、ほぼ4.5×3.6ｍほどの長円形を呈するものと思われる。壁は北側で¼ほどしか遺存しておらず、やや傾斜を持って立ち上がる。壁高は0.05m前後を測る。ピットは２本検出した。Ｐ－１は1.1ｍを測るしっかりとしたピットである。Ｐ－２は0.3ｍと浅いピットである。炉跡は住居跡の中央北側に検出した。長軸1 15m、短軸0.8ｍの不整楕円形を呈する大形のものである。掘込みは0.2ｍほどで焼土の堆積は厚いが、底面はほとんど焼けていなかった。覆土は暗褐色土の単層であった。なお、床面上からは若干の焼土が検出された。

遺物（第180図）

出土遺物は極めて少なく、覆土中から出土した器台が図示できただけである。

１は器台の脚部の¾破片である。外面は粗くヘラミガキされるが、裾部にわずかにハケ目が残る。内面は粗くヘラナデされるが、裾部にわずかにハケ目が残る。脚孔は３孔か。胎土には中砂粒を多く含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、脚径12.4cmを測る。



第179図　91・92(111B・C)号跡実測図(1/60)

（92）　92（111C）号跡（第179図）

遺構（第179図）

重複する91号跡と同様に確認調査時のトレンチが住居跡にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

プランは、重複および緩斜面に位置しているため全形をとらえることはできないが、ほぼ3.5×2.5ｍほどの隅丸長方形を呈するものと思われる。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、壁高は0.1ｍを測る。床面はやや凹凸に富むが比較的堅緻である。ピットおよび炉跡は検出されなかった。覆土は暗褐色土の単一層であった。なお、住居跡の中央部から炭化材が検出された。

覆土中から土器片が少量出土しているだけで図示できるものはない。

2. 方形周溝（墓）と出土土器

（1） 93（011）号跡（第181・182図）

遺構（第181図）

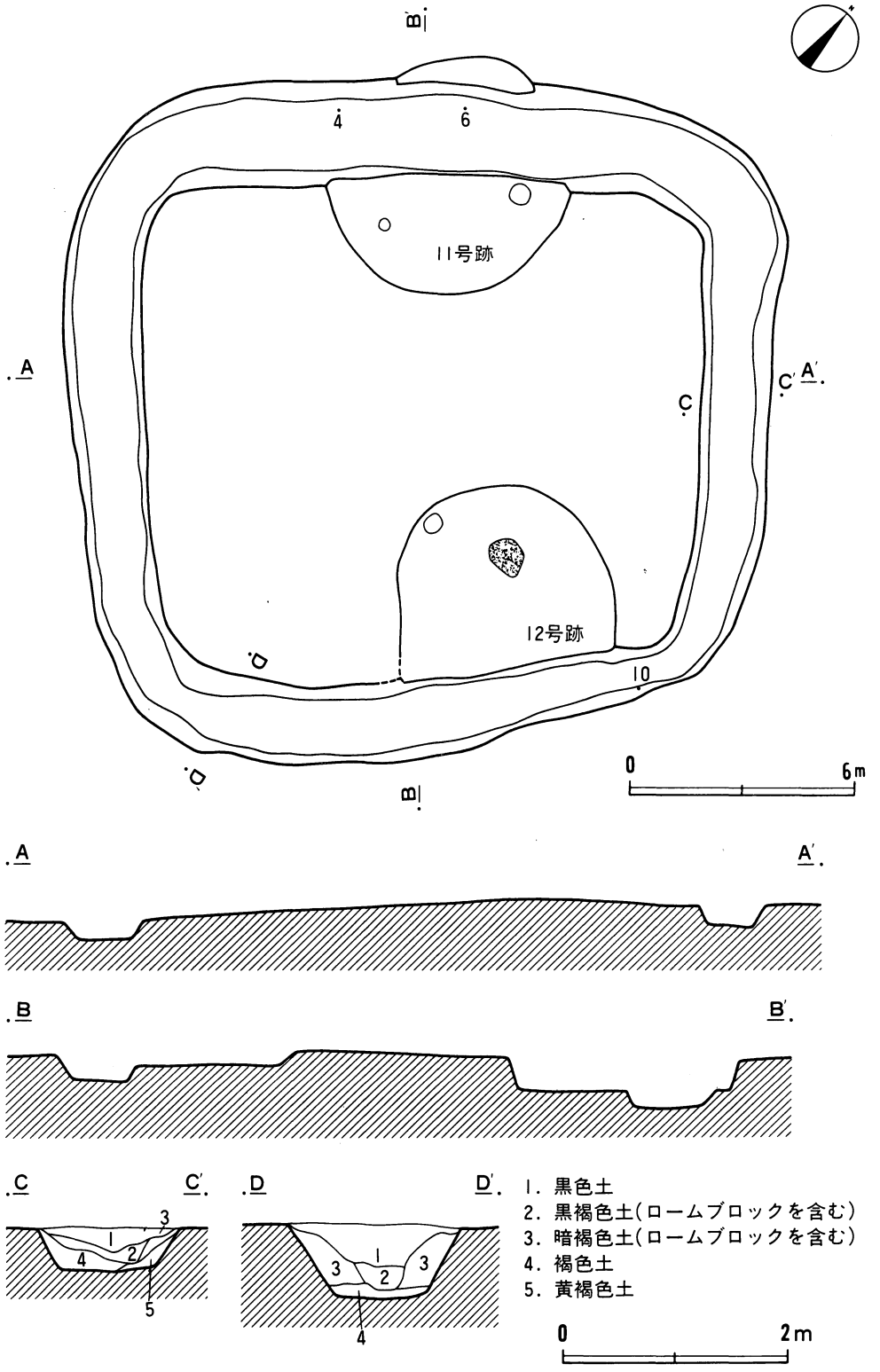
斜面を上がった平坦面に位置する方形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。北側で11号跡、南側で12号跡という2軒の住居跡を切る。

台状部は東西10m、南北8.8mを測り、隅丸のやや不整な長方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は東西12.6m、南北12mを測る。周溝外周の輪郭はやや隅丸の台形に近いプランとなるため、東側、特に南東コーナー部分で周溝の幅が狭くなる。周溝の幅は0.9～1.9mと差があり、前述のように南東コーナー部分でかなり狭くなる。周溝の深さは一定でなく、0.2～0.5mとやや差があり、南西コーナー部分が深くなる。溝底は多少凹凸を呈する。周溝内の覆土は5層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

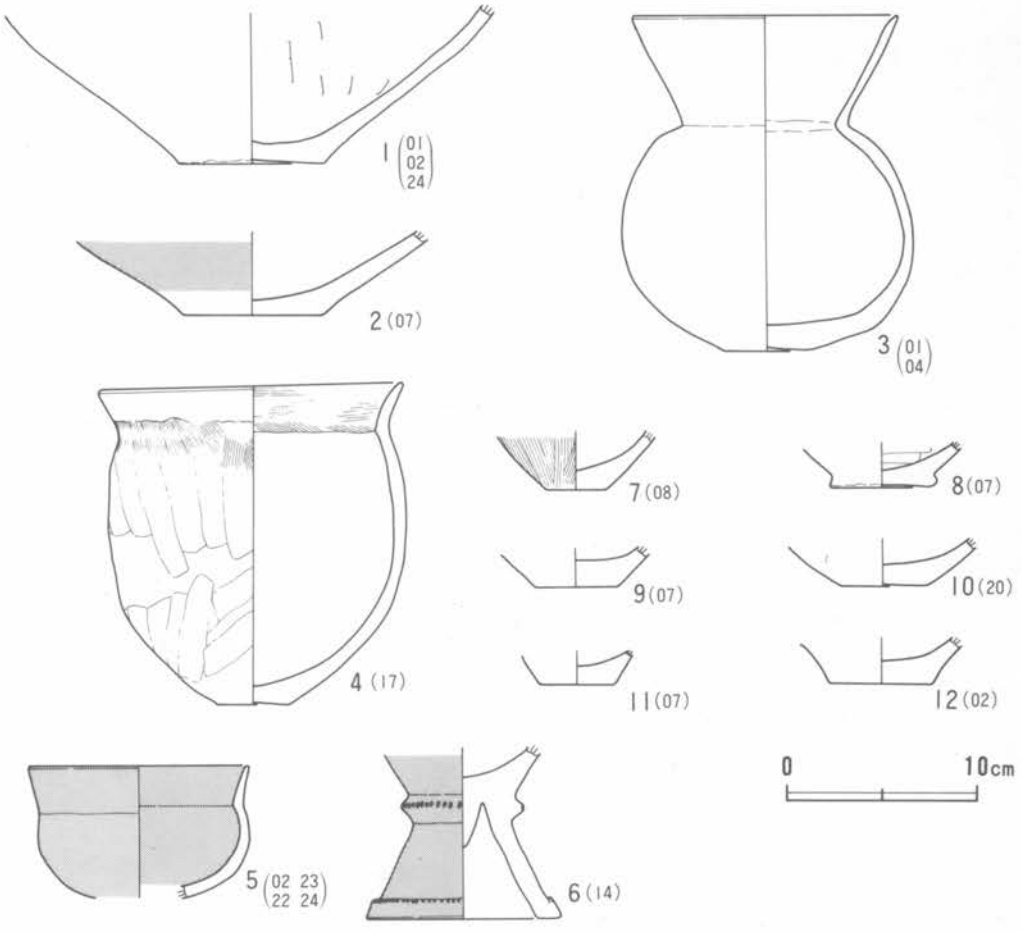
遺物（第182図）

出土遺物は比較的多いが、完形品は少ない。図示した12点の土器はいずれも周溝中より出土したものである。1～3、5は覆土中より出土したもので、3は破片が接合してほぼ完形に復元できたものである。4は北溝の中央寄りで底面より4cm浮いて出土したものである。6は北溝のほぼ中央で底面から15cm浮いて出土したものである。7～12は覆土中から出土した底部破片で、10は溝底から20cm浮いていた。

1は壺の胴部下半～底部で、底部は完存し、その他は¼遺存する。外面は入念にヘラナデされ、内面もヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。底径は7.6cmを測る。2は壺の底部で⅔が遺存する。内外面共にヘラナデされるが、外面はさらに赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は褐色を呈する。底径7.2cmを測る。3は⅕遺存する坩である。内外面共にヘラナデされるが、器面の遺存状態は極めて悪い。胎土には細砂粒を含み、密であるが、焼成は悪い。黄褐色を呈する。口径13.8cm、底径4.4cm、器高17.5cmを測る。4は完形の甕である。外面は、頸部にハケ目が残り、胴部はヘラケズリされる。内面は、口縁部にヨコナデされるがハケ目が残る。胴部は入念にヘラナデされる。胎土には細砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く黒褐色を呈する。口径15.8cm、底径3.8cm、器高16.3cmを測る。5は底部を欠く埦である。体部外面はヘラケズリの後ヘラミガキされ、内面はヘラミガキされる。口縁部はヨコナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径11.4cmを測る。6は台付甕の脚台部である。胴部との接合部に突帯をめぐらし、刻みを施す。脚裾部には、粘土帯が貼られ、刻みが施される。無文部はヘラミガキされる。外面は赤彩される。内面はヘラナデさ



第181図　93(011)号跡実測図(1/120・1/60)



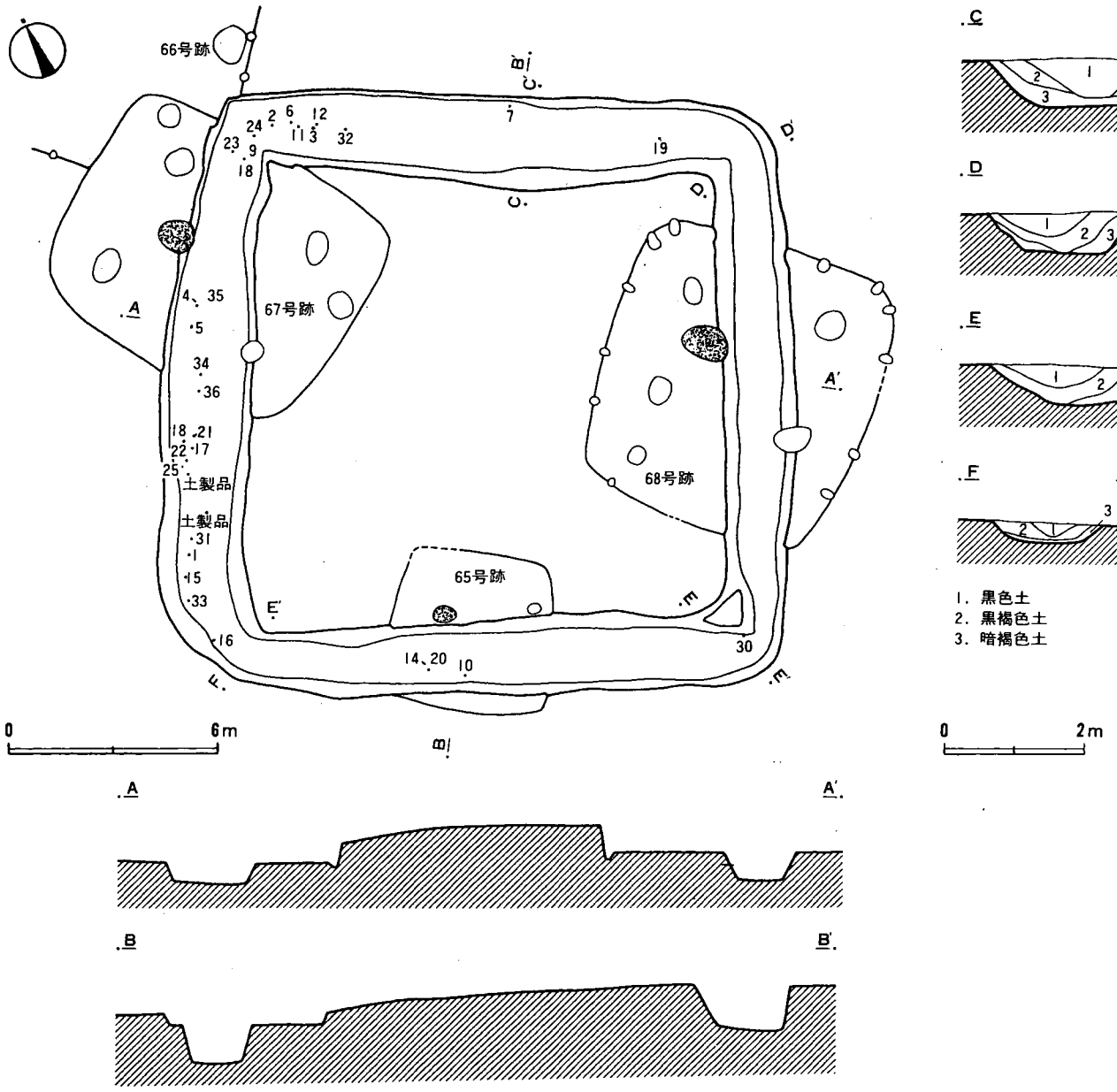
第182図　93(011)号跡出土土器(1/4)

れる。胎土、焼成共に良好で内面は淡褐色を呈する。脚部10.2cmを測る。7～12は底部破片である。7は外面にハケ目が施され、内面はヘラナデされる。底径は3.2cmを測る。8の内面はヘラケズリされる。底径は5.2cmを測る。9は底径4.4cm、10は4.4cm、11は4.0cm、12は5.4cmをそれぞれ測る。

(2)　94(060)号跡(第183～187図)

遺構(第183図)

93号跡の西9.0mに位置する方形周溝(墓)である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。西側で66、67号跡、南側で65号跡、東側で68号跡という4軒の住居跡を切る。台状部は東西13.6m、南北12.8mを測り、やや不整な方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は東西18.2m、南北17.2mを測る。周溝外周の輪郭は隅丸のやや不整な方形のプランとなるため、各コーナー部分で周溝の幅が狭くなる。周溝の幅は1.6～2.8mと差があり、前述のように各コーナー部分で狭くなる。南東コーナー部分に三角形を呈する段が1段掘り残されている。台状部からは0.2m下がる。周溝の深さは一定でなく、0.3～0.8mとかなり差があり、北溝と東溝が深くなる。溝底はほぼ平坦である。周溝



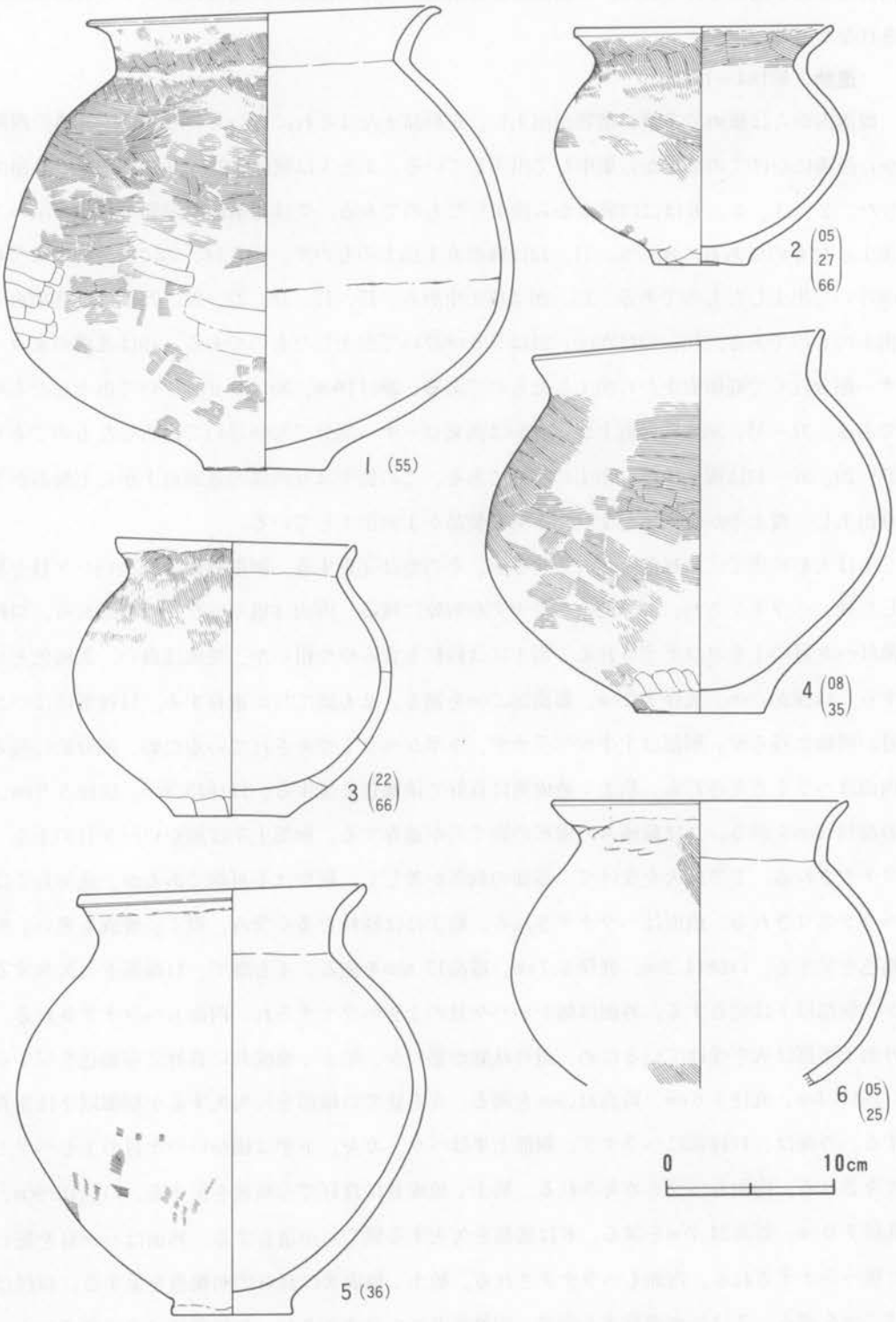
第183図　94(060)号跡実測図(1/160・1/80)

内の覆土は3層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

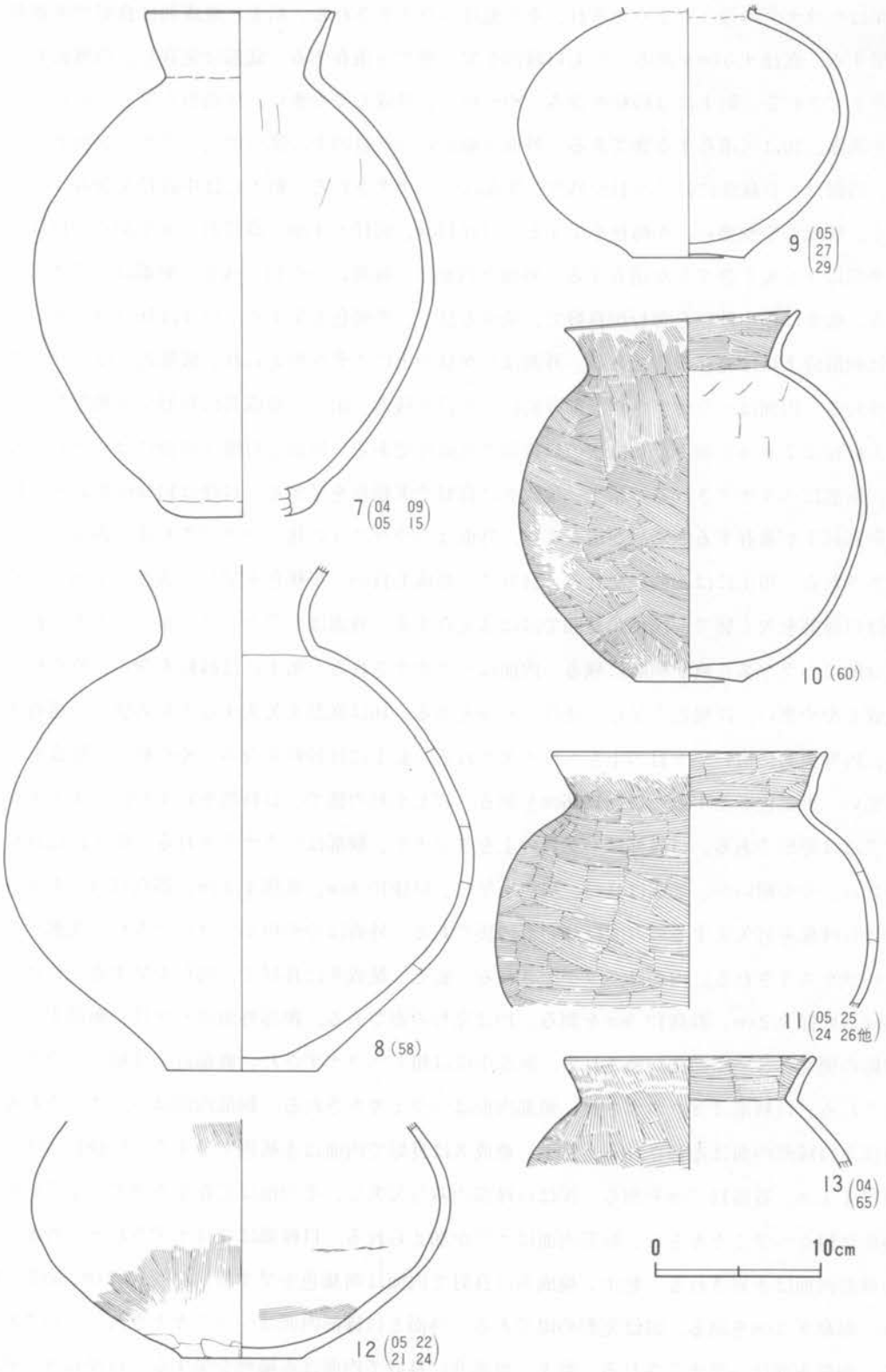
遺物（第184～187図）

周溝内からは極めて多量の遺物が出土し、完形品またはそれに近いものも多い。北溝の西側から西溝にかけての部分から集中して出土している。1と4は底面より5.0cmほど浮いて出土した。2、3、5、6はほぼ底面から出土したものである。7は北溝の中央部から30cm浮いて出土したものである。8、9、11、12は底面直上出土のもので、10、14、20は南溝の中央で40cm浮いて出土したものである。13、26は覆土中から、15、17、18、22、24、25はほぼ底面直上出土のものである。16、23は20cm、21は5.0cm浮いて出土したものである。19は北溝の東コーナー部分近くで底面直上から出土したものである。28は18cm、35は5.0cm浮いて出土したものである。31～34、36は底面直上から、30は南東コーナー部分で30cm浮いて出土したものであり、27、29、37～43は覆土中から出土のものである。この他やはり西溝の底面直上から土製品が3点出土し、覆土中から土玉が1点、不明石製品が1点出土している。

1は大形の甕で、口縁部を⅓欠失するが、その他は完存する。胴部外面は細かいハケ目を施した後、ヘラナデされ、部分的にヘラナデが明瞭に残る。内面は粗くヘラミガキされる。口縁部はハケ目の上をヨコナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良い。黒褐色を呈する。口径20.3cm、底径7.2cm、器高26.7cmを測る。2も甕で⅕が遺存する。口縁部にはハケ目が明瞭に残るが、胴部は上半がヘラナデ、下半がヘラミガキされているため、部分的に残る。内面はヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径15.2cm、底径5.5cm、器高14.1cmを測る。3は輪積みの成形の甕で⅕が遺存する。胴部上半は細かいハケ目の上をヘラナデされる。下半は火を受けて、器面の剝落が著しく、観察は不可能であるが、底部近くはヘラケズリされる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を多く含み、粗く、焼成も悪い。明褐色を呈する。口径14.2cm、底径6.7cm、器高15.8cmを測る。4も甕で、口縁部を¼欠失するが、胴部以下は完存する。外面は細かいハケ目の上をヘラナデされ、内面もヘラナデされる。外面下半部は火を受けているため、遺存状態が悪いが、胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径17.4cm、底径7.6cm、器高21.5cmを測る。5も甕で口縁部を¼欠失するが胴部以下は完存する。外面は、口縁部にヘラナデ、胴部上半はヘラミガキ、下半は細かいハケ目の上をヘラミガキされる。内面もヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径16.9cm、底径7.0cm、器高24.7cmを測る。6は底部を欠失する甕で⅔が遺存する。外面はハケ目を施した後ヘラナデされる。内面もヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は17.5cmを測る。7は¾が遺存する壺で、内外面共にヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。口径11.4cm、底径7.6cm、器高30cmを測る。8は口縁部を欠く壺で、図示の部分はほぼ完存する。輪積み成形で、口縁部内外面と外面胴部

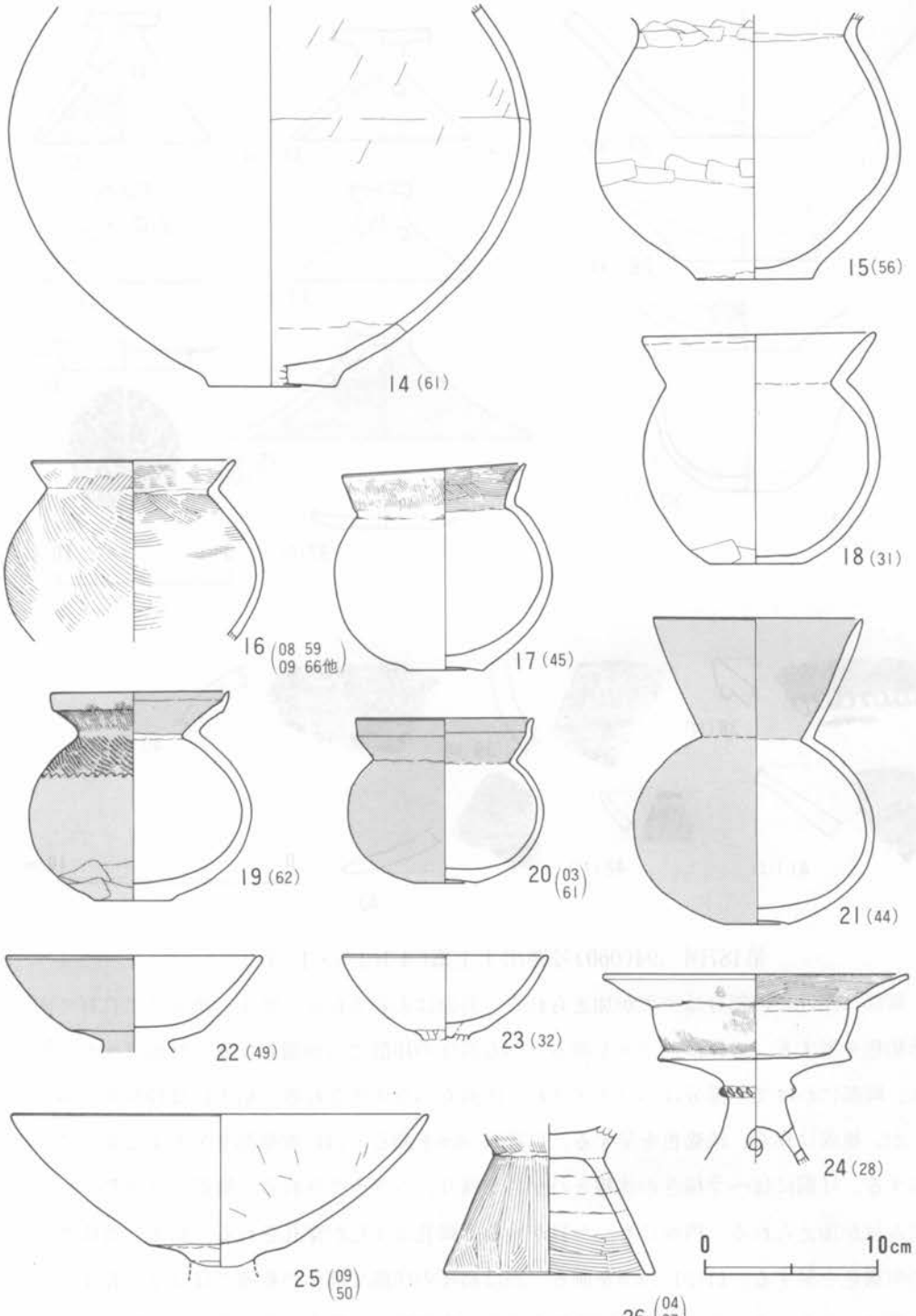


第184図　94(060)号跡出土土器(１)(1/4)

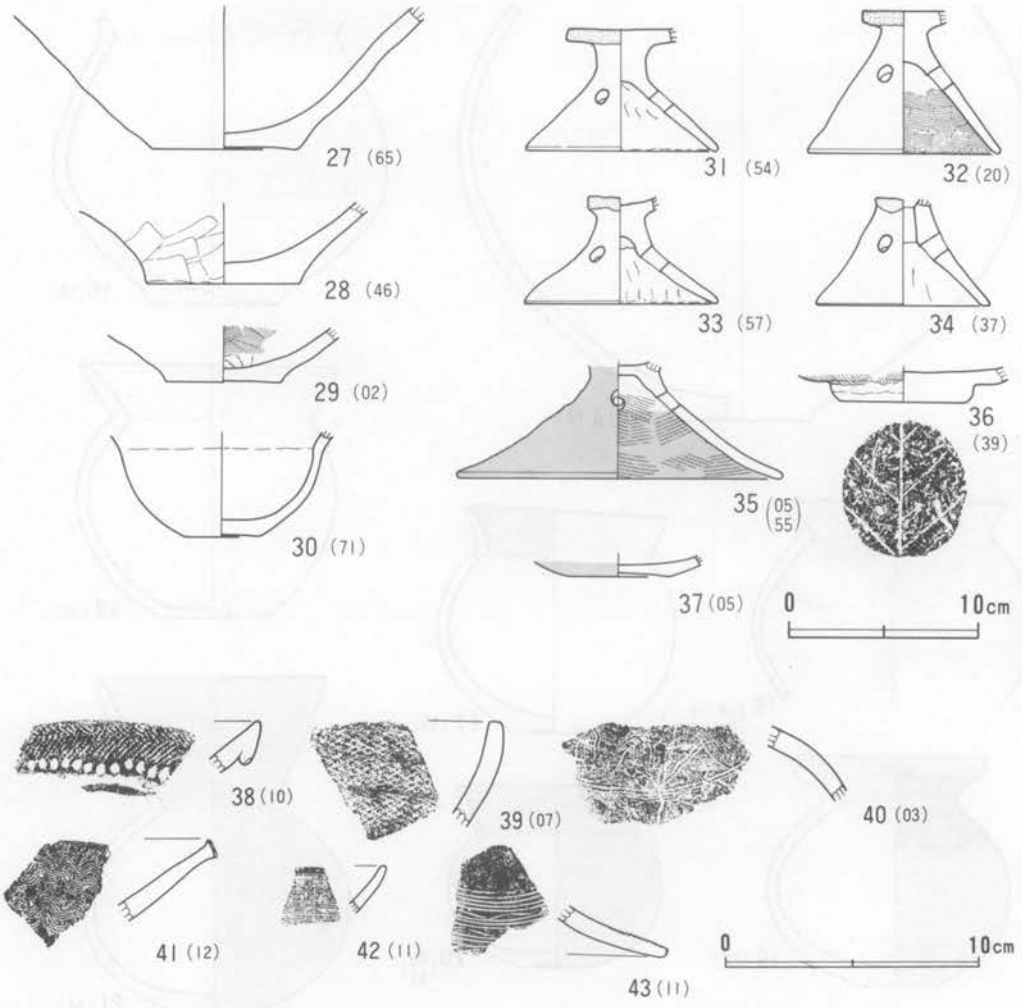


第185図　94(060)号跡出土土器(２)(1/4)

上半はヘラナデの後ヘラミガキされ、その他はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。底径9.0cmを測る。9も口縁部を欠く壺で⅗遺存する。底部は完存し、内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈し、底径6.6cmを測る。10は⅔遺存する甕である。外面は細かいハケ目の上に部分的にヘラナデが加えられる。内面は、口縁部にはハケ目が残り、胴部はヘラナデされる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径14cm、底径6.4cm、器高21.2cmを測る。11は胴下半部以下を欠く甕で⅔が遺存する。外面と内面は口縁部にハケ目が残る。胴部はヘラナデされる。胎土には中砂粒を含むが良好で、焼成も良く、黒褐色を呈する。口径は16.4cmを測る。12は胴部以下ほぼ完存の甕である。外面はハケ目の上にナデが加えられ、底部近くはヘラケズリされる。内面はヘラナデされ、部分的にハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径は7.2cmを測る。13は甕の口縁部で⅔破片である。外面と口縁部内面にはハケ目が残る。胴部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径は14.8cmを測る。14は胴部以下が遺存する壺で½が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土には細砂粒を含み、良好で、焼成も良い。黒褐色を呈し、底径7.4cmを測る。15は口縁部を欠く甕で、図示の範囲ではほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、部分的にヘラケズリ痕が明瞭に残る。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈し、底径6.6cmを測る。16は底部を欠失する小形の甕で⅔遺存する。内外面共に粗いハケ目の上をヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈する。口径11.6cmを測る。17も小形の甕で、口唇部をわずかに欠失するだけでほぼ完形である。口縁部はハケ目の上をヨコナデ、胴部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良い。褐色を呈し、口径10.6cm、底径4.3cm、器高11.4cmを測る。18は口縁部を¼欠失するのみでほぼ完形の甕である。外面はやや粗くヘラナデされ、底部近くはヘラケズリされる。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径13.4cm、底径5.2cm、器高12.9cmを測る。19は完形の壺である。頸部外面はハケ目、胴部上半は無節の縄文とS字結節文が施される。胴部中位は粗くヘラナデされ、底部近くは粗くヘラケズリされる。口唇部はヨコナデされ、頸部内面はヘラミガキされる。胴部内面はヘラナデされる。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は赤褐色を呈する。口径10.2cm、底径4.4cm、器高11.7cmを測る。20は口縁部のみ½欠失し、その他は完存する壺である。胴部外面は粗くヘラミガキされ、胴部内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は明褐色を呈する。口径10.2cm、底径3.4cm、器高9.3cmを測る。21は完形の坩である。外面と口縁部内面はヘラミガキされ、赤彩される。胴部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で内面は赤褐色を呈する。口径12cm、底径3.6cm、器高17.2cmを測る。22は高坏の坏部で¾が遺存する。坏部は内外面共にヘラミガキ



第186図　94(060)号跡出土土器(３)(1/4)



第187図　94(060)号跡出土土器(４)(1/4・1/3)

され、脚部にかけての部分はナデが加えられる。外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は赤褐色を呈する。口径は14.5cmを測る。23も高坏の坏部で1/3が遺存する。外面はナデが加えられ、脚部にかけての部分はヘラナデされ、内面もヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く、淡褐色を呈する。口径11.8cmを測る。24は脚裾部を欠失する高坏で2/3が遺存する。坏部にはヘラ描きの沈線とハケ目が残り、ヘラナデされる。脚部には突帯がめぐり、刻み目が加えられる。内面にもハケ目が残る。脚孔は４孔が穿孔される。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径17.4cmを測る。25は高坏の坏部で図示の範囲ではほぼ完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。26は台付甕の脚台部で2/3が遺存する。輪積み成形で内外面共に粗いハケ目が残る。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈し、脚径12.1cmを測る。27は胴部以下が遺存する壺である。胴部は1/3が遺存し、底部は完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土

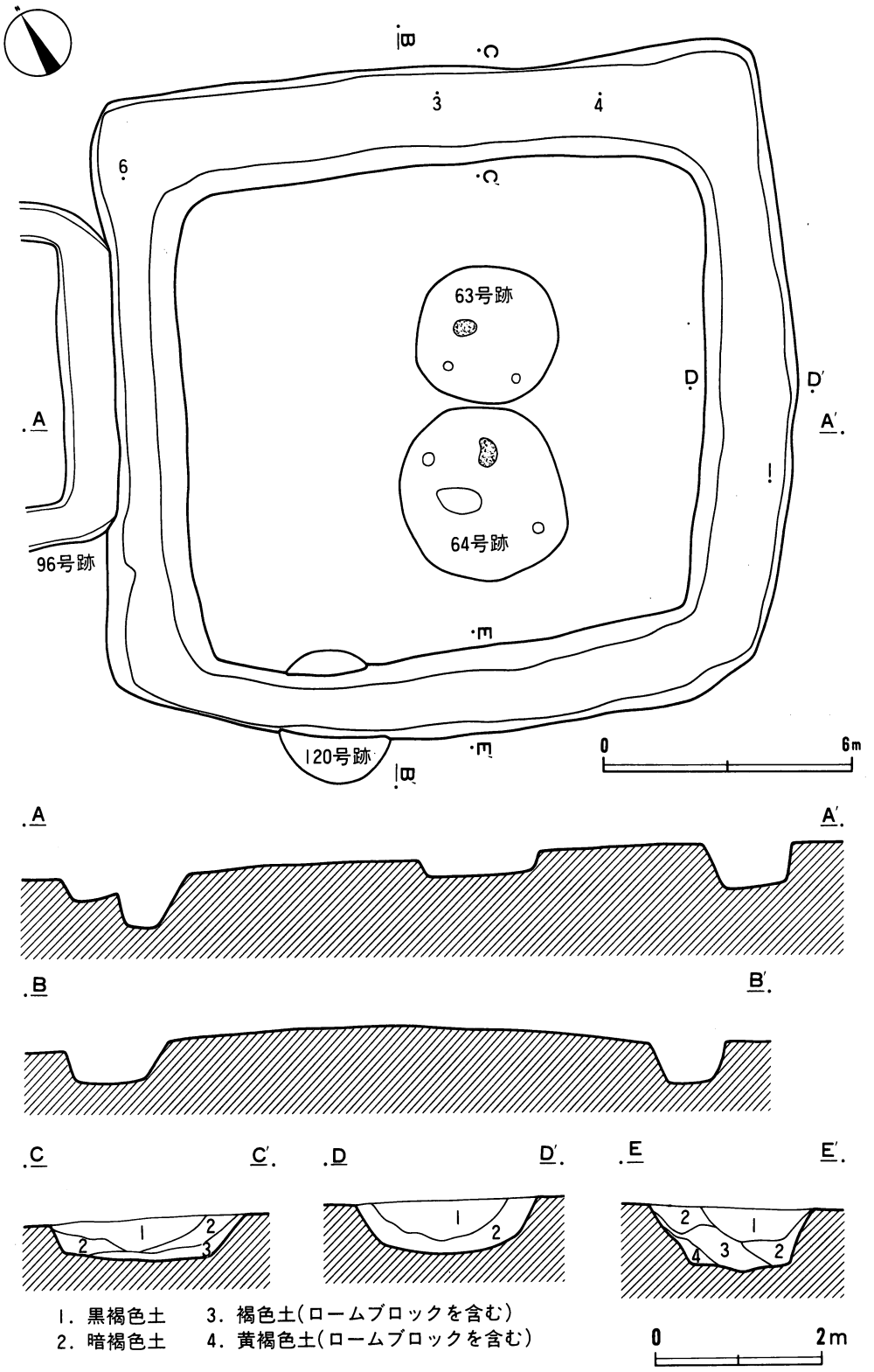
には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、明褐色を呈する。底径は7.5cmを測る。28は壺の底部破片で底部は完存し、その他は¼が遺存する。外面にはヘラケズリ痕が残り、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。底径8.0cmを測る。29は壺の底部で、図示の範囲では完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面にはハケ目が残り、一部はヘラナデされる。胎土；焼成共に良好で、褐色を呈する。底径は6.0cmを測る。30は口縁部を欠く鉢で、体部は⅓しか遺存しないが、底部は完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。底径3.8cmを測る。31は器台の脚部で図示の範囲で完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。脚孔は3孔で、脚径10cmを測る。32も器台の脚部で、わずかな欠失はあるものの、図示の範囲ではほぼ完存する。外面は粗くヘラミガキされ、内面には細かいハケ目が残る。脚孔は3孔で、胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。脚径は10cmを測る。33も器台の脚部で、わずかな欠失はあるものの、図示の範囲ではほぼ完存する。内外面共にヘラナデされる。脚孔は3孔で胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。脚径10.2cmを測る。34も器台で⅔の破片である。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。脚孔は3孔で胎土、焼成共に良好、赤褐色を呈する。脚径9.1cmを測る。35は高坏の脚部で⅕が遺存する。外面はヘラミガキされ、内面にはハケ目が残る。内外面共に赤彩され、脚孔は4孔穿孔される。胎土、焼成共に良好である。脚径は16.9cmを測る。36は木葉痕を有する壺の底部で図示の範囲内で完存する。外面には粗いハケ目が残り、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く、黒褐色を呈する。底径は6.6cmを測る。37は坩の底部で内外面共にヘラナデされ、外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、内面は淡褐色を呈する。底径5.2cmを測る。38～40は壺の破片である。38は口縁部で羽状縄文が施され、その下端に縄文原体による押圧が加えられる。内面はナデが加えられ、赤彩される。39も口縁部で網目状撚糸文が施されるものである。内面はナデが加えられ、赤彩される。40は肩部破片で櫛描による波状文、平行線文が施される。41～43は高坏の破片で、41は口縁部で、外面には刺突のある2個1組の円形浮文が付けられる。内面は櫛描波状文が施される。内外面共に赤彩される。42も口縁部で、外面には櫛描平行線文が施される。43は脚部で、ヘラ描平行線文、山形文が施され、裾部には刻みが施される。

（3）　95（061）号跡（第188・189図）

遺構（第188図）

94号跡の北東に近接して存在する方形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。西側で方形周溝（墓）（96号跡）と重複し、南側で土壙（120号跡）を切る。

台状部は東西12.6m、南北11.6mを測り、やや不整な隅丸方形のプランを呈する。周溝を含



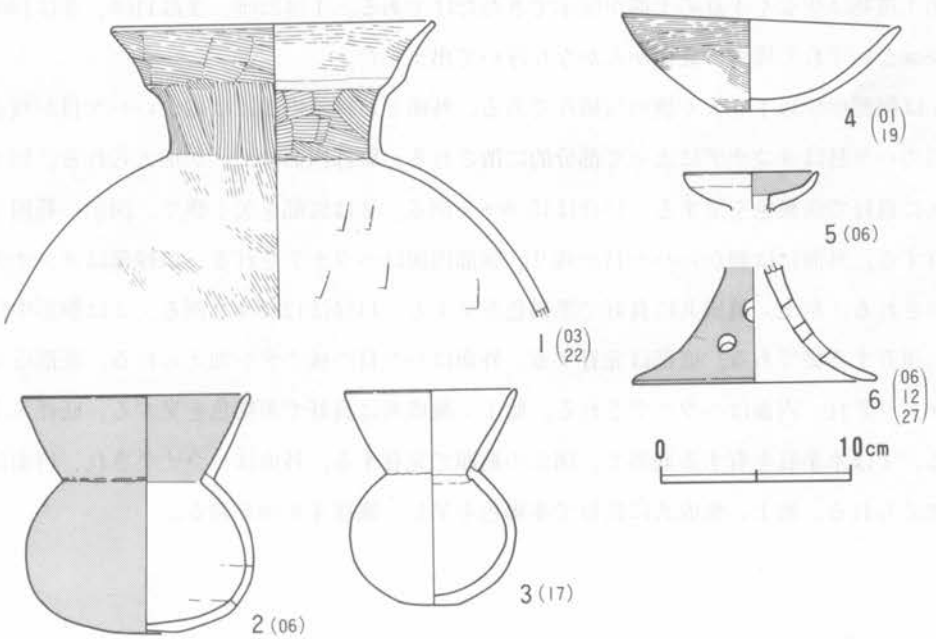
第188図　95(061)号跡実測図(1/160・1/80)

めた規模は東西16.6m、南北16mを測る。周溝外周の輪郭は東および南側でやや胴張りになり、西側では96号跡に影響されて歪む。したがって周溝の幅は1.6～3.4mとかなり差があり、西溝で狭くなる。周溝の深さは一定でなく、0.4～0.7mを測り、各コーナー部分で浅く、溝の中央部が深くなる。溝底はやや凹凸を呈する。周溝内の覆土は4層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

遺物（第189図）

出土遺物は少なく6点の土器が図示できただけである。1、3、4、6の4点はいずれも周溝内で底面から3～5cm浮いて出土したものである。2、5は覆土中から出土したものである。この他覆土中から磨製石斧が1点出土している。

1は胴部中位以下を欠く壺で、口縁部は⅓、その他は½遺存する。外面にはハケ目が施されるが、胴部はヘラナデされるためわずかに残るのみである。口縁部から頸部にかけての内面にもハケ目が施されるが、口縁部はヨコナデされるため、わずかに残るのみである。胴部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径16.6cmを測る。2は⅕が遺存する坩である。口縁部は内外面共にヘラナデ、胴部外面はヘラナデの後ヘラミガキ、胴部内面は粗くヘラナデされる。胴部内面には輪積み痕が残る。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、内面は淡褐色を呈する。口径11.8cm、底径2.6cm、器高12.2cmを測る。3も坩で、口縁部は⅔が遺存し、その他は完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。口縁部内面はヘラミガキ、胴部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径9.0cm、器高11cmを測る。4は¾が遺存する鉢である。外面には粗いハケ目が残るが、部分



第189図　95(061)号跡出土土器(1/4)

的にナデによって消される。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。口径14.6cm、底径3.2cm、器高4.6cmを測る。5は器台の器受部の¼破片である。内外面共にナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。内面は赤彩される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。外面は褐色を呈する。器受部径7.0cmを測る。6は器台の脚部で図示の範囲で完存する。内外面共にナデが加えられ、外面は赤彩される。脚孔は4孔ずつ2段穿孔され、胎土には細砂粒を含み、良好で、焼成も良い。内面は褐色を呈し、脚径12.6cmを測る。

（4）　96（062）号跡（第190・191図）

遺構（第190図）

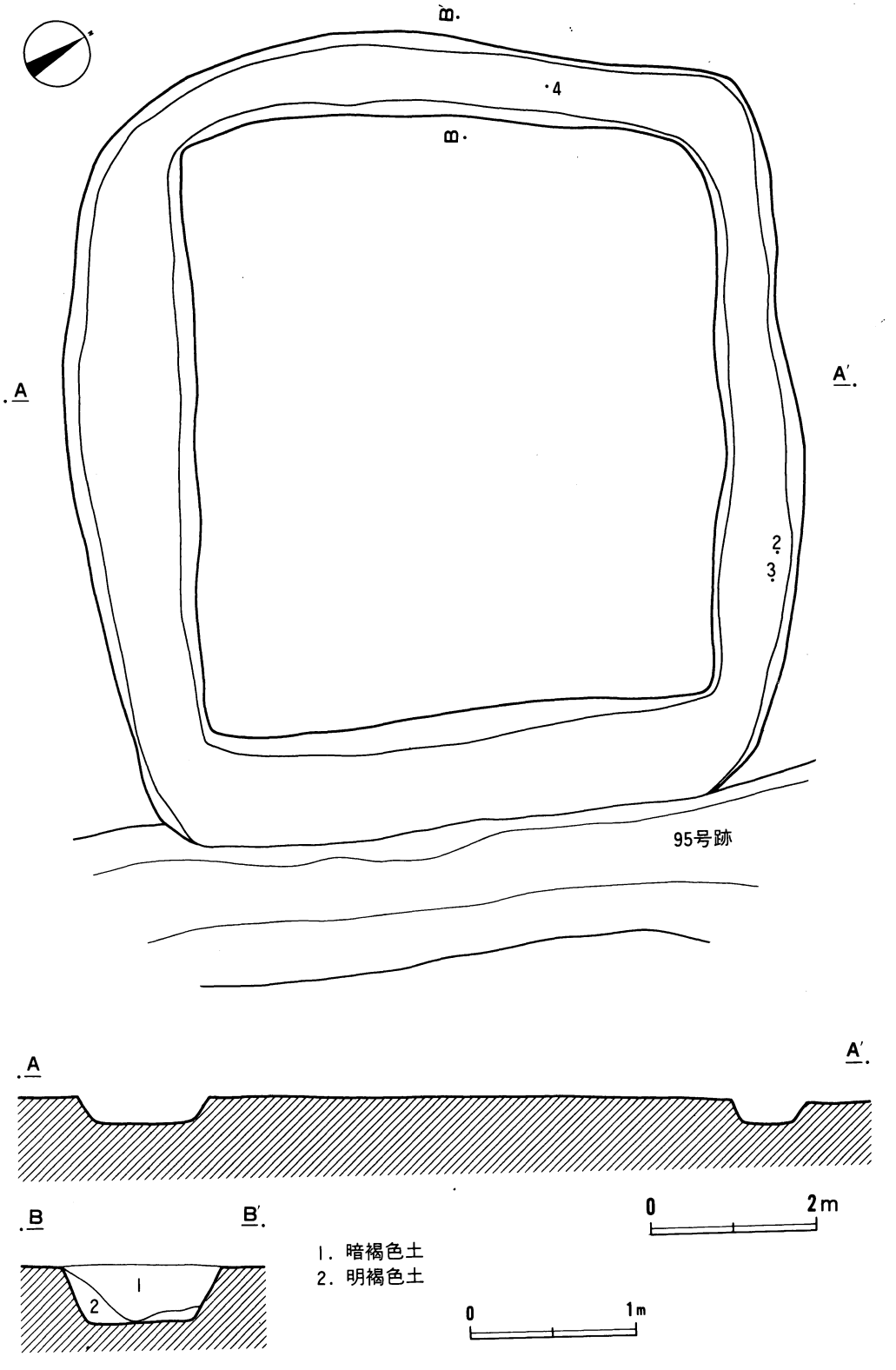
95号跡の西側で重複する方形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。重複する95号跡との新旧関係は、本跡の覆土を95号跡が切っているため、95号跡の方が新しい。

台状部は東西7.4m、南北6.4mを測り、やや不整な長方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は、東西はほぼ10m、南北8.9mを測る。周溝外周の輪郭は胴張りの隅丸方形を呈するため、各コーナー部分で、周溝の幅が狭くなる。周溝の幅は0.8～1.6mとかなり差があり、北溝と西溝が狭くなり、さらに前述のように各コーナー部分が狭くなる。周溝の深さは0.2～0.35mと全体的に浅く、特にコーナー部分が浅く、各溝の中央部がやや深くなる。溝底はほぼ平坦で、周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

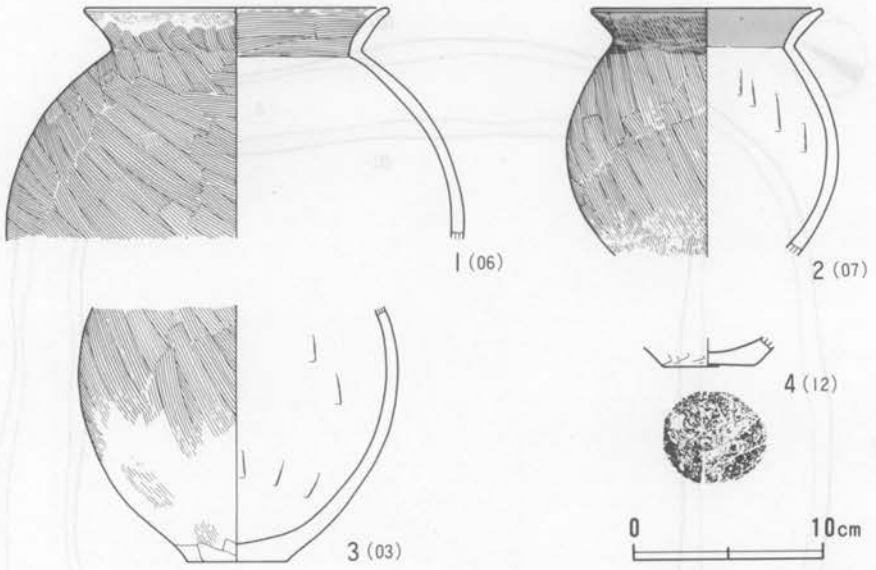
遺物（第191図）

出土遺物は少なく4点の土器が図示できただけである。1は22cm、2は11cm、3は13cm、4は18cmといずれも周溝の底面からかなり浮いて出土した。

1は胴部中位以下を欠く甕の⅓破片である。外面と口縁部内面には細かいハケ目が残る。口縁部のハケ目はヨコナデによって部分的に消される。胴部内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径は15.8cmを測る。2は底部を欠く甕で、図示の範囲でほぼ完存する。外面には細かいハケ目が残り、胴部内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされ、赤彩される。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径は12.0cmを測る。3は胴部中位以下が⅗遺存する甕である。底部は完存する。外面はハケ目の後ナデが加えられる。底部近くはヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。底径5.2cmを測る。4は木葉痕を有する底部で、図示の範囲で完存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈し、底径4.8cmを測る。



第190図　96(062)号跡実測図(1/80・1/40)



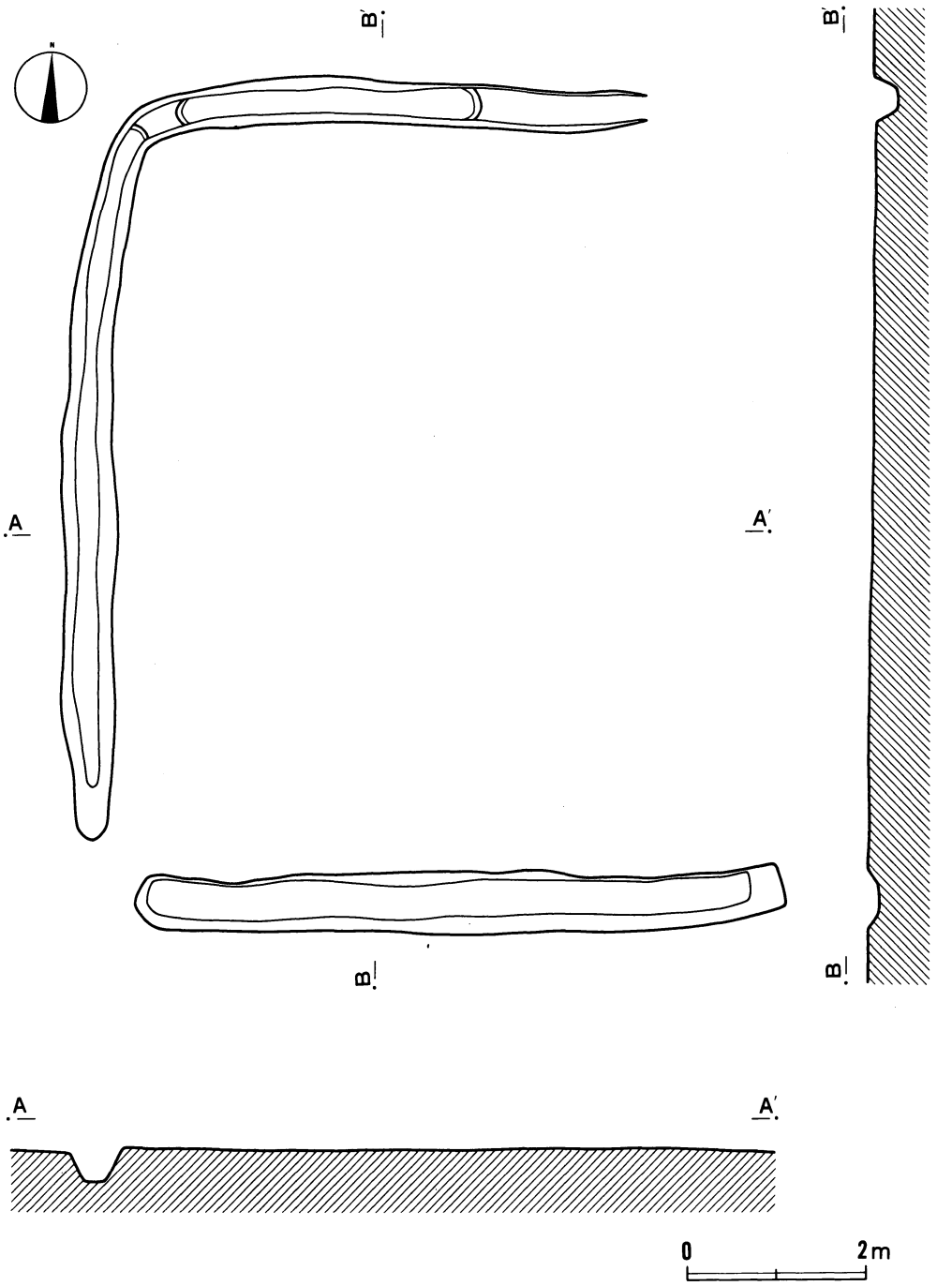
第191図　96(062)号跡出土土器(1/4)

（５）　97（072）号跡（第192図）

遺構（第192図）

94号跡の南西66ｍに位置する方形周溝（墓）で、確認調査時のトレンチが周溝の一部にかかっていたが確認できなかった遺構である。

溝は南西コーナー部分でとぎれ、プランは東に開く「コ」の字形を呈する。北溝は掘込みが浅いため東側で消えているが、本来は南溝と同程度の規模であったと思われる。規模は周溝を含めて南北9.4ｍ、東西8.0ｍを測る。周溝の幅は0.4～0.7ｍを測り、深さは0.25～0.35ｍと全体に浅く、北西コーナー部分と北溝の東側では0.05～0.1ｍとさらに浅くなる。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は暗褐色土の単一層であった。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。なお、覆土中からは土器片と礫が出土しているだけで、図示できるものはない。



第192図　97(072)号跡実測図(1/80)

（６）　98（088）号跡（第193～195図）

遺構（第193図）

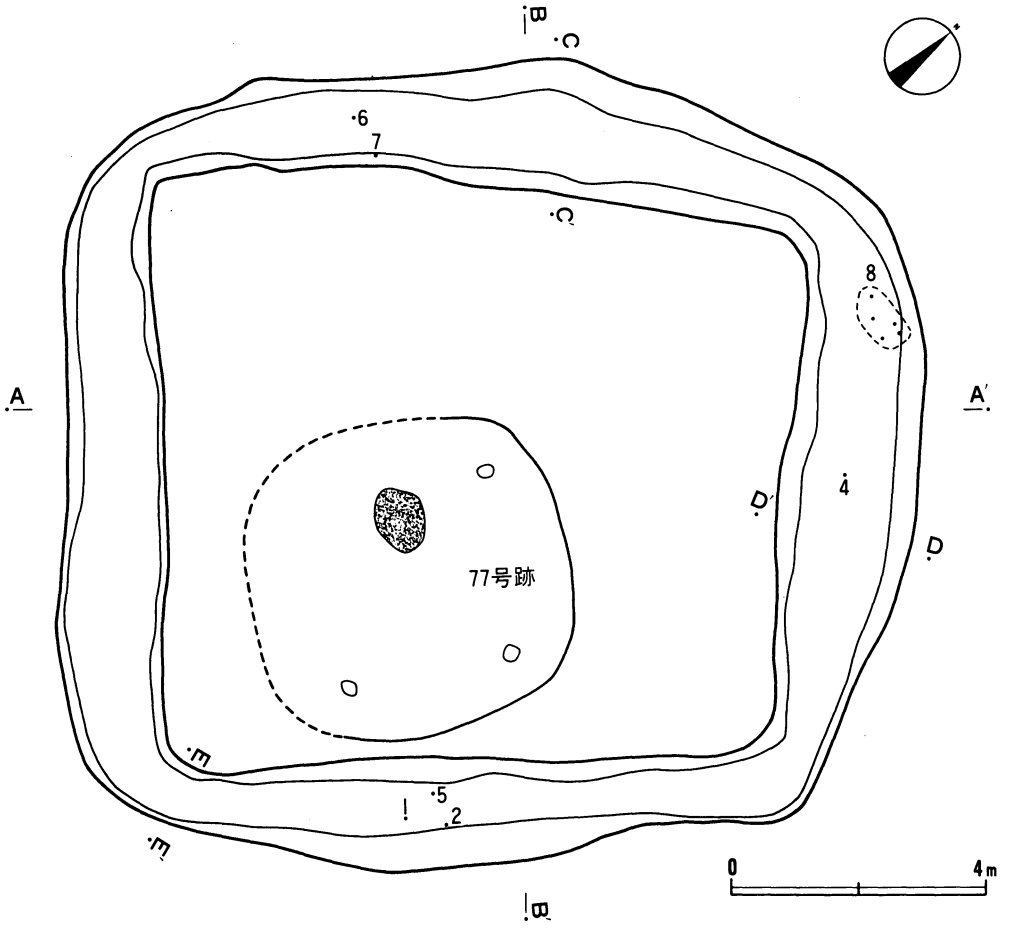
93号跡の南２mに位置し、東側で99号跡と近接して存在する方形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

台状部は東西8.9ｍ、南北9.8ｍを測り、やや隅丸の台形に近いプランを呈する。周溝を含めた規模は東西12.6ｍ、南北13.6ｍを測る。周溝外周の輪郭は南側を除いては胴張りとなる不整な隅丸の長方形を呈するため、各コーナー部分で周溝の幅が狭くなる。周溝の幅は0.9～2.2ｍとかなり差があり、前述のように各コーナー部分で狭くなり、各溝の中央部で広くなる傾向を示す。周溝の深さは0.2～0.5ｍとやや差があり、各コーナー部分と南溝が浅くなる。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は３層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

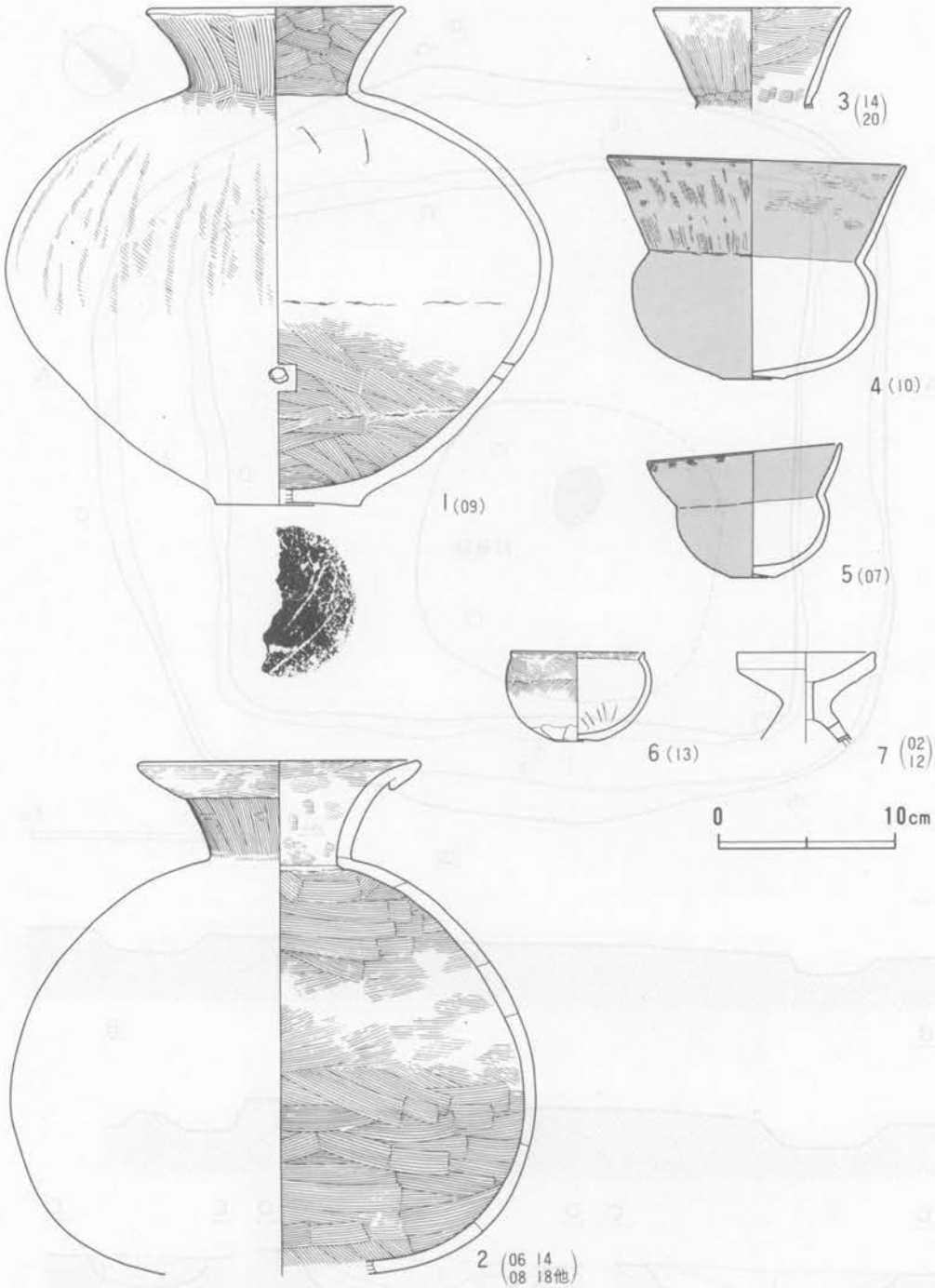
遺物（第194・195図）

出土遺物は比較的多く８点の土器が図示できた。いずれも周溝内から出土したものである。１、２、５は東溝の中央で20～40cm浮いて出土したものである。４は北溝の中央で5.0cm浮いて出土し、６、７は西溝の中央南寄りで30cm前後浮いて出土したものである。８は北溝の北西コーナー寄りで27cm浮いて出土したものである。３は覆土中出土のものである。

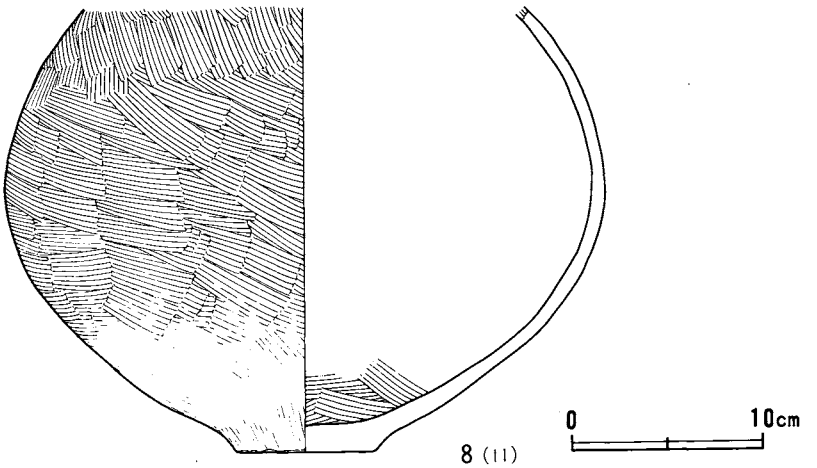
１は大形の壺で、底部に木葉痕を有する。胴部下半～底部は½欠失するが、その他はほぼ完存する。口縁部外面にはやや粗いハケ目が施される。胴部上半にもハケ目が施されるが、その大半はヘラミガキによって消される。内面は、口縁部と胴部下半には細かいハケ目が施され、その他はヘラナデされる。なお胴部下半には、焼成後の穿孔が１孔認められる。胎土には中砂粒を含むが、密で焼成も良く、明褐色を呈する。口径14.2cm、底径8.1cm、器高27.8cmを測る。２は輪積み成形の壺で底部を欠き、胴部上半は⅘、下半は½遺存する。外面の口縁部～頸部にかけて、細かいハケ目が施されるが、部分的にナデによって消される。胴部にはナデが加えられる。内面にも細かいハケ目が施されるが、口縁部と胴部中位はナデによって消される。胎土には細砂粒を含むが、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、口径15.6cmを測る。３は坩の口縁部で⅔が遺存する。内外面共にハケ目が施されるが、部分的にナデによって消される。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成は良い。４は坩で、口縁部を⅕欠失するが、その他は完存する。口縁部は、内外面共にハケ目が施された後ナデが加えられる。体部には内外面共にナデが加えられる。外面と口縁部内面は赤彩されるが、外面の赤彩は火を受けているため、遺存状態は悪い。胎土には砂粒を含むが密で、焼成はやや悪く、赤彩部以外は褐色を呈する。口径16.8cm、底径3.4cm、器高12.3cmを測る。５も坩で、口縁部を½欠失するが、その他は完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、口唇部にはハケ目がわずかに残る。内面はヘラナデされる。外面と口縁部内面は赤彩されるが、遺存状態は悪く、痕跡的である。胎土には砂粒を含み、



第193図　98(088)号跡実測図(1/120・1/60)



第194図　98(088)号跡出土土器(１)(1/4)



第195図　98(088)号跡出土土器(２)(1/4)

密だが焼成はやや悪く、赤彩部以外は褐色を呈する。口径10.9cm、底径2.4cm、器高7.0cmを測る。６は埦で、底部を⅓欠失するが、その他は完存する。外面の体部上半には細かいハケ目が残るが、中位はヘラナデされ、下半はヘラケズリされる。内面は口唇部にハケ目が残るが、体部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈し、口径7.6cm、底径2.4cm、器高4.9cmを測る。７は脚部を欠く器台で図示の範囲でほぼ完存する。内外面共にナデが加えられる。脚孔は３孔で、胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。器受部径7.8cmを測る。８は胴部以下¾遺存する甕である。外面には粗いハケ目が施されるが、下半はナデによって消される。内面は底部に粗いハケ目が残るが、その他はヘラナデされる。胎土には、砂粒を含むが、密で、焼成も良い。褐色を呈し、底径7.2cmを測る。

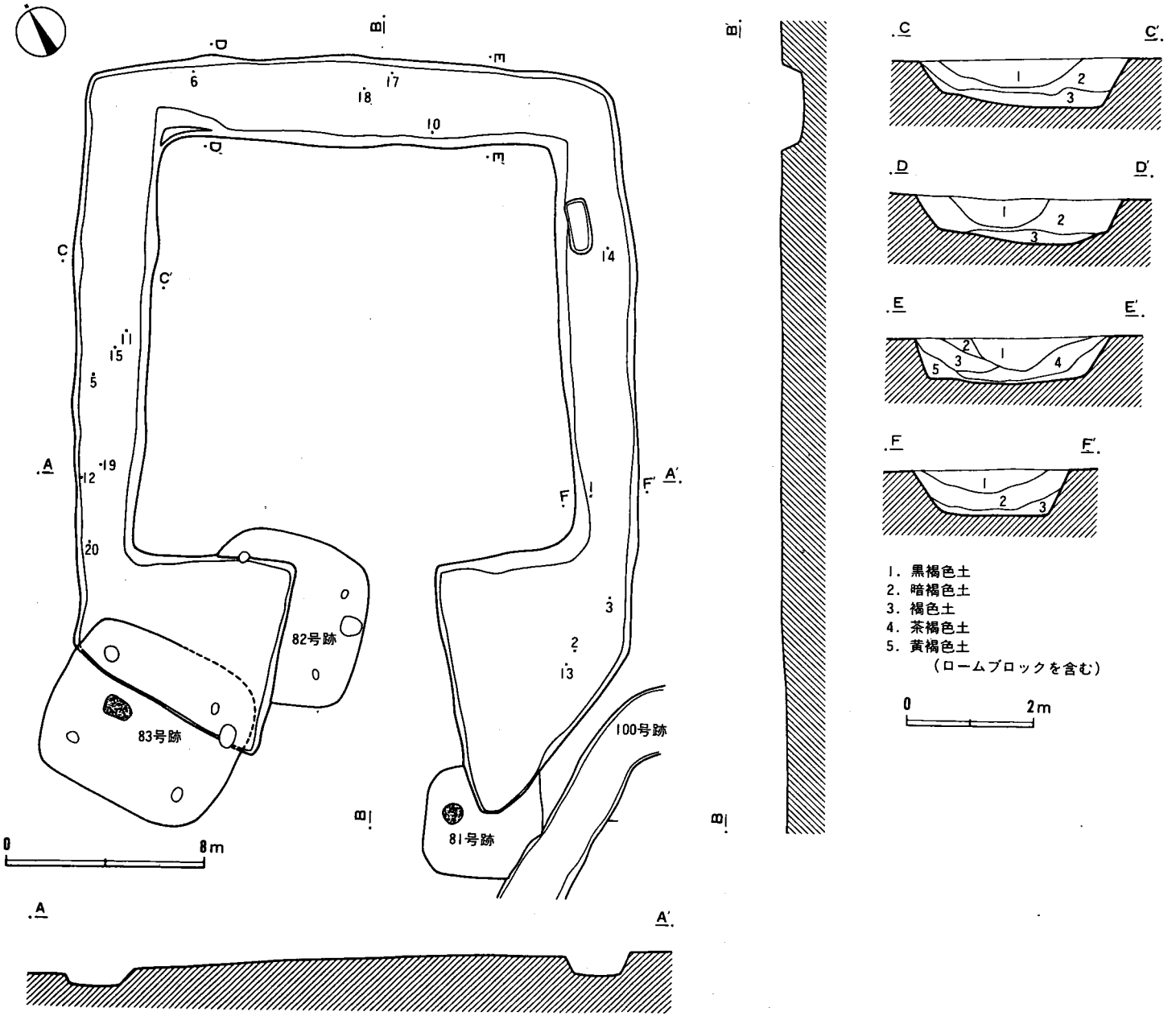
（７）　99（089）号跡（第196～200図）

遺構（第196～198図）

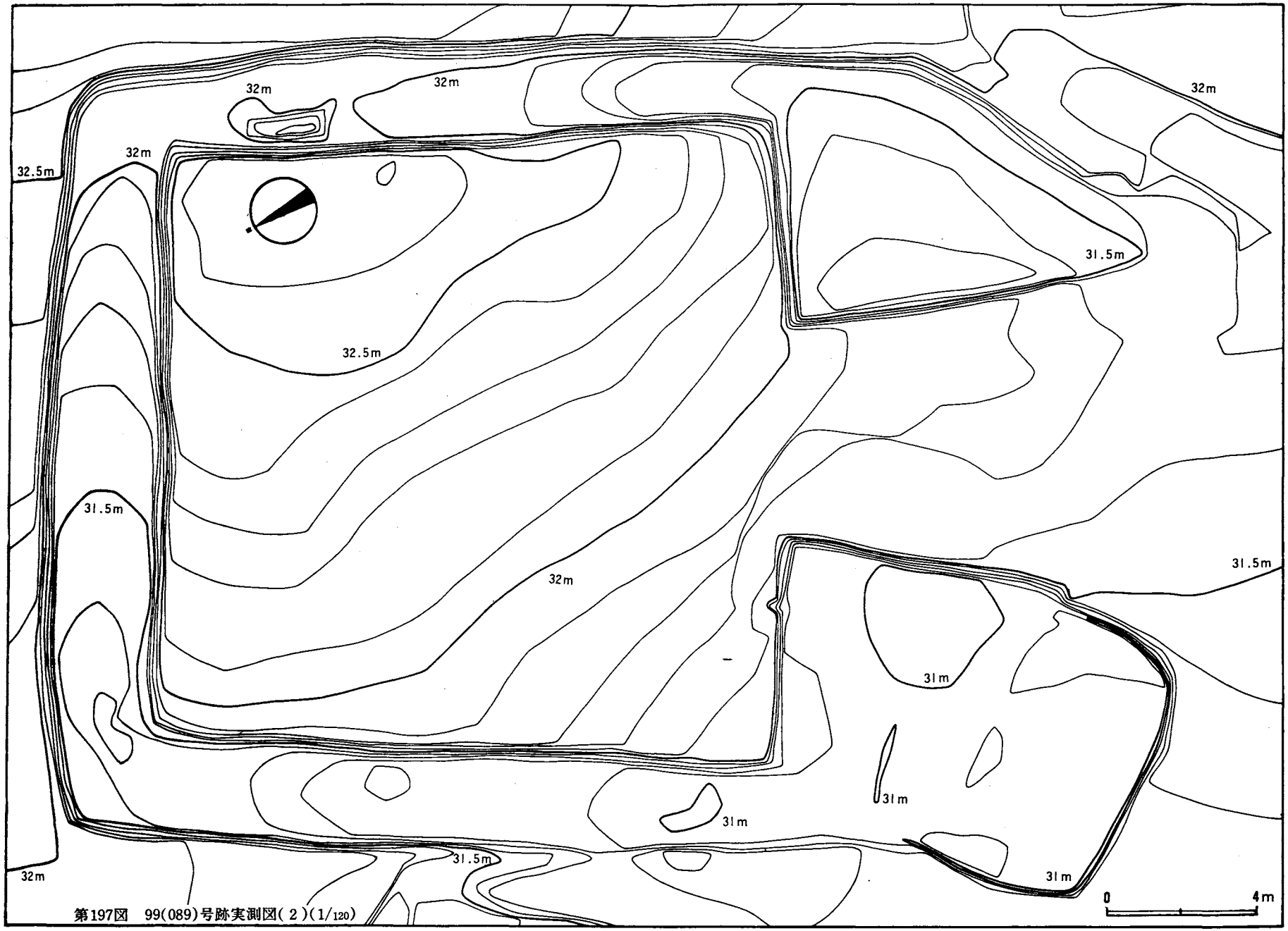
98号跡の東側に近接して存在する前方後方形周溝（墓）で81、82、83という３軒の住居跡を切る。またその東側にも100、101、102、103という４基の方形周溝（墓）が近接して存在する。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

台状部は東西16.3m、南北16.7mを測り、ほぼ方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は東西22.5m、南北30.3mを測る。本跡は南側中央部分が5.5～8.2mの幅で掘り残されて、その両側の周溝の幅が広がるという極めて特異な形態を示す。したがって台状部は前方後方形を呈する。周溝の幅は2.5～3.7mとやや差があり、前述のように南側では最大10mとなる。周溝の深さは0.4～0.9mとかなり差がある。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は５層に分けられた。なお、北東コーナー部分の南2.5mの溝底で土壙を検出した（第197図）。

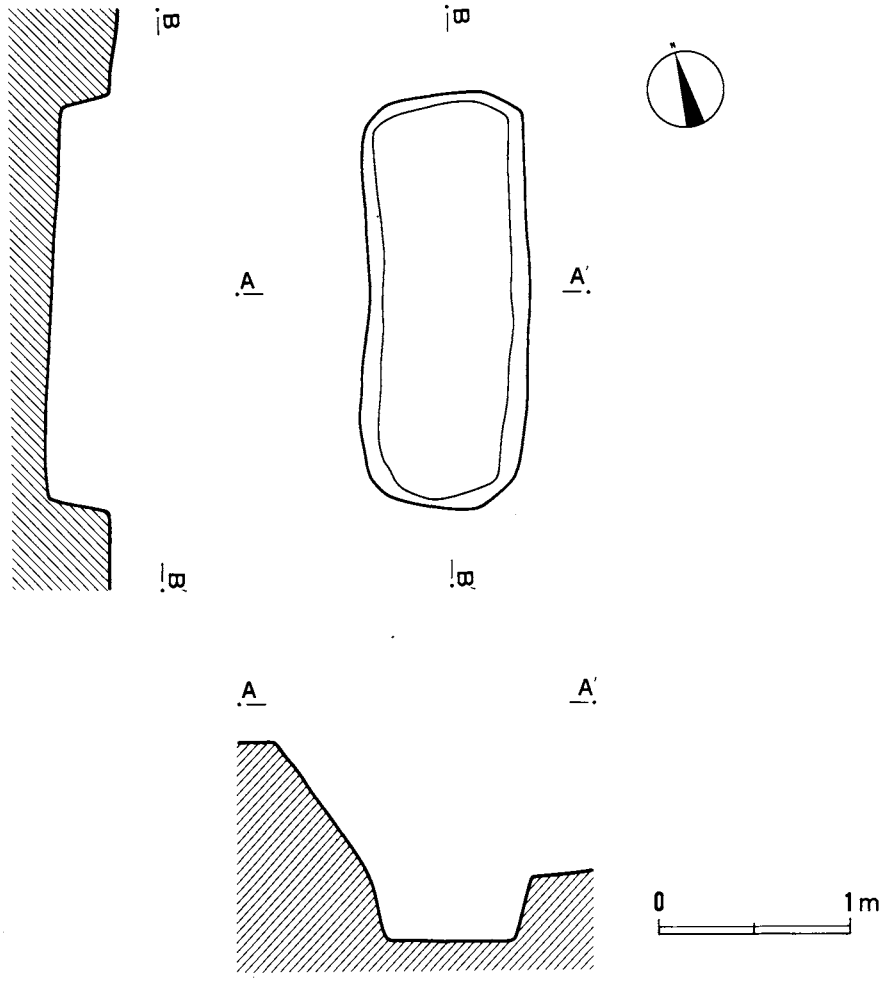
この土壙の周溝を掘り終え、溝底の精査を行っている段階ではじめてその存在が明らかになっ



第196図　99(089)号跡実測図(1)(1/200・1/80)



第197図　99(089)号跡実測図(２)(1/120)

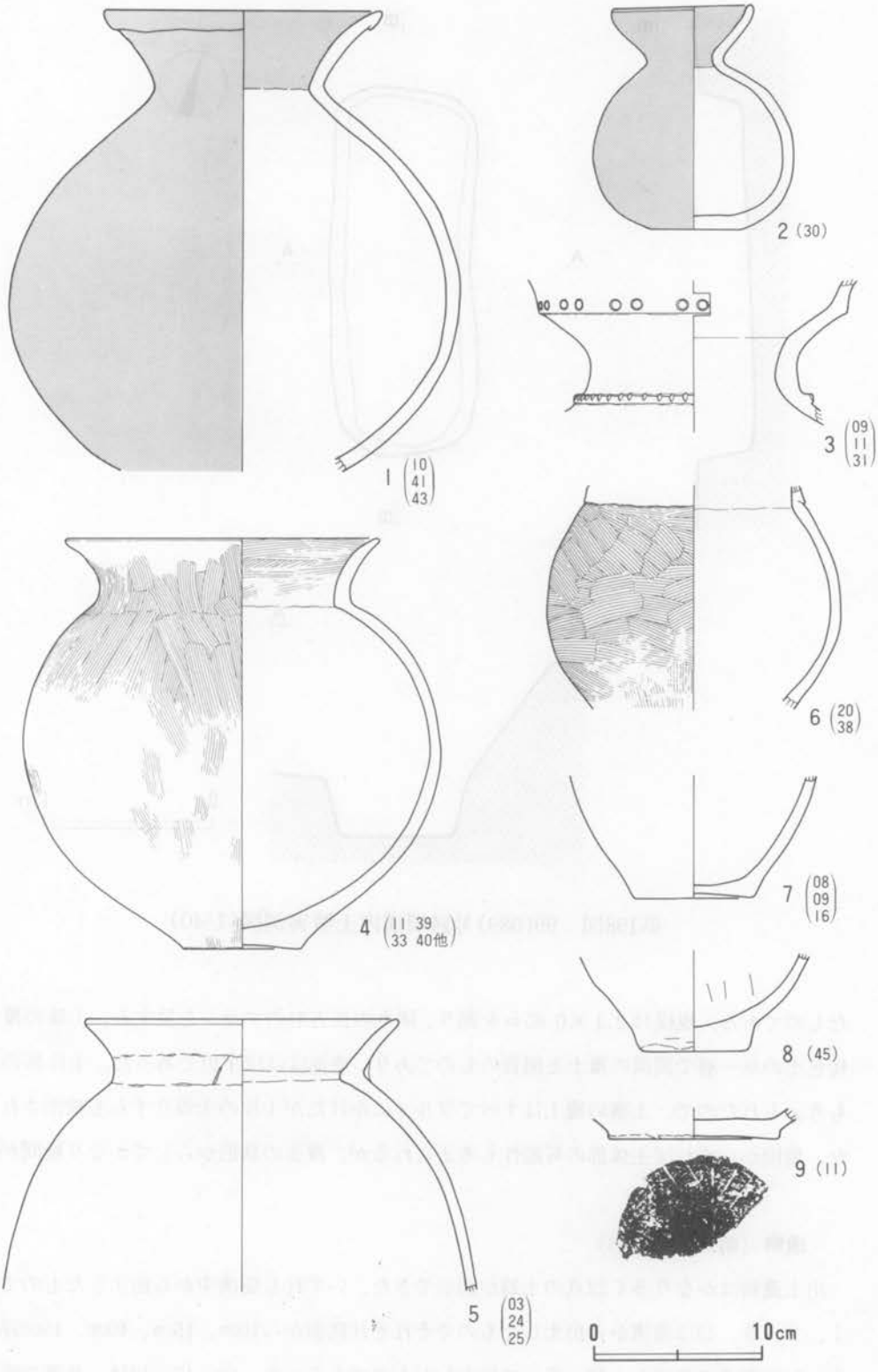


第198図　99(089)号跡周溝内土壙実測図(1/40)

たものである。規模は2.1×0.85mを測り、隅丸の長方形のプランを呈する。土壙の覆土は暗褐色土の単一層で周溝の覆土と同質のものであり、底面はほぼ平坦であった。主体部の可能性も考えられたので、土壙の覆土はすべてフルイにかけたが1片の土器片すらも検出されなかった。規模からすれば主体部の可能性も考えられるが、覆土の状態からしてかなり疑問が残る。

遺物（第199・200図）

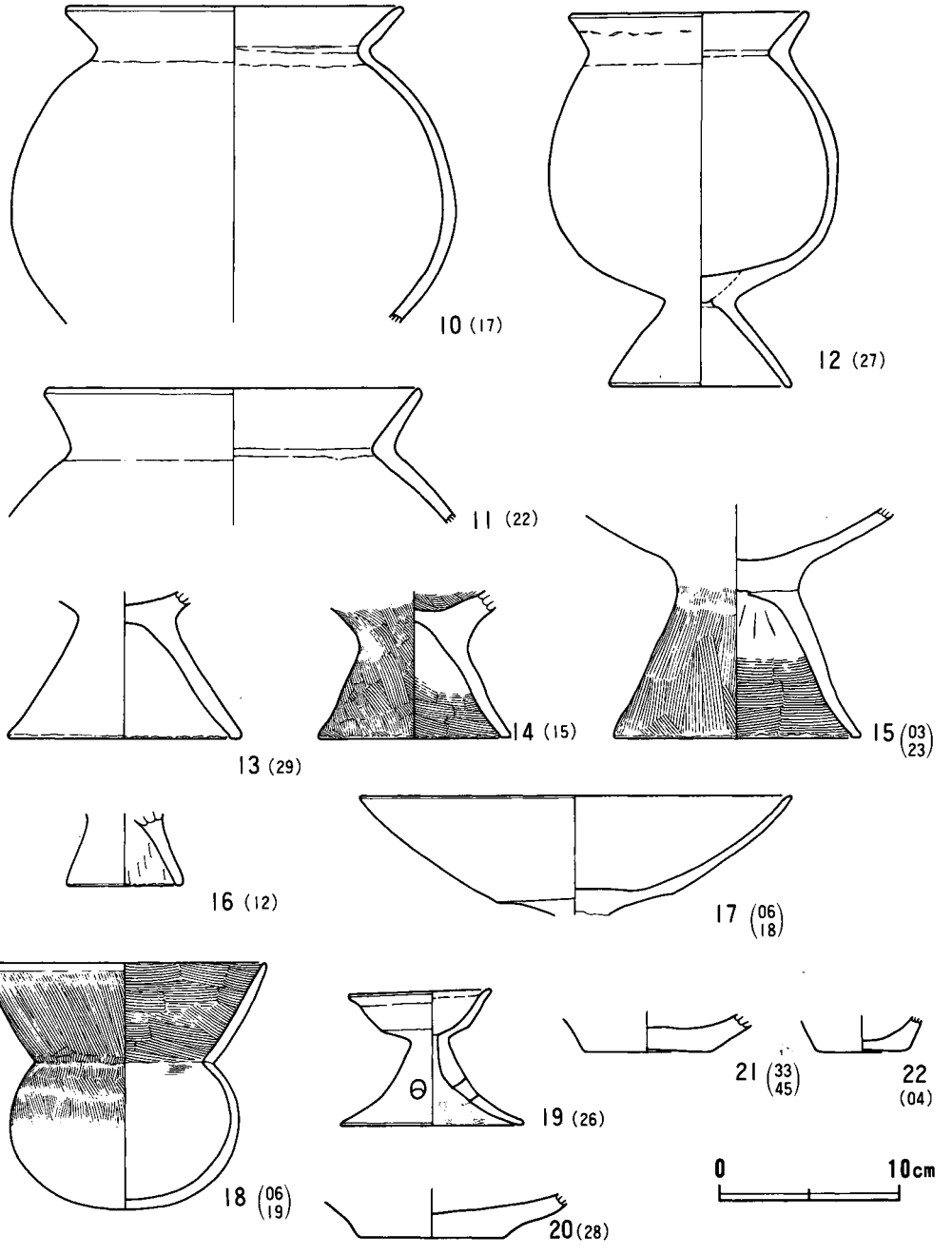
出土遺物はかなり多く22点の土器が図示できた。いずれも周溝中から出土したものである。1、2、3、13は南溝から出土したものでそれぞれ底面から10cm、15cm、40cm、15cm浮いていた。14は西溝で底面から17cm浮いて出土したものである。6、10、17、18は、北溝で底面から46cm、25cm、16cm、25cm浮いて出土したものである。5、11、12、15、19は西溝で、底面からそれぞれ20cm、30cm、20cm、17cm、25cm浮いて出土したものである。20は底面直上から出土



第199図　99(089)号跡出土土器(1)(1/4)

し、4、7～9、16、21～22は覆土中から出土したもので、4は破片が接合してほぼ完形に復元できたものである。この他底面から15cm浮いて土製紡錘車が出土している。

1は底部を欠く折り返し口縁の壺で、⅔が遺存する。外面はヘラナデされるが、胴部はさらにヘラミガキされる。口縁部～頸部の内面はナデが加えられ、胴部はヘラナデされる。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良い。赤彩部以外は褐色を呈する。口径は16.4cmを測る。2は口縁が内彎する小形の壺で、口縁部を½欠失するが、その他は完存する。内外面共にナデが加えられ、口唇部はヨコナデされる。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤彩部以外は褐色を呈する。口径8.1cm、底径5.2cm、器高13.2cmを測る。3は壺の頸部の⅔破片で、口縁部下端には竹管による2個1組の刺突がめぐる。頸部には突帯がめぐり、刻みが施される。その他の部分は内外面共にナデが施される。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良い。赤褐色を呈し、最大径19.6cmを測る。4は甕で⅘が遺存する。外面と口縁部内面はハケ目が施されるが、ヘラナデによって、部分的に消される。外面は火を受けているため、器面の剝落が著しい。胴部内面はヘラナデされる。胎土には細砂粒を含み、密で、焼成も良い。明褐色を呈し、口径18.3cm、底径7.0cm、器高23.8cmを測る。5は胴部下半以下を欠く甕で、胴部中位を除いて⅔遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面もはナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。頸部には粘土帯がめぐるが、部分的に剝落する。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈し、口径18.4cmを測る。6は口縁部と底部を欠く甕で、½が遺存する。外面にハケ目が施されるが、部分的にヘラナデによって消される。内面はヘラナデの後ヘラミガキされる。最大径は17.4cmを測る。7は胴部中位以下が⅙遺存する甕で、底部はほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面もヘラナデされる。外面下半は部分的に火を受けている。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良い。明褐色を呈する。底径7.0cmを測る。8も甕の底部で½破片である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈し、底径6.4cmを測る。9は木葉痕を有する底部の½破片で、外面はナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。底径10cmを測る。10は底部を欠く甕の⅖破片で、外面はヘラナデされ、内面にはナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。外面は部分的に火を受けている。胎土には中砂粒を含み、密だが、焼成はやや悪い。黒褐色を呈し、口径18.4cmを測る。11は甕の口縁部の⅖破片で、内外面共にヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径20.4cmを測る。12は台付甕で、口縁部を⅓欠失するが、その他はほぼ完存する。胴部は、外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。脚台部は内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含むが、密で、焼成も良い。褐色を呈する。口径13cm、脚台径10cm、器高20.6cmを測る。13は台付甕の脚台部で図示の範囲



第200図　99(089)号跡出土土器(２)(1/4)

で完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。外面下半は部分的に火を受けている。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、赤褐色を呈する。脚台径は12.6cmを測る。14は台付甕の脚台部で⅔遺存する。内外面共に細かいハケ目が施され、部分的にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径は10.6cmを測る。15も台付甕の脚台部で⅔が遺存する。胴部は、外面がヘラナデされ、内面はナデが加えられる。脚台

部は内外面共にやや粗いハケ目が施されるが、部分的にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈し、脚径13.5cmを測る。16は小形の台付甕の脚台部で、図示の範囲で完存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。脚径は6.2cmを測る。17は高坏の坏部で⅔が遺存する。内外面共にヘラナデの後ヘラミガキされる。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良い。明褐色を呈し、口径23.8cmを測る。18は坩の½破片で口縁部には内外面共にハケ目が施される。体部外面上半にはハケ目が残るが、下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土には細砂粒を含み、密で、焼成も良い。赤褐色を呈する。口径14.5cm、器高13.2cmを測る。19は器台で⅔が遺存する。外面と器受部内面にはナデが加えられる。脚部内面にはわずかにハケ目が残る。脚孔は3孔で、胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。淡褐色を呈し、口径7.8cm、脚径10cm、器高7.3cmを測る。20は底部で、内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、褐色を呈する。底径は8.0cmを測る。21も底部で外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土には中砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈し、底径7.0cmを測る。22はやや小形の底部で、内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈し、底径4.4cmを測る。

（8） 100（094）号跡（第201・202図）

遺構（第201図）

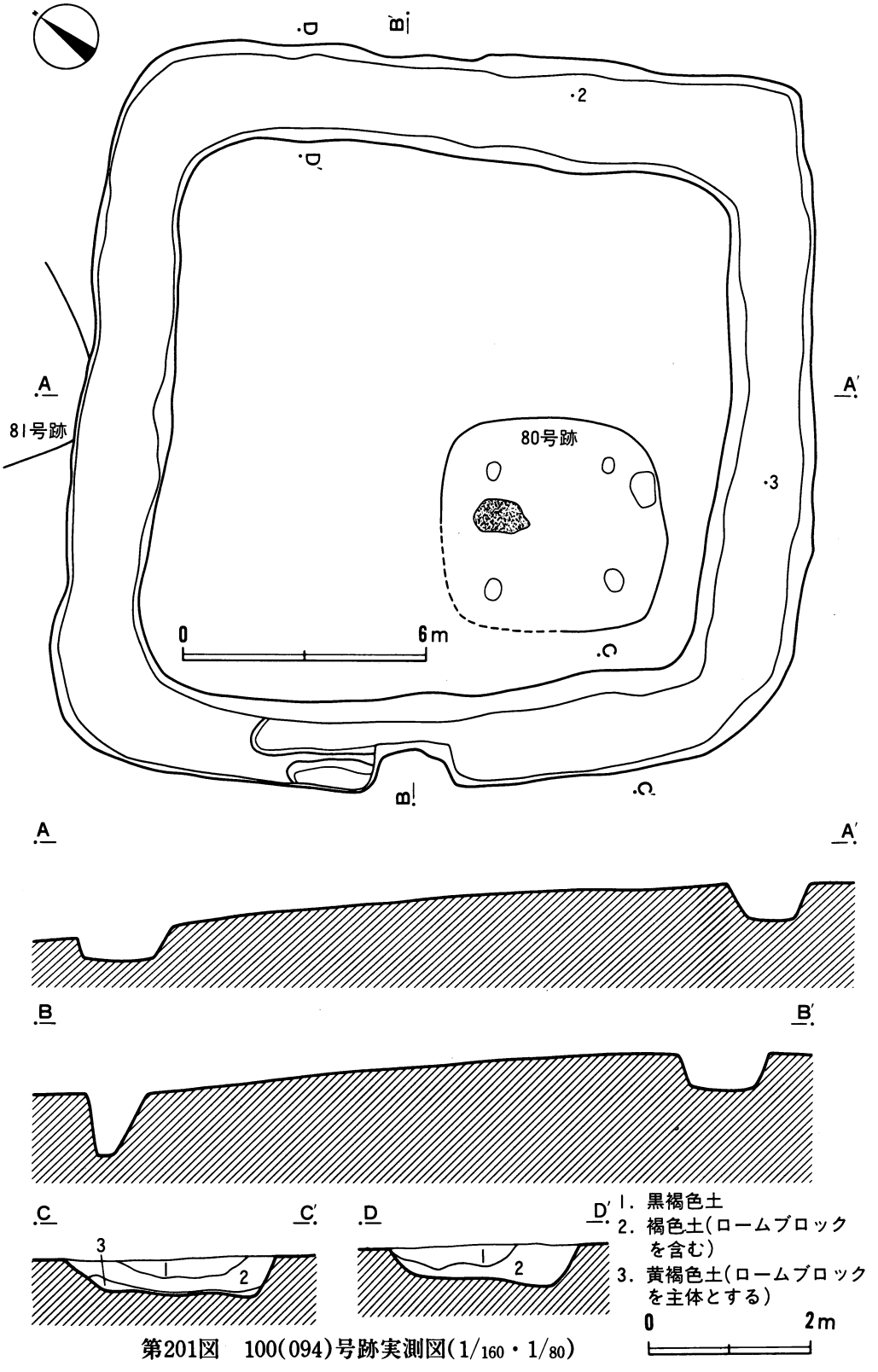
99号跡の南東に近接して存在する方形周溝（墓）で81号跡を切り、129号跡に切られる。確認調査時のトレンチが周溝にかかっておりその段階から存在の判明していた遺構である。

台状部は東西14m、南北12.6mを測り、隅丸のやや台形に近いプランを呈する。周溝を含めた規模は東西18.8m、南北18.2mを測る。周溝外周の輪郭は基本的には隅丸のほぼ方形を呈するが、南溝の中央に2.0×1.2mほどの張り出しを有する。周溝の幅は2.7～3.3mとあまり差はないが、張り出しの部分は1.4mとなる。周溝の深さは0.2～0.5mとやや差があり、各コーナー部分が浅くなる。張り出し部およびその西側にはやや深くなる部分が認められ、最も深い部分で0.7mを測る。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は3層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

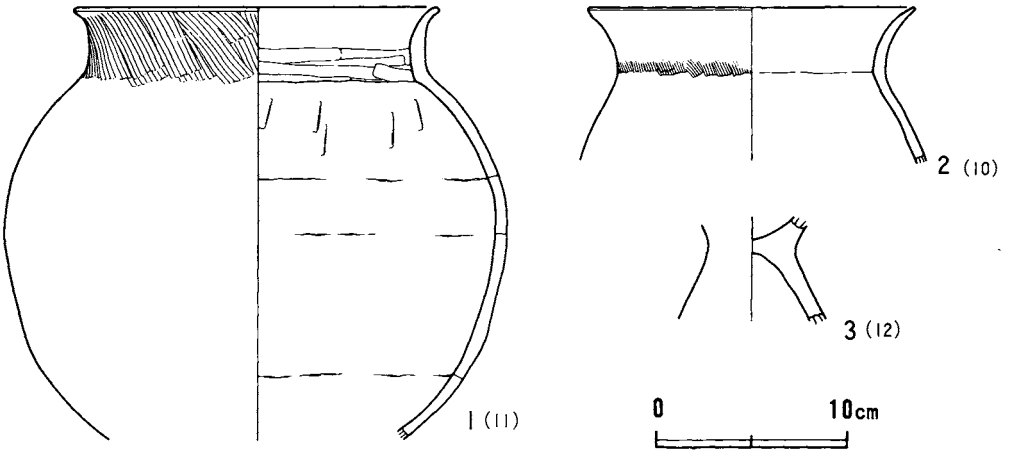
遺物（第202図）

出土遺物は少なく周溝中より出土した3点の土器が図示できただけである。1と2は北溝の東側で底面から5.0cm浮いて、3は東溝のほぼ中央で底面から20cm浮いて出土したものである。

1は底部を欠く甕の⅖破片で、口縁部は外面にはハケ目が施され、内面はヘラケズリされる。胴部は内外面共にヘラナデされるが、内面には輪積み痕が残る。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径は18.8cmを測る。2は甕の口縁部の⅖破片で口縁部は内外面共にヨコナデされるが、頸部外面には細かいハケ目が残る。胴部には内外面共にナデが加えられる。胎土は良



第201図　100(094)号跡実測図(1/160・1/80)



第202図　100(094)号跡出土土器(1/4)

好であるが、焼成は悪く、極めて脆い。黒褐色を呈し、口径17cmを測る。3は器台の破片で、内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。

(9)　101(100)号跡(第203・204図)

遺構(第203図)

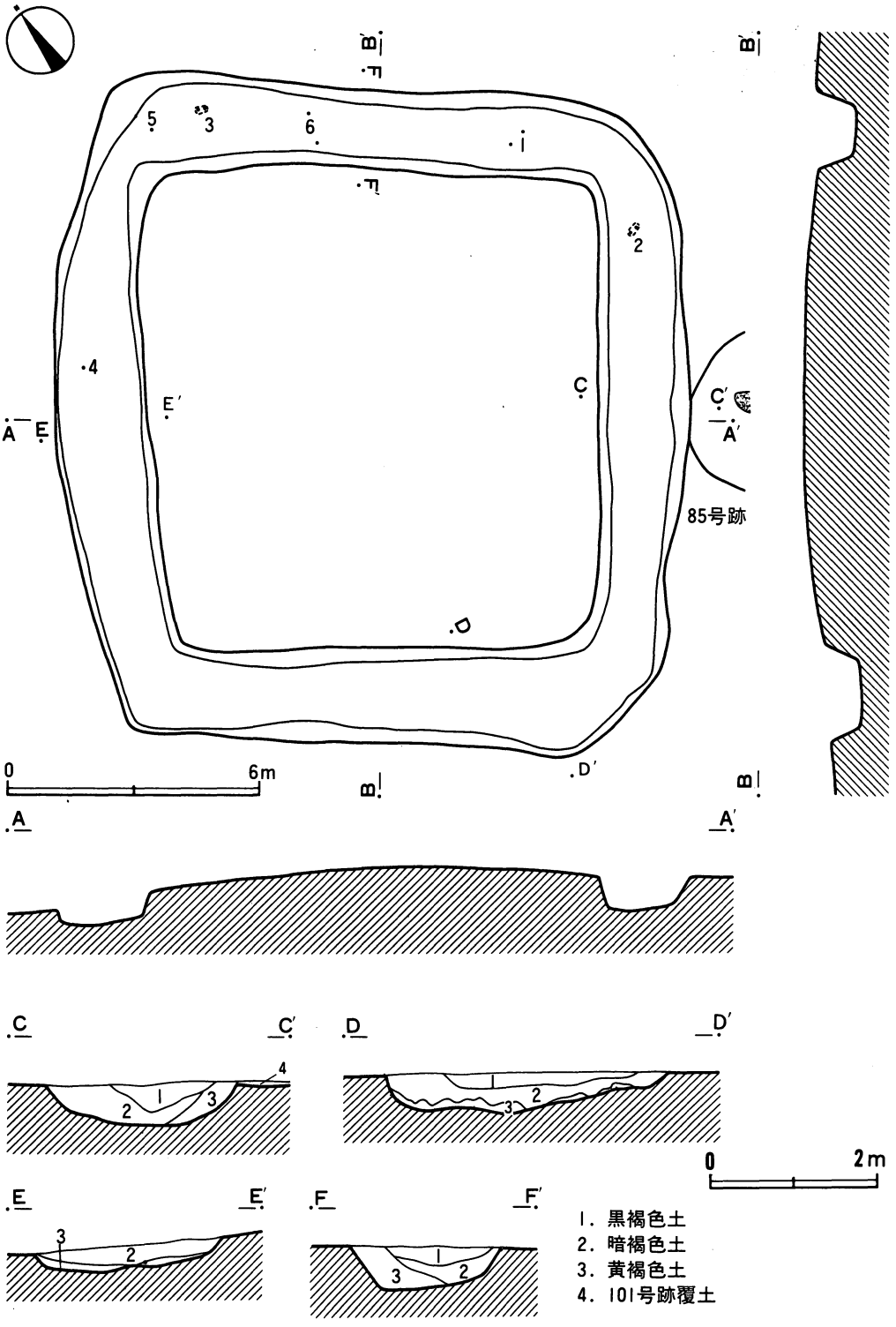
99号跡の北東に近接して存在する方形周溝(墓)で、東側で85号跡を切る。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

台状部は東西10.8m、南北11.2mを測り、方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は東西15.4m、南北16mを測る。周溝外周の輪郭は、基本的には隅丸の方形を呈するが、西側はやや胴張りとなる。周溝の幅は1.6～2.4mとやや差がある。周溝の深さは0.2～0.5mを測り、北東コーナー部分を除いて各コーナー部分で浅くなり、各溝の中央部でやや深くなる。溝底は多少凹凸を呈し、周溝内の覆土は3層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

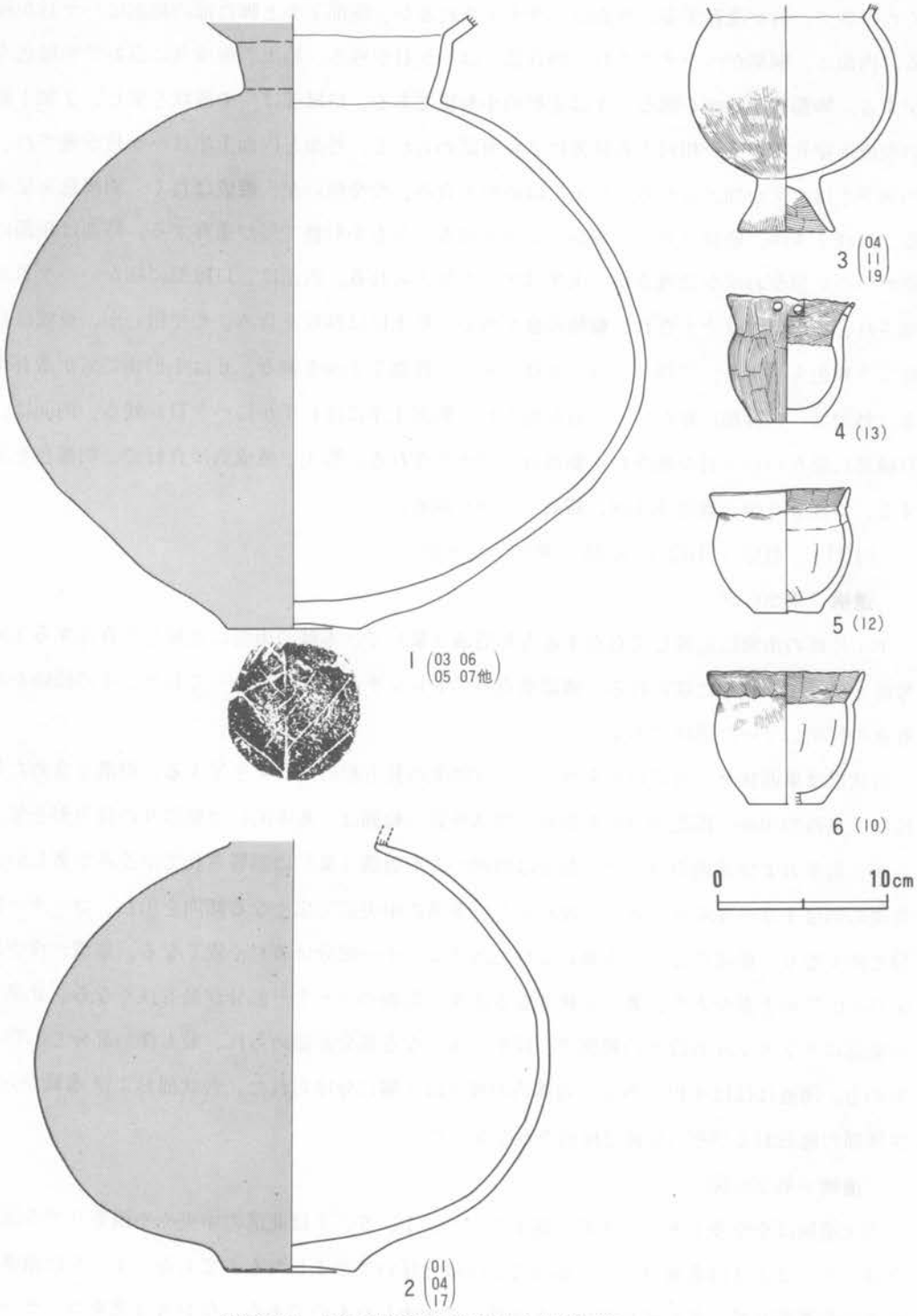
遺物(第204図)

出土遺物はやや多く6点の土器が図示できた。いずれも周溝中から出土したもので、底面よりかなり浮く。1、2は北東コーナー部分で30cm前後浮いて出土したもので、2は確認調査時のトレンチ内出土の破片と接合した。3、5、6は北溝の西側から出土したもので、3は30cm、5は18cm、6は16cm浮いていた。4は西溝のほぼ中央から12cm浮いて出土したものである。

1は口唇部を欠くが⅔遺存する大形の壺で、底部には木葉痕を有する。外面はヘラナデの後ヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。外面は赤彩される。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。内面は明褐色を呈する。底径7.8cmを測る。2は口縁部を欠く壺で⅗が遺存する。外面はヘラナデの後ヘラミガキされ、赤彩される。内面はヘラナデされるが、遺存状態が悪い。胎土、焼土共に良好で、内面は明褐色を呈する。底径7.2cmを測る。3は口縁部を欠



第203図　101(100)号跡実測図(1/160・1/80)



第204図　101(100)号跡出土土器(1/4)

く台付甕で、½が遺存する。外面はヘラナデされるが、胴部下半と脚台部の裾部にハケ目が残る。内面は、胴部がヘラナデされ、脚台部にはハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。脚部径5.6㎝を測る。4は完形の小形甕である。口縁部はやや波状を呈し、2個1組の焼成前穿孔の小孔が相対する位置に2ヶ所認められる。外面と内面上半はハケ目が施され、内面下半はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く、明褐色を呈する。口径7.4㎝、底径3.8㎝、器高7.2㎝を測る。5も小形甕で¾が遺存する。外面は頸部に細かいハケ目がわずかに残るが、大半はナデが加えられる。内面は、口縁部に細かいハケ目が施され、胴部はヘラナデされ、輪積み痕が残る。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良好で黒褐色を呈する。口径8.0㎝、底径3.8㎝、器高7.1㎝を測る。6は小形甕で⅔が遺存する。外面は、口縁部に細かいハケ目が施され、胴部上半にはわずかにハケ目が残る。内面は、口縁部に細かいハケ目が施され、胴部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、明褐色を呈する。口径9.0㎝、底径4.3㎝、器高7.6㎝を測る。

(10)　102（102）号跡（第205・206図）

遺構（第205図）

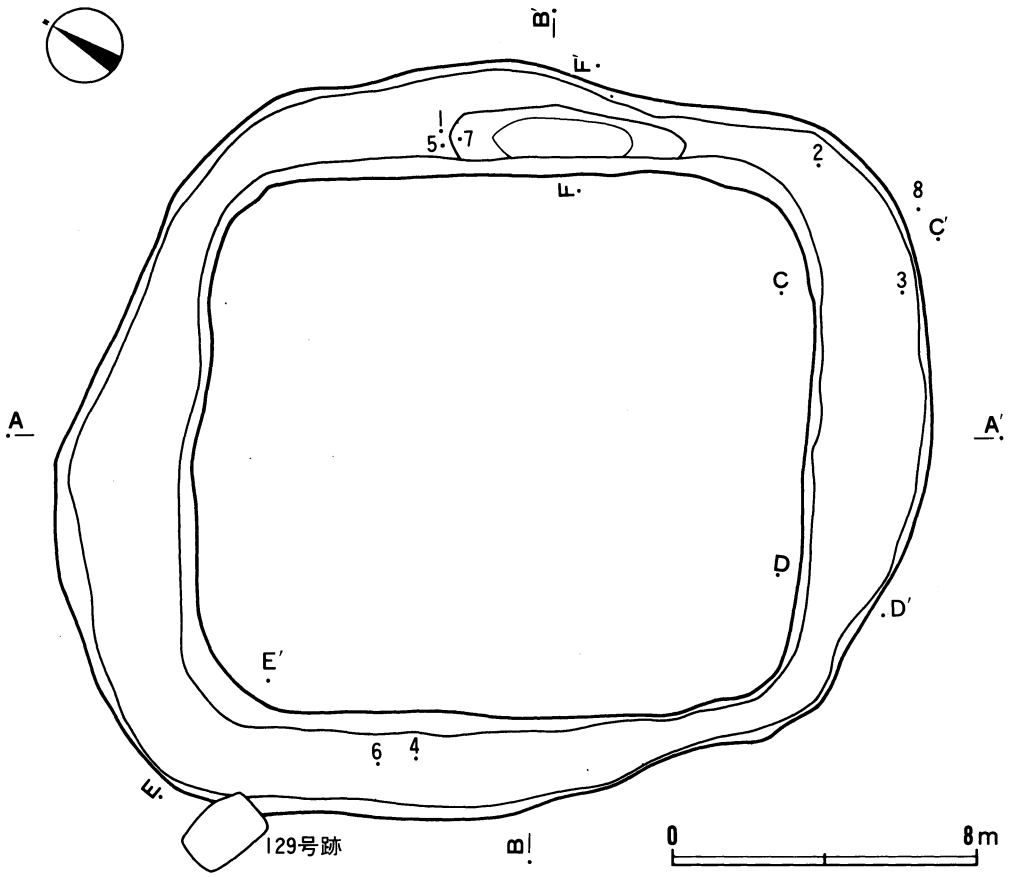
101号跡の南側に近接して存在する方形周溝（墓）で、本跡の南側に近接して存在する100号跡と共に129号跡に切られる。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

台状部は東西16m、南北14mを測り、ほぼ隅丸の長方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は、東西23.0m、南北19.4mを測る。周溝外周の輪郭は、基本的には胴張りの長方形を呈するが、南東および北西のコーナー部分は周囲の方形周溝（墓）に影響されてか歪みが著しい。周溝の幅は1.0～4.6mと著しい差があり、各溝の中央部で広くなる傾向を示し、コーナー部分で狭くなり、前述のように南東および北西のコーナー部分は著しく狭くなる。周溝の深さは0.15～0.55mと差があり、著しく狭くなる南東と北西のコーナー部分が最も浅くなる。北溝の中央部に6.2×1.4mほどの範囲で、緩かに深くなる部分が認められ、最も深い部分で0.75mを測る。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部の施設およびその痕跡は検出されなかった。

遺物（第206図）

出土遺物はやや多く8点の土器が図示できた。1、5、7は北溝の中央やや西寄りで5㎝ほど浮いて、2と3は北東コーナー部分で2㎝ほど浮いて出土したものである。4、6は南溝の中央やや西寄りで、それぞれ20㎝、8㎝浮いて出土したものである。なお8は北東コーナー部分の外側から出土したものであるが、本跡との関係も考えられるので、ここに図示しておく。

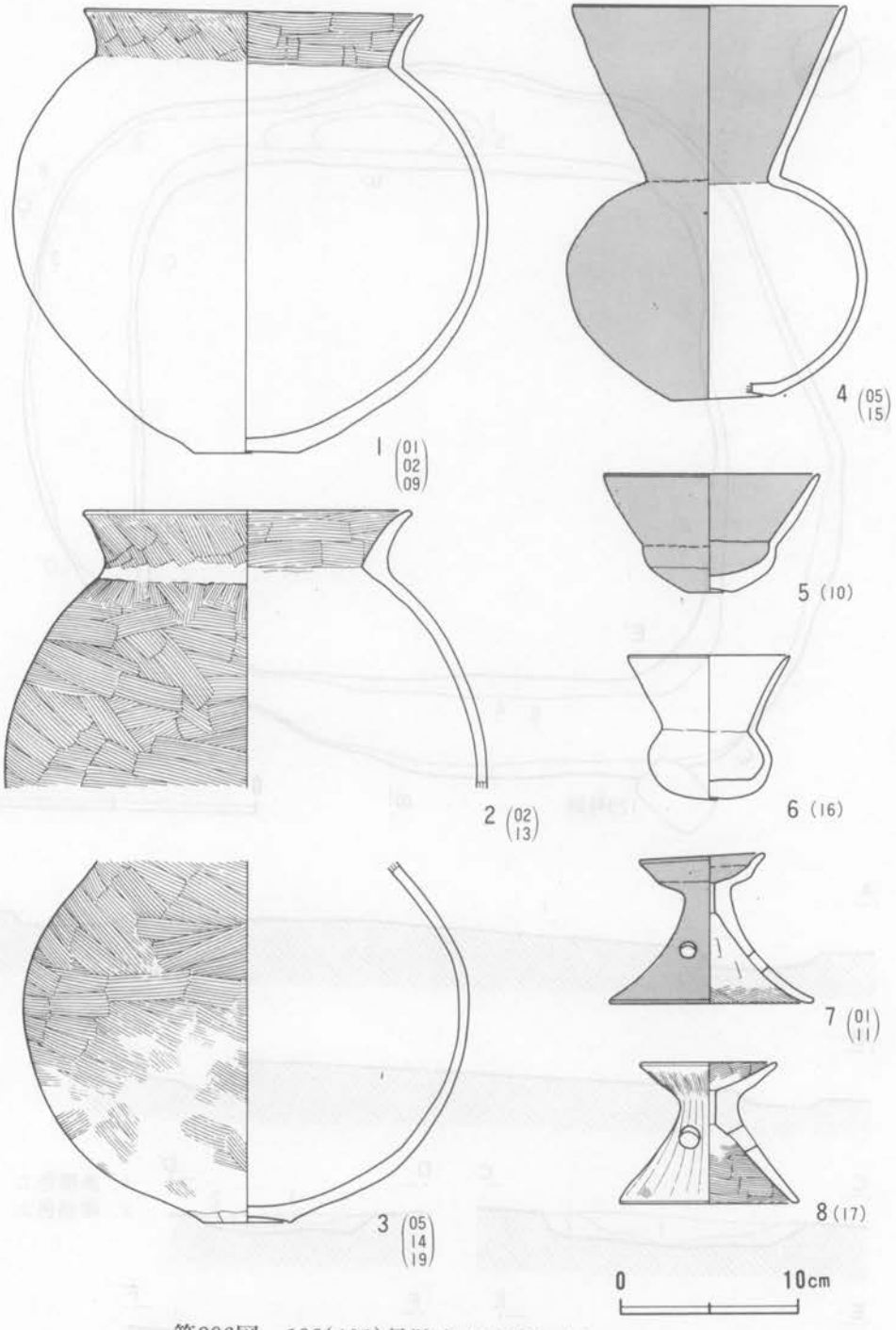
1は甕で、¾が遺存する。口縁部は、内外面共にハケ目が施される。胴部は、外面上半はヘラナデされ、下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を



1. 黒褐色土
2. 暗褐色土

0 2m

第205図　102(102)号実測図(1/200・1/80)



第206図　102(102)号跡出土土器(1/4)

含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈し、口径18.7cm、底径5.8cm、器高24.4cmを測る。2は胴部下半を欠く甕の⅖破片で外面はハケ目が施されるが、頸部はヨコナデによって消される。内面は、口縁部にハケ目が施され、胴部はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径18cmを測る。3は胴部以下遺存する甕の½破片で、底部は完存する。外

面はハケ目が施されるが、下半はヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈し、底径4.9㎝を測る。4は大形の坩で、⅕が遺存する。外面はヘラナデの後ヘラミガキされ、内面はナデが加えられる。外面と口縁部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は褐色を呈する。口径15.3cm、底径5.6㎝、器高21.7cmを測る。5はほぼ完形の小型丸底土器である。外面と体部内面はナデが加えられ、口縁部内面はヘラミガキされる。内外面共に赤彩されるが、外面底部は磨滅が著しく、遺存状態が悪い。胎土、焼成共に良好である。口径11.9cm、底径2.4㎝、器高6.5㎝を測る。6は⅕遺存する小型丸底土器である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。口径9.0㎝、底径1.5㎝、器高7.8㎝を測る。7は⅕遺存する器台である。器受部はナデが加えられる。脚部は、外面が、ヘラミガキされ、内面はヘラナデされるが、裾部にはハケ目が残る。脚孔は3孔穿孔される。外面と器受部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。器受部径6.8㎝、脚径11cm、器高8.0㎝を測る。8は⅗遺存する器台である。外面はヘラケズリされるが、部分的にハケ目が残る。内面にもハケ目が残る。脚孔は3孔で、胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。器受部径7.4㎝、脚径10cm、器高7.7㎝を測る。

(11)　103（110）号跡（第207～210図）

遺構（第207図）

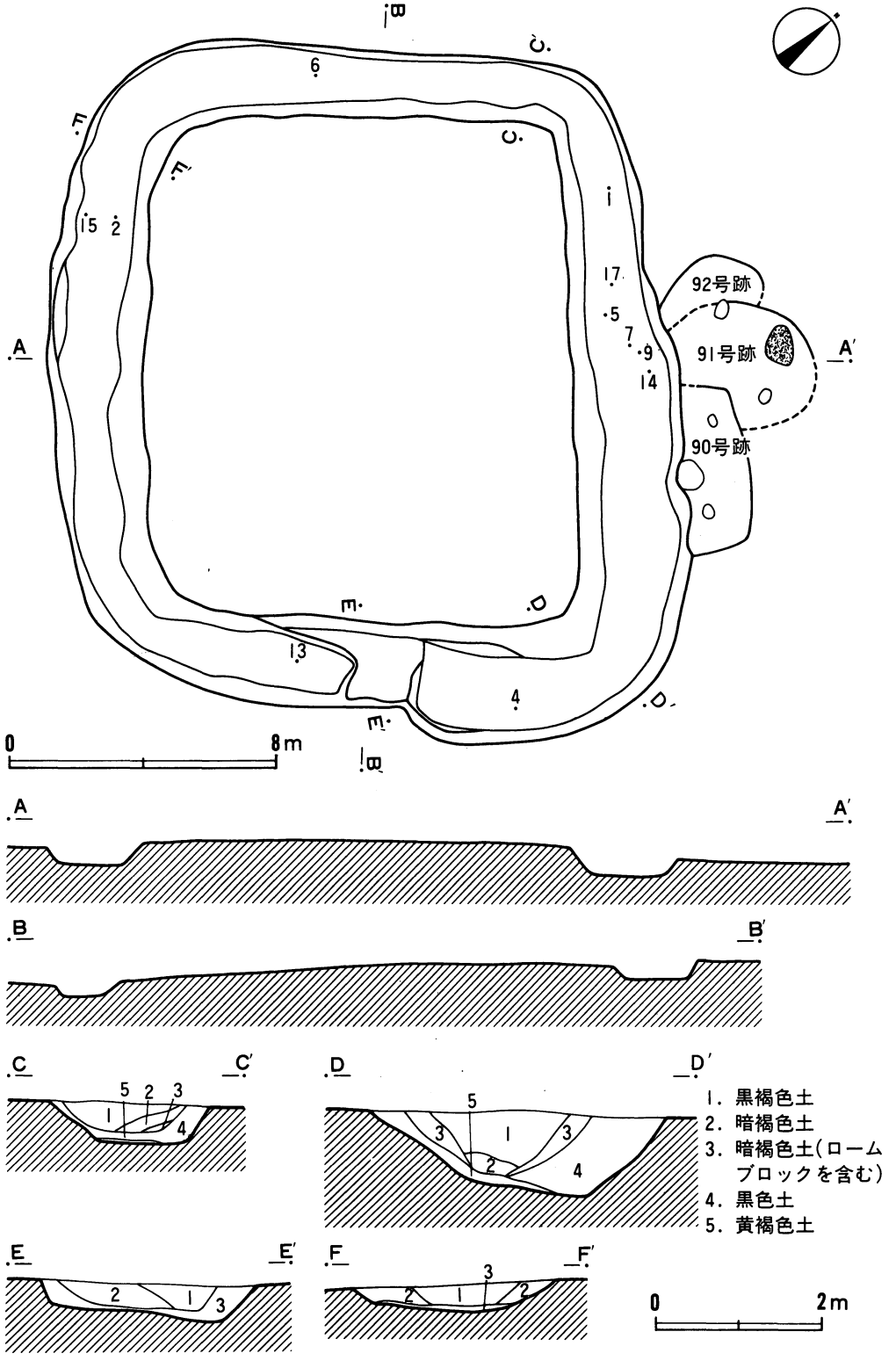
99号跡の北東に近接して存在する方形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。北側で90、91、92という3軒の住居跡を切る。

台状部は東西15m、南北13mを測り、隅丸の長方形のプランを呈する。周溝を含めた規模は東西19.5m、南北19.1mを測る。周溝外周の輪郭は、基本的には隅丸の長方形であるが、北東コーナー部分でやや膨らむ。周溝の幅は、2.0～3.4mと差がある。周溝の深さは0.35～1.0mと差がある。東溝の中央はやや浅くなるが、その東側では深さを増し、1.0mを測る。溝底は多少凹凸を呈する。周溝内の覆土は5層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

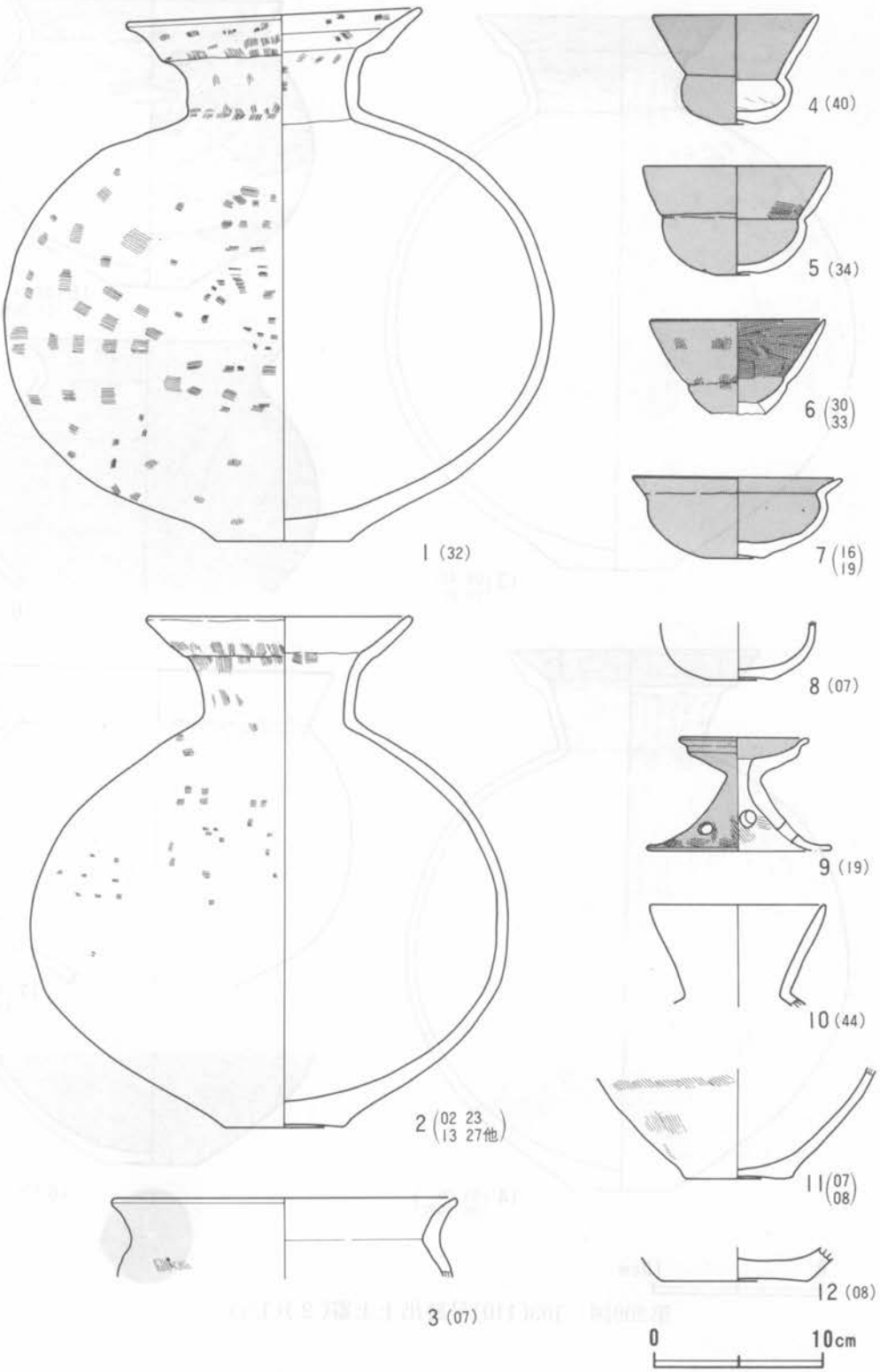
遺物（第208～210図）

出土遺物は多く20点の土器が図示できた。いずれも周溝内から出土したものである。1、2、6は底面より5㎝、20cm、16cm浮いて出土したものである。4、5、7、9は底面直上から出土したもので、3、8、10～12は覆土中から出土したものである。

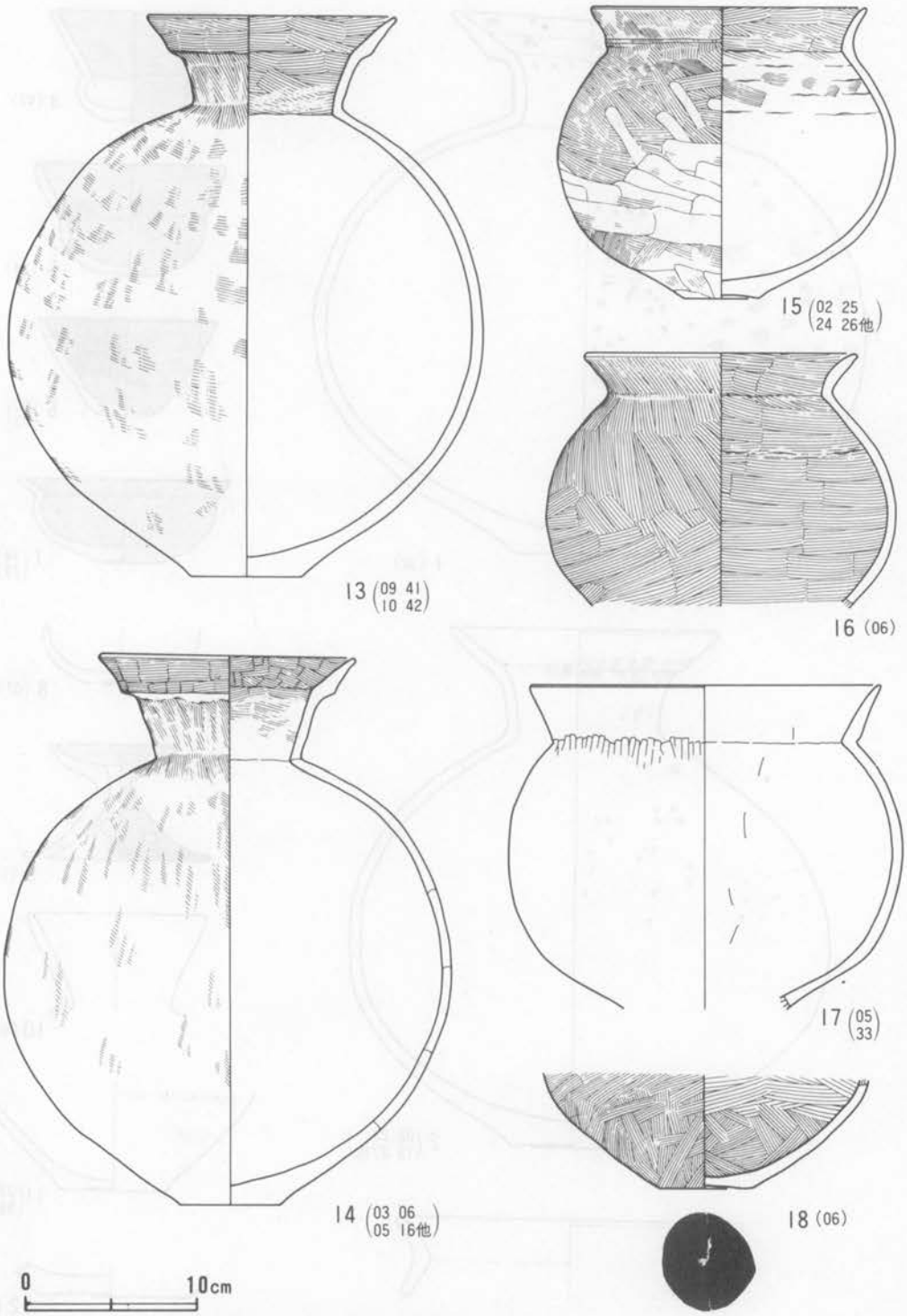
1は⅕遺存する壺である。外面と口縁部内面は、ハケ目を施した後ヘラナデされる。内面はナデが加えられるが、器面の遺存状態は極めて悪い。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈する。口径17.3cm、底径8.0㎝、器高30.8cmを測る。2は⅗遺存する壺



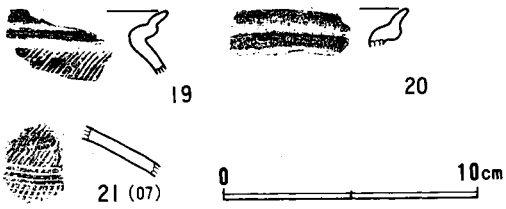
第207図　103(110)号跡実測図(1/200・1/80)



第208図　103(110)号跡出土土器(１)(1/4)



第209図　103(110)号跡出土土器(２)(1/4)



第210図　103(110)号跡出土土器(３)(1/3)

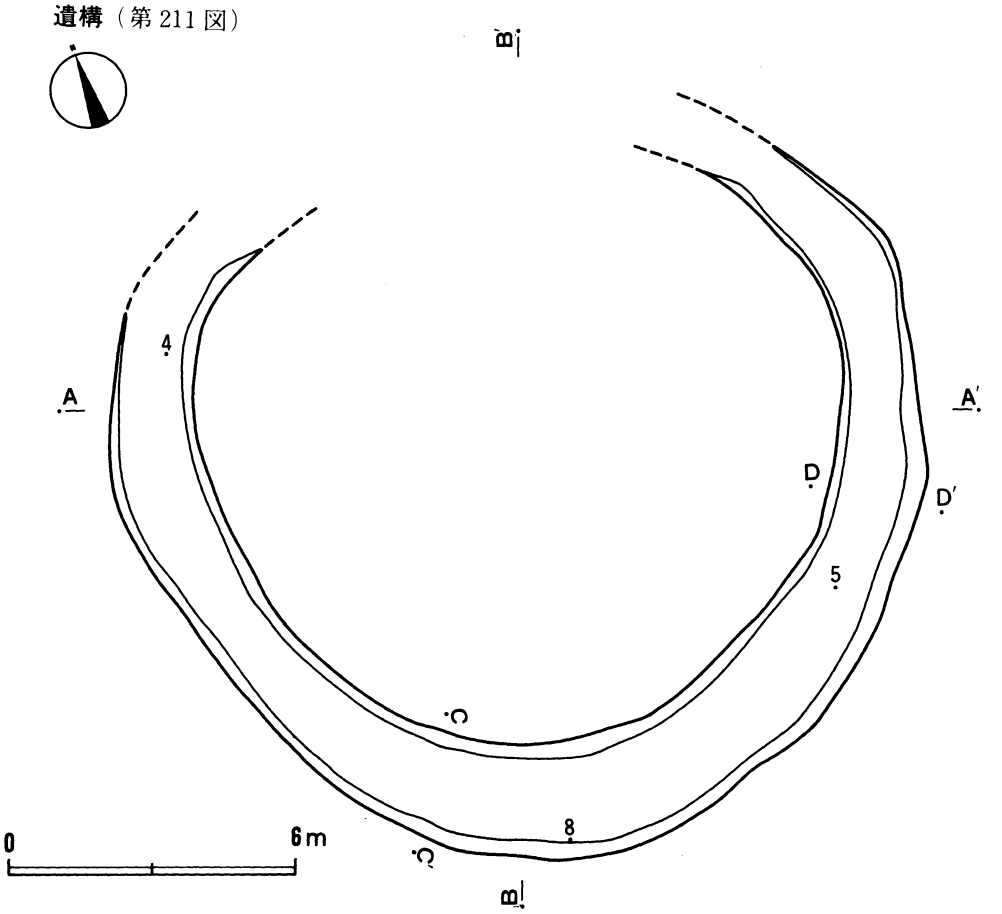
である。外面はヘラナデされるが、部分的にハケ目が残る。内面は、ナデが加えられるが頸部にはわずかにハケ目が残る。胴部内面は遺存状態が悪い。胎土、焼成共に良好で、明褐色を呈する。口径15.5cm、底径7.2cm、器高29.7cmを測る。３は甕の口縁部の½破片で胴部の外面はヘラナデされるが、わずかにハケ目が残る。内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈し、口径20.6cmを測る。４はほぼ完形の小型丸底土器である。外面と口縁部内面はヘラケズリの後ヘラミガキされ、赤彩される。体部内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は褐色を呈する。口径9.8cm、底径2.2cm、器高6.5cmを測る。５もほぼ完形の小型丸底土器である。体部外面はヘラケズリされる。体部内面を除きヘラミガキされるが、口縁部内面にはハケ目が残る。体部内面はヘラナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径13cm、底径2.4cm、器高6.5cmを測る。６は底部を欠く小型丸底土器で⅔が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラミガキされるが、わずかにハケ目が残る。内面は、口縁部にはハケ目が残り、体部はヘラミガキされる。内外面共に赤彩される。底部には焼成後の穿孔が認められる。胎土、焼成共に良好である。口径は10.4cmを測る。７は¾遺存する坏である。内外面共にヘラケズリの後ヘラナデされ、赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径12.4cm、底径3.2cm、器高4.8cmを測る。８は小型丸底土器の⅔破片で、外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐色を呈し、底径3.6cmを測る。９は¾遺存する器台である。内外面共にヘラナデされるが、部分的にハケ目が残る。外面と器受部内面は赤彩される。脚孔は３孔を２段に穿孔される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は褐色を呈する。器受部径7.7cm、脚径10.9cm、器高6.6cmを測る。10は壺の口縁部で⅓破片である。内外面共にヘラケズリの後ヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、黄褐色を呈する。口径は10.4cmを測る。11は壺の胴部下半～底部の⅛破片で底部は完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされるが、部分的にハケ目が残る。内面はヘラケズリの後ヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く焼成もやや悪い。黄褐色を呈し、底径6.3cmを測る。12は底部で、内外面共にヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。褐色を呈し、底径8.6cmを測る。13は⅕遺存する壺である。外面はハケ目が施されるが、ナデによって大半が消される。内面は、口縁部～頸部にかけてハケ目が施されるが、部分的にナデによって消される。胴部はナデが加えられる。胎土・焼成共に良好で明褐色を呈する。口径14.3cm、底径6.4cm、器高32.4cmを測る。14も壺で⅘が遺存する。口縁部には、内外面共にハケ目が施される。頸部にもハケ目が施されるが、ヘラナデによって部分的に消される。胴部は、ハケ目が施されるが、大半はヘラナデによって

消される。内面はヘラナデされる。胎土・焼成共に良好で、明褐色を呈する。口径14.8cm、底径5.8cm、器高31.3cmを測る。15は$\frac{3}{5}$遺存する甕である。外面はハケ目を施した後ヘラナデされるが、底部近くはヘラケズリされる。内面は、口縁部にハケ目が施される。胴部はヘラナデされるが、上半にはハケ目が残り、輪積み痕が認められる。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。口径16cm、底径4.4cm、器高17cmを測る。16は底部を欠く甕の$\frac{1}{2}$破片で内外面共にハケ目が施される。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径は15.6cm cmを測る。17も底部を欠く甕で$\frac{3}{5}$が遺存する。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、胴部内面もヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈し、口径20.4cmを測る。18は甕の胴部下半～底部の$\frac{1}{8}$破片で底部は完存する。内外面及び底部にハケ目が施される。胎土、焼成共に良好で暗褐色を呈する。底径は5.3cmを測る。19～21はS字状口縁台付甕の破片である。19と20は口縁部で、19は胴部外面にハケ目が施され頸部内面にもハケ目が認められる。20は頸部内面にわずかにハケ目が認められる。内面と口唇部外面は赤彩される。21は胴部上半で、斜位のハケ目を施した後、横位のハケ目が施される。

3. 円形周溝（墓）と出土土器

（1） 104（020）号跡（第211・212図）

遺構（第211図）



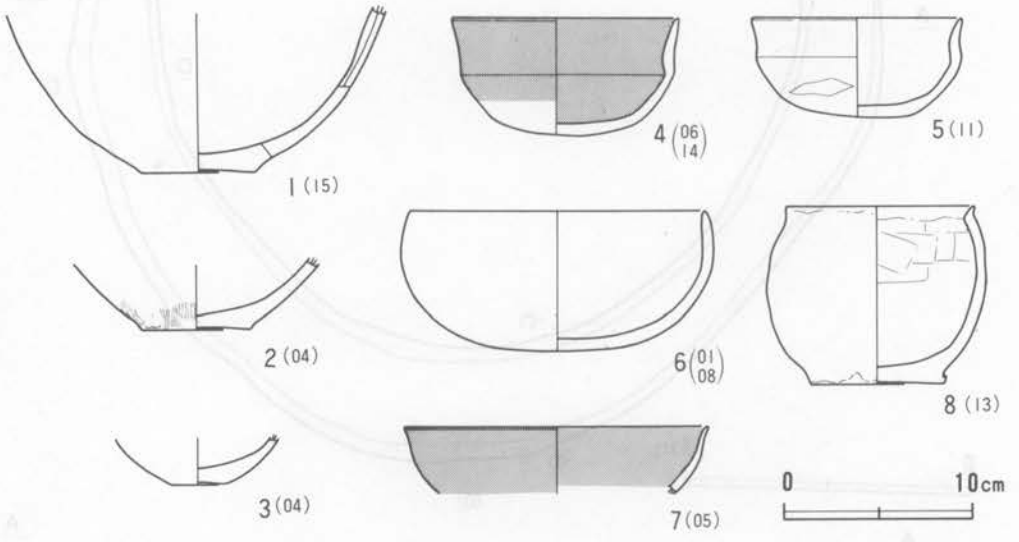
第211図　104(020)号跡実測図(1/160・1/40)

今回の調査区の中央北側の斜面に位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

北側の周溝を斜面によって失っているため全形をつかむことはできないが、ほぼ径17.2m前後の円形のプランを呈するものと思われる。周溝の幅は1.4～2.5mと差がある。周溝の深さも0.2～0.4mとやや差があり、北側が相対的に浅くなる。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は3層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

遺物（第212図）

出土遺物はやや多く8点の土器が図示できた。1～3、6、7は周溝内覆土中出土のものである。4と5はそれぞれ底面より8.0cm、10cm浮いて出土したもので、8は底面直上出土のものである。



第212図　104(020)号跡出土土器(1/4)

1は胴部下半が⅔遺存する甕である。輪積み成形で、胴部中位はさらに内外から2枚の粘土帯を貼り合わせている。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面もヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、淡褐色を呈する。底径は6.0cmを測る。2も底部で½が遺存する。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目がわずかに残る。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。底径は5.8cmを測る。3も底部で⅔が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径は2.8cmを測る。4は⅕遺存する坏である。体部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面もヘラナデされる。口縁部はヨコナデされ、底部を除く外面と内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。口径11cm、器高6.0cmを測る。5はほぼ完形の坏である。体部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈

する。口径11cm、器高5.1cmを測る。6は½遺存する坏である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口唇部はヨコナデされる。胎土　焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.6cm、器高7.1cmを測る。7は坏の¼破片で、内外面共にヨコナデされ、赤彩される。胎土、焼成共に良好で、口径16.0cmを測る。8はほぼ完形の甕である。外面は粗くヘラナデされ、内面もヘラナデされる。口唇部はヨコナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径9.4cm、底径7.0cm、器高9.1cmを測る。

（2）　105（023）号跡（第213・214図）

遺構（第213図）

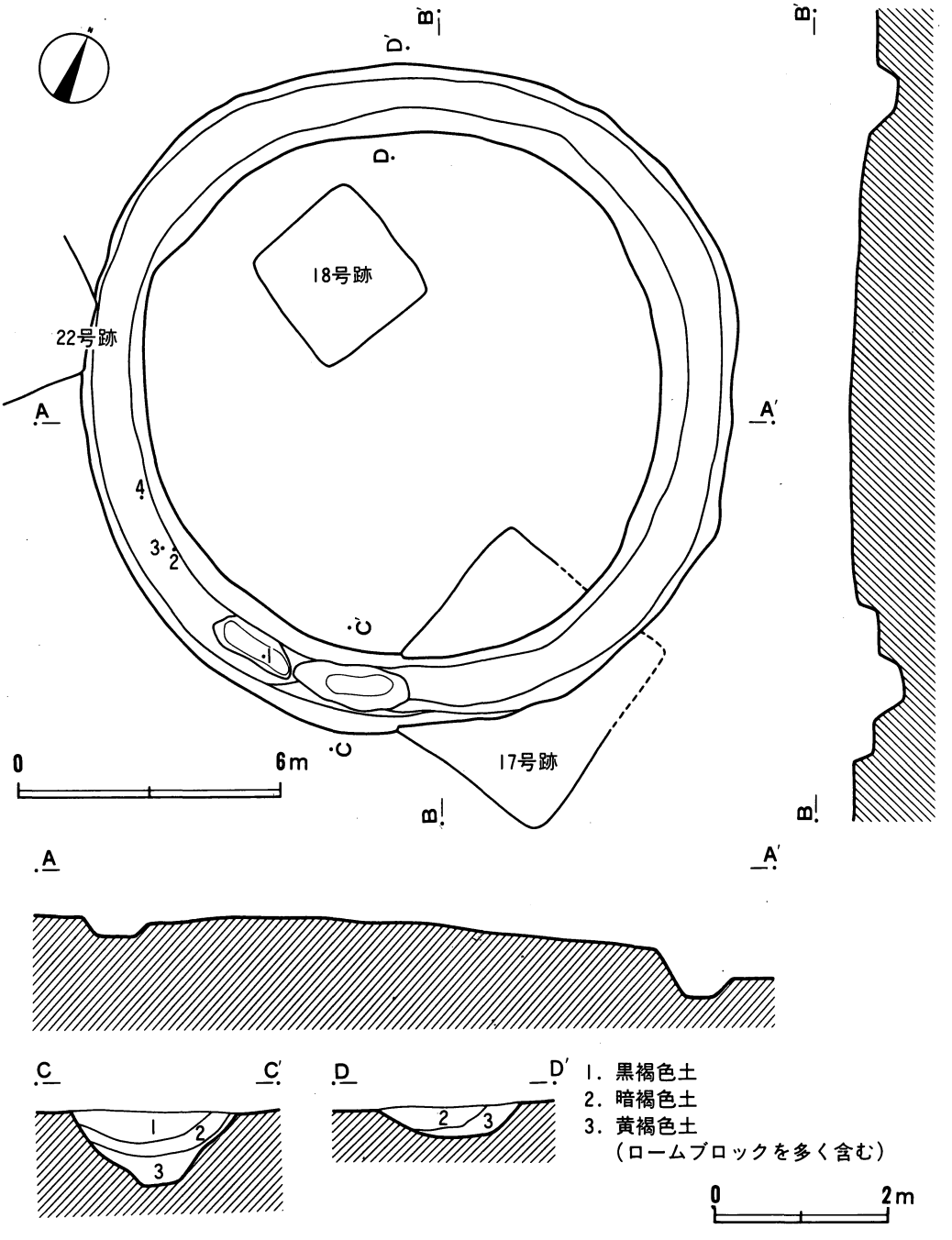
104号跡の南東3mに位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。南側で17号跡を西側で22号跡を切る。

プランは、径15.2mほどの円形を呈する。周溝の幅は1.1～2.0mと差がある。周溝の深さも0.3～0.6mと差があり、南側が深くなる。溝底はやや凹凸に富む。周溝内の覆土は3層に分けられた。南側の溝底で長楕円形の掘込みが2ヶ所検出された。東側のものは2.8×1.0m西側のものは2.0×0.68mを測り、いずれも周囲の周溝より0.2mほど深くなる。底面は凹凸を呈する。

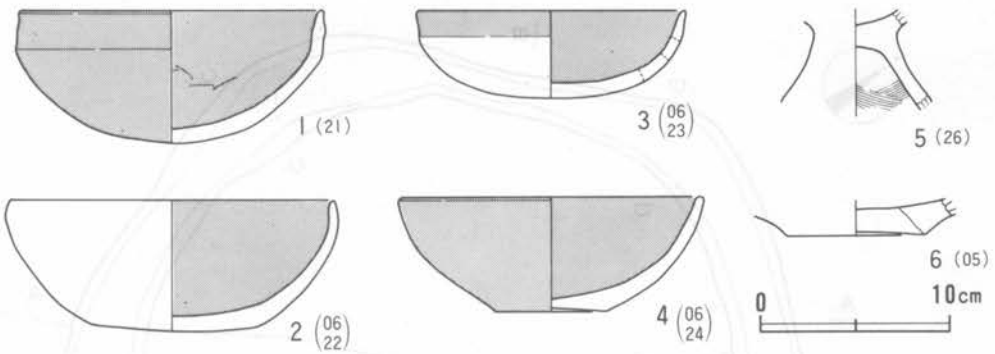
遺物（第214図）

出土遺物はやや多く6点の土器が図示できた。南側の周溝から出土が目立つ。1は西側の掘込みの底面から5.0cm浮いて出土したものである。2～4は南側の周溝でそれぞれ底面から10cm、4.0cm、5.0cm浮いて出土したものである。5、6は覆土中から出土したものである。

1は完形の坏である。体部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好で口径15.8cm、器高7.0cmを測る。2はほぼ完形の坏である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラミガキされ、赤彩される。胎土、焼成共に良好で、外面は赤褐色を呈する。口径17cm、底径8.8cm、器高6.8cmを測る。3は¾遺存する坏である。体部外面はヘラケズリの後粗くヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。口縁部外面と内面は赤彩される。胎土　焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径14cm、器高4.6cmを測る。4は⅕遺存する坏である。外面はヘラケズリの後入念にヘラナデされ、内面はナデが加えられる。内外面共に赤彩される。胎土；焼成共に良好で口径15.8cm、底径5.8cm、器高6.0cmを測る。5は器台の破片で、外面はヘラミガキされる。内面はナデが加えられるが、ハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で、赤褐色を呈する。最大径は8.0cmを測る。6は½遺存する底部破片で、外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。底径7.2cmを測る。



第213図　105(023)号跡実測図(1/160・1/80)



第214図　105(023)号跡出土土器(1/4)

（３）　106（024）号跡（第215・216図）

遺構（第215図）

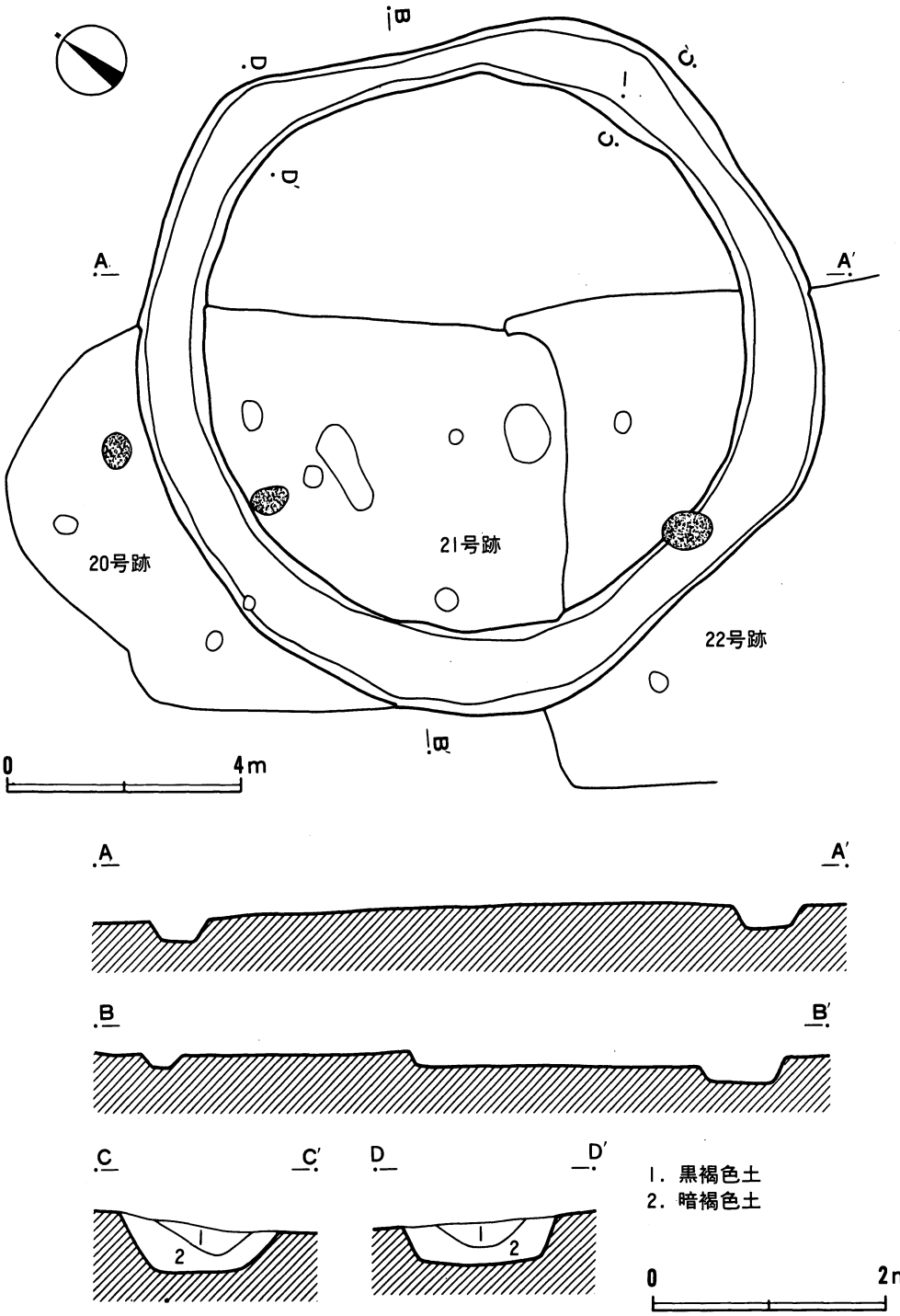
105号跡の西側に近接して存在する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。20、21、22号跡という３軒の住居跡を切る。

プランは、径12.0ｍほどのやや不整な円形を呈する。周溝の幅は0.7～1.5ｍと差があり、北側と東側で狭くなる。周溝の深さは0.3～0.4ｍとほぼ一定している。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は２層に分けられた。台状部および溝底からは主体部の施設およびその痕跡は検出されなかった。

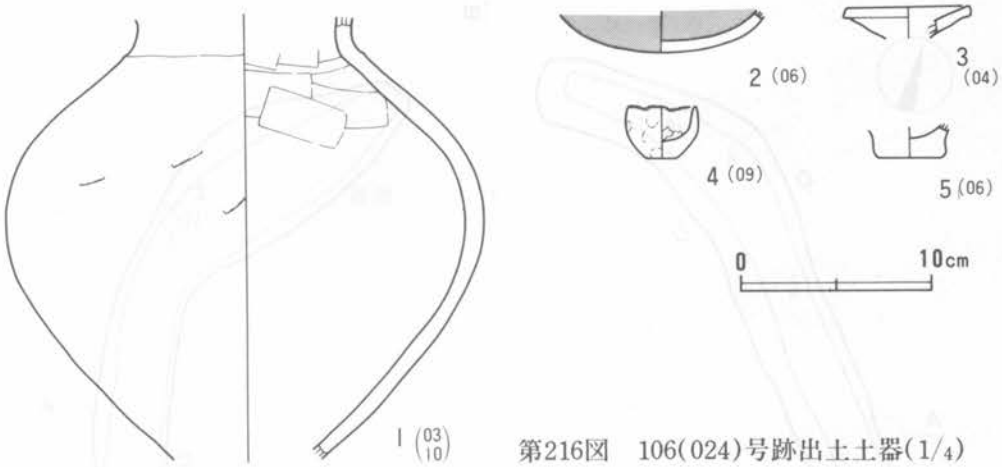
遺物（第216図）

出土遺物はやや多く５点の土器が図示できたが完形品はない。１は北側の周溝で底面より15cm浮いて出土したものである。その他は覆土中から出土したものである。

１は口縁部と底部を欠く甕で¾が遺存する。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。頸部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。最大径は25cmを測る。２は坩の底部で⅔が遺存する。外面はヘラナデされ、内面はヘラナデの後ヘラミガキされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。３は器台の器受部で½が遺存する。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。器受部径6.4cmを測る。４は手づくね土器で⅔が遺存する。内外面共にナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径3.6cm、器高2.8cm、底径1.4cmを測る。５はミニチュア土器の底部で½が遺存する。内外面共にヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈し、底径3.5cmを測る。



第215図　106(024)号跡実測図(1/120・1/60)



第216図　106(024)号跡出土土器(1/4)

（４）　107（035）号跡（第217・218図）

遺構（第217図）

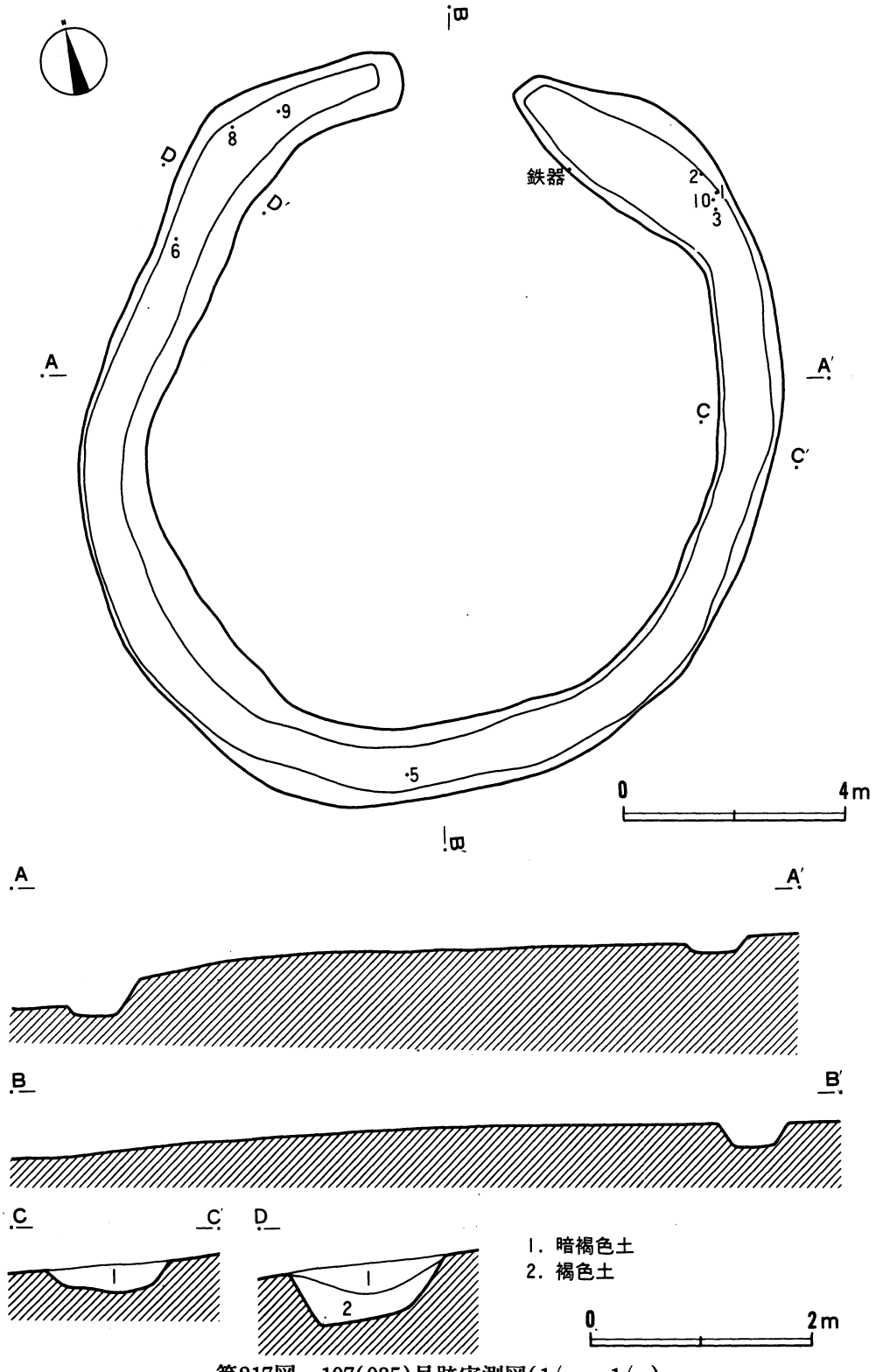
106号跡の西側32ｍに位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

プランは、径13.0ｍほどのやや長円形を呈するが、北側で周溝が途切れる。周溝の幅は1.0～2.0ｍとかなり差がある。周溝の深さも0.2～0.5ｍと差がある。溝底はやや凹凸に富む。周溝内の覆土は２層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

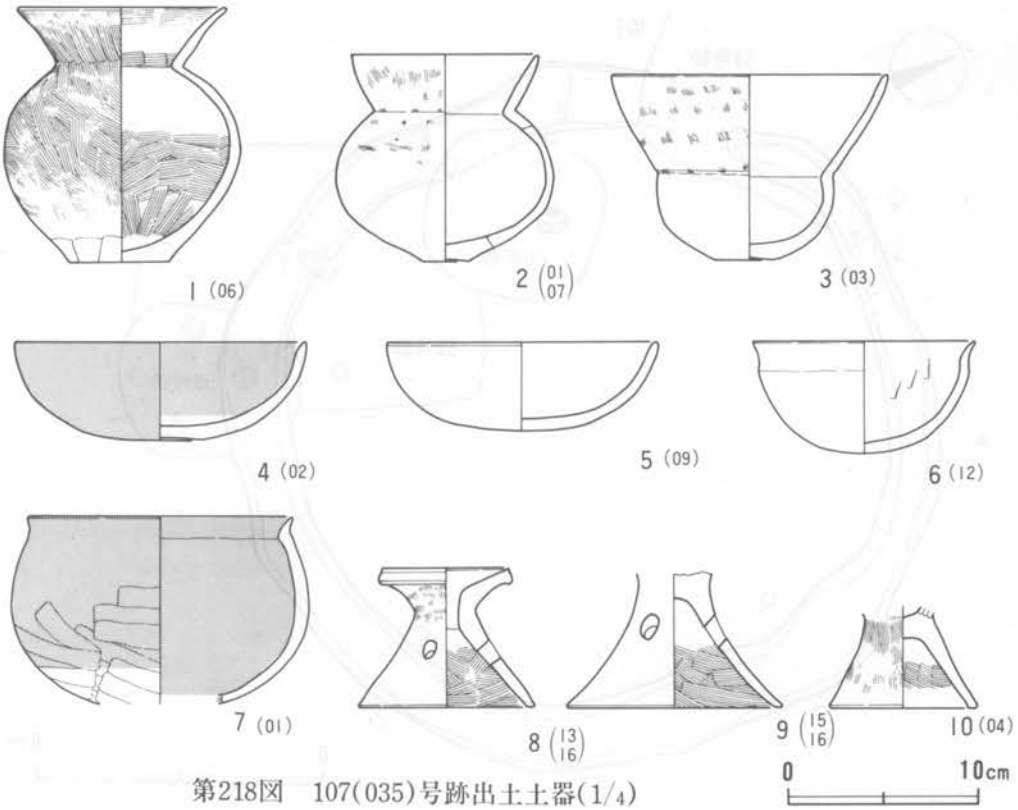
遺物（第218図）

出土遺物は多く10点の土器が図示できた。１、２、３、10は周溝の東側で出土したもので、１、10は底面直上出土であるが、２は18cm、３は15cm浮いて出土した。５は周溝の南側で9.0cm浮いて出土したものである。６、８、９は周溝の西側で、それぞれ20cm、40cm、45cm浮いて出土したものである。４、７は覆土中から出土したものである。この他周溝の東側で20cm浮いて鉄製品が１点出土している。

１は口縁部が強く外反する壺で、ほぼ完形である。器面は内外面共にハケ目が施され、その上をヘラナデされる。胴部下半はヘラケズリされ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径10.8cm、底径5.2cm、器高13.4cmを測る。２は小形の壺で¾程遺存する。外面はハケ目を施した後ナデが加えられているため、ハケ目は痕跡的である。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈するが、胴部上半を中心に火を受けているため器面の荒れが著しい。口径9.8cm、底径2.4cm、器高11cmを測る。３は坩で、¾程遺存する。外面上半部はハケ目の上をヘラナデされる。下半部はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はナデが加えられている。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径14.3cm、底径2.9cm、器高9.8cmを測る。４は坏の⅓の破片である。内外面共に入念なナデが施される。内面の一部を除いて赤彩される。胎土、



第217図　107(035)号跡実測図(1/120・1/60)



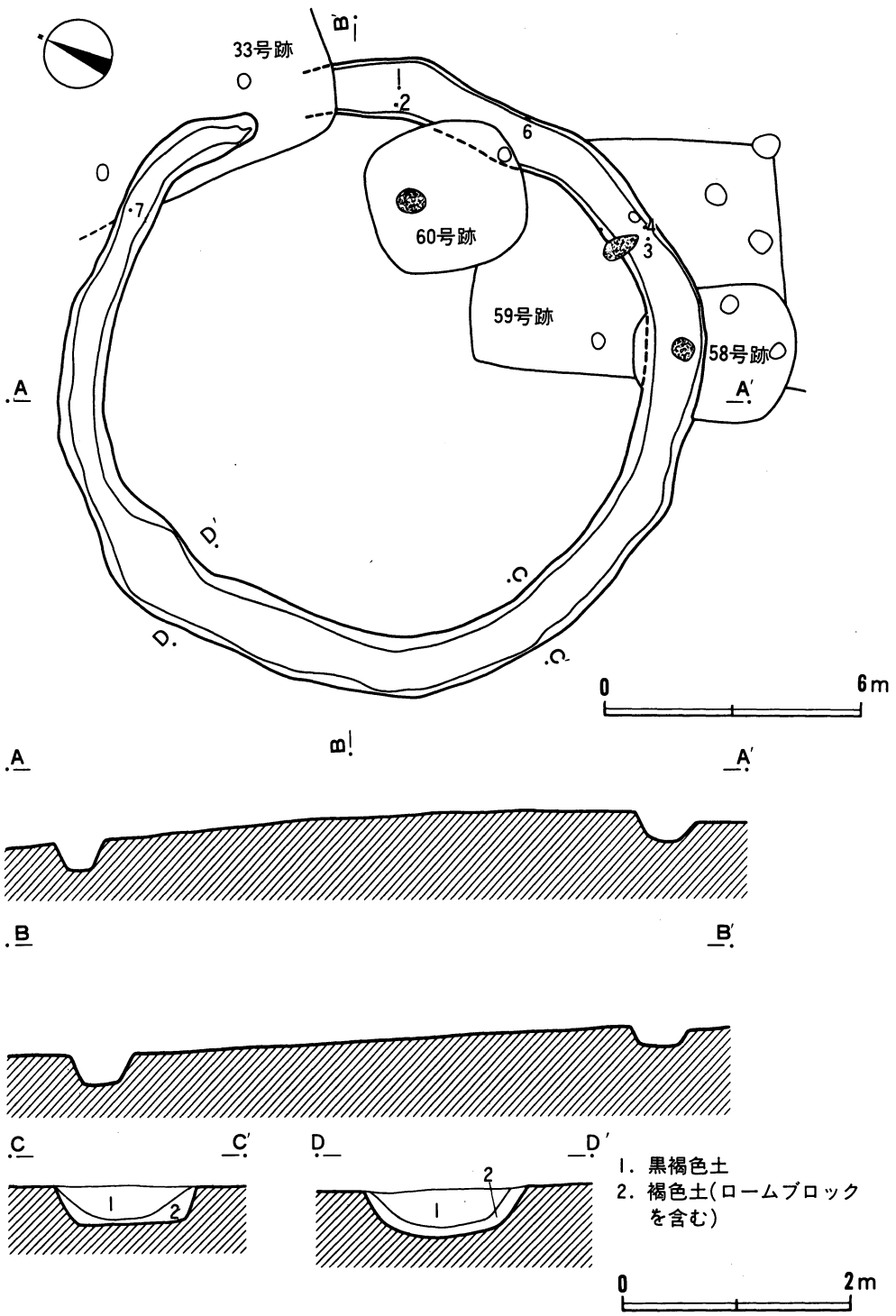
第218図　107(035)号跡出土土器(1/4)

焼成共に良好で、口径15.2cm、器高5.1cmを測る。5も坏でほぼ完形である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられている。内面はナデが加えられている。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径14.2cm、器高4.6cmを測る。6は口唇部が外反する完形の鉢である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面もヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径11.6cm、器高5.8cmを測る。7はやや大形の埦で½の破片である。外面はヘラケズリされ部分的にヘラナデされる。内面はナデが加えられる。外面の一部を除き赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径13.6cm、器高9.6cmを測る。8は器台の⅓の破片である。器受部外面は細かいハケ目の上をナデが加えられる。脚部外面はヘラミガキされる。脚部内面にはやや粗いハケ目が施されている。脚孔は3孔を穿つ。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。器受部径6.6cm、脚径9.2cm、器高7.1cmを測る。9も器台で⅗の破片である。外面はヘラミガキされ、内面はハケ目が施される。脚孔は3孔で、胎土、焼成共に良好で、黒褐色を呈する。脚径11.2cmを測る。10は台付甕の脚台部の¾の破片である。内外面共ハケ目の上をナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。脚径7.6cmを測る。

(5)　108(039)号跡(第219・220図)

遺構(第219図)

107号跡の南側3.0mに位置する円形周溝(墓)である。確認調査時のトレンチが周溝にか



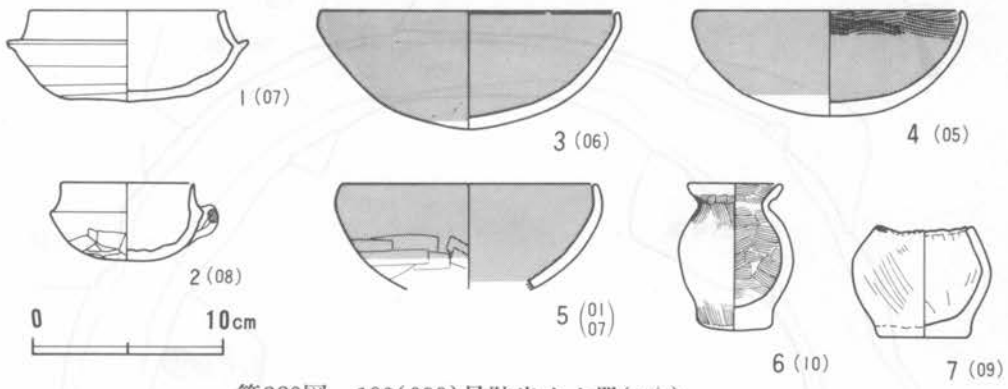
第219図　108(039)号跡実測図(1/160・1/60)

かっていたが、確認できなかった遺構である。33、57、59、60号跡という4軒の住居跡を切る。

プランは、径15.2mほどの円形を呈する。北側で107号跡と同様に周溝が途切れるものと思われるが、33号跡との重複により確認することはできなかった。周溝の幅は0.8～1.8mとか

なり差がある。周溝の深さも0.25～0.6mと差がある。また、溝底はほぼ平坦で、周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

遺物（第220図）



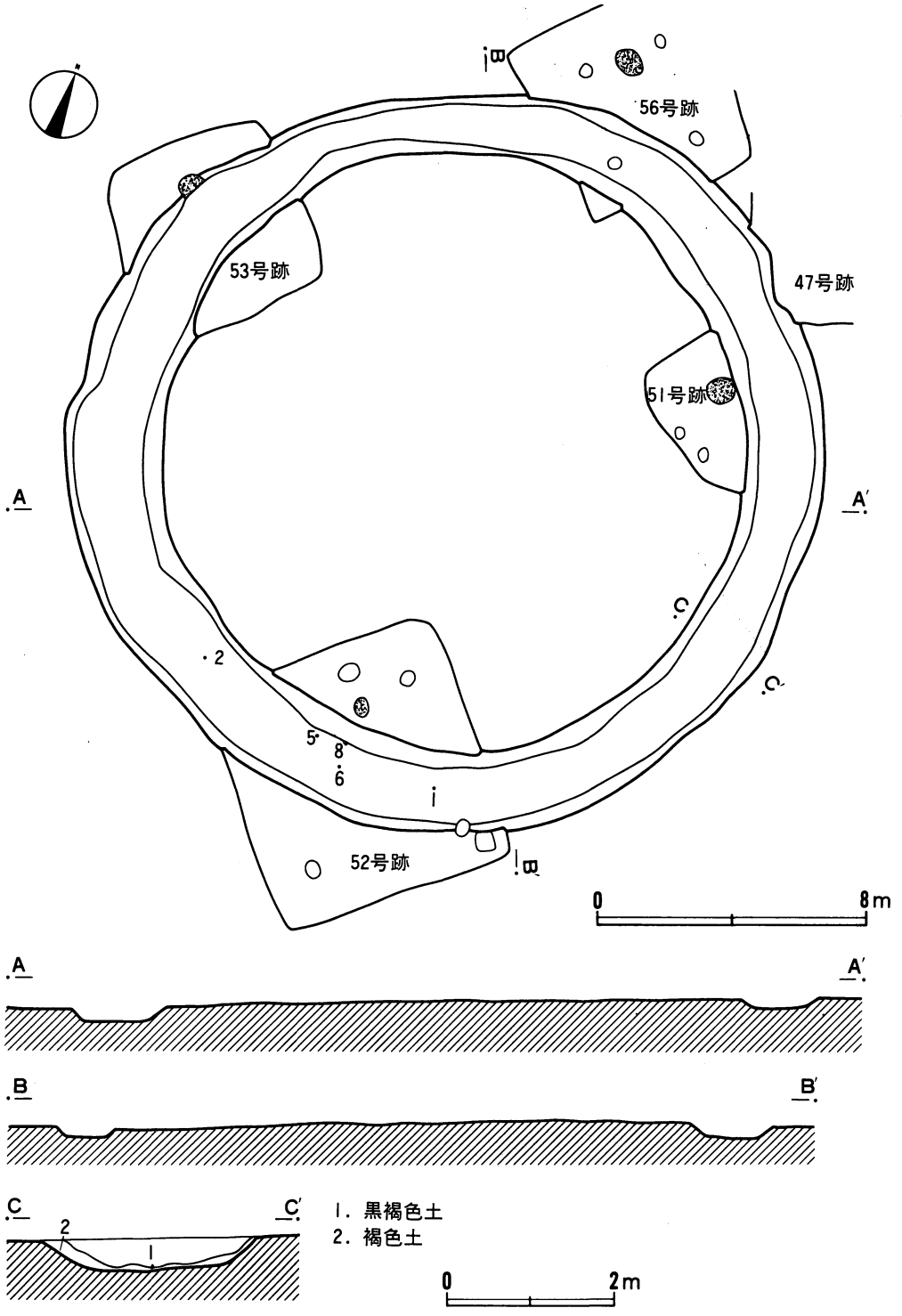
第220図　108(039)号跡出土土器(1/4)

出土遺物は比較的多く7点の土器が図示できた。周溝の東側からの出土が目立つ。1、2、6はそれぞれ底面から8.0cm、16cm、20cm浮いて出土したものである。3、4は底面から2.0cm浮いて出土した。7は28cm浮いて出土したもので、5は覆土中から出土したものである。

1は須恵器の坏で口縁部をわずかに欠失するのみでほぼ完形である。底部外面⅔は回転ヘラケズリされ、体部内面はナデ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で淡青灰色を呈する。口径11cm、器高4.9cmを測る。2も須恵器で完形の把手付埦である。体部中位に輪状の把手を貼付する。底部外面はヘラケズリが残る。口縁部はヨコナデされ、内面にわずかに自然釉がかかる。胎土、焼成共に良好で暗青灰色を呈する。口径6.9cm、器高4.0cmを測る。3は完形の坏である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデされる。底部外面のわずかな部分を除いて赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径15.7cm、器高6.2cmを測る。4も完形の坏である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラミガキされる。口縁部内面にはハケ目が残り、ヨコナデされる。底部外面を除いて赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈するが外面は火を受けているため遺存状態は悪い。5は坏の½の破片である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされており、下半部にはヘラケズリが残る。内面は入念にヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。底部外面を除いては赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径は13.4cmを測る。6は壺形のミニチュア土器で、口縁部を若干欠失するのみでほぼ完形である。内外面共に細かいハケ目を施した後ナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径4.8cm、底径3.6cm、器高7.6cmを測る。7は手づくね土器で⅕が遺存する。外面は粗いハケ目の上をナデが加えられる。内面はヘラナデされる。胎土はやや粗いが、焼成は良好で明褐色を呈する。口径5.0cm、底径4.6cm、器高5.8cmを測る。

（６）　109（047）号跡（第221・222図）

遺構（第 221 図）



第221図　109(047)号跡実測図(1/200・1/80)

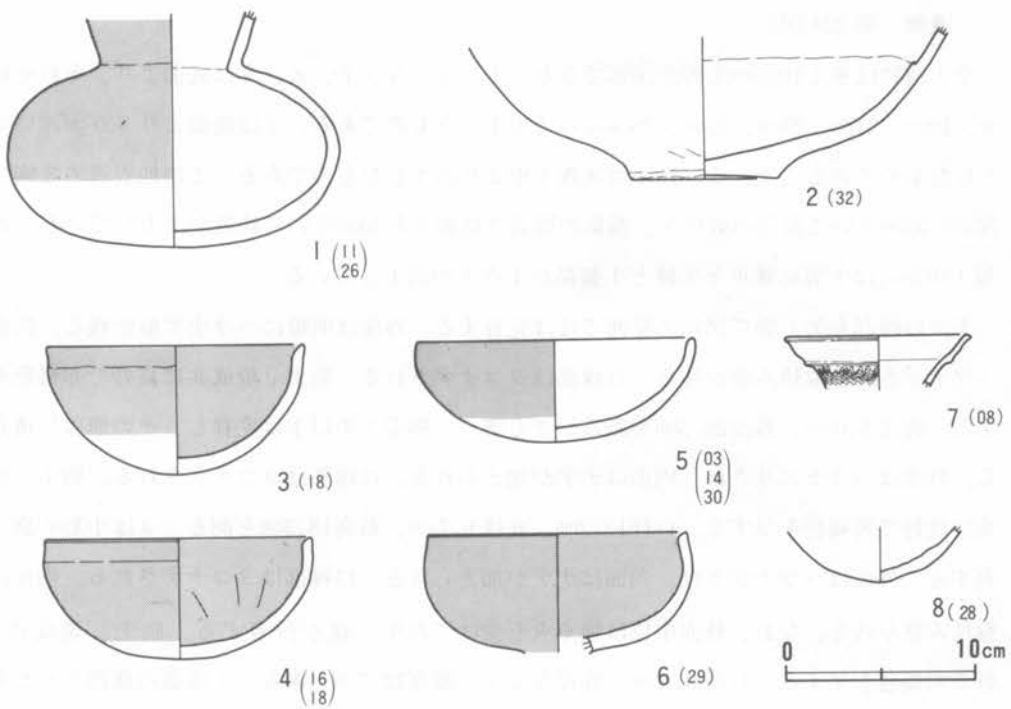
108号跡の南東側15mに位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

プランは径約22mの円形を呈する。周溝の幅は1.7～3.0mとやや差がある。周溝の深さは0.3～0.5mを測り、あまり差はない。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

遺物（第222図）

出土遺物はやや多く8点の土器が図示できた。周溝の南側から集中して出土する。1、2、5、6、8の5点は周溝の南側から出土したもので、それぞれ12cm、11cm、17cm、14cm、19cm浮いて出土した。3、4、7は覆土中から出土したものである。

1は口縁部を欠く坩で¾が遺存する。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内部はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。外面は底部を除いて赤彩される。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。器高11.8cmを測る。2は壺の胴部下半～底部で⅓程遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面には成形時の粘土の段が残り、ナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。底径7.6cmを測る。3は坏で⅕程遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。内面と底部を除く外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径13.7cm、器高6.8cmを測る。4は坏の½破片で、外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。内面と底部を除く外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径



第222図　109(047)号跡出土土器(1/4)

13.8cm、器高6.2cmを測る。5は口縁部のみ¼欠失する坏である。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面は入念なナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。外面は底部を除いて赤彩される。胎土には砂粒を多く含みやや粗いが焼成は良好で赤褐色を呈する。口径14.4cm、器高5.3cmを測る。6は埦の½破片で外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に赤褐色を呈する。口径13.6cm、器高6.1cmを測る。7は甕の口縁部の⅓破片で頸部には櫛描波状文をめぐらす。内面はナデが加えられ、口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で暗灰褐色を呈する。口径は5.4cmを測る。8も甕で底部の¾破片である。7と同一個体の可能性がある。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。胎土・焼成共に良好で暗灰褐色を呈する。

（7）　110（071）号跡（第223・224図）

遺構（第223図）

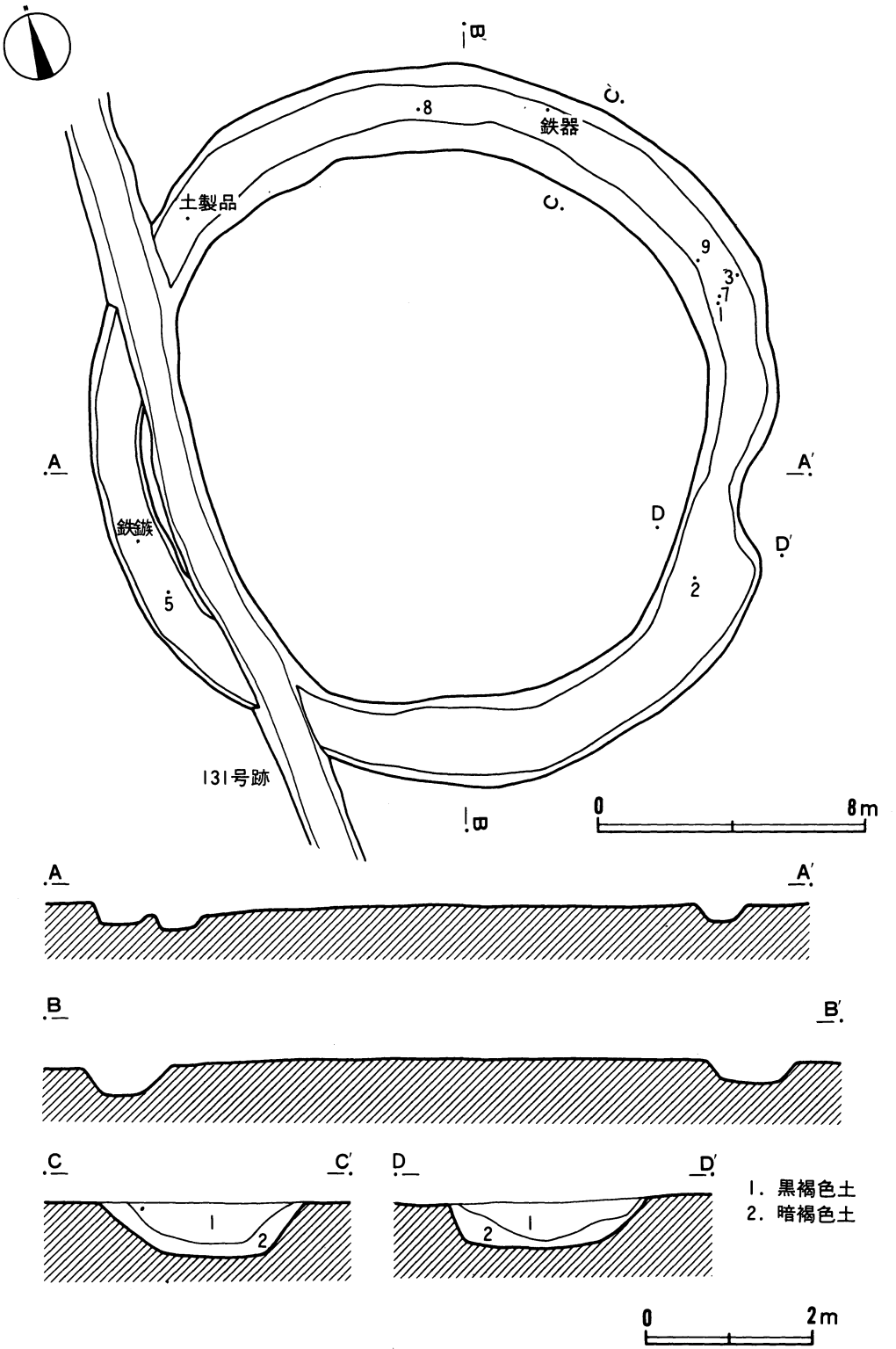
109号跡の南西側約10mに位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。西側で131号跡に切られる。

プランは、径21mほどの円形を呈する。東側の周溝外周の輪郭の一部がくびれる。周溝の幅は1.5～2.8mと差があり、西側が狭く、東側ではくびれ部が狭くなる。周溝の深さは0.3～0.8mとかなり差があり、西側が浅くなる。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

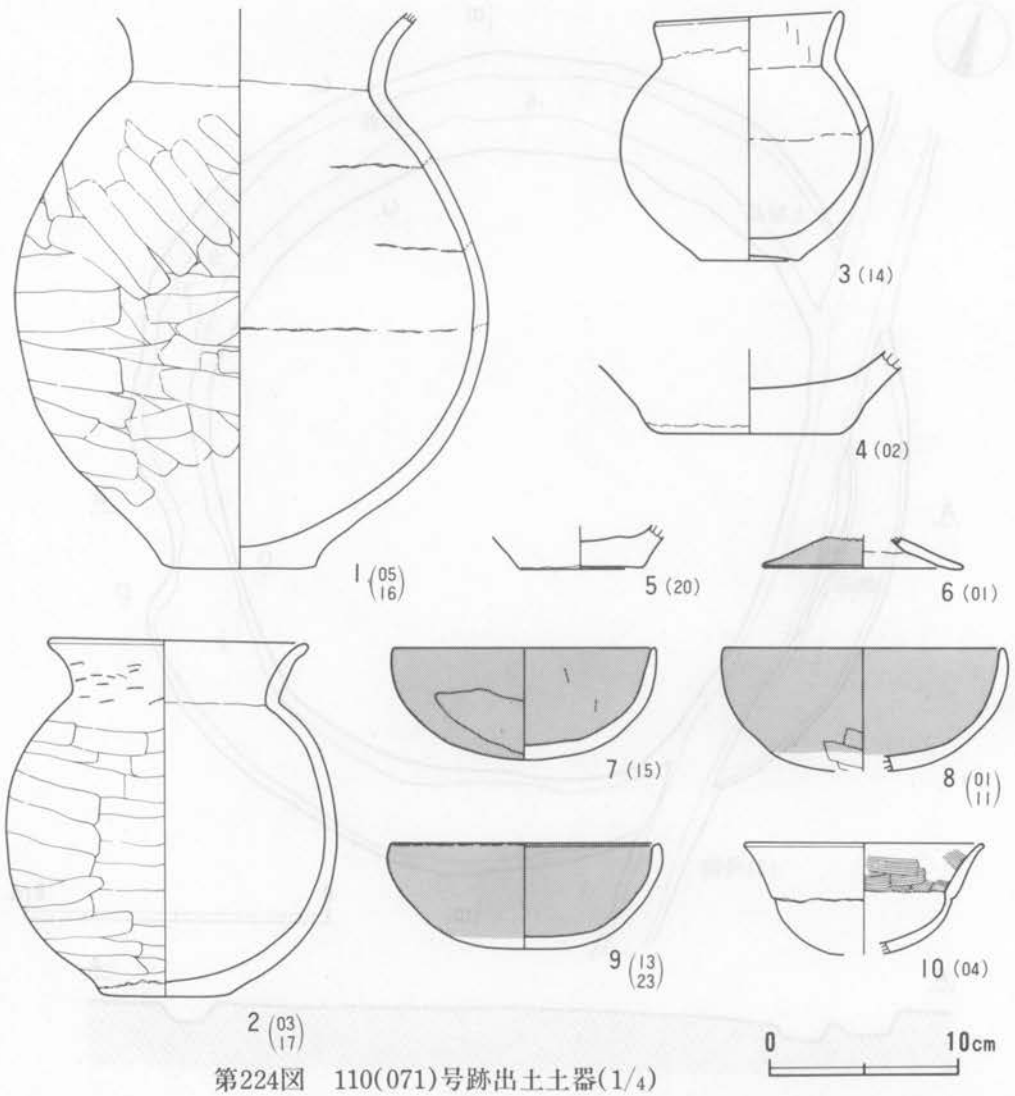
遺物（第224図）

出土遺物は多く10点の土器が図示できた。1、3、5、7、8、9は底面より、それぞれ24cm、19cm、21cm、23cm、33cm、18cm浮いて出土したものである。2は底面より5.0cm浮いて出土したものである。4、6、10は周溝覆土中より出土したものである。この他周溝の北側で底面から33cm浮いて直刀の破片が、西側の周溝で底面から20cm浮いて鉄鏃が出土している。周溝覆土中からは土製紡錘車と土錘と土製品が1点ずつ出土している。

1は口縁部を欠く甕で図示の範囲でほぼ完存する。外面は明瞭にヘラナデ痕が残る。内面はヘラナデされ、輪積み痕が残る。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径8.0cm、器高28.5cmを測る。2も甕で、胴部下半以下は完存し、その他は½遺存する。外面はヘラケズリされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径13.2cm、底径6.7cm、器高18.3cmを測る。3は小形の甕で完存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。口縁部はヨコナデされる。内面には輪積み痕が残る。なお、外面中位は強く火を受けており、煤が付着する。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径9.6cm、底径5.2cm、器高12.7cmを測る。4は壺の底部で⅔が遺存する。内外面共にナデが加えられる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。明褐



第223図　110(071)号跡実測図(1/200・1/80)



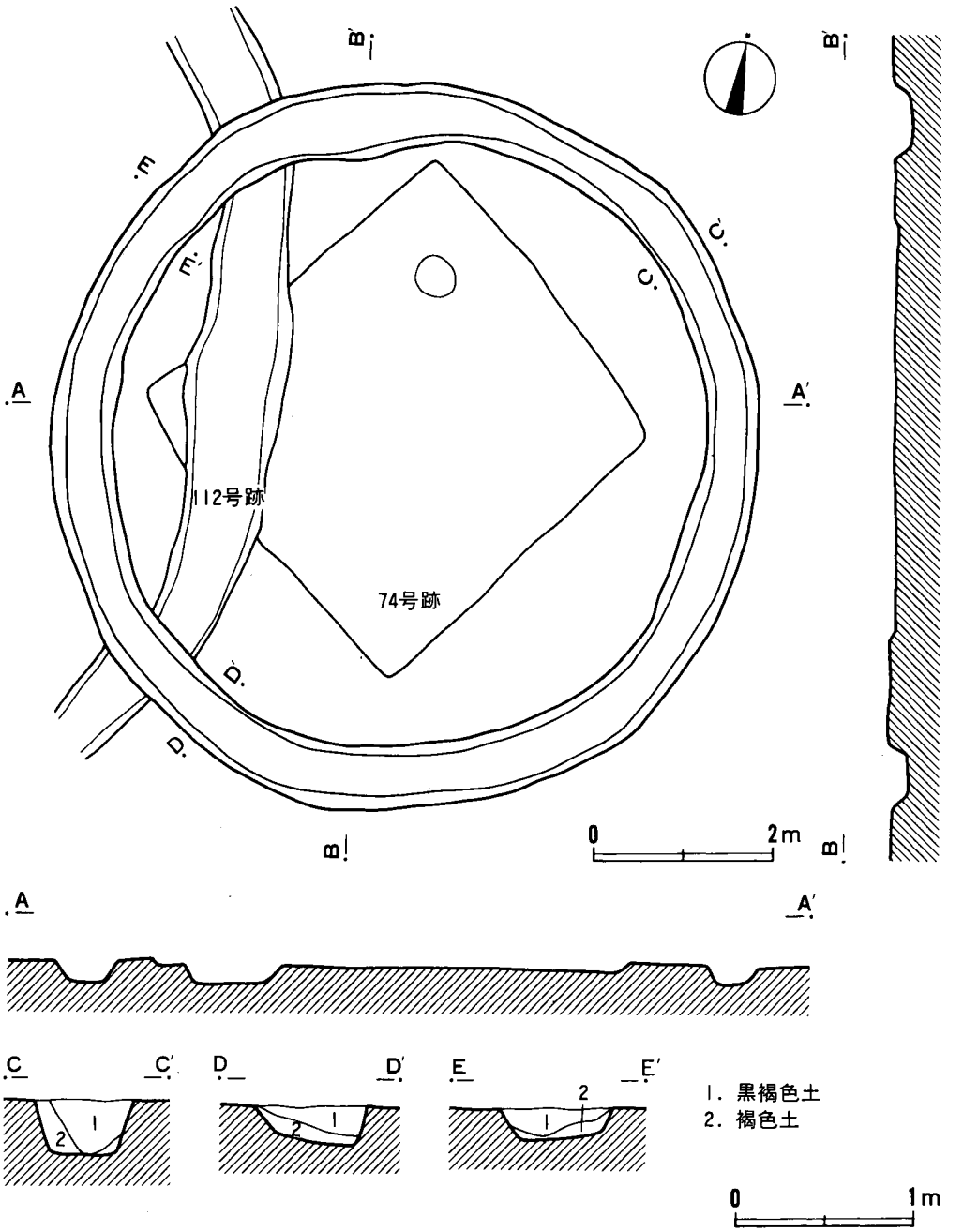
第224図　110(071)号跡出土土器(1/4)

色を呈し、底径9.4㎝を測る。5は甕の底部で、外面はヘラナデされ、内面は粗いナデが加えられる。胎土には中砂粒を含むが、密で、焼成も良い。胎土は他の土器と異なり、明褐色を呈する。底径は6.6㎝を測る。6は高坏の脚裾部の½破片である。外面はナデが加えられ、内面は上位にヘラケズリ痕が残り、下半はナデが加えられる。外面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で内面は淡褐色を呈する。脚径は10.4㎝を測る。7は坏で¾が遺存する。内外面共にヘラナデされ、口縁部はヨコナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好で、口径13.8㎝、器高5.7㎝を測る。8は底部をわずかに欠く坏で、図示の範囲でほぼ完存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、部分的にヘラケズリ痕が残る。内面は入念なナデが加えられる。底部を除く外面と内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径は14.7㎝を測る。9は⅕が遺存する坏で、外面はヘラケズリの後粗くナデが加えられる。内面はナデが加えられる。底部を除く外面と内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤彩部

以外は黒褐色を呈する。口径は14.1cmを測る。10は坩の¼破片で、内外面共ナデが加えられ、口縁部内面には細かいハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径12.4cmを測る。

（8）　111（084）号跡（第225図）

遺構（第225図）



第225図　111(084)号跡実測図(1/80・1/40)

110号跡の南東側11mに位置する円形周溝（墓）である。確認調査時のトレンチが周溝にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。西側で112号跡と重複し、台状部には74号跡が存在する。

プランは、径8.0mの比較的整った円形を呈する。周溝の幅は0.5～0.8mとやや差がある。周溝の深さは0.2～0.3mと浅い。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は2層に分けられた。台状部および溝底からは主体部等の施設およびその痕跡は検出されなかった。

周溝の覆土中から土器片がわずかに出土しているだけで図示できるものはない。

4. 古　　墳

（1）　112（083）号跡（第226・227図）

遺構（第226・227図）

110号跡の南東に検出した古墳である。確認調査時のトレンチに主体部と周溝の一部がかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。主体部は84号跡の覆土中に築造される。東側では、111号跡と重複するが新旧関係は不明である。

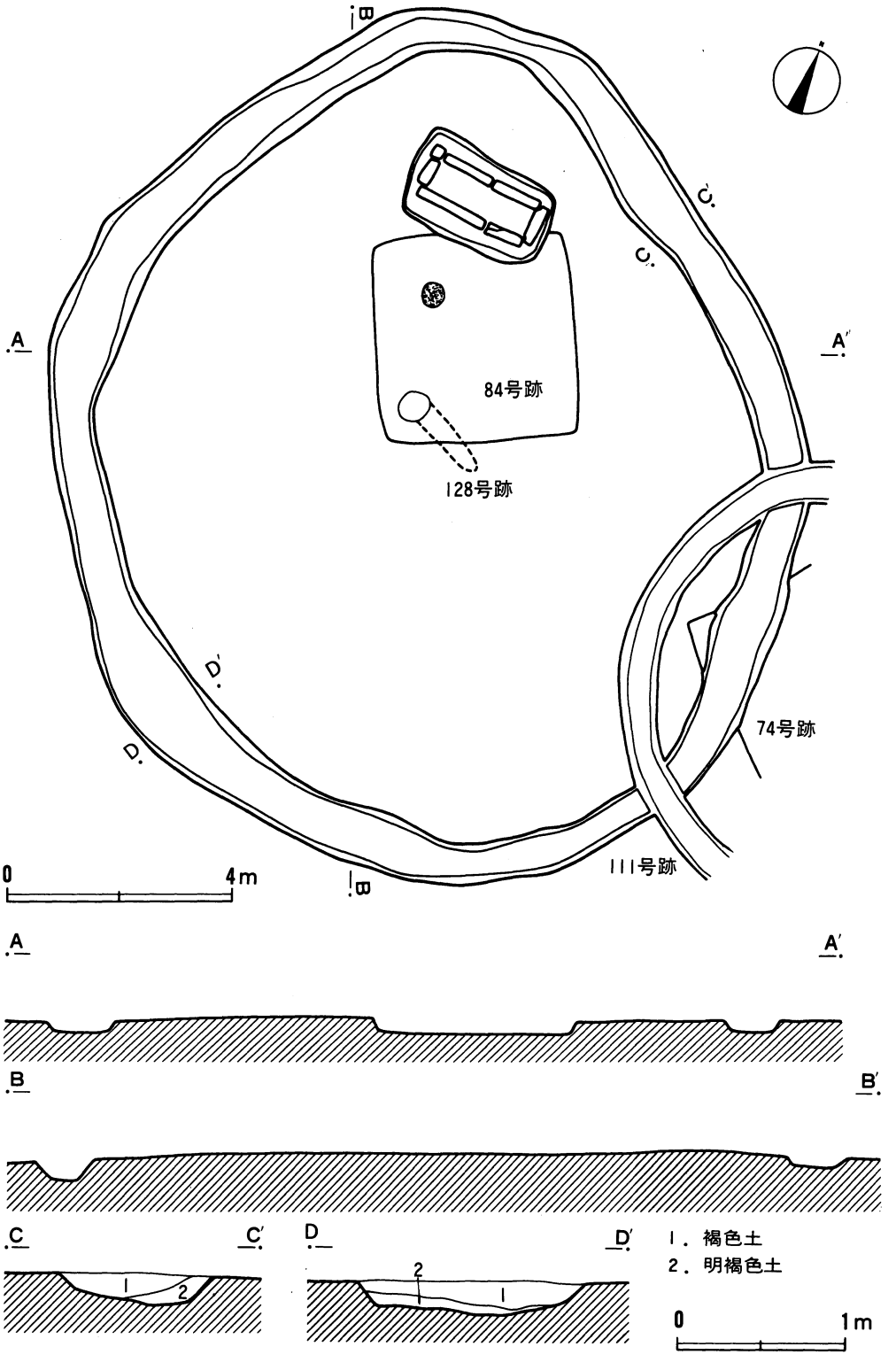
周溝は15.5～13.0ｍの楕円形を呈し、全周する。周溝の幅は0.6～1.4ｍとかなり差がある。周溝の深さは0.15～0.3ｍと全体的に浅く、部分的には0.05ｍ内外というところもある。溝底はほぼ平坦である。周溝内の覆土は2層に分けられた。

主体部は墳丘の北側で検出した箱式石棺である。石棺の主軸はほぼ東西方向を向いており、墳丘の中心線と主体部中央を結んだ線にほぼ直交している。石棺は地山を掘り込んだ土壙内に構築されている。土壙は2.7×1.5ｍのやや不整な隅丸の長方形を呈する。石棺は軟砂岩の截石を組み合わせて構築したものである。石棺の側壁は厚さ0.25～0.3ほどの直方形の截石を長辺に水平位に置くことで構成している。南壁では2個の截石を並べている。東側の石は幅0.75ｍ、西側の石は幅1.4ｍを測る。北壁では幅0.9ｍと1.0ｍの石を並べるが、南壁の長さと合わないので、幅0.2ｍほどの方柱状の石を補充している。各石の短辺の長さ（高さ）は現状で約0.5ｍを測る。小口は1個の截石からなっており、東側の小口は側壁と接する角に切り込みがあり、上から見ると凸形を呈する。石棺底面のプランは長方形を呈し、長さ2.0ｍ、幅約0.6ｍを測る。長さはともかく、幅は1遺体をやっと埋葬できる程度の規模である。蓋石は4枚架構していたようで、そのうち2枚がほぼ完全に遺存していた。厚さ0.1～0.15ｍで0.9×0.7ｍの長方形を呈する。残りの2枚は遺存している部分から察して、やや規模が異なるようである。石材の底面と土壙の底面との間には、粘土を含む黒色土が敷かれており、石材の除去によって石棺全域にわたって敷かれていることが確認された。遺体の埋葬はこの上に行われたと思われる。裏込めは粘土と黒色土が主体であるが、石材屑や黄褐色土も使用している。

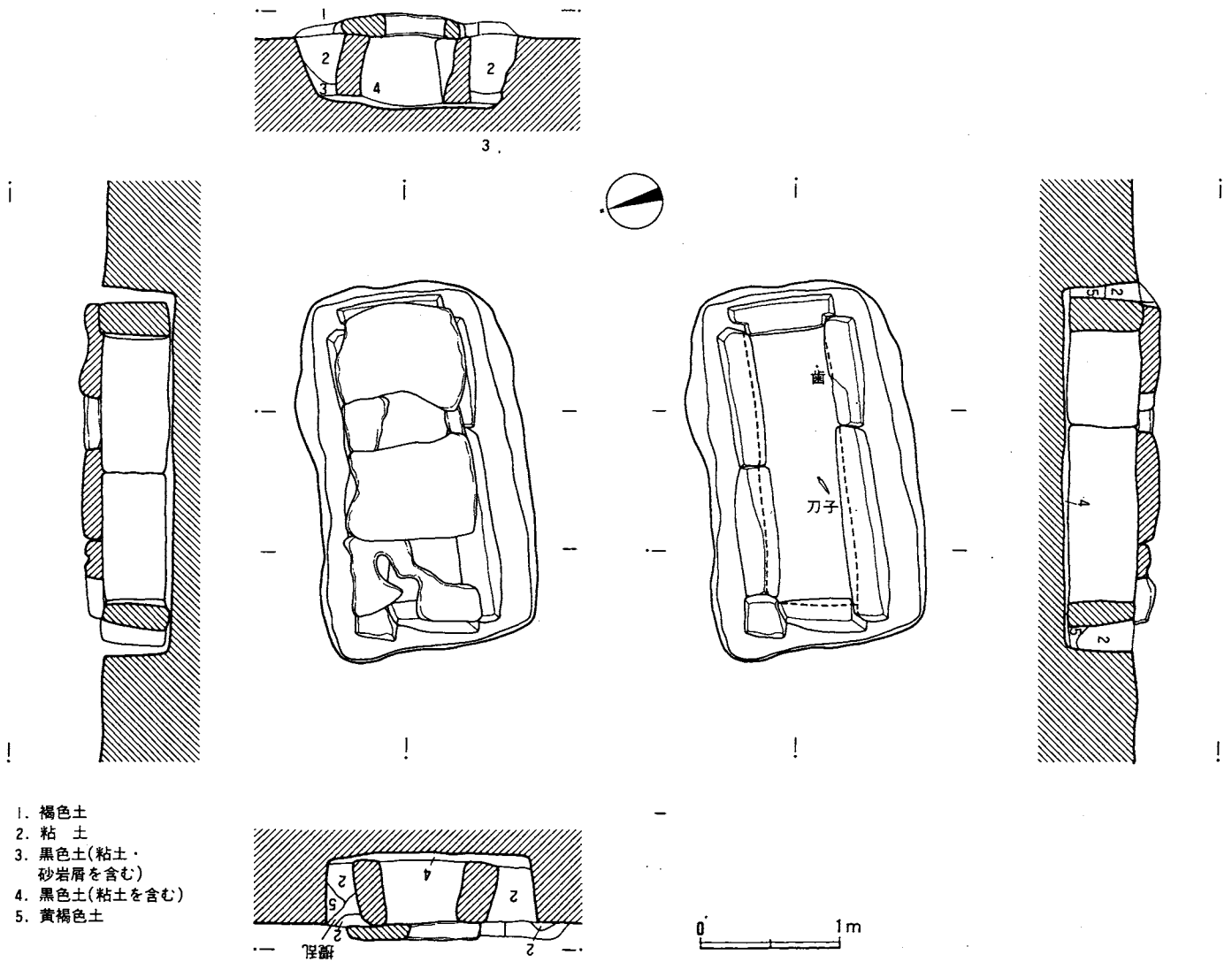
遺物

遺物は石棺の中央南側の底面から刀子が鋒を西に向けて出土した。また、南東コーナー寄りから歯が出土した。これによって遺体の頭位は東側にあったものと思われる。この歯は成人の下顎大臼歯である。遺物の出土状況、蓋石の遺存状態からして盗掘は受けていないものと思われる。

なお、周溝内からは土器片が出土しているがいずれも細片で図示できるものはない。



第226図　112(083)号跡実測図(1/120・1/40)



1. 褐色土
2. 粘　土
3. 黒色土(粘土・砂岩層を含む)
4. 黒色土(粘土を含む)
5. 黄褐色土

第227図　112(083)号跡主体部実測図(1/40)

5. その他の遺構と出土土器（第228～238図）

（1） 113（015）号跡（第228図）

今回の調査区の北側斜面に位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では、長径4.1ｍ、短径3.3ｍ、底面では長径3.3ｍ、短径2.5ｍの不整長円形プランを呈する。深さは0.35ｍほどで、底面は凹凸である。覆土は4層に分けられた。覆土中からわずかに土器片が出土しただけで図示できるものはない。

（2） 114（018）号跡（第228図）

113号跡の西20ｍの斜面に位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径4.3ｍ、短径2.8ｍの不整形、底面では長径3.55ｍ、短径1.45ｍのやや不整な長楕円形プランを呈する。深さは0.5ｍほどで、底面は凹凸である。覆土は4層に分けられた。覆土中からわずかに土器片が出土しただけで図示できるものはない。

（3） 115（019）号跡（第229図）

114号跡の南東側10ｍの斜面に位置する土壙で、確認調査時のトレンチが西側にかかっており、その段階から存在の判明していた遺構である。

確認面では、長径4.2ｍ、短径3.2ｍの不整形を呈し、底面では長径2.5ｍ、短径1.9ｍの長円形を呈する。深さは0.3ｍほどで、底面は凹凸である。覆土は3層に分けられた。覆土中からわずかに土器片が出土しただけで図示できるものはない。

（4） 116（022）号跡（第229図）

115号跡の南西側28ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径1.75ｍ、短径0.45ｍ、底面では長径1.65ｍ、短径0.3ｍの長楕円形プランを呈する。深さは0.6ｍほどで、底面はやや凹凸である。覆土は黒褐色土の単一層であった。

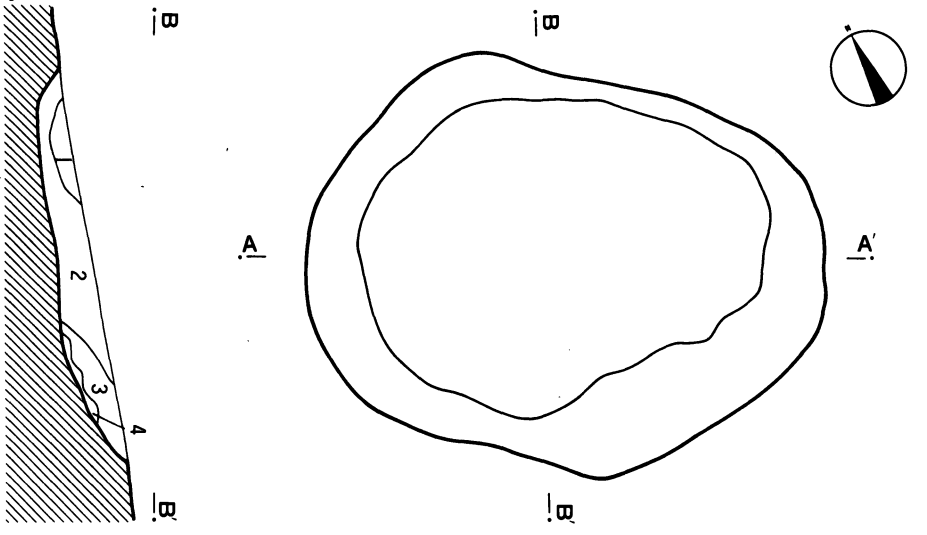
遺物は全く出土していない。

（5） 117（027）号跡（第230図）

116号跡の南西側11ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径2.05ｍ、短径0.5ｍ、底面では長径1.8ｍ、短径0.22ｍの長楕円形プランを呈する。斜面に位置するため深さは0.5～0.8ｍと差がある。底面はやや凹凸である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

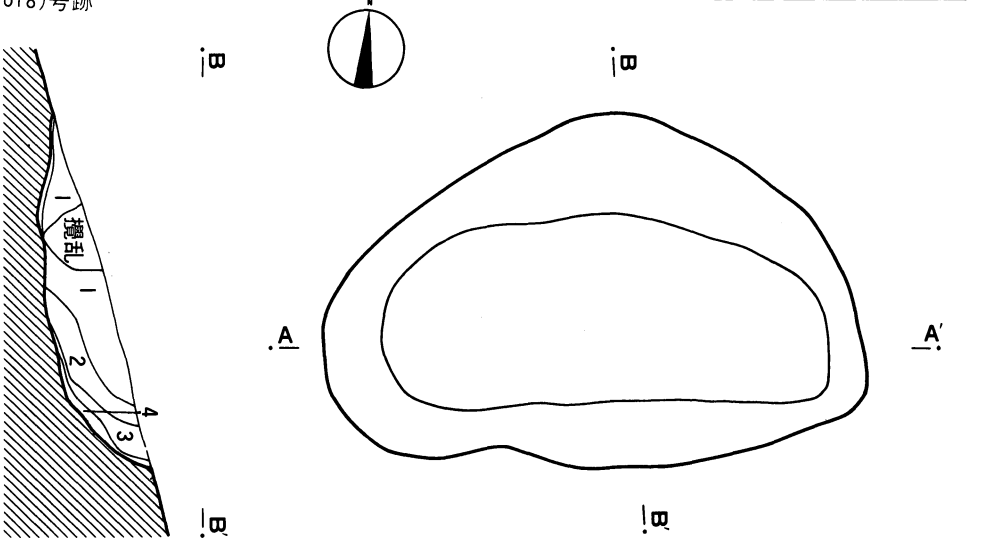
113 (015)号跡



1. 黒褐色土
2. 褐色土
3. 黒色土
4. 黄褐色土
(ロームブロックを含む)

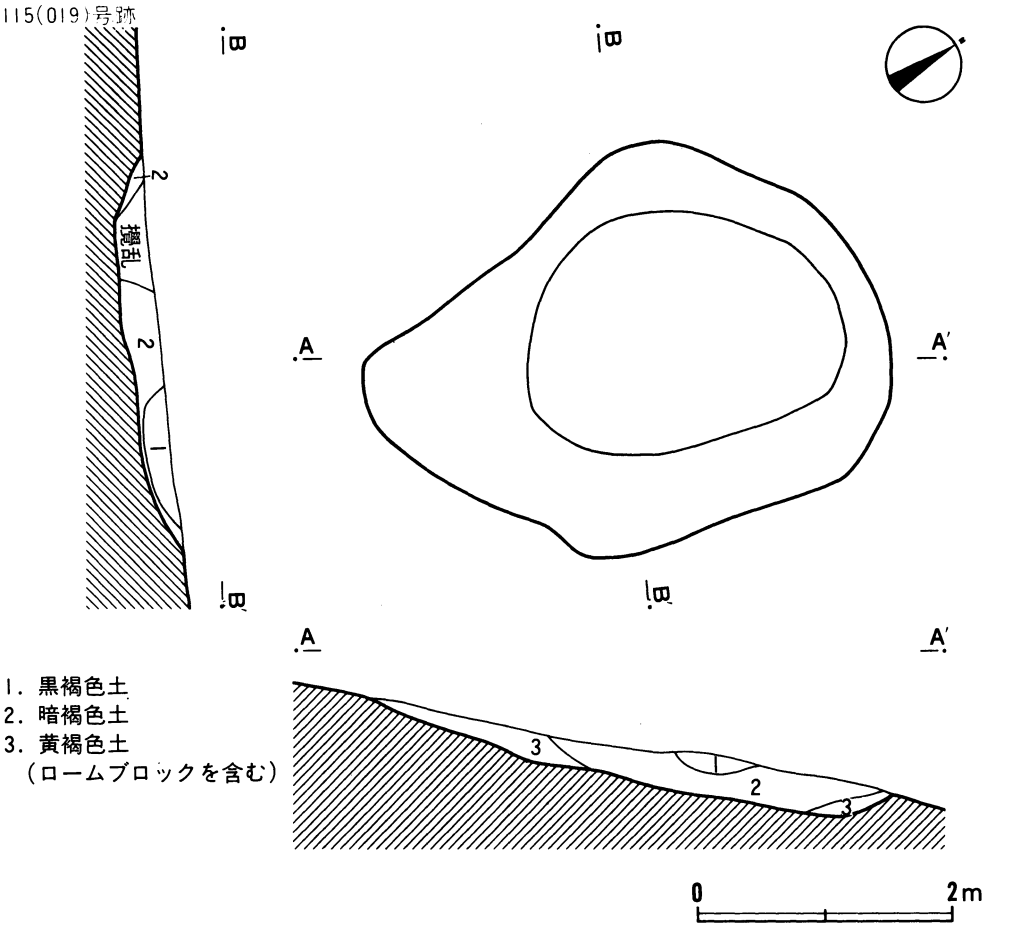
0 2m

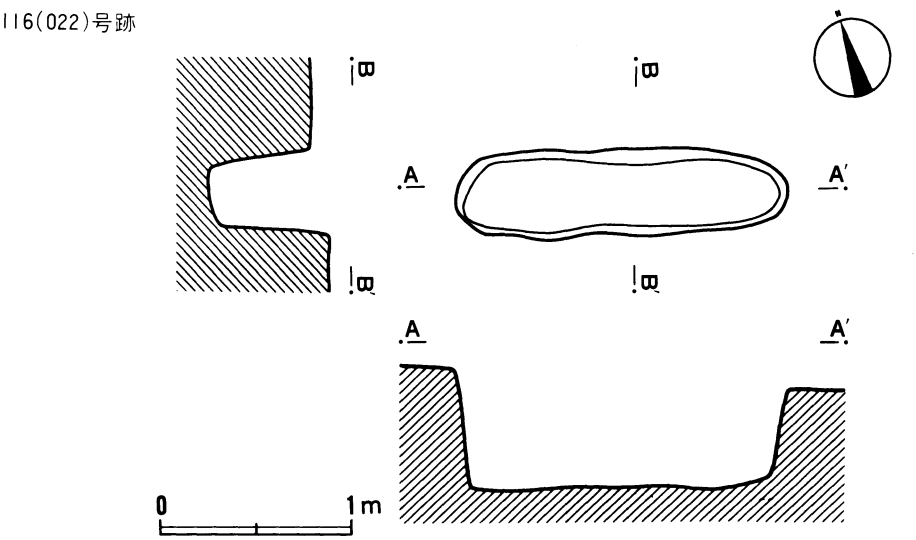
114 (018)号跡



1. 褐色土
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土
4. 黄褐色土
(ロームブロックを含む)

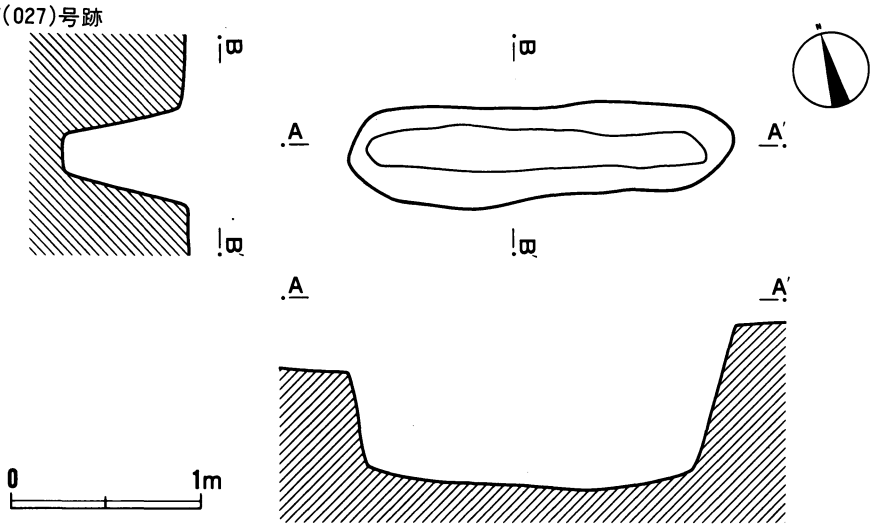
第228図　113・114(015・018)号跡実測図(1/60)





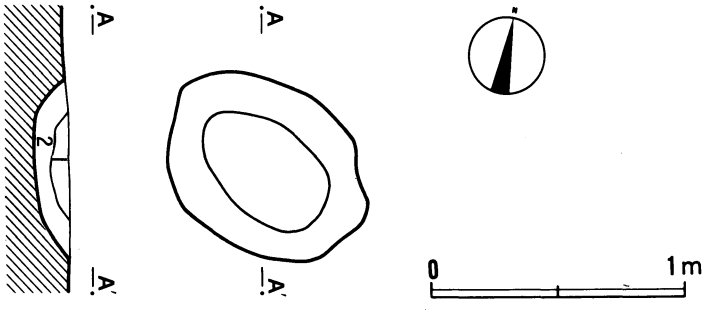
第229図　115・116(019・022)号跡実測図(1/60・1/40)

117(027)号跡

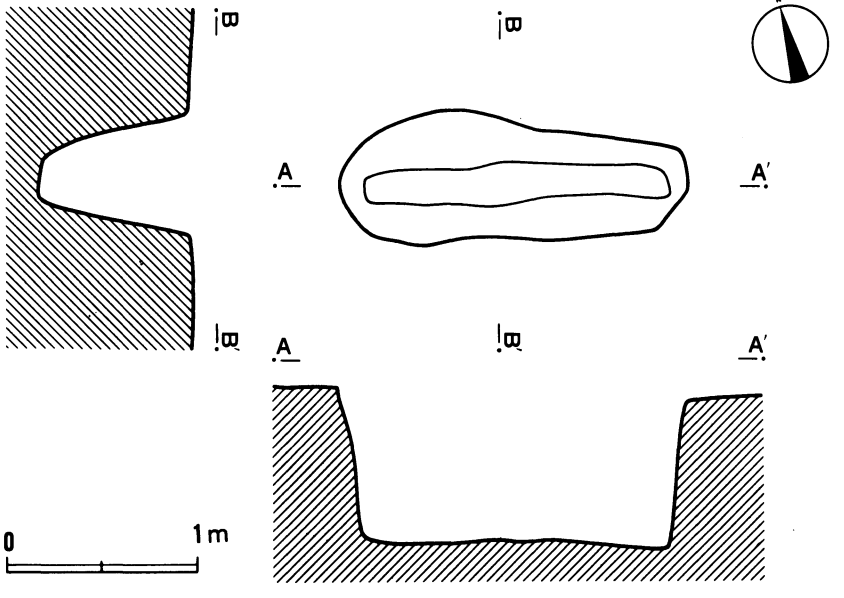


118(033)号跡

1. 焼　土
2. 黄褐色土
（焼土粒・ローム
ブロックを含む）



119(056)号跡



第230図　117・118・119(027・033・056)号跡(1/40・1/30・1/40)

（６）　118（033）号跡（第230図）

115号跡の南東45ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ内に存在するが、確認できなかった遺構である。

確認面では長径0.9ｍ、短径0.65ｍ、底面では長径0.58ｍ、短径0.35ｍの楕円形プランを呈する。深さは0.15ｍを測る。底面はやや凹凸である。覆土は２層に分けられた。遺物は全く出土していない。

（７）　119（056）号跡（第230図）

117号跡の南東58ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径1.85ｍ、短径0.64ｍ、底面では長径1.63ｍ、短径0.22ｍの長楕円形プランを呈する。深さは0.8ｍを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（８）　120（065）号跡（第231図）

118号跡の南側19ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。中央部を95号跡により切られる。

プランは3.0×2.7ｍほどの長円形を呈するものと思われる。深さは0.05～0.1ｍと極めて浅い。底面はほぼ平坦であるが、軟弱である。覆土は暗褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（９）　121（074）号跡（第231図）

119号跡の南西側65ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチがかかっていたが、確認できなかった遺構である。

確認面では長径1.85ｍ、短径0.82ｍ、底面では長径1.4ｍ、短径0.2ｍの長楕円形プランを呈する。深さは約１ｍを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単一層であった。

遺物は全く出土していない。

（10）　122（075）号跡（第232図）

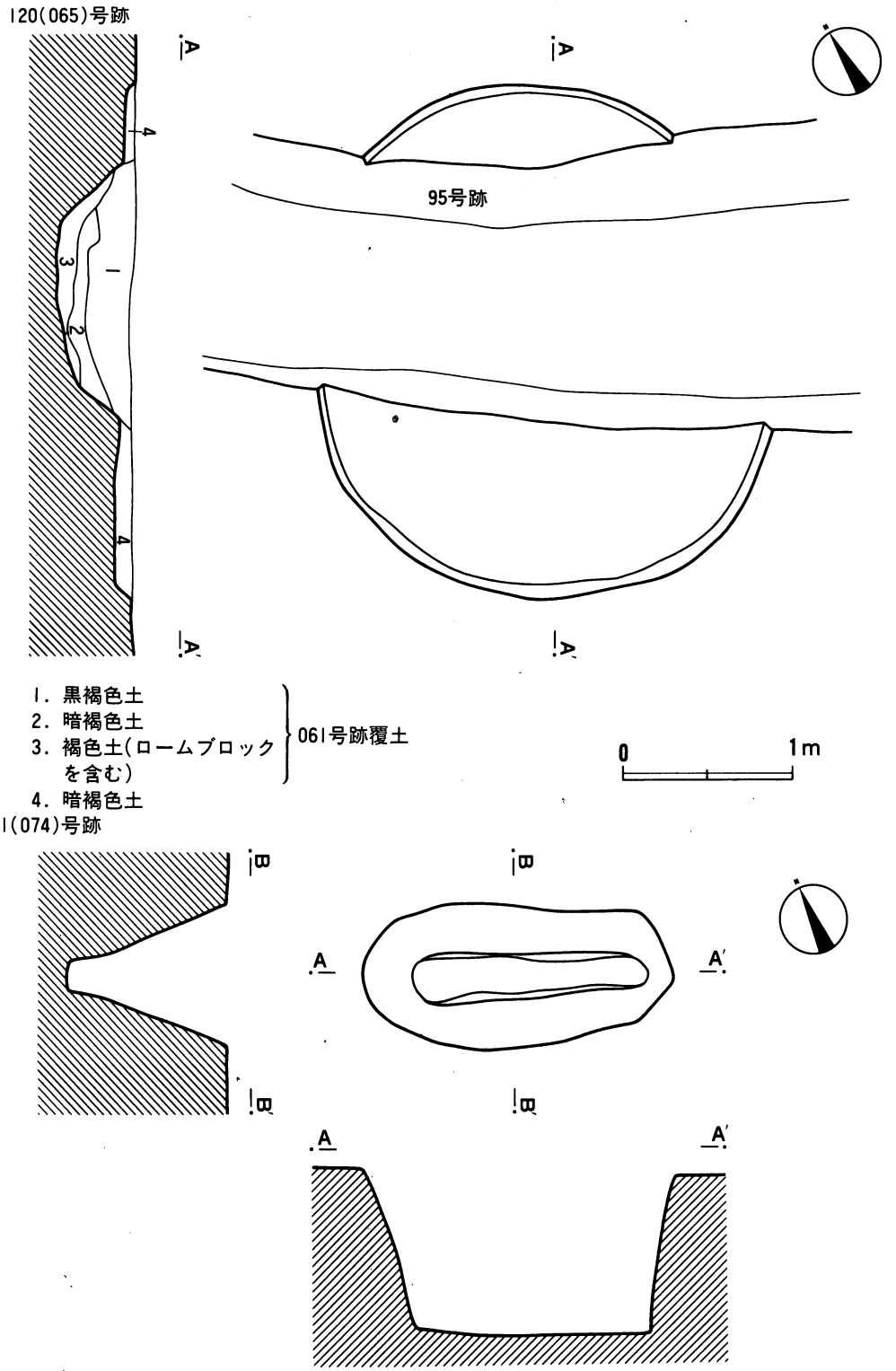
121号跡の南側13ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径1.6ｍ、短径0.63ｍ、底面では長径1.12ｍ、短径0.22ｍの長楕円形プランを呈する。深さは0.8ｍを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単一層であった。

遺物は全く出土していない。

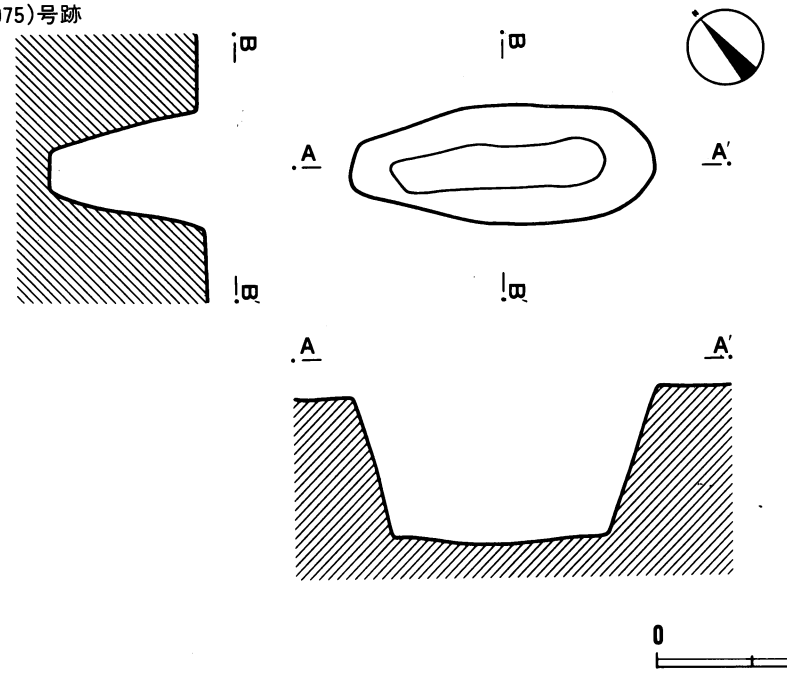
（11）　123（076）号跡（第232図）

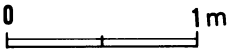
119号跡の南西20ｍに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。



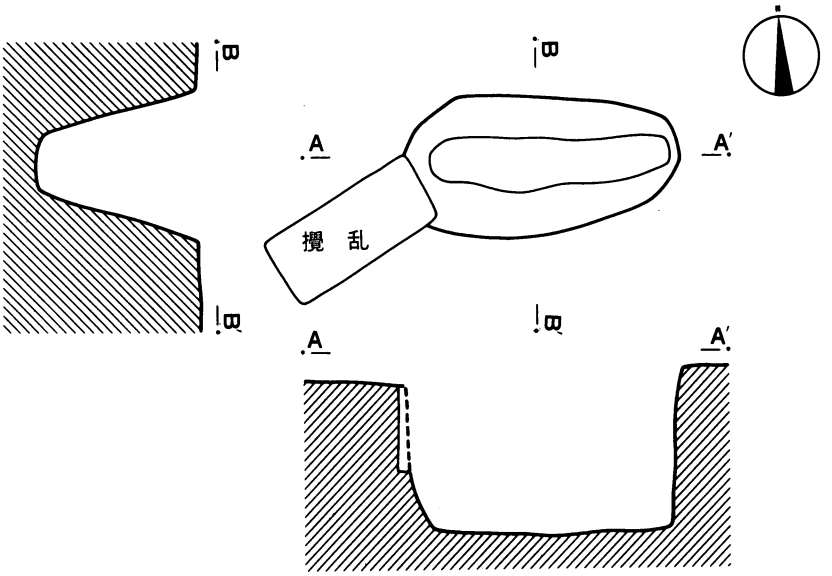
第231図　120・121(065・074)号跡実測図(1/40)

122(075)号跡





123(076)号跡



第232図　122・123(075・076)号跡実測図(1/40)

西側に攪乱が入っているため全形をつかむことはできないが、確認面では長径1.46m、短径0.72m、底面では長径1.25m、短径0.27mの長楕円形プランを呈するものと思われる。深さは約0.8mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

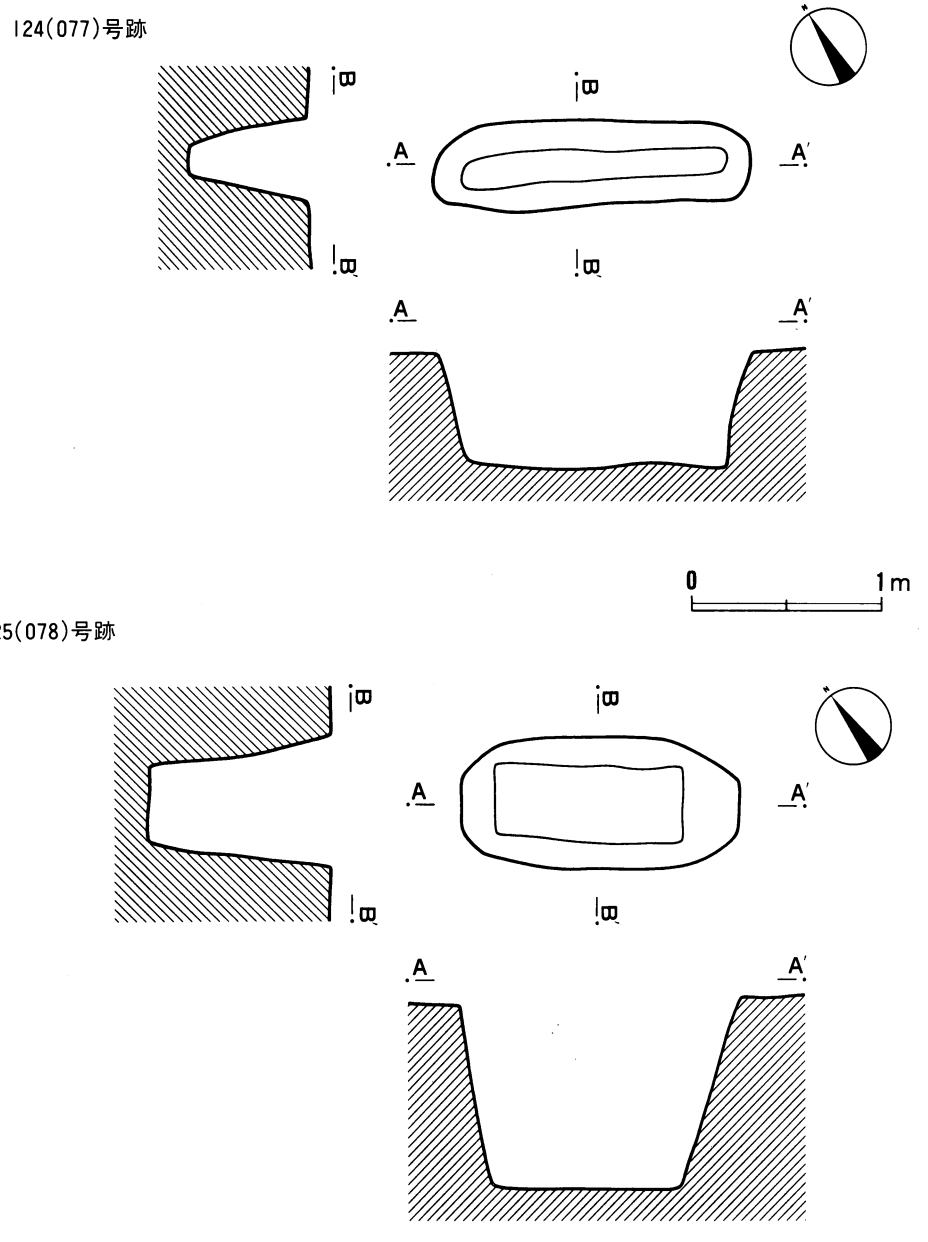
（12）　124（077）号跡（第233図）

123号跡の東側に近接して位置する土壙で、123号跡と同様にトレンチ間に存在していた遺構である。

確認面では長径1.67m、短径0.45m、底面では長径1.4 m、短径0.18mの長楕円形プランを呈する。深さは0.6 mを測る。底面はやや凹凸である。覆土は黒褐色土の単一層であった。

遺物は全く出土していない。

（13）　125（078）号跡（第233図）



第233図　124・125(077・078)号跡実測図(1/40)

121号跡の北東側13mに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径1.47m、短径0.68mのやや不整な楕円形を呈し、底面では1.0×0.4mの長方形を呈する。深さは約1mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（14）　126（079）号跡（第234図）

125号跡の東側4mに位置する土壙で、確認調査時にはトレンチが設定できず、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では長径1.58m、短径0.68m、底面では長径1.33m、短径0.22mの長楕円形プランを呈する。深さは約0.85mを測る。底面はやや凹凸に富む。覆土は黒褐色の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（15）　127（091）号跡（第234図）

121号跡の東側62mに位置する土壙で126号跡と同様にトレンチが設定できず、確認できなかった遺構である。

確認面では長径1.62m、短径0.94m、底面では長径1.32m、短径0.32mの長楕円形プランを呈する。深さは0.9mを測る。底面はやや凹凸である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（16）　128（099B）号跡（第235図）

123号跡の南側11mに位置する土壙で、確認調査時のトレンチにかかる部分がわずかで、確認できなかった遺構である。西側で84号跡に切られる。

確認面では長径1.6m、短径0.4m、底面では長径1.5m、短径0.2mの長楕円形プランを呈する。深さは0.65mを測る。底面はやや凹凸である。覆土は黒褐色土の単一層であった。遺物は全く出土していない。

（17）　129（104）号跡（第235図）

127号跡の北東側50mに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。100、102号跡という2つの方形周溝（墓）を切る。

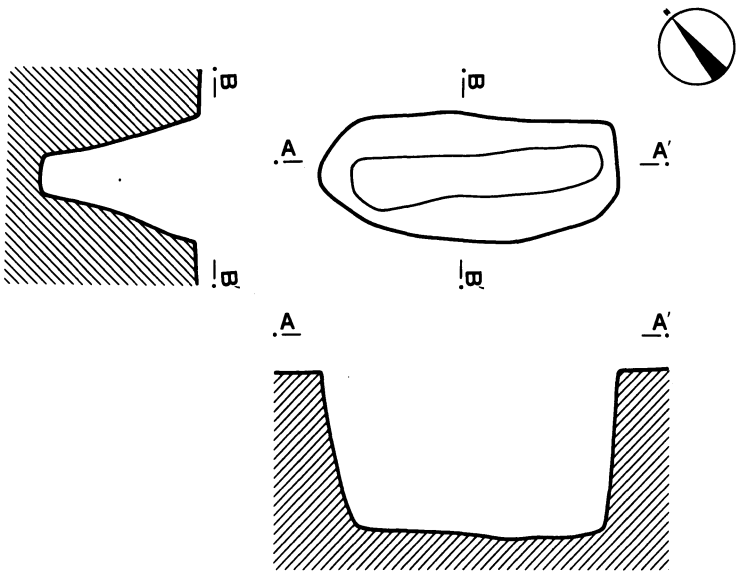
確認面では2.4×1.5mのやや不整な胴張りの長方形を呈し、底面では1.9×0.9mのやや不整な長方形を呈する。深さは0.7m前後を測る。底面はやや凹凸である。覆土は3層に分けられた。遺物は全く出土していない。

（18）　130（105）号跡（第236図）

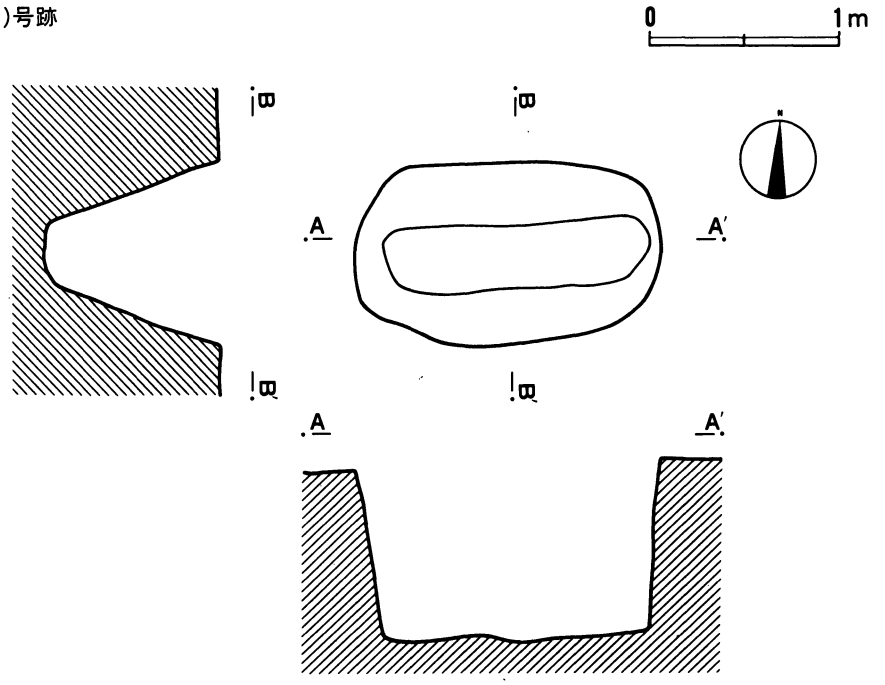
120号跡の東側25mに位置する土壙で、確認調査時のトレンチ間に存在し、本調査の時点で存在が明らかになった遺構である。

確認面では4.05×1.75mの隅丸長方形を呈し、底面では2.8×0.6mと中央部が狭くなる隅

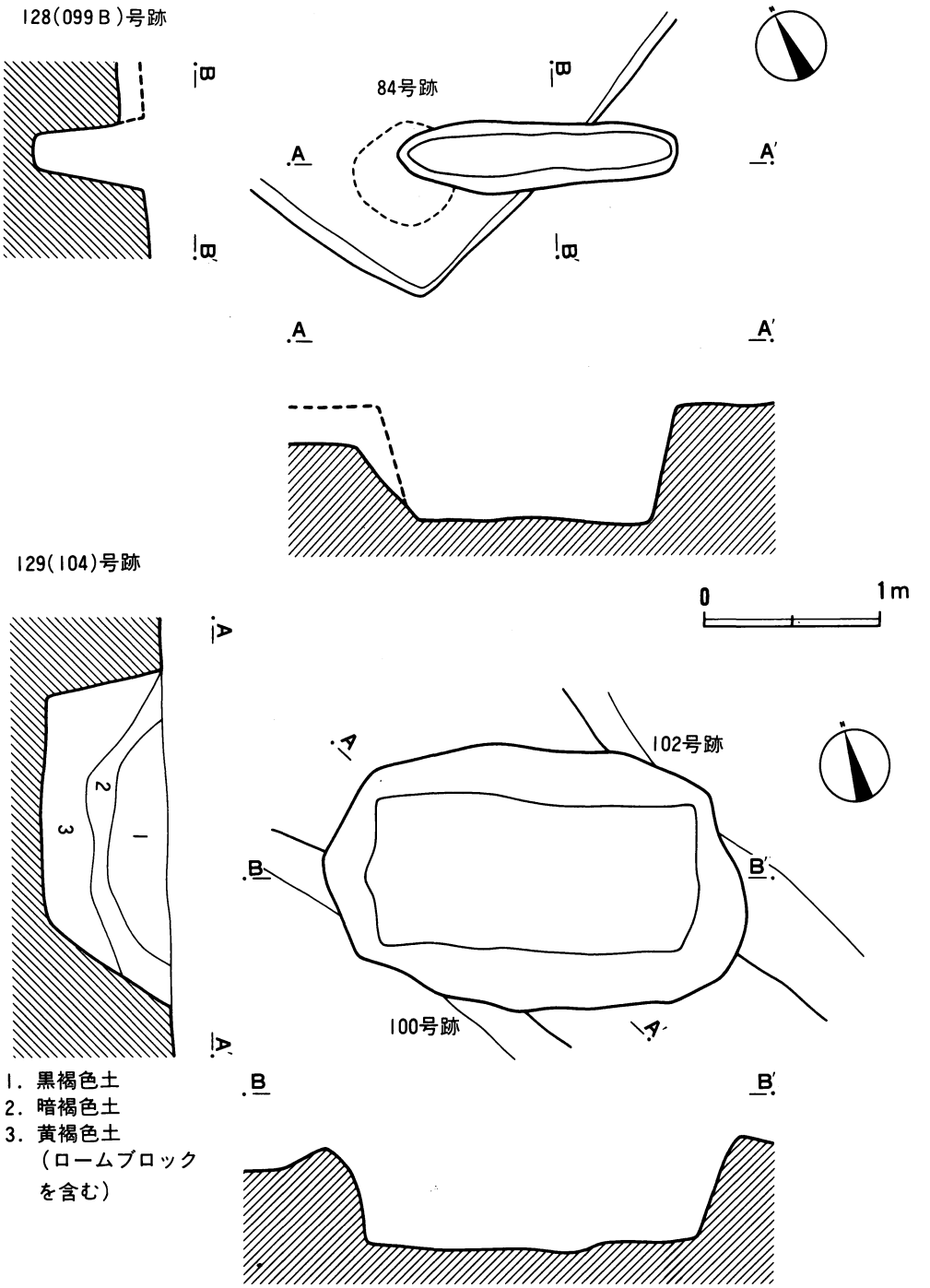
126(079)号跡



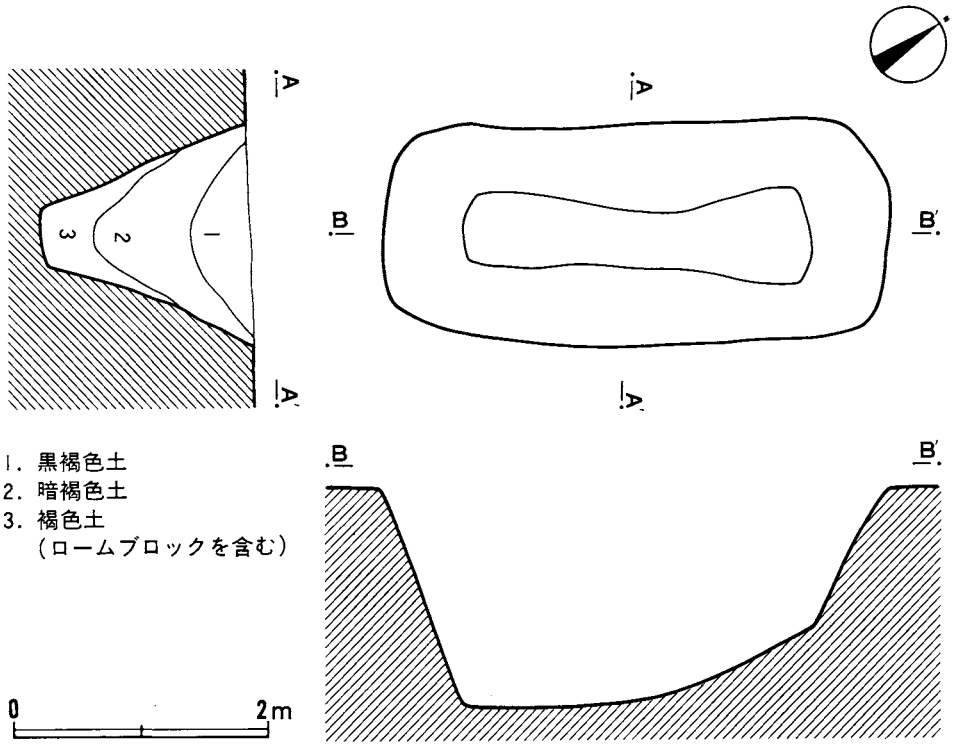
127(091)号跡



第234図　126・127(079・091)号跡実測図(1/40)



第235図　128・129(099B・104)号跡実測図(1/40)



第236図　130(105)号跡実測図(1/60)

丸長方形を呈する。深さは1.1×1.7ｍと差があり、南側で深さを増す。覆土は3層に分けられた。覆土中からわずかに土器片が出土しただけで図示できるものはない。

(19)　131（069）号跡（第237・238図）

遺構（第237図）

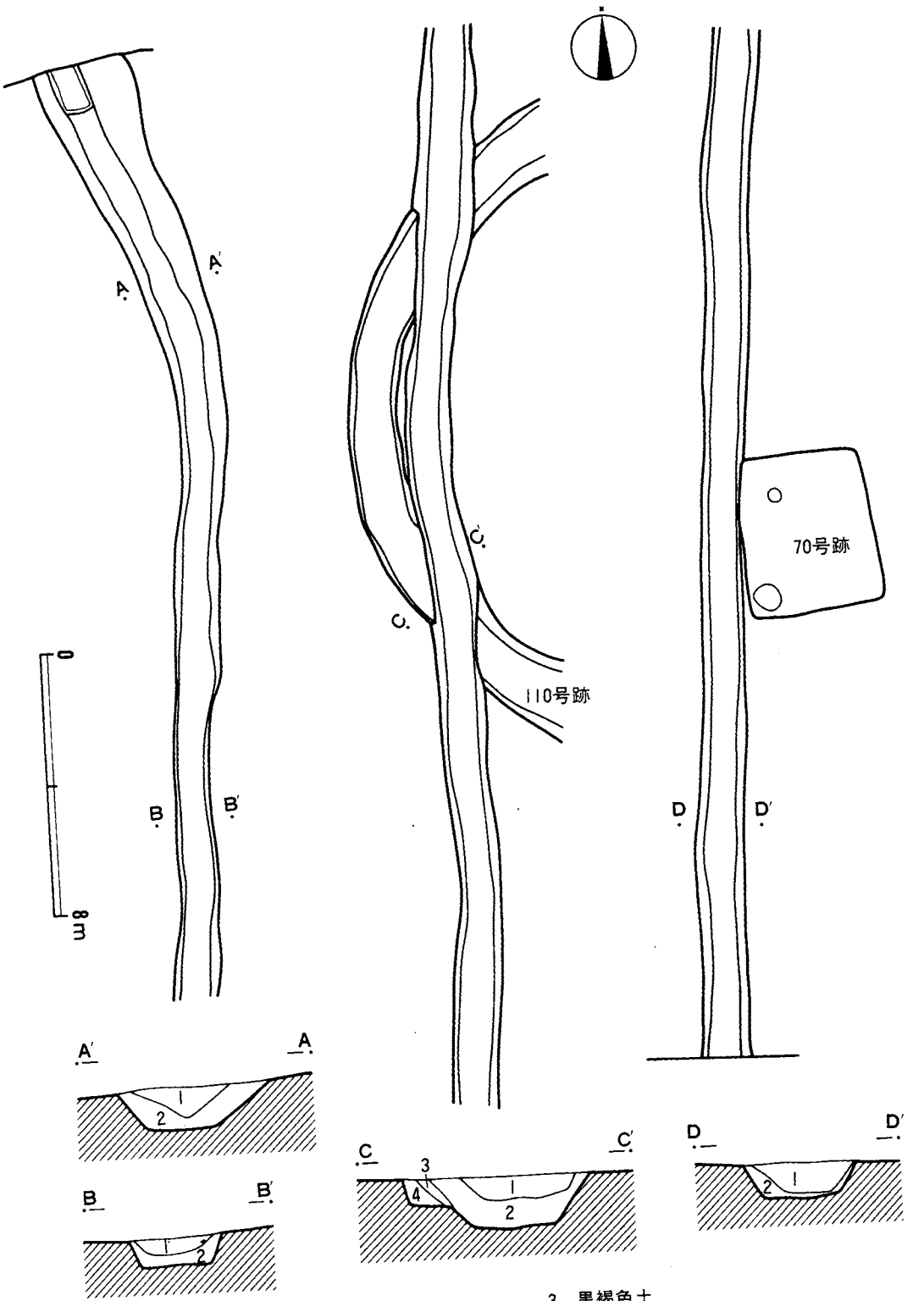
調査区の西端に位置する溝で、その大半が確認調査時のトレンチ間およびトレンチが設定できない部分に存在するが、トレンチにかかった部分では重複する110号跡と共に存在が明らかになっていた遺構である。 70、110号跡という2つの遺構を切る。

本跡は南側で調査区域外に延びているため全容は明らかにすることはできなかった。調査区域内での全長は93.5ｍを測る。幅は1.2～3.0ｍと差があり、北端の斜面へ落ちる部分で広くなる。深さは0.3～0.5ｍとあまり差はないが、A-A'断面から北は急に深くなり、北端部では1段深くなり1.4ｍを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられた。

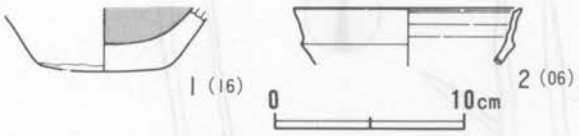
遺物（第238図）

出土遺物は比較的多いがいずれも細片で、2点の土器が図示できただけである。いずれも覆土中から出土したものである。

1は壺の底部で図示の範囲で完存する。内外面共にナデが加えられる。内面は赤彩される。



第237図　131(069)号跡実測図　(1/200・1/80)



第238図　131(069)号跡出土土器(1/4)

青灰色を呈し、口径12cmを測る。

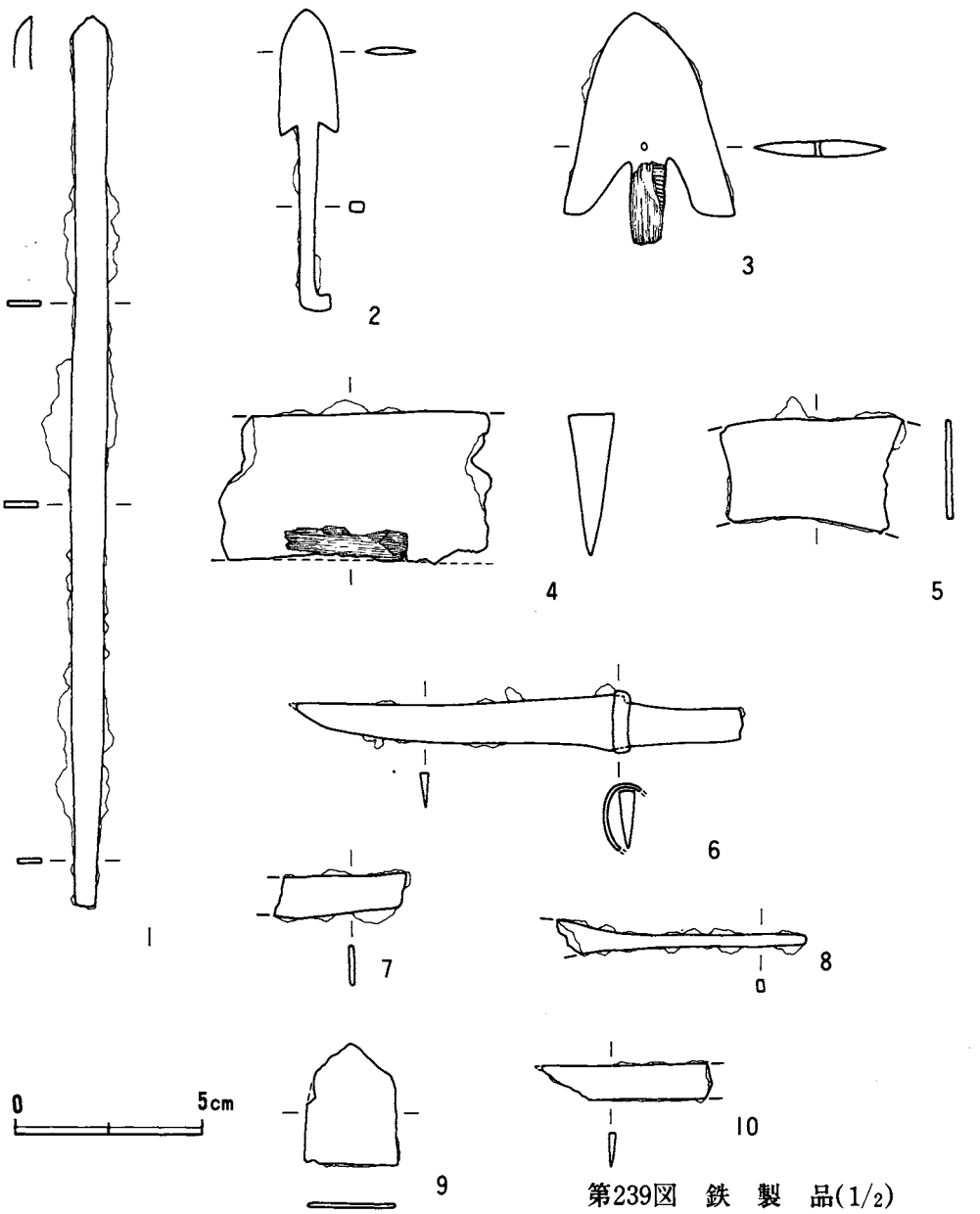
胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成もやや悪い。外面は淡褐色を呈し、底径7.0cmを測る。2は須恵器の坏の2/5破片で、内外面共にヨコナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。淡

6. その他の遺物（第239～252図）

ここでは遺構内から出土した土器以外の遺物について述べるが、遺構外から出土したこれらの遺物についても合わせて記載する。

（1）鉄製品（第239図）

1は39号跡の床面から20cm浮いて出土したもので鉇と考えられるものである。刃部は茎部と明確に区分されず、やや反りをもつ。茎部は幅0.85cm、厚さ0.15cmとほぼ一定しており、基部は短冊形を呈する。全長23.5cmを測る。2は110号跡の周溝中で底面から20cm浮いて出土した



第239図　鉄　製　品(1/2)

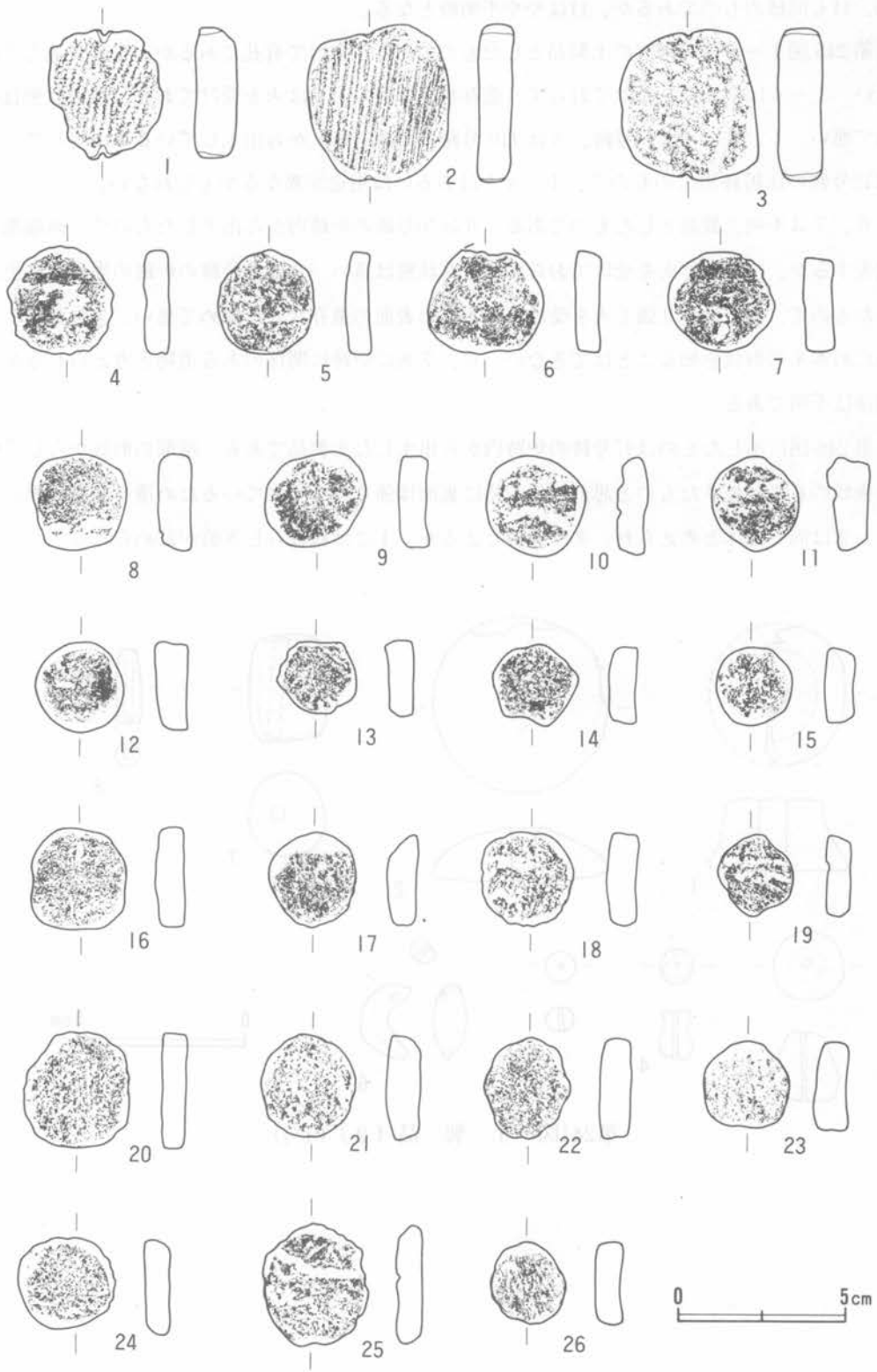
鉄鏃である。腸抉の長三角形式のものである。遺存状態は良好である。全長8.0㎝、身長2.2㎝、身幅1.5㎝を測る。3は21号跡の床面からやや浮いて出土した鉄鏃である。腸抉の三角形式のものである。一部に木質が遺存し、身に径1.5㎜の孔が開く。全長6.1㎝、身長5.3㎝、身幅3.7㎝を測る。4は110号跡の周溝中で底面から33㎝浮いて出土した直刀の破片である。一部に木質が遺存する。現存長7.3㎝、身幅3.7㎝、棟幅1.2㎝を測る。5は30号跡の床面直上から出土した鉄片である。現存長4.9㎝、幅2.6㎝、厚さ0.15㎝を測る。6は112号跡の石棺の底面から出土した刀子である。鋒をわずかに欠失する。全長12㎝、身長8.8㎝、身幅1.0㎝、棟幅0.7㎝、茎長3.2㎝を測り、縁金具が⅗遺存する。7は107号跡の周溝の底面から20㎝浮いて出土したもので、刀子の茎部と思われる。現存長は3.5㎝を測る。8は30号跡床面からやや浮いて出土したもので、鉄鏃の茎部であろうか。現存長6.7㎝を測る。9は確認調査時のトレンチ内から出土したものである。五角形を呈し、極めて薄い造りである。現存長3.2㎝、厚さ0.1㎝を測る。10は本調査時に遺構外から出土したもので、刀子の身の部分と思われる。現存長4.4㎝、身幅0.9㎝、棟幅0.2㎝を測る。

（2）土製品（第240～246図）

第240図に示したものは土器片錘と土製円板である。1～3は胴部破片を利用した土器片錘で、3点共に紐掛けの凹みを有し、縁辺部が研磨される。4～26は胴部破片を利用した土製円板である。大半は縁辺部が研磨されており、12は極めて良好な例である。4は全く研磨されていない。小片のため時期決定できるものは少ないが、10、11には角押文が施文されている。これらのうち本来的に遺構に伴うのは、50号跡出土の4～14と、54号跡出土の15である。

第241図からは縄文時代以外の土製品について図示した。1は110号跡の周溝覆土中から出土した土製紡錘車である。半欠品であるが、表面はヘラミガキされ、造りは非常に良い。2は99号跡の周溝内で底面から15㎝浮いて出土した土製紡錘車である。縁辺部を⅓ほど欠失する。3は67号跡の覆土中から出土した有孔の土製模造品である。胎土には砂粒を多く含み、表面の遺存状態はやや悪い。4は26号跡の覆土中から出土した有孔の土製模造品である。5は94号跡の周溝覆土中から出土した土製小玉である。6は10号跡の床面直上から出土した土製勾玉である。孔は片側から穿孔されており、表面にはナデが加えられる。7は確認調査時のトレンチ内から出土した土錘である。8は110号跡の周溝覆土中から出土した土錘で、端部を欠失する。

第242～244図に示したものは土製支脚とされるものである。図示したもの以外にも土製支脚の破片と考えられるものが数点あるが、いずれも細片で遺存状態が悪く、図示することはできない。図示したものは比較的遺存状態の良いものであるが、いずれも強く火を受けている。1、2は1号跡、3～5は13号跡、6、7、9は70号跡、8、10は72号跡、11は84号跡から出土したものである。表面はナデによって仕上げられるものが大半であるが、3、5のようにヘラケズリ痕を明瞭に残すものもある。また、3、5の両側面には円形の凹みが認められる。4、



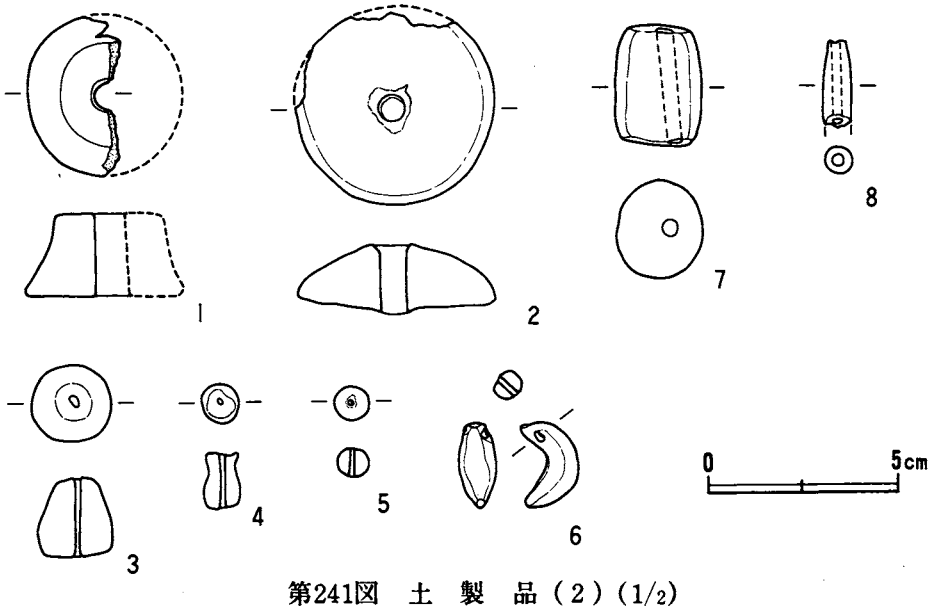
第240図　土　製　品（1）（1/2）

10、11も同様のものであるが、11はやや不明瞭となる。

第245図1～5は支脚形の土製品としたものである。すべて有孔であるが、4は貫通していない。1～4は全く火を受けておらず、遺存状態は良い。5は火を受けており、遺存状態は極めて悪い。1、2、4は94号跡、3は110号跡の周溝（墓）から出土しているのに対して、5は12号跡の住居跡出土のもので、1～4とはあるいは用途が異なるかもしれない。

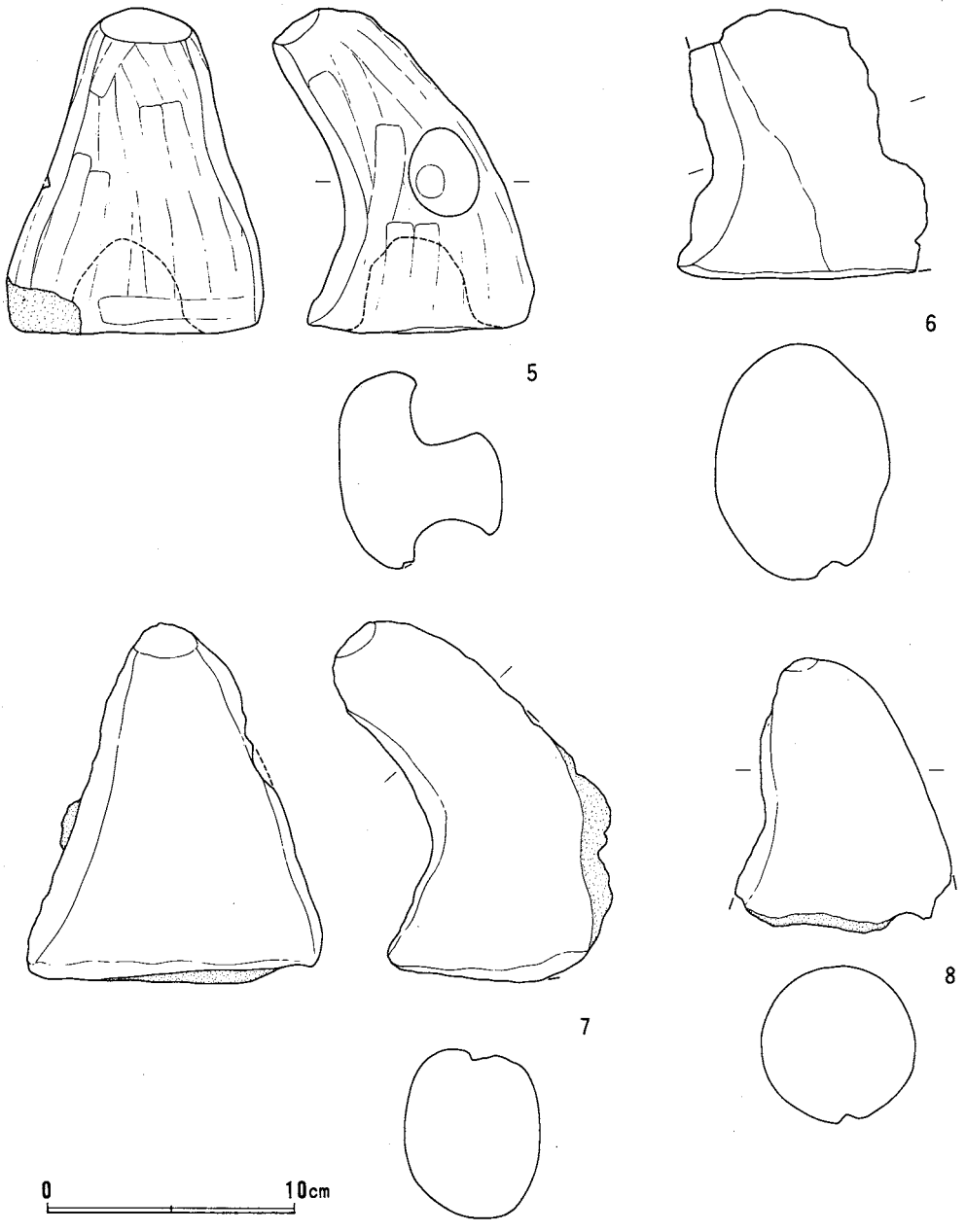
6、7は不明土製品としたものである。6は70号跡の炉跡内から出土したもので、両端部を欠失するが、ほとんど火を受けておらず、遺存状態は良い。7は1号跡の炉跡の周辺から出土したもので、6と異なり強く火を受けているため表面の遺存状態は極めて悪い。欠失部分が多いため本来の形状を知ることはできない。6、7共に炉跡に関係のある遺物と考えられるが、用途は不明である。

第246図に示したものは47号跡の炉跡内から出土した土製品である。端部の形状からして粘土板状のものが焼けたものと思われる。特に裏面は強く火を受けているため遺存状態は悪い。1、2は同一個体と考えられ、スサを混じえるが、1には籾痕らしき痕が認められる。

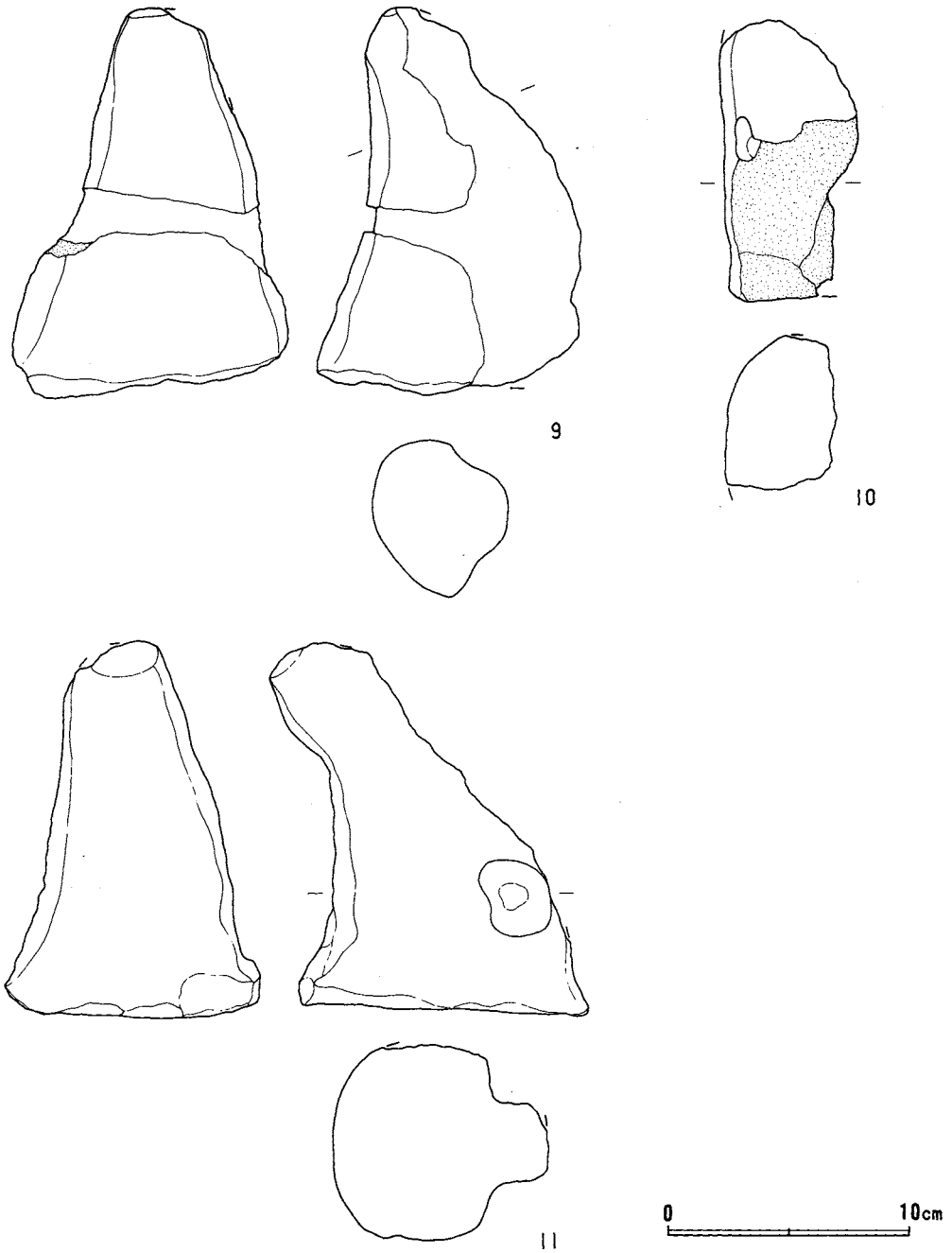


第241図　土　製　品（2）（1/2）

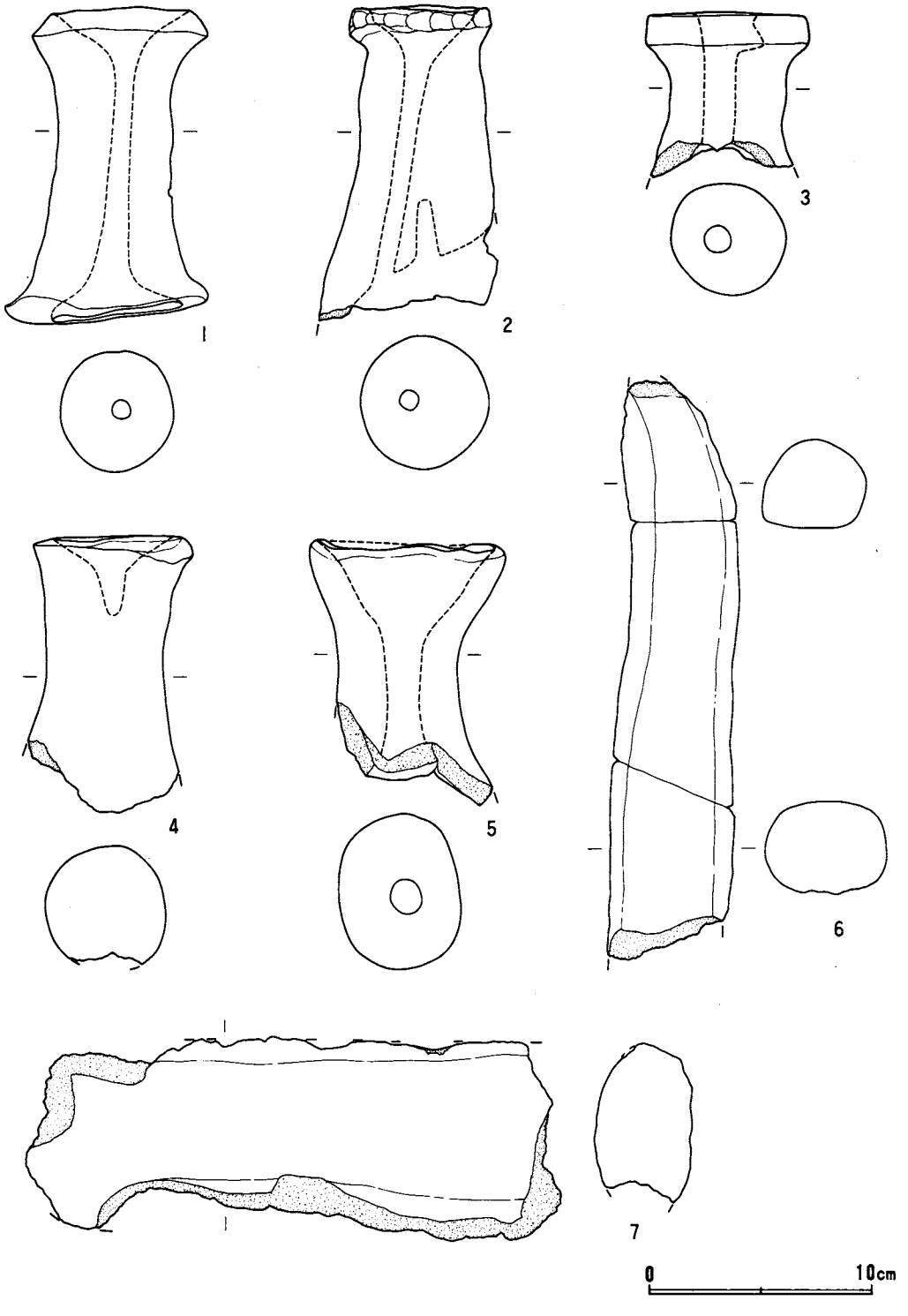
第242図　土　製　品（3）(1/3)



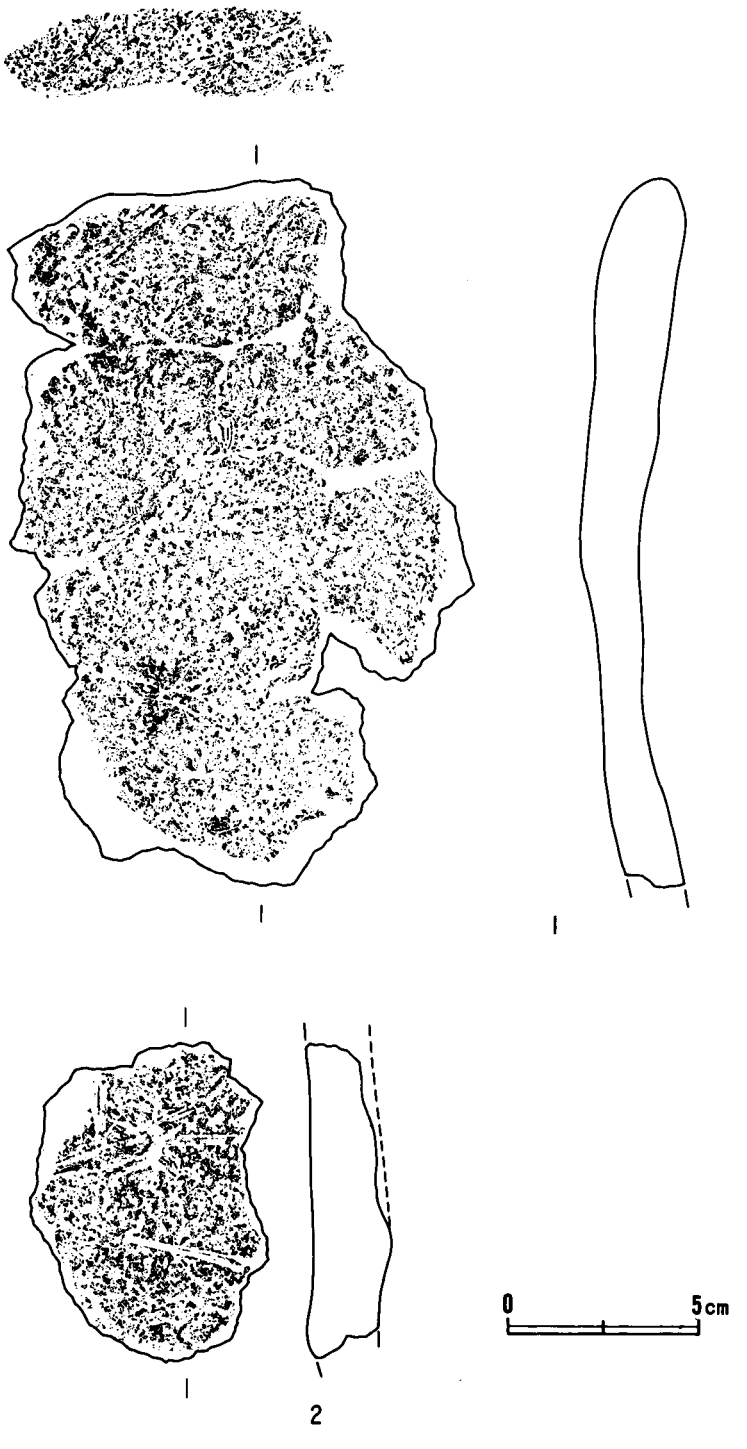
第243図　土　製　品（4）(1/3)



第244図　土　製　品（5）(1/3)



第245図　土　製　品（6）(1/3)



第246図　土　製　品（7）（1/2）

（3）石器（第247～252図）

第247図1は93号跡の溝底から出土した有舌尖頭器である。先端部と逆刺端部をわずかに欠失する。泥岩を素材として押圧剝離による入念な加工が施される。舌部は三角形を呈する。2は50号跡の覆土中から出土したもので、有舌尖頭器の破片と思われるものである。黒曜石製で押圧剝離による入念な加工が施される。

3～19は石鏃である。3～7は二等辺三角形を呈し、基部がわずかに抉入するものである。8～10は基部の抉入が著しく、比較的長身のものである。11～18は鍬型鏃あるいはこれに類するものである。19は有茎石鏃である。これらのうち本来的に遺構に伴うと考えられるのは50号跡から出土した12、13の2点である。石材は3、6、8、10～15、17～19が黒曜石で、それ以外はチャートである。

20～23はピエスエスキーユとされるものである。20は尖頭器に再利用されている。4点共に黒曜石製である。

24は54号跡の覆土中から出土したもので、サイドスクレイパーと思われるものである。25も54号跡の覆土中から出土したもので、剝片であるが、側縁部に使用痕が認められる。2点共に砂岩製である。

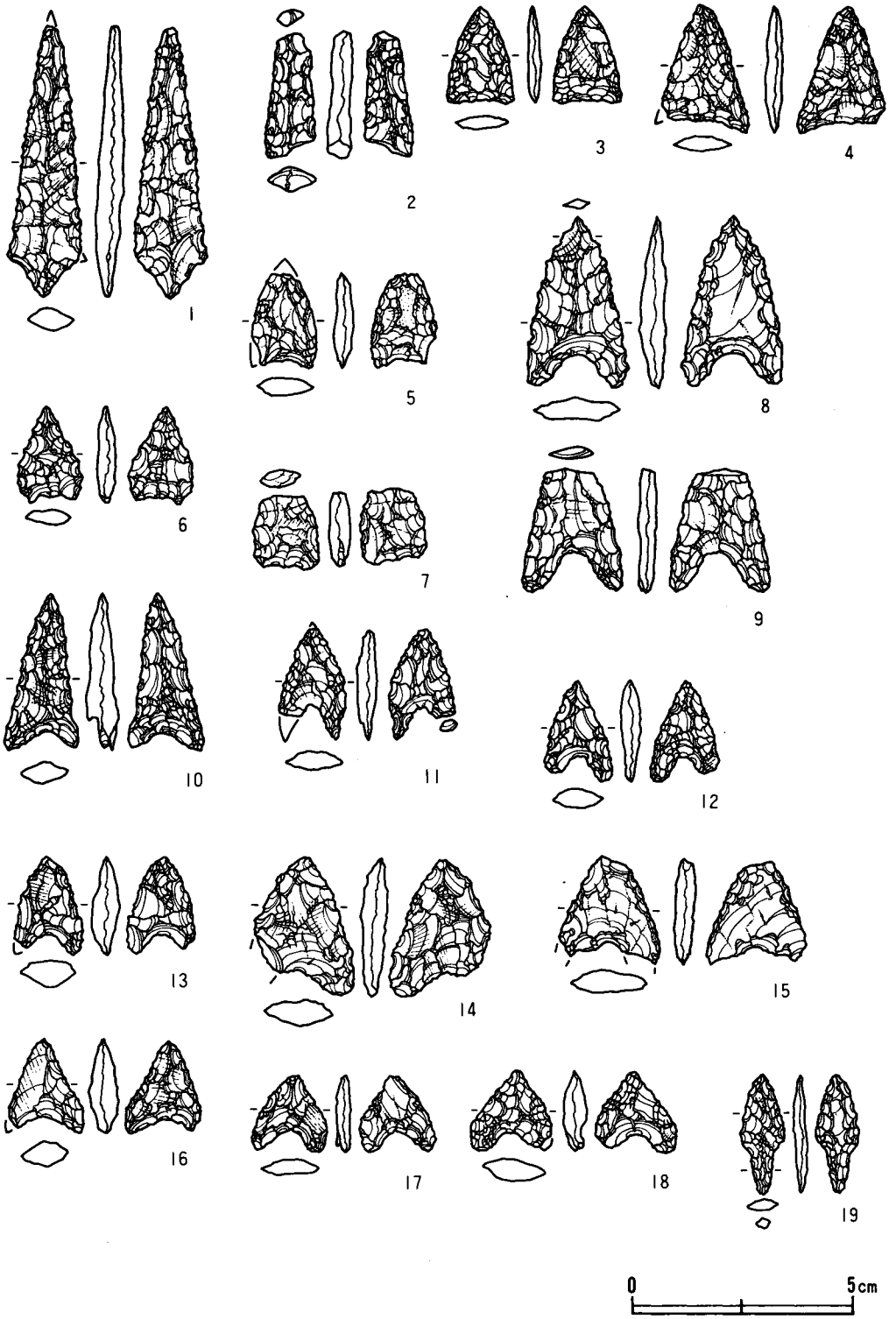
第249図1～9は打製石斧である。9は側縁部に敲打痕、裏面に磨耗痕が認められる。石材は1～5が砂岩、7、8は粘板岩、6は安山岩、9は花崗岩である。

11～20は敲石、磨石である。敲打痕を有するものは11～14、20で、磨耗痕を有するものは11、12、15～19である。石材は11～15、20が花崗岩、16は凝灰岩、17は安山岩、18、19は砂岩である。

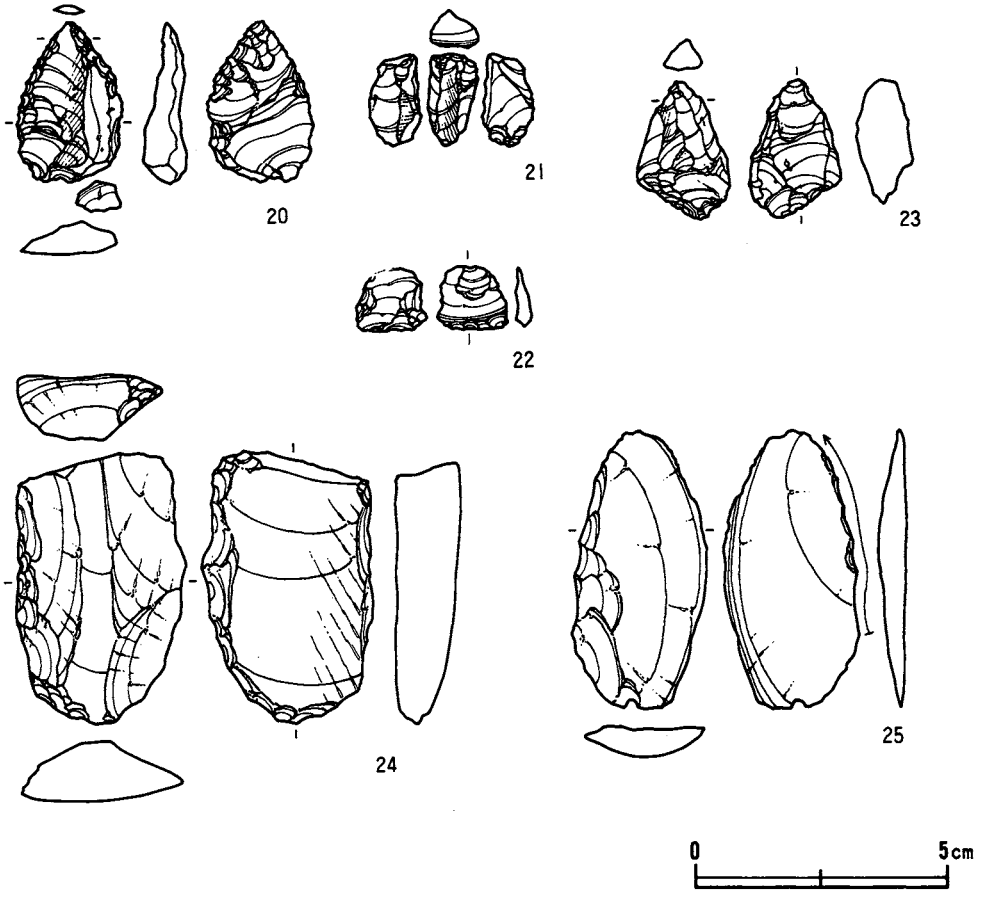
21、22は軽石で、部分的に磨耗痕が認められる。

10、23は磨製石斧である。10は太型蛤刃石斧の破片である。全体によく研磨され、刃先は直線的となる。23は小形の扁平片刃石斧で、長方形の平面を呈する。全長4.7cm、厚さ0.9cmを測る。全体によく研磨され、刃先は直線的となる。共に頁岩質である。

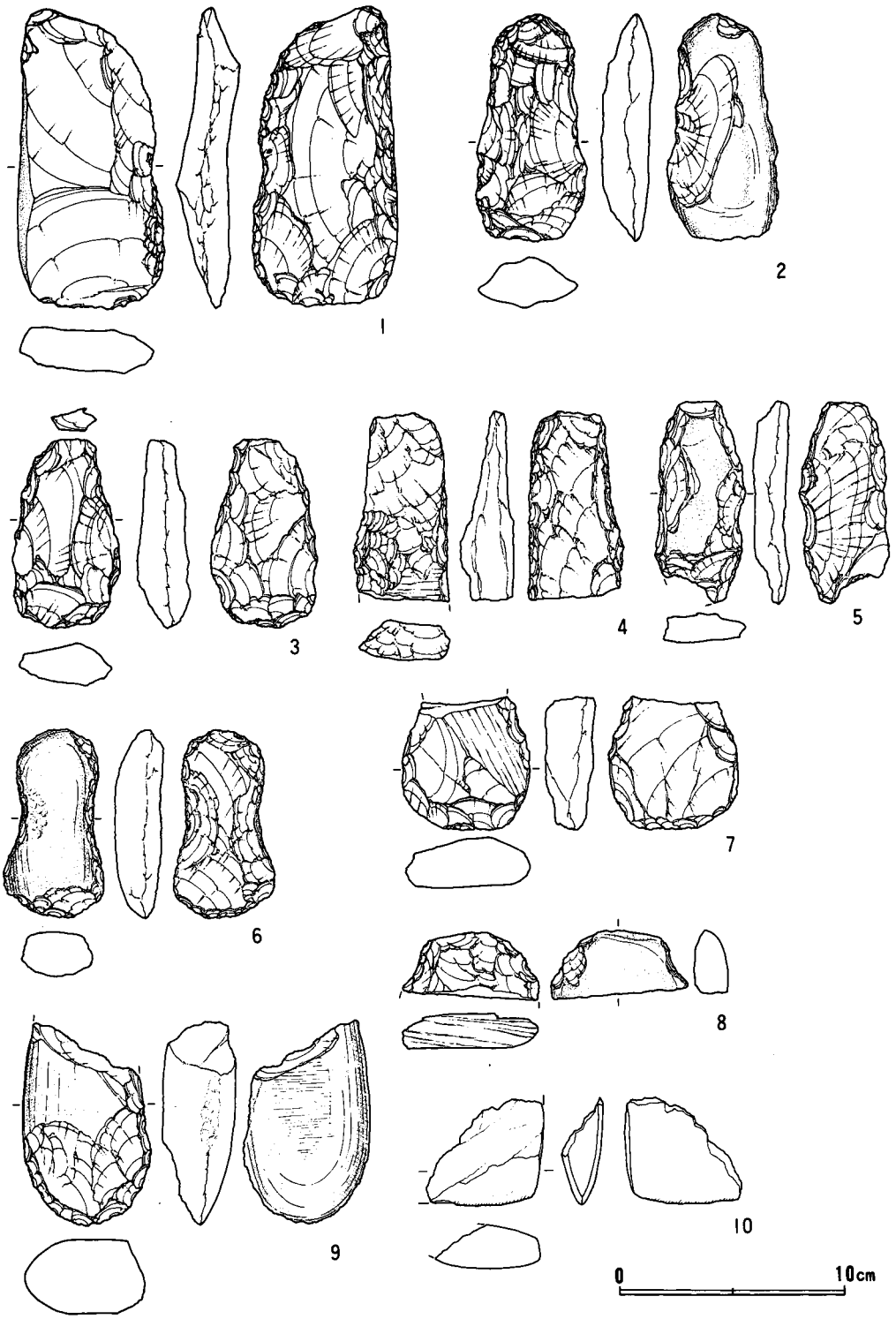
第252図にはその他の石製品を図示した。1は104号跡の覆土から出土した三角形を呈する石製品である。三角形の頂部に穿孔が認められる。垂飾品であろうか。2は94号跡の覆土中から出土した石製品である。欠失部分が多いが、本来は三角形を呈していたと思われる。欠失部分に径0.3cmほどの穿孔が認められる。3は2号跡の床面直上から出土した碧玉質勾玉である。4は30号跡の床面直上から出土した滑石製の勾玉である。最終的な研磨が施されておらず稜が残る。5も30号跡の覆土中から出土したもので滑石製の臼玉であろうか。側面にも穿孔が認められる。6は30号跡の床面直上から出土した石製紡錘車である。7は74号跡の床面直上から出土した緑色凝灰岩製の管玉で、両側から穿孔される。



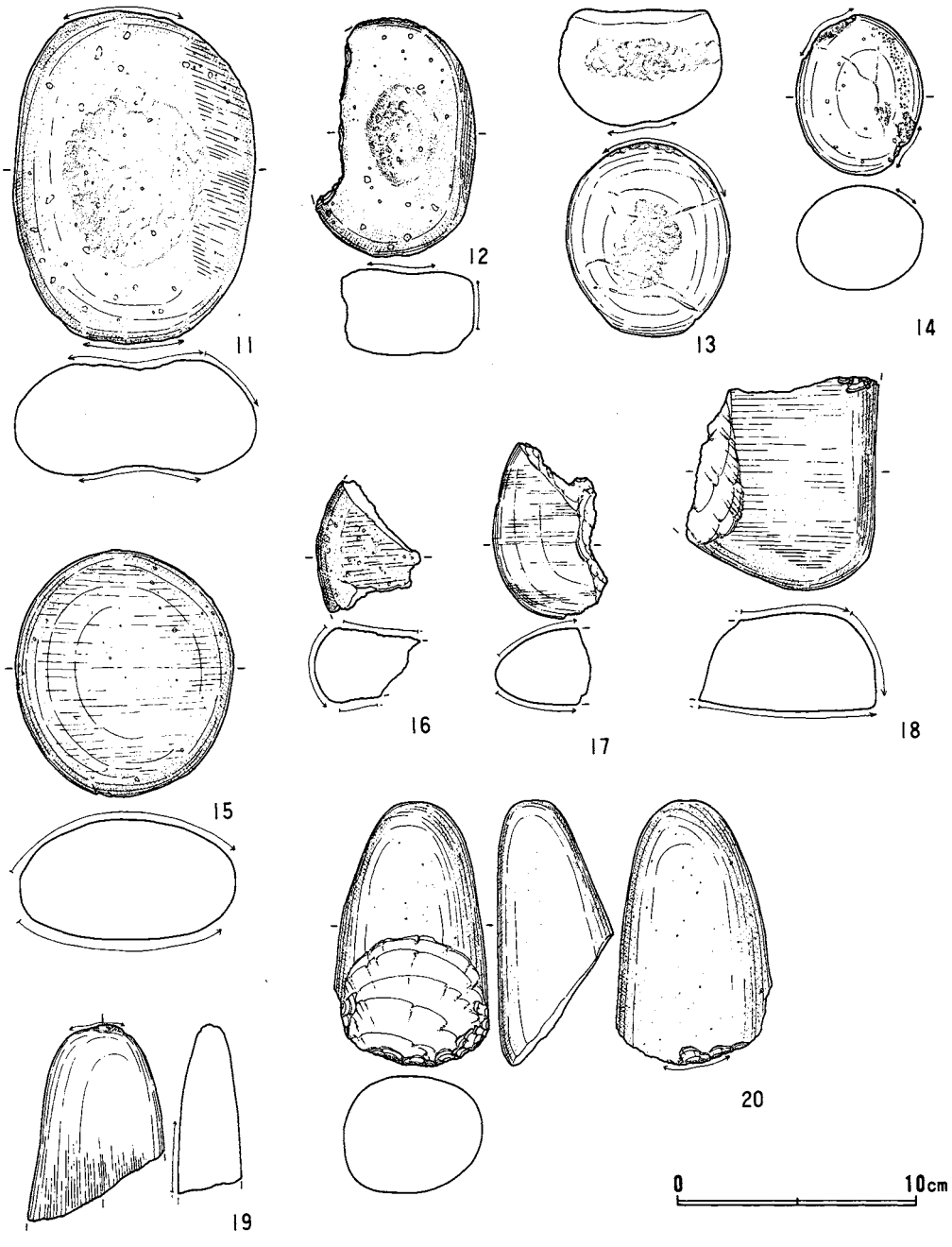
第247図　石　　器（1）(2/3)



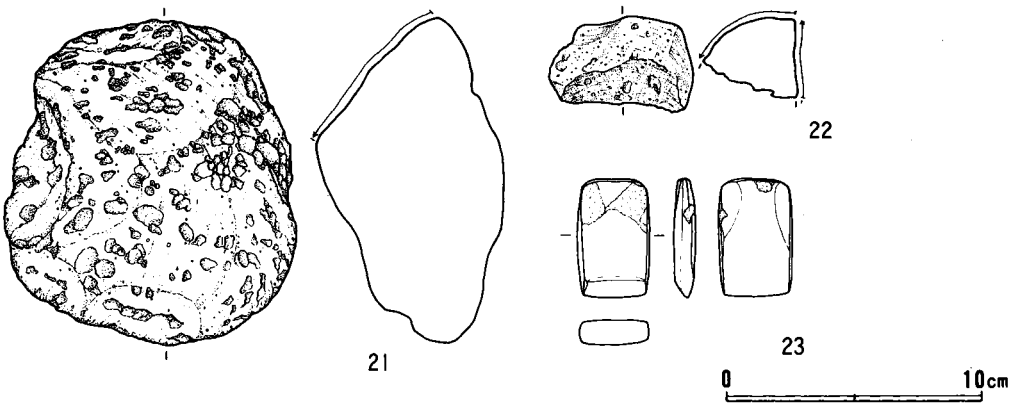
第248図　石　　器（2）(2/3)



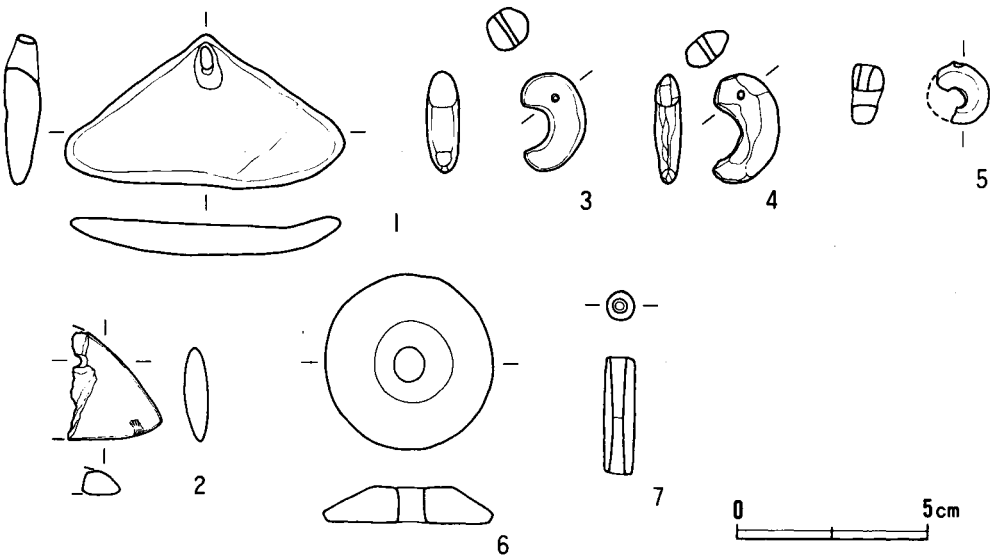
第249図　石　　器（3）(1/3)



第250図　石　　器（4）(1/3)



第251図　石　　器（5）(1/3)

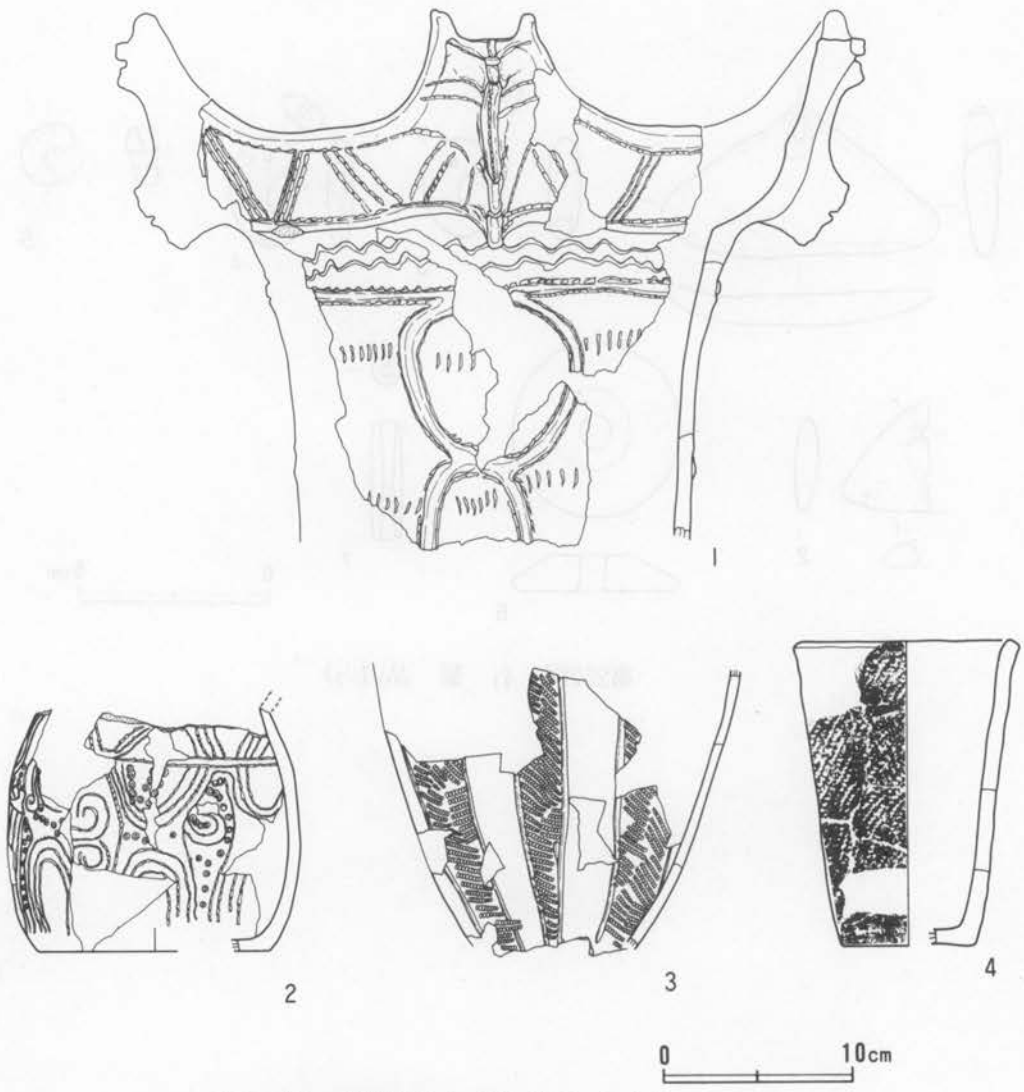


第252図　石　製　品(1/2)

7. 遺構外出土土器（第253～258図）

今回の調査で遺構外から出土した土器は遺構の量を反映してかなり多い。なかでも土師器が圧倒的に多く、縄文式土器、弥生式土器は少ない。ここではこれらの土器のうち比較的遺存度のよいものをとり上げて報告する。中心となるのは本調査において遺構外から出土したものであるが、確認調査時のトレンチ内出土の遺物のうち今回の調査区出土のもの及び遺構内から出土したが明らかにその遺構に伴わないと思われるものもあわせて報告する。

1は波状口縁を有する深鉢で図示の範囲で⅓遺存する。口縁部には粘土棒を芯とした隆起帯が中央に垂下し、角押文によって区画された文様帯に接している。頸部には波状沈線、角押文が施され、胴部には瓜形文や、隆起帯に沿って角押文が施される。口径は36.6cmを測る。2は



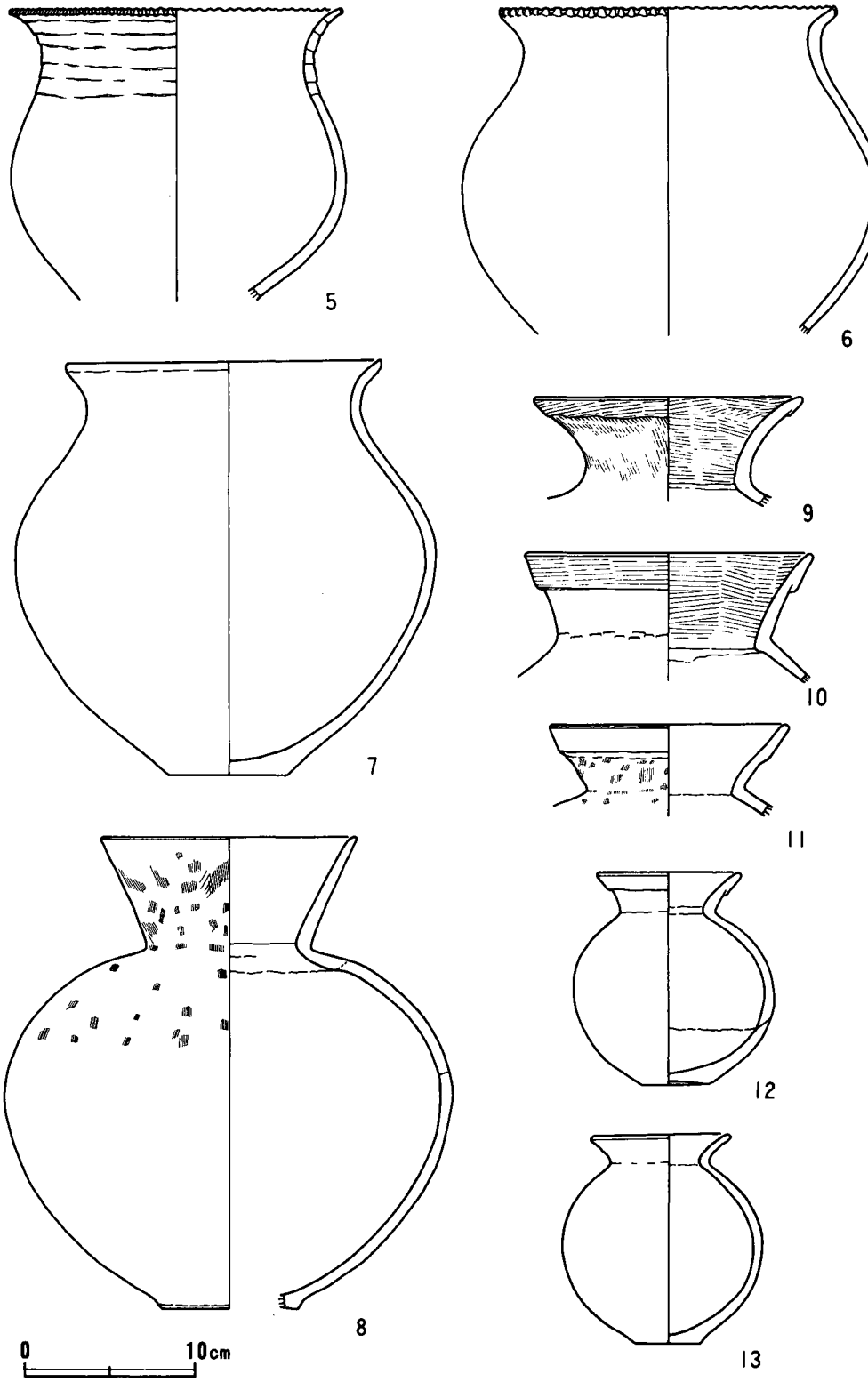
第253図　遺構外出土土器（1）（1/4）

胴部以下½が遺存する深鉢である。器面全体に有節線文と円形竹管文が施されるものである。底径は12cmを測る。3は胴部のみ½が遺存する深鉢である。磨消しの懸垂文が施される。原体ＬＲの縄文が充填される。最大径19.6cmを測る。4は小形の深鉢で⅗が遺存する。器面には原体ＲＬの縄文が施される。口径10.8cm、底径6.8cm、器高15.7cmを測る。5は底部を欠く甕で⅗が遺存する。口唇部には両側から押圧が加えられる。頸部には輪積み痕を残すが、部分的にナデによって消される。胴部外面と内面はナデが加えられる。胎土には中砂粒を含むが密で、焼成も良く、明褐色を呈する。口径は19.4cmを測る。6も底部を欠く甕で⅘が遺存する。口唇部には両側からの押圧が加えられる。外面上半はナデが加えられ、下半はヘラケズリの後ナデが加えられる。内面は粗くヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗く、焼成も悪い。茶褐色を呈し、口径19.6cmを測る。7は⅗が遺存する甕である。外面上半はナデが加えられ、下半はヘラケズリの後ナデが加えられる。内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。黒褐色を呈し、口径18.5cmを測る。8は⅗が遺存する壺である。外面は、口縁部～胴部上半にかけてはハケ目を施した後ヘラナデされ、胴部中位以下はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面は、口縁部～頸部にかけてはナデが加えられ、胴部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く、明褐色を呈する。口径14.8cm、底径8.0cm、器高27.4cmを測る。9は壺の口縁部破片で¾が遺存する。内外面共に粗いハケ目を施した後ナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は15.6cmを測る。10も壺の口縁部破片で⅙が遺存する。口縁部の外面と口縁部～頸部にかけての内面は粗いハケ目を施した後ヨコナデされる。その他はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや悪い。赤褐色を呈し口径16.6cmを測る。11も壺の口縁部破片で、口縁部は内外面共にヨコナデされる。頸部外面はハケ目を施した後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径は13.8cmを測る。12は⅘が遺存する壺である。口縁部はヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、やや粗いが焼成は良く明褐色を呈する。口径8.2cm、底径3.9cm、器高12.3cmを測る。13は完形の壺である。口縁部は内外面共にヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径8.0cm、底径3.8cm、器高12.1cmを測る。14は底部を欠く大形の壺で⅘が遺存する。口縁部と胴部外面はヘラナデされるが、わずかにハケ目が残る。胴部内面もヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、密だが焼成はやや悪い。明褐色を呈し、口径16.2cmを測る。15は胴下半部が⅗遺存する甕である。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。器面は火を受けているため遺存状態は極めて悪い。底部には焼成後の穿孔が認められる。また、内面にも穿孔を試みた痕跡がある。胎土には砂粒を含みやや粗いが焼成は良く、赤褐色を呈する。底径は6.8cmを測る。16は⅔が遺存する壺である。口縁部～頸部にかけては内外面共にナデが加えられる。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデさ

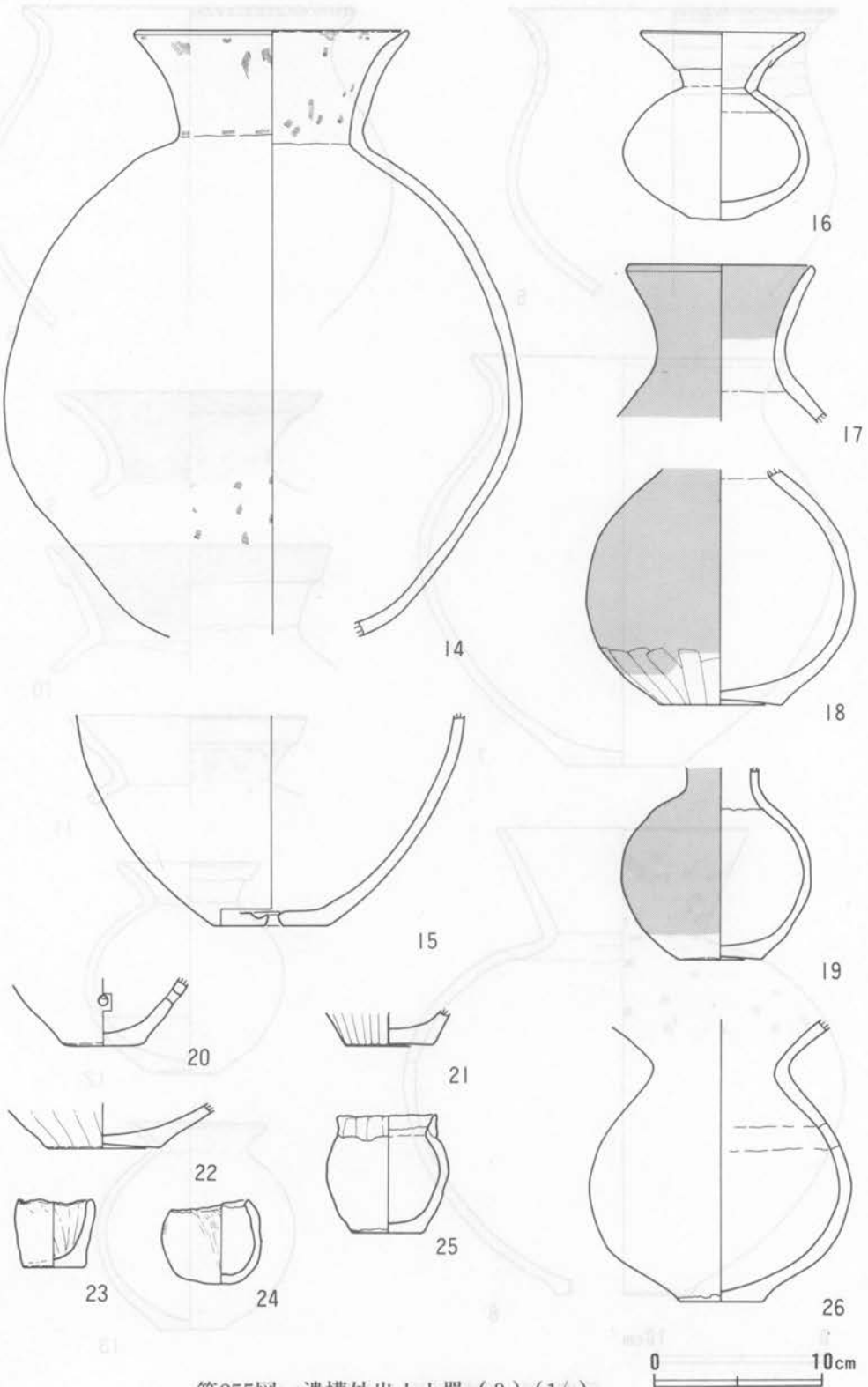
れる。内面は入念なナデが加えられる。胎土には中砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径9.6cm、底径3.0cm、器高11.2cmを測る。17は壺で口縁部～胴部上半が2/3遺存する。外面はヘラナデの後粗くヘラミガキされ、赤彩される。口縁部内面は粗くヘラミガキされ、赤彩される。頸部以下はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径は10.8cmを測る。18は頸部より上を欠く壺で2/3が遺存する。内外面共にヘラナデされるが外面の一部はヘラケズリされる。外面は胴部下半を除いて赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。底径は7.2cmを測る。19は口縁部を欠く壺で2/3が遺存する。胴部下半を除く外面はヘラナデの後粗くヘラミガキされ、赤彩される。その他はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤彩部以外は明褐色を呈する。底径は4.8cmを測る。20は胴部下半の破片で、内外面共にヘラナデされ、胴部には焼成前の穿孔が1孔認められる。胎土には砂粒を含み密だが焼成はやや悪い。赤褐色を呈する。底径は4.0cmを測る。21は底部破片で、外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径は5.2cmを測る。22も底部破片で、外面はヘラケズリされ、内面にはナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。底径6.6cmを測る。23は手づくね土器で3/5が遺存する。内外面共にナデによって仕上げられる。胎土、焼成共に良好で淡褐色を呈する。口径4.3cm、底径3.6cm、器高4.0cmを測る。24は完形の手づくね土器で、内外面共にナデによって仕上げられるが、外面には部分的にハケ目が残る。胎土には砂粒を含み、やや粗いが、焼成は良く黒褐色を呈する。口径4.5cm、器高4.9cmを測る。25も手づくね土器で3/4が遺存する。口縁部には接合痕が残り、内外面共に指頭によるオサエが加えられる。体部はナデによって仕上げられる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。淡褐色を呈する。口径5.8cm、底径4.0cm、器高6.9cmを測る。26は口唇部を欠く壺で3/5が遺存する。頸部は内外面共にヨコナデされる。胴部外面はヘラナデの後ヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で茶褐色を呈する。底径は5.0cmを測る。27は2/3が遺存する甕である。口縁部はヨコナデされるが、外面にはわずかにハケ目が残る。外面の胴部上半はハケ目が施され、中位以下はヘラケズリされる。内面はヘラナデされるが、底部にはハケ目が残る。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径16.7cm、底径4.8cm、器高19.6cmを測る。28は底部を欠く甕で3/4が遺存する。外面はハケ目が施された後ナデが加えられる。口縁部下端にはヘラによる刻みが加えられる。内面は、口縁部はハケ目を施した後ナデが加えられ、胴部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み密だが、焼成はやや悪く赤褐色を呈する。口径は19.5cmを測る。29も底部を欠く甕で5/6が遺存する。口縁部はヨコナデされる。胴部はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径は17.5cmを測る。30はほぼ完形の甕である。外面は口縁部～胴部上半にかけて粗いハケ目が施され、ナデが加えられる。中位以下はヘラケズリされる。内面は、口縁部はハケ目が施され、胴部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。茶褐色を

呈する。口径15.6cm、底径5.4cm、器高14cmを測る。31は⅔が遺存する甕である。口縁部はヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデされる。内面はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で、褐色を呈する。口径13.4cm、底径5.6cm、器高11.6cmを測る。32は頸部以下が½遺存する甕である。外面と内面上半にはハケ目が施される。内面下半はヘラナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。底径は5.0cmを測る。33は台付甕の脚部の½破片で、外面はハケ目を施した後ナデが加えられ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み密だが、焼成はやや悪く、明褐色を呈する。脚径は9.8cmを測る。34は甕の口縁部～胴部上半で⅔が遺存する。口縁部～頸部はヨコナデされる。胴部外面はヘラケズリされ、内面はナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径は16.8cmを測る。35は台付甕の胴部下半～脚台部で⅔が遺存する。外面はヘラケズリされる。胴部内面は粗くヘラミガキされ、脚台部内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く淡褐色を呈する。脚径は7.8cmを測る。36はほぼ完形の鉢である。体部は内外面共にナデが加えられ、口唇部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で褐色を呈する。口径10cm、底径4.6cm、器高4.7cmを測る。37は¾が遺存する埦である。口縁部はヨコナデされる。体部外面はヘラケズリの後ナデが加えられる。体部内面はヘラナデされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径9.2cm、底径3.2cm、器高8.5cmを測る。38は⅘が遺存する坏である。口縁部はヨコナデされる。体部外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。胎土・焼成共に良好で黒褐色を呈する。口径15.8cm、器高5.7cmを測る。39は底部を欠く坏で⅘が遺存する。口縁部はヨコナデされるが、外面にはハケ目が残る。体部はヘラナデされるが、胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は18.3cmを測る。40は⅔が遺存する坏である。口縁部はヨコナデされる。体部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径15.4cm、器高4.5cmを測る。41は坏の½破片で、外面の体部上半と内面はナデが加えられ、赤彩される。外面の体部下半はヘラケズリの後ヘラナデされる。胎土には中砂粒を含むが密で、焼成も良く赤彩部以外は明褐色を呈する。口径14.6cm、器高5.8cmを測る。42は⅔が遺存する高坏である。坏部外面はナデが加えられ、内面はヘラナデの後ナデが加えられる。脚部外面はヘラナデの後ナデが加えられ、内面はヘラケズリされる。脚裾部外面はヘラミガキされ、内面はヨコナデされる。外面と坏部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径15.4cm、脚径11cm、器高16.4cmを測る。43は高坏の坏部で¾が遺存する。脚部との接合部から分離したものである。内外面共ナデが加えられる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径は17.8cmを測る。44は高坏の脚部で⅔が遺存する。脚部外面はヘラナデの後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。脚裾部はヨコナデされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。脚径は15cmを測る。45は高坏の坏部で¾遺存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み密だが焼成はやや悪く、赤

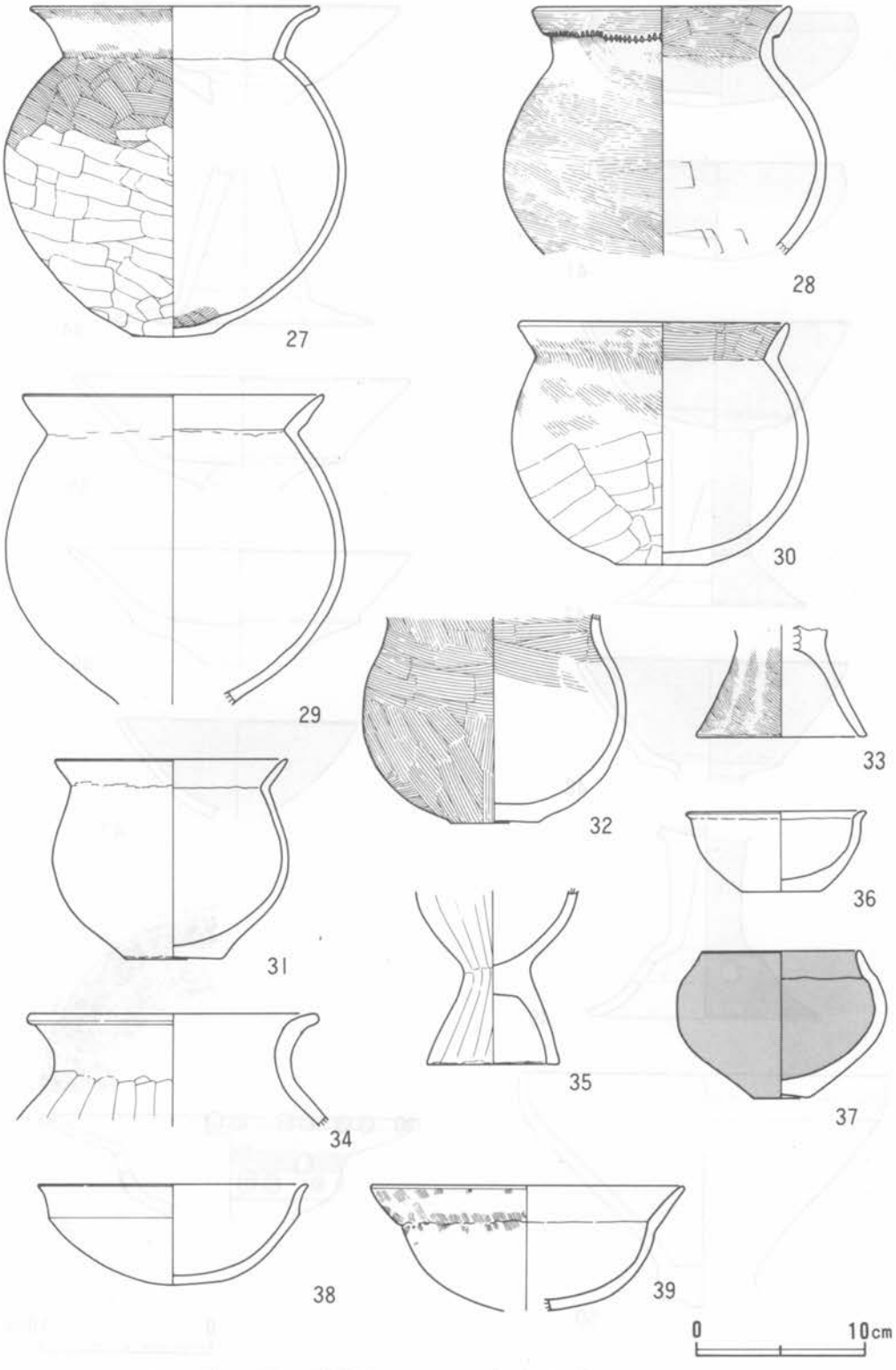
褐色を呈する。口径は19.6cmを測る。46も高坏の坏部で⅔が遺存する。外面はヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含み密だが焼成はやや悪く、赤褐色を呈する。口径20cmを測る。47も高坏の坏部で⅗が遺存する。内外面共にナデが加えられ、赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径は14cmを測る。48も高坏の坏部で½遺存する。外面はナデが加えられ、内面はヘラナデの後粗くヘラミガキされる。内外面共に赤彩される。胎土、焼成共に良好である。口径は16cmを測る。49は高坏の脚部で⅔が遺存する。外面はヘラナデの後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。脚孔は3孔であろうか。外面とわずかに残る坏部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は明褐色を呈する。脚径は13.4cmを測る。50は高坏の坏部か。口縁部はヨコナデされる。その他はヘラナデの後ヘラミガキされるが、外面のものは粗い。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈する。口径は21.4cmを測る。51は高坏の¼破片で、口唇部には刺突のある2個1組の円形浮文が付けられる。外面はナデが加えられるが、中位には櫛描平行線文が施され、透孔が6孔認められる。その下部には刺突のある2個1組の円形浮文が付けられる。内面上半には櫛描波状文が3段施される。下半はヘラミガキされる。胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径は22cmを測る。52は器台で⅔が遺存する。外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。胎土には砂粒を含みやや粗いが、焼成は良く褐色を呈する。口径7.4cm、脚径7.2cm、器高8.0cmを測る。53も⅔が遺存する器台である。内外面共に入念なナデが加えられるが、外面にはわずかにハケ目が残る。脚孔は3孔で、胎土、焼成共に良好で赤褐色を呈する。口径7.4cm、脚径10.8cm、器高7.8cmを測る。54は器台の脚部でやはり⅔が遺存する。外面は入念なナデが加えられ、内面はナデが加えられる。脚孔は3孔で、胎土・焼成共に良好で黒褐色を呈する。脚径は10.2cmを測る。55は器台の破片で⅚が遺存する。器受部は内外面共にナデが加えられる。脚部外面はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はナデが加えられる。外面と器受部内面は赤彩される。胎土・焼成共に良好で、赤彩部以外は淡褐色を呈する。口径は7.0cmを測る。56は器台で⅘遺存する。内外面共にヘラナデされるが、脚部内面にはハケ目が残る。外面と器受部内面は赤彩される。胎土、焼成共に良好で、赤彩部以外は褐色を呈する。脚径は7.8cmを測る。57は⅕が遺存する器台である。外面はヘラナデの後粗くヘラミガキされる。器受部内面はナデが加えられた後粗くヘラミガキされる。脚部内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径9.1cm、脚径12.6cm、器高12.3cmを測る。58も器台で⅔が遺存する。外面はヘラナデの後粗くヘラミガキされる。器受部内面はナデが加えられた後粗くヘラミガキされる。脚部内面はヘラナデされる。胎土には砂粒を含みやや粗く、焼成もやや悪い。赤褐色を呈する。口径8.5cm、脚径11.4cm、器高10.2cmを測る。



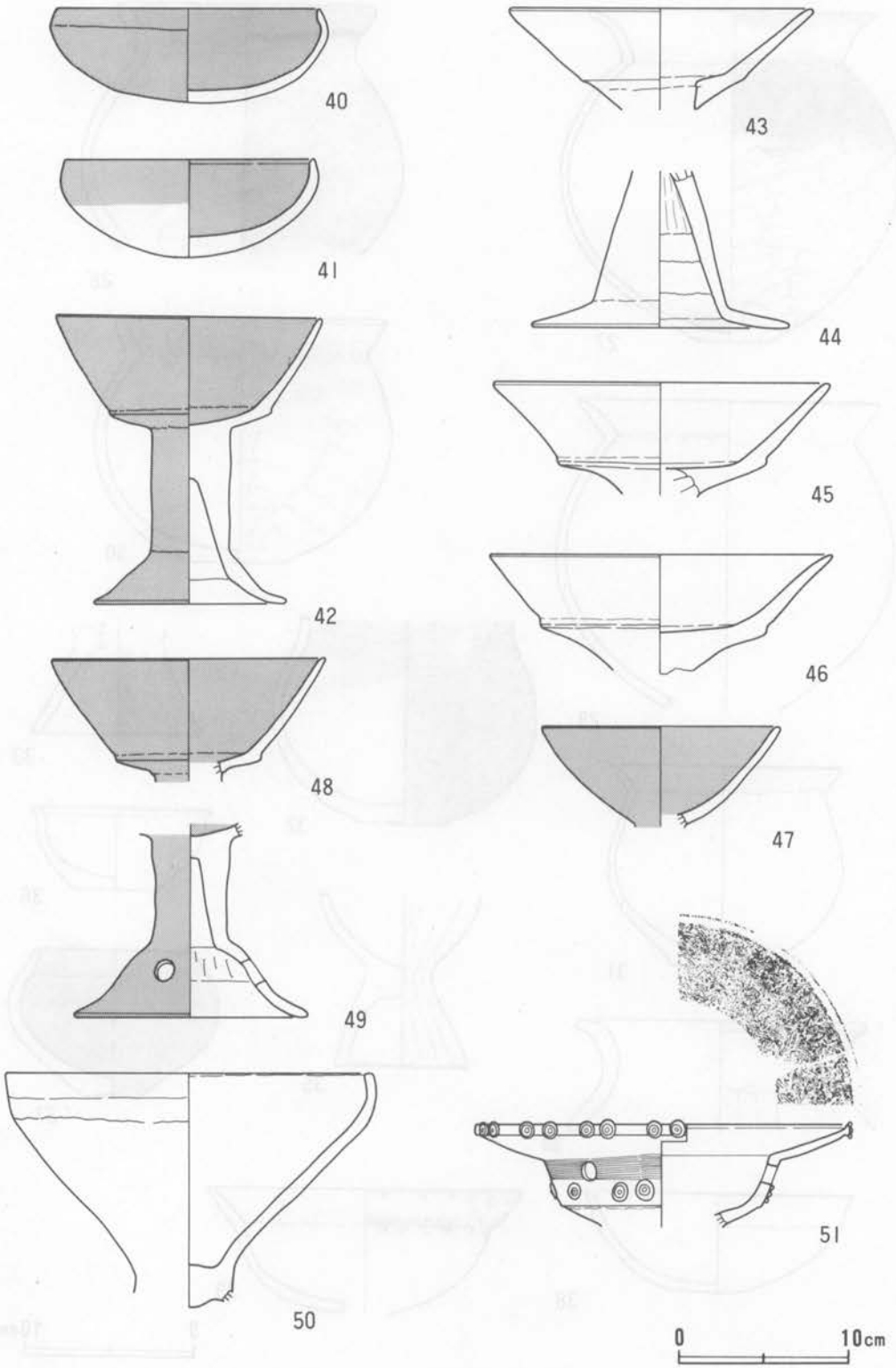
第254図　遺構外出土土器（２）(1/4)



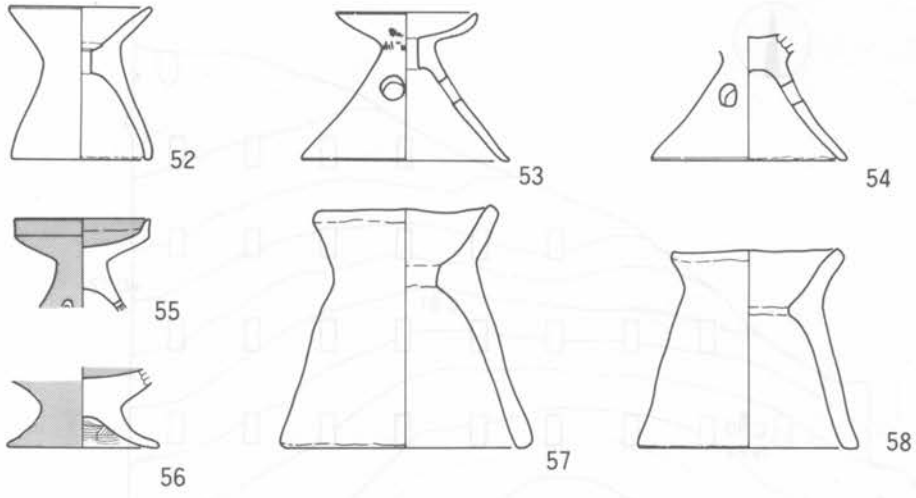
第255図　遺構外出土土器（3）（1/4）



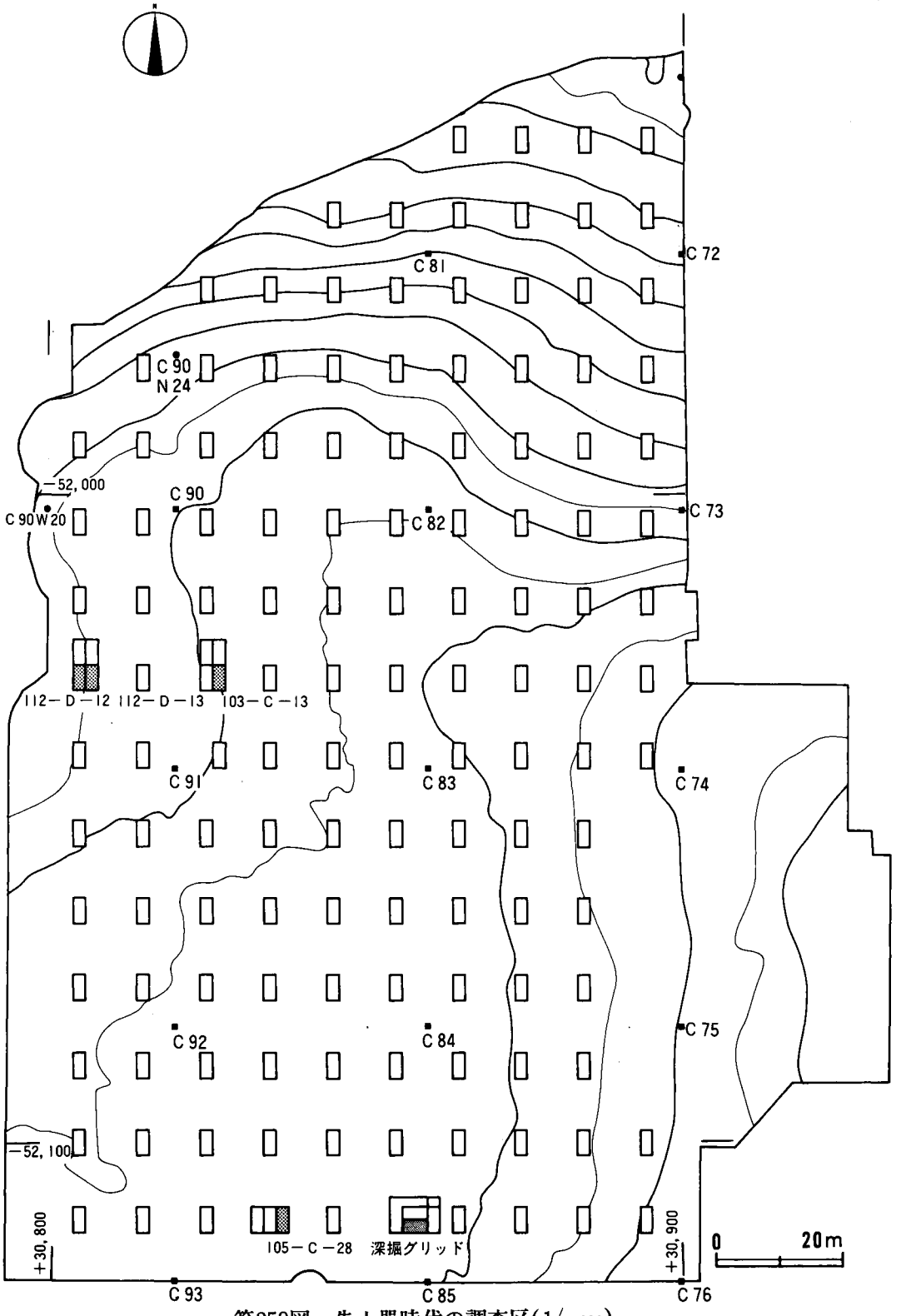
第256図　遺構外出土土器（4）（1/4）



第257図　遺構外出土土器（5）（1/4）



第258図　遺構外出土土器（6）（1/4）

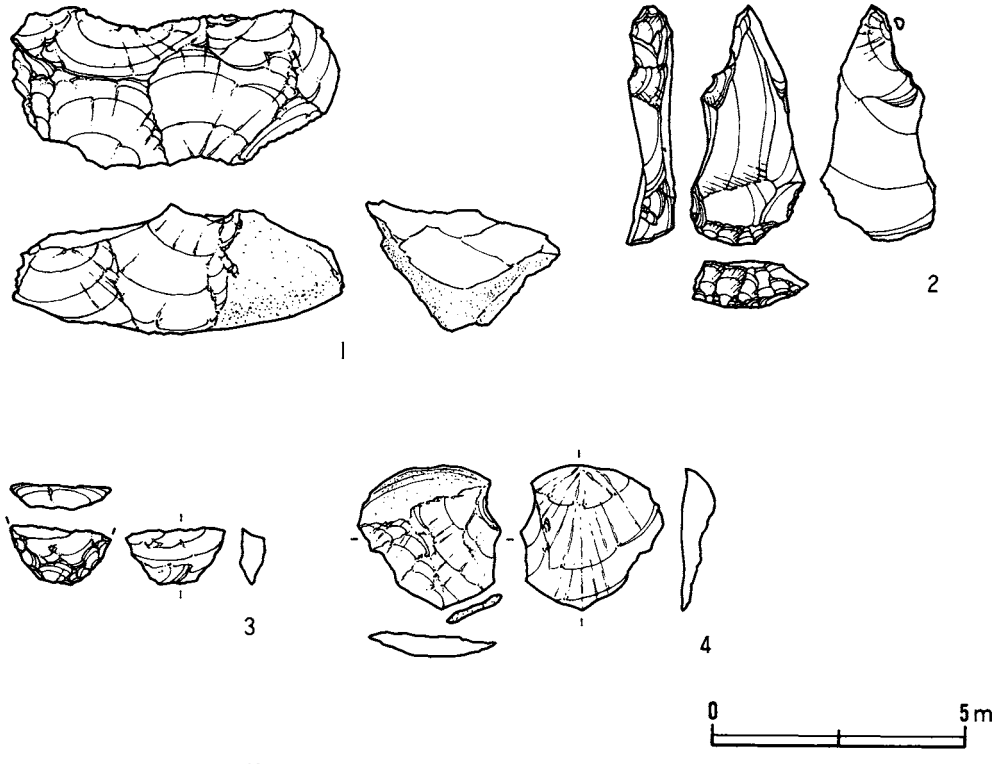


第259図　先土器時代の調査区(1/1,000)

8. 先土器時代の遺物（第259・260図）

先土器時代については前述の方法で調査を行い、その調査区は第259図に示す通りである。その結果4つのグリッドから遺物が出土した。

第260図1は105－C－28グリッドのⅣ層から出土した玄武岩製の石核である。背面に自然面を残し、横断面三角形の分厚い剥片を素材としたものである。2は103－C－13グリッドのⅣ層から出土したチャート製のエンドスクレイパーである。不整形横長の剥片を素材としたものである。彎曲した剥片の末端部に切り立った剥離を施し、刃部を作出する。3は112－D－13グリッドのⅣ層から出土した黒曜石製のポイントの基部破片と思われるものである。4は112－D－12グリッドのⅢ層から出土したメノウ製の剥片である。一部に自然面を残す。



第260図　先土器時代の石器(2/3)

第3節　まとめ

草刈遺跡A区の調査は前述のような成果を得て終了した。個々の遺構・遺物については既に述べたので、ここではこれらの遺構・遺物の内容を整理し、第1次調査のまとめをしておきたい。

1.　確認調査の成果について

草刈遺跡においては、今回の本調査に先立って確認調査を実施した。その内容の一部については既に紹介したことがある（小久貫1980）。しかし確認調査の内容の検討は極めて不十分なものであったので、ここでは第1次調査分について若干の検討をしてみたい。

今回の調査で検出された遺構の総数は131であるが、このうち、確認調査の時点で存在が明らかになっていたものは49遺構である。まず、住居跡についてみてみると、総数92遺構のうち確認できたのは29遺構で全体の約⅓である。しかし、トレンチとトレンチの間に存在するものが23遺構、また、本来トレンチ内に存在するが諸々の理由により、トレンチが設定できないため、確認できなかった住居跡が4遺構あるので、これを除くとトレンチ内に存在するものは65遺構となる。したがって本来なら全住居跡の⅔が確認できたわけである。トレンチ内に存在しながらも29軒しか確認できなかった原因には、1、斜面部に位置し、確認が困難であること。2、遺構の遺存度が悪いこと。3、攪乱を受けていること。4、重複が著しいことなどが考えられる。調査に当たっては、こうした原因が複合し、確認をより困難なものにしている。実際、今回の調査区内においても西側の斜面に位置する住居跡の多くは確認できなかった。確認調査においては、斜面部はトレンチの拡張等で対応し、十分な注意を払うべきである。

方形周溝（墓）、円形周溝（墓）については、それぞれ1基を除いてすべて確認することができた。住居跡と異なり、相当の規模を有するこうした遺構については、今回の確認調査でも十分な結果を得られたと言える。なお、古墳は確認調査の時点で既に主体部が検出されていたものである。土壙はその大部分が確認できなかった。規模が小さくトレンチにかからなかったためである。今回は数的に少なかったため、本調査の期間等に影響を与えることは少なかったが、こうした遺構についても分布範囲、性格を十分把握するよう注意を払うべきであろう。

今回の調査区内における確認調査の内容は本調査の成果から考えて、個々の遺構軒数（特に住居跡）の把握という面でやや問題を残したが、遺構の性格・展開の把握という面で当初の目的をほぼ達成したと言える。

2. 先土器時代

今回の調査において明らかに先土器時代に属する遺物は、グリッドから出土した4点だけである。いずれも散発的な出土状態を示し、明確に遺構としてとらえられるものではなかった。この4点の中には石核、エンドスクレイパー、ポイントがあり、石器群の存在を推定することも可能であるが、今回の調査では確認することができなかった。草刈遺跡および周辺の先土器時代の様相については不明確な点が多く、今後の調査に俟つところが大きい。

3. 縄文時代

今回の調査で確認された縄文時代の遺構、遺物は比較的少ないが、当台地はかなり早い段階から生活の舞台となっていたことが有舌尖頭器の検出によって明らかとなった。これは、93号跡という方形周溝（墓）溝底から出土したもので本来的な層位を特定できないが、今後の調査において縄文時代草創期の草刈遺跡の状況が明らかになる可能性が高い。

その後中期に至りはじめて住居跡が構築される。50、54、62号跡の3軒は阿玉台Ⅰb期に、41号跡は加曽利EⅢ期に属するものである。調査区内の阿玉台期の住居跡は炉跡が無いことを共通の特徴としており、柱穴は無いか、あっても1本である。この4軒の住居跡は昭和55年度に調査した草刈貝塚（阿玉台～加曽利E期にかけての住居跡、土壙が多数検出されている）の北側にあたり、貝塚部分との関わりの中でその性格を考えるべきで、ここでは50号跡出土の土器（第99図）に器形・文様構成、把手等の点で他型式（勝坂式）との融合がうかがえるということを指摘するにとどめておきたいと思う。

この他18基検出した土壙のうちの11基（116・117・119・121・122・123・124・125・126・127・128号跡）はほぼ同様の構造で、いわゆる落し穴とされているもので、時期を決定できる遺物はないが、縄文時代のものと思われる。

4. 弥生時代

弥生時代に属する遺構は5・6・9・11・20・29・34・37・38・43・45・55・58・60・63・71・88号跡の17軒の住居跡である。他に8・12・26・64・87号跡という5軒の住居跡も同期の可能性がある。

これらの住居跡のうち遺物の出土状態が良好なものは、9、11、43、55、58、71号跡の6軒である。まずこれらの遺物についてみてみたい。

9号跡出土の8点の土器はいずれも本跡に伴うものと考えられる。壺は縄文を沈線で区画し

たものである(１・２)。甕は輪積み痕を明瞭に残すもの(８)は少なく、１段だけ残すもの(６)や輪積み痕が消され、頸部にわずかに段を残すもの(３～５)が多くなる。

11号跡出土の６点もすべて本跡に伴うものと考えられる。壺は縄文を沈線で区画したものである(１)。２は無文のものであろうか。甕は輪積み痕を明瞭に残すもの(５)、１段だけ残すもの(３)、わずかに段を残すもの(４)がある。

43号跡出土の15点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは１、５、７、９～12、14、15の９点である。壺は遺存状態の良好なものがないのでやや不明確であるが、沈線に代わってＳ字結節文が使用されてくる(１)。甕は頸部にわずかに段を残すだけである(14)。また、鉢が新たに加わってくる(７・15)。

55号跡出土の９点の土器のうち本跡に確実に伴うと考えられるのは１、３、４の３点である。壺は網目状撚糸文が主体となり、Ｓ字結節文や縄文も併用される(１)。甕は輪積み痕を残すが、部分的に消されるもの(４)と頸部にわずかに段を残すもの(３)とがある。

58号跡出土の８点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは１～３、６、７の５点である。壺は縄文が施文されるが、結節文で区画され(６・７)、または結節文だけ(１・２)となる。甕は明瞭に輪積み痕を残す(３)。

71号跡出土の14点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは１、２、３の３点である。壺は縄文を沈線とＳ字結節文で区画するものである(１)。甕は明確でないが、頸部にわずかに段を残すようである(２)。

以上の土器群を壺と甕に分けて整理すると次のようになる。

壺

Ａ　縄文を沈線で区画するもの　９号跡－１・２、11号跡－１

Ｂ　縄文を沈線・結節文で区画するもの　43号跡－１、58号跡－６・７、71号跡－１

Ｃ　結節文が主体となるもの　58号跡－１・２

Ｄ　網目状撚糸文が主体となるもの　55号跡－１

甕

ａ　輪積み痕を数段明瞭に残すもの　９号跡－８、11号跡－５、58号跡－３

ｂ　輪積み痕を数段残すが部分的に消されるもの　55号跡－４

ｃ　輪積み痕を１段明瞭に残すもの　９号跡－６、11号跡－３

ｄ　頸部にわずかに段を残すもの　９号跡－３～５、11号跡－４、55号跡－３、58号跡－４、71号跡－２

従来Ａの壺を久ヶ原式に、Ｃ、Ｄを弥生町式としてきたわけであるが、本遺跡においては過渡的とも言えるＢが存在する。甕ではａを久ヶ原式に、ｃを弥生町式としてきたわけであるが、本遺跡においてはａの亜種とも言えるｂが、ｃの亜種とも言えるｄが存在する。

ここで壺と甕の分類別の共伴関係をみてみたい。9、11号跡ではAの壺にa、c、dの甕が共伴している。58号跡ではBの壺にaとdの甕が共伴し、Cの壺にaとdの甕が共伴している。55号跡ではDの壺にbとdの甕が共伴している。これは、甕が従来言われてきたような変化を示さないが、壺は過渡的な様相を示すものが存在しながらも、ほぼ従来の変遷過程を示すようである。すなわち、縄文を沈線で区画する段階から沈線・結節文を併用する段階を経て、結節文・網目状撚糸文だけの段階へと変化するのである。したがって住居跡の変遷は、最初の段階　住居跡は9、11号跡で、他に63、88号跡もこの段階に含まれる。次の段階の住居跡は43、58、71号跡である。そして最後の段階が55号跡である。

これを住居跡群の展開からみてみると、最初の段階の住居跡群は調査区の東側に位置し、次の段階の住居跡群は西側に位置する。そしてそれぞれの住居跡群内に大形の住居跡（東側では88号跡、西側では43号跡）が1軒づつ存在する。この2軒は構造がやや異なるが、遺物が少ないということでは共通している。この遺物の少なさはこの住居跡の性格と関わりがあるのかもしれない。その中でも43号跡出土の広口壺とも言える土器（第90図9）は近年注目されている土器で、印旛・手賀沼系土器の中でも異質な土器とされている。器形・瘤状突起などからすると栃木県の二軒屋式土器との関連も考えられる。沈線と結節文が併用される段階の71号跡は、他の住居跡と離れ、単独で存在している。この住居跡には炉跡が存在せず、第142図1の壺が横倒しになって出土した。この土器はいわゆる「動かさずに使う土器」と言える。これらのことを考え合わせるとこの住居跡は時期的にはともかく、性格的には他の住居跡と異なる遺構であった可能性が高い。最後の段階に属する55号跡は土器の様相に加えて、立地、主軸の方位などから、今回の調査区内の住居跡よりも草刈B区で検出された住居跡との関連でとらえるべきであろう。いずれにしろ、弥生時代の集落は、草刈遺跡全体からすると、ほんの一部分を調査したにすぎない。今回の調査成果を踏まえ、総括的な検討が今後必要であろう。

5. 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、住居跡、方形周溝（墓）、円形周溝（墓）、古墳と多岐にわたるため、遺構毎に分けて整理してみたい。

（1） 住居跡

古墳時代初頭～中期に属する住居跡で、1、2、3、4、7、10、13、14、15、18、19、21、22、23、24、25、27、28、30、32、33、39、40、42、44、47、52、53、59、61、65、66、68、69、70、72、73、75、76、78、79、80、81、83、84、85の46軒である。この他の16、17、31、35、36、56、57、67、77、82、86、91の12軒の住居跡も同期の可能性がある。

これらの住居跡の中で重複している住居跡は、3、4号跡、21、22号跡、23、24号跡、27、

33号跡、30、31号跡、35、36号跡、39、56号跡、57、59号跡、66、67号跡、90、91、92号跡の21軒である。しかしこの中でその住居跡に本来的に伴う土器が出土し、また相互に比較できる量がある住居跡は全く無いと言っていい。わずかに23、24号跡出土９個体の土器が量的には比較に耐えうるが、いずれも覆土中から出土したもので、本来的な共伴土器として把えられるものではない。

したがってここではこれら58軒の住居跡について一括して出土土器の様相から検討してみたいと思う。これらの住居跡の中で、検討できる内容の土器が出土したのは１、10、14、15、28、52、66、70、73、75、79 の11軒である。まず、この11軒の土器からみてみよう。

１号跡出土の土器は床面よりやや浮いて出土したもので、焼土と共に住居跡に投棄されたものと思われるが、その出土状態からして一括の遺物として把えることができる。ハケ目を有する平底の甕（１～５）が多く、坏（７～11）や小型丸底土器（12～14）の出土も目立つ。

10号跡出土の土器は床面直上出土のものが多い。壺は口縁部に羽状縄文、胴部に網目状撚糸文を施すもの（１）で、甕には台付のもの（２・５・６・９）が多い。高坏は坏部に稜をもたないもの（７）である。

14号跡出土の土器は床面よりやや浮いて出土したものが多い。壺は直口縁のもの（１）で、外面はハケ目とヘラナデ、内面はヘラケズリされる。甕は口縁部が強く外反し、ハケ目が施されるもの（２～４）である。その他有段口縁の坏（５）や小型丸底土器（７）などがある。

15号跡出土の土器は床面よりやや浮いて出土したものである。甕は口縁部が強く外反しハケ目が施されるもの（１～４）である。口唇部には押圧の加えられるもの（１・３）もある。その他器台（５・６）がある。

28号跡出土の土器は床面直上出土のものが多い。壺はハケ目が施されるもの（１）と小形で口縁部と胴部に縄文が施されるもの（２）とがある。甕にはハケ目が施されないもの（３・４）と施されるもの（５・６）とがあり、後者は台付となり、口唇部に刻みが施されるもの(５)もある。高坏は坏部に稜を有し、ハケ目が施される（７・８）。

52号跡出土の土器は床面直上出土のものが多い。壺は直口縁で、口唇部に刻みが施される(1)。甕はハケ目を施すもの（４）は少なく、ヘラケズリ、ヘラナデされるもの（２・３）が多い。高坏は脚柱部が長くなり、やや中膨らみとなる（５）。その他、坏（６）もある。

66号跡出土の土器は床面直上出土またはそれに近いものが多い。壺は直口縁となるようである（１）。甕はハケ目を施すもの（７）は少なく、ヘラケズリ、ヘラナデされるもの(２～６)が主体となる。高坏は坏部に稜を有するもの（11）の他に、坏部が椀状を呈し脚部が広がるもの（13～16）が存在する。その他器台（17～19）があり、ハケ目が施されるもの（17）もある。

70号跡出土の土器は床面直上出土のものが多い。甕は口縁部が強く外反し、ハケ目が施されるもの（１・２）である。高坏は坏部に稜を有しないもの（３）である。その他坩（４・５）

や小型丸底土器（６）や器台（７・８）も存在する。

73号跡出土の土器は床面直上出土またはこれに近いものが多い。甕は直口縁でヘラケズリの後ヘラナデされるもの（１・２）である。高坏は坏部に稜を有するもの（４・５）である。この他坩（３・６・７）が存在する。

75号跡出土の土器は床面直上出土またはこれに近いものが多い。壺は直口縁のもの（１）である。甕はヘラナデ、ヘラミガキされるもので、口唇部には押圧が加えられる（２）。高坏は坏部に稜を有するもの（３）である。この他器台（４）や鉢（５）も存在する。

79号跡出土の土器は床面直上出土またはこれに近いものが多い。壺は少なく、甕の量が増加し、直口縁のものが主体となる。高坏は坏部に稜を有するもの（９・10・12）である。この他坩（７・８）や器台（14）も存在する。

以上出土土器の良好な住居跡についてふれた。これらの土器は本来的に遺構に伴うと考えられるもので、編年の際の基礎となるべきものである。ここではこれを手がかりに古墳時代の住居跡出土の土器を次の３期に区分した。

Ⅰ期　10、28、66、75号跡出土土器

Ⅱ期　１、14、15、70号跡出土土器

Ⅲ期　52、73、79号跡出土土器

この他Ⅰ期には23、32、68、69、76、78、80、81、83、85号跡出土土器が含まれる。Ⅱ期には２、３、７、13、18、19、21、22、24、25、33、40、42、44、47、53、59号跡出土土器が含まれる。Ⅲ期には30、39、61、72、84号跡出土土器が含まれる。

Ⅰ期は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての時期と考えられる。この時期は、壺には装飾を残すが、新たに器台が登場し、さらに高坏が坏部に稜を有するようになる時期としてとらえることができる。甕は平底のものが主体を占めるが、台付のものも存在する。

Ⅱ期は古墳時代前期（五領期）と考えられる。この時期は小型丸底土器の登場する時期である。甕は平底のものが主体を占め、ハケ目調整が多用される。壺は量が少なく、わずかに14号跡から直口縁のものが出土しているだけである。

Ⅲ期は古墳時代中期（和泉期）と考えられる。この時期は壺にかわって甕が主体を占める時期である。高坏は量が増加し、脚柱部が長くなる。また坩の量も多くなる。

以上古墳時代の住居跡出土の土器をⅢ期に分けた。このうち問題となるのはⅠ期としたものであろう。ここではⅡ期の土器へ続く要素が多いこと、換言すればⅡ期の土器群の要素の萌芽をもって古墳時代のものとしたわけである。この時期はいわゆる前野町式土器の問題もあり、各期の細分も合わせて今後の検討に俟ちたいが、時代の所属はともかく、こうした土器群が存在することは重要な意味を持つものと思われる。

次にⅢ期区分を住居跡群の展開からみてみよう。Ⅰ期の住居跡は調査区の東側の平坦面を中

心に存在する。そのあり方からすればいくつかのグループに分けることができそうである。II期の住居跡は調査区の北側の斜面を中心に存在する。重複や近接して存在する例があり、やはりいくつかのグループに分けることができるだろう。なお、II期とした70号跡は、II期の住居跡の展開からはずれるもので、土器の様相からしても、むしろIII期に含めた方がいいかもしれない。III期の住居跡は調査区の西側の平坦面に存在し、I、II期に比べて住居跡の数は減少する。

住居跡の形態は、I期→II期→III期という時間的経過の中で基本的には隅丸方形から方形へと変化する。

（2） 方形周溝（墓）

今回の調査では11基の方形周溝（墓）を検出した。この他調査区の南側にも方形周溝（墓）が存在することが確認されており、方形周溝（墓）群全体の分析は今後の調査を俟たなければならない。したがってここでは今回検出した11基についての整理と若干の検討を行っておきたいと思うが、ただ1基単独で存在する97号跡は、他の10基に比べて形態、構造等に著しい差があり、また遺構としてもやや疑問が残るものであるので、今回の検討からは除外しておきたい。

この10基の方形周溝（墓）は調査区の中央から南東に向ってほぼ連続して孤状に分布している。この部分は今回の調査区の中でも最も標高の高い部分である。

形態は、周溝が途切れて、台状部が前方後方形を呈する99号跡を除いて、周溝が方形に全周する形態を呈する。

重複している例は95・96号跡の1例だけでこれも覆土の状況からして時間的な差はあまりないものと思われる。重複しないまでも近接して存在する例が多く、周溝の歪みなどからして計画的な造営がうかがえる。

封土については今回の調査では全く確認できなかった。今回の調査区周辺は草刈遺跡の中でも最も表土の薄い部分であり、封土があったとしてもかなり低いものだったと思われる。また周溝内の覆土の観察においても、封土の存在を確認することはできなかった。方形周溝（墓）において封土はしばしば問題とされるが、今回の調査では封土の存在についての資料を得ることはできなかった。したがって、封土中に存在したであろう主体部についても確認することができなかった。

しかし、主体部の可能性の高いものとしては、99号跡の周溝底で検出した土壙がある。掘込み以外に何の施設も持たず、遺物も全く出土していない。本跡と同様の形態をとる埼玉県児玉郡塚本山33号方形周溝墓（増田他1977）や長野県下伊那郡田村原2号方形周溝墓（佐藤他1974）でも周溝底から土壙が検出されており、本例もこれに含まれるものと思われる。

方形周溝（墓）の年代を推定し得る遺物としては周溝中から出土した多量の土器をあげることができる。出土した土器はいずれも五領期の範疇に含まれ、それほどの時間的な差は認めら

れないものと思われる。ただ壺が主体を占めるものと、甕が主体を占めるものがあることは注意しておきたいと思う。

99号跡と共通した内容を持ついわゆる「小規模低盛土前方後方墳」については、既に田中新史氏によってその推移が跡づけられている（田中1977）。本例は田中氏がBII型とするものに比定され、それより発展した形態であろう。各地において発展した方形周溝墓の中から質の異なるものが出現してきた段階として本例を位置づけることができる。しかし、その差異は古墳にみられるように決定的なものでなかったことは今回検出した方形周溝（墓）が近接して存在していることが物語っている。

こうした形態を生み出した契機について、内的なものと見るか、あるいは外的なものと見るか意見の分かれるところであるが、これについては今後の課題としたい。その際これからの継続的な調査と土器の細かい分析が重要な鍵となることは言うまでもない。

（3） 円形周溝（墓）

今回の調査では8基の円形周溝（墓）を検出した。ここではこれら8基についての整理と若干の検討を行っておきたいと思うが、古墳である112号跡を切って構築されている111号跡は、周溝、遺物の出土状況などが他の円形周溝（墓）と著しく異なっており、古墳時代の遺構と断定できないので、今回の検討からは除外しておきたい。

この7基は立地の面から3つのグループに分けることができる。まず調査区の中央北寄りの斜面にかかる部分に104、105、106号跡の3基が近接して存在し、第1のグループを形成している。その西側に107、108号跡という2基が第2のグループを形成している。第2のグループの南側に109、110号跡という2基が第3のグループを形成している。

形態は、周溝が全周するもの（104・105・106・109・110号跡）と、周溝が北側で途切れるもの（107・108号跡）とに分けられる。

規模の面からは、第1のグループと第2のグループが径1.5m前後であるのに対し、第3のグループは径20m以上となる。

封土および主体部については方形周溝（墓）と同様確認することはできなかった。

円形周溝（墓）の年代を推定し得る遺物としては周溝中から出土した土器をあげることができる。

104号跡出土の8点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、4、5、8の3点である。105号跡出土の6点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、1～4の4点である。106号跡出土の5点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは1のみである。107号跡出土の10点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、1～3、5、6、8～10の8点である。108号跡出土の7点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、1～4、6、7の6点である。109号跡出土の8点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、1、2、5、6、8の5点である。110号

跡出土の10点の土器のうち本跡に伴うと考えられるのは、1～3、7～9の6点である。

以上の土器群のうち104、105、108、109、110号跡出土の土器は鬼高式の古い時期の特徴を示し、一応6世紀前半の年代を与えておきたい。このことは108号跡出土の須恵器の年代ともさほど矛盾しないものと思われる。106号跡出土の甕は特徴的な形態を示し、他の遺構との比較は難しいが、一応上記の5基とほぼ同時期と考えておきたい。107号跡出土の土器は、五領式の新しい時期の特徴を示し、一応5世紀初頭の年代を与えておきたい。したがって107号跡はこの7基のうちで最も古い円形周溝（墓）となるわけで、4世紀後半を中心とする方形周溝（墓）群との関係で重要な意味を持つものと思われる。

なお、調査時に封土が確認できなかったので、これらの遺構を円形周溝（墓）としてきたわけであるが、遺物の出土状態や周辺に多くの円墳が所在することから、これらの遺構は、封土の削平された古墳としてとらえておきたい。

（4） 古　墳

前述の円形周溝（墓）と異なり112号跡は、主体部の構造等より明らかに古墳としてとらえることができるものである。

封土は検出されず、後世の削平によって失われたものと思われる。

周溝は極めて掘込みの浅いもので本跡に伴うものかどうかやや疑問が残るものである。

主体部は軟砂岩の載石を用いた箱式石棺で、規模及び石棺内の状態からして単次葬のために作られたものと思われる。

出土遺物は石棺内から刀子が出土しただけであり、他に本古墳の年代を知ることができる遺物はない。

石棺の構造などからして、千葉東南部ニュータウン地区内で検出されている7世紀代を中心とした古墳とほぼ同時期と考えられる。

6. その他

その他時代不詳の遺構として土壙7基（113・114・115・118・120・129・130号跡）と溝（131号跡）がある。

土壙7基のうちでも他の遺構との重複によって、時代、時期が異なるものがあることは明らかであるが、いずれも本来的に伴う遺物を欠き、時代、時期を決定することはできない。

溝も70号跡や110号跡を切っていることにより、これらの遺構より新しいことは確実であるが、やはり本来的に伴う遺物を欠き、時代、時期を決定することはできない。本跡がほぼ南北に走っていることから、台地を限る溝とも考えられるが、南側のB区内に延びており、その内容が明らかになった段階で性格については改めて考えてみたい。

引用・参考文献

ア　大橋　信也　「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17　1979

岡本　孝之他　「新羽大竹遺跡」『神奈川埋蔵文化財調査報告書』17　1980

小久貫隆史他　「野馬堀遺跡・ばあ山遺跡他」『千原台ニュータウン』1　千葉県文化財センター　1980

カ　神之木台遺跡調査グループ　「神之木台遺跡における弥生時代の遺構と遺物」『調査研究集録』3　1977

菊池真太郎他　『千葉市城の腰・西屋敷遺跡』　千葉県文化財センター　1979

サ　斎木　勝他　『市原市菊間遺跡』　千葉県都市公社　1974

佐藤　甦信他　『田村原遺跡』　長野県下伊那郡豊丘村教育委員会　1974

三森　俊彦他　『市原市大厩遺跡』　千葉県都市公社　1974

杉山　晋作他　『古墳時代研究Ⅰ－千葉県市原市小田部古墳の調査－』　古墳時代研究会　1972

「房総における古墳の変革（前）、（後）」　『史館』6、7　1976

関根　孝夫　「網目様撚糸文のある後期弥生土器について」『ＭＵＳＥＵＭちば』7　1976

タ　田口　一郎他　「鈴ノ宮遺跡」『高崎市文化財調査報告書』4　1978

田中　新史　「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』63　1977

田辺　昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966

ナ　沼沢　豊他　『佐倉市飯合作遺跡』　千葉県文化財センター　1978

ハ　深沢　克友他　『研究紀要』3　千葉県文化財センター　1978

マ　増田　逸朗他　「塚本山古墳群」　『埼玉県遺跡発掘調査報告書』10　1977

「下田・諏訪」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』21　1979

ヤ　山田　友治　「房総における古式須恵器とその性格について」『史館』4　1974

第Ⅲ章　鶴牧古墳群の調査

第１節　調査の方法と経過

鶴牧古墳群の調査は、昭和54年５月７日から同年７月30日まで実施した。

当初の調査予定は、１号墳、２号墳の２基であったが、雑木の伐採後、新たに３号墳を確認し、１基を追加し合計３基が今回の調査対象となった。

調査は、まず調査区域内全域に４点の基準点を公共座標系の南北に沿って設定し、４点各間の距離は地形を考慮し任意とした。

各古墳の墳丘地形測量は同一台地上の比較的狭い地形上に位置する点を考慮し、広範囲に25cmコンターで測量した。

発掘区は、各墳ともに地形測量図から墳頂及び周溝位置を想定しセクションベルトとなる十字の土手を残す四区分法で設定し地山面まで全掘する方法をとった。

第２節　鶴牧１号墳

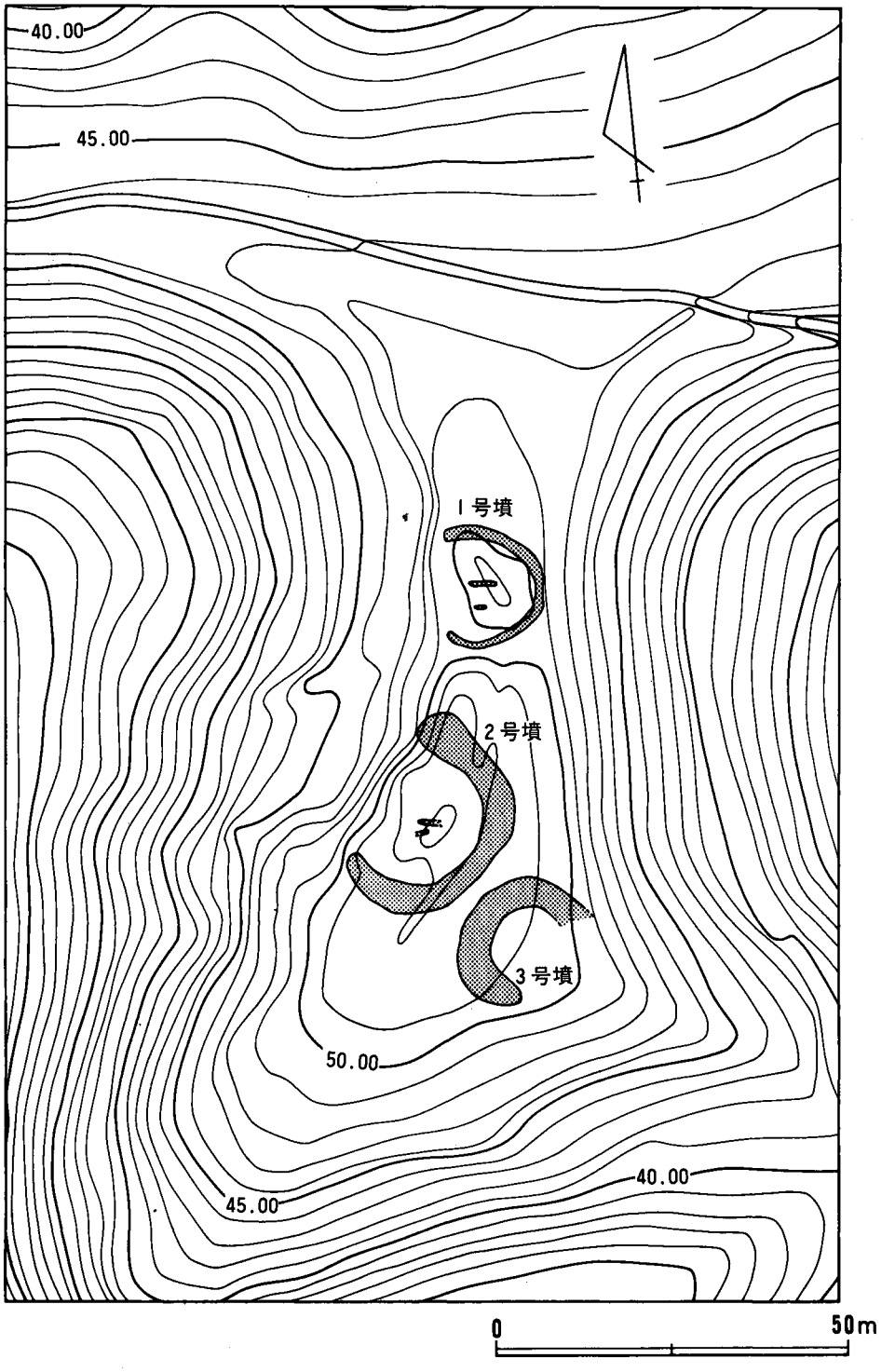
１．位置と外形　（第261・263図）

南北に張り出す舌状台地の、中央部やや北寄りの比較的平坦地に位置する。１号墳が立地する地形は、相対的には、北から南に向って、緩やかな上り傾斜となっており、１号墳の北側は、小規模なテラス状の平坦地があり、東西は、すぐに急斜面の下りとなる。また、南側には、２号墳が隣接する。１号墳墳丘の東部分を南北に山道が走り、若干、墳形に変形を加えているが、墳丘の全体的な残存状態は良好である。

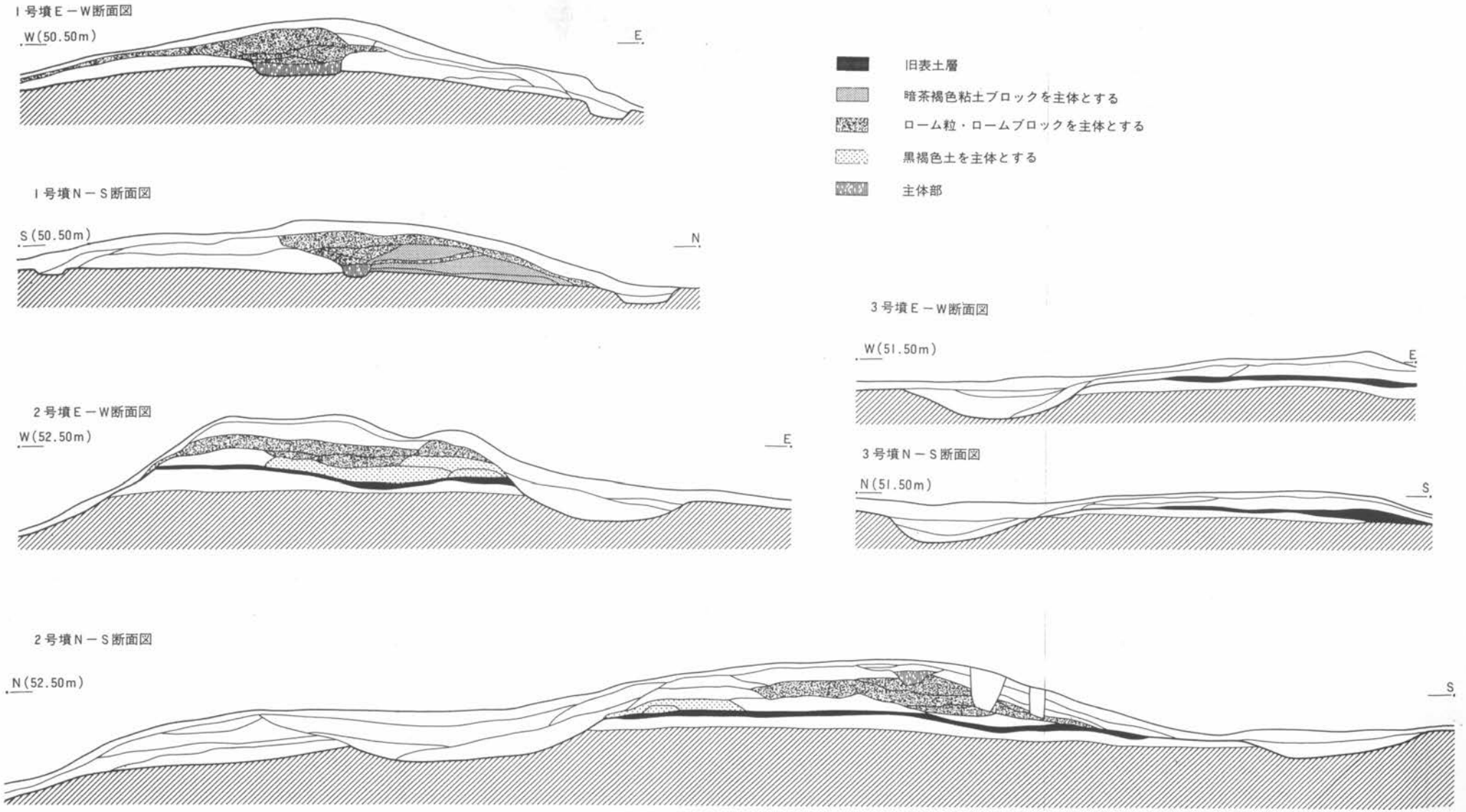
２．墳丘と周溝　（第262・263図）

西側部が周溝を欠く、外周直径約17ｍの不整形な円墳である。墳丘は地山と考えられる暗茶褐色粘土層上に構築され、現存する墳頂部までの高さは、1.4ｍを測る。墳丘築造は、地山である暗茶褐色粘土層を整形し、その上に盛土を積んで封土を形成する。

封土の状態は断面観察によると、地山を整地・整形し、その上にローム粒・ロームブロックを含まない褐色土・暗褐色土と、Ｎ－Ｓ断面図のＮ方向に見られるように暗茶褐色粘土ブロックを主体とする土を盛り、これらを盛った段階で主体部を形成し、その上にローム粒・ローム



第261図　鶴牧１・２・３号墳周辺地形図(1/1,000)

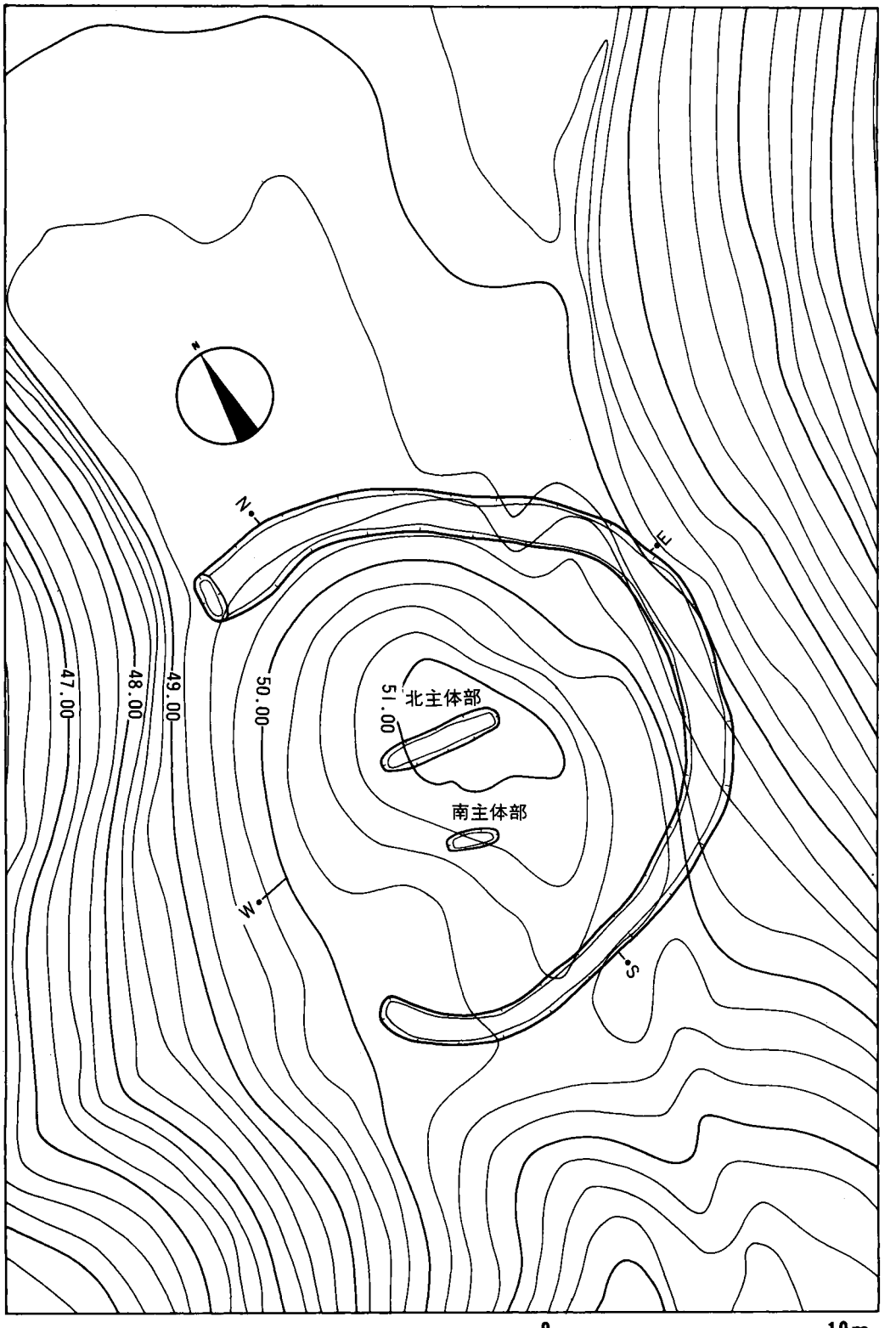


第262図　1・2・3号墳　墳丘・周溝断面図(1/120)

ブロックを主体とする土を積み墳丘を構築する。さらに、これをＮ－Ｓ断面のＮ方向部分で詳細に観察すると、地山整形後、その上に暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土とローム粒・ロームブロックを主体とする盛土とを互層に積み上げる。つまり、地山整形後、暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土を積み、さらにその上に一段、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土を比較的薄くではあるが、しっかりと固めたように積み、その上に再び暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土を積み上げている。この暗茶褐色粘土ブロックを主体とする土層は地山整形の際集積されたものと考えられる。

また、互層となっている暗茶褐色粘土ブロックを主体とする土層のうち上層のそれが若干主体部の方向へ落ち込んでいるのは、主体部が直葬の形態をとるため、埋葬後陥入したものと考えたい。また、Ｎ－Ｓ断面観察によれば、Ｎ方向部分では地山整形し、暗茶褐色粘土ブロック主体の盛土を積んだ直後、換言すれば、互層となる前のローム粒・ロームブロック主体の薄い土層で示されている盛土をする前段階で、主体部の土壙を掘り込んだと理解したい。Ｎ－Ｓ断面をさらに観察すると、Ｓ方向では、地山整形後に暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土は積まずに、ローム粒・ロームブロックを含まない褐色土を積んだ段階で主体部を掘り込む。主体部形成後、主体部を埋めかぶせるようにローム粒・ロームブロックを主体とする盛土を核として、墳丘を構築する。ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土は、中央部から西側、北側に偏って存在する。Ｅ－Ｗ断面においては、地山整形後、Ｅ方向、Ｗ方向とも、同様なローム粒・ロームブロックを含まない褐色土、暗褐色土を積み、主体部を掘り込み、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土を、やはり埋めかぶせるように積み上げ、墳丘を構築する状態が観察できる。Ｎ－Ｓ断面Ｎ方向にのみ、暗茶褐色粘土ブロック主体土層が確認できる現象を平面的に表現すれば、斜面の下り側である１号墳の北側半分、Ｅ－Ｗ断面にかからない範囲にのみ暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土が存在し、他の箇所はロームブロックを含まない褐色土を地山に積むという方法で、１号墳の北半分と南半分とで利用された盛土の相違が見られる。なお、１号墳占地の地山は暗茶褐色土層で特に北側で厚く堆積し、墳丘下の地山を約１ｍ掘ってもローム層は出現しないが、２号墳に近い側は、0.5～0.7ｍ程度でローム層の出現を見る。

１号墳の墳丘築造の工程を段階づけると、以下のように考えられる。第一段階は、旧表土層を削平し地山である暗茶褐色土層に至るまで地山整形する。第二段階は、北側にのみ暗茶褐色粘土ブロック主体の盛土を構築し、他の箇所はローム粒・ロームブロックを含有しない褐色土・暗褐色土を積み上げる。第三段階は、主体部の土壙を掘り込み埋葬する。その際、主体部の掘り込みは、地山にまで至る。そして、北側のみ、ロームブロック主体の盛土を薄く積み、再び暗茶褐色粘土ブロック主体の盛土を積み上げる。最後に第四段階として、ローム粒・ロームブロック主体の盛土を核として墳丘を完成する。



第263図　1号墳全体図(1/200)

周溝は、幅0.80～1.70m程、深さ0.30～0.50m程で、比較的狭く、浅く形成される。周溝と墳丘との間には、テラス等は介在しない。北西部には、周溝底面に、深さ約40cmの土壙が存在し、西端は急斜面直前で切れ、北－東を経て、南側で除々に浅くなり、幅を狭くして立ち上がる。なお、西側の急斜面下りには、周溝の存在は認められない。周溝のレベル水平比高は全体的に北側・東側で低く、南側で高い。周溝内の覆土は、自然堆積の状態を示している。また、周溝内の遺物は、共伴すると考えられるものは検出されなかった。

周溝内北端部に位置する土壙（第266図）は、注意深く発掘調査にあたったが、出土遺物は全く検出されなかった。規模は、南北約1.70m、東西約0.60mで南北に長軸をもち、深さ約0.7mを測る。なお、長軸は、周溝の外縁と一致し、周溝内に納まっている。土壙の東側は周溝底面から連続し、急激に落ち込み東壁を形成し、他の三面の壁は周溝の壁と一致する。底面・壁面ともに、比較的しっかりしており、底面はほぼ平坦で壁は比較的急傾斜を呈する。

3. 主体部（第264・265図）

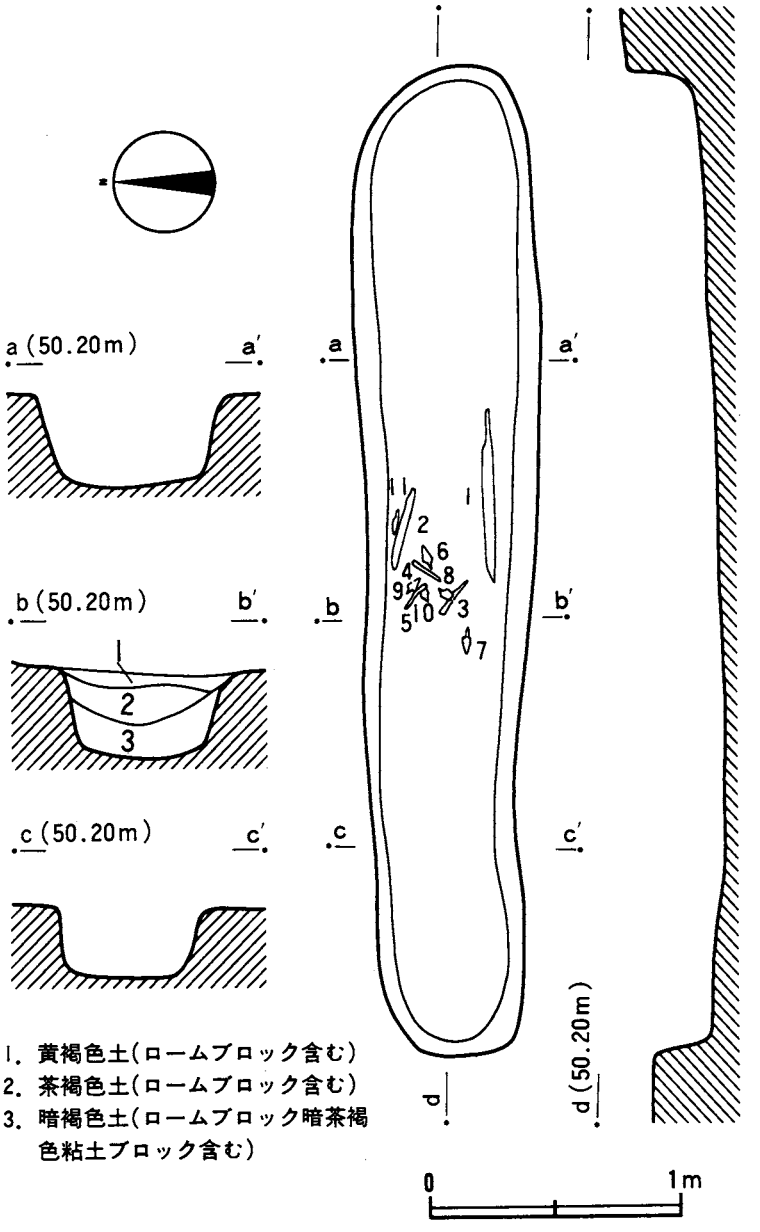
墳丘のほぼ中央に、主軸を東西方向にし並列の位置関係にある二基の主体部が検出された。ここでは、北側に位置する主体部を北主体部、南側の主体部を南主体部と呼称する。

北主体部

北主体部は、墳丘のほぼ中央、墳頂下に位置し、盛土の下層から地山である暗茶褐色粘土層を0.10m程掘込み、土壙を形成し、そこに直葬した形態を採る。木棺などの痕跡は見られず、土壙のみが明瞭に確認できた。

土壙は、主軸をほぼ東西方向にして、検出面において、長さ約4m、幅は東側で約0.76m、中央部で約0.66m、西側で0.58mを測り、相対的に東側より西側の方が狭くなる。深さは、検出面より0.30～0.35mを測り、底面はほぼ平坦で壁は多少傾斜する。この土壙は、墳丘の調査を四区分法によって実施した際、現存する墳頂部の表土下約1.20mの盛土中より確認された。この面は、地山である暗茶褐色粘土層の約0.25m上位である。北側は暗茶褐色粘土ブロック主体の盛土であり、それ以外はロームブロックを含まない盛土に囲まれている。土壙内の覆土は、ロームブロックを含み、このロームブロックを含む土層の範囲を平面的に確認し、平面プランが明瞭となった。なお、その際粘土塊は検出されなかった。

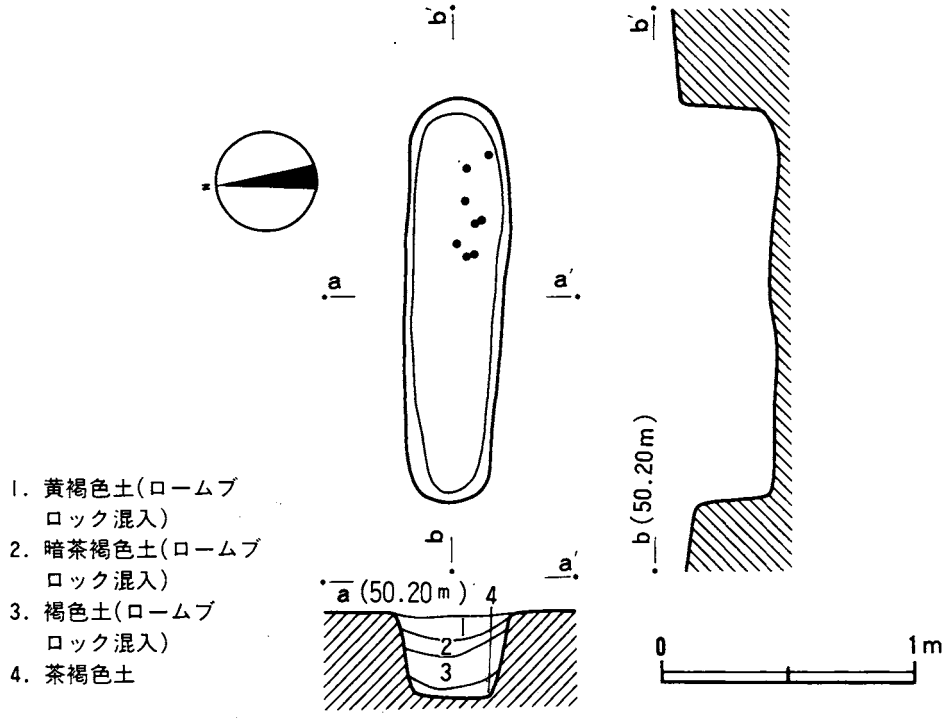
以上の点より、北主体部の構築過程は以下のように考えられる。墳丘断面で前述したように、まず、地山整形後、ある程度盛土を施したのち、土壙を掘込み、そこに直葬する。墳丘断面に示されたように、土壙壁面上端から延長状に、土壙を掘込む前段階の盛土が判断できる。また、



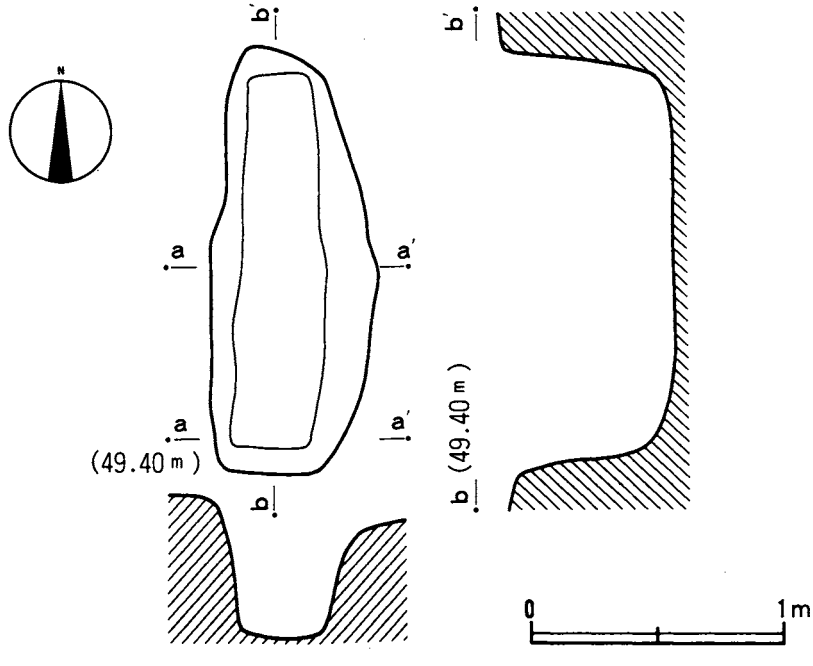
第264図　1号墳北主体部実測図(1/30)

土壙の深さをみると掘込みが地山まで達しており、また、検出面が地山面より約0.25m上部であったことから、そこに木棺等を用い直葬されたと考えてよい。そして、埋葬後、主にロームブロックを核として埋め、墳丘を完成させている。

土壙内の覆土は、盛土の落ち込み流入が考えられ、上層から、第1層黄褐色土、第2層茶褐色土、第3層暗褐色土と区別されるが、三層ともロームブロックを含有し、特に第3層には、暗茶褐色粘土ブロックも含有する。



第265図　1号墳南主体部実測図(1/30)



第266図　周溝内土壙実測図(1/30)

遺物は、直刀・刀子・鏃といった鉄器が壙内中央部ほぼ底面直上に集中して出土した。1の直刀は、東西方向の土壙の主軸にほぼ平行し南壁際で出土し、鋒を西に向ける。2の小刀は、1の直刀に対峙するように北壁際で、やはり鋒は西を指す。鉄鏃は、合計8点検出されたが、7のみ若干離れて出土した。8点とも壙内中央部に集中するが、鏃鋒の方向などには、共通性がなく、様々な向きを指す。

遺骸は遺存せずその埋葬形態の痕跡を留めないが、直刀を中心とした鉄器の出土状況等より推測すると、頭位を東に置き腰位に鏃を、その両脇に直刀を副葬していたと推測される。

南主体部

南主体部は、墳頂より約3.50m南へ寄った墳丘下約0.9mの盛土中に、土壙の形態をとって検出された。

検出状況は、北主体部同様、土色および土質の変化から捉えることができた。南主体部周囲の土はロームブロックを含まない褐色土であり、主体部の覆土がロームブロックを含む黄褐色土という相違により、平面プランが明瞭となった。その際、粘土塊は検出されなかった。

南主体部検出時のレベルは、北主体部のそれと、ほぼ同一レベルであり、検出面での周囲の土は、北主体部検出時の南側のロームブロックを含まない褐色土と同質であった。このことは、南主体部の形成は、北主体部の形成と同時期であることを考えさせる。

南主体部も北主体部同様、土壙を掘り込み、そこに、直葬したものと考えられる。木棺等の痕跡は全く見られず、土壙のみが明瞭に確認できた。

南主体部の土壙は、北主体部のそれとほぼ並列の位置にあり、長軸を東西方向にし、検出面において、長さ約1.6m、幅約0.38～0.42mを測る。北主体部のそれと比較して、小規模であるが、検出面からの深さはほぼ同等で約0.36～0.38mを測る。底面はほぼ平坦で壁は傾斜する。なお、底面は地山である暗茶褐色粘土層を約0.10m掘り込んだ位置にある。築造工程は北主体部と同様であろう。

遺骸は遺存していないが、遺物出土状況をみると、土壙内中央より東側に集中して玉類が出土したことより、北主体部同様東枕であったことが推定される。

4. 出土遺物（第267図～270図）

北主体部出土遺物（第267・268図）

北主体部より直刀1口、小刀1口、刀子1口、鉄鏃8点等が検出された。

刀（1・2・11・12・13）　1は、直刀で平造り平棟である。現存の全長67.3cm、刀身長、54.2cm、身幅2.5cm、棟幅0.7cmを測る。関は、錆化のためX線写真撮影によっても明瞭とはならなかったが、形状より、刃側の片関と考えたい。茎は先端部を若干欠損して、12.7cmを測

り、目釘孔をひとつ持ち、目釘が遺存する。鐔は無窓卵形で、約⅓が欠損する。長径7.8cm、短径6.3cmを測り、刀身に付着して遺存する。

2は、小刀で半造り平棟である。内返りが見られ、鋒を若干欠損するが、現存全長33.5cm、刀身長25.0cm、身幅2.2cm、棟幅0.7cmを測る。関はX線写真撮影により、棟側にあることが判明した。茎にも若干内返りが見られ、先端近くに、ほぼ円形の目釘孔がひとつある。鉄製の鎺が茎に付帯し、鎺の内部、茎との間には木質が残存する。

11は、刀子で、平造り平棟である。若干の欠損は見られるが、ほぼ完形で、現存の全長11.9cm、刀身長7.3cm、身幅は関部分で1.5cm、棟幅0.2cmを測る。茎は若干の欠損があるが、長さ4.6cm、幅0.7cmを測り、木質の遺存は見られない。関は両関で、関部に鎺を装着している。

12は、2の鞘金具、13は目釘と考えられる鞘金具は断面が楕円形で、長径2.4cm、短径1.5cmの円筒状を呈し、2片に割れ、その欠損は古い。目釘は断面が円状に近い隅円方形、頭部は単純な接頭式であるが、やや拡がりがある。幹部には木質が遺存しているが、首部までには達していない。

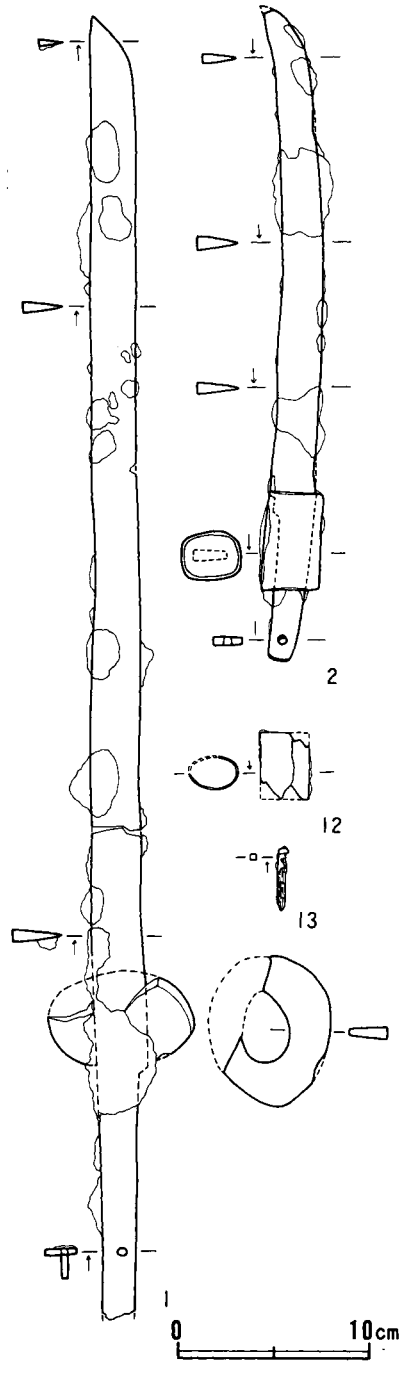
鉄鏃（3～10）計測値は第2表に示したとおりである。形状よりA類（3・4・5）、B類(6)、C類（7・8・9）、D類(10)と四分される。

A類（3・4・5）

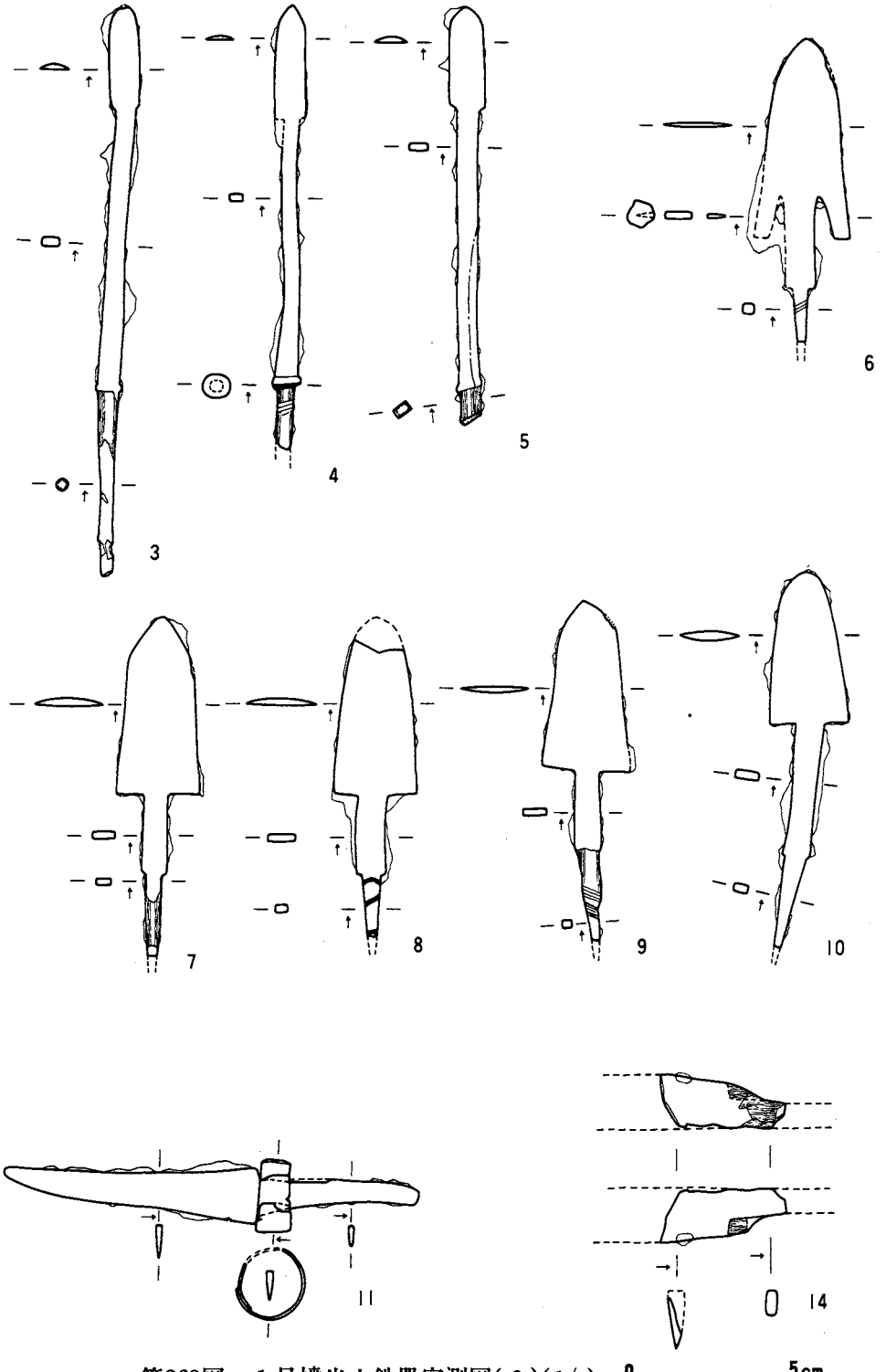
鏃身は片丸造尖頭式で、両関である。鏃身と篦代との間に篦被・棘が介在し、篦被は比較的長い。

B類（6）

鏃身は両丸造平根式で、腸抉がある。鏃身と篦被が介在する。



第267図　1号墳出土鉄器実測図(1)(1/4)



第268図　1号墳出土鉄器実測図(２)(1/2)

番号	現存全長	鏃身長	鏃身幅	篦被長	篦被幅	備考
3	16.5	2.9	0.8	8.2	0.5	鋒若干欠損
4	12.7	3.3	0.9	7.6	0.4	関錆化顕著
5	11.8	2.9	1.0	8.1	0.5	
6	8.8	4.5	2.8	2.7	0.8	腸抉錆化顕著
7	9.5	4.9	2.4	2.3	0.7	
8	8.3	4.3	2.4	2.3	0.8	鋒欠損
9	9.6	4.8	2.6	2.2	0.7	
10	10.6	4.3	2.2	3.9	0.8	

（単位cm）

第２表　１号墳北主体部内出土鉄鏃計測表

Ｃ類（7・8・9）

鏃身は片丸造平根式で、両関である。鏃身と篦代との間に短い篦被が介在する。

Ｄ類（10）

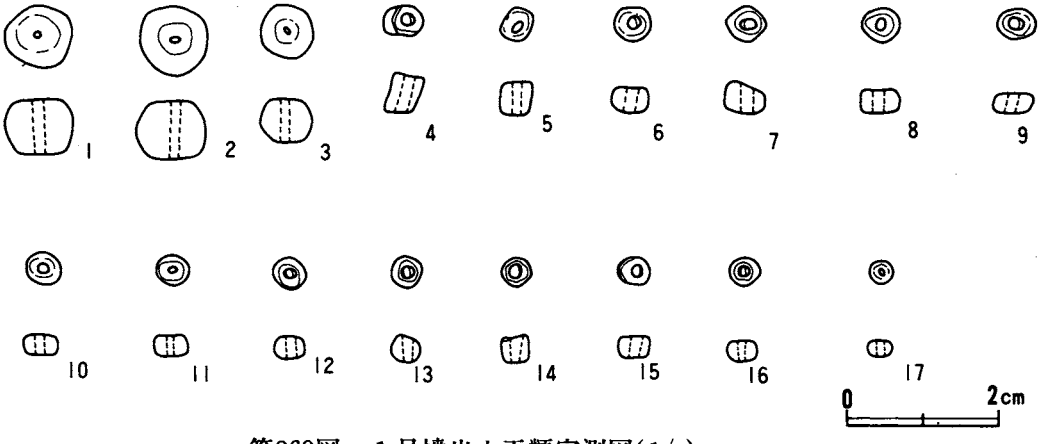
鏃身は両丸造平根式で、両関である。篦被はＢ・Ｃ類よりも長い。

南主体部出土遺物（第269図）

南主体部より丸玉３点、ガラス小玉14点が検出された。

丸玉（1・2・3）　1は、径8.2～9.0㎜、厚さ7.0～7.5㎜、2は、径8.8～9.2㎜、厚さ7.2～7.5㎜、3は、径6.5～7.0㎜、厚さ5.2～5.5㎜を測る。色調は共に、暗茶褐色を呈す。材質は不明である。

ガラス小玉（４～17）　径、厚さ、色調は第３表に示したとおりである。製作技法をみると、気泡が孔の方向に沿って伸びているので、細いガラス管を作り、それを輪切に切断したと考えられる。



第269図　１号墳出土玉類実測図(1/1)

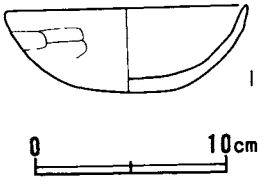
番号	名　称	径	厚　さ	色　調	備　考
4	小　玉	4.0～4.2	4.8～5.0	紫	
5	小　玉	4.4～4.5	4.0～4.2	淡青緑	
6	小　玉	4.5～5.0	3.0～3.1	緑	
7	小　玉	4.7～5.1	2.0～3.5	淡　青	
8	小　玉	4.5～5.0	2.8～3.0	濃　紺	
9	小　玉	4.0～5.0	2.2～2.5	緑	
10	小　玉	4.0～4.5	2.4～2.6	緑	
11	小　玉	4.3～4.5	2.5～2.7	黄	
12	小　玉	4.3～4.5	2.7～3.0	黄	
13	小　玉	4.0～4.2	2.5～3.5	青	
14	小　玉	3.6～3.8	3.0～3.5	緑	
15	小　玉	3.8～4.0	2.6～2.8	緑	
16	小　玉	3.7～3.8	2.5～2.6	濃　紺	
17	小　玉	3.0～3.3	2.0～2.2	濃　紺	

（単位mm）

第３表　１号墳南主体部内出土ガラス玉計測表

主体部外出土の遺物（第268・270図）

14は、刀子で標高50.70ｍの墳丘封土南部から出土した。刀身の関部分とその周辺のみ遺存し、関は片関で刃側にあり、関部分での身幅は1.4㎝を測る。関から茎にかけて木質が付着する。



第270図　１号墳周溝外出土遺物実測図(1/4)

１は、土師器の坏で、周溝外北側の標高49.18ｍの地点で、地山と考えられる暗褐色粘土層直上から破損した状態で出土した。約⅓欠損しているが、口縁径12.5cm、器高4.4㎝を測る。器面がかなり荒れているため調整は不明確であるが、内外面とも赤褐色の色調を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。

5．小　結

１号墳の調査で判明したことを要約すると次の通りである。

本墳は、外周直径約17ｍ、西側の周溝を欠く不整形な円墳である。墳丘の築造は、地山である暗褐色粘土層を整形後、盛土を積み上げ墳丘を構築している。主体部は、墳丘中央部に所在し、現存する墳頂下約1.20ｍの地点に北主体部、その南にほぼ同一レベルで並行して南主体部を形成する。その規模においては、北主体部が大きい。主体部内の施設は共に遺存せず、木棺直葬と考えられ、土壙のみが明確に検出された。

土壙は、共に長軸が東西方向を指し、その形成段階は、墳丘築造時の地山整形後、盛土を施した後に、土壙を掘り込み被葬者、副葬品を埋葬したものと思われる。両主体部の形成時間差

は、盛土の状態より察すると、ほぼ同時期の可能性が強い

出土遺物は、両主体部内出土が主で、特に北主体部からは、鉄製品の武器、南主体部からは、玉類の装身具と限定される。これは、埋葬時期の同時性および規模の相違等を考慮すると、被葬者の性別およびその因果関係を暗示している。

第３節　鶴牧２号墳

1．位置と外形（第261・271図）

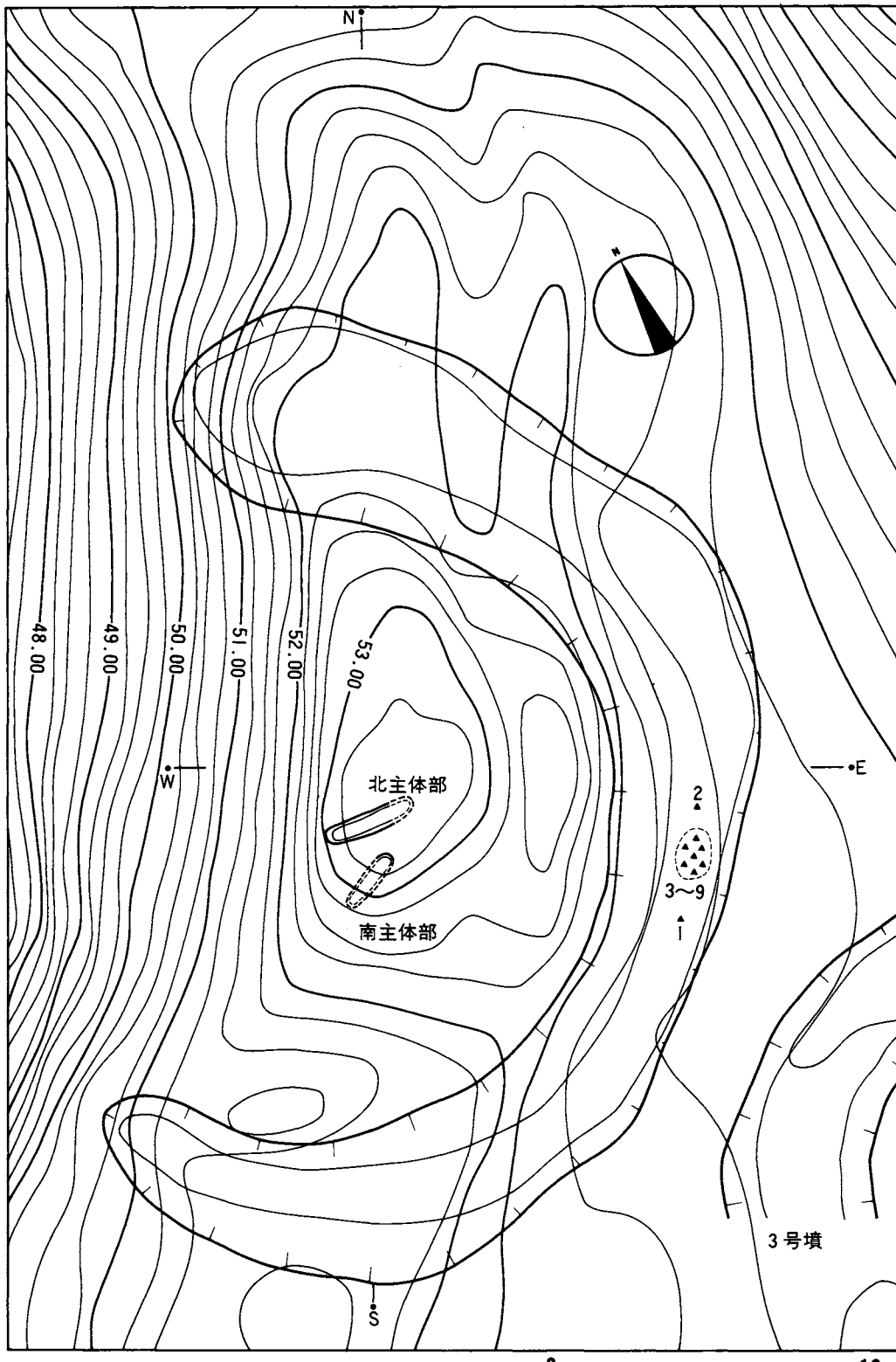
２号墳は、舌状台地の中央部に位置する１号墳の南側に隣接して所在する。西側は下りの急斜面で、東側と南側は比較的緩やかな下り斜面となる。また、南東には３号墳が隣接する。２号墳墳丘の東部分には、北から、墳頂近くでやや曲って南西へ山道が走り、墳形を変形させている。残存墳形は、墳丘測量によると、北東－南西に長い不整形態を呈する。

2．墳丘と周溝（第262・271図）

本墳は、西側に周溝を欠く、外周直径約27ｍの不整円墳である。墳丘は、当時の表土層と考えられる黒色土層上に構築され、現存の墳頂部まで、高さ約２ｍを測る。黒色土層は10～15cmの厚さで、その下層は褐色土のローム漸移層となり、ローム層へと続き、１号墳下で検出された暗茶褐色粘土層は出現しない。２号墳の封土の状態を断面によって観察すると、黒褐色土を主体とする盛土、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土、ロームブロックを含まない褐色または暗褐色を呈する盛土に大別でき、１号墳で確認された暗茶褐色粘土ブロックを主体とする盛土は存在しない。

Ｅ－Ｗ断面を観察すると、旧表土層の黒色土層は、墳丘中央よりややＥ方向に寄った所で、やや落ちているが、全体的にみると、比較的平坦でＷ方向では急斜面直前まで、また、Ｅ方向では周溝内壁面まで、途切れず連続している。墳丘築造の際、旧表土を整地した後、まず、黒褐色土を主体とする盛土を東から中央にかけて積み、西側は褐色土を積む。その後、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土を全体的にかぶせるように積み上げ、さらにロームブロックを含まない褐色土を積み、墳丘を完成させる。また、周溝と墳丘との間にはテラスの介在は見られない。

次に、Ｎ－Ｓ断面を観察すると、黒色土層は墳丘中央からＮ方向へは、直線的に周溝の内壁面までほぼ水平・平坦に、Ｓ方向へは、周溝手前2.6ｍまで曲線的に傾斜しながら連続する。黒色土層の上に黒褐色土を主体とする盛土を施しているが断面での出現は少なく、Ｎ方向の周溝に隣接した箇所のみで見られ、中央からＳ方向にかけてはローム粒・ロームブロックを含有しない褐色土となる。その上にローム粒・ロームブロックを主体とする盛土が中央からＳ方向へ積み上げられ、最後にロームブロックを含まない褐色土を盛って墳丘を完成する。Ｓ方向では、墳丘と周溝との間で、旧表土層と墳丘盛土を欠如する箇所が２ｍ程あり、テラス状になる。また、Ｎ－Ｓ墳丘断面に北主体部のセクションを表現しているが、南主体部は丁度、攪乱部分



第271図　2号墳全体図(1/200)

に一致し断面には表現されない。断面より判断すると、北主体部は、墳丘築造後、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土部分まで新たに掘り窪めた形態をとる。

断面観察より、墳丘構築の工程を平面的に考えると以下のようになる。まず、旧表土を整地後、黒褐色土を主体とする盛土を西側急斜面と反対の北東から東部分に積み、同レベルで、南西部分には、ローム粒・ロームブロックを含まない褐色土を盛る。次に、これら盛土の上に、南部分を中心として、ローム粒・ロームブロック主体の盛土を積み、さらに、ローム粒・ロームブロックを含まない褐色土を盛り墳丘を完成する。なお、2号墳周溝の底面は、ローム層まで達していることから、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土は、周溝掘削によって得たものと考えられる。

周溝は、西側の急斜面上には存在せず、幅は3～6mを測り、全体的に北部で幅広く南部で狭くなり、浅くなる。周溝のレベル水平比高は、ほぼ一定している。

ところで、N－S断面を観察すると、N方向で、2号墳周溝の外側にローム粒を主体とした小規模な盛土が見られる。この盛土の地山直上から鉄器（直刀・刀子）が検出された。この盛土は小型古墳になる可能性があるため、土色・土質の変化に注意を払って調査したが、鉄器出土地点およびその周辺には、土色等の変化は確認できず主体部とするには至らなかった。また、2号墳の周溝は、この盛土を削平して形成されていることから本墳周溝構築以前に築造された何らかの施設であろうと想定される。

3. 主体部（第272図）

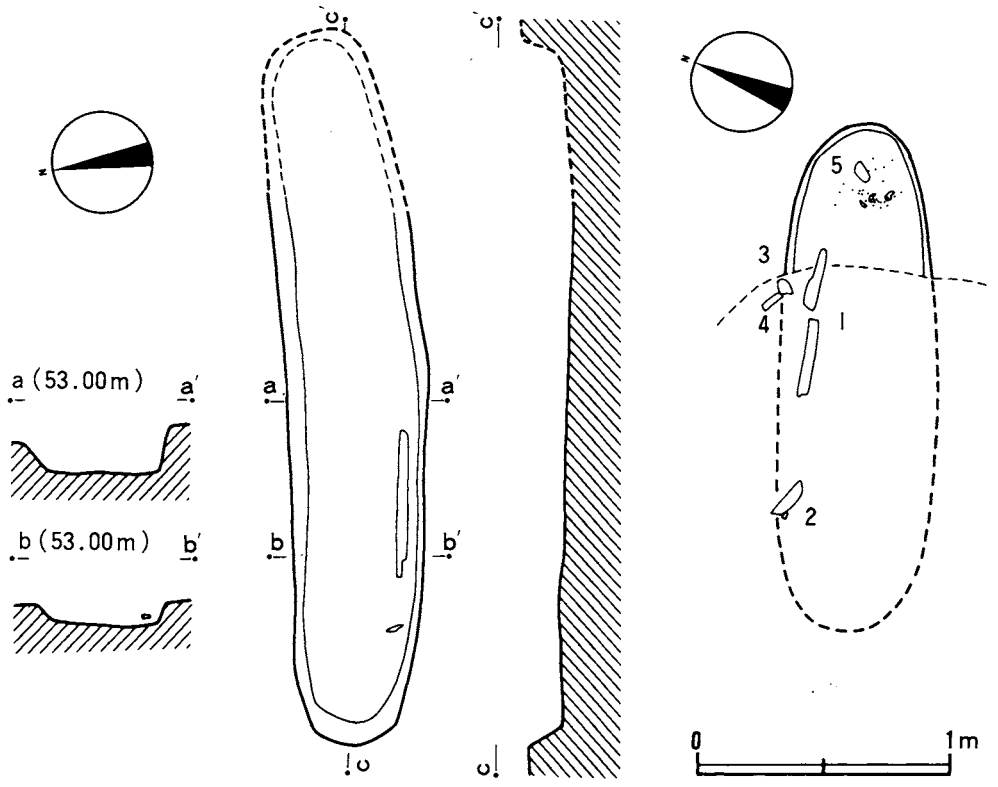
主体部は、墳丘中央より若干南に偏って、主軸をほぼ東西方向にして、並列に近い状態で検出された。ここでは、北側を北主体部、南側を南主体部と呼称する。これらは直葬と考えられ1号墳の主体部と比較すると、位置的には、墳丘盛土の高位置に存在する。

北主体部

北主体部は、現存の墳頂下約0.4mで、素掘りの土壙として検出された。木棺等の痕跡は検出されない。主軸をほぼ東西方向にしているが、東部分が欠失しているので推定全長約2.85m、幅0.50～0.58m、検出面からの深さ0.15～0.20mを測る。

主体部の検出作業は、1号墳の主体部検出例を考慮し、四区分法により土色の変化等に注意を払って掘り下げた。

N－S断面に北主体部の断面が表現されているが、それを観察すると現存の墳頂部直下から掘り込みを確認できる。土壙はロームブロック主体の盛土を掘り込んでおり、検出面では、土壙内覆土がロームブロックを含有していないため、プランを確認し得た。なお、東部分は攪乱により欠失していた。



第272図　2号墳北主体部(左)、南主体部(右)実測図(1/30)

南主体部

北主体部の南に位置し、主軸をやや南に偏った東西方向にもつ。南主体部は北主体部同様に素掘り土壙の形態をとる。木棺の痕跡などは判明していない。形状・規模は、その大部分が松の根による攪乱の存在によって、不明瞭であり、僅かに東側の一部分のみが確認された。

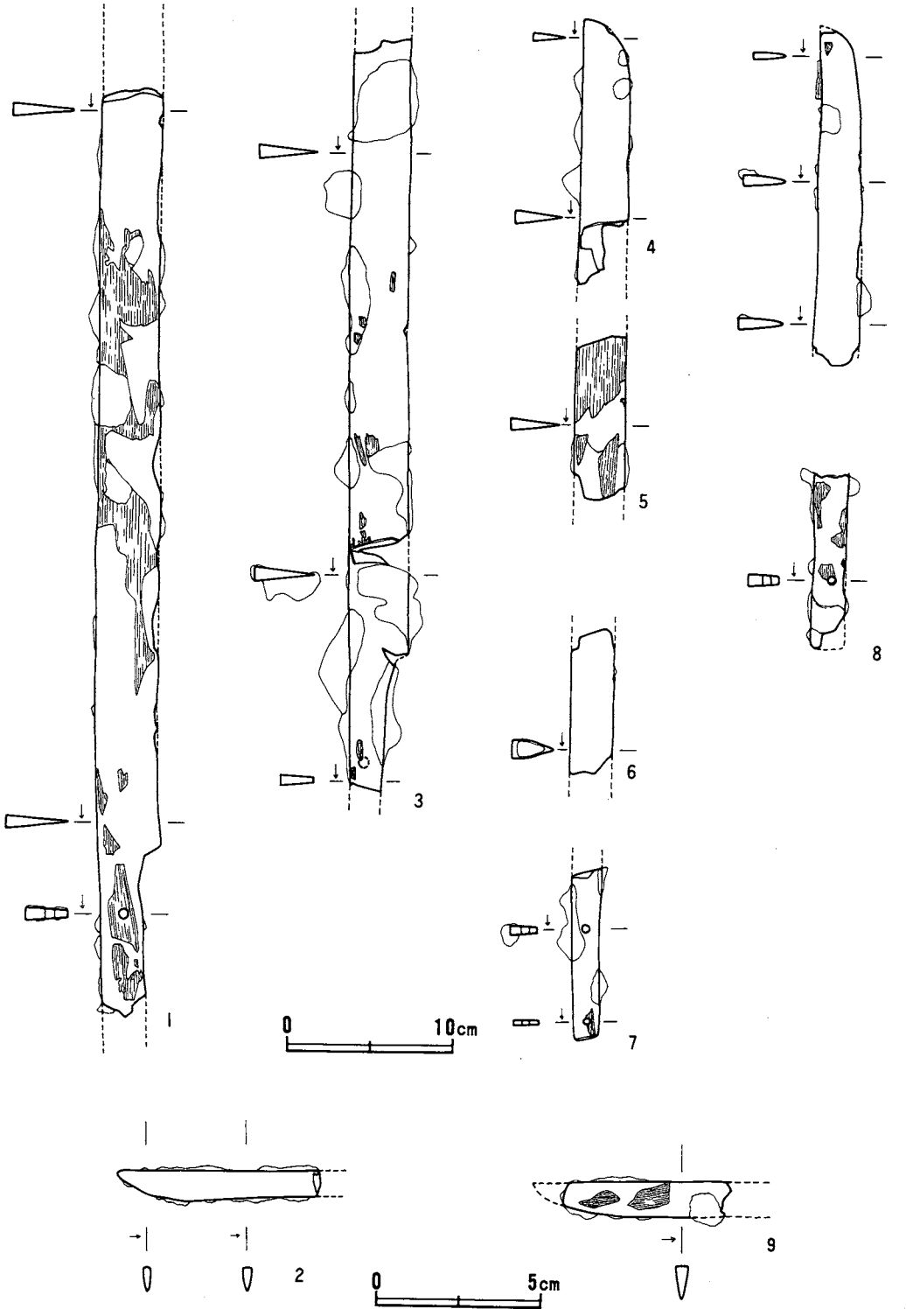
N－S断面において、北主体部が明示されているが、南主体部は丁度、攪乱の中に位置するので明示できないが、北主体部の調査結果から考えて、墳丘構築後、土壙を掘り込んだものと推定したい。

4.　出土遺物（第273・274・275図）

北主体部出土遺物（第273図）

北主体部からは直刀1口、刀子1口が検出された。

直刀（1）　土壙内南壁際で壁に沿って鋒を東に向けて、底面直上より出土した。平造り平棟で鋒と茎の先端及び刃の若干を欠損する。現存全長55.5cm、刀身長45.2cm、身幅3.6cm、棟幅0.7cmを測る。身と茎の両面に木質が顕著に遺存する。関は刃側の片関である。茎は先端を欠



第273図　2号墳出土鉄器実測図(1/4・1/2)

損するが、目釘孔をひとつ有する。

刀子（２） 土壙内西寄り南壁際、鋒を北へ向けて直刀と同じレベルで出土した。関から茎を欠損し形状は不明。現存全身6.1cm、身幅0.8cmを測り、平造り平棟で棟幅0.3cmを測る。

南主体部出土遺物（第273・274図）

南主体部より直刀２口、勾玉３点、琥珀製臼玉２点、ガラス玉41点が検出されたが、攪乱により出土遺物は原位置を維持しているか疑問である。

直刀（３～７） 松の根の直下、攪乱の中から、散々な状態で出土しており原位置を保っていない。整理の段階で（３）と（４～７）の２口になると考えた。

３は、平造り平棟で主に鋒と茎の先端を欠損し、錆化が著しいが、木質が若干遺存する。現存全長45.1cm、刀身長37.2cm、身幅3.6cm、棟幅0.8cmを測る。茎はとくに錆化が著しく、X線写真撮影により目釘孔をひとつ確認した。関は刃側の片関である。

４～７は、平造り平棟の直刀の同一個体で４は鋒部で身幅3.1cm、５は身部で木質の遺存が著しく、身幅3.1cmを測る。７は茎部で目釘孔を二つもち、若干の木質を遺存させる。６は内部に錆ぶくれが見られ身幅を狭くしているが、本来は４・５と同程度を測り、身の一部であったと考える。

勾玉（１～３） 勾玉は、南主体部土壙内東壁寄りで玉類が集中する箇所より出土した。

１はメノウ製で「コ」の字形に近いC字形を呈し、２は碧玉製でC字形を呈し、３は琥珀製で１・２とは形状に相違が見られる。穿孔はすべて片側から行なわれている。

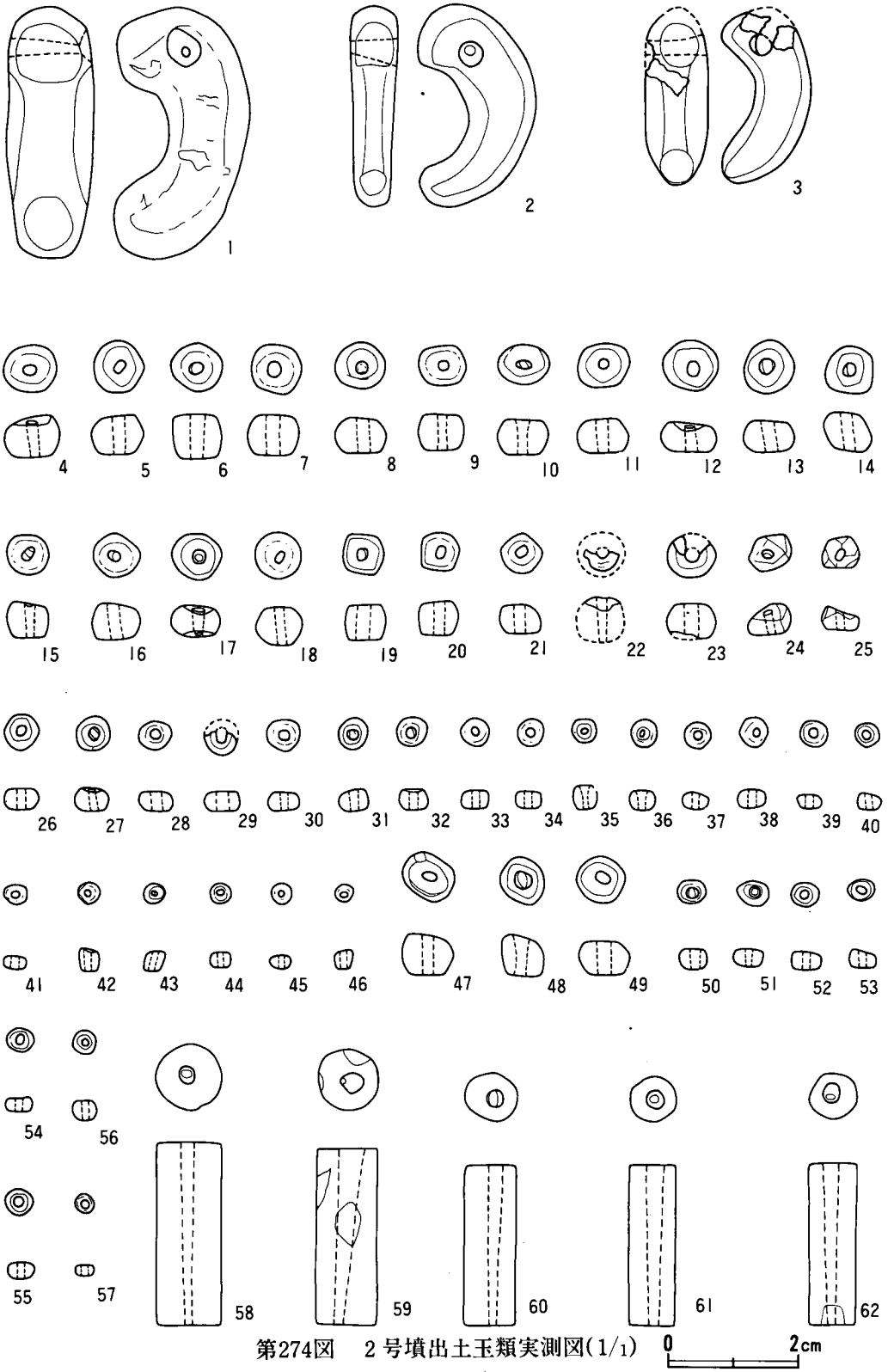
琥珀製臼玉 （24・25）ともにあまり良質な琥珀ではないが、大きさは、ほぼ同程度、形状も比較的類似している。他の玉類と一緒に東壁側で検出した。

ガラス玉（４～23、26～46） 径、厚さ、色調は第４表に示したとおりである。臼玉（４～23）と小玉（26～46）とに大別できる。ともに製作技法としては、気泡が孔の方向に沿って伸びているので細いガラス管をつくり、それを輪切に切断したと考えられる。

南主体部は攪乱を受けているので、南主体部より流出したと考えられる管玉５点、ガラス玉11点が付近の墳丘封土中から検出された。

管玉（58～62） 材質はすべて碧玉製、大きさは若干の相違があるが、形状はよく類似している。穿孔はすべて、片側から行なわれている。

ガラス玉（47～57） 径、厚さ、色調は第５表に示したとおりである。臼玉（47～49）、小玉（50～57）とに大別できる。ともに製作技法としては、孔の方向に沿って気泡が伸びていることから、ガラス管を輪切に切断したと考えられる。



第274図　2号墳出土玉類実測図(1/1)

番号	名　称	径	厚　さ	色　調	備　考
4	臼　玉	7.2～8.0	5.0～6.5	紺	
5	臼　玉	7.6～7.9	5.5～5.9	濃　紺	
6	臼　玉	7.5～7.8	7.0～7.1	濃　紺	
7	臼　玉	7.6～8.1	5.8～6.0	紺	
8	臼　玉	7.0～7.9	5.0～5.3	濃　紺	
9	臼　玉	6.0～7.5	5.3～5.4	紺	
10	臼　玉	6.1～8.0	5.0～5.1	濃　紺	
11	臼　玉	6.7～8.0	4.9～5.2	紺	
12	臼　玉	7.5～8.6	4.0～4.5	濃　紺	
13	臼　玉	7.8～8.1	4.1～4.6	濃　紺	
14	臼　玉	7.2～7.9	6.0～6.3	濃　紺	
15	臼　玉	6.1～6.5	4.8～5.6	紺	
16	臼　玉	6.3～7.1	4.8～5.6	濃　紺	
17	臼　玉	6.9～7.6	2.8～4.8	青	
18	臼　玉	7.0～7.1	5.5～5.7	紺	
19	臼　玉	6.9～7.3	5.4～5.5	濃　紺	
20	臼　玉	6.2～6.7	4.9～5.1	濃　紺	
21	臼　玉	5.9～6.4	4.0～4.5	濃 青 緑	
22	臼　玉			紺	4/5欠損
23	臼　玉	7.2～7.5	5.3～5.5	濃　紺	1/3欠損
26	小　玉	4.9～5.0	3.0～3.2	緑	
27	小　玉	4.9～5.1	3.0～3.3	淡 青 緑	
28	小　玉	4.1～4.9	2.7～3.0	淡 青 緑	
29	小　玉	4.9～5.0	2.9～3.0	青	1/2欠損
30	小　玉	4.7～5.0	2.6～3.0	緑	
31	小　玉	4.5～4.7	2.9～3.3	紺	
32	小　玉	4.1～4.8	2.6～3.1	濃　紺	
33	小　玉	4.0～4.5	2.7～2.9	紺	
34	小　玉	3.8～4.0	2.5～2.6	紺	
35	小　玉	3.5～3.9	2.4～2.5	青	
36	小　玉	3.8～4.0	2.7～3.0	紺	
37	小　玉	3.9～4.0	2.0～2.5	淡 青 緑	
38	小　玉	4.1～4.3	2.3～2.9	淡 青 緑	
39	小　玉	3.9～4.3	2.1～2.2	青	
40	小　玉	3.5～4.0	2.0～2.5	紺	
41	小　玉	3.1～3.5	2.0～2.1	淡　紺	
42	小　玉	3.0～3.3	2.9～3.5	緑	
43	小　玉	3.0～3.4	2.8～3.1	緑	
44	小　玉	3.0～3.2	2.2～2.4	青	
45	小　玉	3.0～3.1	1.9～2.1	青	
46	小　玉	2.6～2.9	2.5～2.8	淡　緑	

（単位mm）

第4表　2号墳南主体部内出土ガラス玉計測表

番号	名　　称	径	厚　　さ	色　　調	備　　考
47	臼　　玉	6.4～8.1	5.1～6.0	濃　　紺	
48	臼　　玉	6.5～7.5	5.0～6.5	青	
49	臼　　玉	7.0～7.5	4.8～5.0	青	
50	小　　玉	3.6～4.5	3.1～3.3	緑	
51	小　　玉	3.6～5.0	2.5～2.6	淡 青 緑	
52	小　　玉	3.7～4.4	2.3～2.6	濃　　紺	
53	小　　玉	3.2～4.4	2.2～2.9	橙	
54	小　　玉	3.7～4.2	2.0～2.3	濃　　紺	
55	小　　玉	4.0～4.4	2.3～2.5	緑	
56	小　　玉	3.5～3.7	2.8～3.0	青	
57	小　　玉	2.9～3.0	1.6～1.8	青	

（単位mm）

第５表　２号墳南主体部付近墳丘内出土ガラス玉計測表

周溝内出土遺物（第275図）

周溝より須恵器９点が出土した。器形による内訳は坏が６点、蓋が３点である。

９点とも東側の周溝内中央、ほぼ底面直上において集中的に出土した。出土状況をみると２は、ほぼ完形を保って倒立状態、３～９は、２より若干南西に離れ、すべて破損し散々になり、互いに重なりあった状態、１は、さらに南西に離れ、破損し散々な状態で出土した。

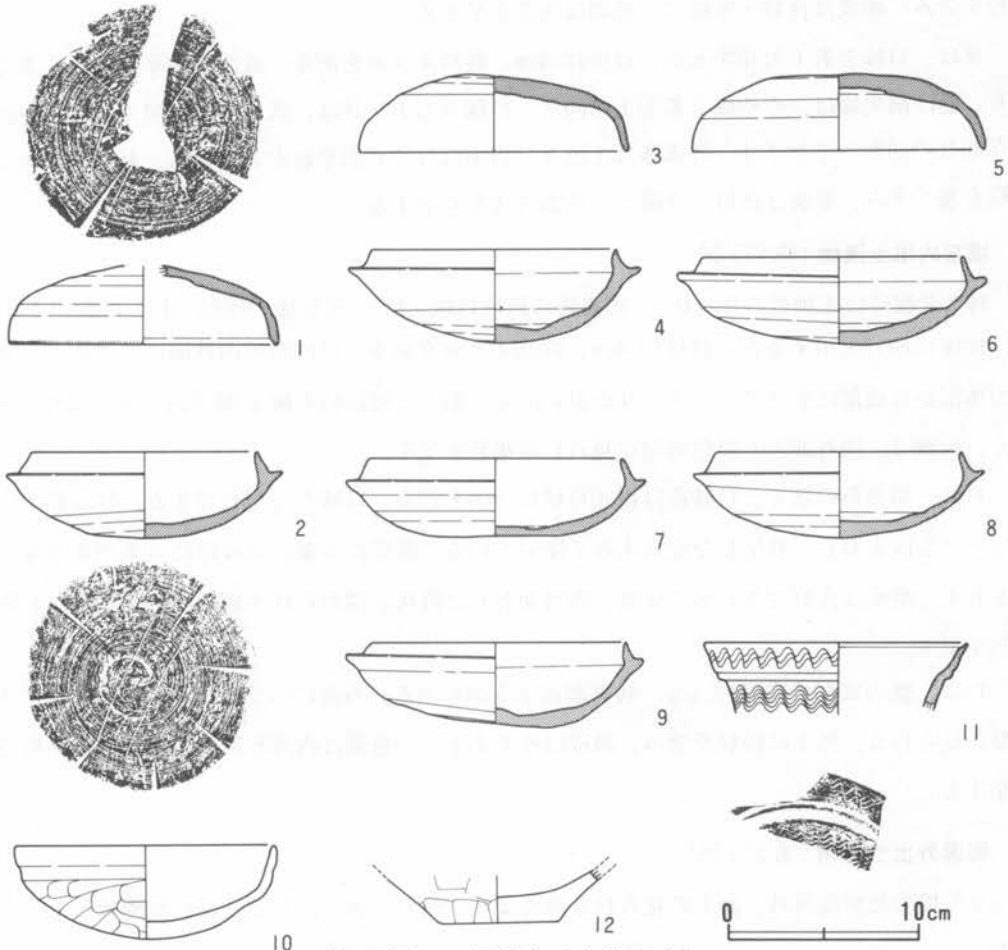
１は、口縁の約½を欠損するが、復原実測によると、口径13.8cm、器高4.1cmを測る。外面天井部にヘラ記号、口縁部にハケ様の調整痕がある。外面天井部にロクロが右回りの回転ヘラケズリ、内面天井部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土に小石を含み、焼成は、良好・堅緻、色調は灰色を呈する。

２は、完形品で、口径11.6cm、器高4.5cmを測る。外面底部に１と同様なヘラ記号がある。整形・調整をみると、外面底部に、ロクロが右回りの回転ヘラケズリ、内面底部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土に小石、砂粒を若干含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。１、２は、同様なヘラ記号があり、また、大きさ・形状からセット関係にあると考えられる。

３は、口縁の約⅓を欠損するが、口径14.1cm、器高4.0cmを測る。外面天井部に右回りの回転ヘラケズリ、内面天井部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土に小石・砂粒を含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。

４は、約⅓欠損するが、口径12.9cm、器高4.4cmを測る。外面底部に右回りの回転ヘラケズリ、内面底部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土は小石・砂粒を含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。３、４は、大きさ・形状等より、セット関係にあると考えられる。

５は、口縁の一部を欠損するが、口径15.2cm、器高4.0cmを測る。外面天井部に右回りの回



第275図　2号墳出土土器(1/4)

転ヘラケズリ、内面天井部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土は小石・砂粒を含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。

6は、口縁部から体部上位の若干を欠損するが、口径13.6cm、器高4.5cmを測る。外面底部は右回りの回転ヘラケズリ、外面体部上位及び内面はロクロ調整痕が見られる。胎土は小石・砂粒を多く含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。5、6は、大きさ・形状よりセット関係にあると考えられる。

7は、約⅓を欠損するが、口径13.2cm、器高4.0cmを測る。底部が比較的平坦な形である点に特徴がある。外面底部に右回りの回転ヘラケズリ、内面底部にナデ、内外両面の口縁から体部にかけてヨコナデが見られる。胎土は小石を若干含み、焼成は良好・堅緻、色調は灰色を呈する。

8は、約½欠損するが、口径12.8cm、器高4.4cmを測る。外面底部は右回りの回転ヘラケズリ、内面底部はナデ、口縁内外両面から体部にかけてはヨコナデが見られる。胎土に小石・砂

粒を含み、焼成は良好・堅緻で、色調は灰色を呈する。

9は、口縁を若干欠損するが、口径13.4cm、器高4.3cmを測る。底部は水平を欠き、歪であり、受け部先端は、やや細く若干上を向き、口縁立ち上がりは、低く内側に傾く。外面底部は左回りの回転ヘラケズリ、外面体部上位及び内面はロクロ調整痕が見られる。胎土は小石・砂粒を多く含み、焼成は良好・堅緻で、色調は灰色を呈する。

墳丘内出土遺物（第275図）

封土発掘時に土師器の坏（10）、須恵器の甕の口縁（11）、及び甕の底部（12）が検出された。

10は、約⅓欠損するが、口径13.4cm、器高4.8cmを測る。口縁部の内外面にヨコナデ、外面の体部から底部にかけてヘラケズリが見られる。胎土に細砂粒を極少量含み、焼成はややあまく、色調は、内外面とも黒色処理が見られ暗褐色を呈す。

11は、須恵器の甕で、口縁部は復元口径13.8cmを測る。口縁の⅙が残存する。口縁部下にシャープな段を有し、外反しながら大きく開いている。頸部に5条、口縁部に3条の連続波状文を有す。焼成は良好できわめて堅緻。内外面ともに降灰が認められ、色調は、灰黒色から灰褐色を呈す。

12は、甕の底部で底径12.4cm、残存器高2.5cmを測る。外面にヘラケズリ、内面にナデの調整が見られる。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまく、色調は内面が黒褐色、外面は赤褐色を呈する。

周溝外出土遺物（第273図）

2号墳の北側周溝外、盛土の見られる箇所より、直刀（8）、刀子（9）が隣接して出土した。

8は、関部、鋒、茎の先端に欠損が見られ、錆化が進行し遺存状態は良好とはいえない。平造り平棟で刀身幅2.8cm、茎幅2.0cm、棟幅0.7cmを測る。木質の遺存は身幅で若干、茎部で顕著に見られる。茎には、目釘孔が一つある。関は欠損のため判明しにくい。

9は、鋒と茎および関を欠損し、身の一部を現存する。木質の遺存が見られる。現存の全長は5.1cm、身幅0.4cmを測る。

5. 小　結

2号墳の調査で判明したことを要約すると次の通りである。

古墳は、外周直径約27m、西側の周溝を欠く不整形な円墳である。周溝が西側で欠ける点は1号墳と同一形態である。

主体部も同様に、墳丘中央部にほぼ並行して2基存在する。北主体部は一部を、南主体部は大半を攪乱のため欠失するが、両者とも直葬と考えられ、土壙のみが確認された。土壙の長軸

は、ほぼ東西方向を指す。１号墳主体部と比較すると、主体部形成の段階において相違がみられる。２号墳の北主体部・南主体部は、墳丘構築を完成した後に土壙を掘り込み、直葬したもので、主体部は墳丘を構成している盛土内の浅い部分に存在し、掘り込みは旧表土まで達していない。よって、墳丘内で相対的に高いレベルに主体部が存在する。

本墳にともなう遺物は、北主体部より、直刀２口、刀子１口、南主体部より直刀２口、玉類46点、また、攪乱のため、南主体部より流出したと考えられる玉類16点を検出した。また、墳丘内より土師器、周溝内より須恵器が出土したが、特に須恵器は、２号墳の築造年代を考察する上で重要な存在である。

１号墳と２号墳との間に、小規模な盛土がみられ、２号墳の周溝は、この盛土を削平して形成している。その盛土内からは、鉄器も出土している。この小規模な盛土の性格は、今回の調査からは判明できなかったが、古墳と考えるには資料的に不充分で疑問があり、ここでは、明確な一基の古墳とは認定しがたい。ただ、鉄器を内包して、盛土が施されることは、２号墳築造以前に盛土を有する何らかの遺構が所在したことを示している。

第4節　鶴牧3号墳

1．位置と外形（第261・276図）

3号墳は、舌状台地の南東、台地が若干張り出す地点に位置し、北西側には、2号墳が隣接する。また、北東側・南東側は、比較的緩やかな下り斜面となる。3号墳は、当初検出されておらず、2号墳の調査において、新たに確認された古墳である。墳丘は比高が0.7ｍ程で僅かに盛り上がっている程度で、視覚的にはあまり目立たないが、測量の結果、円墳を想定した。

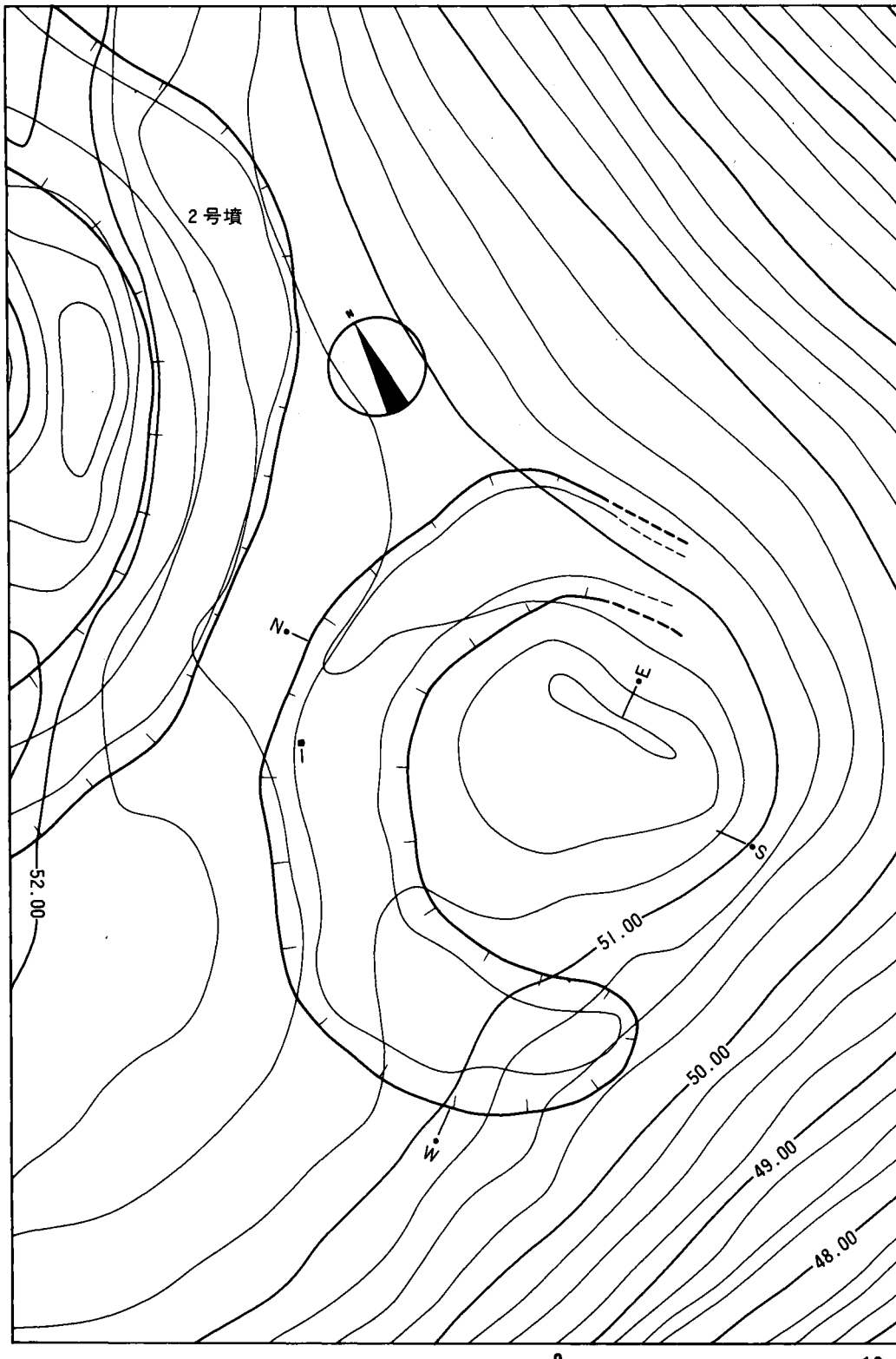
2．墳丘と周溝（第262・276図）

東側の周溝を欠く、外周直径約19ｍの小形円墳である。墳丘は旧表土層と考えられる黒色土層の上に盛土が構築されているが、盛土の層序は一層か二層しか現存せず、すぐに現表土層となり、現存の墳頂部まで約0.7ｍを測る。黒色土層（旧表土）は5～15cmの厚さで、その下層は、ローム漸移層となり、ローム層へ至る。旧表土はＮ－Ｓ断面のＳ方向で厚く堆積し、傾斜してゆき、急斜面へと移行していく。旧表土の上位に構築されている盛土の現存は僅かであり、ローム粒・ロームブロックの含有は見られない。現存する盛土は僅かであるが、かつて、墳丘築造時にはもっと盛土があり、その中には、ローム粒・ロームブロックを主体とする盛土も存在したと考えられる。3号墳の周溝は、ローム層を掘削しており、それによって産出したロームブロックも当然、墳丘の盛土とし、現在する墳丘より高く盛土を積み上げていたが、流出し現在の墳丘に至ったと考えたい。

周溝は南側で閉塞し、北側から東側へかけては、不明瞭であるが、東側斜面でやはり途切れる。幅は4～5ｍ、深さは、0.8～1.0ｍを測り、底面、壁面はローム層に達してしっかりしている。底面、壁面の形態は2号墳に類似し、周溝の水平比高は、ほぼ一定である。

3．主体部

主体部は、1号墳・2号墳の調査の結果から、直葬の可能性を考慮し、土色等の変化に注意して調査を実施したが検出されなかった。現存の墳丘は、削平が考えられるので、主体部は、かつて、現存の墳丘より高い位置に存在したが、現在では、削平に伴って主体部も消失したと考えたい。



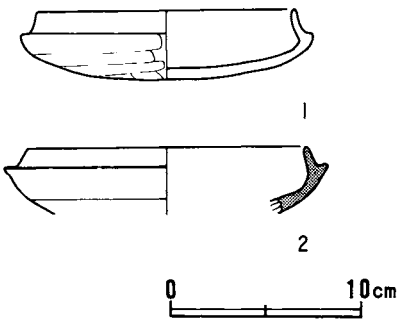
第276図　3号墳全体図(1/200)

4. 出土遺物（第277図）

周溝内出土遺物

周溝内より土師器の坏（１）、須恵器の坏（２）が２点出土した。

１は、西側周溝内の外壁近く、底面直上から直立状態で出土した。口縁の一部を若干欠損するが、口径13.6cm、器高3.6cmを測る。底部は比較的平坦で、口縁の内外面にヨコナデ、内面は体部から底部にかけてヘラミガキ、外面はヘラケズリが見られる。胎土は細砂粒を極少量含むが、よく精選されている。焼成は良好、色調は黒色処理が見られ、内外面とも黒褐色を呈する。



第277図　３号墳周溝内出土土器実測図(1/4)

２は、口縁部と体部が約1/6遺存する。復原実測によると、口径14.4cm、残存器高3.5cmを測る。口縁の内外面にヨコナデ、外面底部に左回りの回転ヘラケズリが見られる。胎土に砂粒を若干含み、焼成は良好・堅緻で、色調は灰色を呈する。

5. 小　結

３号墳の調査より、判明したことを要約すると、次のとおりである。

３号墳は、東側の周溝を欠く、外周直径約19mの小形円墳である。墳丘は、旧表土層の上に構築されているが、封土の遺存状態は良好ではなく、削平流失した可能性が強い。

主体部は、精査にもかかわらず確認されなかった。これは、他の２基の古墳の盛土形態を考慮すると、墳丘が削平されたため消失したと考えたい。

出土遺物は、周溝内より土師器・須恵器の坏が各１点検出された。周溝内出土ではあるがこれは、当古墳に共伴すると考えられる。

第5節　先土器・縄文・弥生時代の遺物

1．先土器時代の遺物（第278図）

鶴牧古墳群の発掘調査に際しては、墳丘内・周溝内から多量の石器類が採集された。それらの大半は次項にて記載する縄文時代草創期～早期のものと判定されたが、少数ながら先土器時代に帰属するかと見られる資料が認められる。細片中には帰属不明のものも若干あるが、ローム層内未調査のため層位的裏付けを欠いており、資料から除外している。

確実に先土器時代の石器とされるものは12点あるにすぎない。そのうち第278図に11点を示した。砕片類を欠いているが、石器組成の全てを知るには程遠いものがある。1の出土地点が不明、9が2号墳採集である以外は全て1号墳周辺の遺物で、このあたりに石器集中地点の存在した可能性もある。以下、器種毎に説明を加えるにとどめたい。

1は両面打製の小型石槍の破片。珪質粘板岩製で、5・7・9等と同一の母岩と見られる。半欠品であるため全形は不明であるが、横断面は紡錘状を示す。2は黒曜石の縦長剝片を素材とするナイフ形石器。やはり半欠で全形不詳である。3は彫器。凝灰岩の折断剝片を用い、その折断面から腹面に垂直に刻打が加えられている。

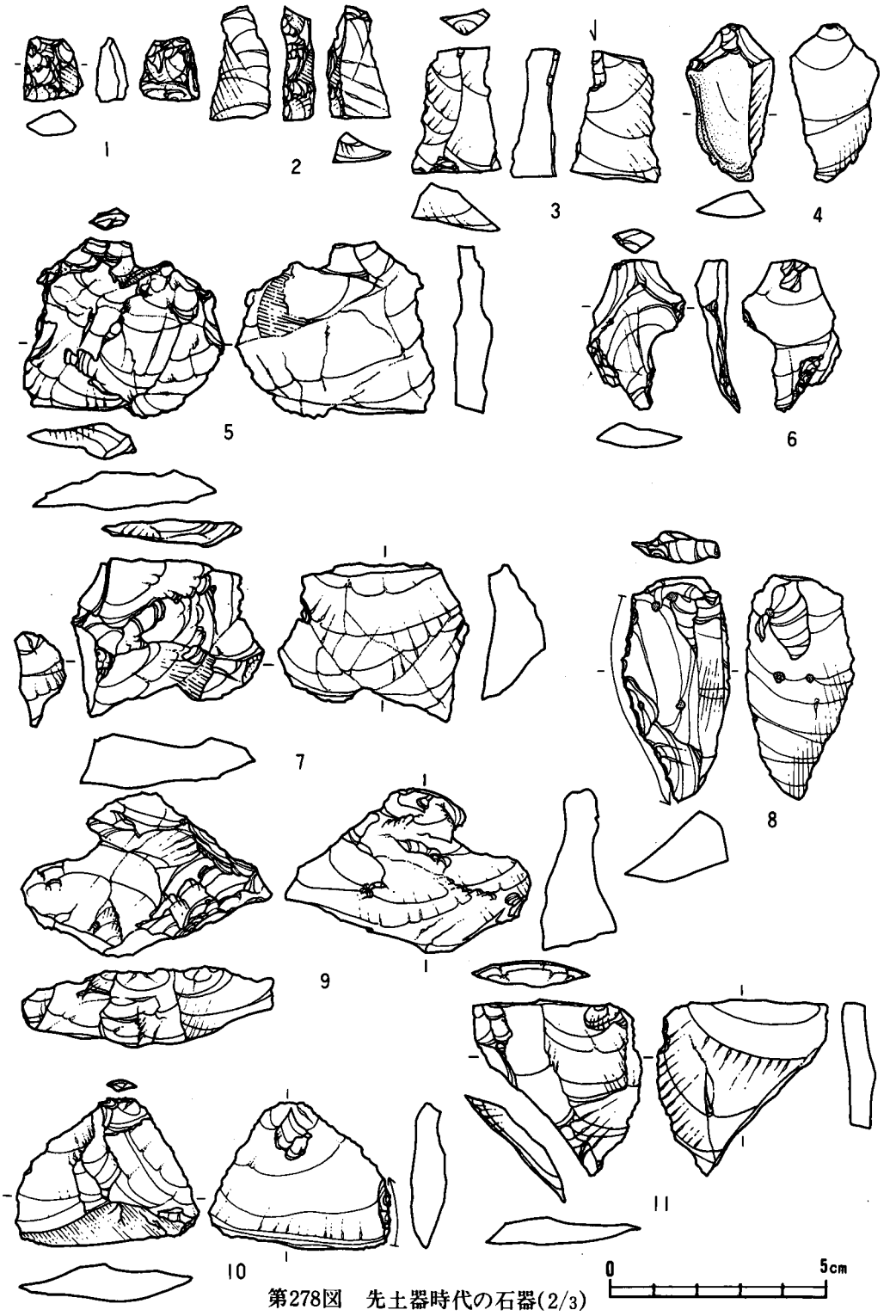
4～11に剝片類を示した。6には細調整が、8・10には使用痕とも考えられる微細な刃こぼれが著しい。また、7・11は折断剝片。5～9が同一母岩であることは既に述べたが、このうち3例の側縁一部に旧剝離面を残している。この様な剝片は、打面転位過程、あるいは打面再生過程に生じるが、9に見られる様にネガティブバルブをもつ旧剝離面の並ぶものなどは後者に帰因する可能性が高いであろう。いずれにせよ、資料数が限定されており、これ以上の言及は難かしい。なお、剝片は8が黒曜石製である外は、全例珪質粘板岩（あるいはチャート）を素材としており、大体一時期の所産であると言えるかもしれない。その場合、1の小型石槍をもって、これら石器群のおおよその時期を指定することもできよう。

小型石槍を主体とする遺跡は、下総台地では枚挙にいとまがない程であるが、本古墳群周辺には今のところ明確な調査例をほとんど欠いている*。しかし近年調査の進捗している上総国分寺台周辺には、東内野型尖頭器を主体とする小型石槍の検出例は多く、** 今後の調査に期するところが大きい。今回はひとまず、その存在の一端を捕捉した点に意義を求めることができる。

---

* 千原台ニュータウン内では、ばあ山遺跡に単独出土例がある。（『千原台ニュータウン』1）

** 上総国分寺台遺跡調査団の御厚意により、先土器時代の遺物を実見させていただいた。



第278図　先土器時代の石器(2/3)

2. 縄文時代の遺物（第279図～284図）

(1)土　　器（第279図～282図）

鶴牧古墳群の調査において、封土内・周溝覆土内より、縄文時代の土器が多量に出土した。以下、順を追って記載していく。

草創期～晩期に帰属する土器が認められるが、前期以降の土器は稀少である。ここでは草創期の土器を第1群、早期の土器を第2群、その他の土器を一括して第3群として、説明を加えていく。

第1群　（第279図）

Ⅰ類　草創期後半撚糸文系土器群のうち縄文・撚糸文の施文されるものは、総数32点である。

1は口縁部がやや肥厚して外反し、口唇部から口縁部上端では横方向、口頸部では斜方向にＬＲの縄文を施す。2は口縁部が外反し、口唇部上・口縁部以下にＲの撚糸文を施文する。本類は井草式・大丸式の範疇で把えられようが、図示しなかったうちの胴部破片に或いは夏島式のものが含まれるかと思われる。

2類　草創期後半撚糸文系土器群のうち無文のもので総数7点を数える。

3･4とも指頭圧によって口頸部が造り出されていると思われる。3は或いは器面がかなり乾燥した段階で撚糸文がまばらに施されたものかもしれないが、判然とはしない。4は外面の指頭による調整が入念で、焼成良好の堅固な土器である。5は底部破片である。本類は撚糸文系末葉の土器である。

第2群　（第279図～第282図）

Ⅰ類　早期前半沈線文系土器群に比定されるもので、総数41点を数える。なお、口縁部破片のうち、断面形態が明確な内削ぎ状を呈するものは含まれていない。

6は波状口縁を呈し、半截竹管による太沈線で区画を設け、その内を半截竹管・貝殻腹縁による刺突で充填している。7は2種類の半截竹管による太沈線・細沈線で区画を設け、その内を細沈線を描出した半截竹管による刺突で充たす。8は口縁下に繊細な沈線文によって帯状に区画を設けその内を同様の沈線で格子目状に施し、以下沈線文を斜行させている。9は沈線文を格子目状に配している。10は本類に属すと思われる底部破片で、縦方向のヘラ削り様の痕跡が認められる。本類は田戸下層式である。

2類　早期後半条痕文系土器群に比定されるもので、総数205点を数える。文様等によって以下に分別される。なお、少数の例外を除いて相対的に繊維の混入が少ない*。

---

* 繊維の混入が微量で、含まぬものと内眼での識別が不可能なものが多い。一応繊維の有無を図示したもののうちにも判然としないものが含まれるかもしれない。

a種　口唇部上に絡条体圧痕を施す土器（12・13・14・16）

12は波状口縁を呈すと思われ、その頂部より垂下する隆帯上にも絡条体圧痕がみられる。また、裏面に擦痕が認められる。13も波状口縁を呈し、口縁直下に無文部分を有し、以下に絡条体圧痕を密接して施す。また、絡条体の端をしばったと思われる痕跡が観察される。裏面には条痕が認められる。14は裏面に条痕が認められる。また、表面の欠損部位に口縁に並行する微隆起線が付されていたと思われる。16は他に比べて繊維の混入が多く認められ、表裏ともに条痕がみられる。総数5点を数える。

b種　口唇部上に竹管による刺突のある土器（11・17～23）で、口唇部に平行に近い角度をもって刺突したもの（11・18・19・20）と、垂直に近い角度で刺突したもの（17・21・22）がある。

11には口縁下に刺突列が巡ると思われ、他に比べ繊維混入が多く、脆い。17は表裏条痕、18・19は表裏擦痕、20・21・23は表面擦痕が認められる。総数11点を数える。

c種　口唇部上に貝殻背圧痕のある土器（15・24～32）で、そのうち、波状口縁を呈すものは15・25・32である。

24は表裏擦痕、15・25は表裏条痕、29は表面擦痕、26・27・28・31・32は表面条痕が認められる。総数11点を数える。

d種　口唇部上に条痕のある土器（33・34）

33は表裏条痕、34は表面擦痕・裏面条痕が認められる。総数3点を教える。

e種　その他の口縁部破片（35～41）

35は表裏条痕、36は表面条痕、39は表面擦痕、40は裏面条痕がそれぞれ認められる。41には、ヘラ状工具による明瞭な擦痕が表面にみられる。総数3点を数える。

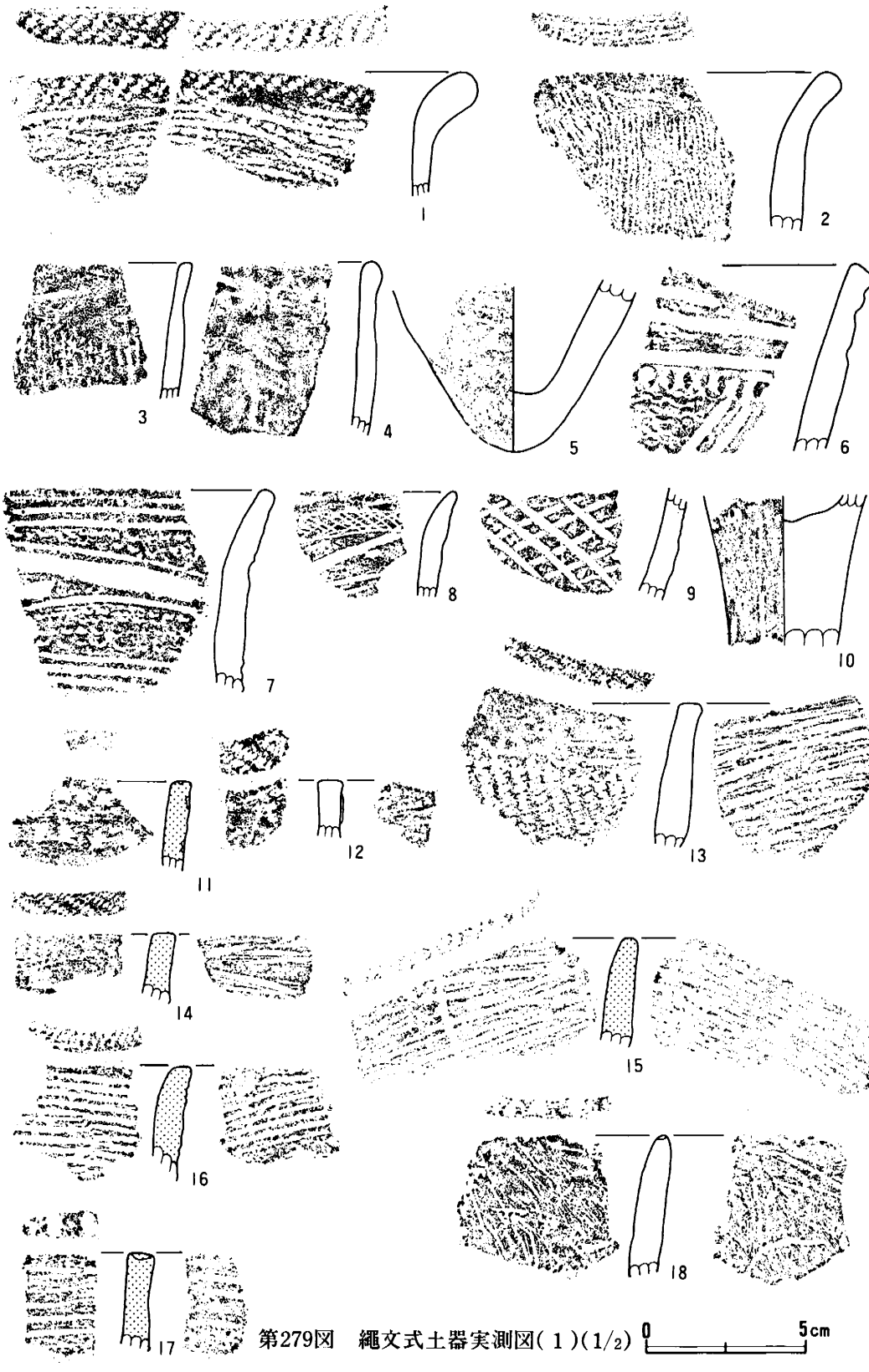
f種　2類に属す胴部破片を一括する（42～53）

42は口縁部を欠いたもので、他に比べ繊維混入が多い。53は頸部に段状のくびれをもつ。42・43・44は表裏条痕、45は表面条痕・裏面擦痕、46・47は表裏擦痕、48は表面擦痕・裏面条痕、49・50は裏面擦痕、51は表面擦痕がそれぞれ認められる。なお、51の器面には凹凸が認められるが、これはヘラ状工具による荒いヘラ削りによる結果と思われる。本種は総数163点を数える。

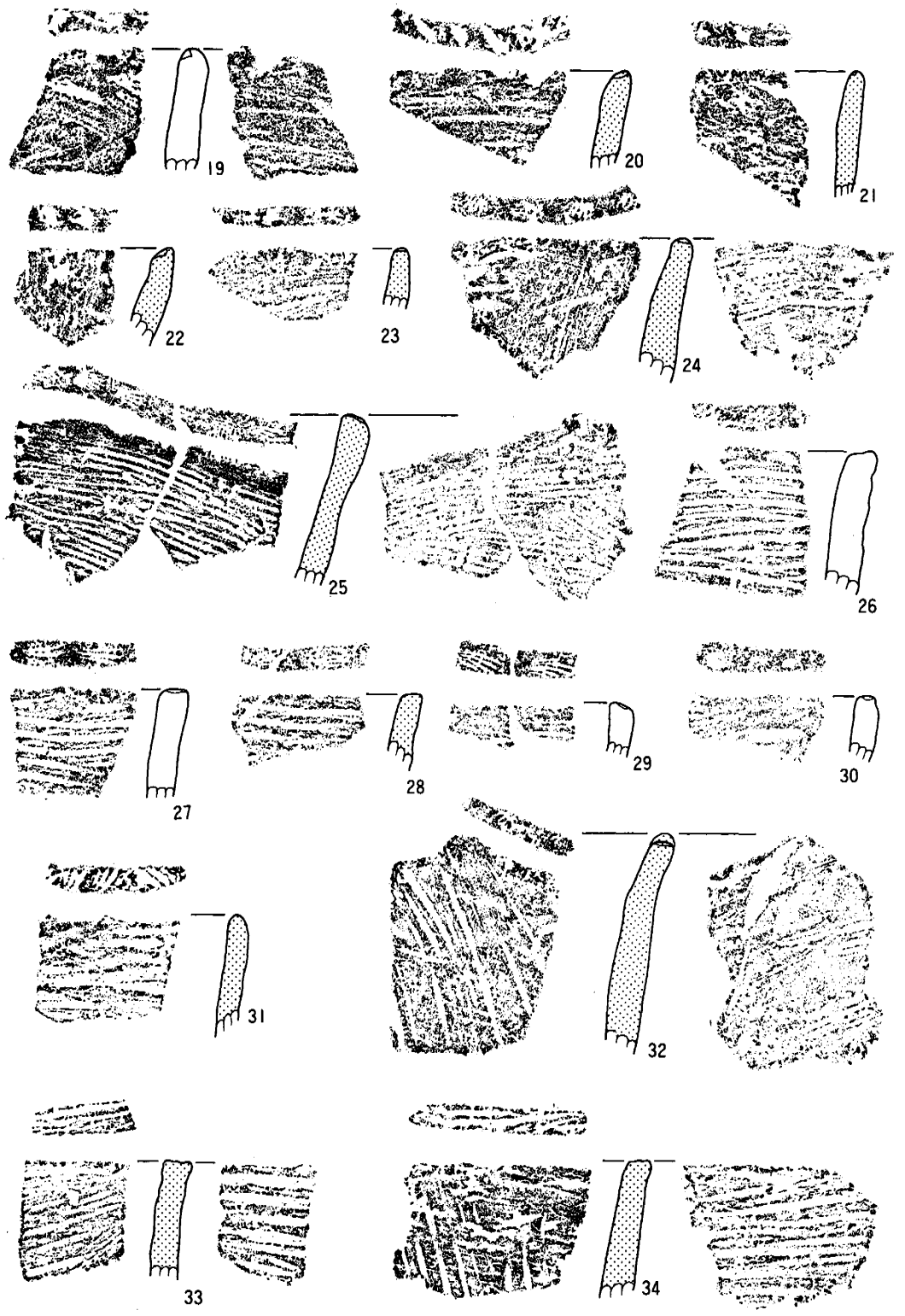
第3群　（第282図）

本群では前期以降晩期までのものと、所属時期の判然としない土器を一括する。54～56は前期浮島式、57は中期阿玉台式、58は後期堀之内式、59は晩期後葉の土器にそれぞれ比定されるであろう。

60・61は所属時期不明のものである。60は口唇部上に棒状工具による押捺が認められる。また、表面の残存部分より剝落部分に微隆起線が付されたと推察される。後項にて触れる石器群中に、有舌尖頭器が出土していることからも、草創期前半の微隆起線文土器の可能性がある。61の器面には爪形文が認められる。底部付近の破片である。

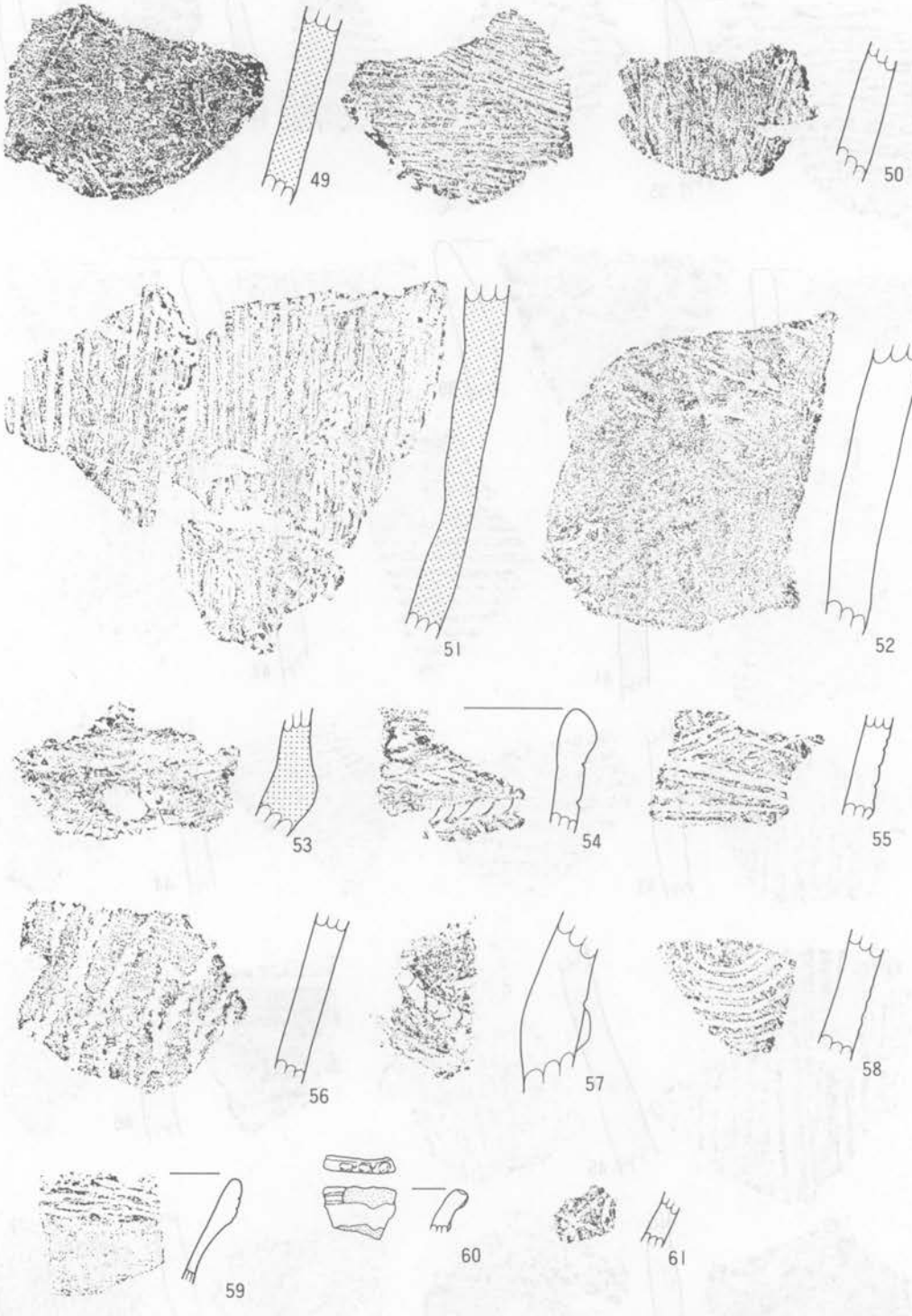


第279図　縄文式土器実測図(１)(1/2)



第280図　縄文式土器実測図(２)(1/2)

第281図　縄文式土器実測図(３)(1/2)



第282図　縄文式土器実測図(４)(1/2)

以上出土土器について記載をしてきたが、ここで2、3の事項について検討したい。

第2群2類土器は、早期後半条痕文系土器群に分類できるものであるが、本資料が全て破片で個体としてのまとまりに欠けること。また、層位についても不明確な状況であることから、これらの資料より条痕文系土器群内での型式同定を行うことは、困難なことである。しかし、僅少例ながら有文土器に子母口式として比定しうる要素が認められる。また、無文土器の中に、それと共通する要素があれば型式同定は可能であると考えた。そこで、明らかに本類に属すると思われる破片に限定し、その主要素毎に点数であらわした。これが、第6表である。分類にあたっては、全てが破片資料なので、全体的な様相は不明である。文様要素については明確なものに限定した。また、多くの条痕・擦痕等については一応、調整痕として扱い、調整の結果として無文化したものについては、従来通りの無文という言葉を使用した。この分類結果により、次のことが指摘できる。

部位	調整／文様	表裏条痕	表条痕 裏無文	表条痕 裏擦痕	表裏擦痕	表擦痕 裏無文	表擦痕 裏条痕	表裏無文	表無文 裏条痕	表無文 裏擦痕
口縁部	口唇上 絡条体圧痕	2							2	1
	口唇上 貝殻背圧痕	1	6		1	1				1
	口唇上 竹管刺突	1	2		3	3		2		
	口唇上 貝殻条痕	1					2			
	無文	1	1			6		4	1	
胴部	無文	27	14	11	24	10	5	46	12	14

総計 205点

第6表　第2群2類土器片集計表

まず、文様についていえば、a種・b種の要素は、従来の子母口式に認められるものである。例えばa種の14およびb種は、日本先史土器図譜* の中にそれぞれ類似性がみられるものがある。しかし、a種の口唇部上以外の部位には、従来のものとはやや異なる要素が認められるものが存在する。すなわち、12には波状口縁の波頂部より垂下して付される隆起帯上にも絡条体圧痕が認められる点である。敢えて類例を捜すならば、木戸上遺跡出土土器** の野島式といわれる例や、隆帯上の絡条体圧痕を貝殻背圧痕に置換した場合は、神之木台式（高橋他1977）に類似点が求められようか。13は口縁部に無文帯を取ることと、それ以下に結条体が密接して圧痕される点が異質である。後者の要素については、柳崎貝塚（佐藤1969）出土のものに類似

* a種14は図版117、b種は図版115～119にそれぞれ類似する（山内1941）

** P47の図－34（瀬川1982）

性を求められようが、常世II式（芳賀1977）との関係等、不明な点が多い。16は絡条体が細密に圧痕され、従来の例と比べれば異質で、或いは、縄文原体の圧痕であるかもしれない。しかし、この資料は、僅少のため現段階では、一括して把えておきたい。c種の口唇部上貝殻背圧痕のものは、従来の子母口式にはあまり認められない要素である。早期末～前期初頭の土器群中には、貝殻背圧痕が隆帯上や胴部に、認められるが、口唇部上にあるものはない。城之台（北）貝塚出土土器（吉田1955）で子母口式に比定された第5類土器A類は、口唇部のみに貝殻文施文の類であるが、或いは、本資料のc種と類似するかもしれない*。　d・e種については、条痕文系土器群に広く認められるもので、型式同定は不可能である。

調整痕については、第6表に分類したように、9種類の要素が認められる。ここで注目されるのは、稀少の例を除いて調整痕間に相互関係が成立すること、言い換えれば、本類土器にその関係が共有されていることである。個別には、条痕では一部明瞭な表裏条痕がみられる土器（16）もあるが、条痕が磨り消されているものが圧倒的であり、その際に生じると思われる擦痕が部分的に認められる。これらの条痕は、連続して磨り消すという行為を伴なうもので、条痕と擦痕の相互関係がここに認められ、また、調整痕と考える傍証ともなりえるであろう。擦痕と無文としたものには、これらの分類基準では、それぞれに容易に分離されず、便宜的に分類したものも存在する。しかし、これは器面調整時の工具の使用頻度の差であり、あくまでも同一技法に基づく結果なので、分離の必要はないのかもしれないし、これが相互関係に他ならないといえよう。また表裏間にも第6表にあるように相互関係が認められよう。

器形については、本資料より推定は不可能である。しかし、口縁部破片より、やや突出した波状部をもつ波状口縁を呈するものが存在すると思われる。

以上の点から本類土器は、既述した稀少の例を除いて、一括されるべき共通の要素をもつものである。それは所謂子母口式としての型式内容とも類似する要素でもある。

ところで、子母口式は型式設定当初（山内1941）より、他型式に比べて内容的に明瞭さを欠いていた。これは、その量的僅少性に起因し、その後の研究において混乱を生じさせる要因の一つとなり、いきおい編年的研究に終始せざるをえなかった。資料の蓄積により最近、子母口式土器研究に関しての論考が幾つかまとめられている。その中でも瀬川、安孫子両氏は、従来子母口式として比定されてきた資料をそれぞれの視点によって、詳細に分析し系統的・総合的に検討されている点で注目される。（瀬川1982）・（安孫子1982）

瀬川氏は、子母口式を従来の編年的位置である田戸上層式と野島式の間に置かず、野島式比定の土器を分離した後に改めて茅山上層式と神之木台式との間に位置づけている。

---

* 城之台（北）貝塚の資料を実見された芳賀英一氏によれば、子母口式土器に比定される土器群中に、口唇部上に貝殻背圧痕のみられる土器が存在したとのことであり、本例と同種であることが確認できた。

一方、安孫子氏は、東海系の上ノ山式に併行して位置づけられる仮称、下沼部式を子母口式とされていたものから分離した後に、改めて従来通りの子母口式の編年的位置づけを行なっている。しかし、前者は後続型式との関係、後者は前段階の型式との系統性について未だ資料的に不足があるとして、今後の課題としているようである。このように編年的位置については、条痕文系土器群中の初頭と末葉にそれぞれ分かれ、決着のついていないのが現状である。これは既に指摘されているように、子母口式自体の型式的要素の中に他と明らかに分離しうる顕著なものが少ないことに、大きく起因しているといえよう。また、既述中で所謂を再三冠したのもその為である。本資料は、その性格上から編年的位置づけを結論づけるには程遠いもので、むしろ保留せざるをえない内容のものである。ここでは、本類土器の多くが、所謂子母口式であることを指摘しておくだけに留めておき、良好な一括資料の蓄積の後に、要素を比較検討し、位置づけを行なうことが妥当であるように思われる。

(2)石　　器（第283・284図）

土器片と共に採集された縄文時代の石器類は総数771点あり、その内訳は第7表の通りである。既に述べた様に古墳調査時の採集遺物という制約があり、出土状況はむろん共伴する土器型式も不詳であるが、縄文式土器の大半が早期後半の所産であることから、これら多量の石器類の多くもこの期に編入されることが推定される。ところが、石器を観察すると有舌尖頭器を含む一群がこれらと分離可能であり、草創期初頭の一群と、早期後半の一群とに区分されることとなった。前者を第1群、後者を第2群とし、各々の内容を紹介していく。

種　別	出土点数	種　別	出土点数
尖頭器	5	石　皿	1
石　鏃	33	磨　石	5
削　器	3	軽　石	2
石　斧	4	石　核	25
楔状石器	2	剝　片	389
不定形石器	1	礫　(片)	301

総計 771点

第7表　縄文時代石器集計表

第1群　尖頭器5点（第283図1～5）と、端削器（第283図6）の合計6点を本群とした。石質は1が硬質頁岩、他は良質の黒曜石で、特に2～5の4点は同一母岩である可能性が高い。

1は精巧な尖頭器で、一端を欠損し全形は不明であるが有舌尖頭器であろう。先端に細い樋状剝離がある。全面に転磨痕が著しく、微光沢が認められる。2は片面打製の類有舌尖頭器。3は同趣の尖頭器の先端部、4が基部破片であろう。幅広で舌部も太く、短く特徴的な形態を示している。あるいは未製品であるのかもしれない。5は細身の尖頭器の胴部破片で、有舌尖

頭器とすべき積極的根拠は乏しいが、左右両側縁が並行に近いところからやはり、有舌尖頭器の可能性が高い。破損後に二次加工が施されている。6は拇指状端削器で、前記尖頭器との共伴が合理的である。一応、1を別として2～6は、一つの石器群を構成するものと考えておきたい*。

第2群　縄文時代早期後半の石器群と推定される。石核、剥片が全体の88%を占め、工房址的性格が極めて濃い。石器組成は第7表に示したが、多量の礫（片）の存在も注目される。

石鏃（第283図7～39）　石質は黒曜石が多いが、9が玄武岩、7・9・12・16・26・28がチャート。総数33点のうち全くの完形が5点、僅かに欠損するもの7点、他は半欠、もしくは破片であることから多くのものが、製作時の撥ね物であると考えられる。とくに、36・37・38などは未製品としての評価が妥当であろう。形態は全て凹基無茎鏃の範疇に入るが、7・16など長身のもの、12の様に幅広のもの、8・9・10など中間のもの等のバラエティーがある。また、側縁部の形状も、緩やかに内彎するもの、外彎するもの、直線的なもの等の変化があり、凹基鏃内部での形態分化が著しい。

削器（第283図44・45）　剥片の一側縁に付刃した側削器である。刃部は直線的であるが、44が両面打製、45が片面打製の差があり、刃部角にも相異がある。これら両者は、所謂石堤の横刃型と縦刃型とに対応するもの、あるいはその影響下に作出されたものであろう。44は黒曜石製、45はチャート製である。

楔状石器（第283図41・42）　剥片の上下両端に潰痕状の被加撃痕の著しいもので、一種のパンチであると考えられている**。42例では、上下の他に左右にも被加撃痕があり、加撃縁転位が認められる。40がチャート製、41は黒曜石製。

不定形石器（第283図43）　小剥片の一部に調整剥離の観察されるもの。一例のみを摘出したが、剥片中には、使用痕とも調整剥離痕ともつかぬ小剥離痕の認められるものが若干あり、所謂U－フレとしての分類も可能であるが、今回は割愛した。本例は黒曜石製である。

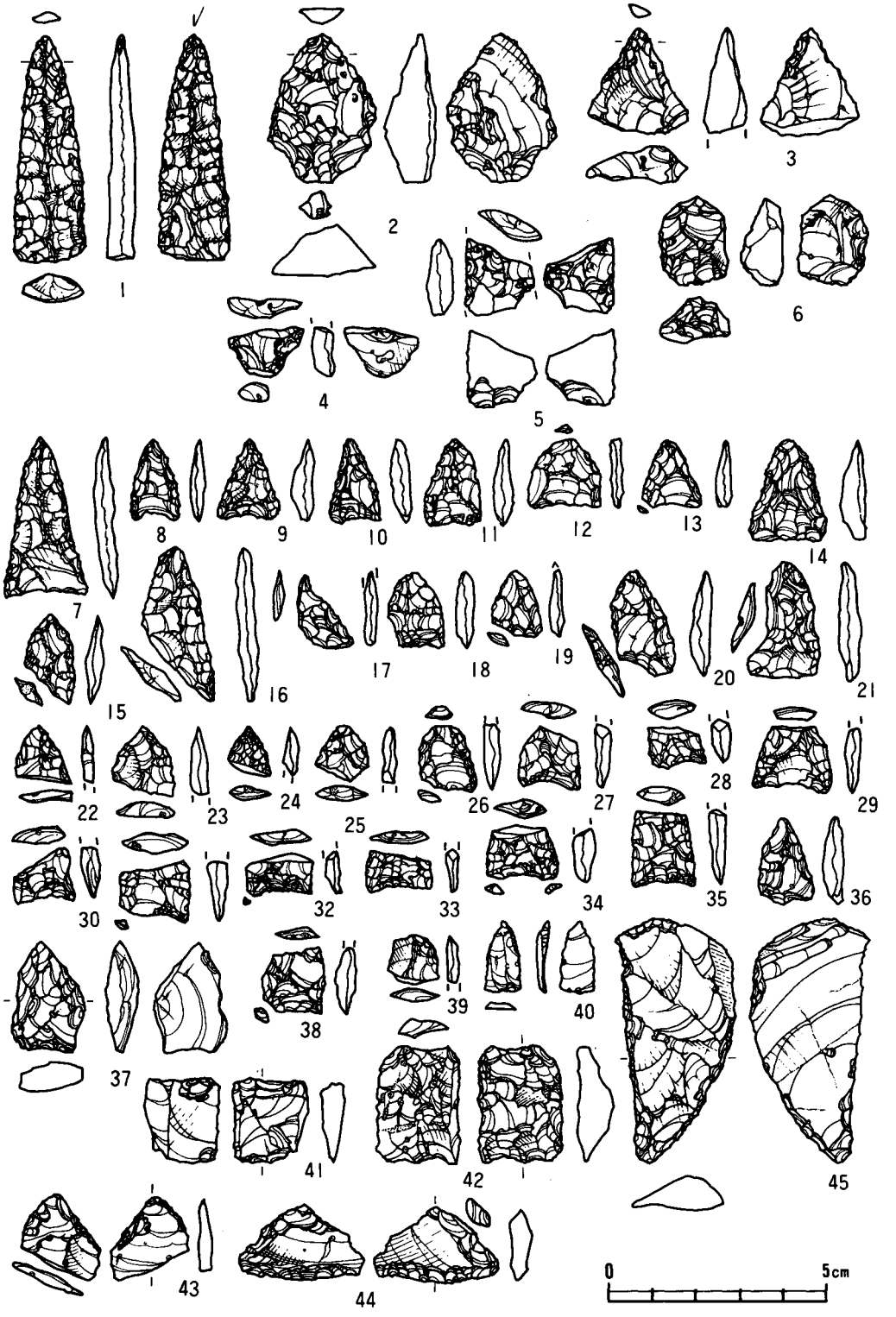
石皿（第284図1）　安山岩製の半欠品が1点採集されている。両面から良く磨られ、中央部分の厚みは10mm位しかない。図示できなかったが、これと対になるべき磨石破片が4点ある。拳大の扁平な円礫を用い、両面、あるいは側面に磨痕が著しい。凹み石を兼ねるものもある。

石斧（第284図2～5）　2は片刃打割器とすべきもので、3～5は所謂礫斧で、円礫の周辺に粗い打割を加えて一端に刃部を作出している。早期後半では最も普遍的な形態である。石

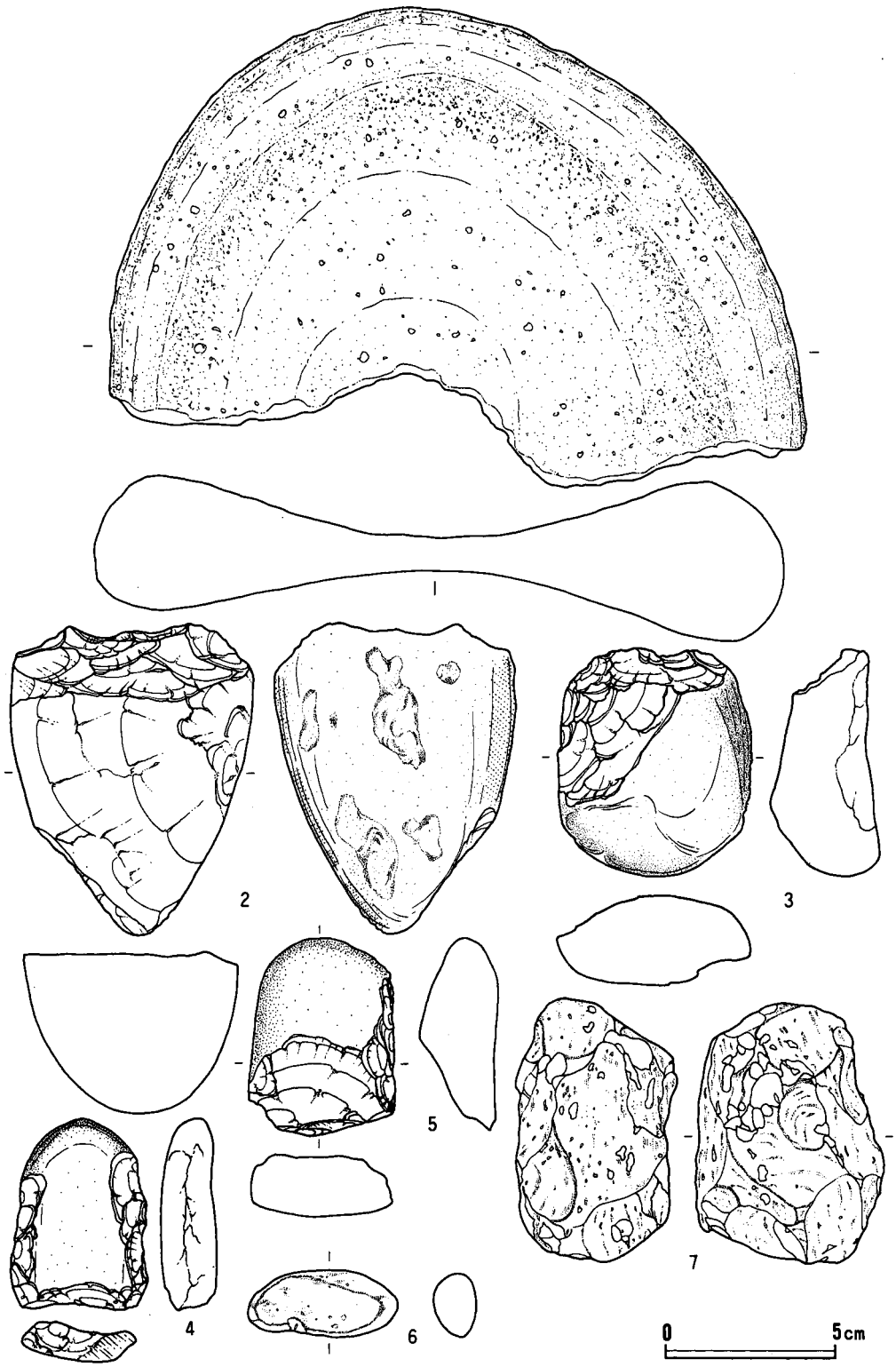
---

* 有舌尖頭器の変遷及び系統に関しては、市原市南原遺跡の資料を基礎として若干の見通しが与えられている（田村他1981）

** 楔状石器全般に関しては、岡村道雄氏の研究に詳しい（岡村1976）。その後、石鏃製作過程との関連が指摘された（曽根1982）が、現状では何んとも言えない。



第283図　縄文時代の石器（1）(2/3)



第284図　縄文時代の石器（２）（1/2）

軽石（第284図6・7）　用途不明の軽石が大小2例ある。両例共に切痕、磨痕を部分的に留めている。6などは浮子としての機能が推定できるかもしれない。また、これを完成品と見れば8は一種の素材として搬入されたものかもしれない。

石核・剥片　共に図化していないが、石核25点・剥片389点、合計414点が採集された。石核と剥片の比率は1：16で石核の比率が高いことが注目される。ほとんどが黒曜石であるが、少数のチャートが含まれている。図が無く分りにくいが、石核の大半は打面と剥離面とを不規則に交代しながら大略貝殻状の剥片を剥離してゆく結果、最終的にはネガティブバルブをもつ剥離面におおわれた賽子状、角錐状、あるいは、角柱状の残核となるに至る。平均一辺約25㎜のものが多い。肉眼的には6～7の母岩に識別される。これに対応する剥片は第8表にその計測結果を示した。剥片の性格については後で若干の考察を加えたい。

礫・円礫　総数301点の採集。焼成を受けているものとそうでないものとがあるが、前者が164点（うち完形礫11点）、後者が137点（うち完形礫25点）と、焼かれているものがやや多い。被焼成礫は赤色し、細片化しているものが目立つが、赤化はさほど顕著ではない。また、タール状付着物、スス等の付着は認められない。配石、あるいは配礫の存在が予測されるが、資料的性格から接合、母岩識別は実施していない。

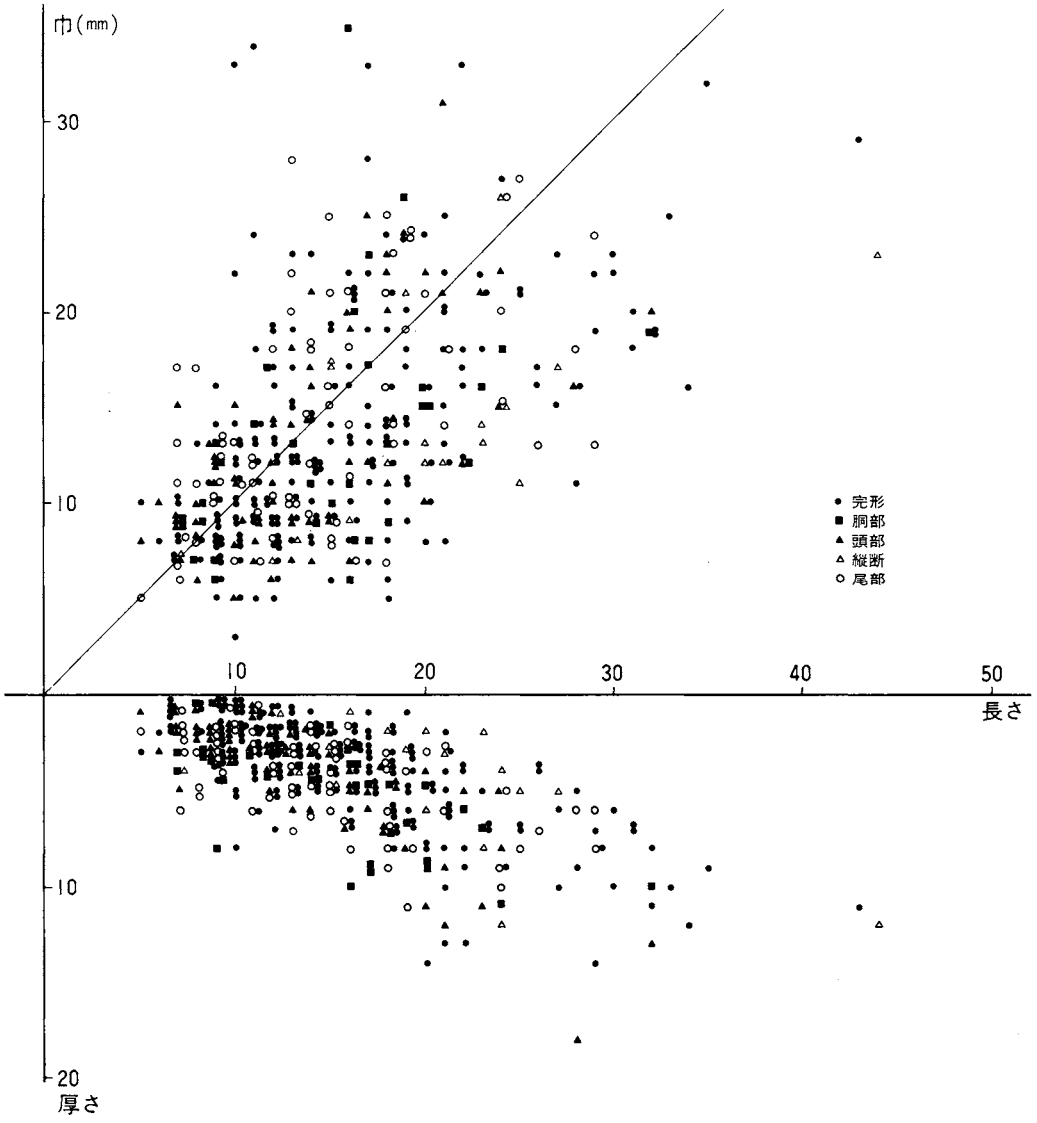
389点にのぼる剥片は、大きさも多様で、また、形態的にも何らの画一性を示さない様に見える。このことは、石核の不定形性とも表裏一体の関係を有すること明白であるが、これらの剥片の性格をどのように把え得るのか、すなわち、剥片生産の背景として想定しうる作出目的や技法に関しては、従来余りふれられることがなかった。本遺跡の資料に基づきそれらの問題について少し考えておきたい。

まず、剥片の計測から始める。個々の剥片について、その最大長、最大幅、最大厚について、ボルド* の計測法（ボルド1961）に基づいて計測した結果を第8表に示した。計測の前に、剥片は（1）完形品、（2）折断剥片あるいは破損剥片（両者の差を指摘するのは困難な場合が多い）に分け、（2）を更に（2－a）頭部、（2－b）中間部あるいは胴部、（2－c）尾部、（2－d）縦断されているものに分けてみた。（1）、（2）の割合は、（1）199点、（51%）、（2－a）67点（17%）、（2－b）33点（8.5%）、（2－c）71点（18%）、（2－d）19点（4.9%）となり、半数が完存し、残りが何らかの要因で折損されていることが分る。（2－b）の比率が8.5%と低いところから、3分割以上のものよりも2分割のものが多かったと推定される。縦断もまれである。

次に（1）（2）を実際に計測し図化してみると、両者共に特別な範囲に集中することなく、万遍のない分布状況を示している。このことは、折損自体に厳密な規格性をもたせるための作

---

* Bordeaux 『Typologie du poléolithique ancien et moyen』



第8表　剥　片　計　測　表

為と考えるか、もしくは逆に、折損自体が偶然性に支配された世界にあると考えるかのいずれかであるが、剥片形態の画一性の欠如から、後者と考えるのが妥当である。しかし、約半数の剥片が全て偶然性に支配されたと考えることは早計である。この問題には別な考察が用意されねばならないが、今のところ筆者にその準備はない*。

剥片の一般的傾向として指摘しうる第2の点は、最小のものでも長さ、幅、厚さともに5mmをこえないということである。ところで、これらの剥片の多くが、具体的使用を目的としたものではなく、何らかの、多分、石鏃の製作と関連するものと仮定しよう。このことは、剥片の

* 剥片の形状、遺存状況の定性分析と共に、それらの統計的処理が必要である。

大半が不定形で、かつ、肉眼的にはシャープなエッヂを保存していること、また、石鏃の大半が黒曜石製であり、剥片との石質の一致とを根拠としており、かなり正確な判断としてよいであろう。そうであるならば、石鏃の表裏をおおう剥離痕の大きさが、上の事実と関連してくるであろう。実際、石鏃の調整剥離痕は、長さ、幅共に５～６㎜をこえるものは少く*、遺存剥片と大きな矛盾をきたすことになる。このことの原因は、実際の調査に際しては、微細なチップの回収が不可能である点にあるとも考えられる。今後は、石器工房址の調査における水洗選別作業が必要であり、微細遺物と調整痕との関連に意を留めることが要請される。

第３に剥片の大きさと製品である石鏃との関連性のうち、剥片中に素材がどのような形で存在するのかという問題がある。石鏃を計測すると、幅は10㎜～15㎜のもの17例、15㎜～20㎜のもの14例、その他３例とほとんどが10㎜～15㎜の間に集中し、厚さは２㎜～４㎜のもの９例、４㎜～６㎜のもの21例、６㎜～８㎜のもの３例、他１例で、４㎜～６㎜に集中することは明らかである。また、長さにはかなりのバラつきがあり、16㎜から38㎜の間に相当する。これらの限界値をグラフに記入して、３本の基準線内にある剥片の数値を算出すると、ほぼ90点前後のものが素材化しうることが判明する。しかし、これらの中には、形態的に不適当なものも多いと考えられ、実際にはこれの更に数分の１が目的とする剥片であったであろう。そうすると、作出された剥片総数のうち、極めて少数のものが素材として利用されたにすぎず、大半のものは廃棄処分の運命にあったと考えられる。なお、基準線内の剥片の大半が、Ｙ＝Ｘの直線下、すなわち、横長のものであることも注意される。

以上の検討の結果、縄文早期の剥片作出は、石鏃の素材獲得を主目的とするものであり、石鏃の素材として目的的に産出されたとすれば、利用された剥片は総産出剥片の数パーセントを占めるにすぎず、残余のものの大半が廃棄されたと考えられる。剥片自体が利器として利用されることのまれなことと相まって、先土器時代の剥片作出過程と著しい対照を示している。今回は資料自体の不充分性もあり、踏み込んだ考察ができなかったが、縄文時代の石器研究も新段階をむかえつつある現状（田中1981）を踏まえ、更に検討を蓄積してゆきたい。

---

* 石鏃の作出段階に対応して調整剥離の形態、大きさに差が認められるか、否かの検討が必要であるが、尖頭器の製作過程（芹沢1966）ほど極端な差は認められなかった。

3. 弥生時代の遺物（第285・286図）

鶴牧１・２・３号墳の盛土中及び周溝内より弥生式土器が出土した。ここでは、図化可能な土器片を抽出して記載し、若干の問題点を指摘したい。

壺形土器（１～８）

１は広口壺形土器の口縁部片で、口唇部及び折り返し部に単節斜縄文が、端部には刻目が施される。また、無文地に赤彩が認められる。２は胴部片で、無節縄文を沈線が区画し複雑な文様構成を示す。無文地に赤彩が施される。３は無頸壺形土器の口縁部片で、折り返し部に羽状縄文、端部に刻目、無文地に赤彩が施される。４は頸部片で、上位に結節文、下位に羽状縄文が、また、内面及び外面無文地に赤彩が施される。５は胴部片で、結節文間に３段の単節斜縄文が羽状に巡る。無文地には、赤彩が施される。６～８も胴部片である。６は火気を受けたためか若干歪む。共に結節文・羽状縄文が施される。また、６・７は外面無文地に赤彩が認められる。

１～３は、久ヶ原期に、また、４～８は弥生町期に比定される。

鉢形土器（９・10）

９は折り返し部に羽状縄文が、また、端部に刻目が巡る。10は口唇部、折り返し部に羽状縄文が施され、粒痕が明瞭に残る。

共に久ヶ原ないしは弥生町期に比定される。

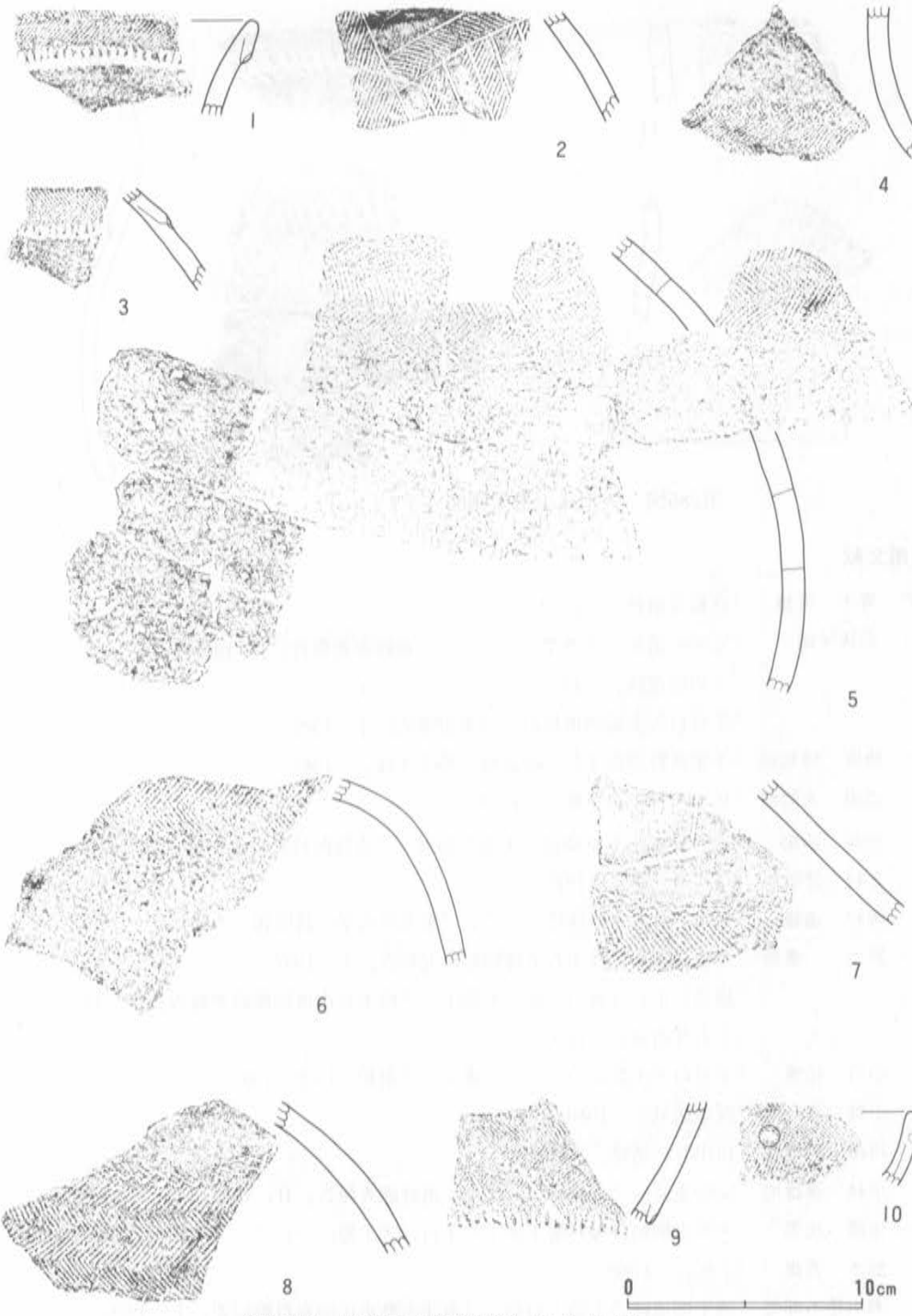
甕形土器（11～13）

11は頸部片で、３段の輪積み痕が残り、端部に押捺文が巡る。12は胴部片で、接合部に縄文体の押捺が施される。13は口縁部及び胴部片で、口縁部折り返し端部、胴部接合部に縄文体による押捺が施される。器内外面には赤彩が認められる。

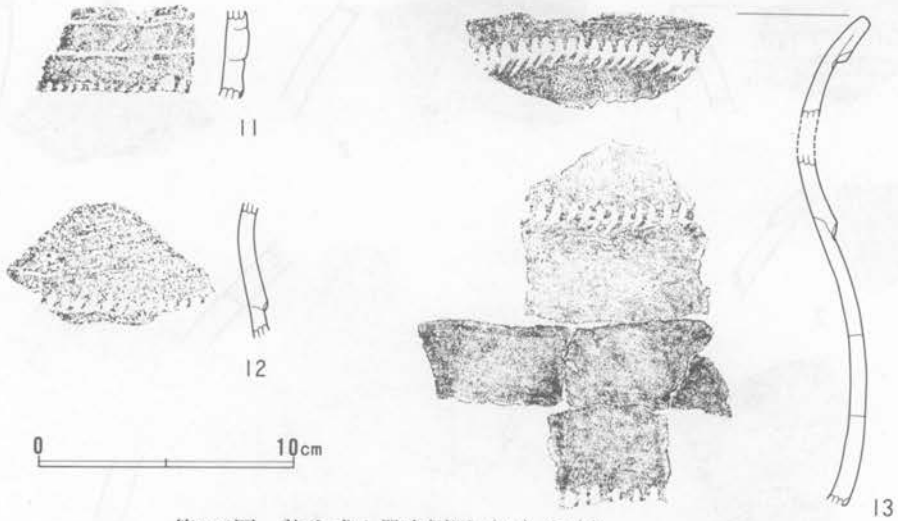
11は久ヶ原期に、12・13は弥生町期に比定される。

以上、ここに記載した土器は、すべて弥生時代後期に比定される土器群である。これらの土器以外にも図化不可能な土器も所在し、ほとんどは同期に比定されるものである。

村田川流域における弥生時代後期の集落立地は、第１章第２節で述べるように旧海岸線上の下総下位面、標高約20～30m程度の低地上に位置するのが普遍的である。鶴牧古墳群の立地する舌状台地は、河川流域つまり水稲等の農耕可能地より隔絶した標高約50mの台地である。ここより同期の土器群が検出された事は、遺構等が古墳造営期に消滅したとしても、地形的には広範囲な集落の存在は考えられない。これは、生産地を基盤として立地する周辺の集落跡とは若干異った占地であり、同舌状台地が如何なる目的により領域として利用されていたか興味ある事象である。



第285図　弥生式土器実測図（1）（1/3）



第286図　弥生式土器実測図（2）(1/3)

引用文献

ア　青木　秀雄　『高輪寺遺跡』　1979

安孫子昭二　「No.269 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅳ　1967

『下沼部遺跡』　1980

「子母口式土器の再検討」『東京考古』1　1982

飯塚　博和他　『千葉県野田市半貝・倉之橋・勢至久保』　1982

池田　大助他　『佐原市神田台遺跡』　1978

池田　次郎　「城台貝塚出土早期縄文土器の細別」『広島医科大学論文集』2　1949

今村　啓爾他　『宮の原貝塚』　1972

岡村　道雄　「ピエスエスキーユについて」『東北考古学の諸問題』　1976

岡本　　勇他　「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告』1　1957

「横須賀市吉井城山貝塚の土器(1)」『横須賀市博物館研究報告』6　1962

『下吉井遺跡』　1970

小川　和博　「子母口式土器についての覚書(1)」『奈和』19号　1981

小野　真一他　『常陸伏見』　1980

カ　川崎　義雄他　『田中谷戸遺跡』　1976

小林　達雄他　「No.52遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』II　1966

サ　佐藤　次男　「水戸市柳崎貝塚貝層下出土の子母口式土器について」『茨城考古』2　1969

鈴木　秀雄　『卜伝』　1980

瀬川祐市郎他　「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1　1976

「子母口式土器再考」『沼津市歴史民俗資料館紀要』6　1982

芹沢　長介　「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究報告』第2集　1966

曽根　博明他　「大和市内における縄文草創期遺跡の調査－深見諏訪山遺跡－」『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』　1982

タ　高橋　雄三他「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」『調査研究集録』2　1977
　　田中　英司　「折断と縄文時代の剝片石器製作」『石器研究』2　1981
　　田村　　隆他「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良』4　1980
ナ　西川　博孝　「三戸式土器の研究」『古代探叢』　1980
ハ　芳賀　英一　「常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる2・3の問題点」『福島考古』18　1977
　　原田　昌幸他『藤の台遺跡』II　1980
マ　宮　　重行他『木の根』　1981
ヤ　山内　清男　『日本先史土器図譜』第1部第Ⅻ集　1941
　　『日本先史土器の縄紋』　1979
　　吉田　　格　「千葉県城之台貝塚」『石器時代』1　1955

第6節　まとめ

今回の調査から、ここではいくつかの問題点を総括してみたい。

古　墳

墳丘は、1・2・3号墳ともに、地山および旧表土の上に構築され、1・2号墳の現存は良好であったが、3号墳は削平のためか、良好とはいえない。

周溝は、3基とも、急斜面側を欠く、半円形状を呈する。これは、一般的に後期古墳が全周する周溝を有する場合が多いのに比べ、3基共に半円形態を呈する事は、特異な存在である。多分、地形を考慮して掘削したものであろう。

主体部は、3号墳が、墳丘削平のためか、遺存を見ないが、1・2号墳はともに、南北に、ほぼ並列の位置関係にある2基が検出された。形態は、すべて直葬と考えられ、土壙のみが明瞭であった。1号墳、2号墳の主体部を比較すると、その形態においては、よく類似するが、築造の段階において多少、相違がある。これは、墳丘内における主体部の垂直的位置関係の相違である。つまり2号墳の主体部は、1号墳の主体部と比較して、墳丘内の高い位置に存在する。3号墳の主体部は遺存しないが、もし存在したならば、墳丘の削平を考慮すると2号墳の主体部に近い位置関係にあった可能性が強い。

3基の古墳の築造の順序は結論的にいえば、2号墳の築造が最も早く、1号墳と3号墳の順序は3号墳の方が、早い可能性が強い。

これは、1号墳と2号墳を比較すると、その立地条件において、2号墳の方が舌状台地の先端部にある。1号墳は舌状台地の最も狭い部分に立地し、西側はすぐに急斜面、東側は真近かに斜面を控えており、1号墳を2号墳に先行して築造すると2号墳築造が比較的困難となる。よって、2号墳を先に築造したと考える方が合理的である。

また、2号墳と3号墳とについては以下のように考えたい。3号墳は、舌状台地の平坦部より、かなり、東側斜面に寄った位置にあるのに対して、2号墳は、舌状台地の平坦部を比較的広く占地している。3号墳は2号墳の存在によって場所的な制約を受けて築造された。よって2号墳の方が先行する。また、1号墳と3号墳の関係は断定できないが、以下のことから、3号墳の方が先行する可能性が強い。3号墳は、墳丘削平によって主体部は遺存しないが、主体部が存在した可能性があり、しかも、主体部の墳丘内における垂直的位置などの様相は、1号墳より、2号墳に近いと考えられる。

最後に、編年的位置関係であるが、2号墳周溝内より出土した須恵器の特徴から、2号墳の築造は6世紀後葉と比定するのが妥当であろう。また、3号墳、1号墳も出土遺物および位置関係より2号墳築造からさほど時間差がない時期に築造されたと推定され、その差は、一世代から二世代位、つまり、6世紀末葉からせいぜい7世紀初頭に位置づけたい。

以上の点より、鶴牧古墳群は、舌状台地の狭い平坦地を利用して、6世紀後半に2号墳→3号墳→1号墳と比較的短期間に築造されたものと推定できる。

鶴牧古墳群の周辺、特に村田川の中流域には、現在、発掘調査が進められている草刈古墳群が、また、対岸には山王後・小谷古墳群、下流域には、大厩・菊間古墳群等が所在する。これらの古墳群は、調査例も比較的少なく、不明な点も多い。今後の調査例の増加に伴い、これらの古墳群と当古墳群との関連およびその中での位置づけなど、今後に残された課題は大きい。

古墳以外の遺構・遺物

今回の調査では、古墳以外の遺構は検出されなかったが、先土器時代から弥生時代の遺物が盛土内および周辺より発見された。

先土器時代の遺物は、ローム層内の調査が実施できず層位的関係は不明確であるが、小型石槍、ナイフ形石器、彫器および剥片等が出土している。

縄文時代の遺構も、古墳構築時に破壊されたものであろうか、検出されなかった。しかし、草創期から早期の土器および石器が多量に発見された。特に、早期後半条痕文系土器群の内で県内でも比較的出土例の少ない「子母口式土器」が一括資料として出土したことは注目される。

弥生時代の遺物では、後期の久ヶ原式および弥生町式土器が出土した。遺構の検出はなかったが、これらの土器を使用した集団がこの狭い標高50mの台地上を占有した事実は、当地域の集落立地に問題を呈示したものといえる。

第Ⅳ章　人形塚の調査

第１節　調査方法と経過

人形塚は市原市草刈字人形台1955に所在する。昭和52年３月に実施された千原台地区埋蔵文化財分布調査では、径約10ｍ、高さ1.5ｍの円墳として、43号墳なる名称が与えられ、また同時に、供養塚としての可能性も示唆されたのであった。発掘調査の結果、古墳としての可能性が否定されたため、その名称を、里人の俗称である「人形塚」と改めた。

調査は昭和56年４月に実施された。経過の概略は以下の通りである。４月第１週は事務手続及び準備期間にあて、４月８日から現地作業を開始した。伐採、測量、環境整備と併行して、９日からは一部の試掘を開始した。試掘は土盛部分に東西、南北方向の２本のトレンチを設定し、土盛の状態、周溝の有無を探索するとともに、周辺の状態を知るため、土盛部分のセクションベルトの延長線上西側に２ｍ×12ｍの、北側に２ｍ×８ｍのトレンチを任意に設定し、Ⅲ層（ソフトローム層）まで掘り下げた。調査はほとんど何らの遺構、遺物を得るところなく順調に進み、４月15日には盛土部分及び延長トレンチの調査を終了し、４月21、22両日には盛土下の８㎡について先土器確認調査を実施したが、何らの遺物の検出はなく、22日には全ての現場作業を終了した。

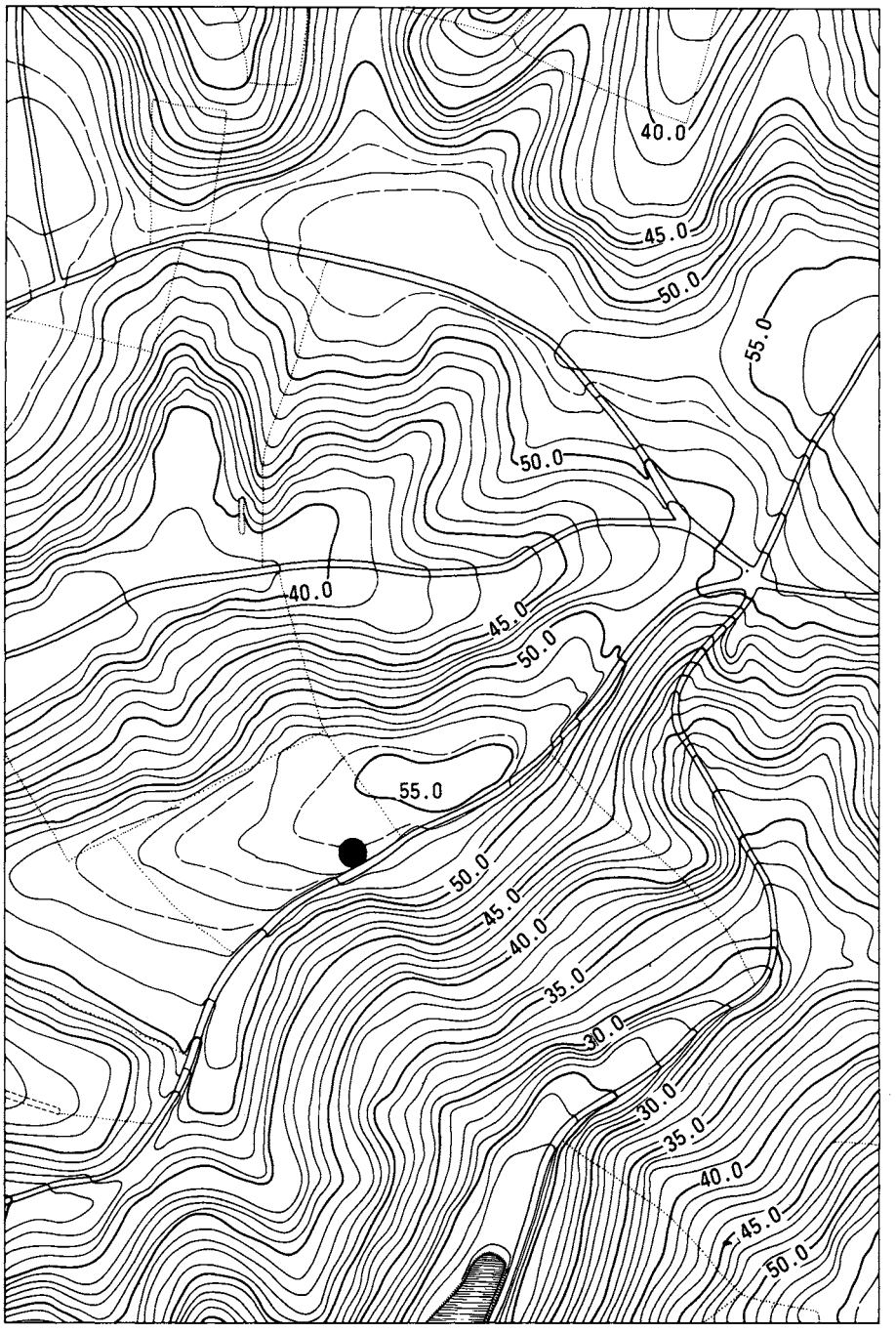
第２節　遺構と遺物

１．位置と外形（第287・288図）

周辺地形について概括すると、本地域は北側を村田川から大きく東へ穹入した通称「茂呂谷」より分岐した小支谷群が、また南側を村田川によって開折された沖積地からの小支谷群が複雑に入り込むやせ尾根の連った地形を呈している。

本塚は、このやせ尾根平坦面上南側に位置している。この猫額の平坦面は、南北を急斜面によって限られ、東西は起伏にとむ緩斜面となって隣接する平坦面に連なっている。

塚の南側には山道が東西に走り、盛土につながる土堤状の部分がこれと併走している。盛土は径約６ｍの円形盛土部分と、その両側の上面幅約１ｍ、底面幅約３ｍの土堤部との連結した状態を呈していた。なお、土堤部は東西10数ｍにわたり認められた。



第287図　人形塚周辺地形図(1/1000)
（黒丸印　人形塚）

2. 盛土の状況（第288図）

人形塚は、既に前項に述べた様に、山道沿いの土堤状の高まりと、円形盛土部分とから構成されている。発掘調査の対象とされたのは、このうち円形盛土部分であったが、土堤部分との関連も問題となり、両者を含めた土層観察を行った。

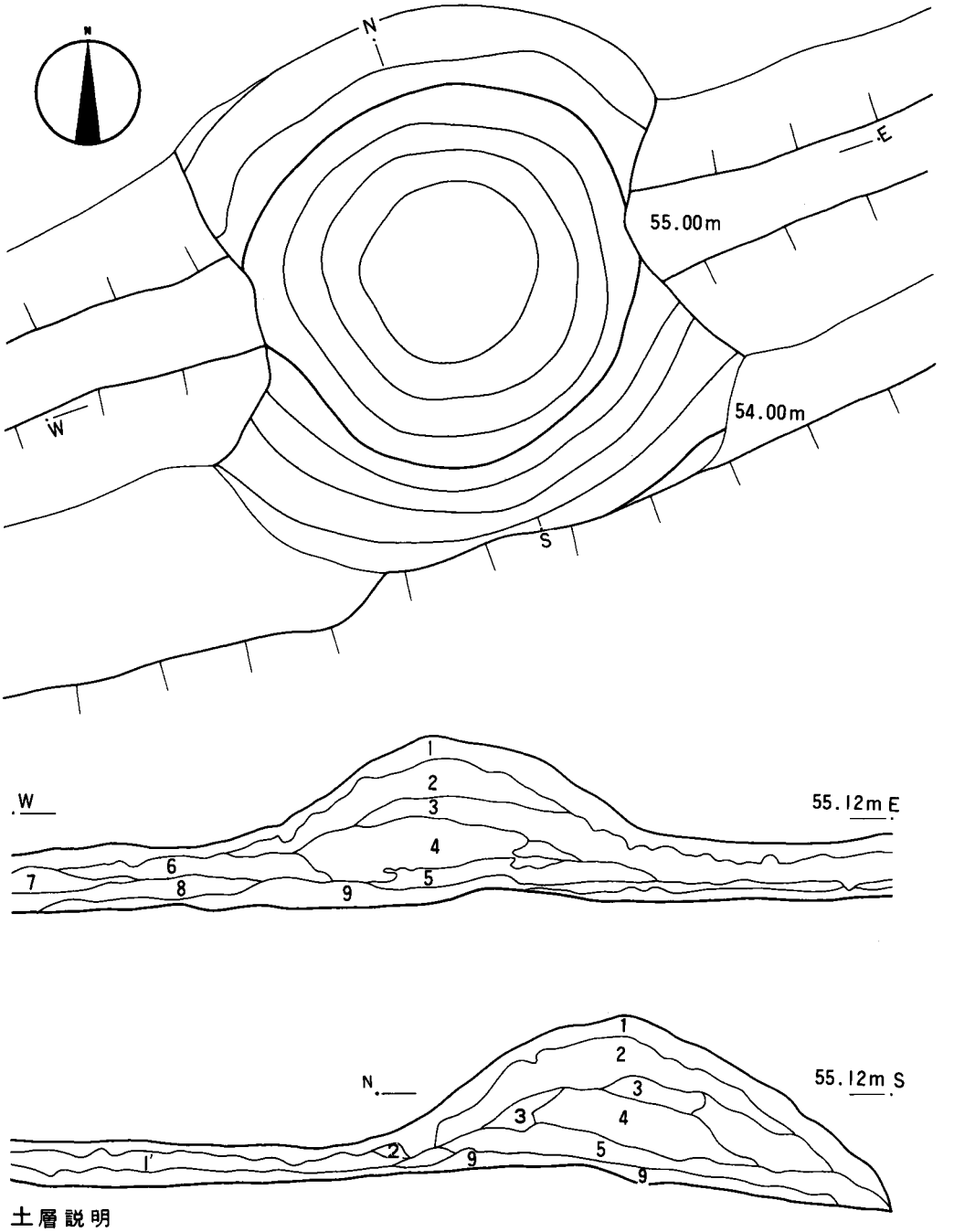
土層の状態は、土層断面図及び土層説明（第288図）から明らかな様に、土堤部と円形盛土部とに大きな差は認められなかった。盛土は9層としたローム漸移層上に構築されているが、プライマリーな旧表土、あるいは新期テフラ層は確認できなかった。盛土の大半は硬軟両様のロームブロックを無秩序に含む腐植土層から構成され、両者の混合状態の差異に応じて数枚に分層された。全体的にしまりを欠き、古墳封土に一般的な版築状態とは程遠いものがある。周溝に関してもそれらしい土層状態は認められなかった。

土堤部と円形盛土との関係も明らかとなった。すなわち、ローム漸移層上には、円形盛土部分については4層、5層がおかれ、引き続いて2、3、6、7各層が、土堤部、円形盛土部構築材として積まれている。特に3層は、円形盛土中位から土堤部へ連続的に堆積し、これら両者の築造が相前後するものであることを物語っている。

3. 出土遺物

出土遺物は総計27点と微々たるものである。内訳は土器細片13点、砥石破片1点、礫片13点である。このうち、土器片2点は周辺での表面採集品であるから除外すると、発掘の結果出土した遺物は25点ということになる。

遺物の出土状態は、西側トレンチより土器1点、北側トレンチより土器2点、礫片2点、円形盛土内、盛土下より土器8点、礫片9点となり、盛土下漸移層より比較的まとまった検出を見たものの、明確な包含層を把えることはできなかった。土器はことごとく細片化し、図示に耐えるものがない。辛うじて胎土等から帰属時期を推定できたものが数例あるが、稲荷台式、茅山式、阿玉台式などがある。他に時期不詳の須恵器細片が1点ある。



土層説明

1. 現表土層　下部はテフラ質になる(1')。
2. 黒色土層　微量のソフトローム粒が含まれる。
3. 黒褐色土層　ソフトローム粒を含むしまりのない土層。
4. 黒褐色土層　ソフトローム粒の混入が目立つ。
5. 黒色土層　ソフトローム粒を含む。しまりは良い。
6. 黒褐色土層　腐植質の土層。
7. 明褐色土層　多量のソフトロームブロックが含まれる。
8. 明褐色土層　ソフトロームブロックが少量含まれる。
9. 褐色土層　プライマリーなローム漸移層。

0　4m

第288図　人形塚平面図及び土層断面図(1/40)

第3節　まとめ

人形塚については、当初古墳、あるいは供養塚としての位置づけがなされていた。発掘調査の結果、古墳としての必要条件、すなわち、周溝や主体部の存在、版築面などは確認できず、改めてその可能性は否定された。問題は供養塚としての性格を帯びていたのか、いないのかということと、もしそうでないならば、いかなる目的のもとに構築されたものであるのかという点にしぼられてくるので、この点につき考えておきたい。

まず第一に問題とされるのは、山道に沿って東西に走る土堤との関連である。この点は第2節で述べた如く、人形塚形成とほぼ同時期に土堤部分も構築されており、両者に有機的な関係のあることは明らかである。このことは同時に、ある時代における山道の改修作業との関連をも示唆するものであり、仮に、山道との何らかの脈絡を想定するならば、山道、土堤、人形塚3者の相関に意をおかねばならないであろう。

ここで、山道に着目してみると、第287図周辺地形図から分る様に、この山道を西方へたどると、番場部落と草刈茂呂谷とを結ぶ峠道と交叉し、ナキノ台へ到ることができる この峠道は重要な古道であったと見られるが、人形塚足下の山道は、この峠道と名刹川焼不動尊とを結ぶ尾根筋に相当する。近年の草刈古墳群の調査によって、このような尾根上に立地する古墳が、中近世に至り供養塚に転用された事実も明らかとなっている。

更に重要な発見が昭和57年度に実施されたナキノ台遺跡の調査によってもたらされた。ナキノ台遺跡には、かつて44号墳と仮称した円形盛土があり、発掘調査の結果、マウンド内より寛永通宝が十数枚検出され、更に、現代に至るまでの陶磁器、ガラス器も多数出土し、江戸時代以降の連綿たる民衆的信仰のあとを見いだすことができた。この仮称44号墳は、番場—茂呂谷峠を中心に人形塚と等距離にあるばかりか、人形塚足下の山道によって川焼不動尊とも結ばれるのである。

このように、人形塚形成の背景には、古道や山道を往還し、時に開削や改修に参画した無名の民衆の宗教的意識、あるいは情念といったものが潜んでいる様に思われる。考古学的な調査によって明らかとなったことは余りにも少いかもしれない。しかし、これらの忘却された塚が、近世民衆史の中に正当な位置を得るための、文字通り一里塚として本調査の意義を総括することができよう。

CHIHARADAI NEW TOWN II

— Archaeological Investigations of The Kusakari (Ist) Site,
The Tsurumaki Tomb Mounds, The Ningyô-Zuka —

Preface

Explanatory Notes

Contents

I Introduction page

1 Start of Survey 1

2 History and Sites 3

II Survey of The Kusakari Site (The First Survey)

1 Method of The Investigation 10

2 Remains and Relics 14

3 Conclusions 301

III Survey of The Tsurumaki Tomb Mounds

1 Method of Investigation 312

2 The Tsurumaki I Tomb Mound 312

3 The Tsurumaki II Tomb Mound 327

4 The Tsurumaki III Tomb Mound 339

5 Relics of Pre-ceramic Age, Jômon Age, Yayoi Age 342

6 Conclusions 363

IV Survey of The Ningyô-Zuka

1 Method of The Investigation 366

2 Remains and Relics 366

3 Conclusions 370

Published by

CULTURAL PROPERTIES CENTER OF CHIBA PREFECTURE

1-3-13, Inohana, Chiba-City, Chiba-Pref.

Telephone 0472-25-6478

The present report concerns archaeological investigations carried out in advance of the construction of the Chiharadai New Town. Administratively situated in Chiba and Ichihara cities, the new town occupies a vast area of about 369ha. Bordering north on the town lies the Tônanbu New Town where the archaeological excavations have been also made.

The area is geographically located on the southern part of the Shimofusa Terrace, which is dissected by the Murata River and forms several terraces such as the Kusakari Terrace or the Nakinodai Terrace. The Chiharadai New Town lies north of the middle reaches of the river, and south of the river are the Kikuma and the Omaya Sites. (vid. the 2nd illustration)

The Kusakari Site (the first survey)

The Kusakari Site situated in the western part of the new town covers an area of 260,000m², 19,000m² of which was excavated by the first survey.

Detected figures are as follows ; 92 pit dwellings(4 in the Middle Jômon Period, 26 in the Late Yayoi Period, 62 in the Early Kofun Period), 11 Hôkeishûkôbos (tomb surrounded by a square ditch) in the Early Kofun Period. etc.

The Tsurumaki Tomb Mounds

The Tsurumaki Tomb Mounds sit on the western part of the Kusakari Terrace, below which the Murata River is flowing. The burial facilities were detected in the mounds, and potsherds of about 6th century A.D. (Sueki) were also dug out. The other hand about 70 tomb mounds certified so far in the Kusakari district are dated in the Late Kofun Period. For the reasons mentioned above, we conclude that Tsurumaki tomb mounds are comparatively older than those tomb mounds.

The Ningyô-zuka

The Ningyô-zuka sits near the path which leads us from the Kusakari Terrace to the Nakinodai Terrace. The path is assumed to have been generally utilized from the Middle Ages to the Edo Period. The Ningyô-zuka would be probably in relation to the path.

写真図版

遺跡周辺の地形（1/13000）　千葉日報社提供

図版 2

遺跡全景（1/1200）

遺跡全景（調査前）

図版 4

第 1 次調査区近景

1.　1号跡全景

2.　1号跡遺物出土状況

図版 6

1.　2 号跡全景

2.　3・4 号跡全景

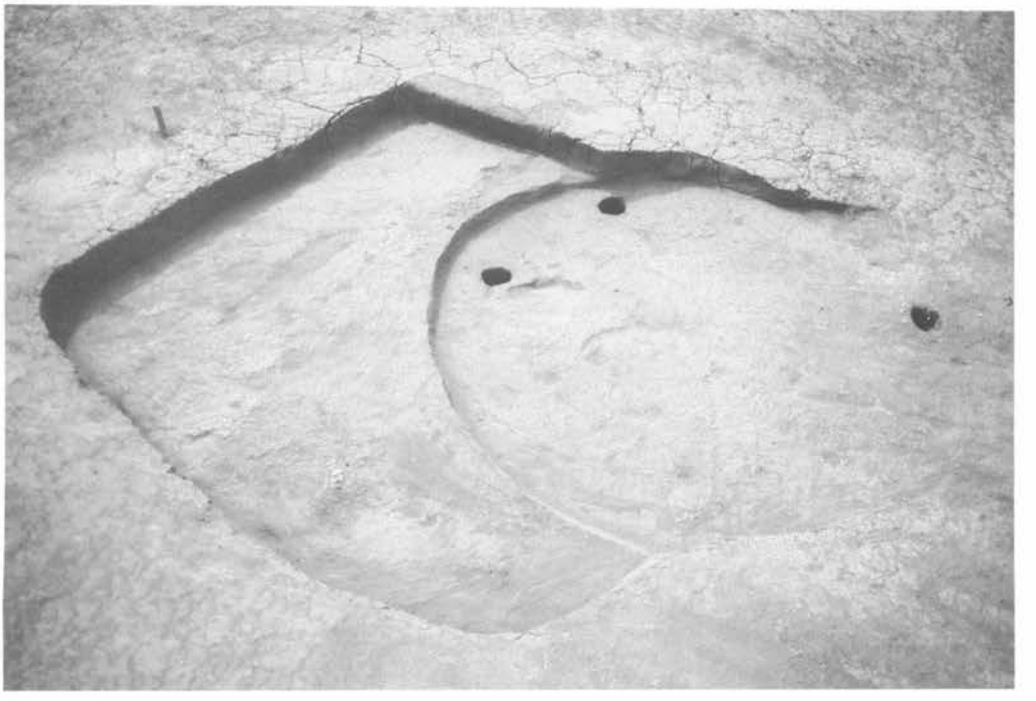
1. 3 号跡遺物出土状況

2. 5 号跡全景

3. 5 号跡遺物出土状況

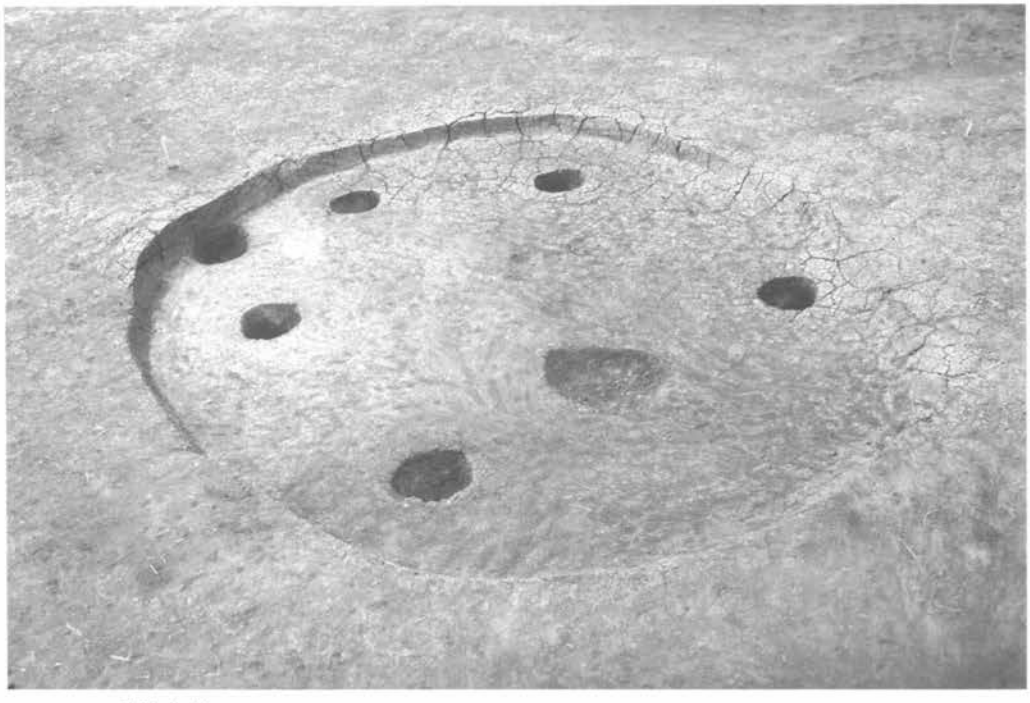
図版 8

1.　6 号跡全景



2.　7・8 号跡全景

1. 7 号跡遺物出土状況

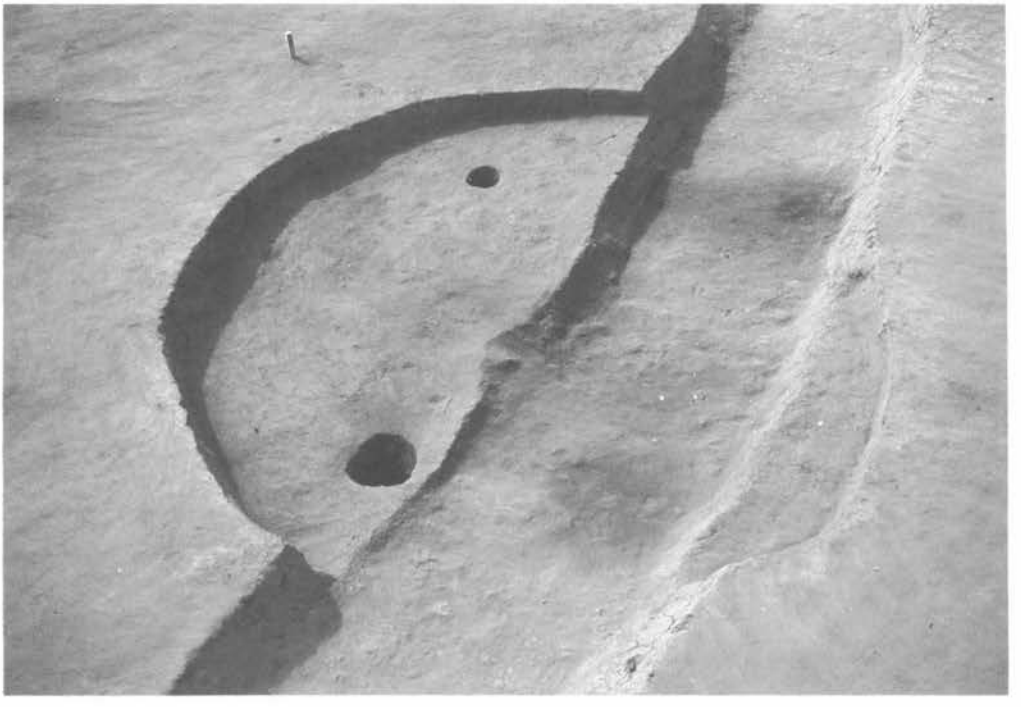


2. 9 号跡全景

3. 9 号跡遺物出土状況

図版10

1. 10号跡全景

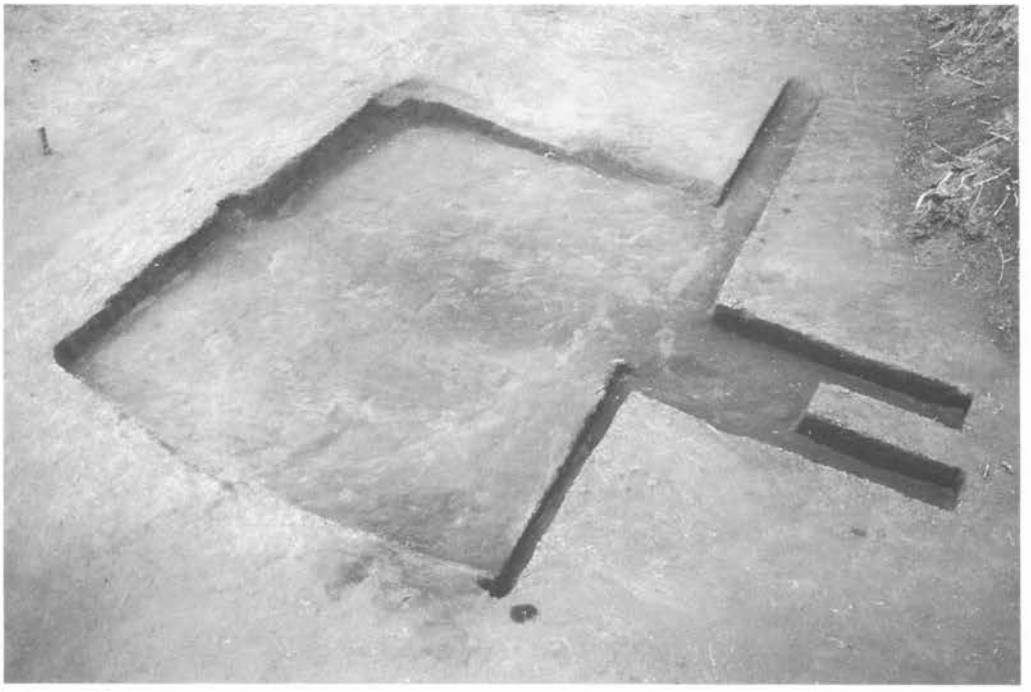


2. 11号跡全景

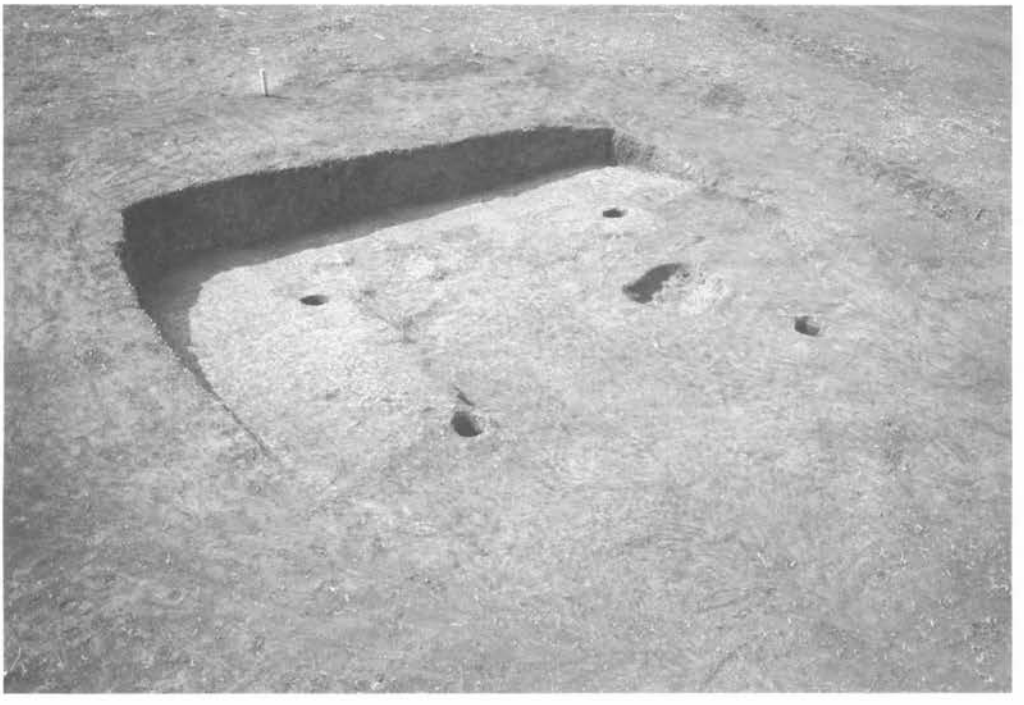
1.　11号跡遺物出土状況

2.　12号跡全景

図版12

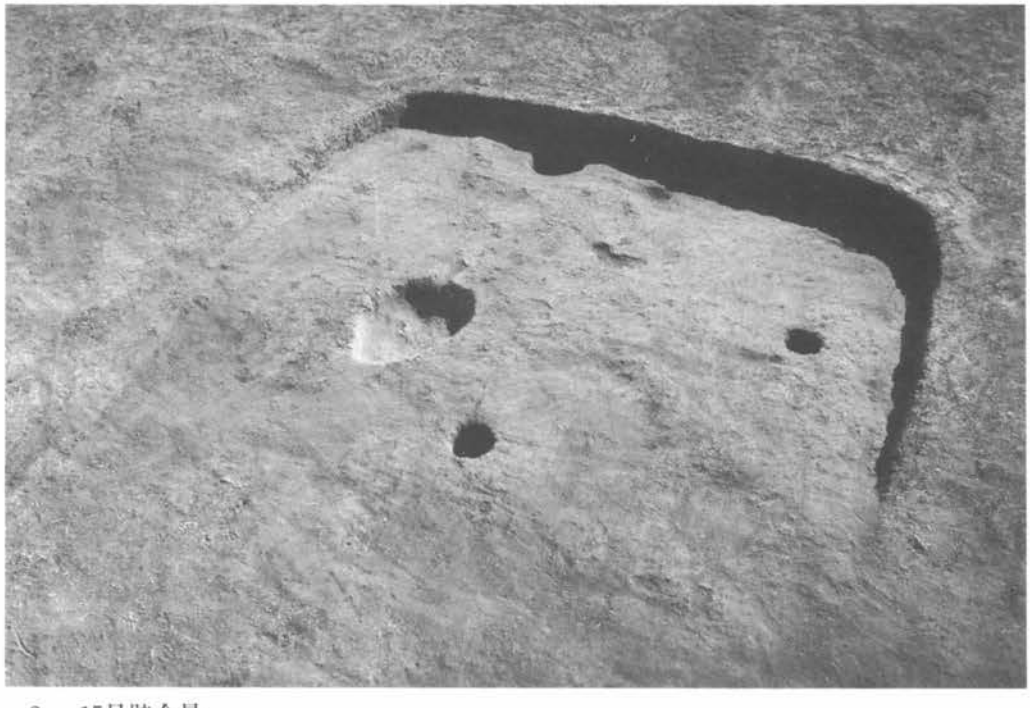


1. 13号跡全景



2. 14号跡全景

1. 14号跡遺物出土状況

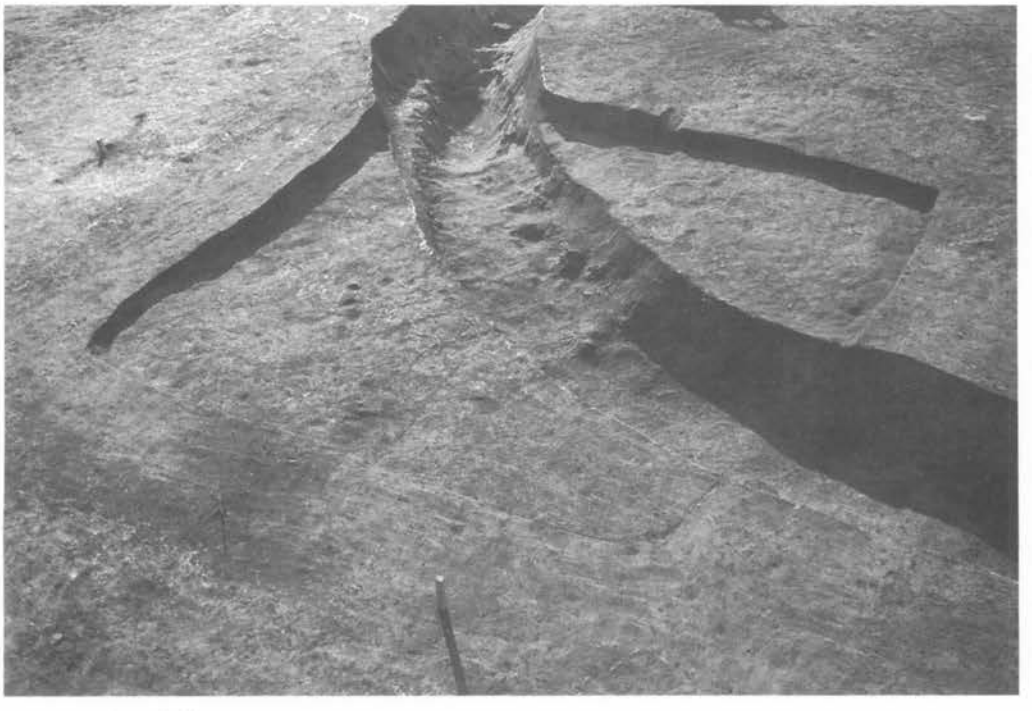


2. 15号跡全景

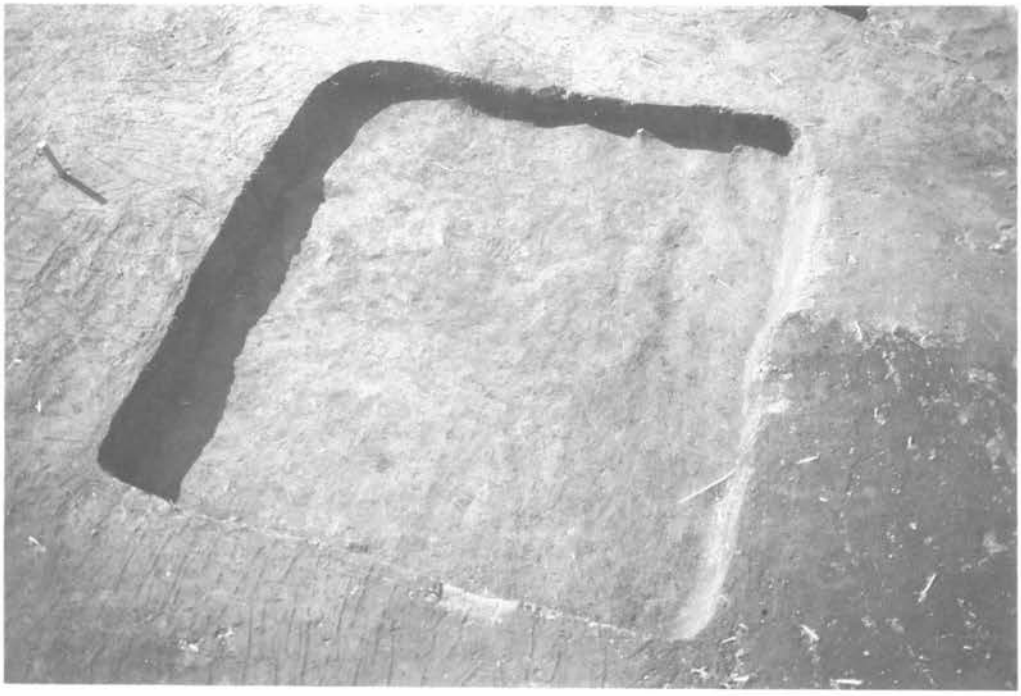
3. 15号跡遺物出土状況

図版14

1. 16号跡全景



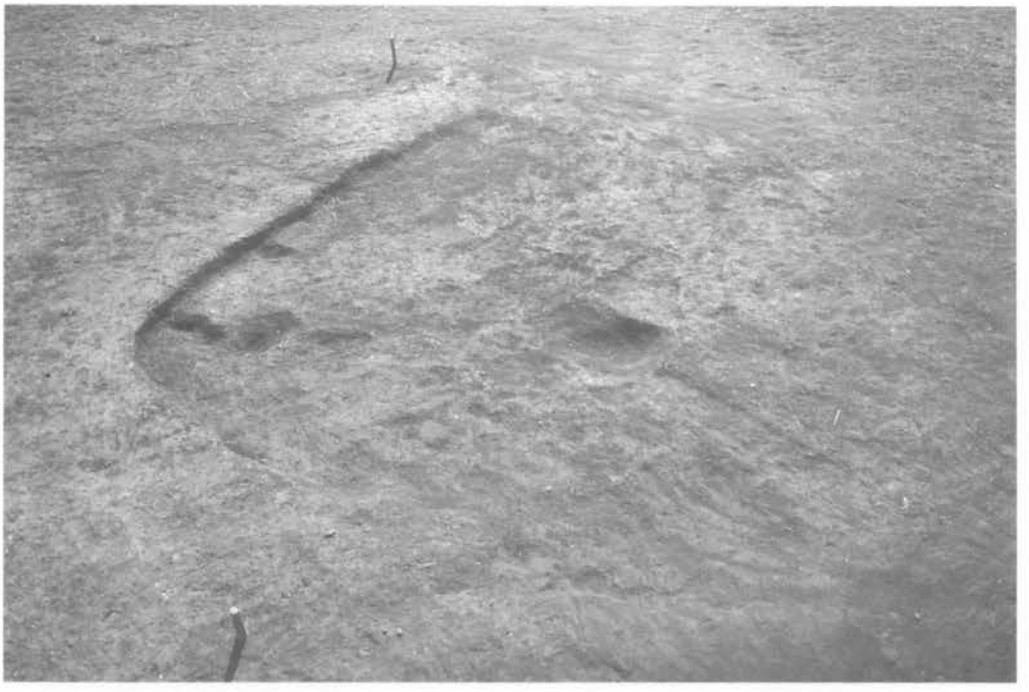
2. 17号跡全景



1. 18号跡全景

2. 18号跡遺物出土状況

図版16



1. 19号跡全景

2. 20・21・22号跡全景

1．　21号跡遺物出土状況

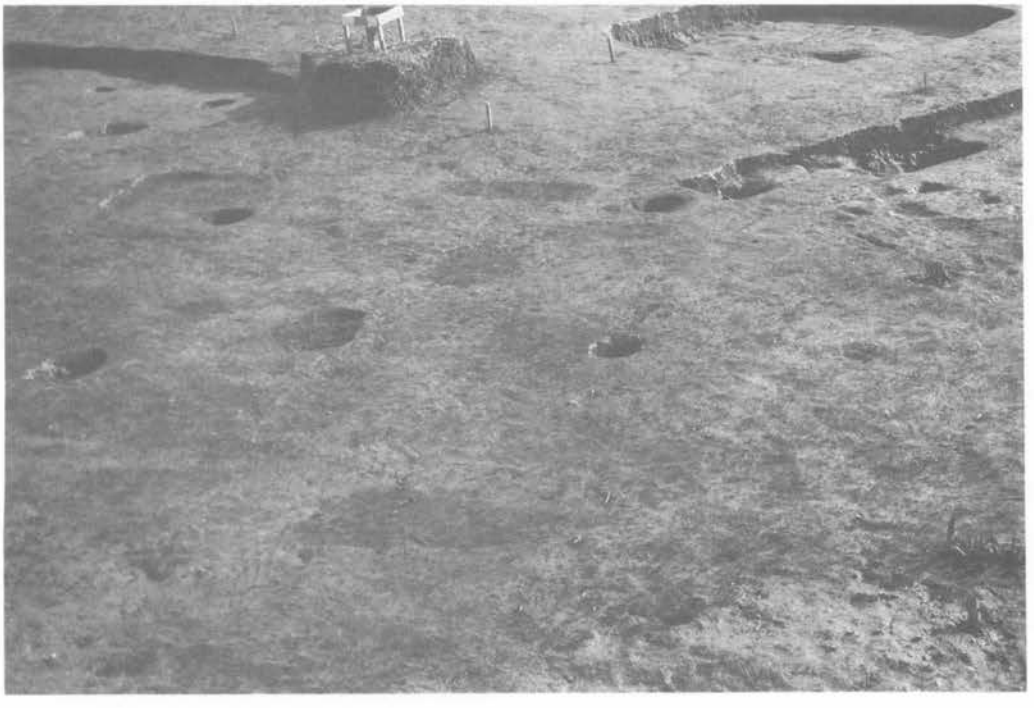
2．　22号跡遺物出土状況

3．　23・24号跡全景

4．　24号跡遺物出土状況

図版18

1. 25・26号跡全景



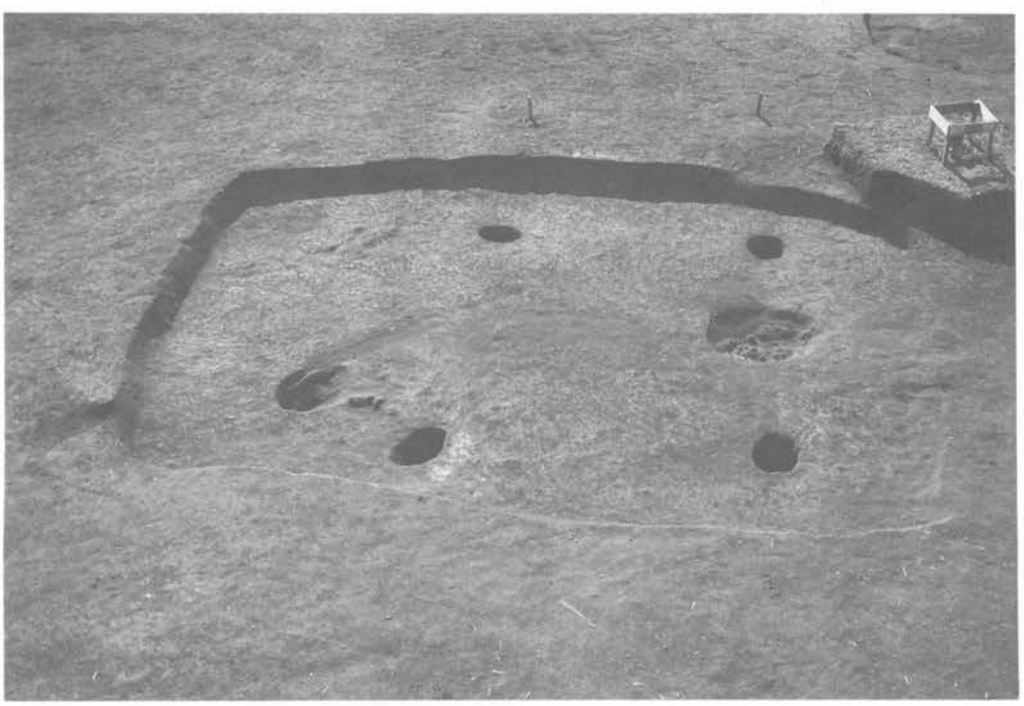
2. 27号跡全景

1. 28号跡全景

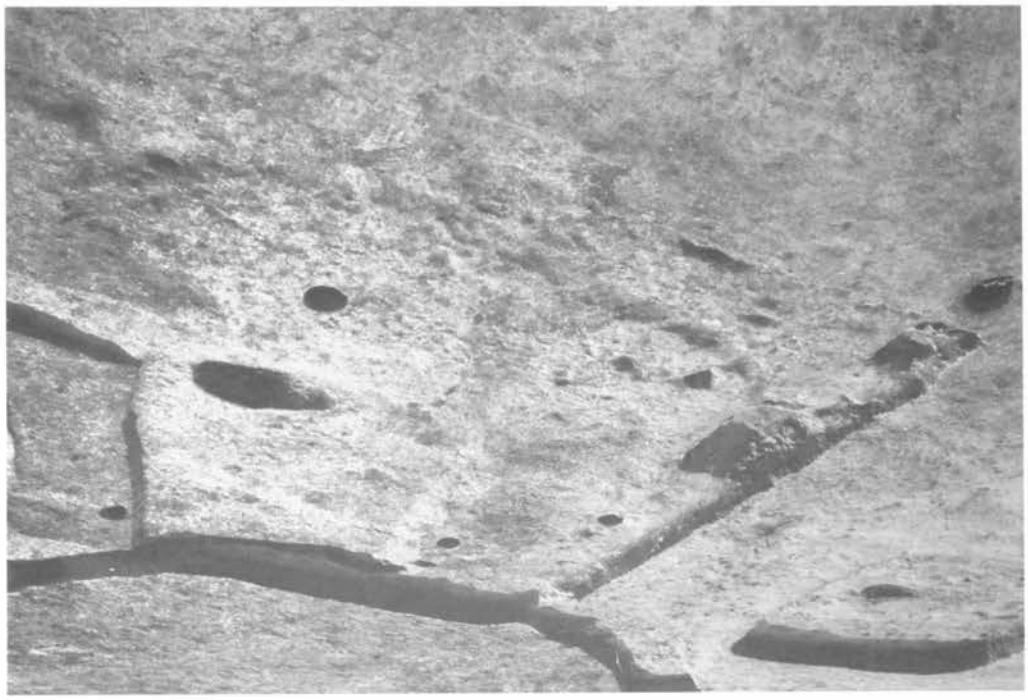
2. 28号跡遺物出土状況

図版20

1. 29・30・31号跡全景



2. 32号跡全景



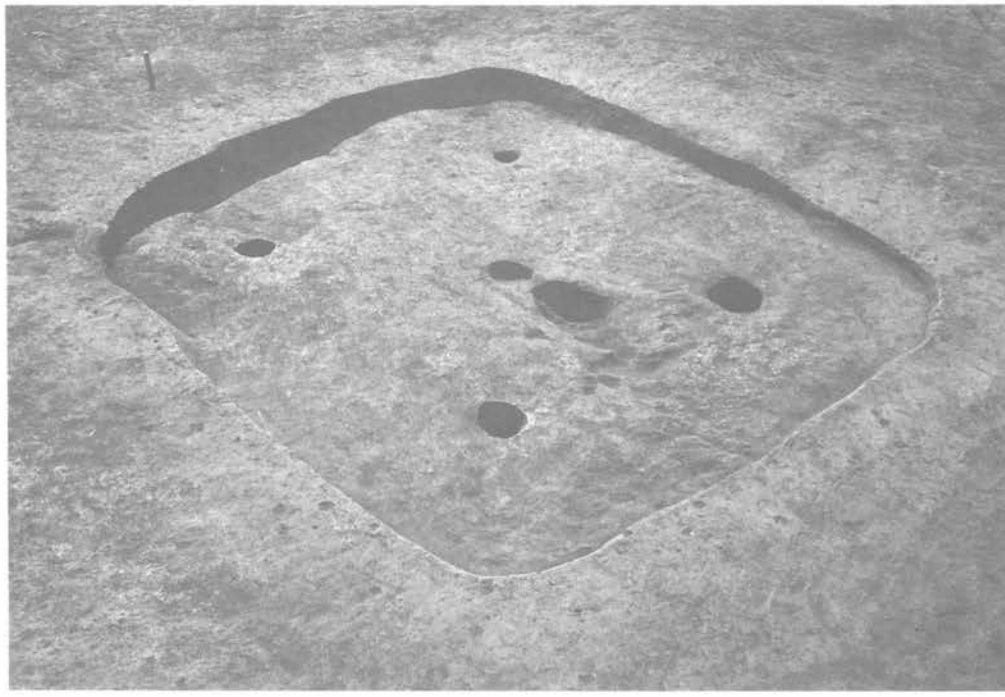
1. 33号跡全景

2. 34号跡全景

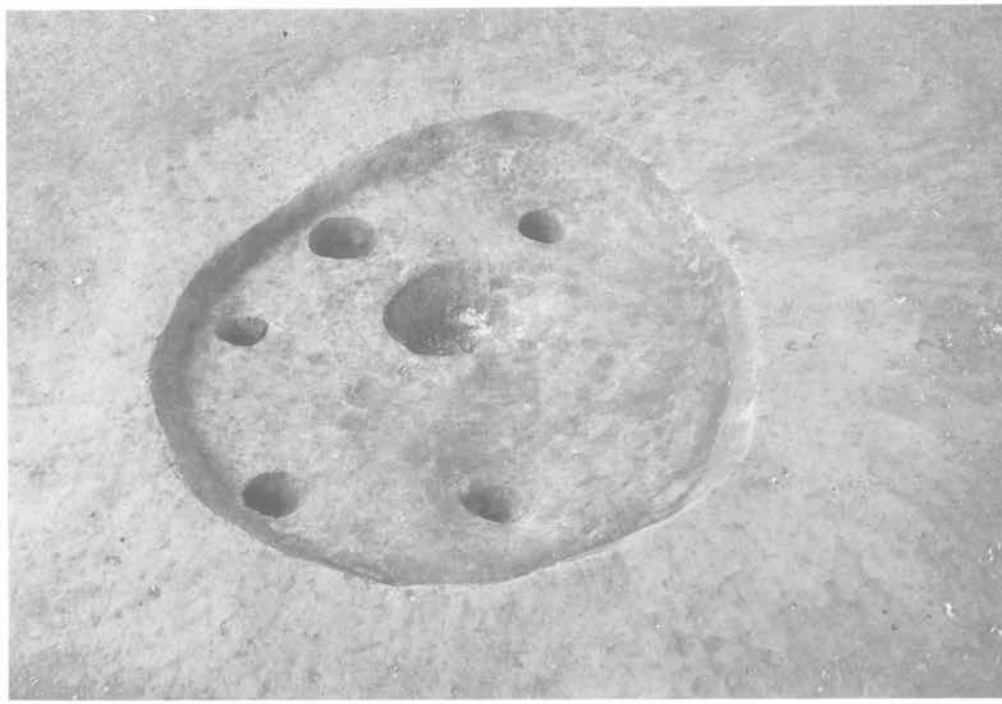
図版22

1. 35・36・37号跡全景

2. 38・39号跡全景

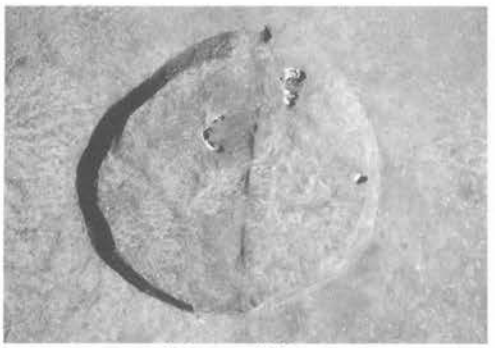


1. 40号跡全景



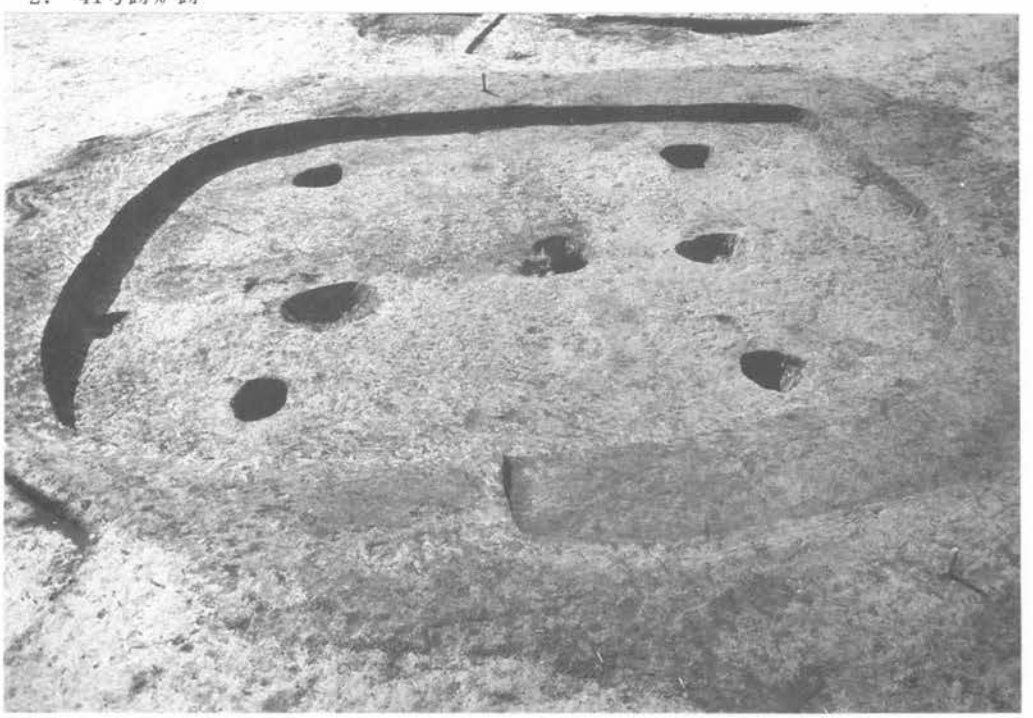
2. 41号跡全景

図版24



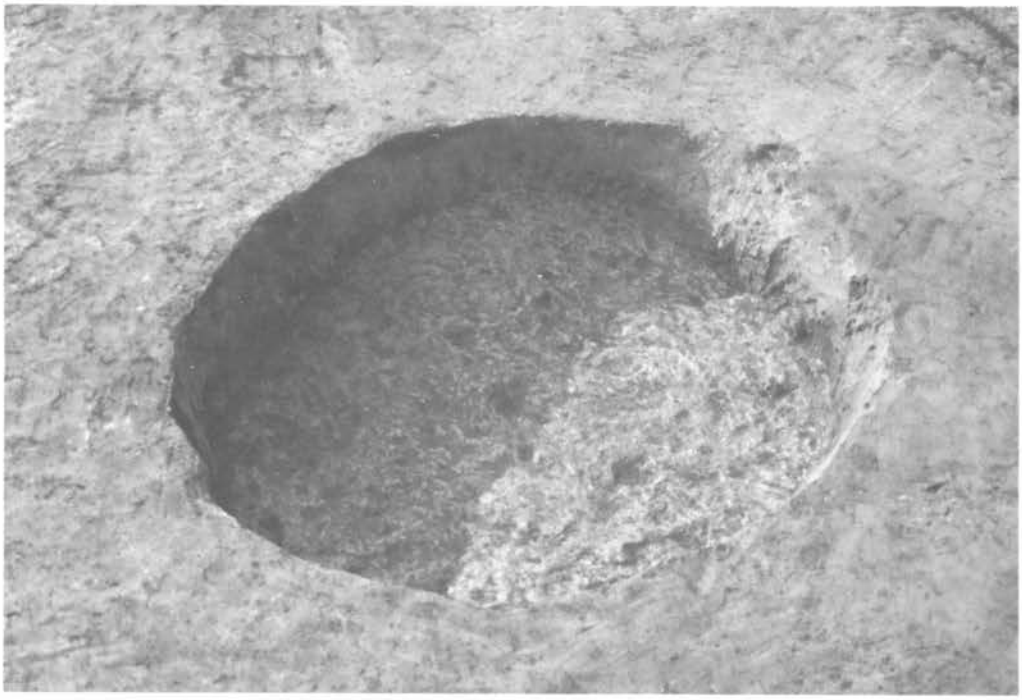
1. 41号跡遺物出土状況

2. 41号跡炉跡



3. 42・43号跡全景

1. 44～49号跡全景



2. 50号跡全景

図版26

1．　50号跡遺物出土状況

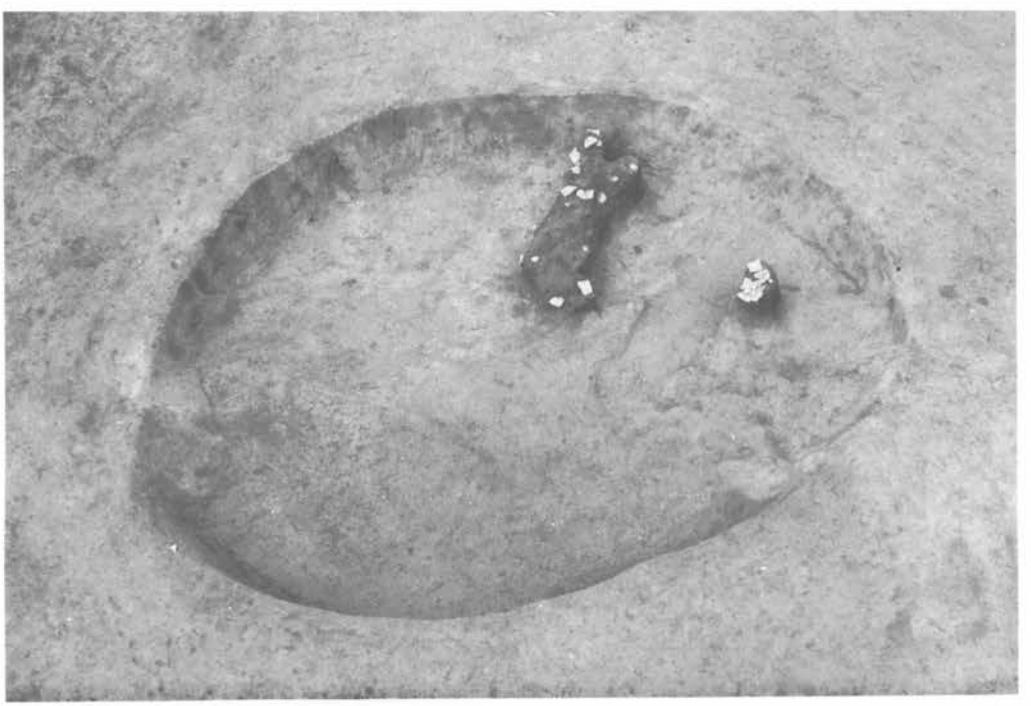
2．　50号跡遺物出土状況

1. 51号跡全景

2. 52号跡全景

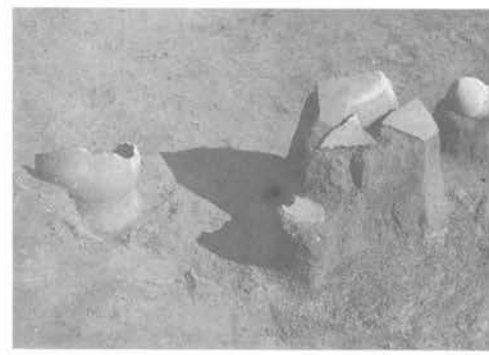
図版28

1. 53号跡全景



2. 54号跡全景

1. 55号跡全景



2. 55号跡遺物出土状況

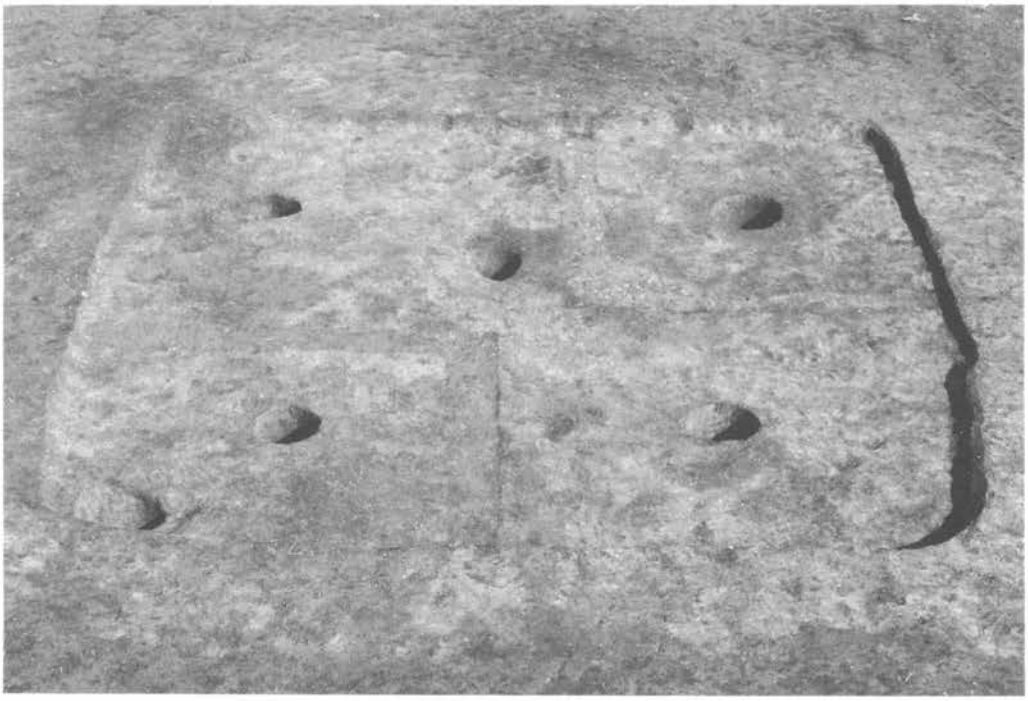
図版30

1. 56号跡全景

2. 57～60号跡全景

1．　58号跡遺物出土状況

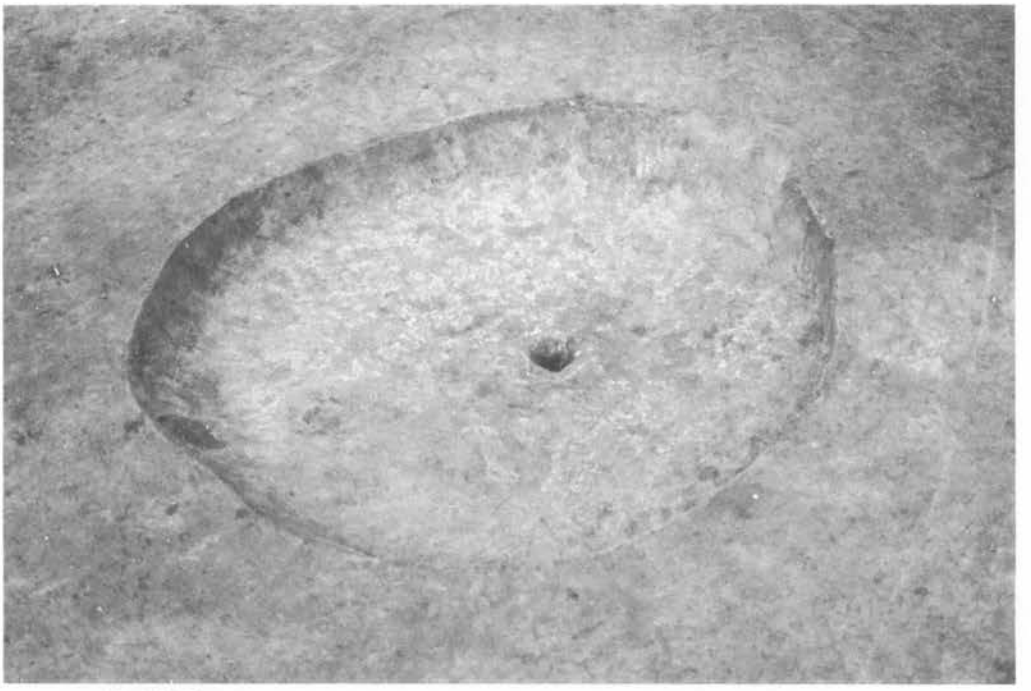
2．　60号跡遺物出土状況



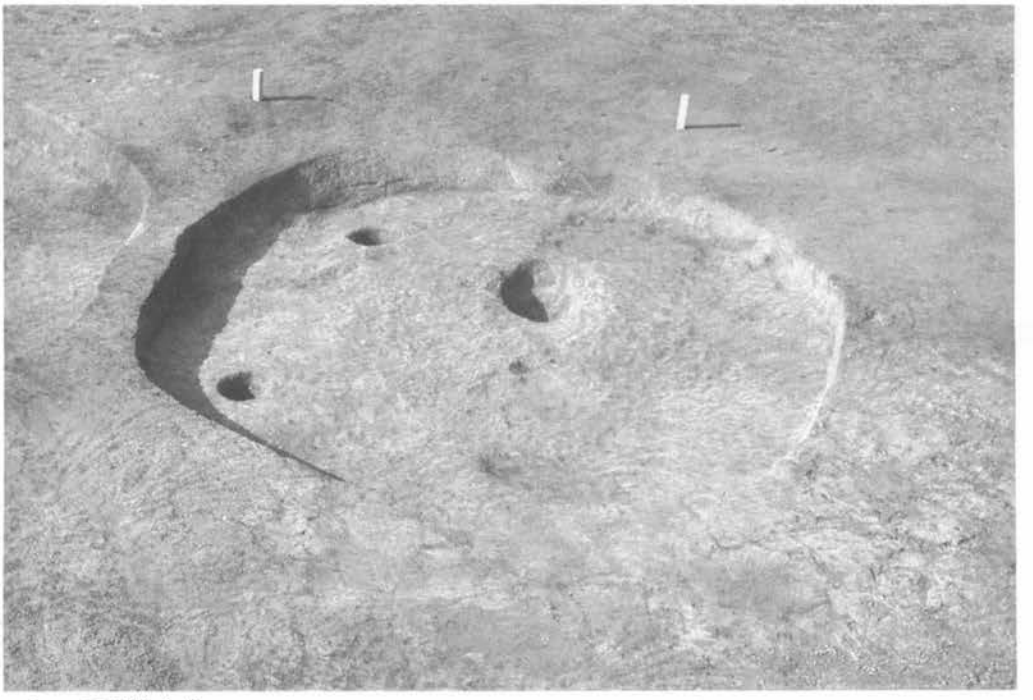
3．　61号跡全景

4．　61号跡遺物出土状況

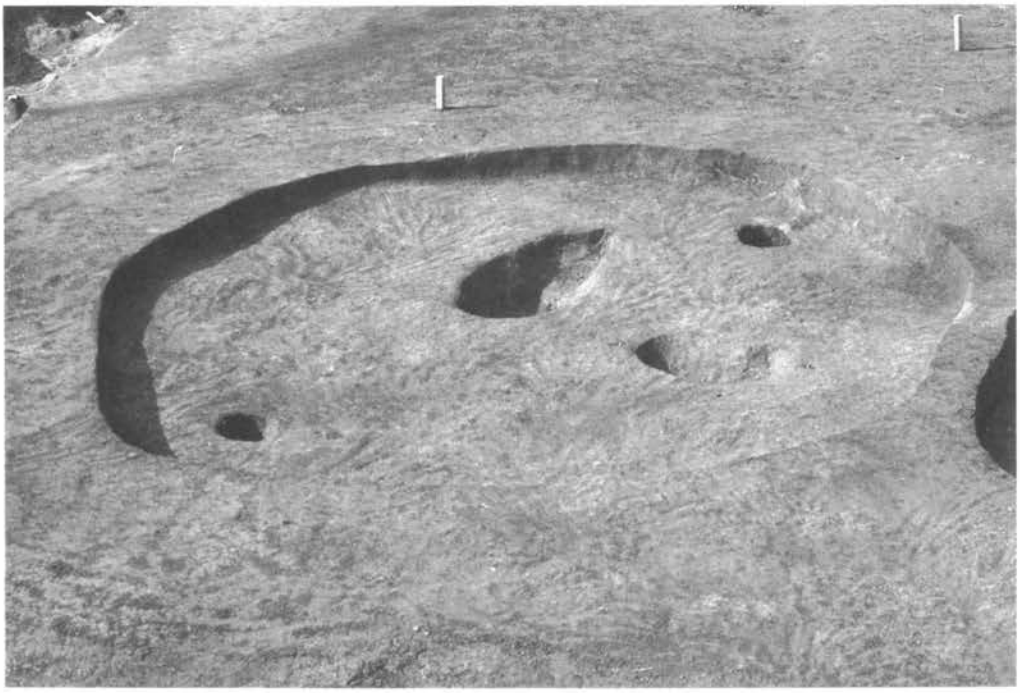
図版32



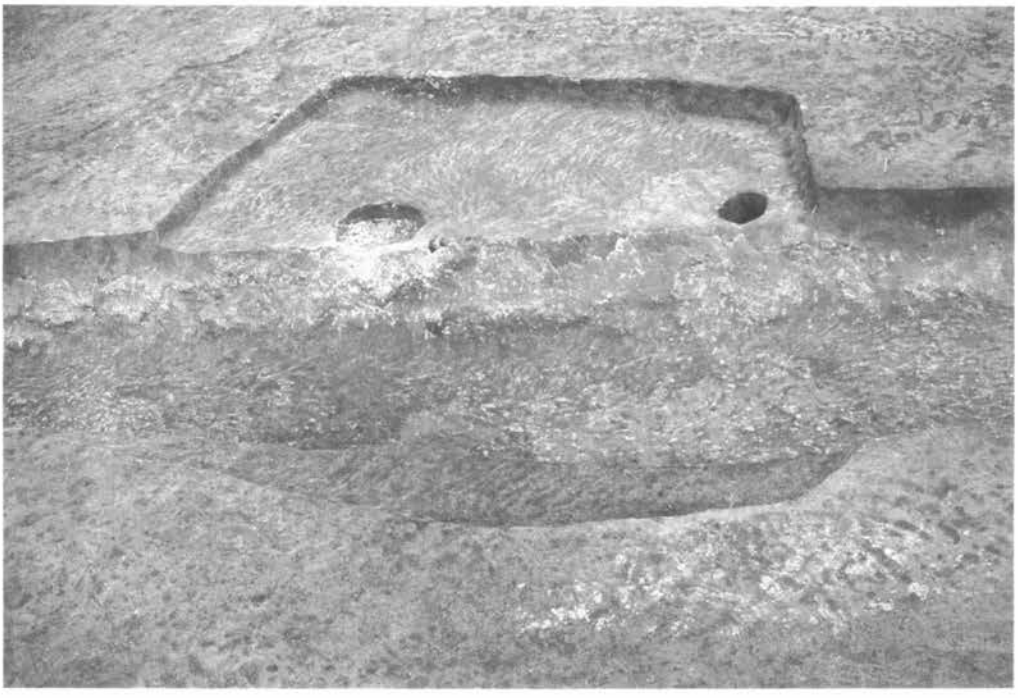
1. 62号跡全景



2. 63号跡全景



1. 64号跡全景



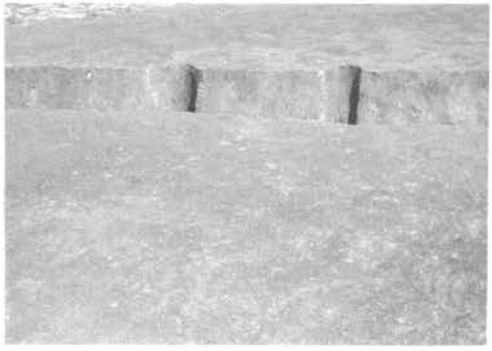
2. 65号跡全景

図版34

1． 66号跡全景

2． 66号跡遺物出土状況

1. 66号跡遺物出土状況



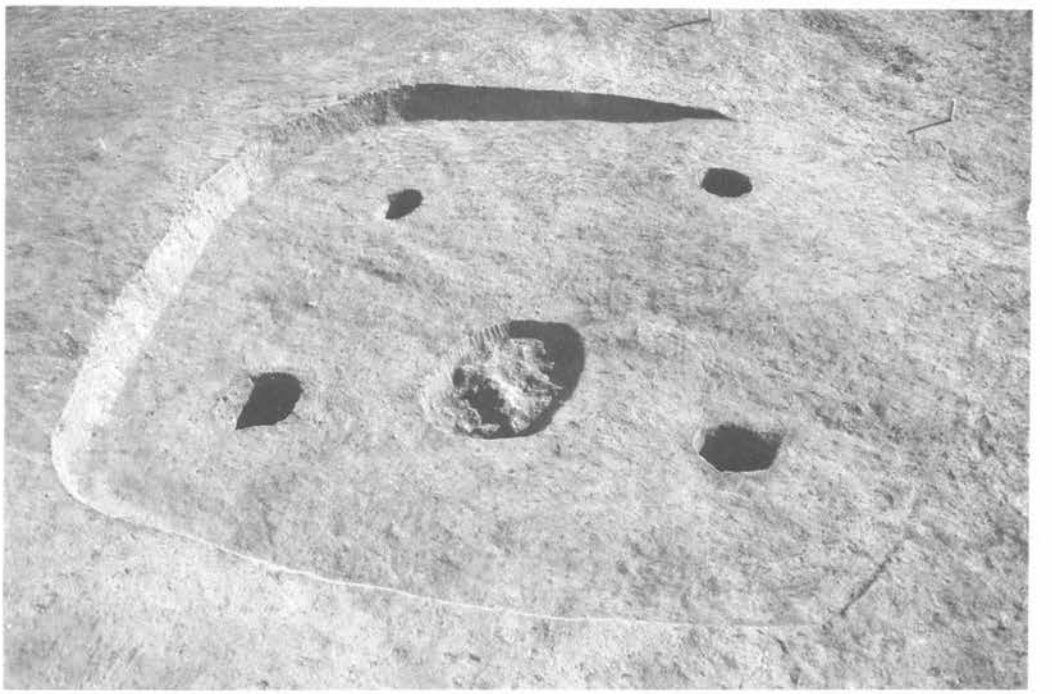
2. 66号跡壁柱穴

3. 67号跡全景

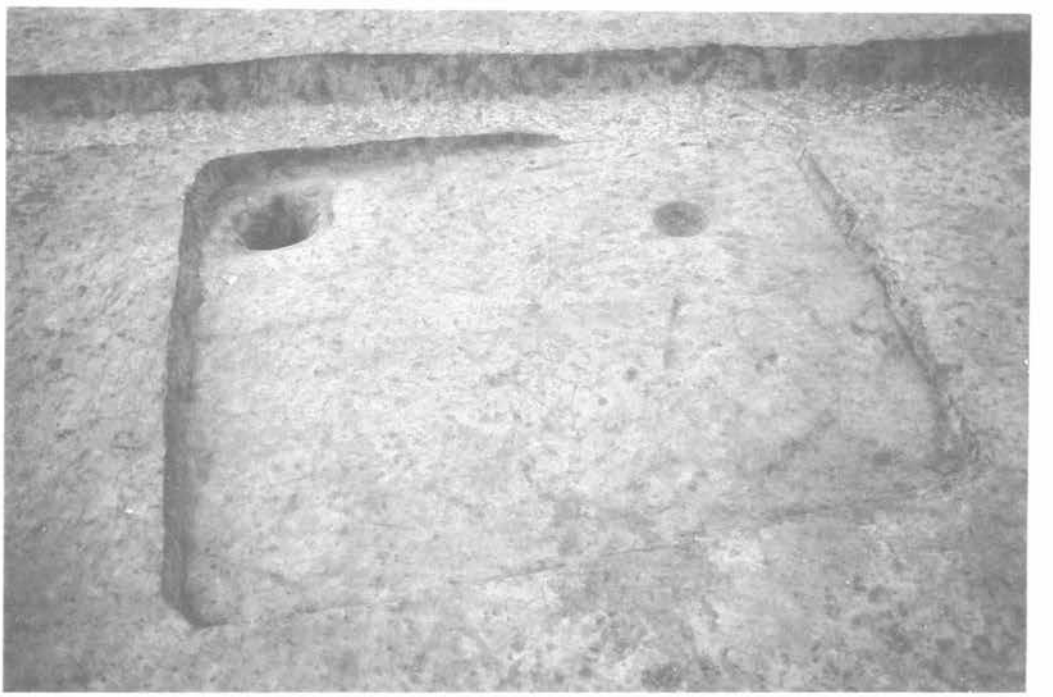
図版36

1. 68号跡全景

2. 68号跡壁柱穴

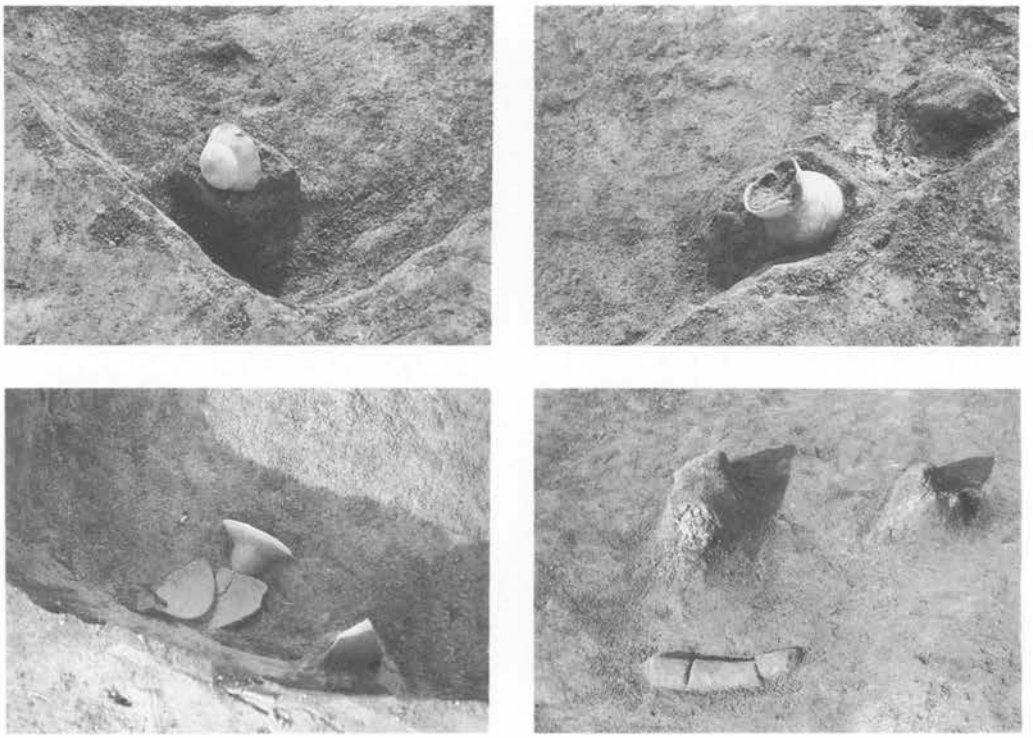


1. 69号跡全景

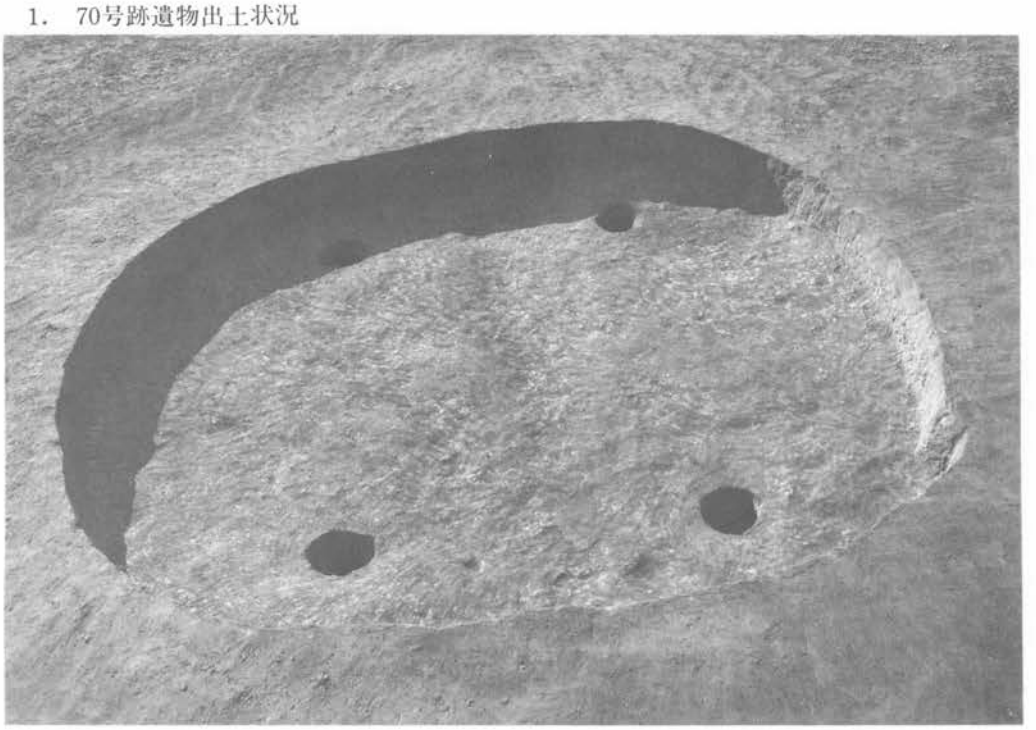


2. 70号跡全景

図版38

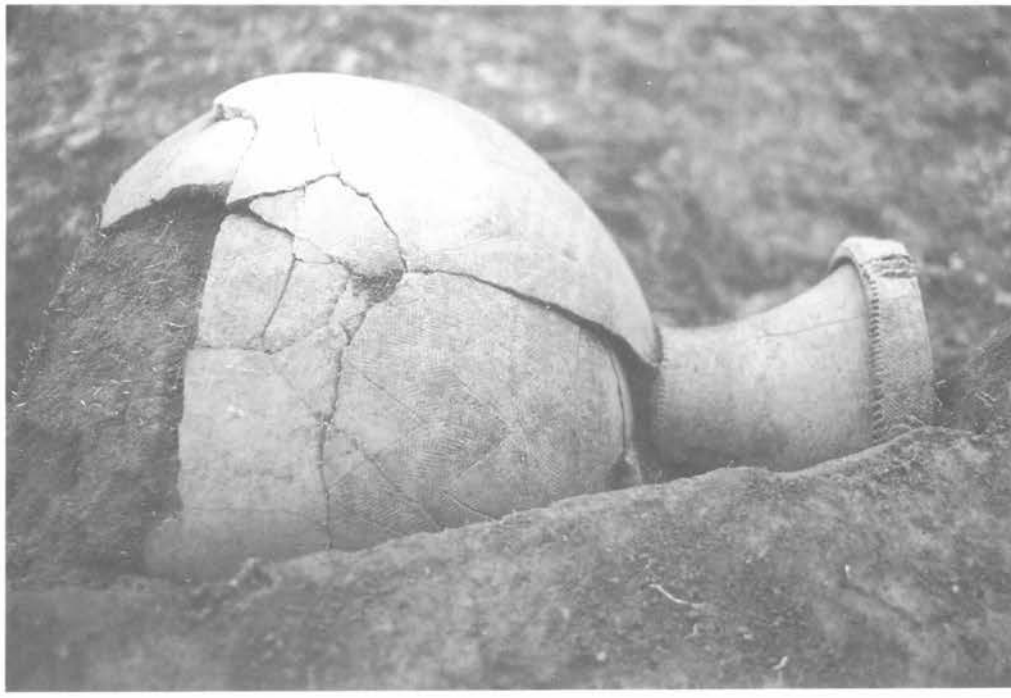


1. 70号跡遺物出土状況



2. 71号跡全景

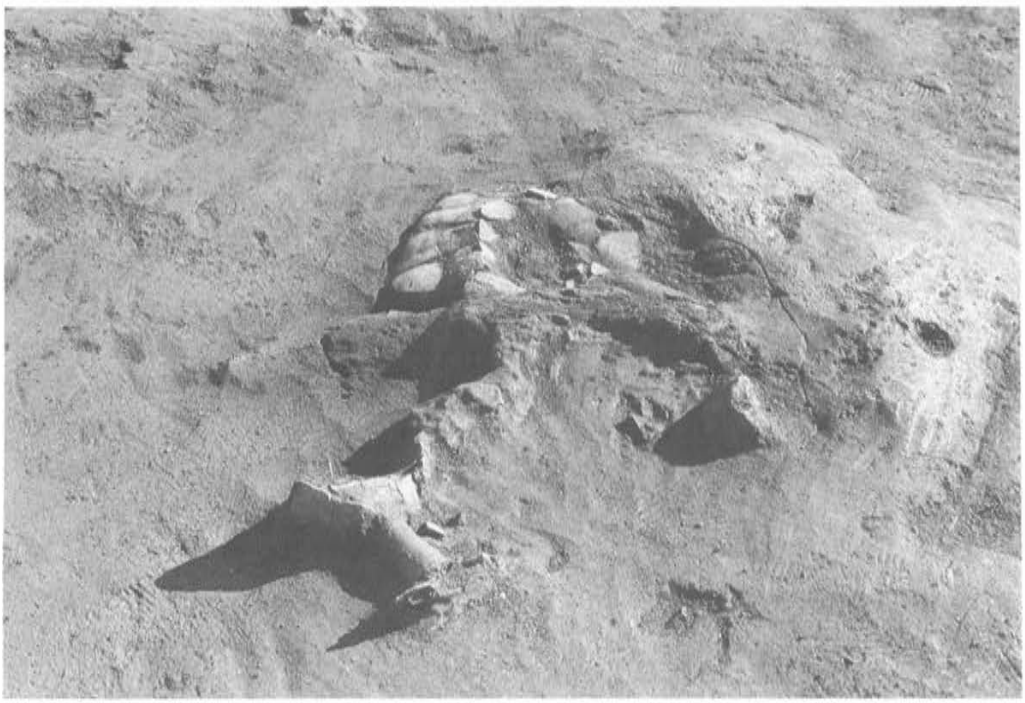
1. 71号跡遺物出土状況



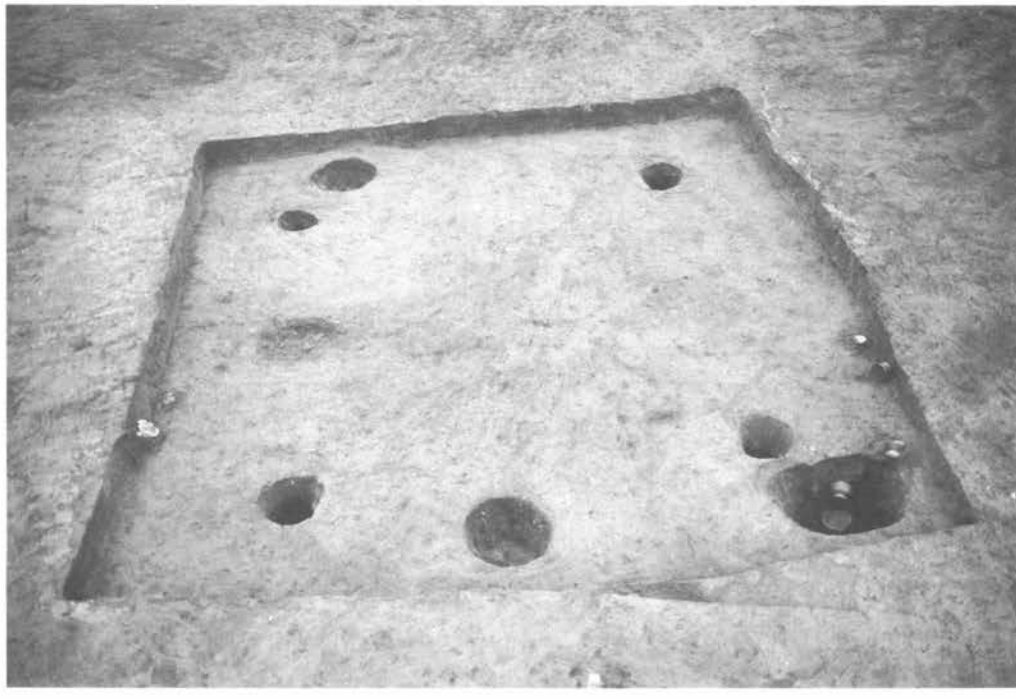
2. 71号跡出土状況

図版40

1．　72号跡全景



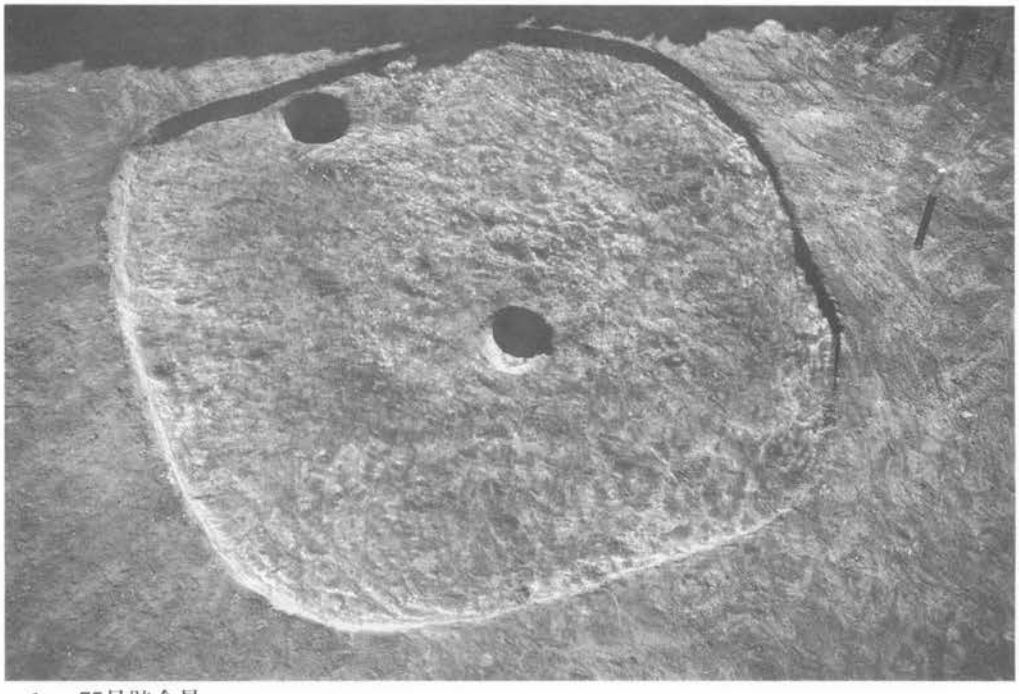
2．　72号跡遺物出土状況



1. 73号跡全景

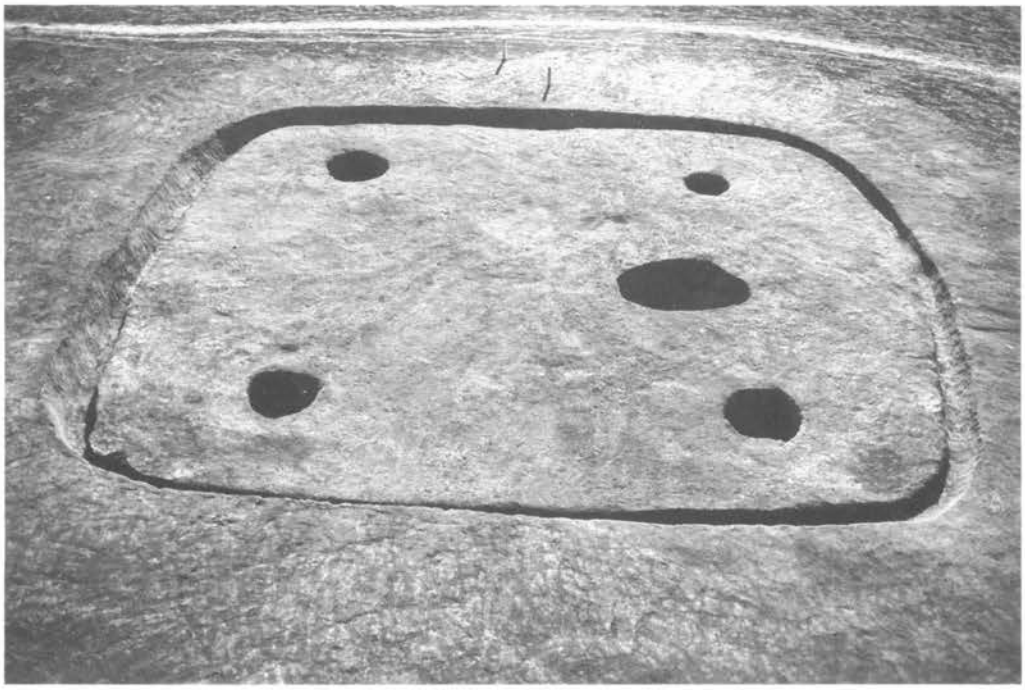
2. 73号跡遺物出土状況

図版42

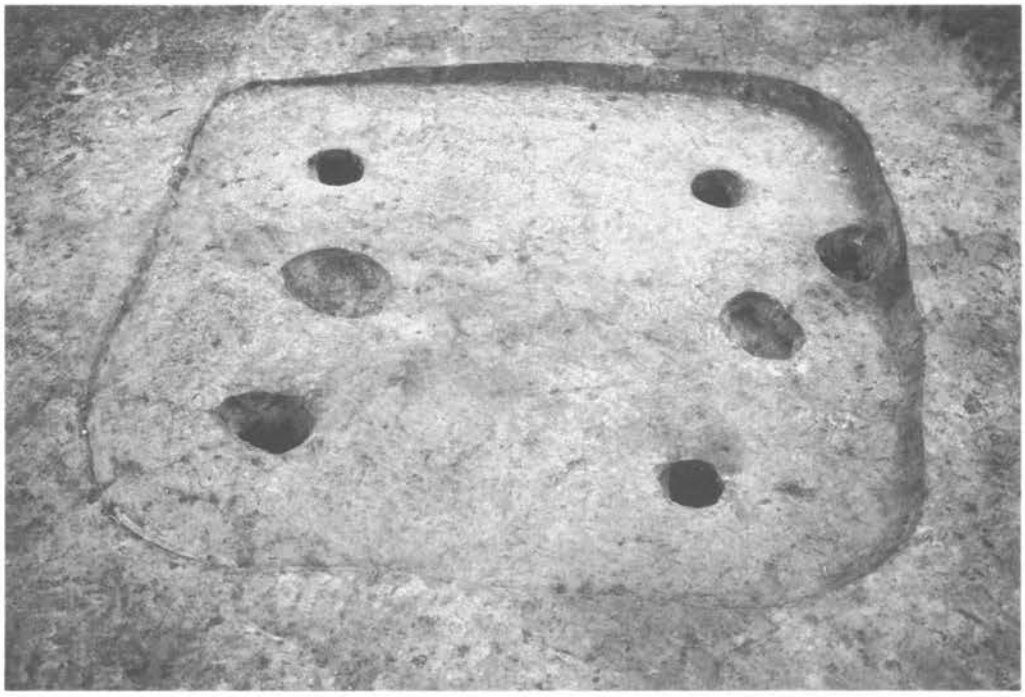


1. 75号跡全景

2. 75号跡遺物出土状況

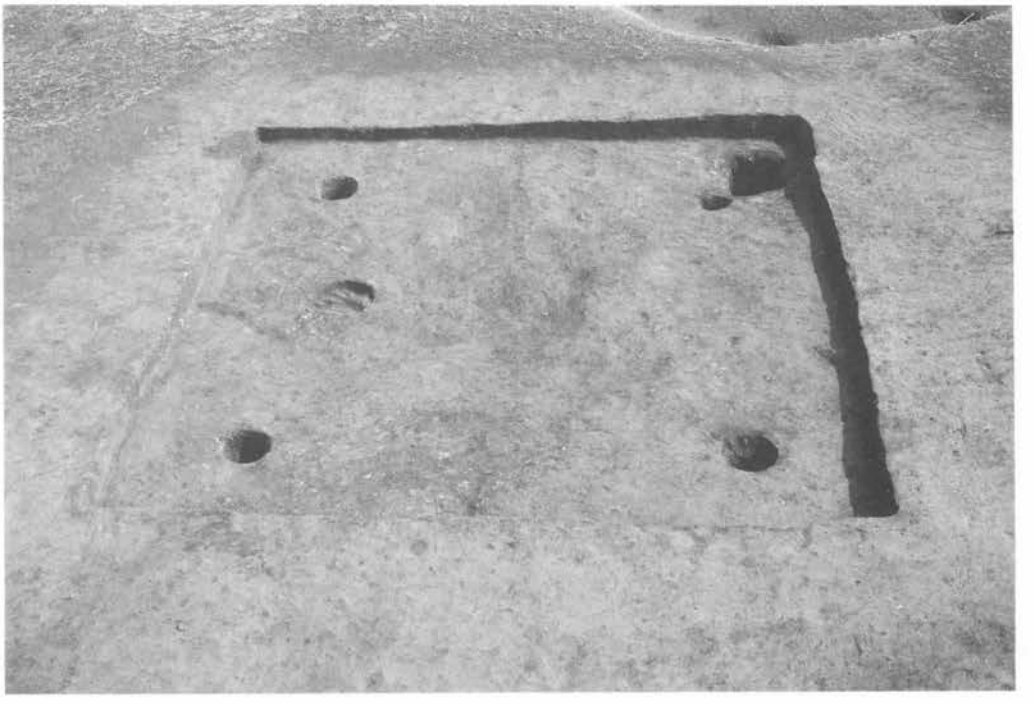


1. 76号跡全景

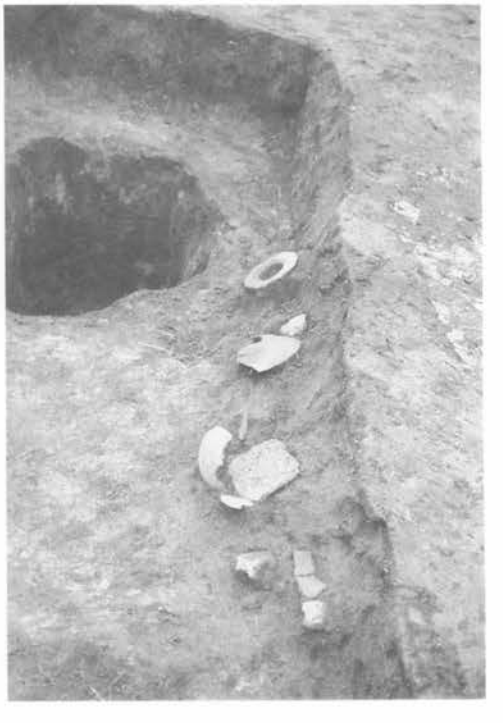


2. 78号跡全景

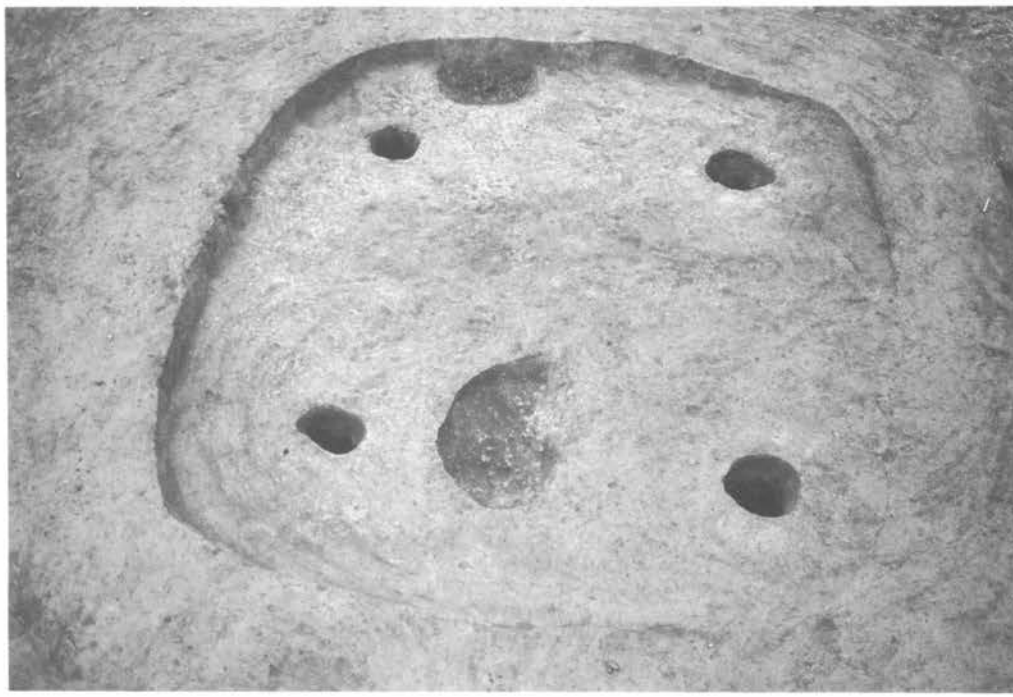
図版44



1. 79号跡全景



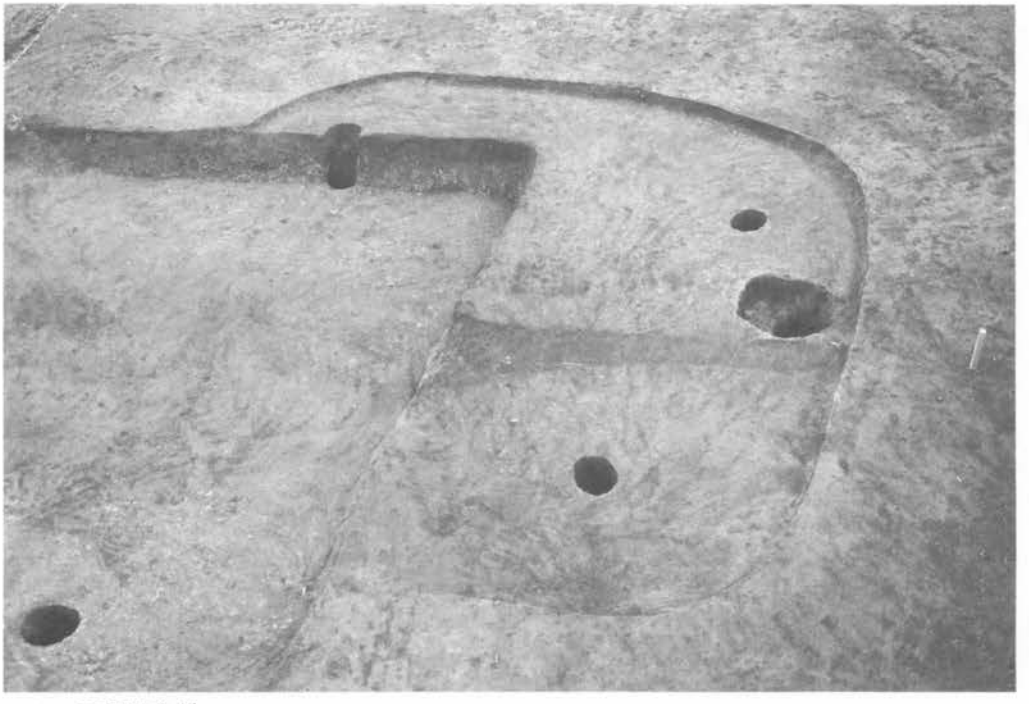
2. 79号跡遺物出土状況



1. 80号跡全景

2. 81号跡全景

図版46



1. 82号跡全景

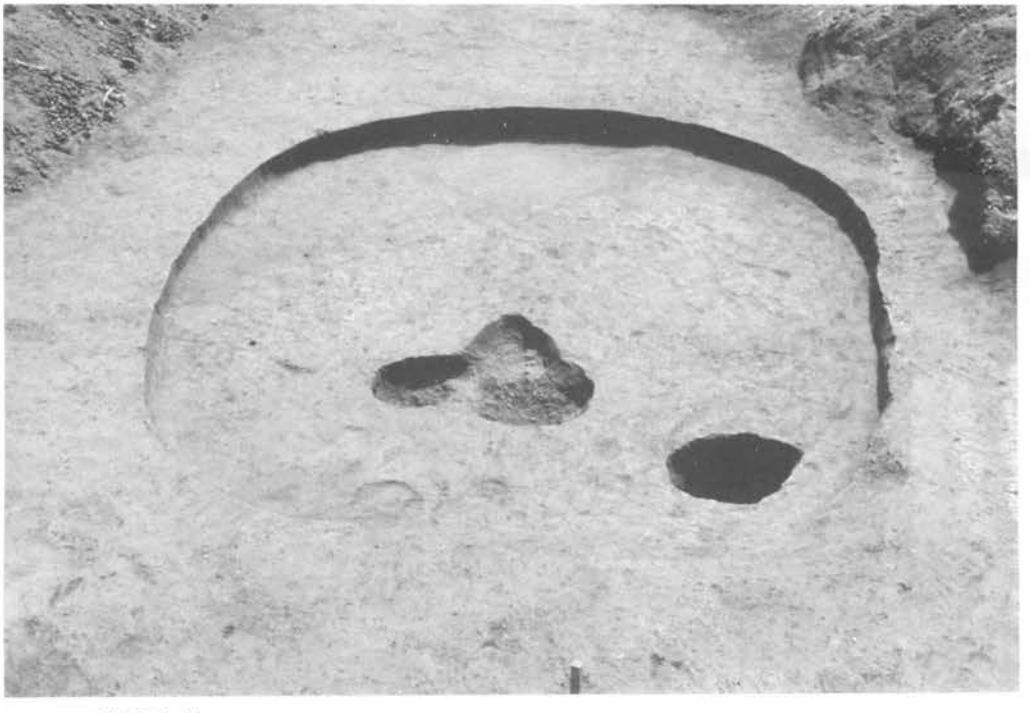
2. 83号跡全景

1. 84号跡全景

2. 84号跡遺物出土状況

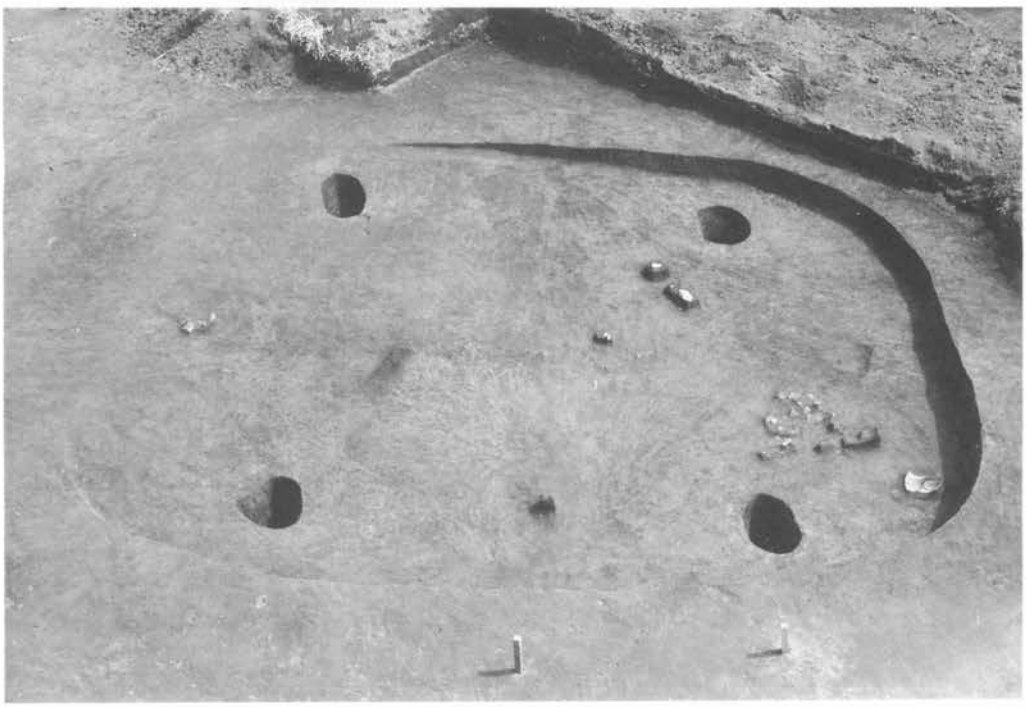
図版48

1. 85号跡全景



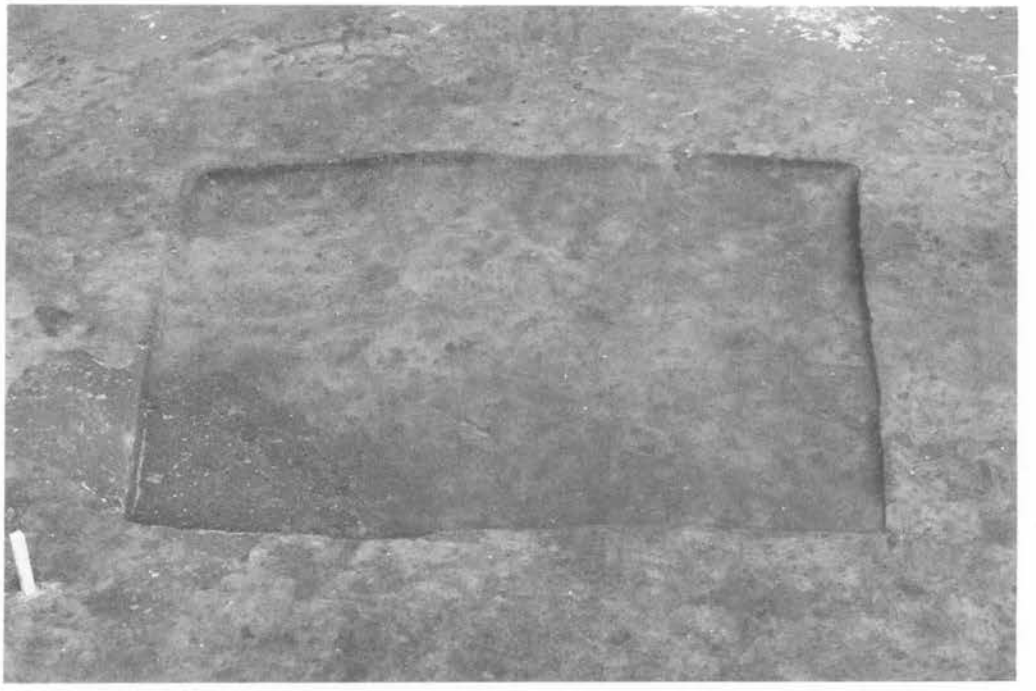
2. 86号跡全景

1. 87号跡全景



2. 88号跡全景

図版50



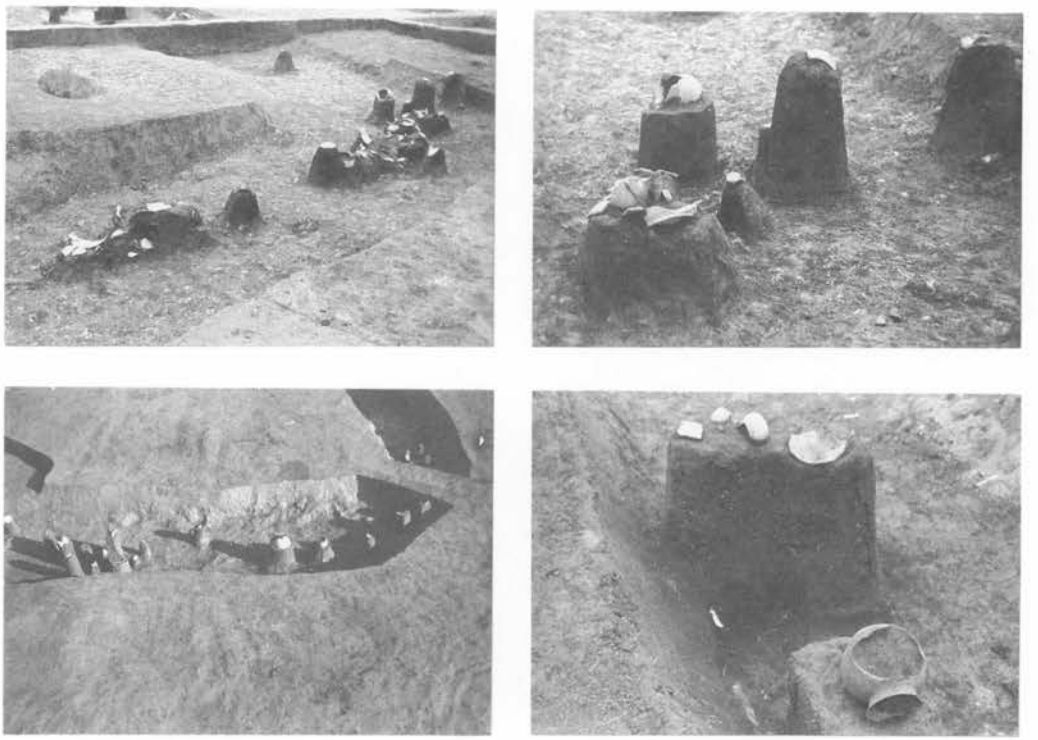
1. 89号跡全景

2. 90・91・92号跡全景

1. 93号跡全景

2. 94号跡全景

図版52

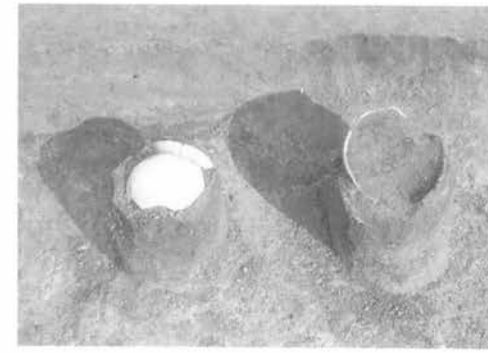


1. 94号跡遺物出土状況

2.95号跡全景

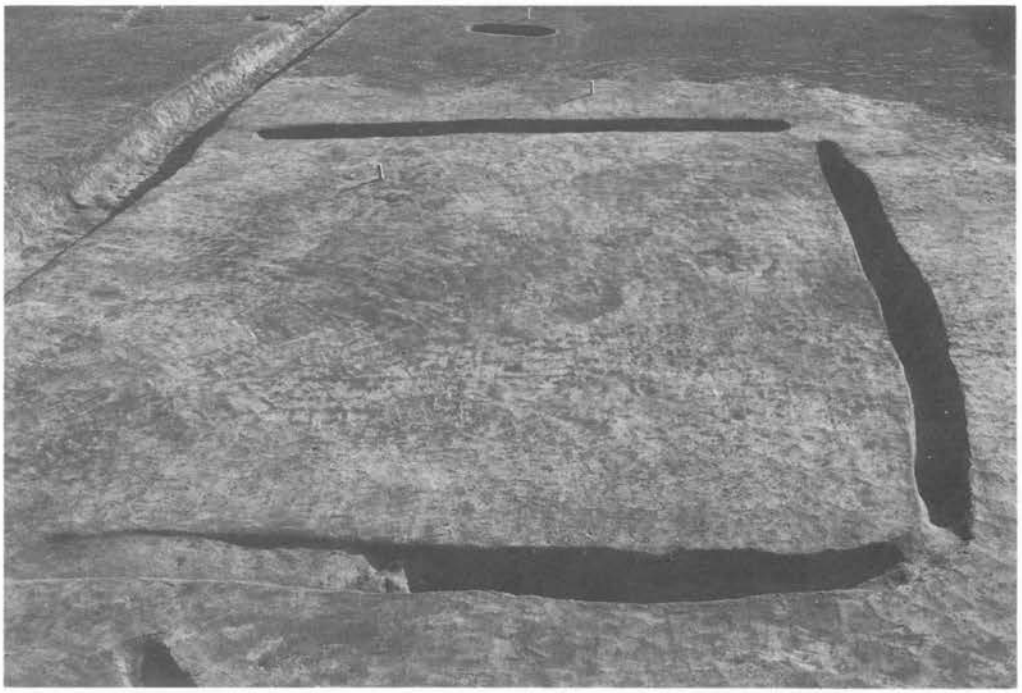
1．　95号跡遺物出土状況

2．　96号跡全景



3．　96号跡遺物出土状況

図版54



1. 97号跡全景

2. 98・77号跡全景

1. 98号跡遺物出土状況

2. 99号跡全景

図版56

1. 99号跡周溝土層断面

2. 99号跡周構内土壙

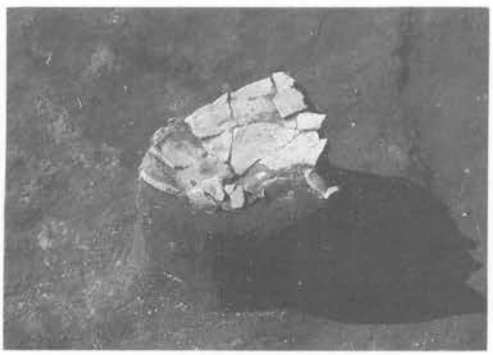
3. 99号跡遺物出土状況

1. 100号跡全景

2. 100号跡遺物出土状況

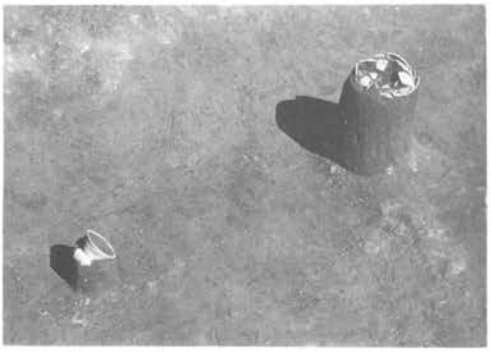
図版58

1. 101号跡全景



2. 101号跡遺物出土状況

1. 102号跡全景

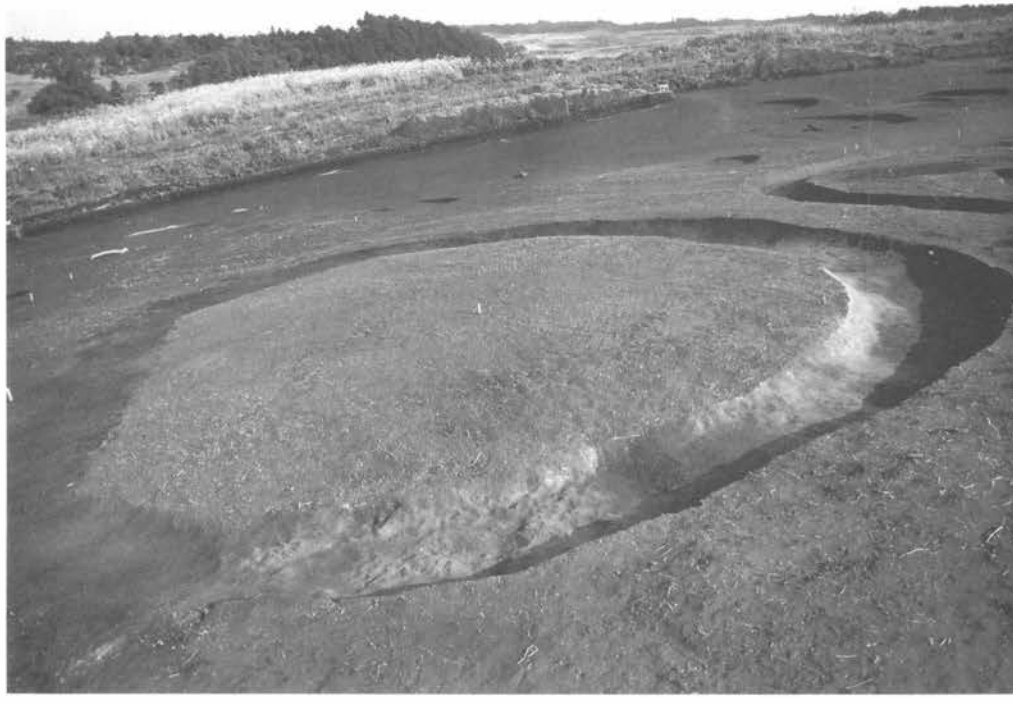


2. 102号跡遺物出土状況

図版60

1. 103号跡全景

2. 103号跡遺物出土状況



1．　104号跡全景

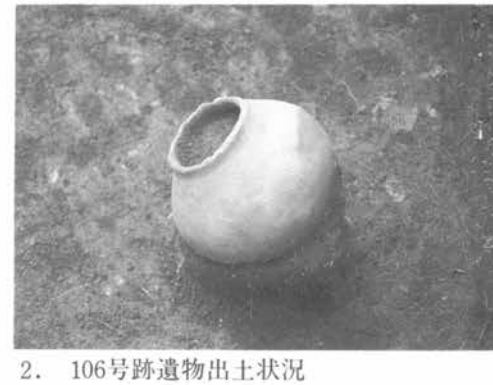
2．　104号跡遺物出土状況

図版62

1. 105号跡全景

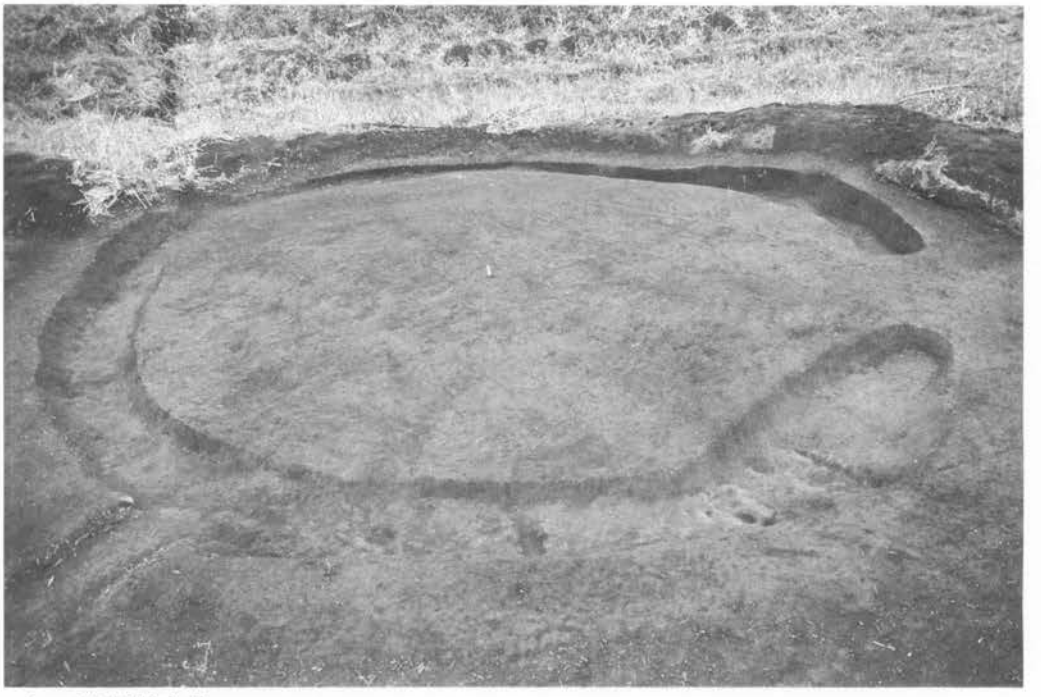
2. 105号跡遺物出物出土状況

1. 106号跡全景



2. 106号跡遺物出土状況

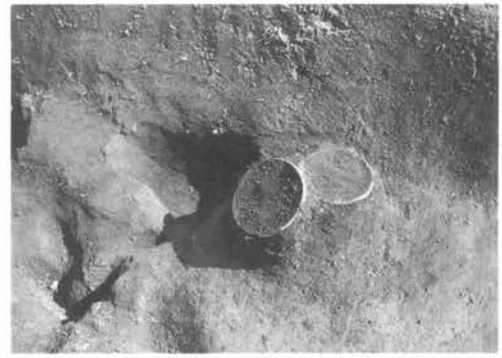
図版64



1．　107号跡全景

2．　107号跡遺物出土状況

1．　108号跡全景

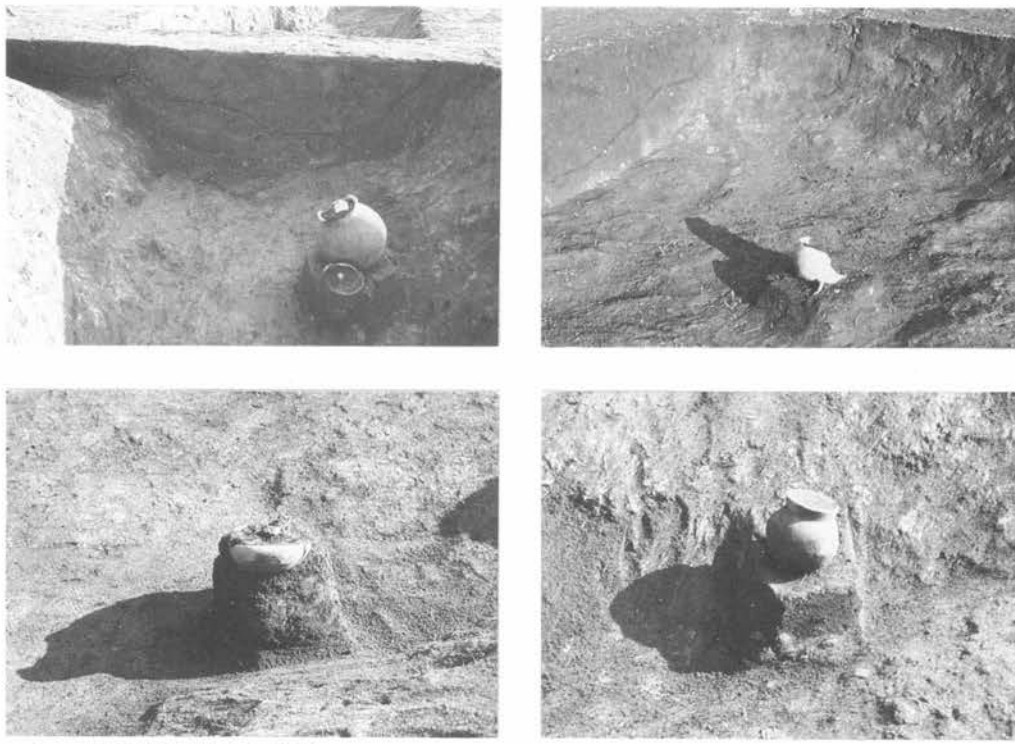


2．　108号跡遺物出土状況

図版66

1. 109号跡全景

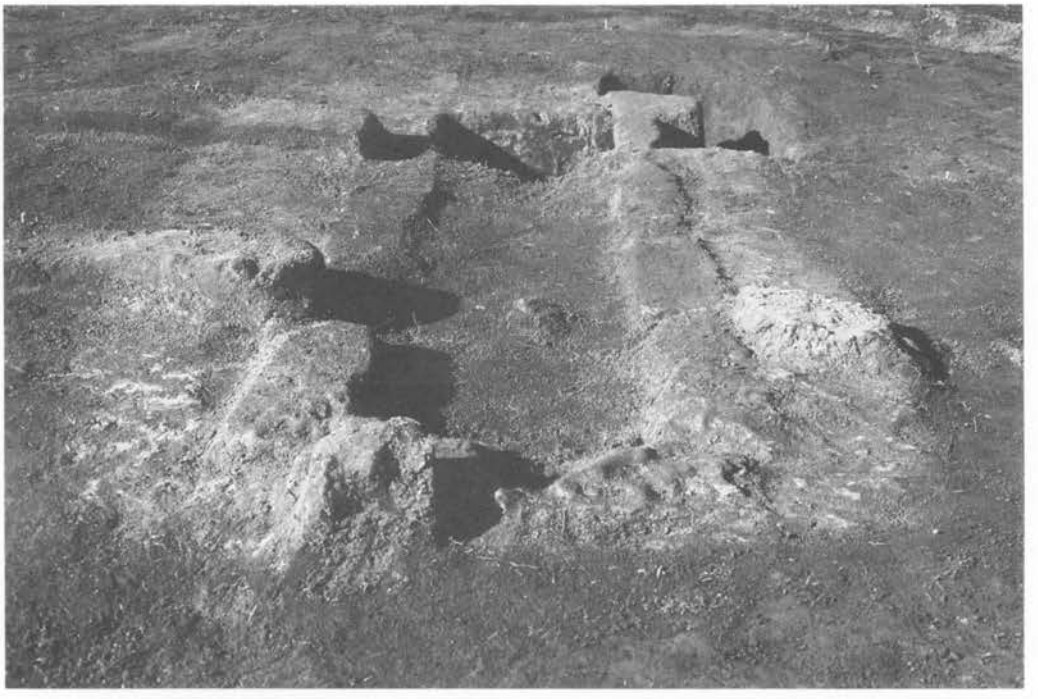
2. 110号跡全景



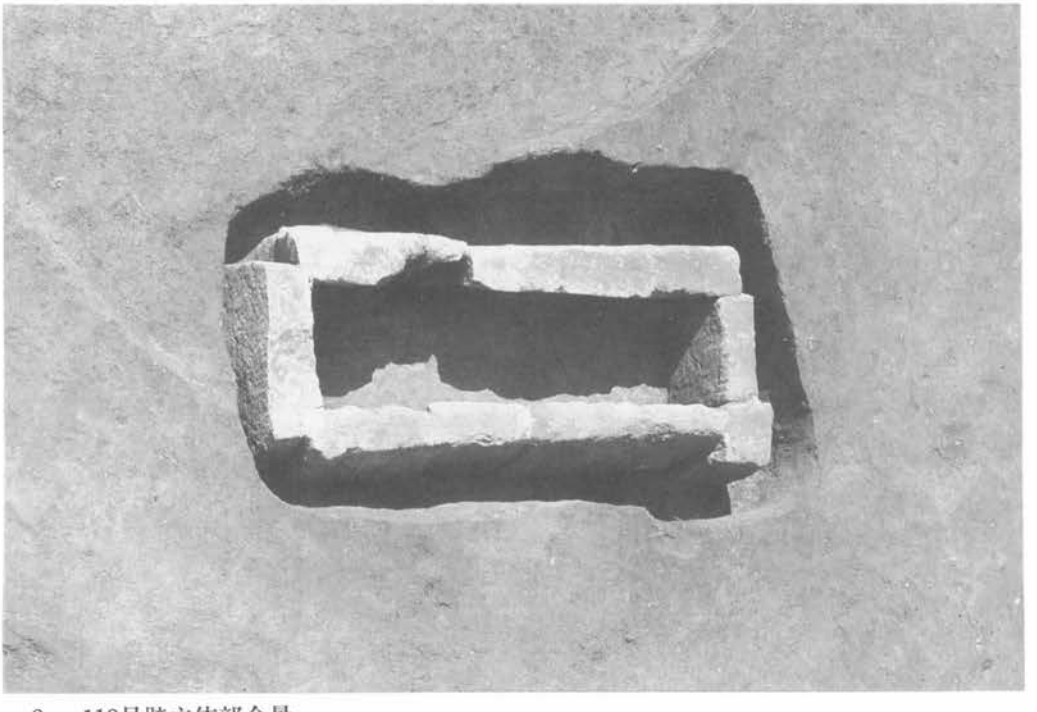
1. 110号跡遺物出土状況

2. 112号跡全景

図版68



1. 112号跡主体部検出状況

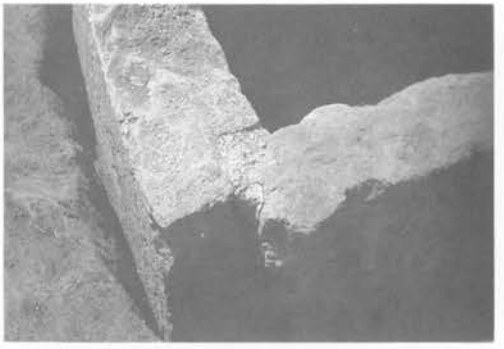


2. 112号跡主体部全景

1．　112号跡主体部裏込め

2．　112号跡主体部掘り方

図版70



1. 112号跡主体部石組

2. 112号跡主体部東側小口石

3. 112号跡主体部遺物出土状況

4. 111・74号跡全景

1. 131号跡全景

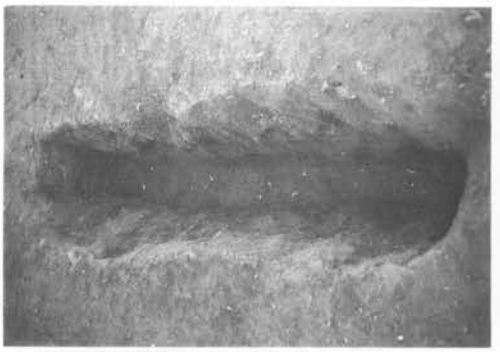
2. 113号跡全景

3. 114号跡全景

4. 115号跡全景

5. 116号跡全景

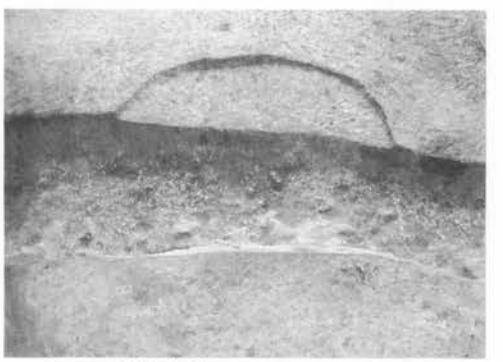
図版72



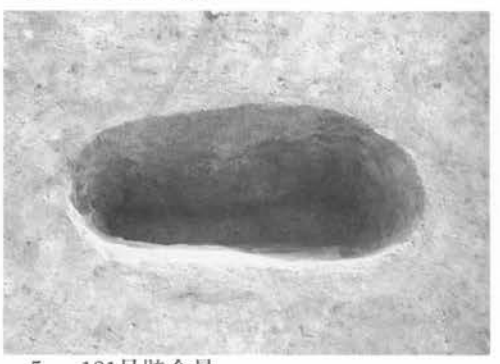
1. 117号跡全景

2. 118号跡全景

3. 119号跡全景

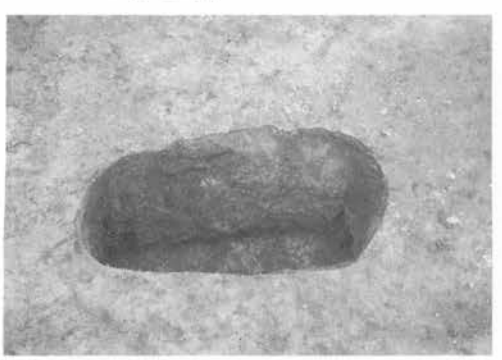


4. 120号跡全景

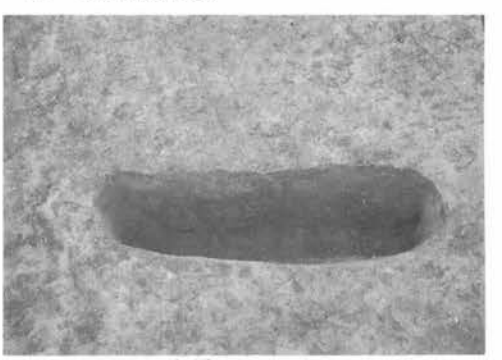


5. 121号跡全景

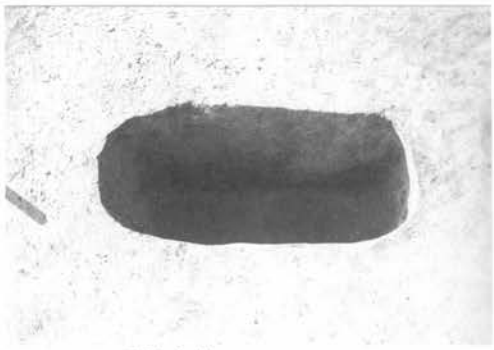
6. 122号跡全景



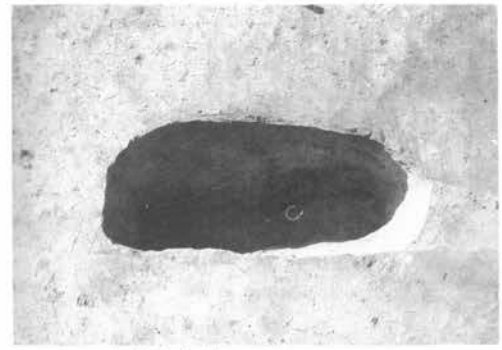
7. 123号跡全景



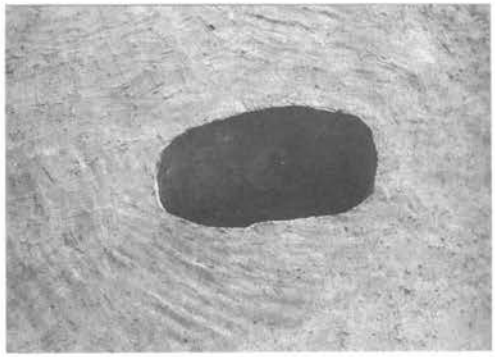
8. 124号跡全景



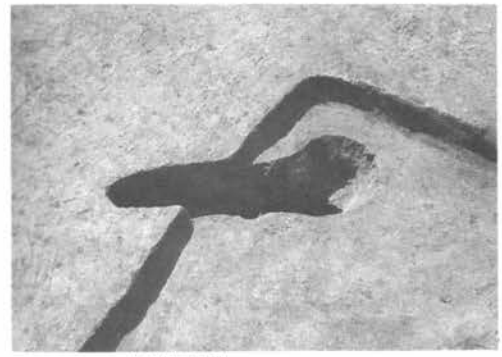
1. 125号跡全景



2. 126号跡全景

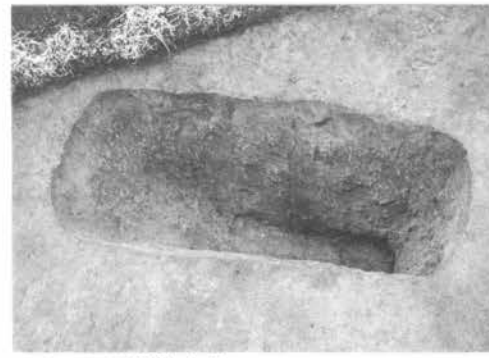


3. 127号跡全景



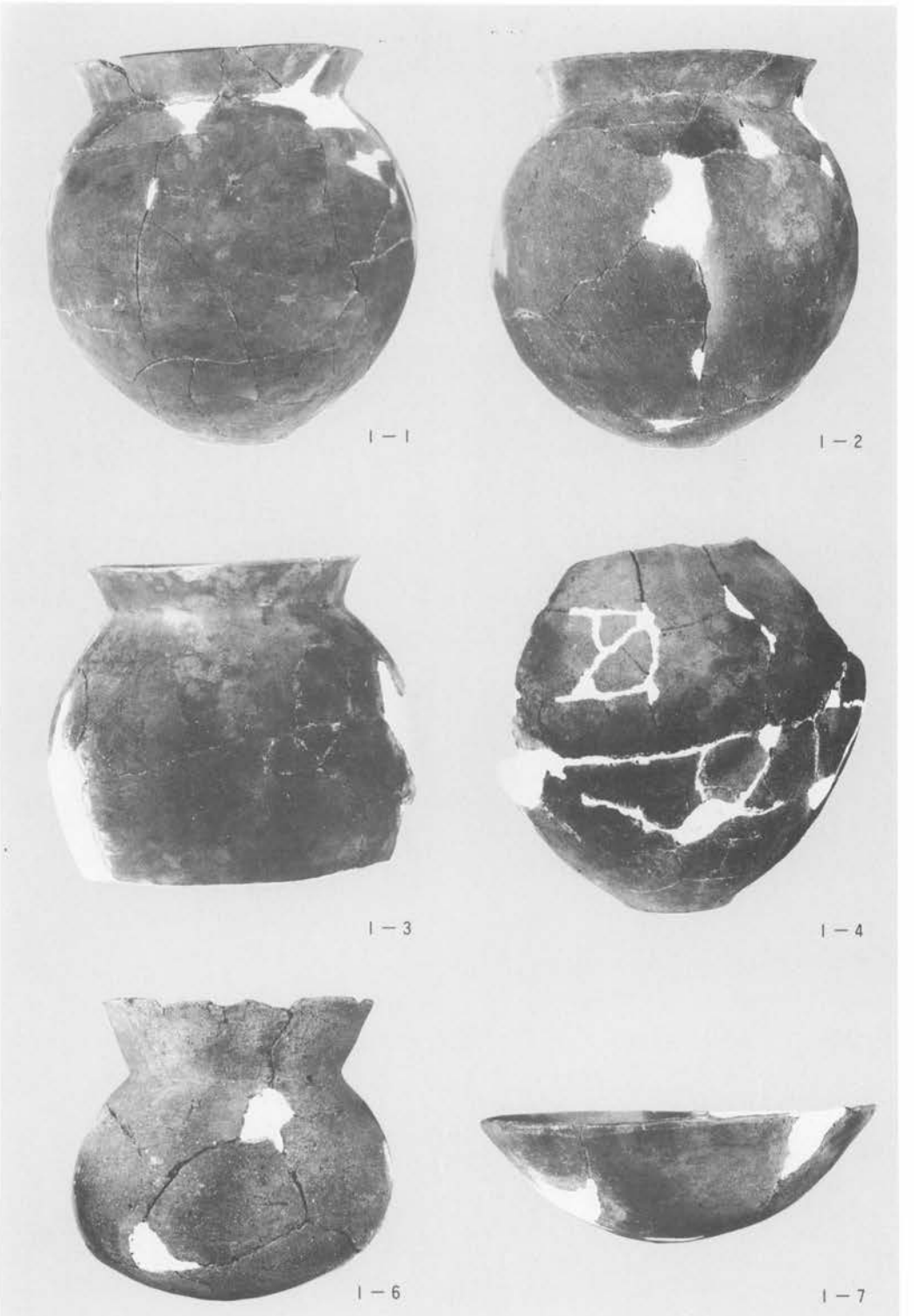
4. 128号跡全景

5. 129号跡全景

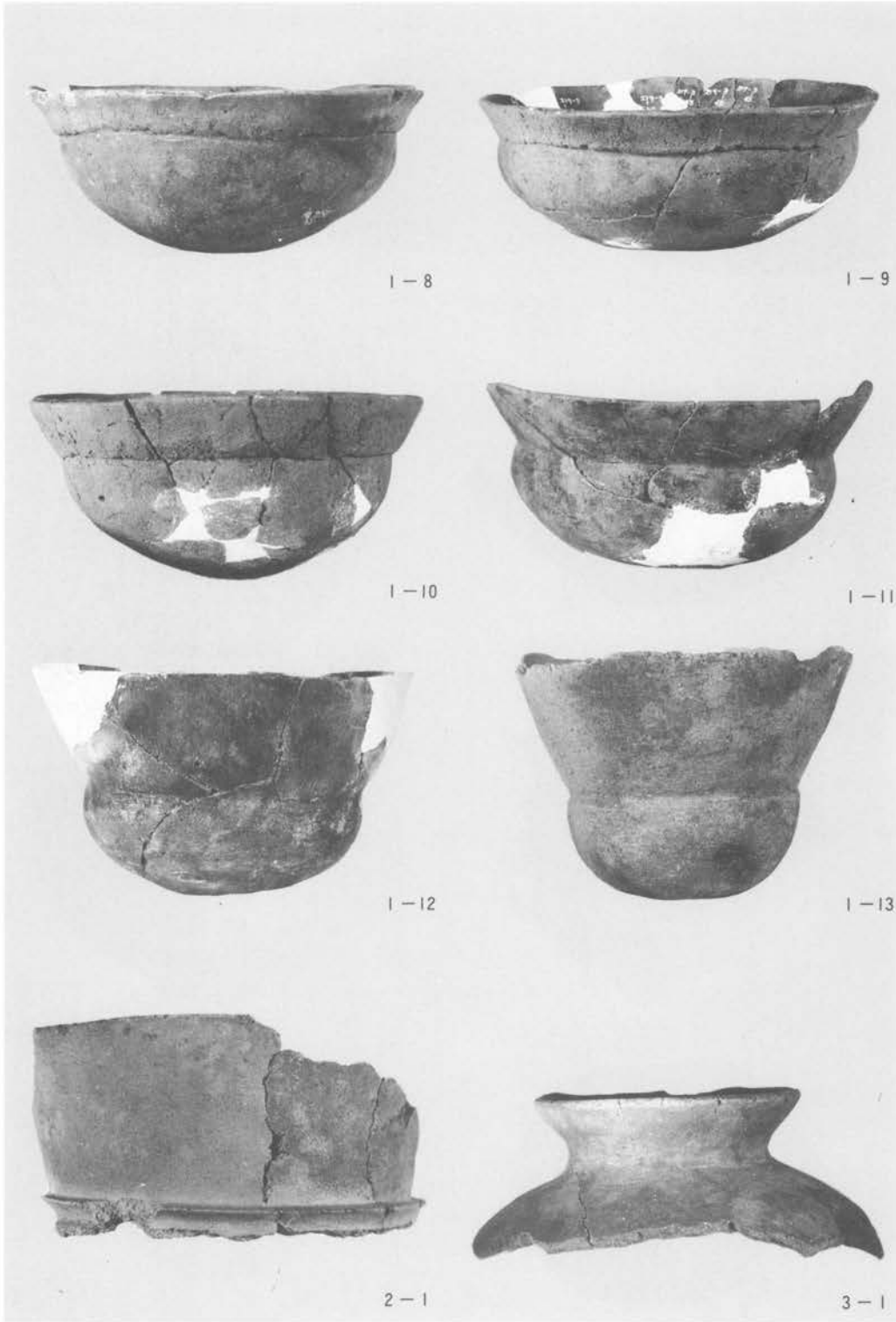


6. 130号跡全景

図版74

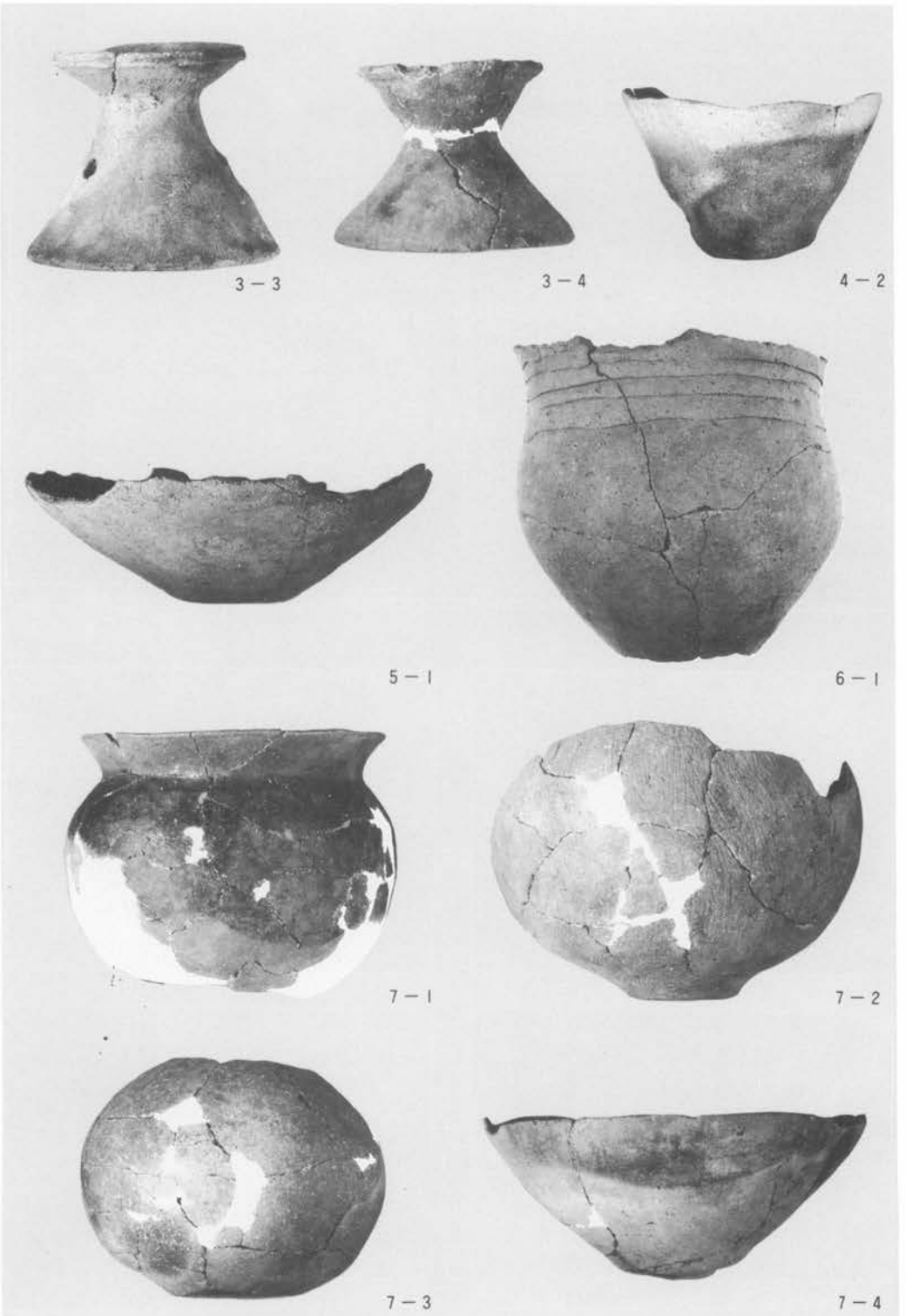


1号跡出土の土器



1・2・3号跡出土の土器

図版76



3・4・5・6・7号跡出土の土器

7－5

7－6

9－1

9－2

9－3

9－4

7・9号跡出土の土器

図版78

9－5

9－6

10－1

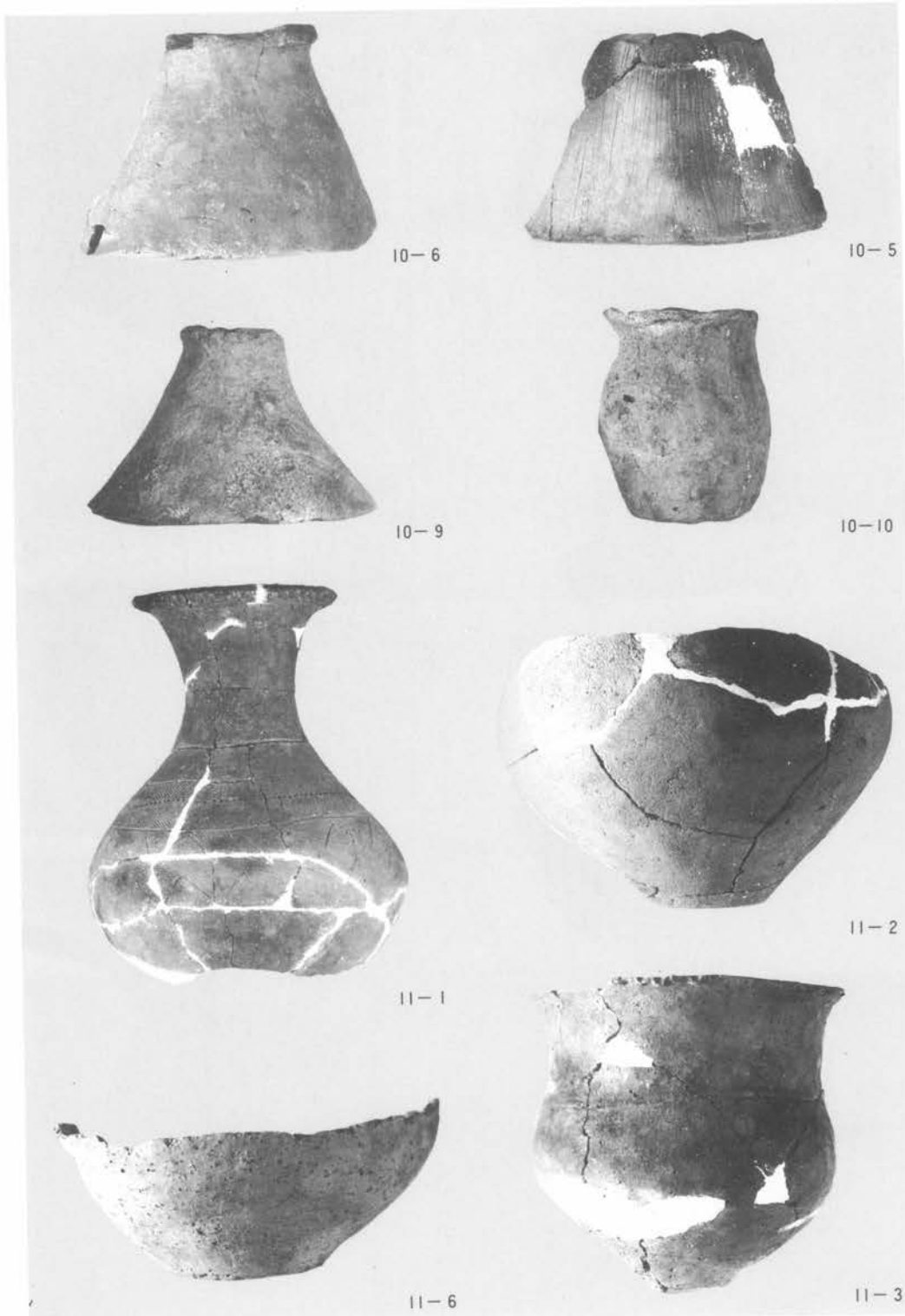
10－2

10－3

10－7

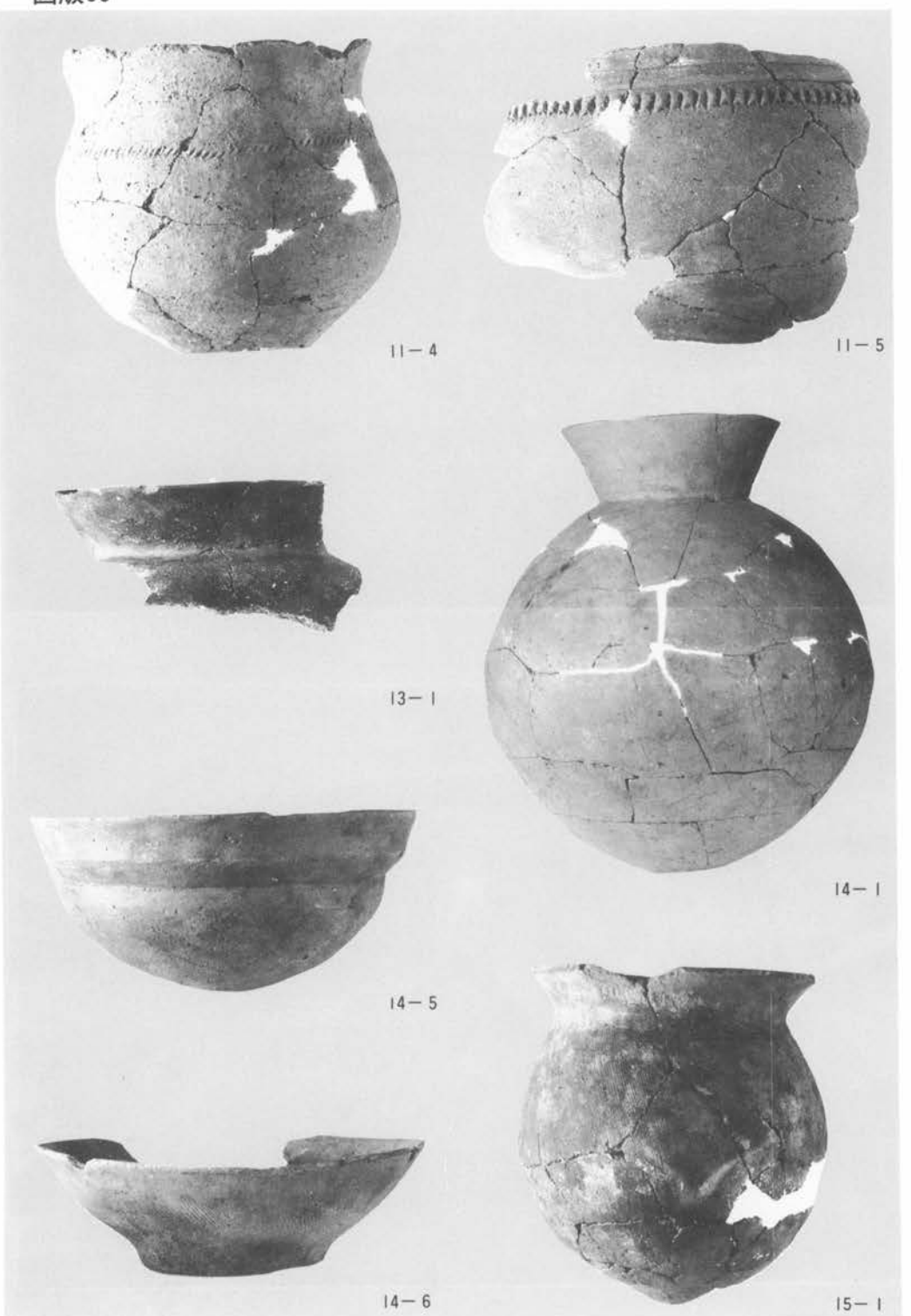
10－8

9・10号跡出土の土器

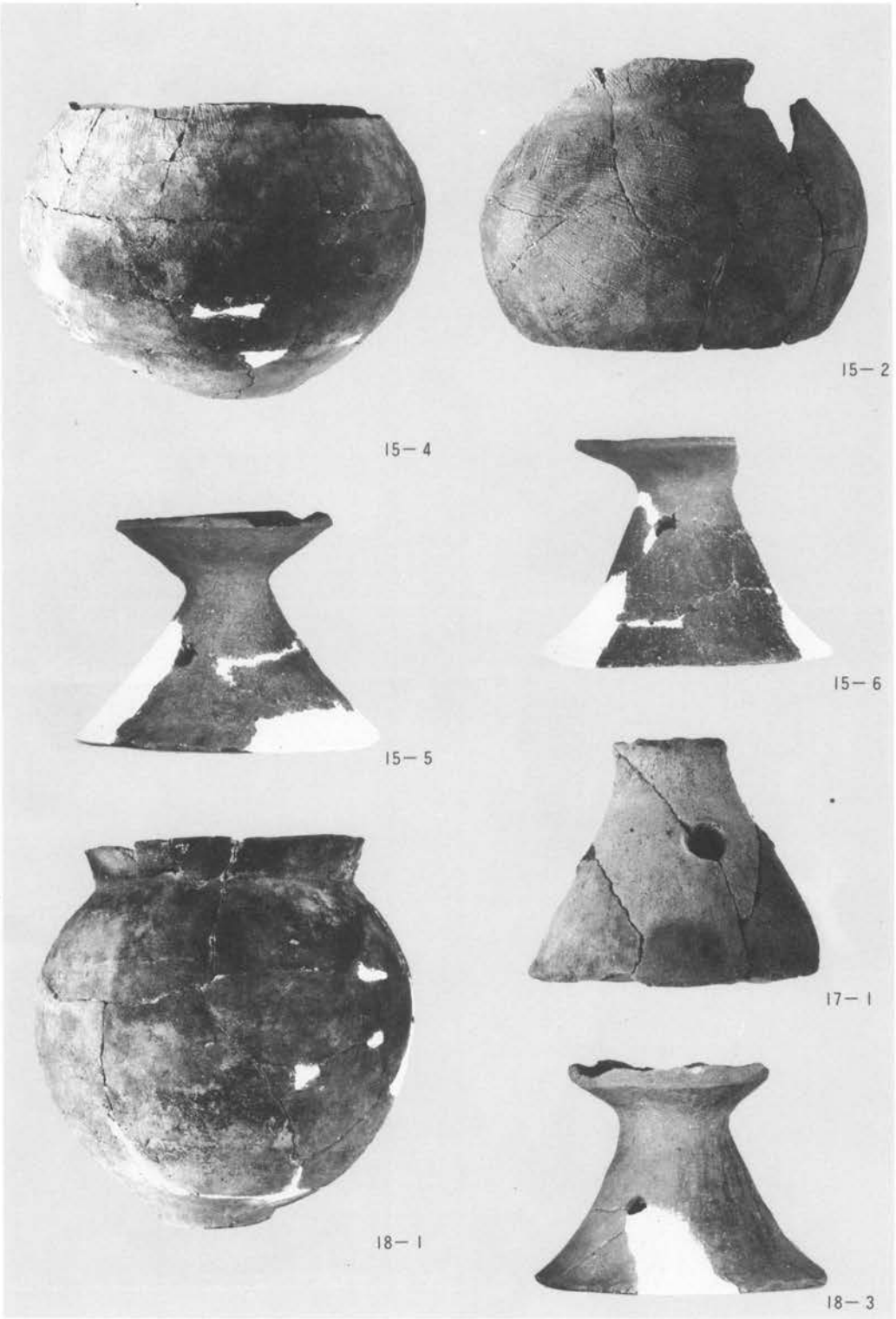


10・11号跡出土の土器

図版80

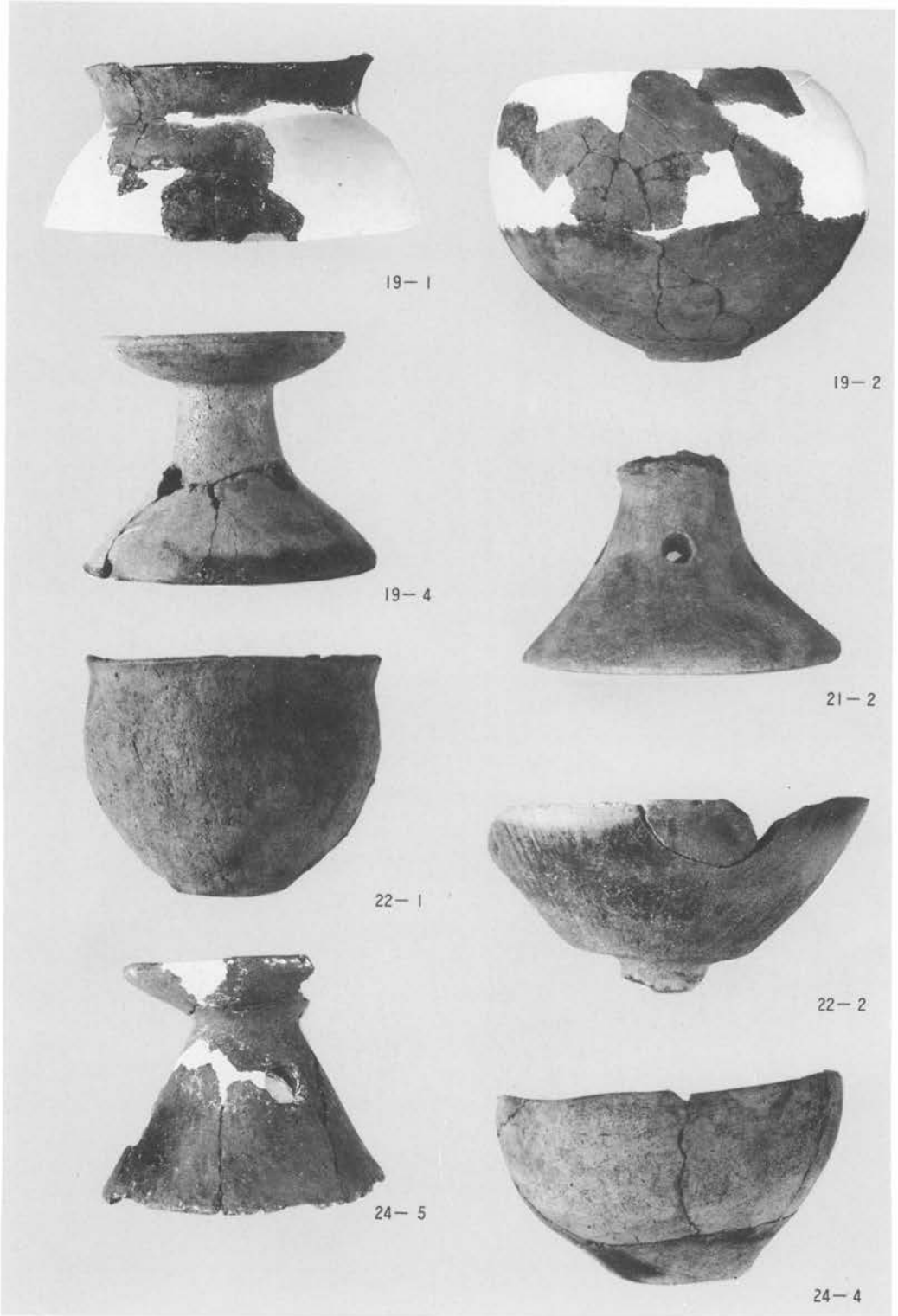


11・13・14・15号跡出土の土器



15・17・18号跡出土の土器

図版82



19・21・22・24号跡出土の土器

28－1

28－2

28－3

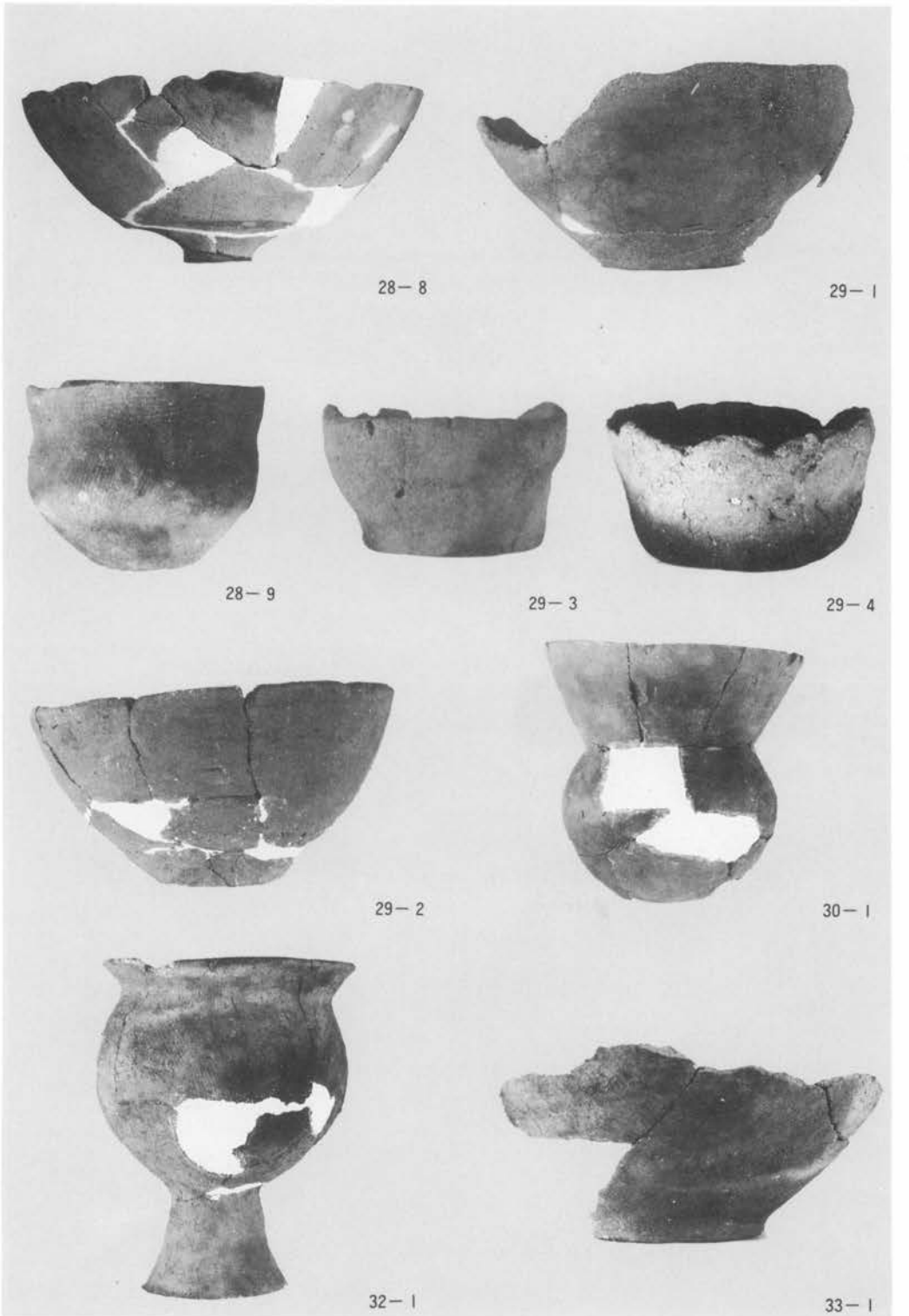
28－6

28－4

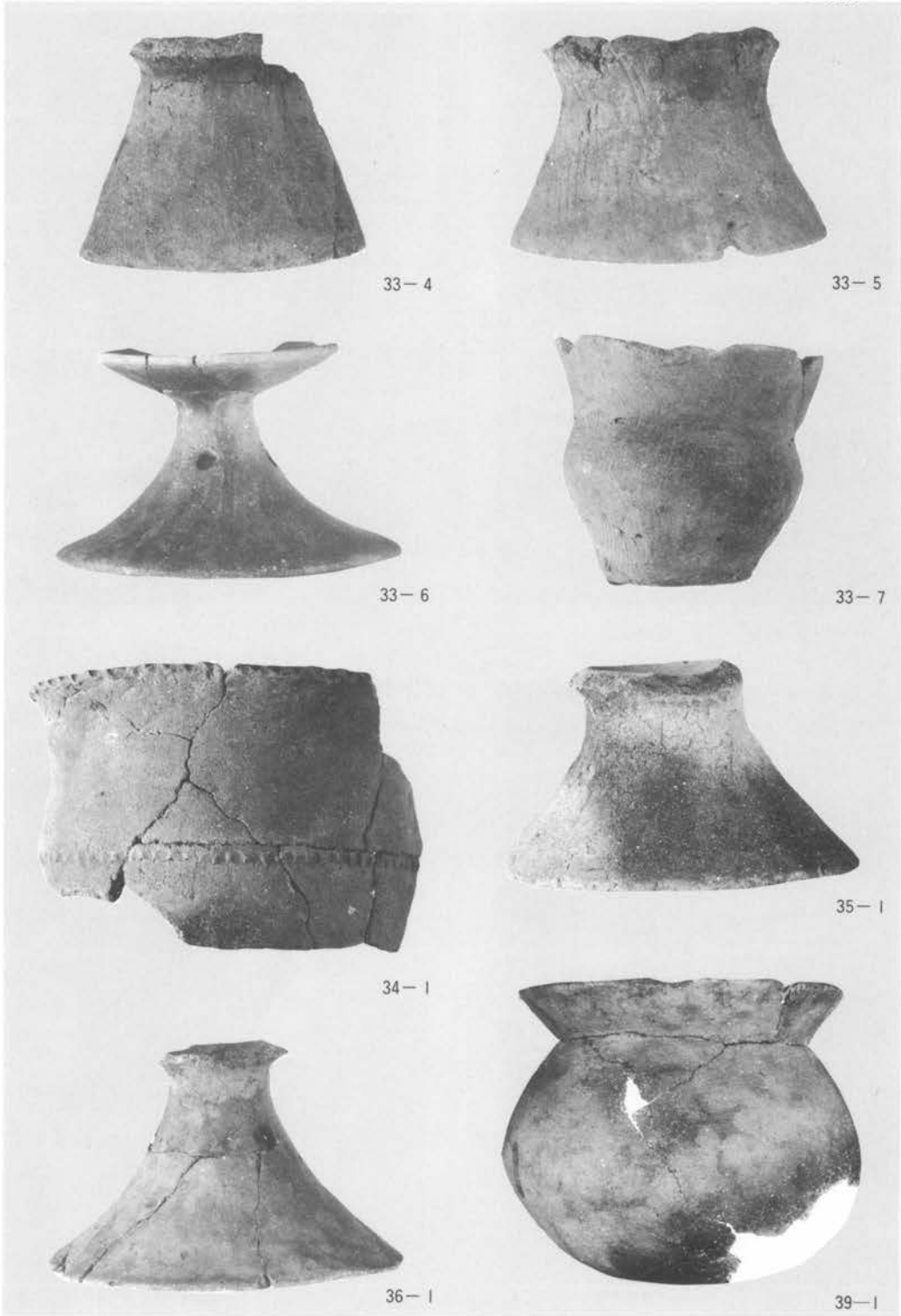
28－5

28号跡出土の土器

図版84

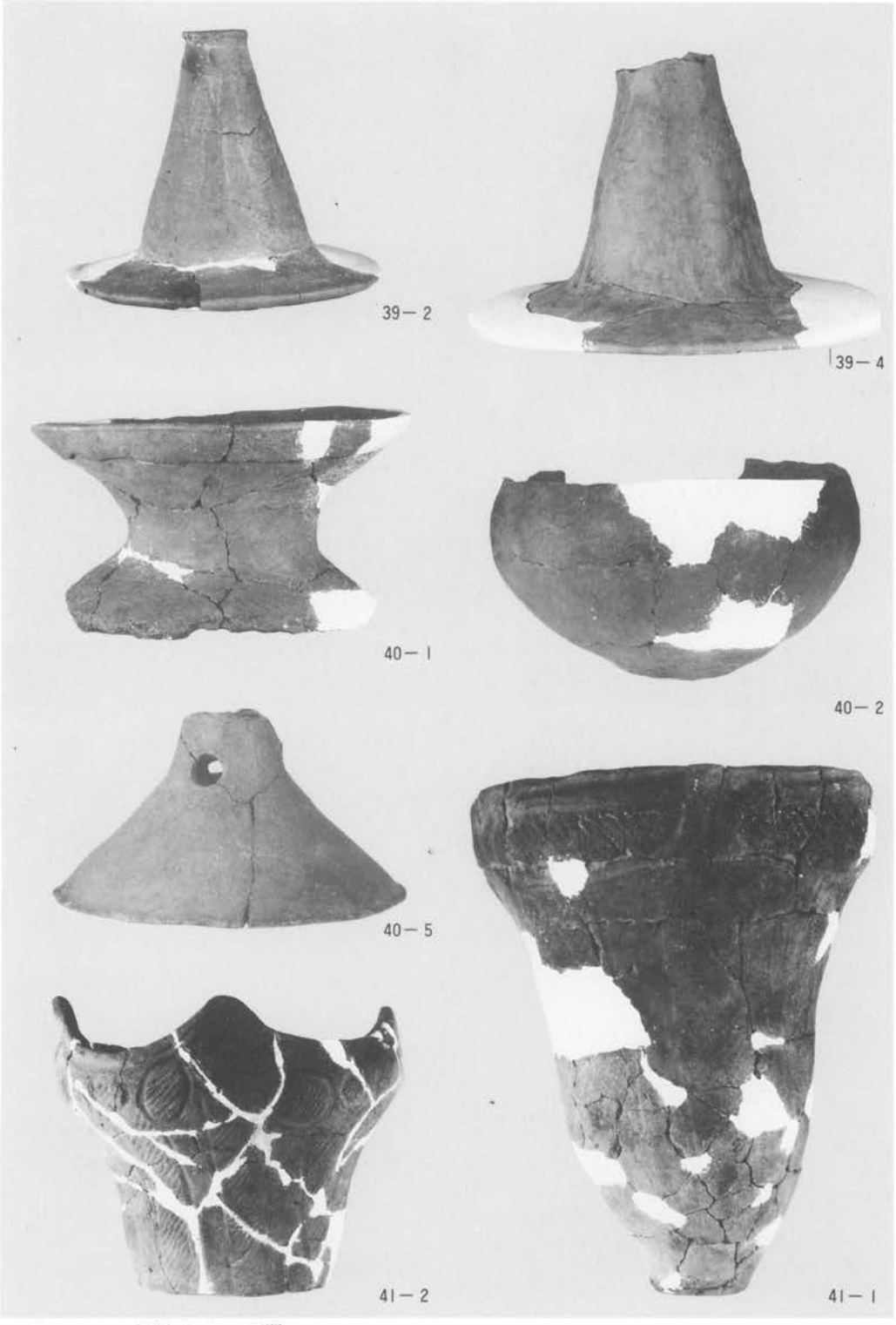


28・29・30・32・33号跡出土の土器



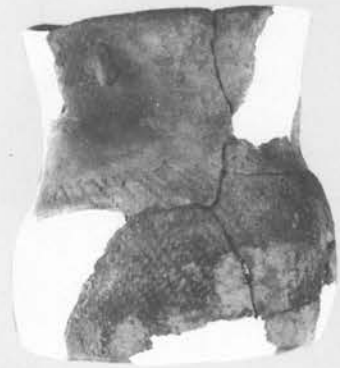
33・34・35・36・39号跡出土の土器

図版86



39・40・41号跡出土の土器

42－1



43－9

43－1

43－6

43－7

44－1

44－4

45－1

42・43・44・45号跡出土の土器

図版88

47－1

47－3

47－4

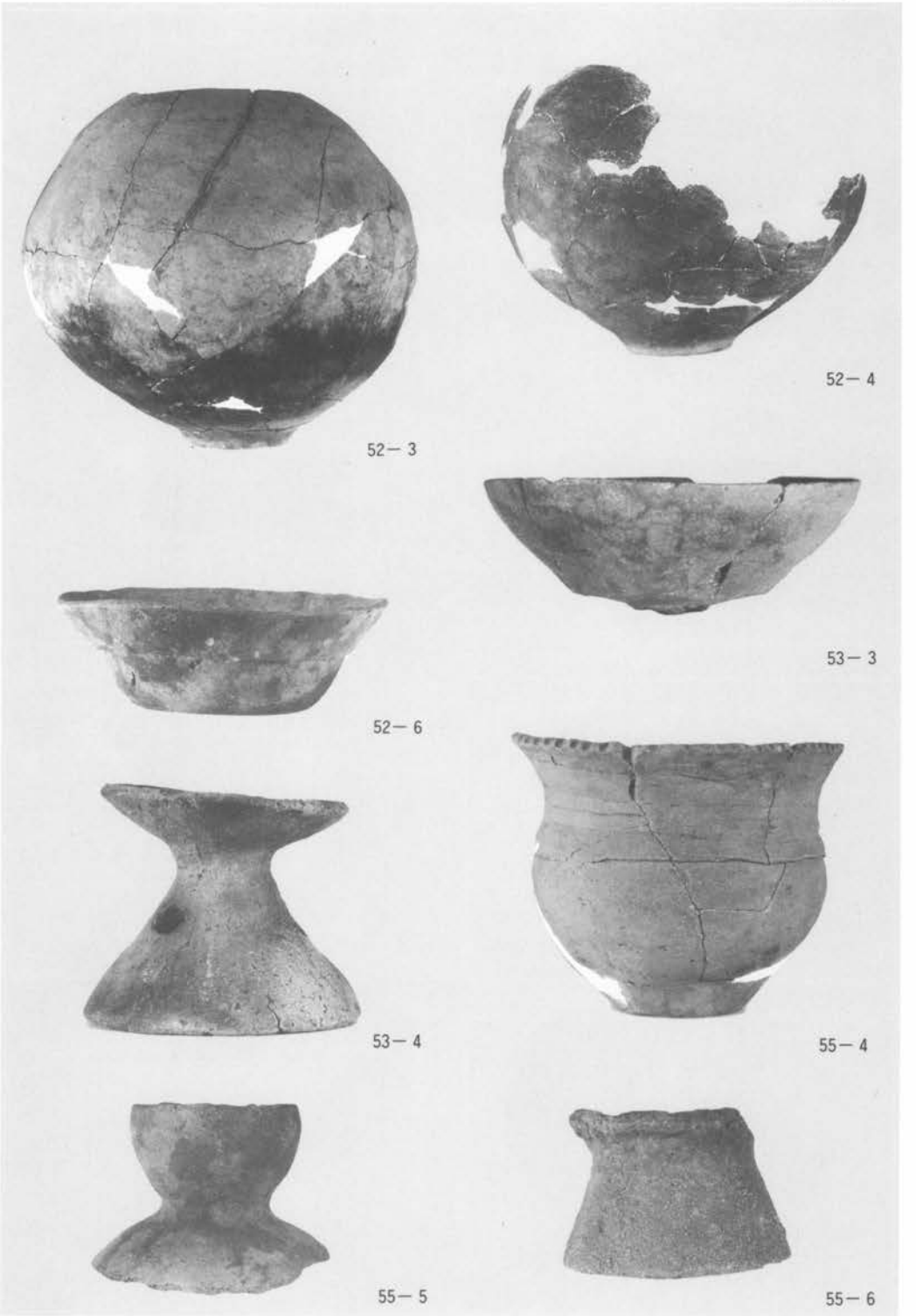
50－1

52－1

52－2

52－5

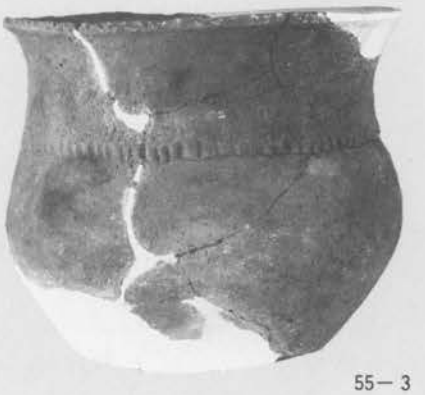
47・50・52号跡出土の土器



52・53・55号跡出土の土器

図版90

55－1



55－3

55－7

55－8

55－9

58－1

58－2

55・58号跡出土の土器

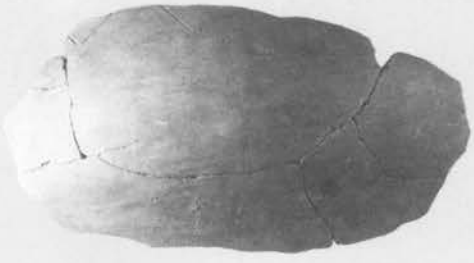
58－3

59－1

59－3

60－1

61－1



63－1

58・59・60・61・63号跡出土の土器

図版92

66－2

66－3

66－4

66－5

66－6

66－10

66号跡出土の土器

66－11

66－12

66－14

66－13

66－15

66－17

66－18

66－19

66号跡出土の土器

図版94

66－21

66－22

69－1

69－2

70－1

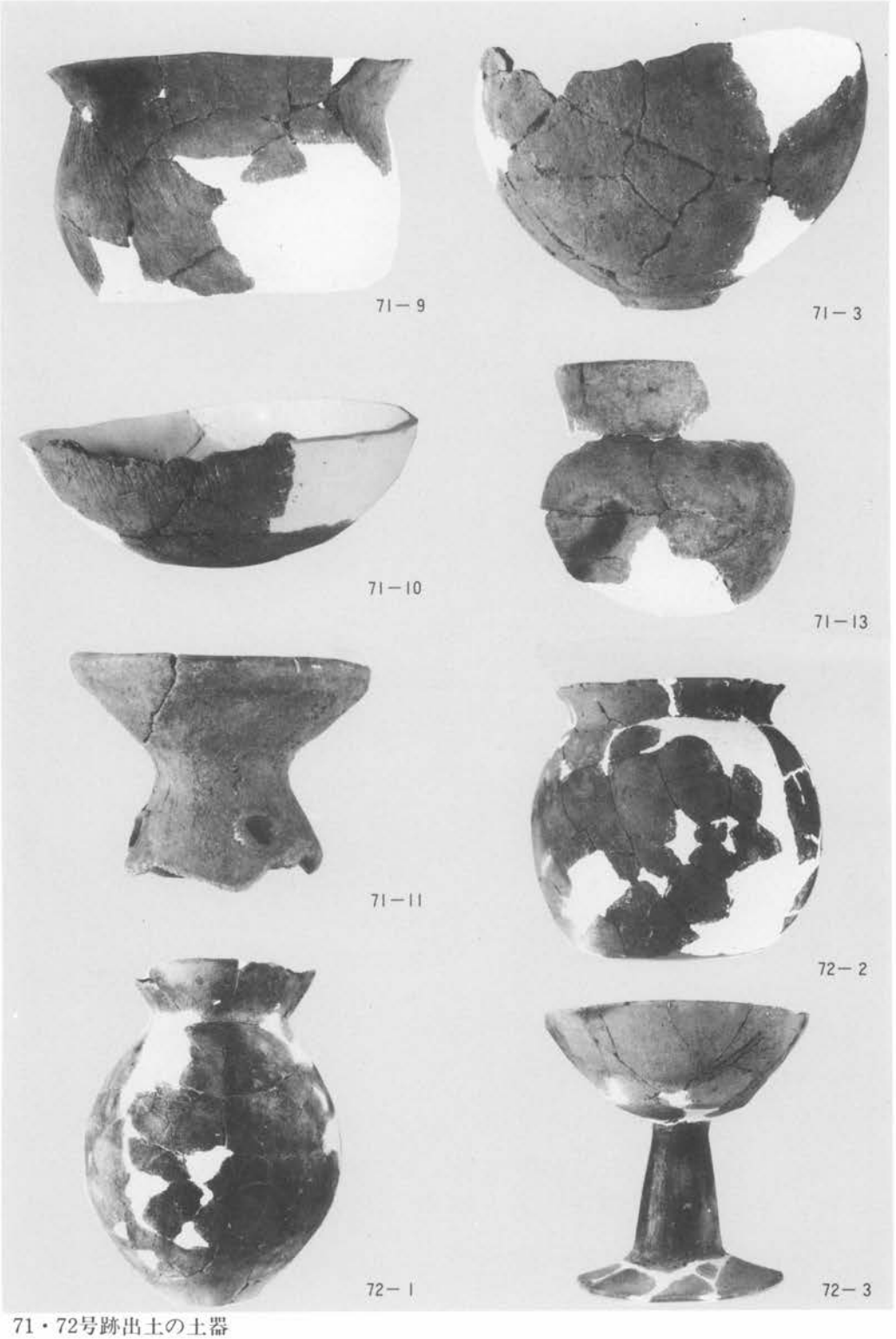
70－3

70－6

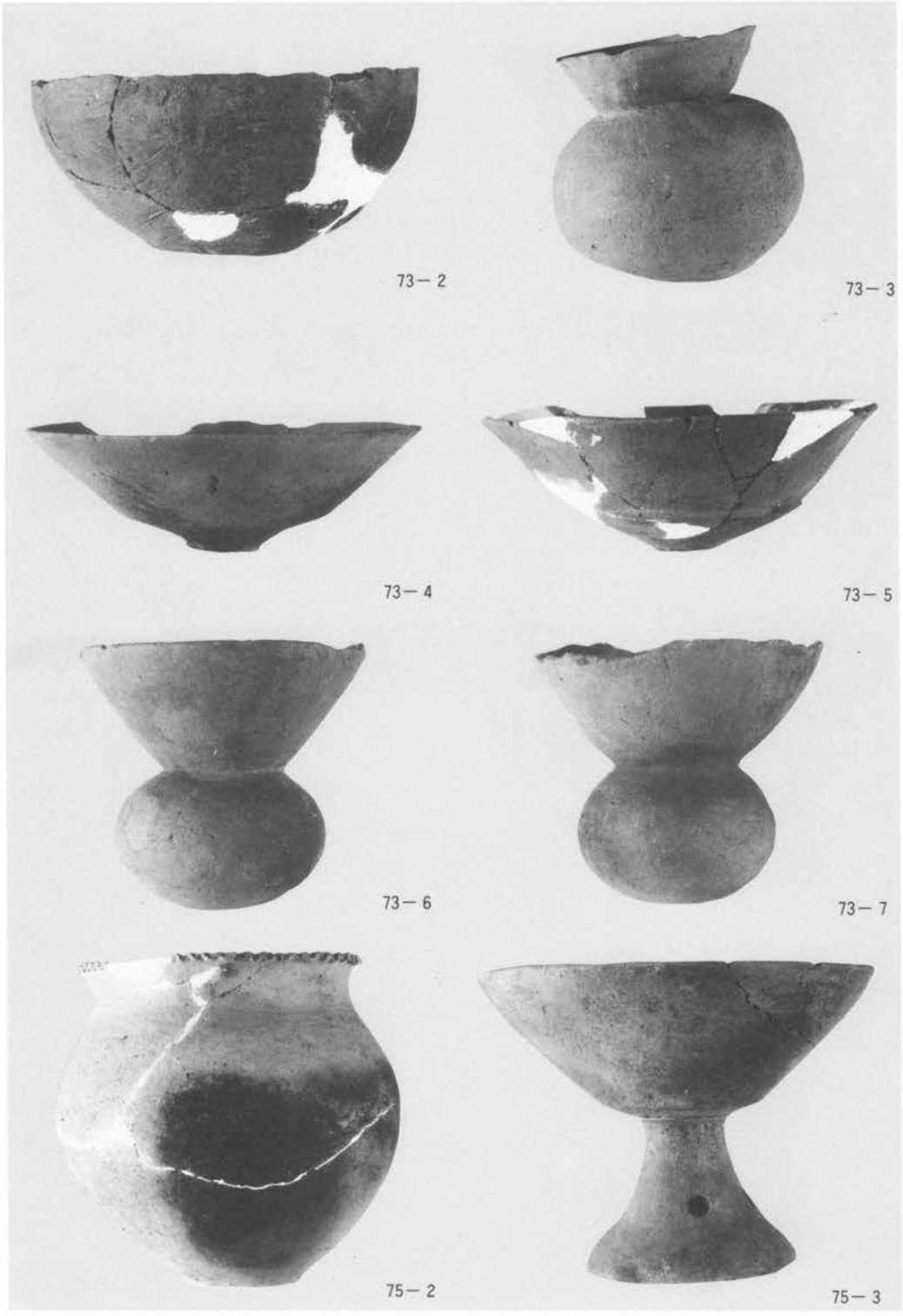
66・69・70号跡出土の土器

70・71号跡出土の土器

図版96

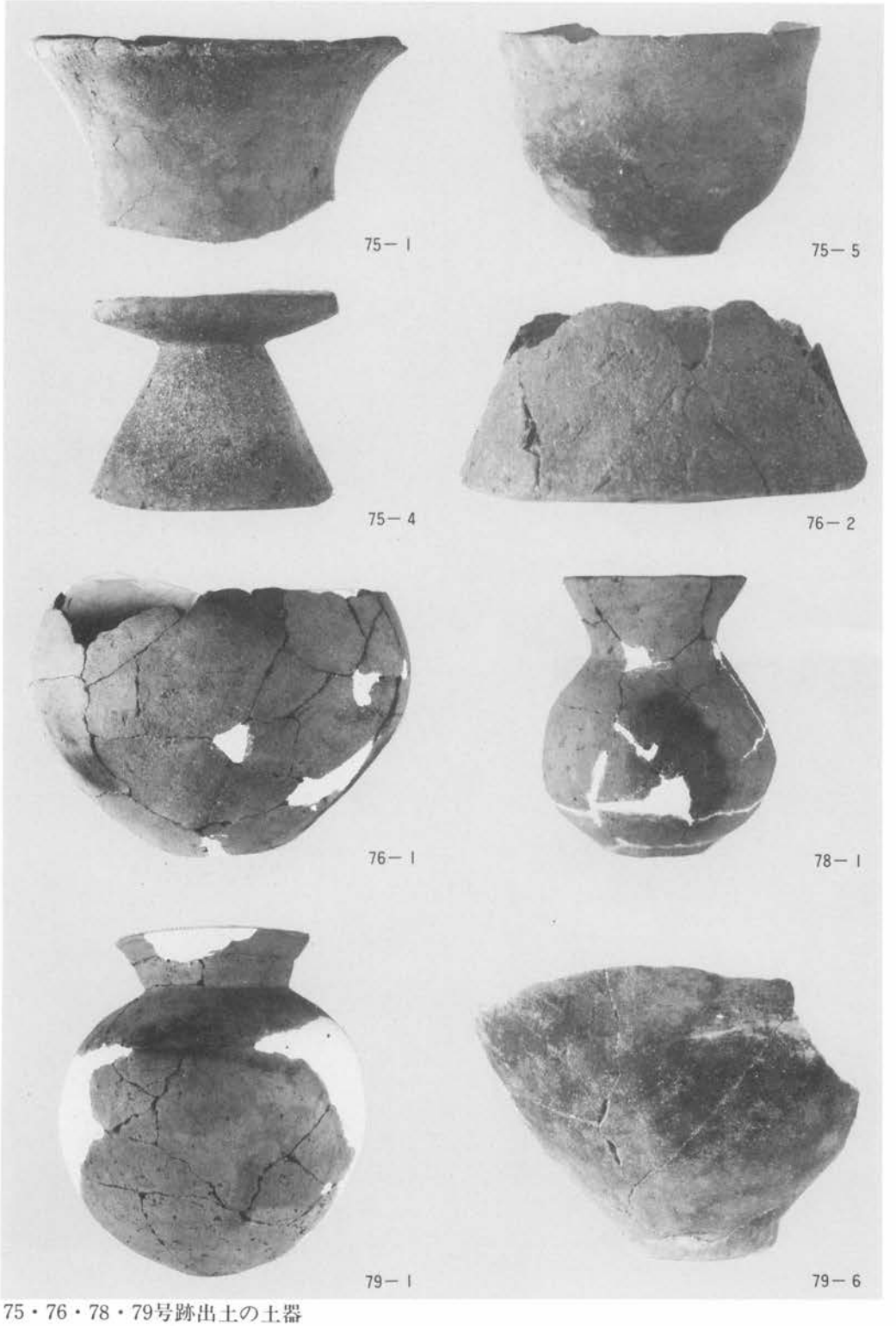


71・72号跡出土の土器



73・75号跡出土の土器

図版98



75・76・78・79号跡出土の土器

79－2

79－3

79－4

79－5

79－7

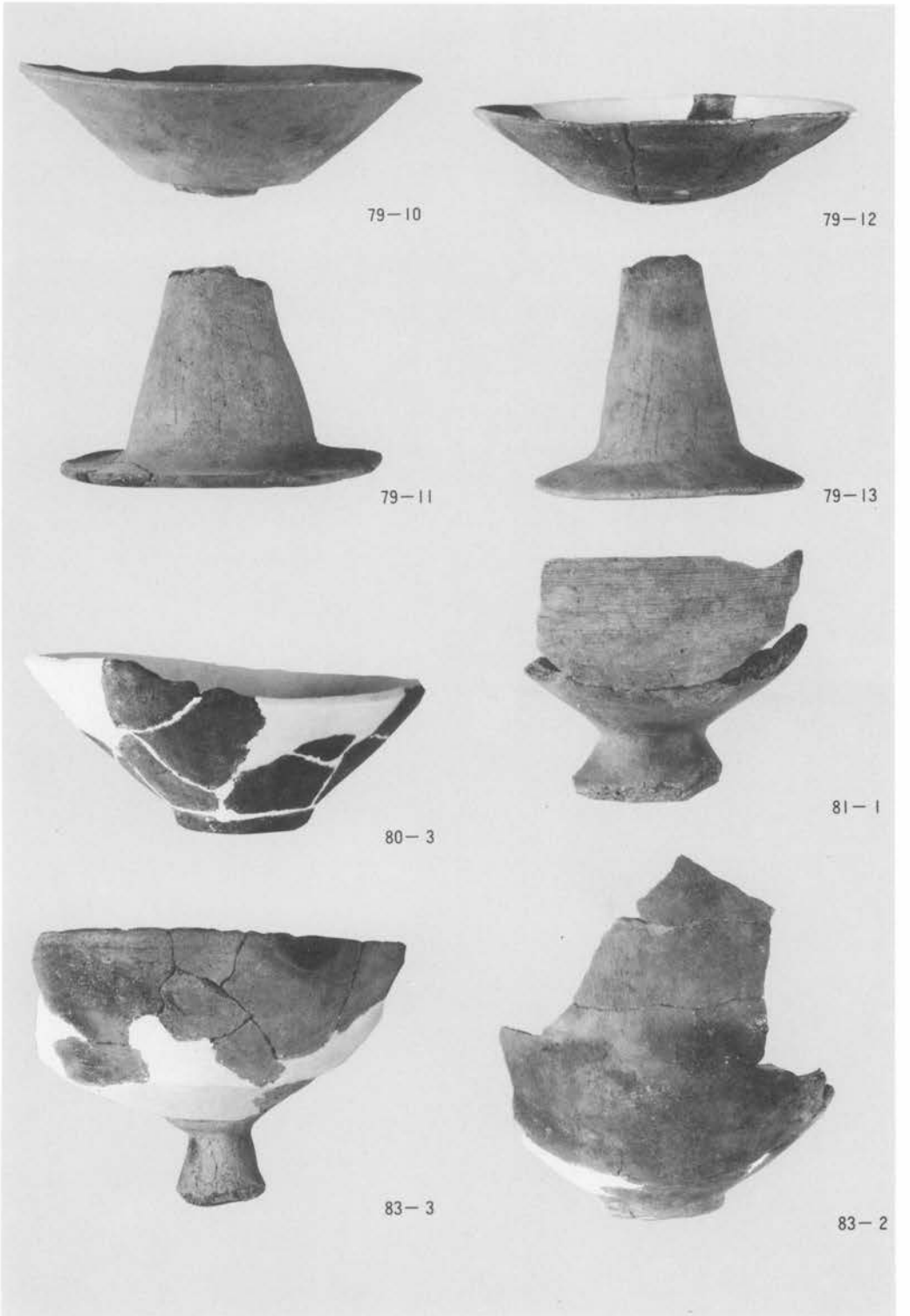
79－8

79－9

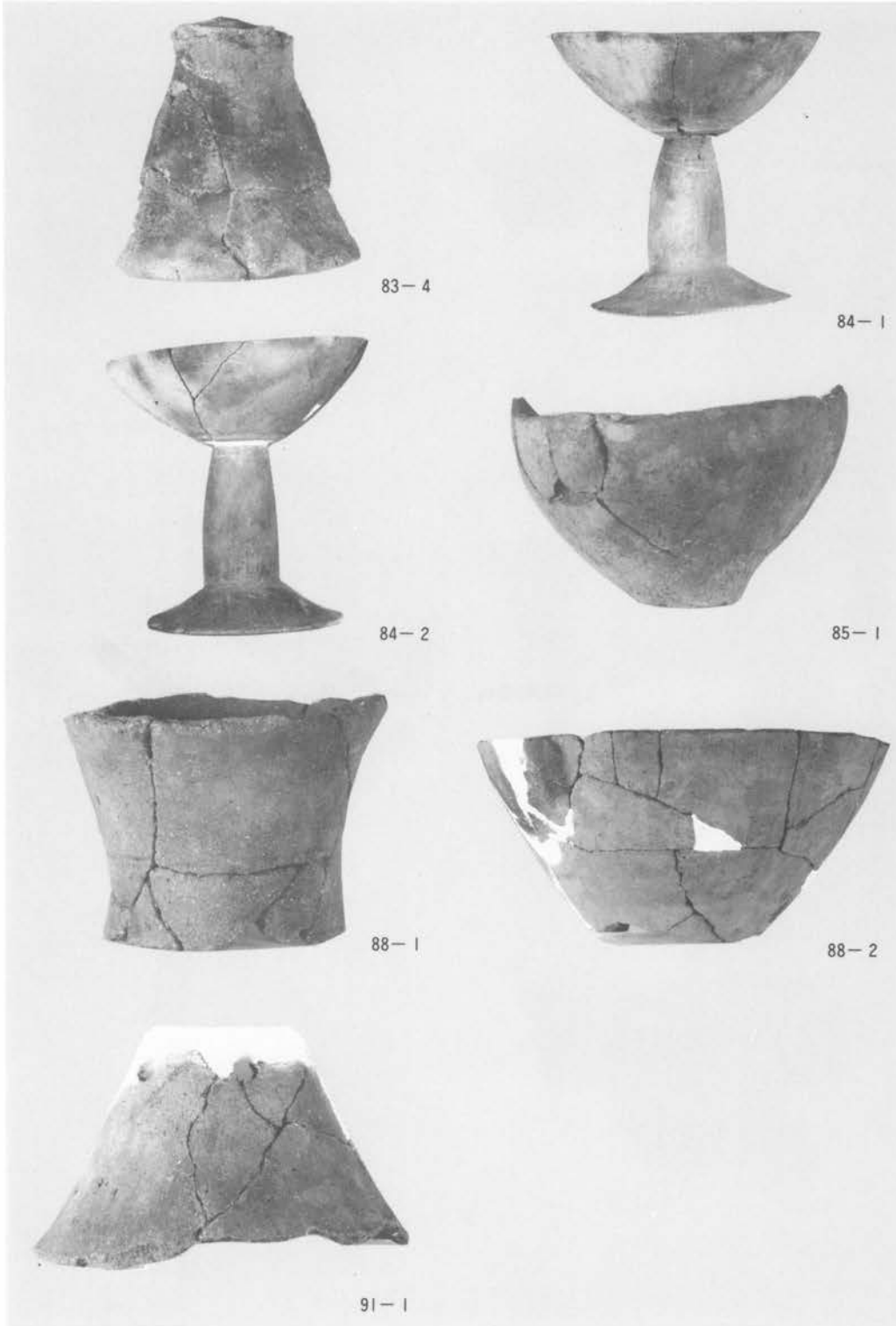
79－14

79号跡出土の土器

図版100

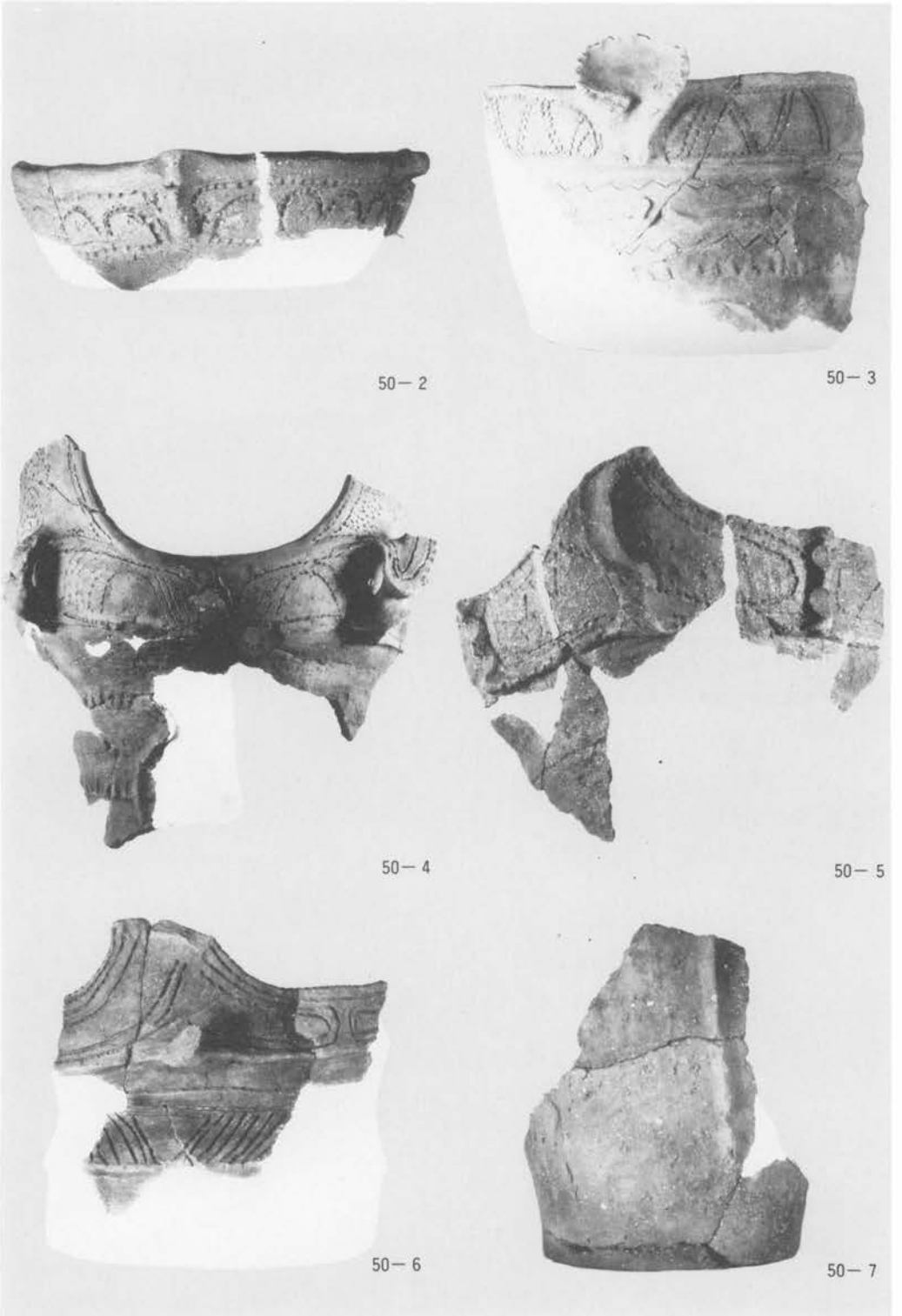


79・80・81・83号跡出土の土器



83・84・85・88・91号跡出土の土器

図版102



50号跡出土の土器

50－8

50－9

50－10

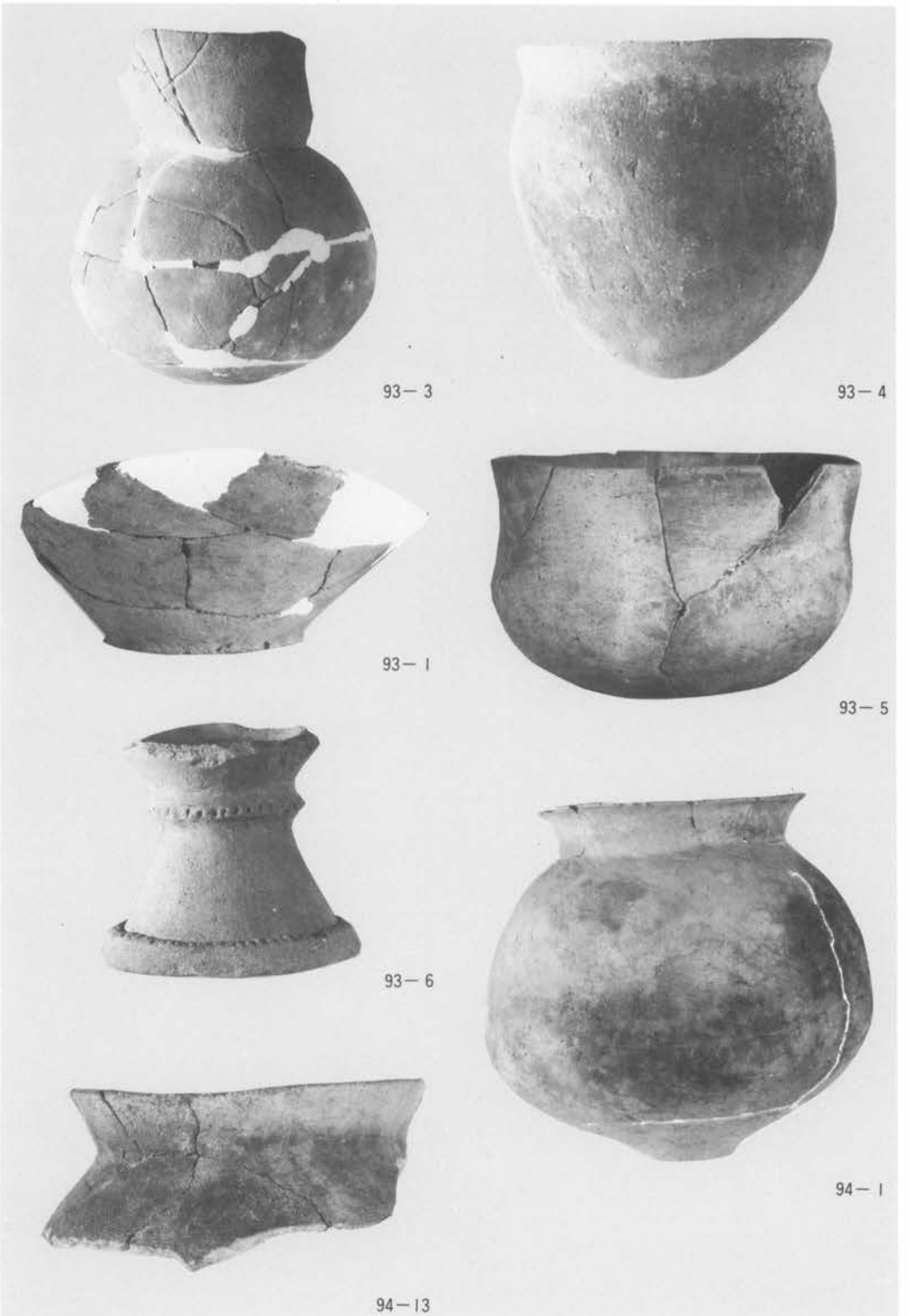
50－11

50－12

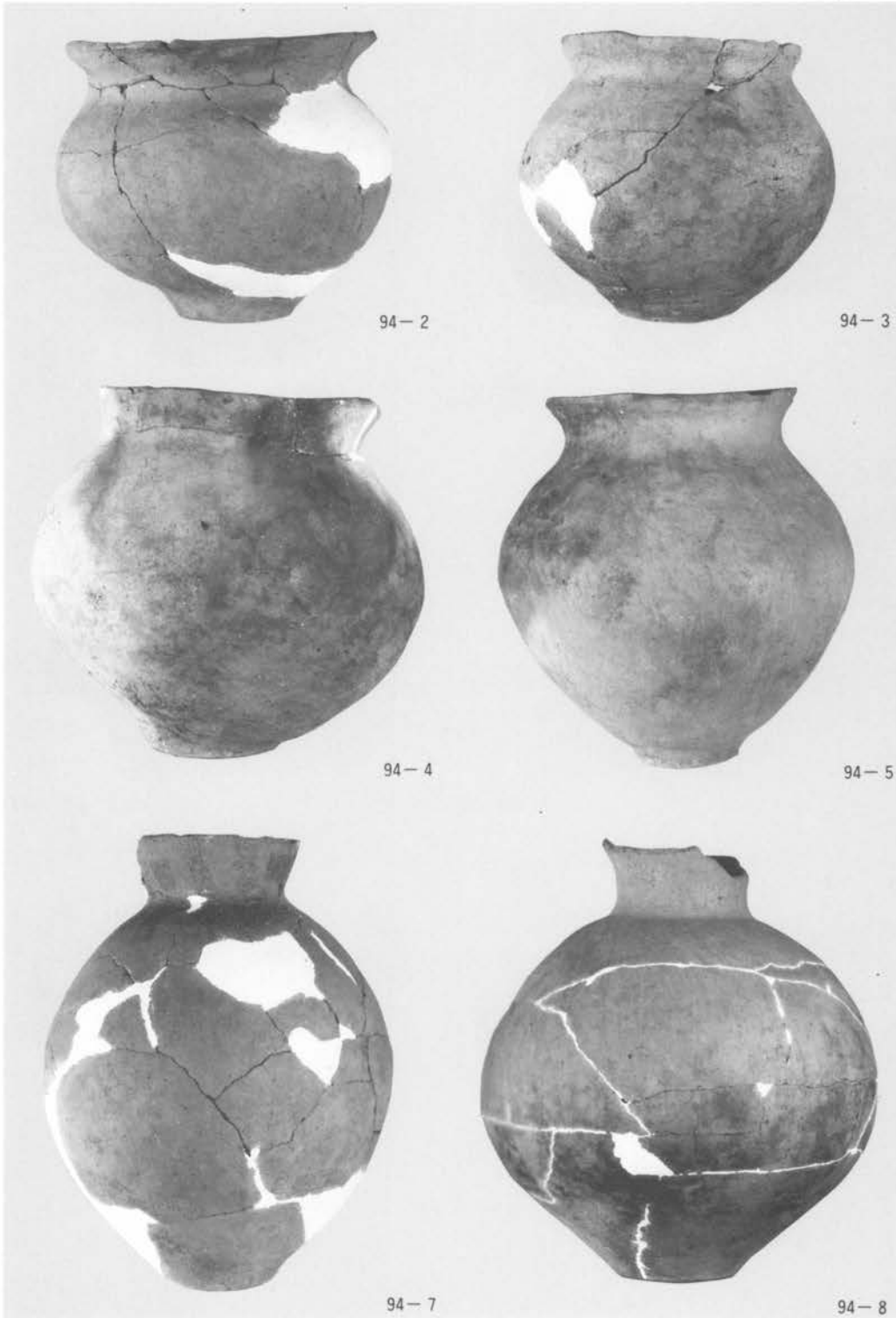
50－13

50号跡出土の土器

図版104



93・94号跡出土の土器



94号跡出土の土器

図版106

94－6

94－9

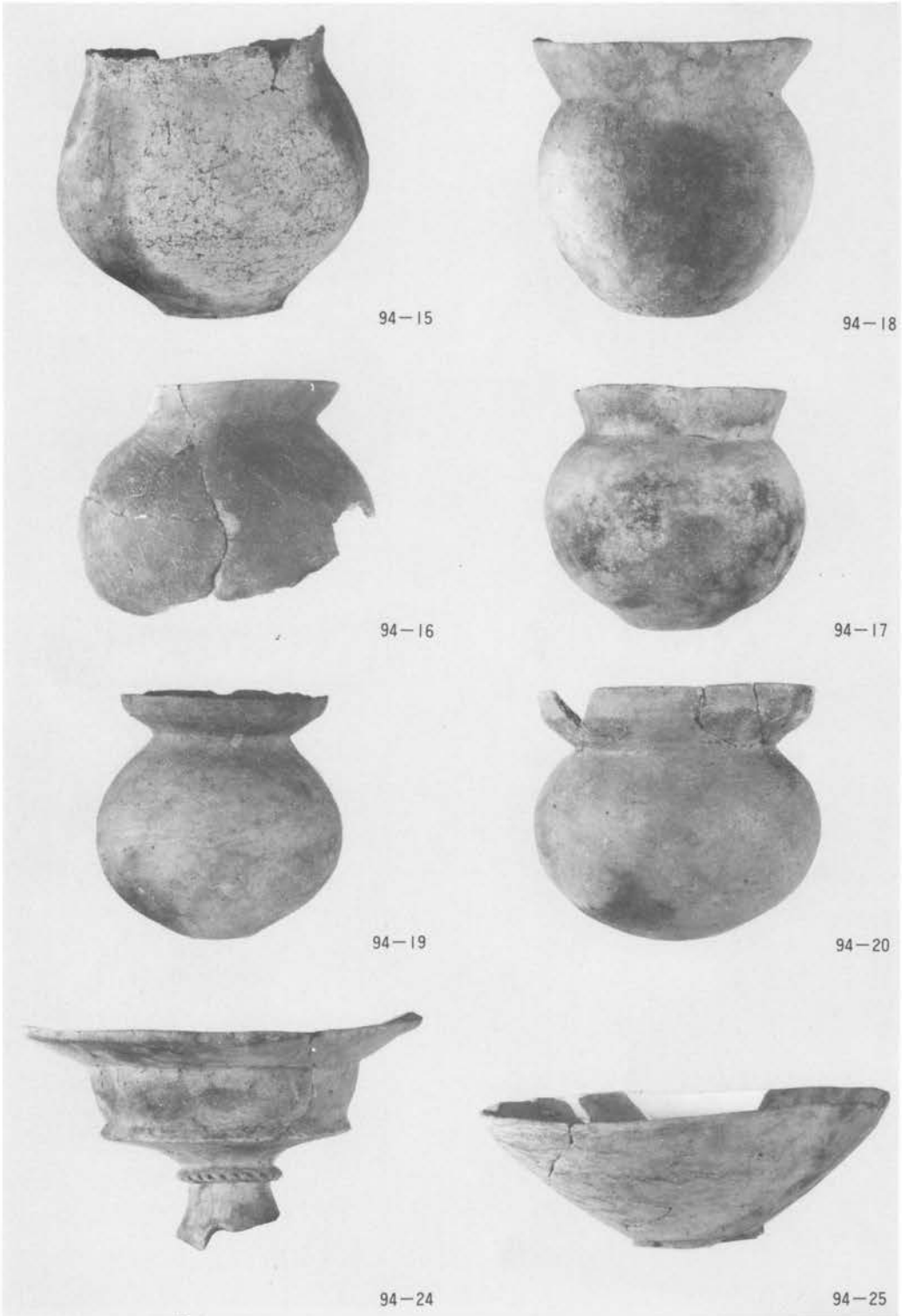
94－10

94－11

94－12

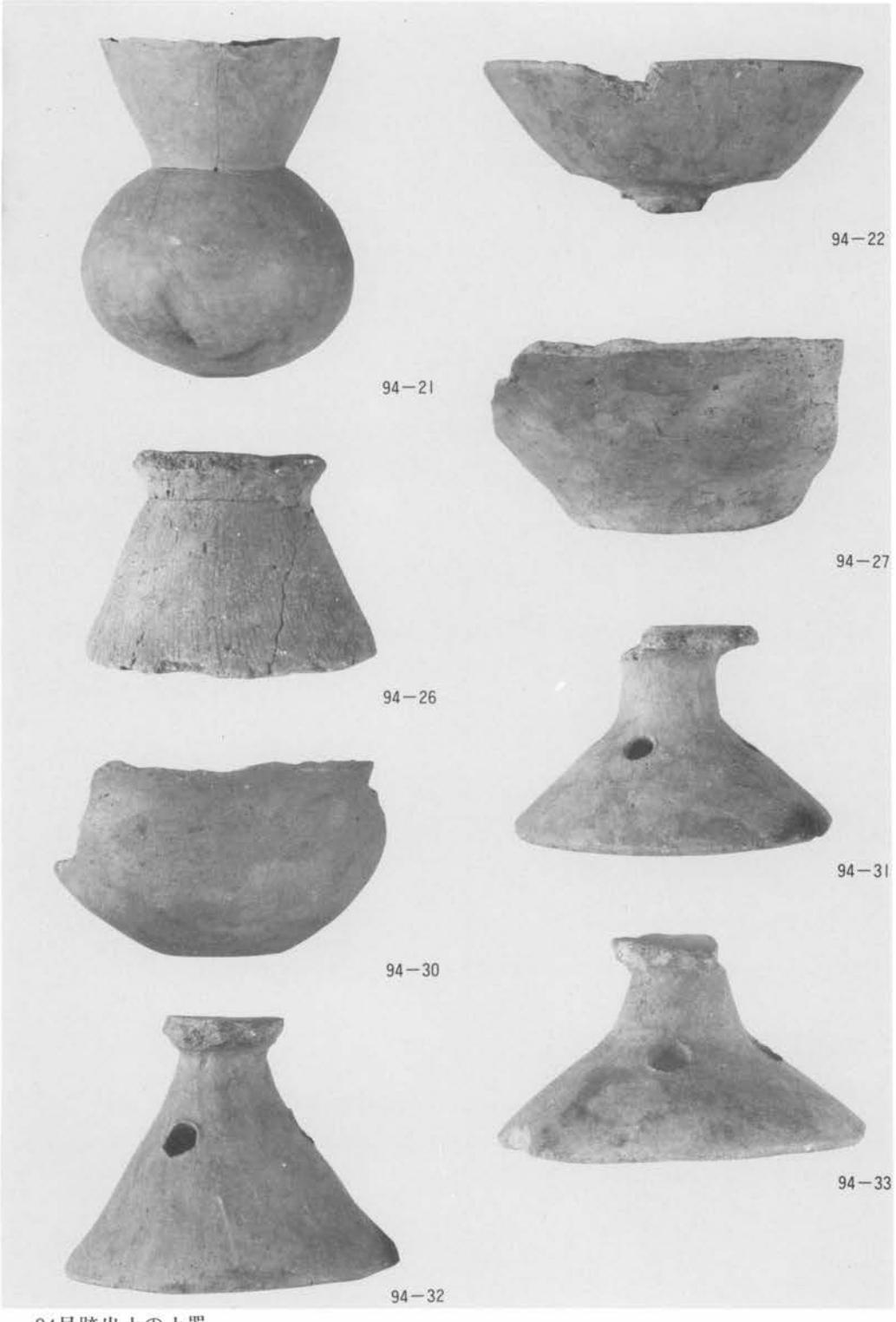
94－14

94号跡出土の土器



94号跡出土の土器

図版108



94号跡出土の土器

94－34

94－35

95－1

95－4

95－3

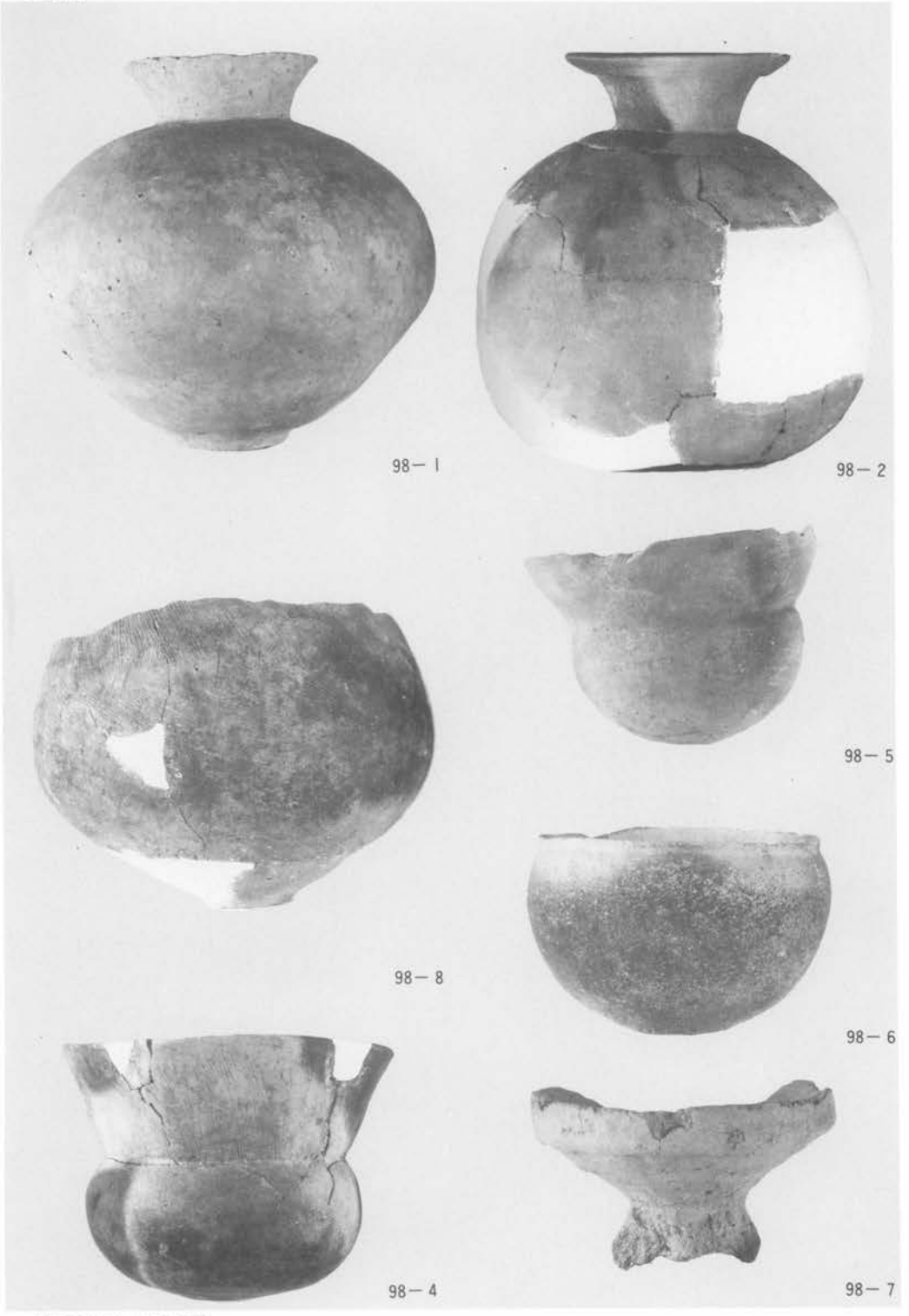
95－2

96－3

96－2

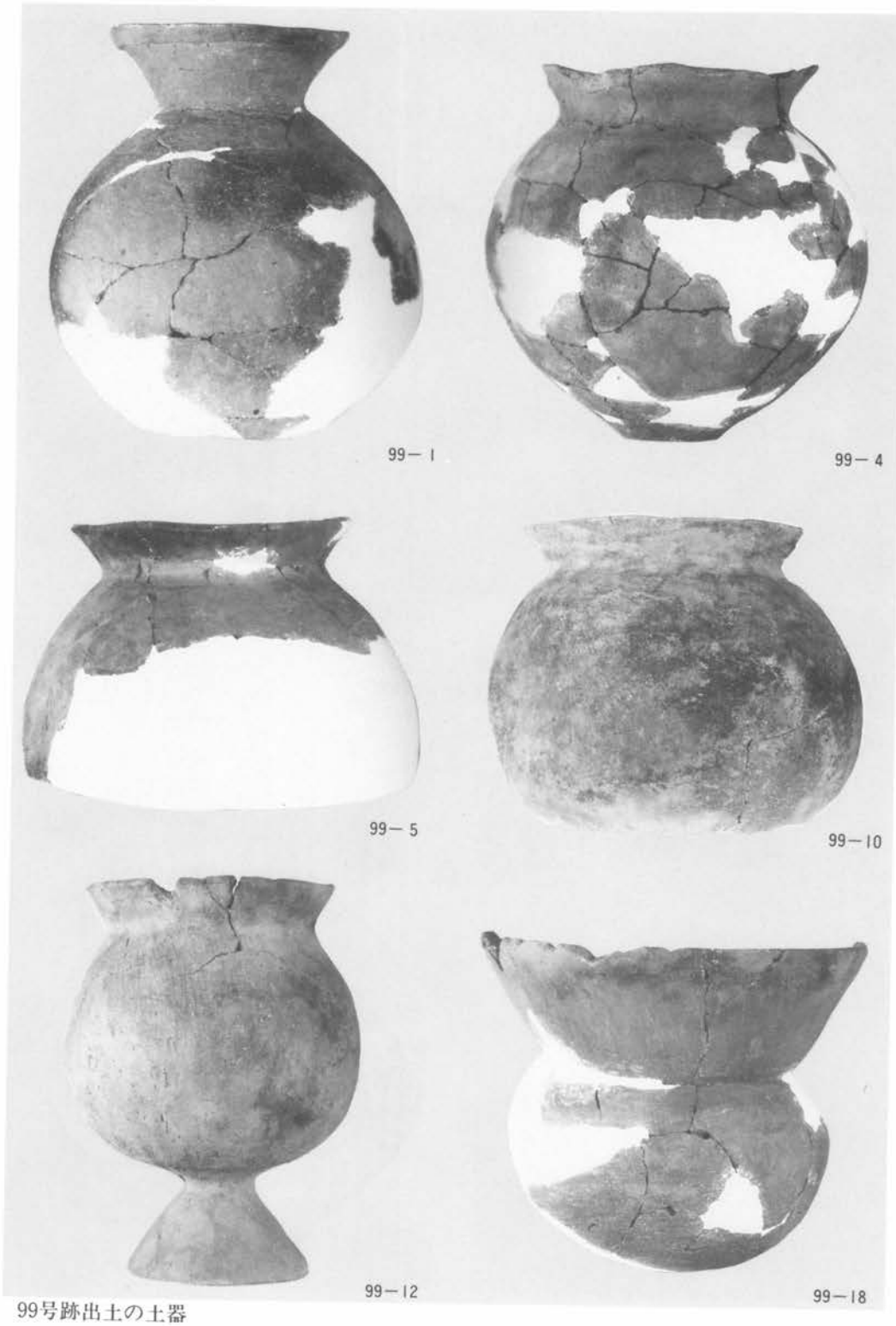
94・95・96号跡出土の土器

図版110



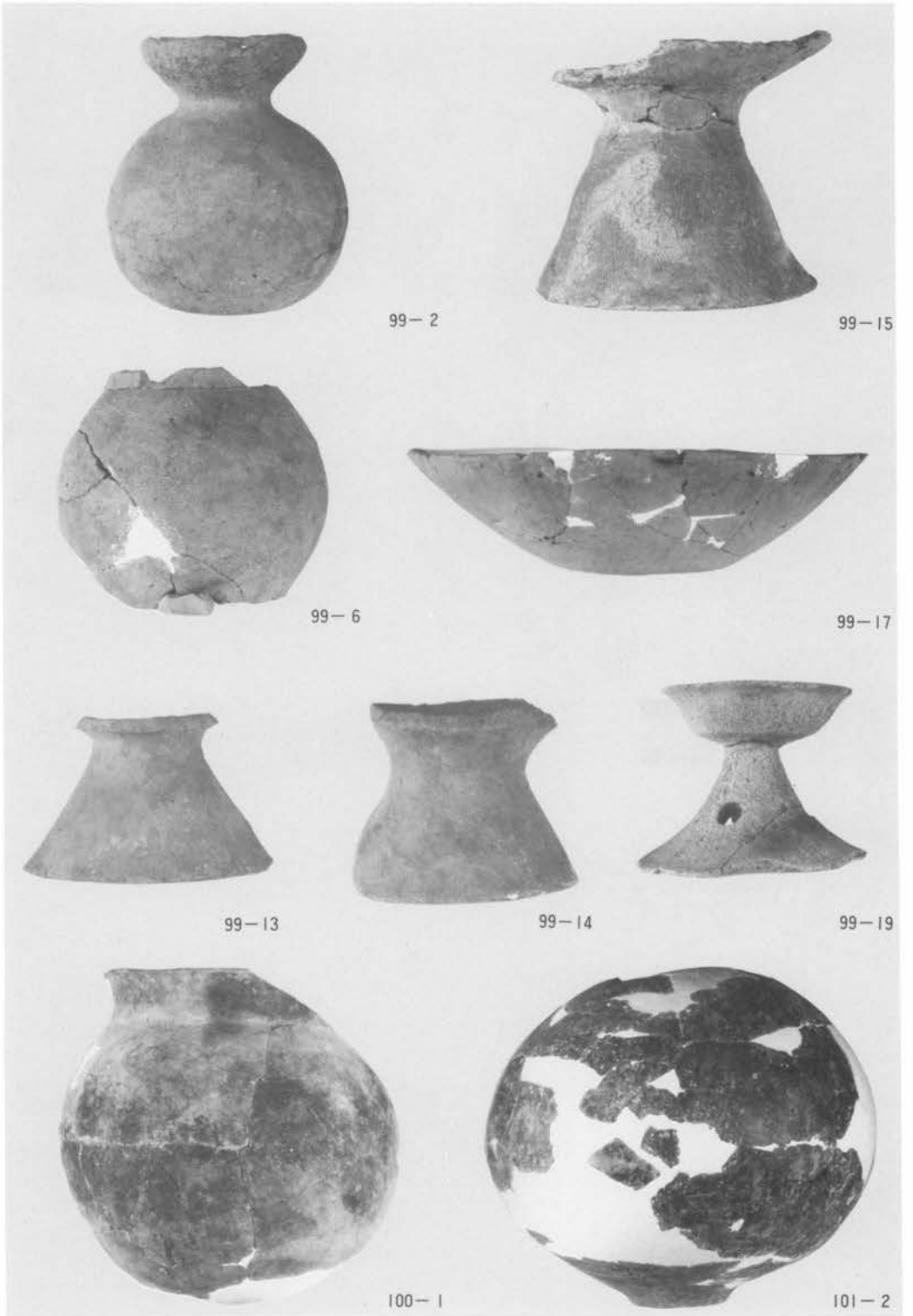
98号跡出土の土器

図版111

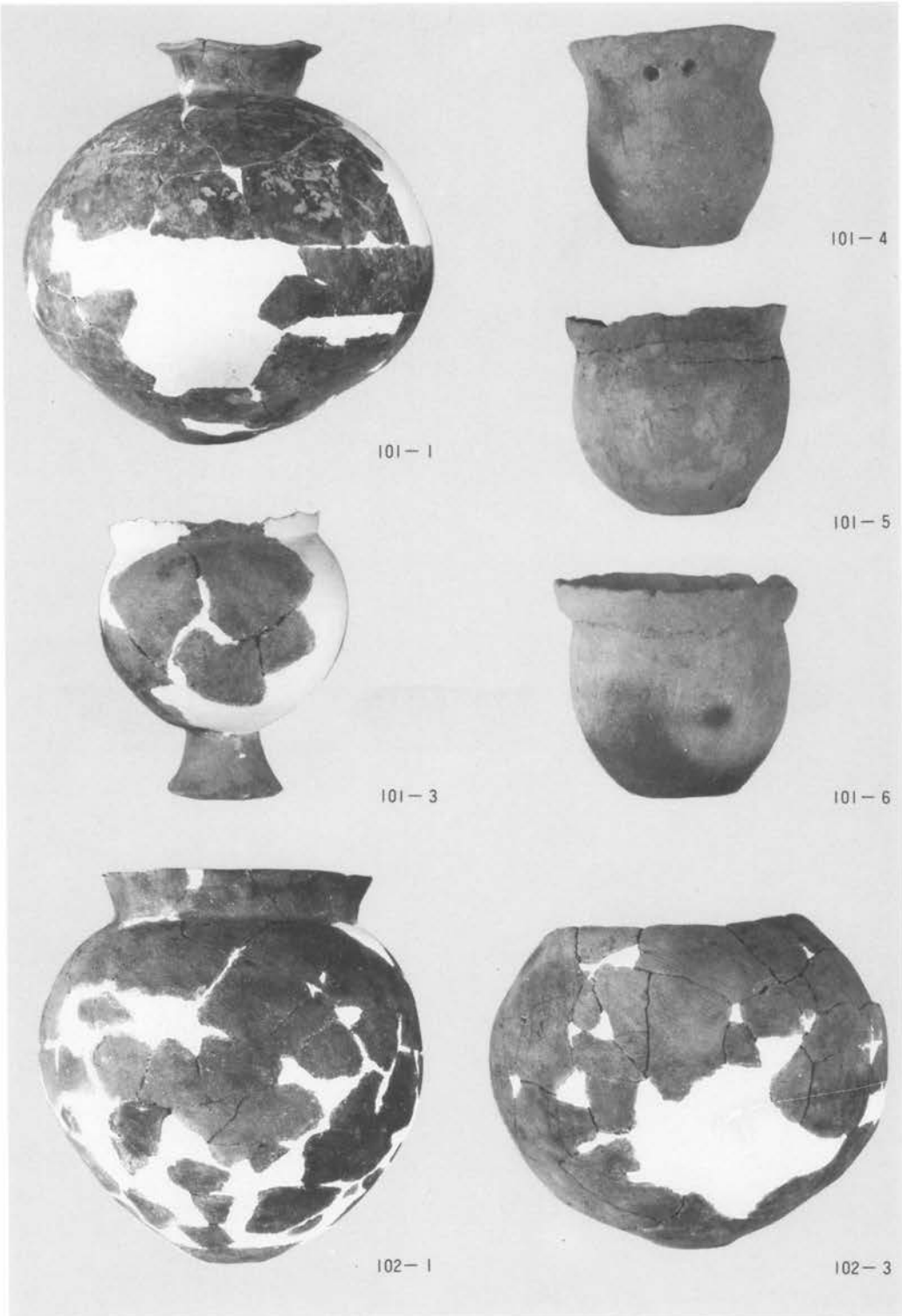


99号跡出土の土器

図版112

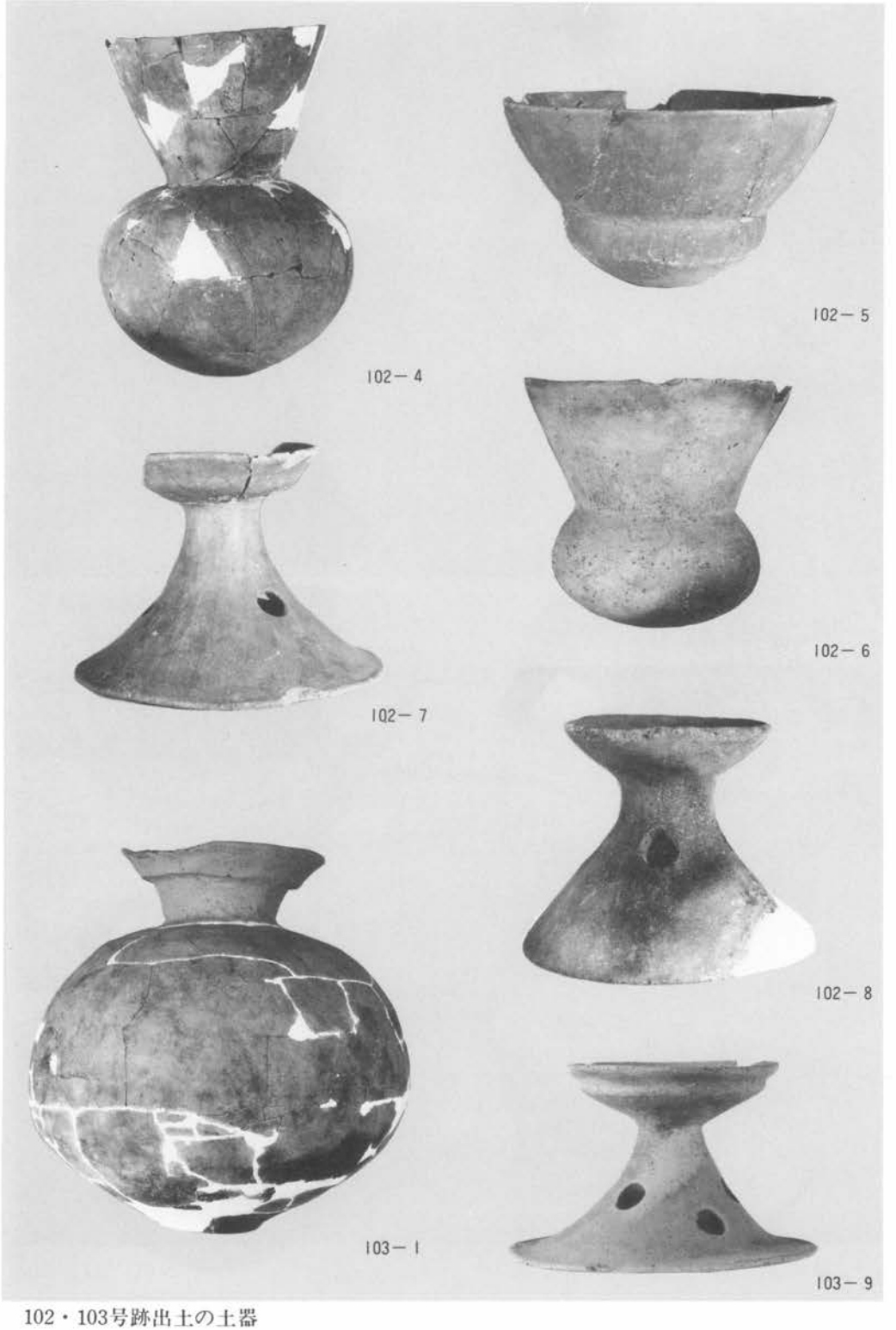


99・100・101号路出土の土器

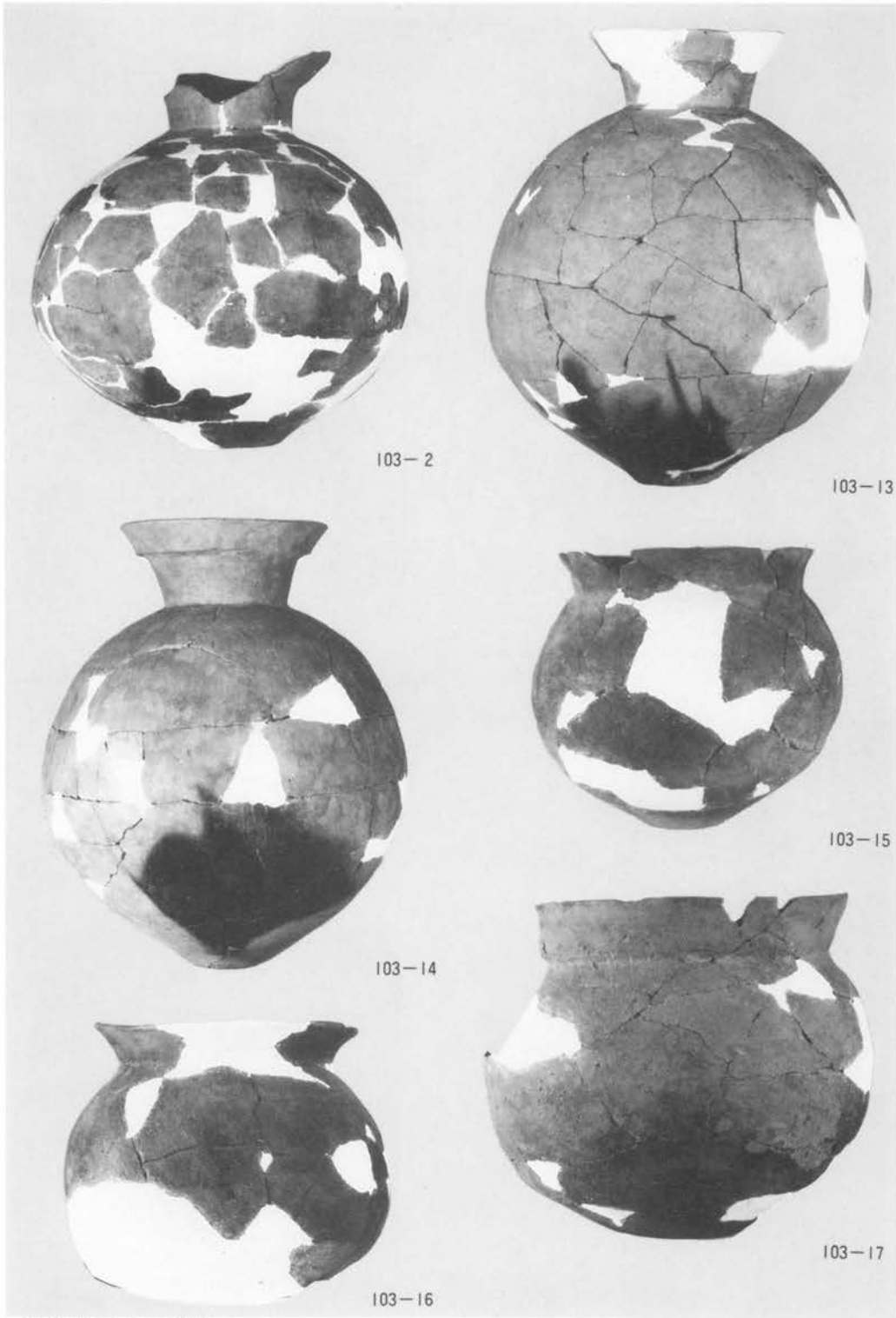


101・102号跡出土の土器

図版114

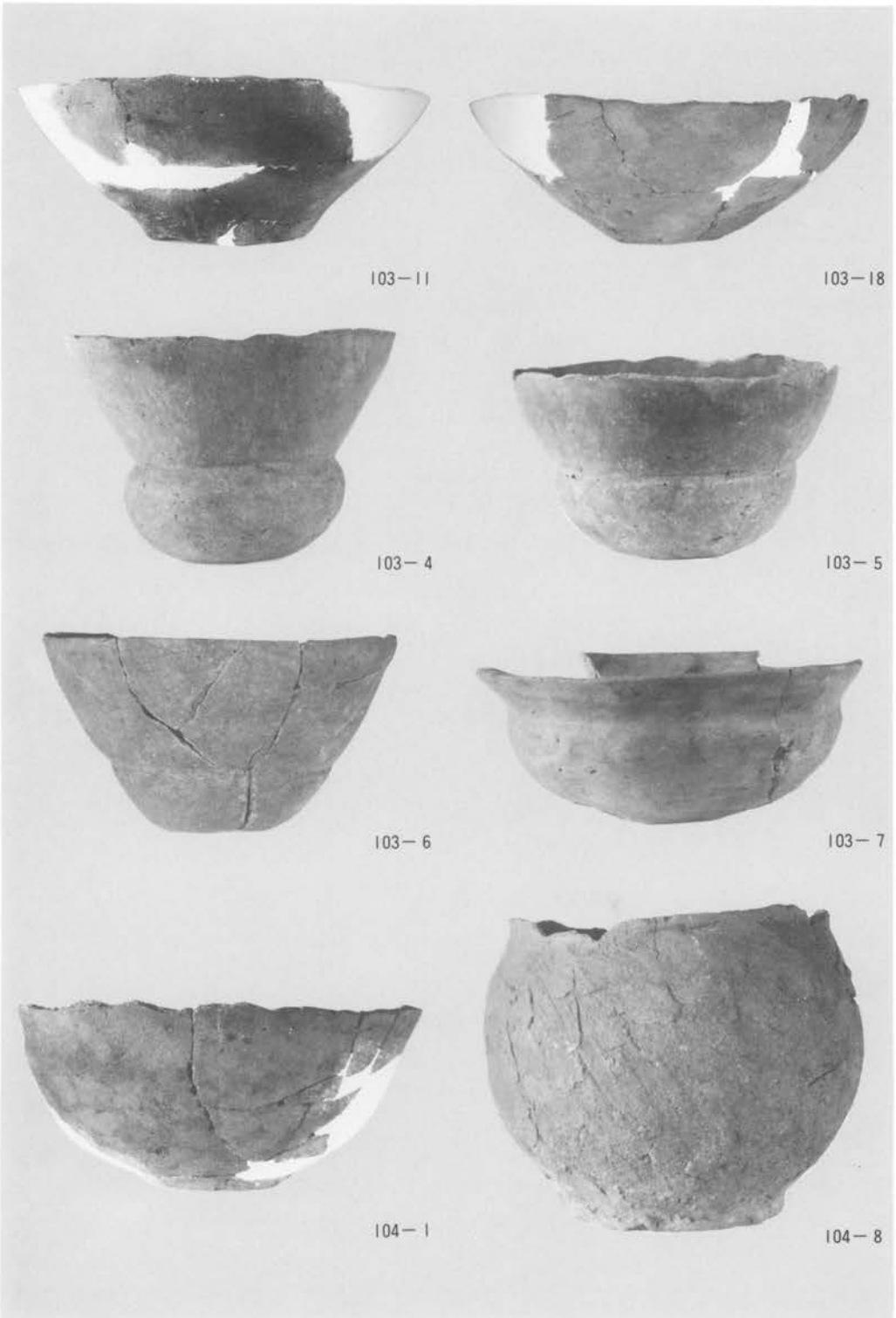


102・103号跡出土の土器



103号跡出土の土器

図版116



103・104号跡出土の土器

104－4

104－5

104－6

105－1

105－2

105－4

105－3

106－1

104・105・106号跡出土の土器

図版118

107－1

107－2

107－3

107－7

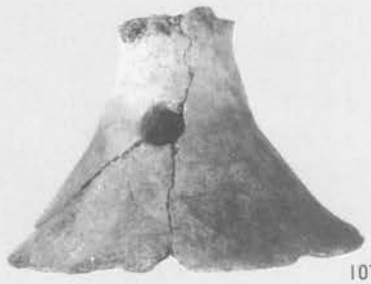
107－4

107－5

107－6

107－8

107号跡出土の土器



107－9

107－10

107－1

108－3

108－4

108－5

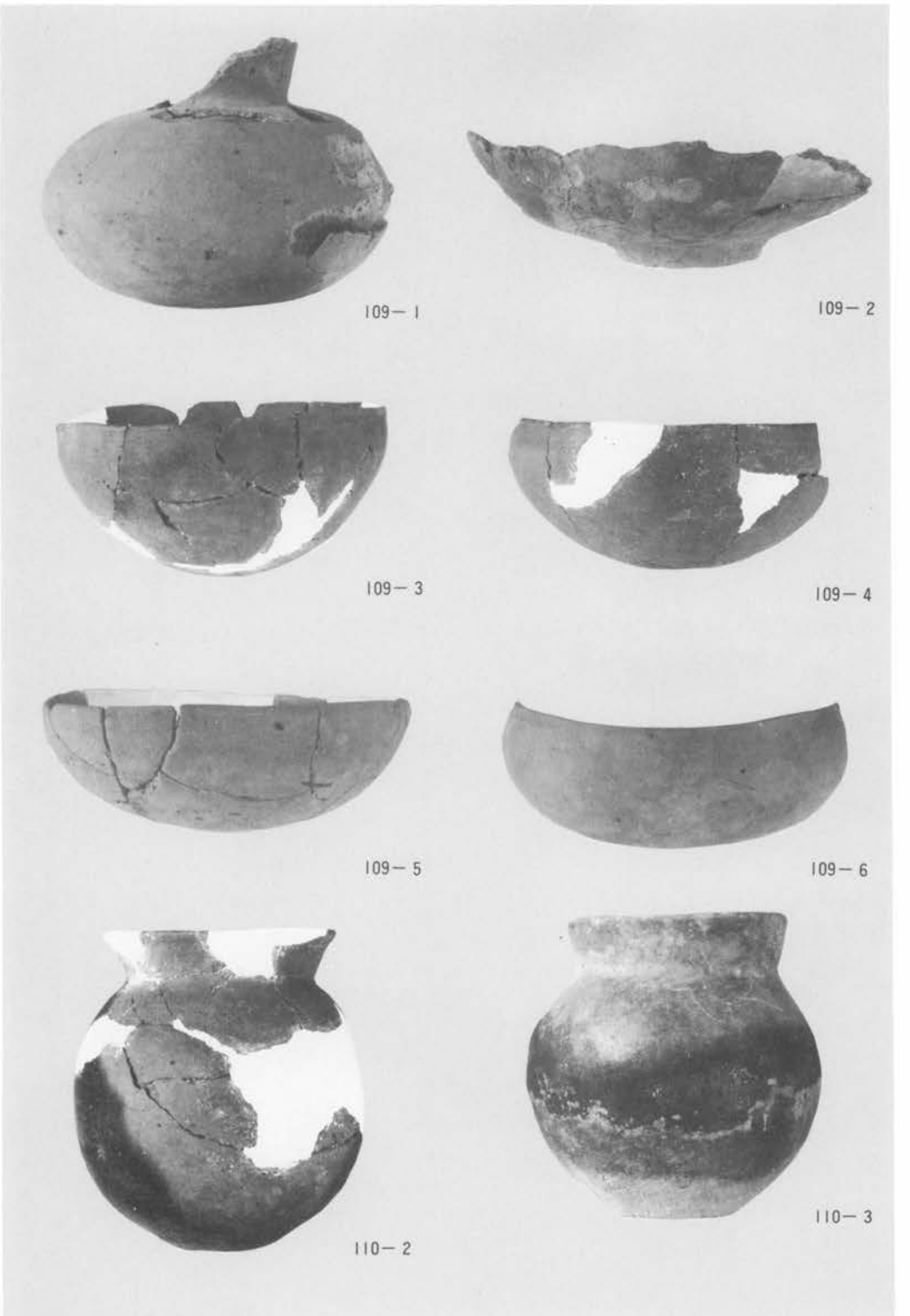
108－2

108－6

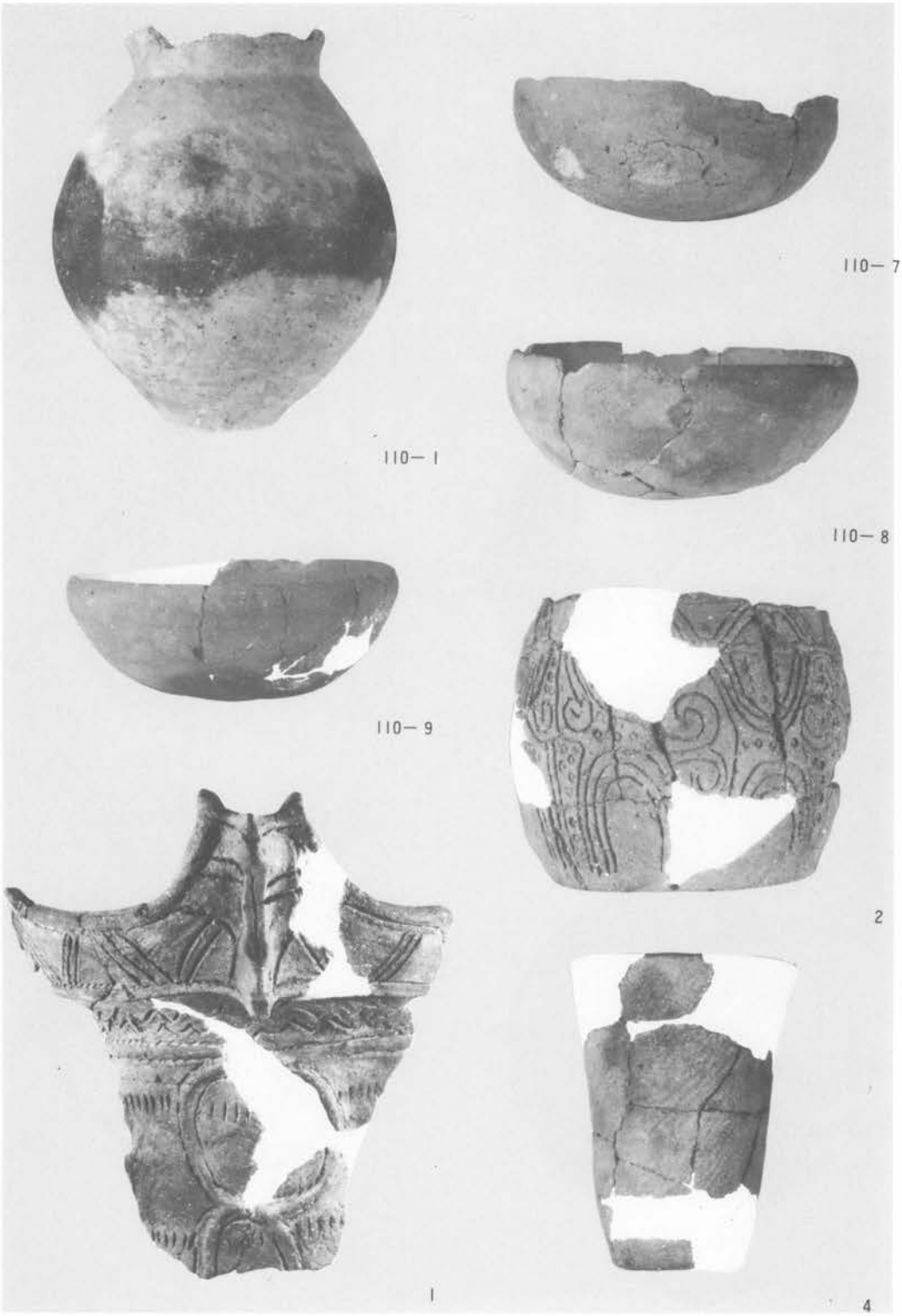
108－7

107・108号跡出土の土器

図版120

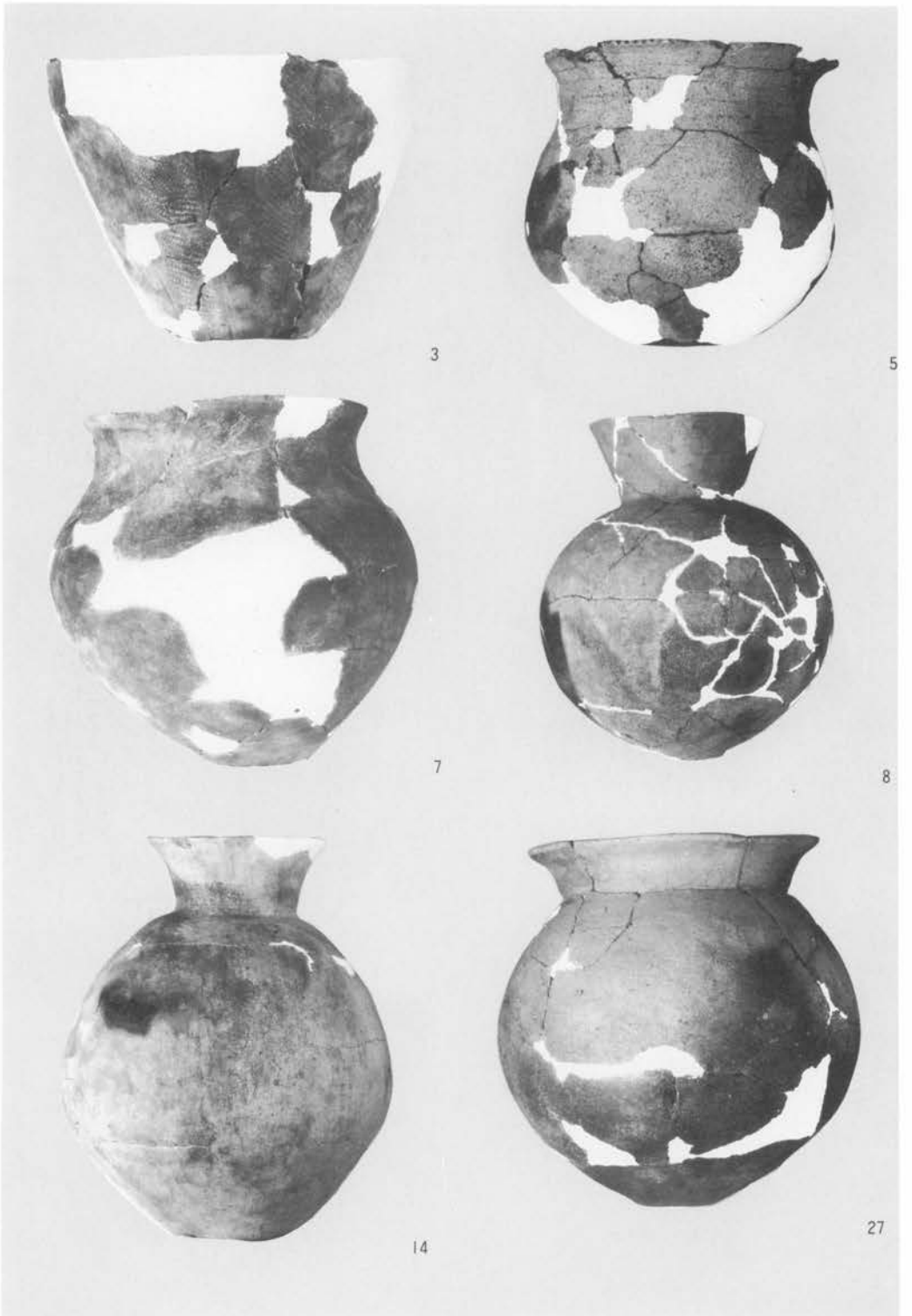


109・110号跡出土の土器

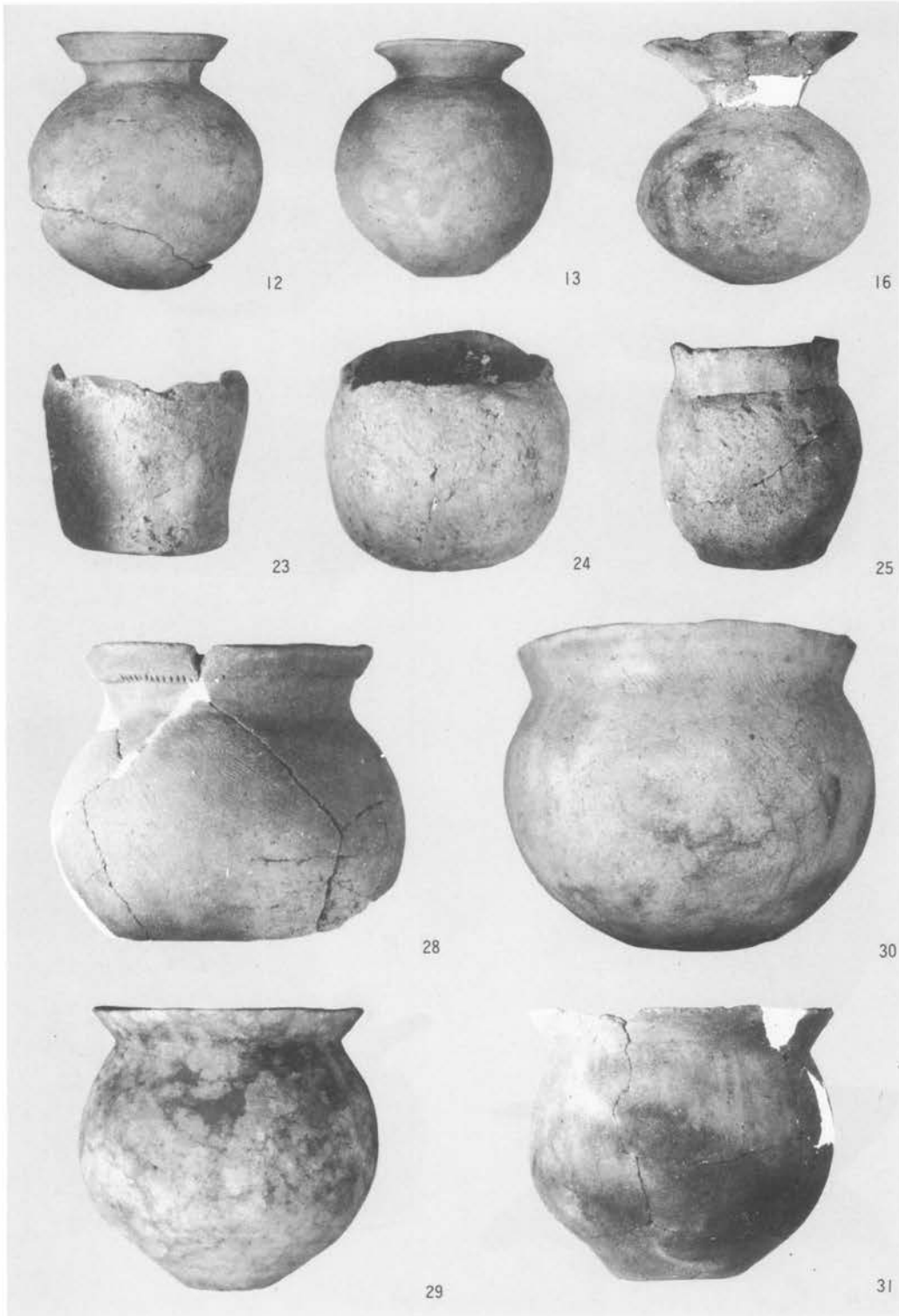


110号跡・遺構外出土の土器

図版122



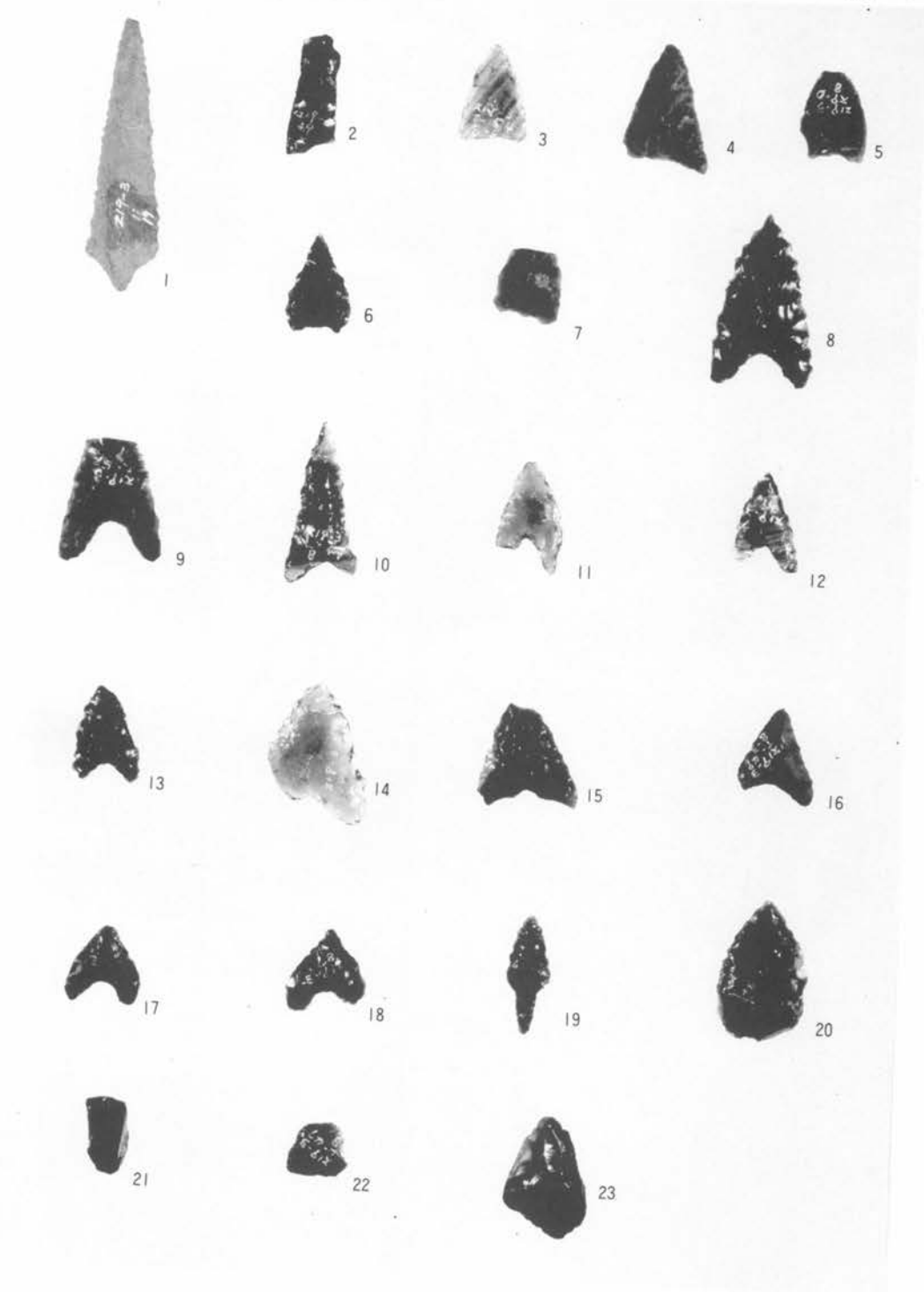
遺構外出土の土器



遺構外出土の土器

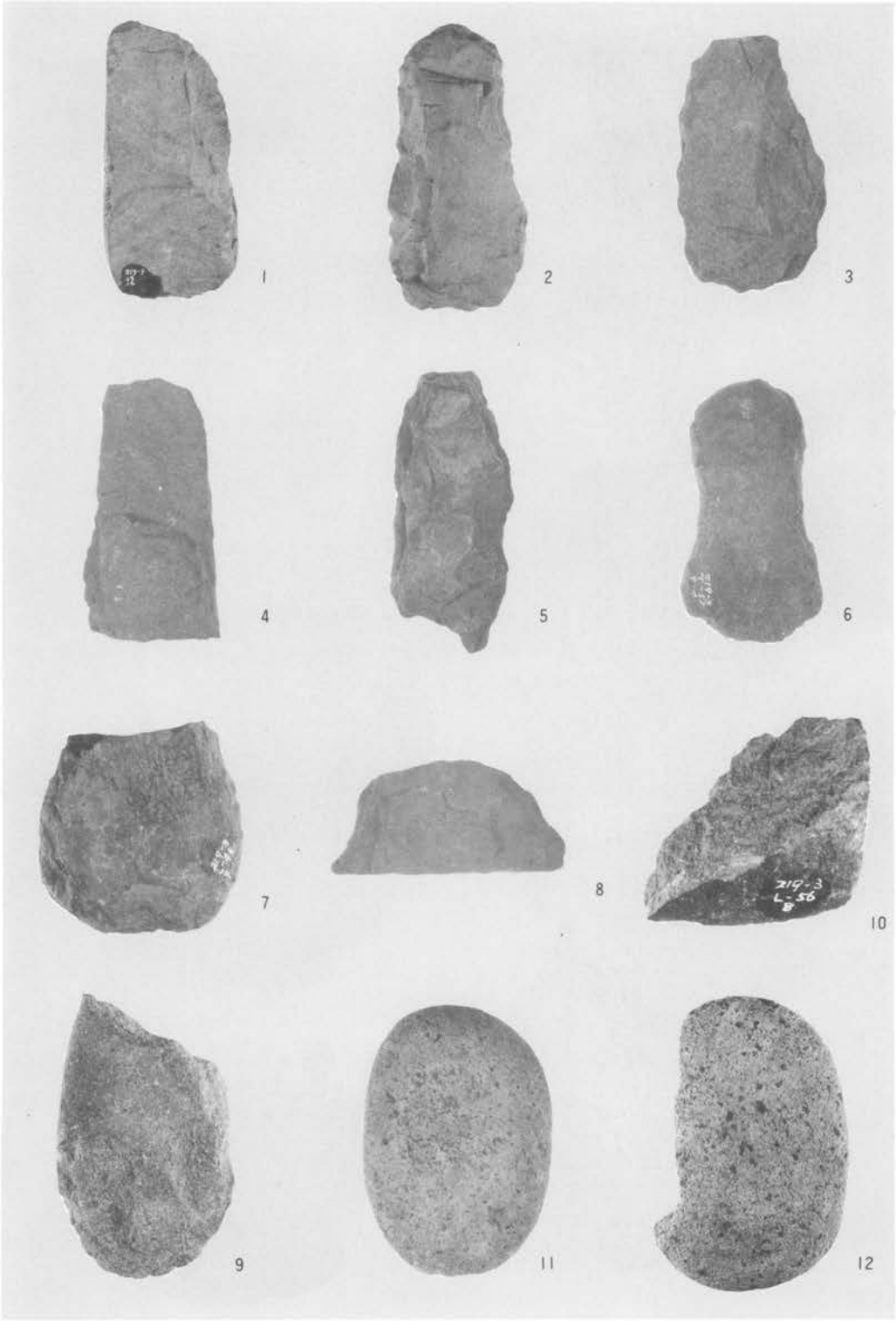
図版124

遺構外出土の土器

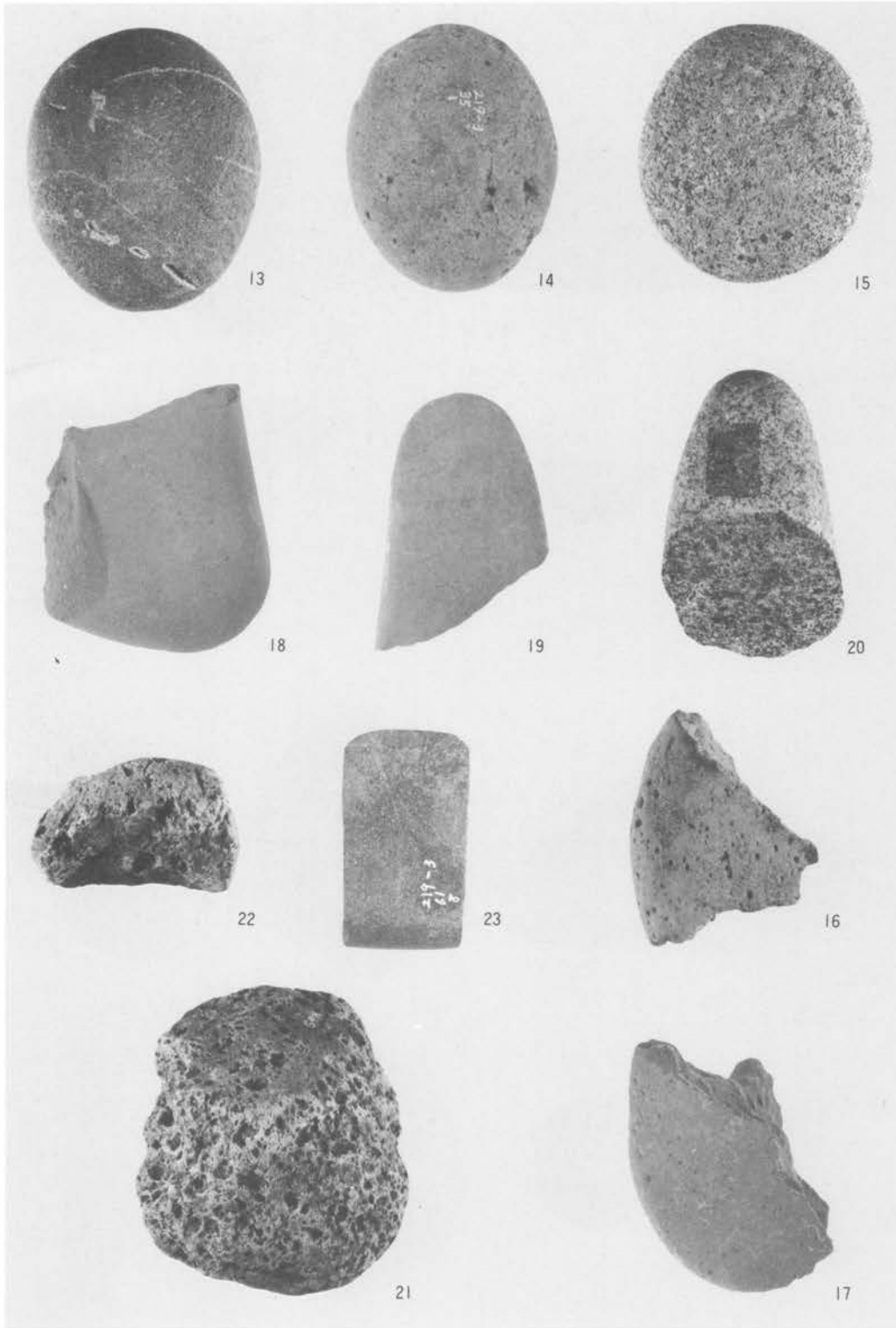


石　器

図版126

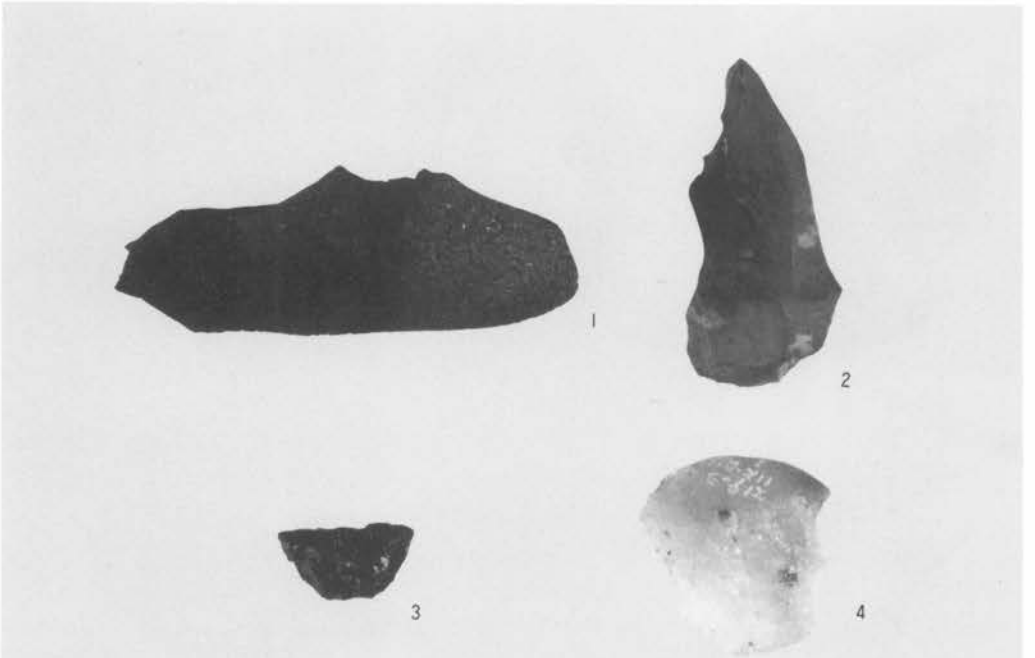


石　器

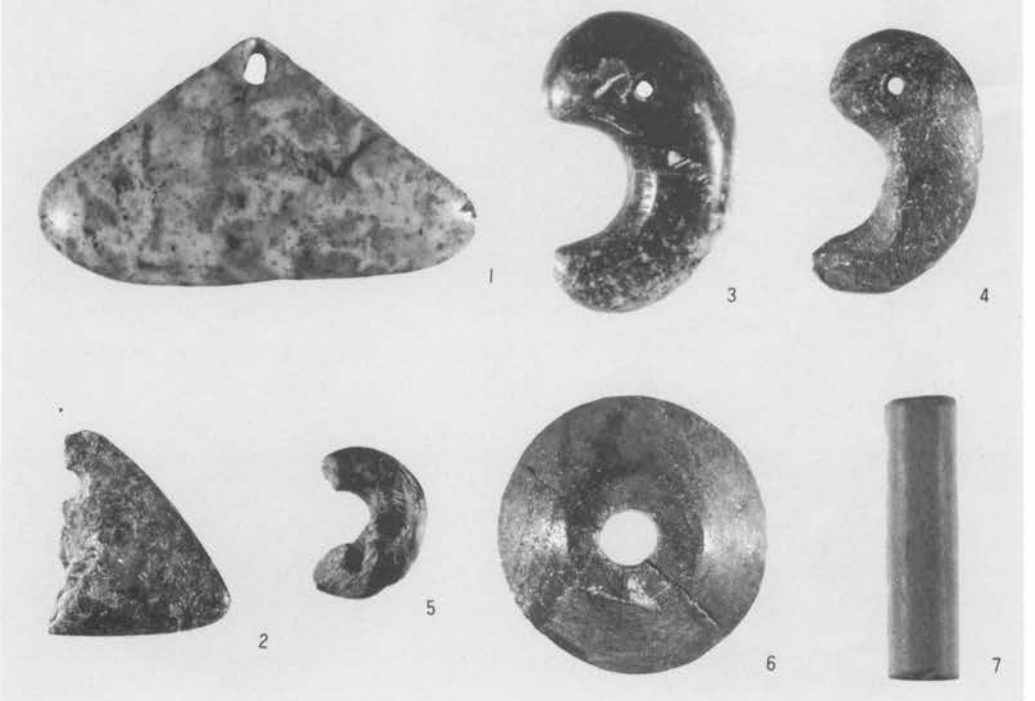


石　器

図版128



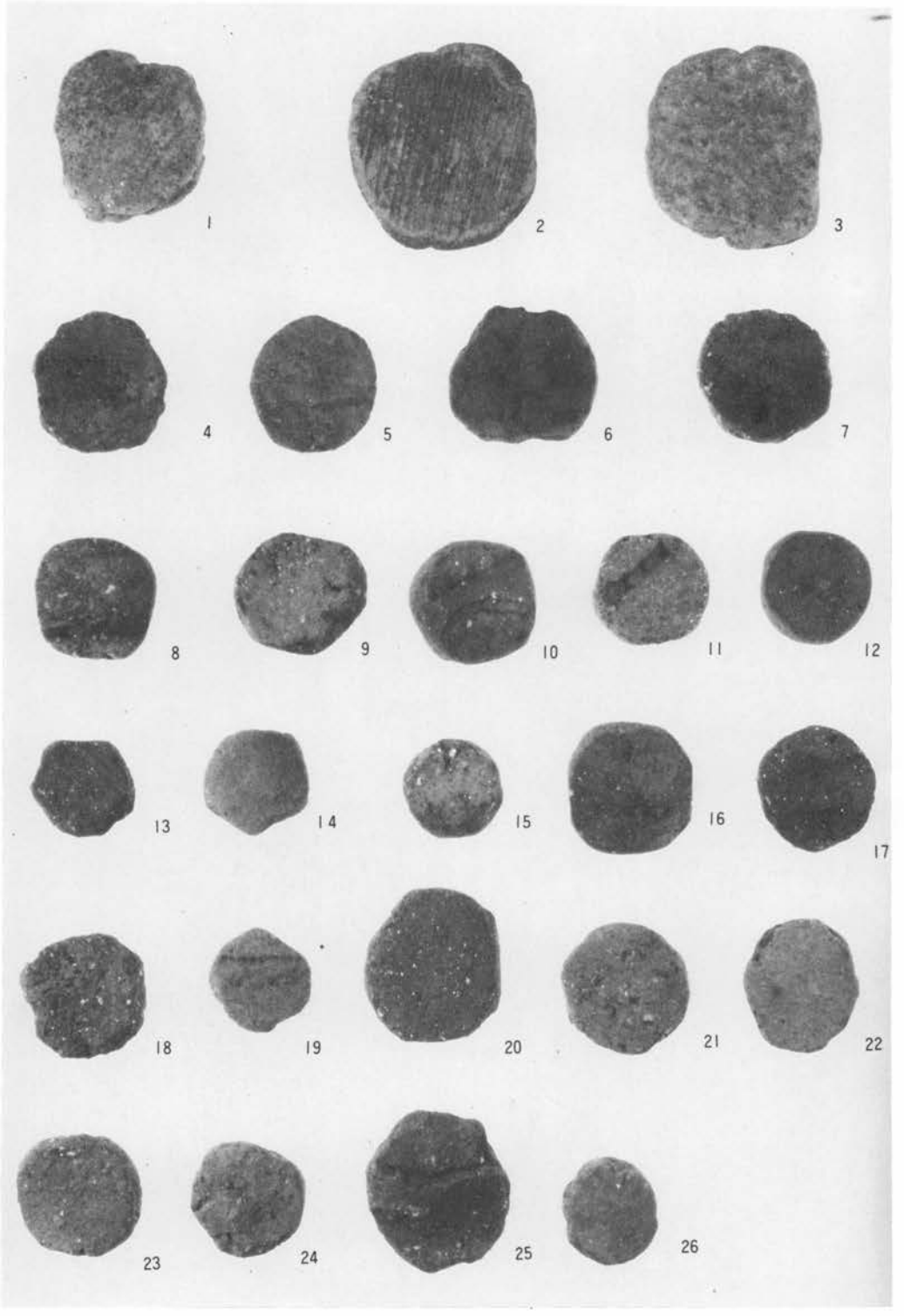
1. 先土器時代の遺物



2. 石製品

鉄　器

図版130

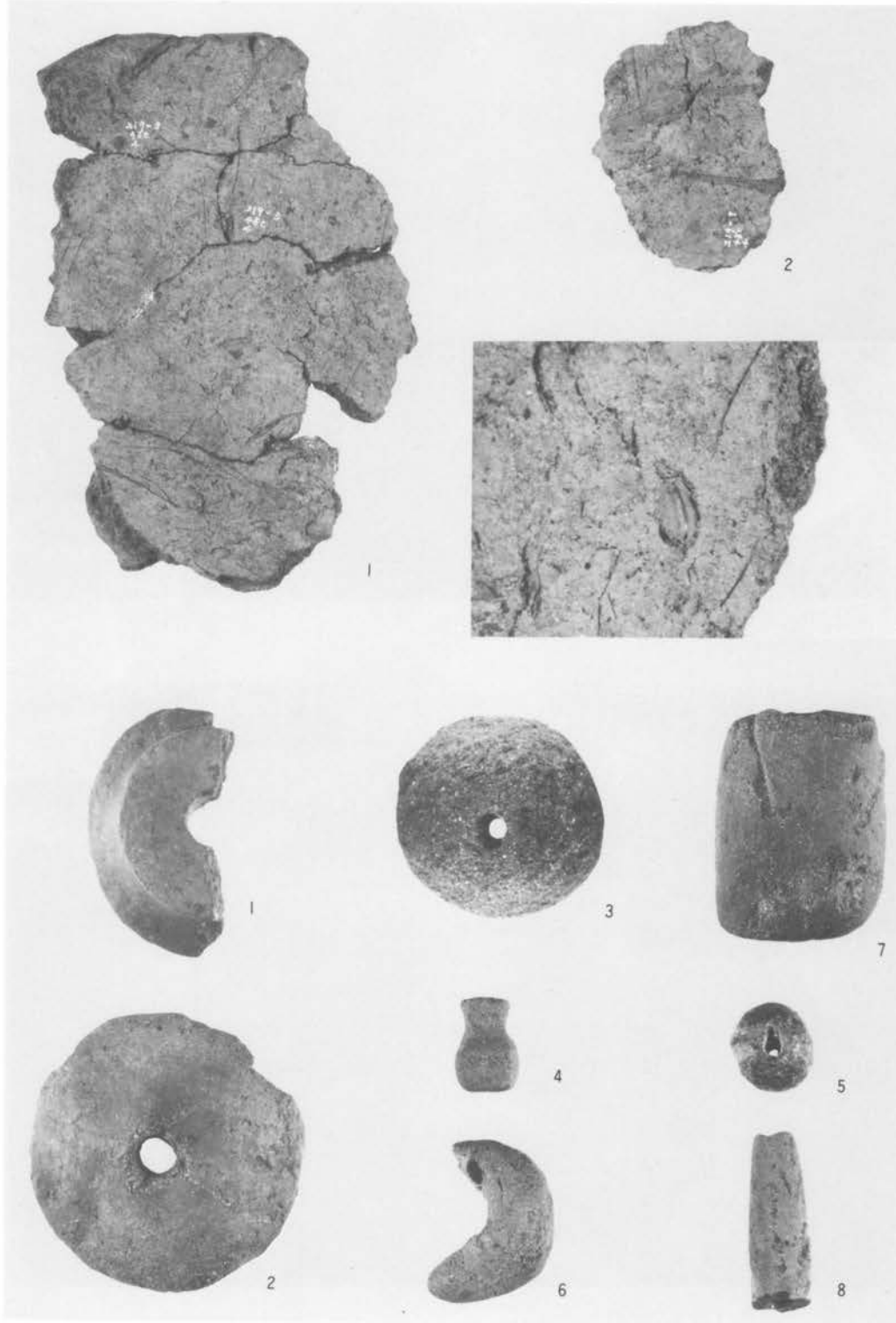


土製品

土製品

図版132

土製品



土製品

1. 周辺の地形（南西を望む）

2. 周辺の地形（南東を望む）

図版135

1.　古墳群全景（北より）

2.　2号墳より1号墳を望む

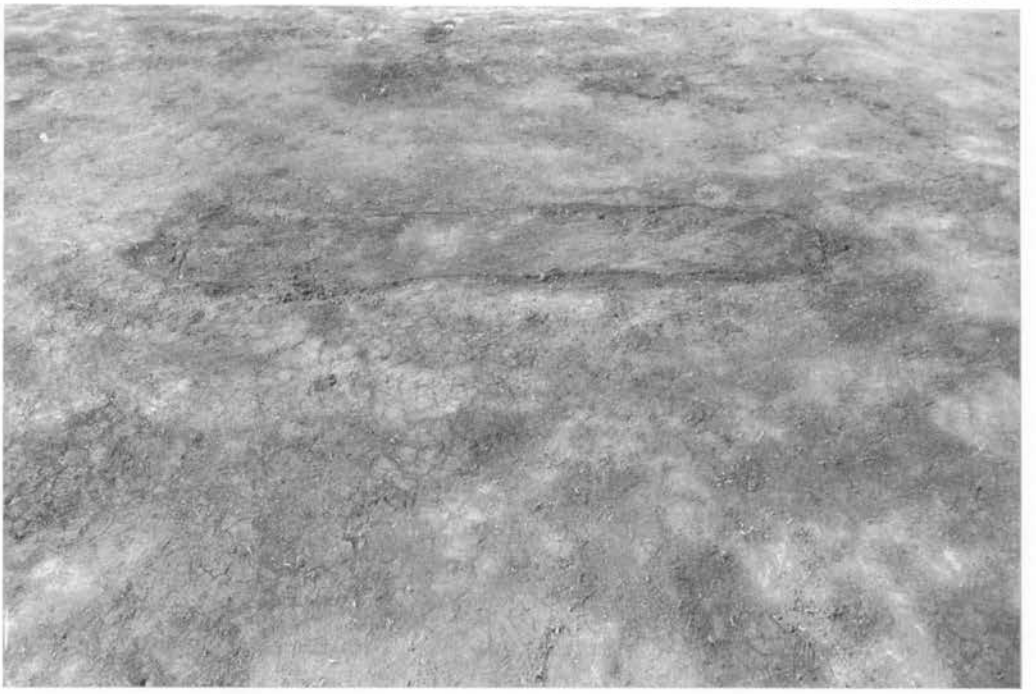
1.　1号墳全景（北東より）

2.　発掘状況（南西より）

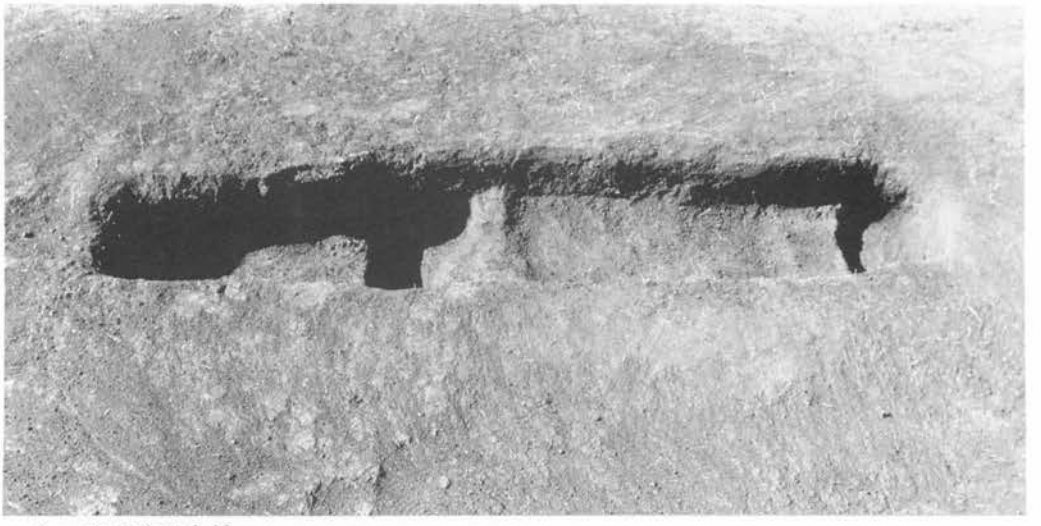
図版137

1.　1号墳北主体部全景（南西より）

2.　北主体部鉄器出土状況

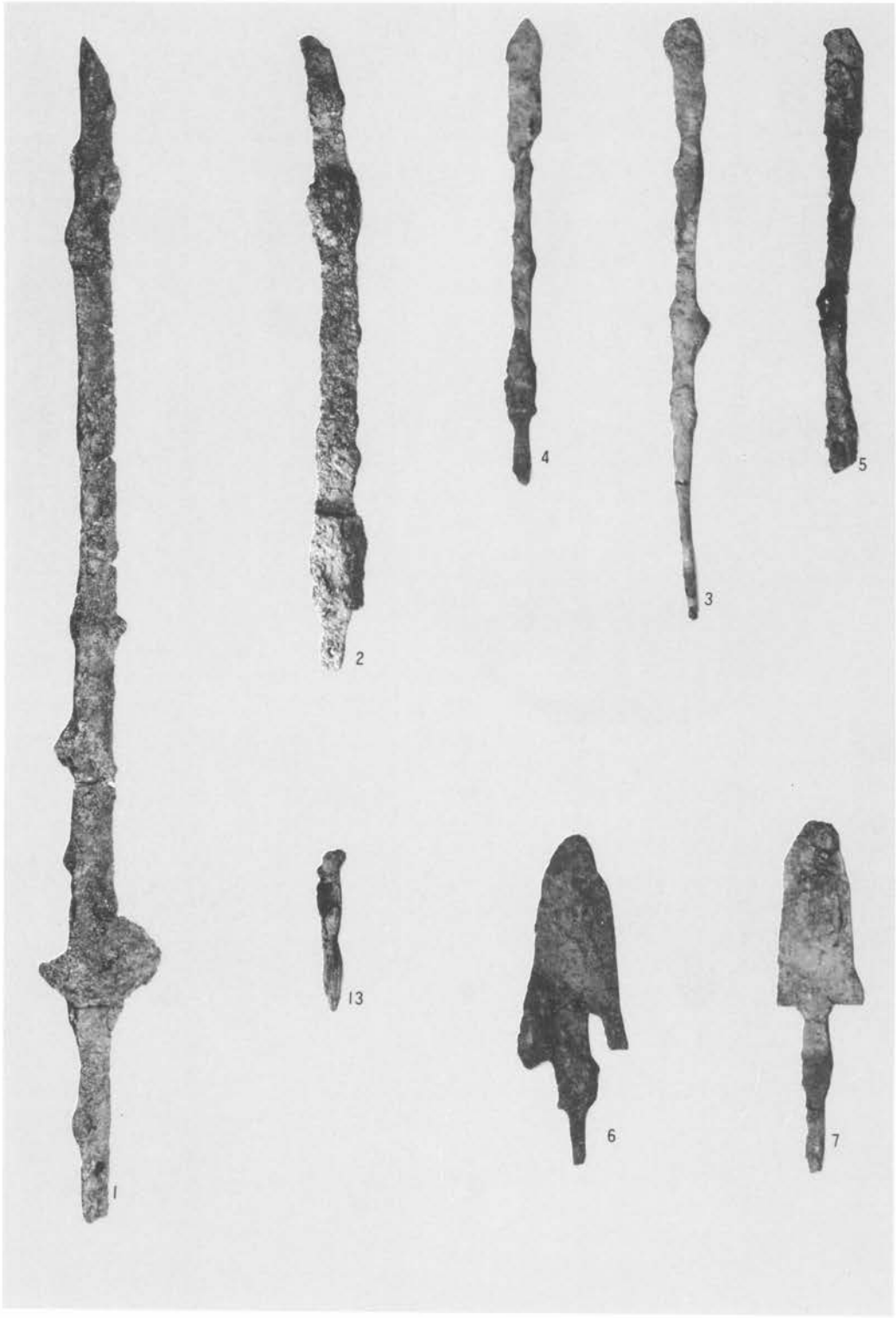


1.　1号墳南主体部検出状況

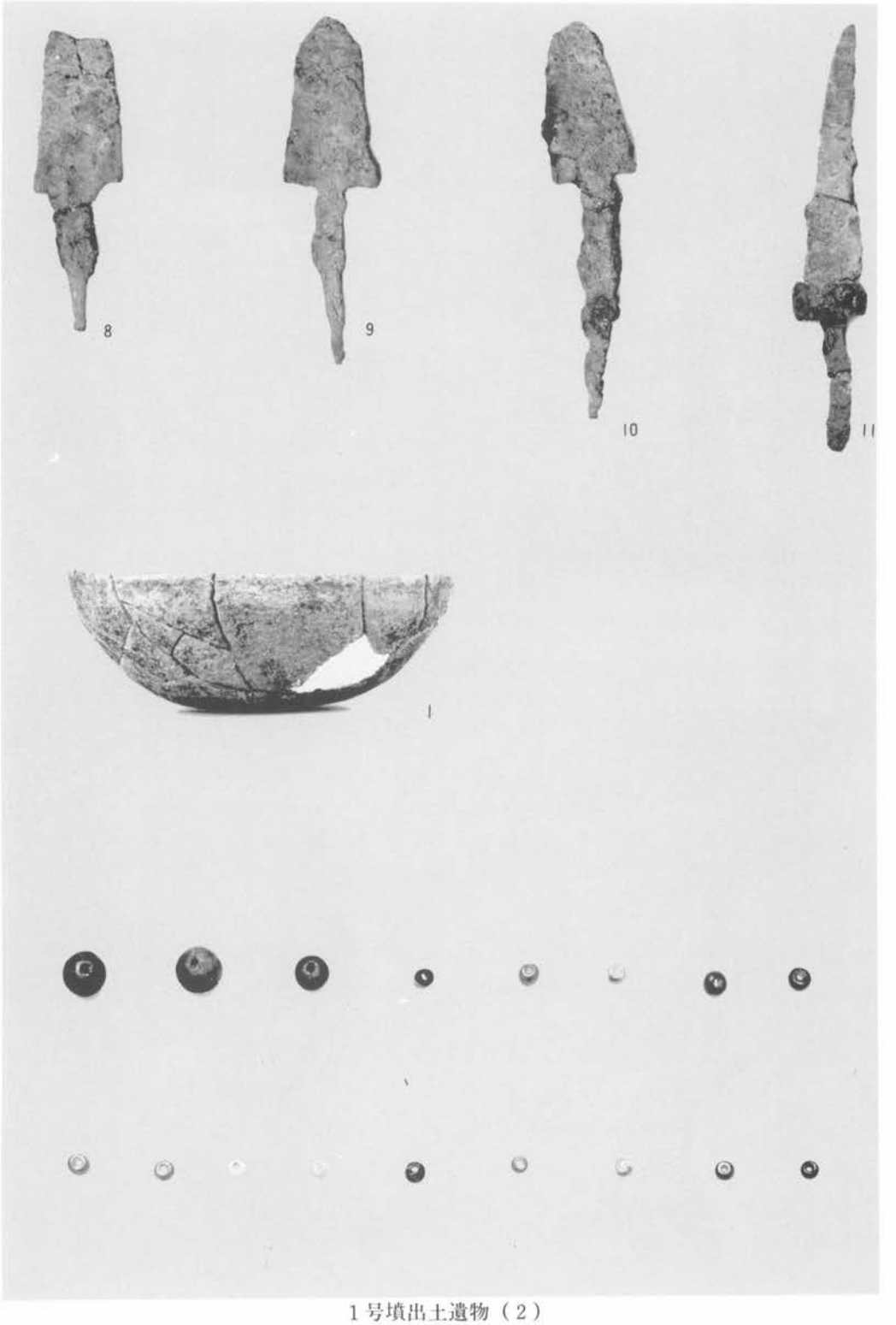


2.　南主体部全景

図版139



1号墳出土遺物(1)



1号墳出土遺物（2）

図版141

1.　2号墳全景（南東より）

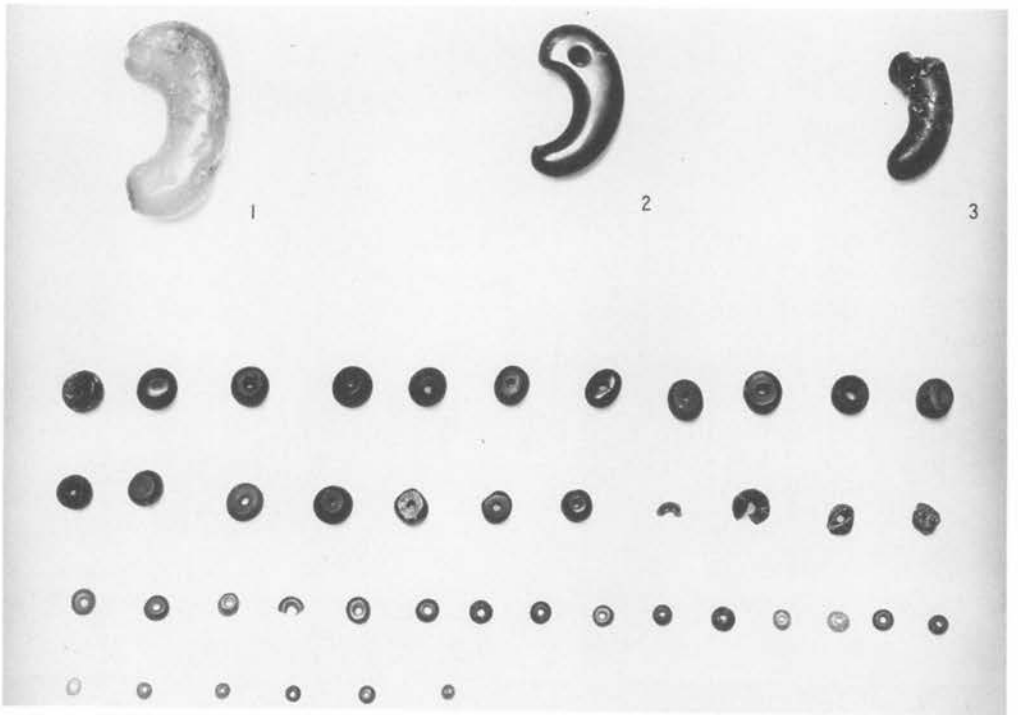
2.　発掘状況（南より）

1.　2号墳北主体部全景

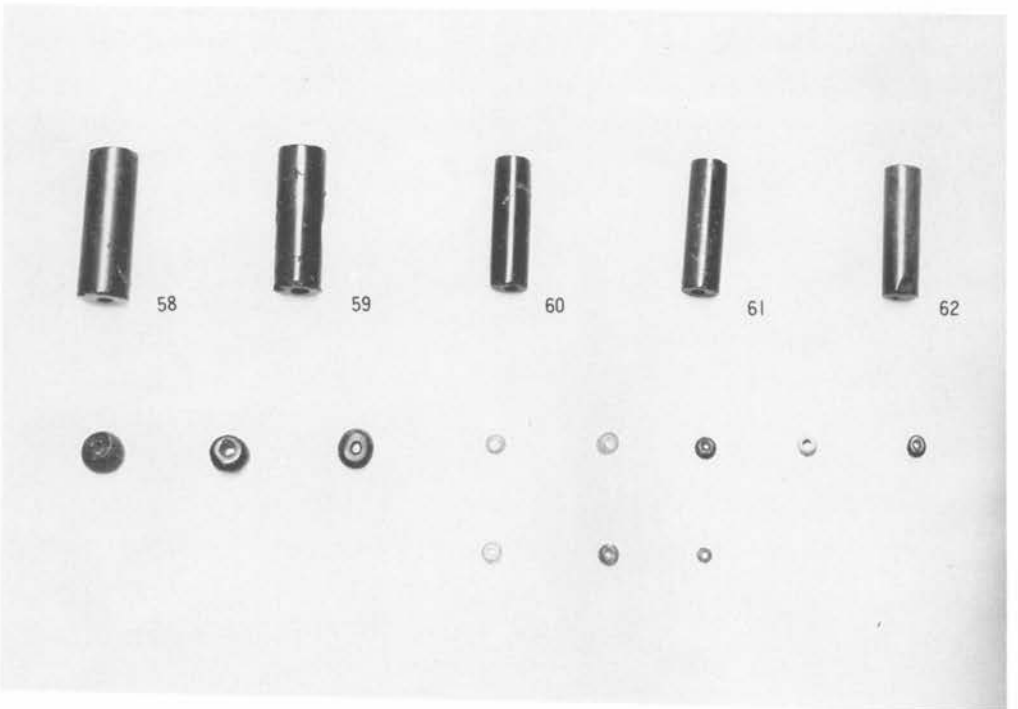
2．2号墳周溝内遺物出土状況

図版143

2号墳出土遺物（1）

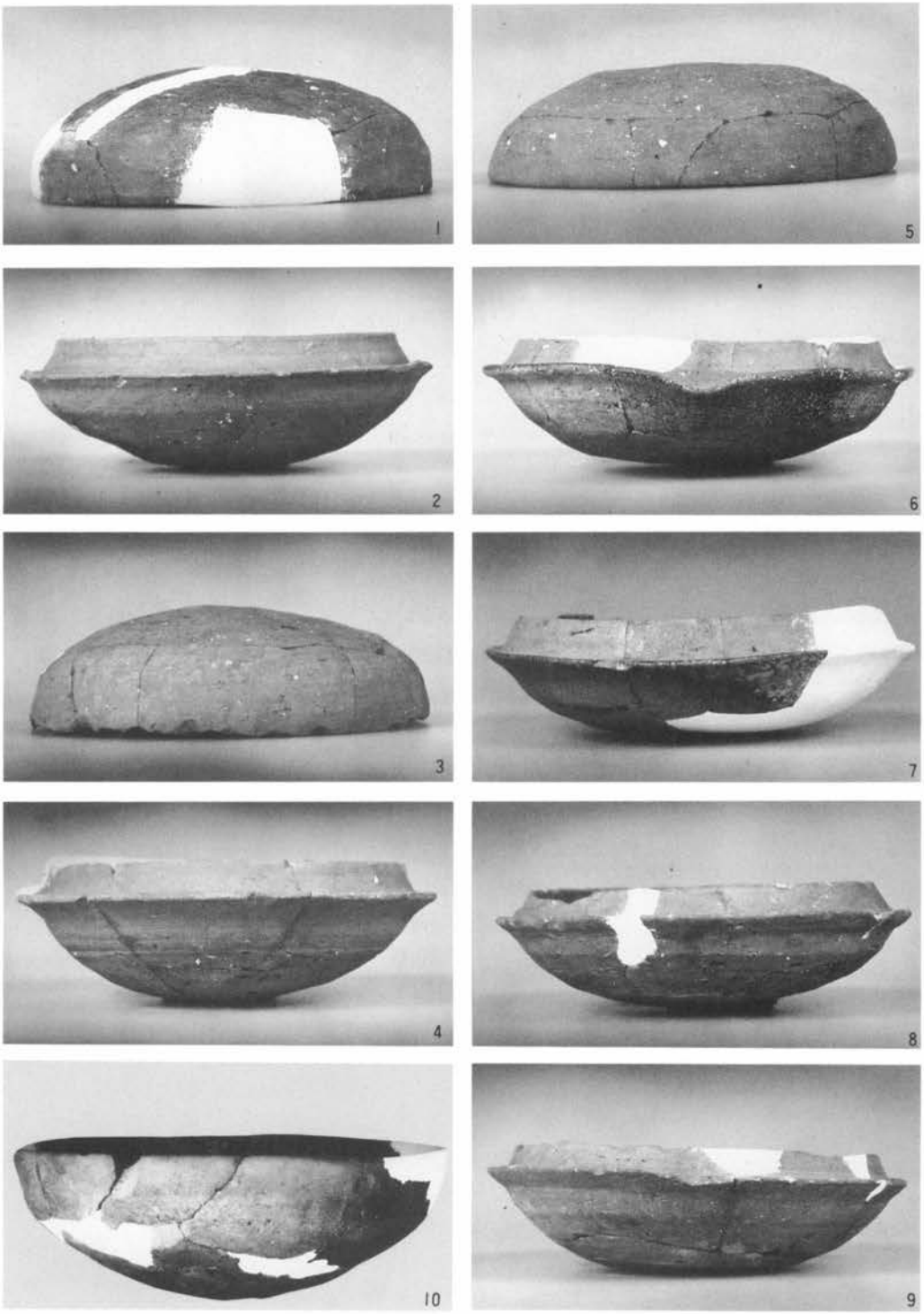


1.　2号墳出土遺物（2）（南主体部出土玉類）



2.　2号墳出土遺物（3）（南主体部付近出土玉類）

図版145



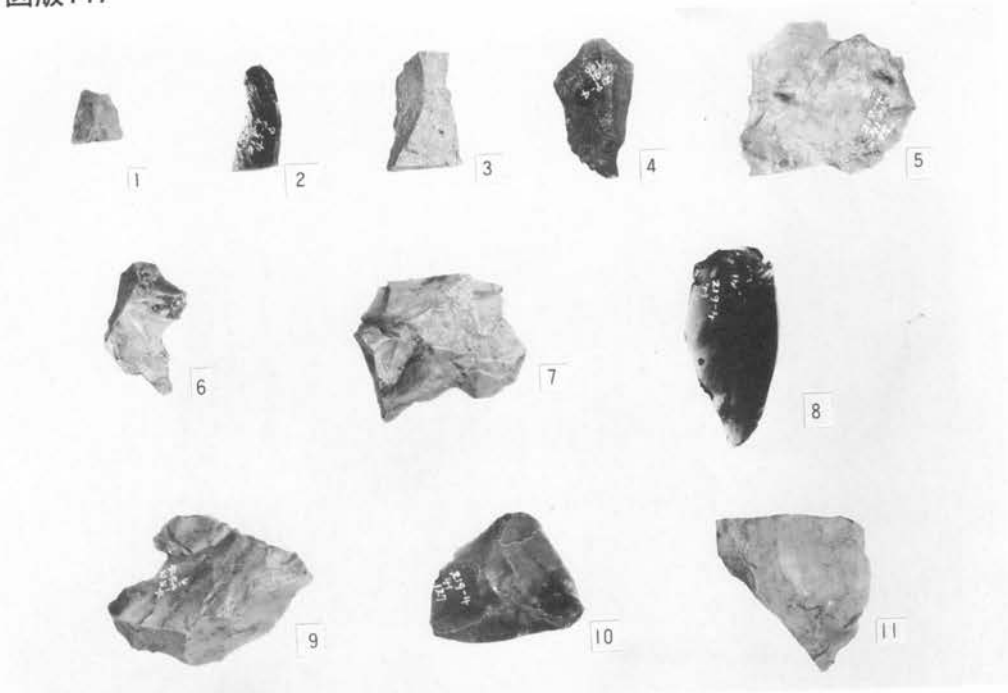
2号墳出土遺物（4）

1.　3号墳全景（西より）

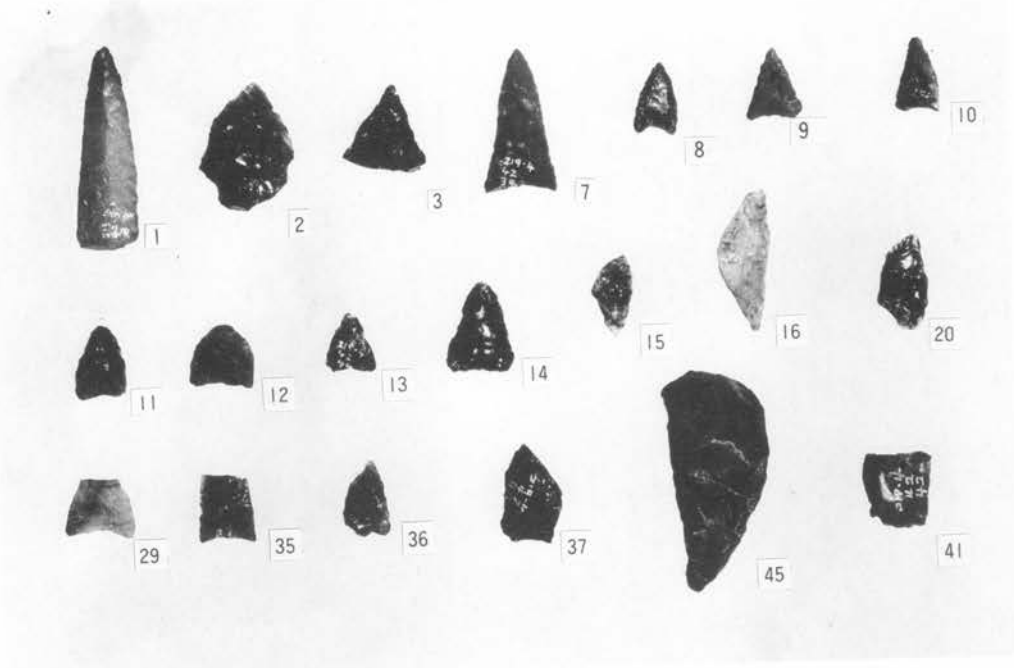
2.　発掘状況（西より）

3.　3号墳出土遺物

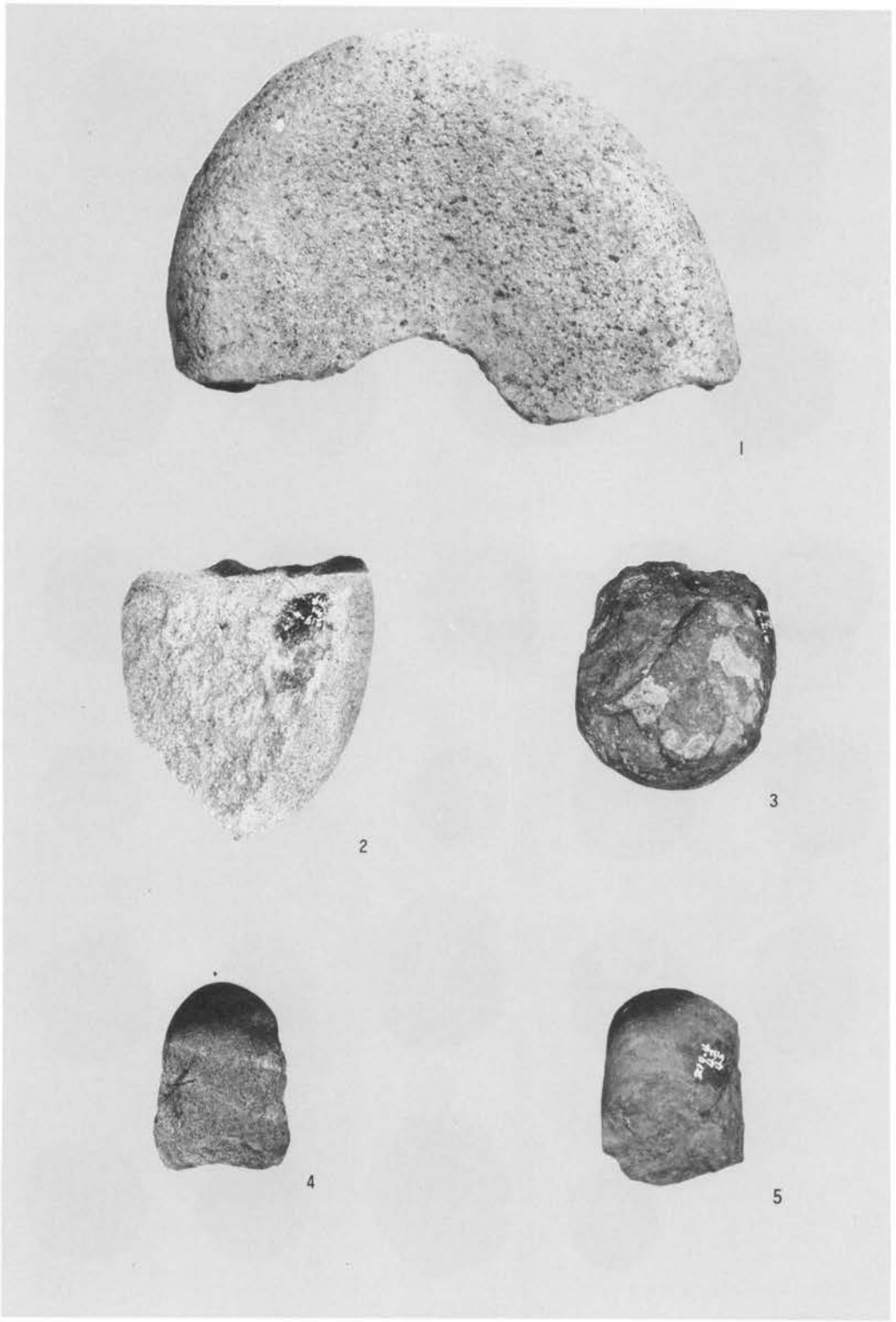
図版147



1. 先土器時代の遺物

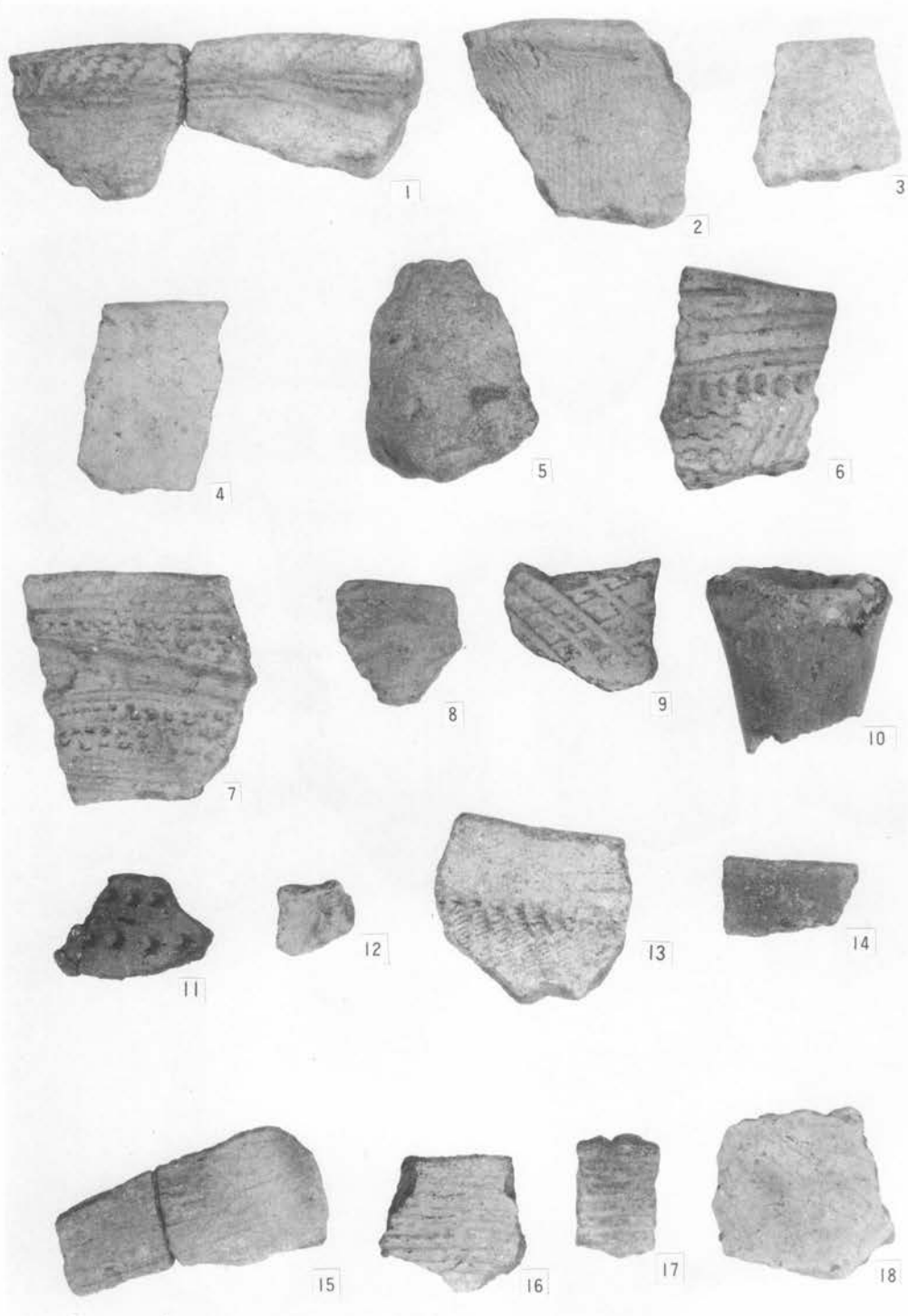


2. 繩文時代の遺物（1）

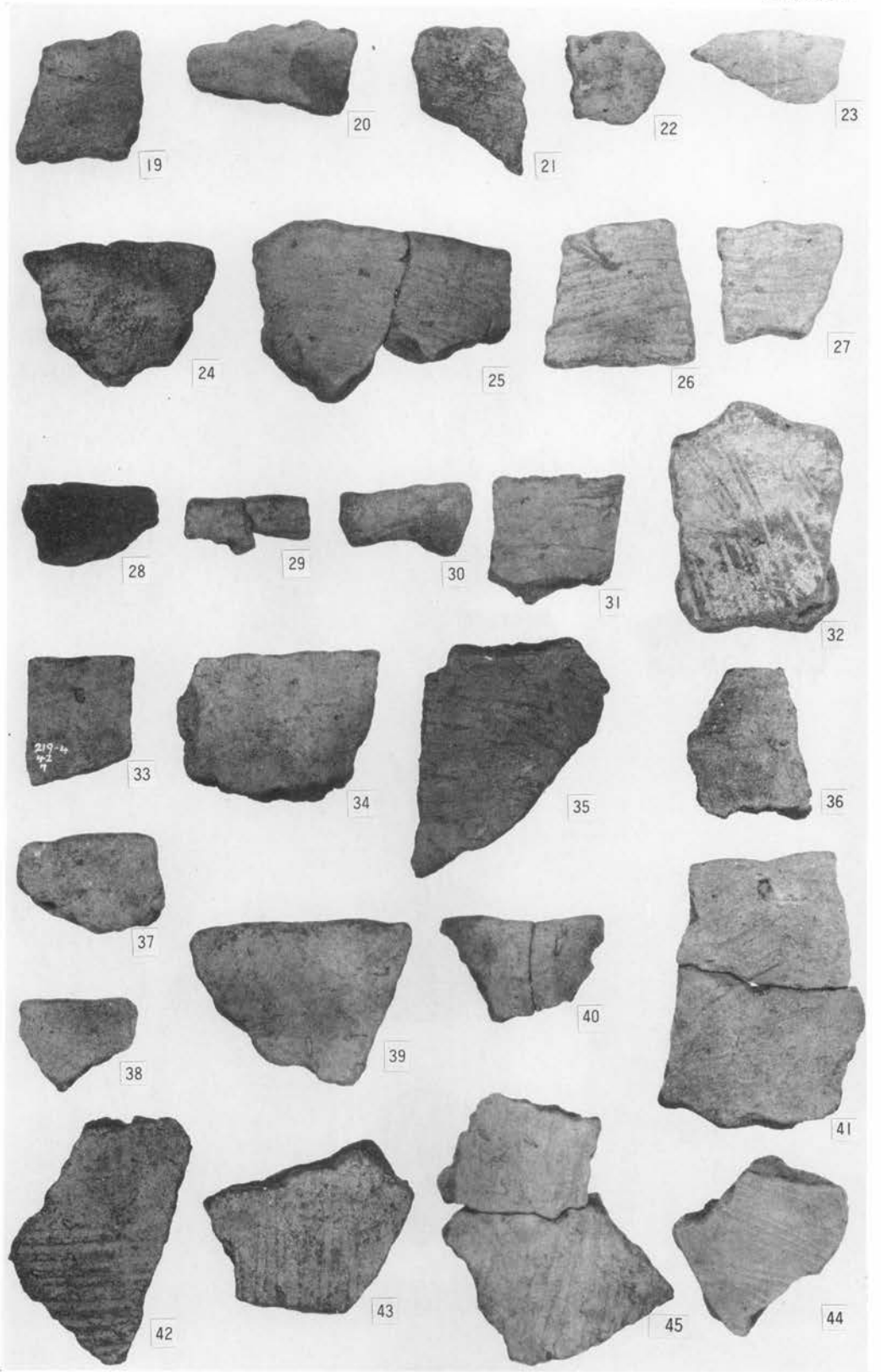


縄文時代の遺物（２）

図版149

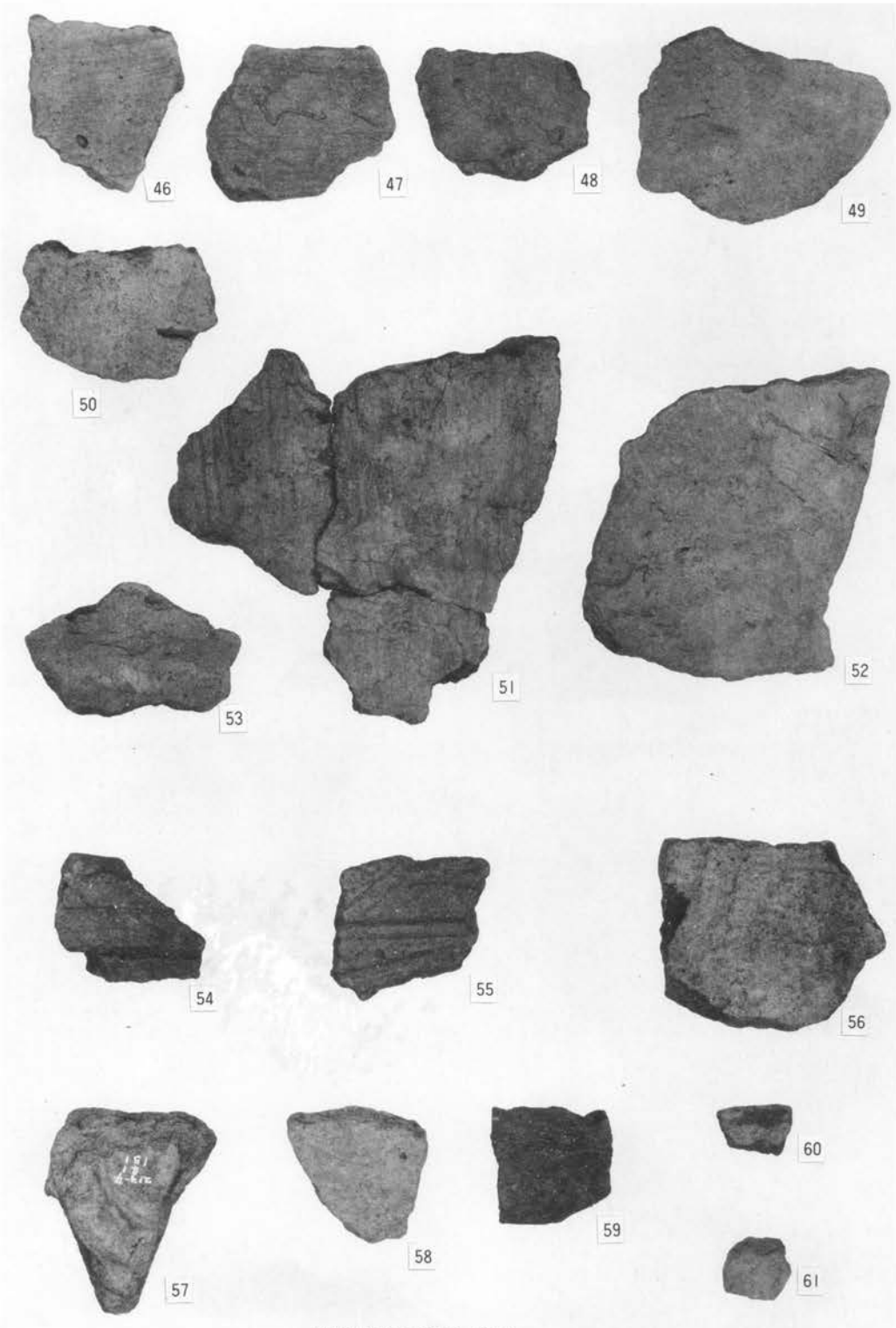


縄文時代の遺物（３）

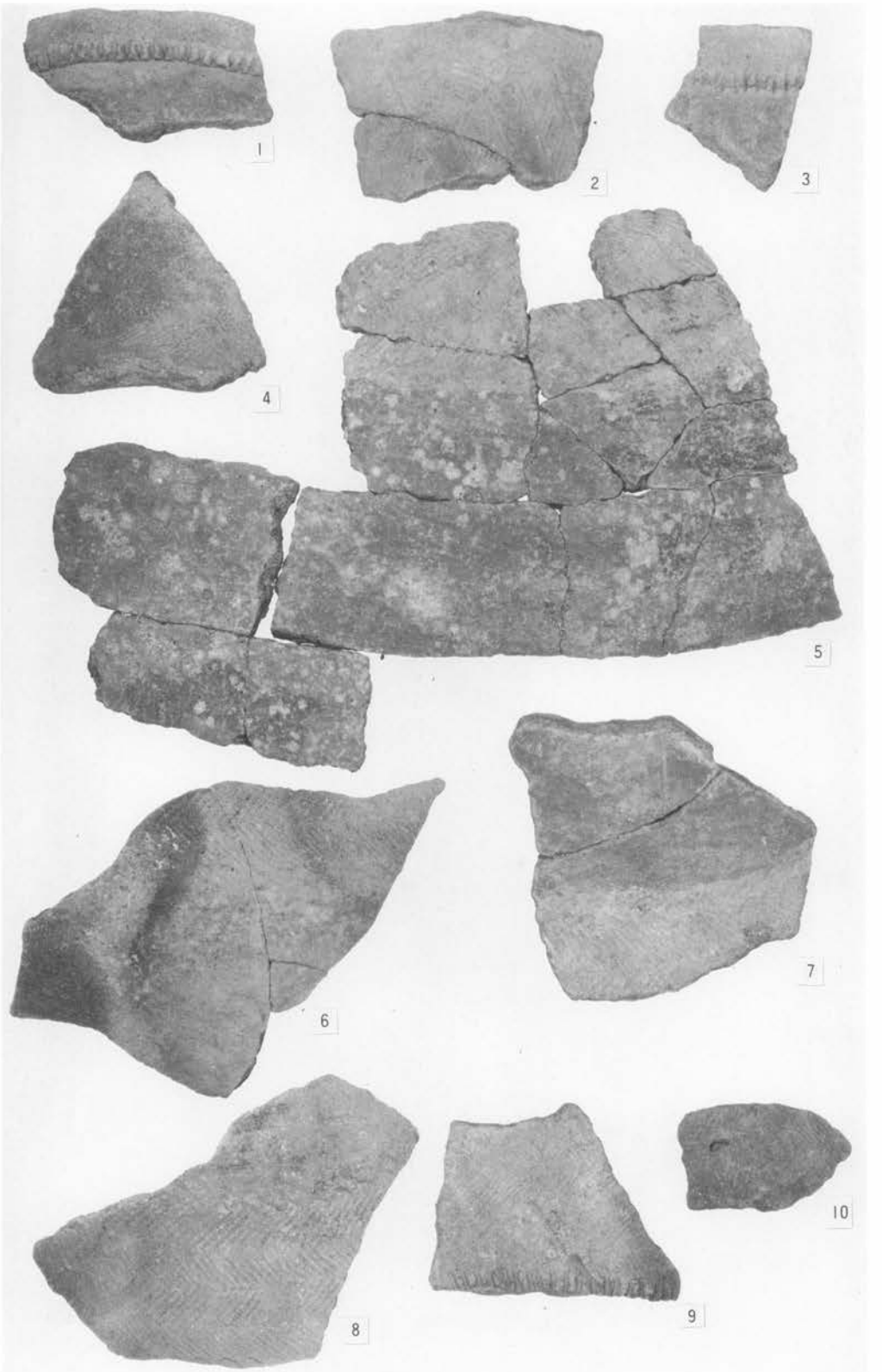

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
45
44

縄文時代の遺物（4）

図版151

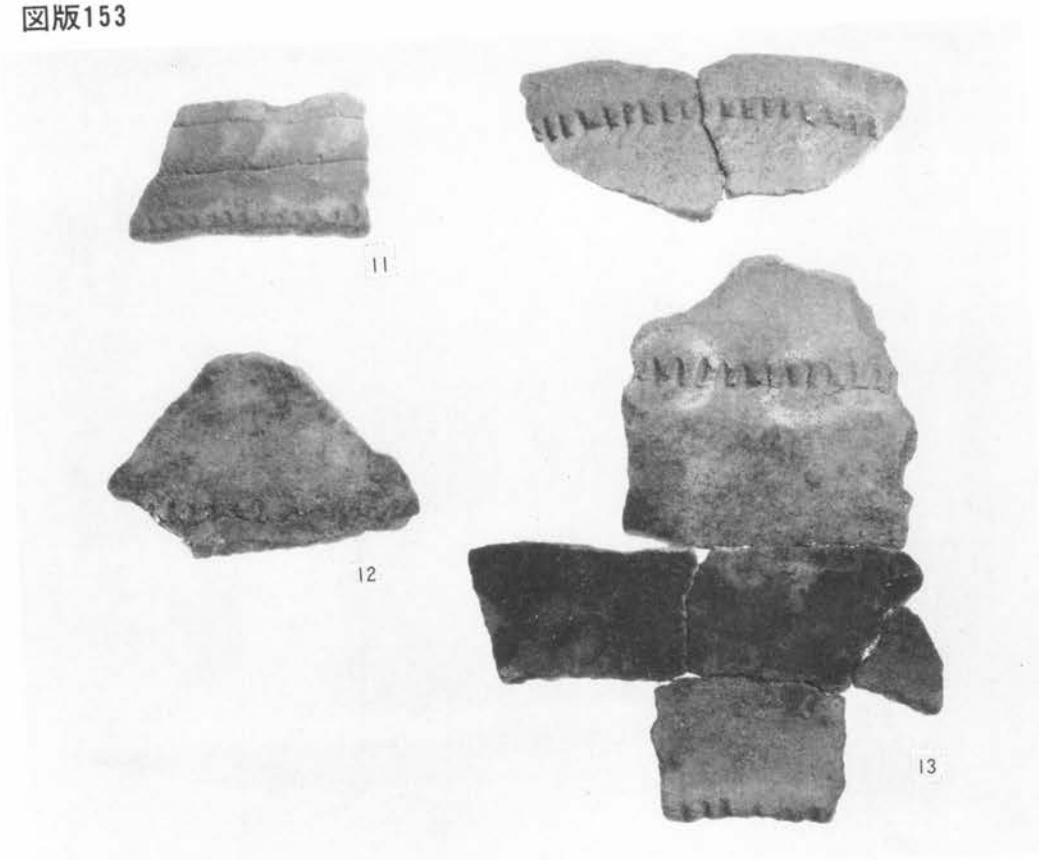


縄文時代の遺物（５）



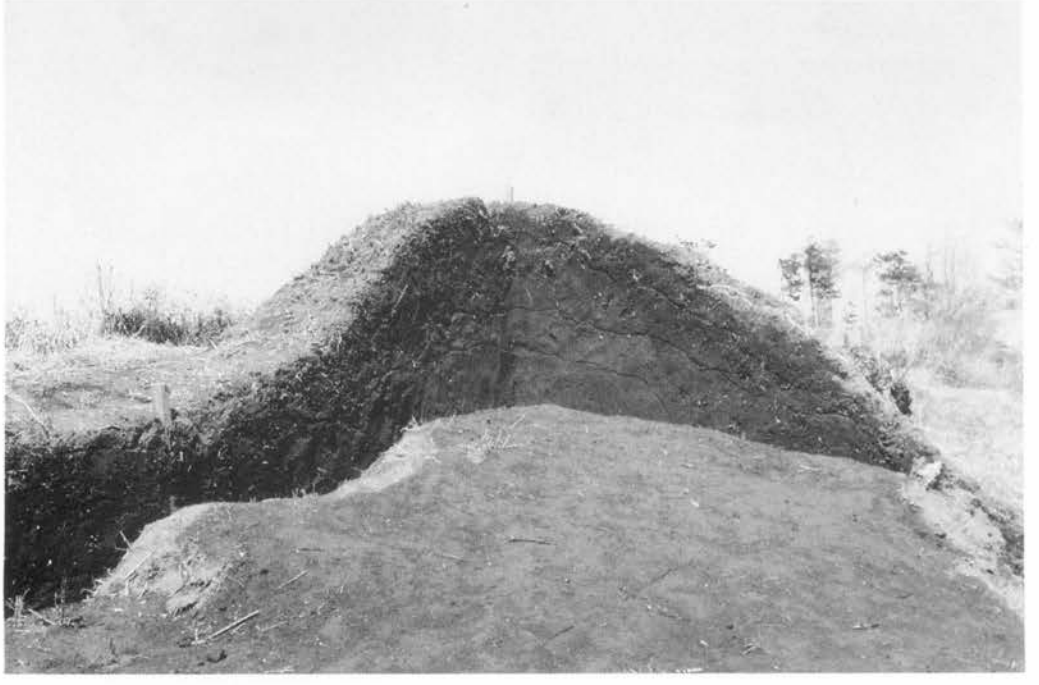
弥生時代の遺物（1）

図版153



弥生時代の遺物（２）

1. 調査前全景（北より）



2. 土層断面（北西より）

付図　草刈遺跡Ａ区（第１次調査）遺構配置図（1/500）

昭和58年３月25日　印刷
昭和58年３月30日　発行

千原台ニュータウンII

草刈遺跡Ａ区（第１次調査）
鶴牧古墳群・人形塚

発行　住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿4-3-17(HK新宿ビル内)
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
ＴＥＬ　0472（25）６４７８
印刷　株式会社　ヤ　カ　東京工場
千葉県松戸市田中新田５－５
ＴＥＬ　0473（85）６１１１